
闇の福音と幻獣使い～2人の吸血鬼～

朧識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の福音と幻獣使い〜2人の吸血鬼〜

【Nコード】

N3009K

【作者名】

朧識

【あらすじ】

事件に巻き込まれ、死ぬ寸前に神と契約して第二の生を手に入れる。

転生先はネギま！の世界。神からは餞別として様々な能力をプレゼントしてくれた。

ある願だけ叶えられず原作開始前に転生するが…

この物語は吸血鬼の真祖となりやりたい放題していくオリ主転生チートものです。

ご都合主義・作者の妄想が多分に含まれていますが、それでも読んでやんよって方だけクリックしてください。

処女作なので、表現力など欠けているかもしれませんが生温かい目で応援してくれるとうれしいです。 【9月10日完結！】

第巻話 『さらば、俺の日常よ』（前書き）

どうも、臆識です。

また転生チートものかよと思うかもしれませんが、生温かい目で見守ってください。

本作では、Fate・FFの技、オリジナル要素を多分に含んでいます。

なので作者が都合いいように解釈している場合もありますが、これはこれでアリ等と思ってくれたら幸いです。

第巻話 『さらば、俺の日常よ』

突然だがここで俺自身の事を紹介しておこうと思う。

俺の名前は西東紫音（さいとうしあん）（18）。

特に特殊能力や異能といった能力はないし、前世の記憶があったりとか、死の淵から生き

帰って直死の魔眼を開眼したといった事もない。

平日は学校に行って勉強したり、授業中にマンガを読んだりして、夜と土日はバイトをし

てたりするどこにでもいるような人間だ。

早く21歳になって、「（21）を寄せ気味に速攻で書くとロリ見えなにか？」と実際にやることを密かに楽しみにしているのは内緒だ。

「おい、お前！ 何ブツブツ言ってるんだ！？ 殺すぞ！」

なにやら黒光りするものを俺に向けつつ男……2人いるな……男Aと名付けよう。

もう一人はBさんだ。

男Aさんは俺を怒鳴りつけてきた。

……ほつといってくれないかなあ……いや、マジで。

こっちは今、現実逃避で忙しいってのに。

そう思いつつもヘタレな俺は「ごめんなさい」と素直に謝る。

ヘタレな自分にイラつくわ。

さて、そろそろこれを見ている皆さんは段々と状況がわかったかな？
では俺の今の状況を話そうか……

俺は銀行から金を下ろして帰ろうとしたら、
黒い覆面をした男3人が押し寄せてきたんだよ……手に銃を持って
いやゝ正直俺はこう思ったね、「……オレヲワタゝ（＾o＾）／
って。

そうして俺は銀行員さんと仲良く人質になったとき。

え？ 警備員はどうしたって？
入口近くで頭から血を流して倒れているよ。

やべゝよ、これ。
絶対にトラウマ物だよ……どうしてくれんだよ男Aさんよお。
そんな事を考えているうちに店の奥から男が……こいつはCさんでい
いや。

男Cさんが袋を持ってやってきた。

「おい。金は全部しまったか？」
「ああ。全部いれてきたぞ」
「じゃあさつさとずらかるか」

そう言いつつ男たちが出口に向かって歩いていく。
そして男Aさんが俺の前を横切ろうとした時……事件が起こった……

ビリ！

「っっ！！！！」

なんと男Aさんの覆面の生地が縫い目から裂けてしまつて顔が丸見え状態になつちやつた（笑）。

男Aさんは慌てて顔を隠すが俺はガン見してしまつた。

……おいおいおいおい……やばいだろ、これ。どう考えても俺、目撃者つてやつになつちまつたよ！（目撃者の意味がちょっと違う気がするがそこは気にしたら負けだ）

男Aさんが銃口を俺に向けつつ「見たか？」と聞いてきたので、

「……みちやいました」と正直に言つた。

すると、

「……そうか……じゃあ運が悪かつたと思つて死んでくれ」と言つて撃とうとしていた。

死ぬ？　俺が？　こんなところで？

まだ俺は何もしていないのに？　ただ毎日をのうのうと生きていただけで人生が終わつてしまふのか？

……フザケルナ……！！……

俺はまだ何もし得ていないじゃないか！

こんなくだらないところで俺の人生が終わってたまるか！

「お主…人間のくせに中々の業をもっているな…」

「！ 誰だ！」

突然声が聞こえたと思うと、何やら真つ黒な空間に俺が一人で立っていた。

訳が分からずに、とりあえず声の主を探してみる。

「ほほう…妾の声が聞こえるのか…なるほどなるほど……

素質は十分といったところか…」

「誰だと聞いている！ 答えろ！」

「お主…生きたいか？」

「！！ な、なにを「生きたいか」と聞いている」……生きたいに決まってるんだろ！」

そりゃあこんな状況に陥れば誰だってこう答える。
俺だってそうする。

「そうか……では妾と契約しないか？」

「なんだと？」

「安心せい。お主の悪いようにはさせぬよ。
むしろいい思いが出来るかもしれぬぞ」

「……めちゃくちゃ怪しいが他に頼れるものもなし……か……
いいだろう！ 結ぶぞ！ その契約！」

「思い切りがいい奴じゃ。　よかろう！　ではまた後でな」
「……は？」

契約とやらを結んだなら助けしてくれると思っていた俺は、なんか詐欺られた気分に限る。

そして空間が割れたかと思うと、元いた銃を突き付けられている状況に戻った。

「お祈りはすませたか？　じゃあサヨナラだ、少年。『バン！』」

男Aが発砲した。

男の銃から出た弾丸が高速で飛んできて……俺の脳天を貫いた……

突然の出来事に着いていけなかったが、

「……お、俺としたことが……まんまと騙されてしまったぜ……」

とかろうじて思考出来た。

そして俺の意識は奈落に落ちていった。

第壱話 『さらば、俺の日常よ』（後書き）

書き始めて思ったことを少し……

文を書くのって難しいわorz

やはり自分には文才がないと感じずにはいられないです。

あまり話の進行速度は早くありませんが応援してくれると助かります。

第貳話 『神との契約』（前書き）

1話だけじゃあまりにも物足りないと思ったので2話目も連続投稿です。

第貳話 『神との契約』

「……ない」

ん？ なんだ？

「……きない」

また何か聞こえる…

「まだおき……ないのでですか？」

うるせえなあ…俺は死んだんだから起きるなんて事出来る訳ねえだろうが…

「そっちがそのつもりなら、こちらも考えがありますよ？」

ん？ どういうことだ？

俺は死んだはず……だよな？

「ふう、まったく。せつかく妾が優しい言葉を掛けてやっているというのに…妾の好意を無下にする輩はこつじゃ！」

「グハアー!!」

突如、腹に強烈な痛みが走る。

その衝撃で慌てて眼を覚ました。

「ゲホッゲホッ、な、何事だ？ 敵襲か？」

周りを見渡すと真っ暗な空間に俺は浮いているようだった。

「おはよう。良い朝じゃな」

そう言われたので慌てて声のするほうを見てみると……
見知らぬ女性が立っていた。

「えっと、あんた誰だ？」

「妾か？ 妾は、あまてらすおおみかみ天照大神じゃ」

……ハ？ 天照大神？

天照大神って確か日本でかなり偉い神様じゃなかったか？

「え？ マジでか？」

「うむ。マジなのじゃ」

マジで神様が俺の目の前にいるのかよ……

「えっと、日本でかなり偉いはずの神様が俺になんの用だ？」

「お主は契約の事を覚えておるか？」

天照さんの言葉でついさっきの出来事を思い出す。

「契約って、さっきの銀行強盗の時の事か？」

「そうじゃ」

「ひょっとして、あの時の声ってあんたなのか？」

「その通りじゃ」

その言葉を聞いた途端、俺は天照大神に殴りかかるが、俺の拳は相手に当たることなく空を切っていた。

「血の気が多いのう。すこしは落ちつけ」

「うるせえ。こうでもしねえと俺の気が治まん」

「何をそんなに怒っているのじゃ？」

「おもわずお前の言葉で俺は生き残れると勘違いして浮かれちまつたじゃねえか。

まったく……あんな不覚を取ったのは初めてだ」

あれだよな……生きられるって希望をちらつかせた後で絶望させるってヤツだ。

神様も性格悪いのな。

「ふむ。それは確かに妾が悪かったな。だがそれもしょうがなかったのじゃ。

あの場で詳しい説明は出来なかったしの」

「……俺は今、生きているのか？」

「それを含めてこれから説明していこう」

その言葉を聞いて俺は怒気を抑えた。

……

……

…

「さて、それでは説明していこうかの。まずお主は、神を信じておるか？」

神ねえ…目の前に自称神様のヤツがいるが今まで見たことなかったしな。

ウソ言っても意味がないし正直な気持ちを言うか。

「……いや、今までの人生で会ったことも見たこともなかったからな。

信じてもいいねえし、信じてないわけでもねえな。俺は自分で見たものしか信じないんでね」

自分の正直な考えを天照さんに話す。

「そこじゃ」

「なんのことだ？」

俺のどこの発言に食いつく要素があんだ？

「今の日本では科学等と言った技術が進歩してきたせいか、信仰と
いうのが薄れてきているのじゃ」

「ふむ……まあ確かに俺もそう思うな。 ん？ 待てよ……
じゃあなんで寺や神社に参拝する人はどうなんだ？」

「あ奴らも同じよ。 自分に出来ない事を妾達にすがって助けてもら
おうとしているだけじゃ。」

そこに神に対する信仰は薄い。 中には信じている者もあるがの」

「……なんか神のくせに辛口だなあ、おい……」

なんかホントに性格悪くないか？

参拝客に聞かれたら何割か消えるぞ……

「話を戻すぞ。 そのせいで今の世の中の人々の神に対する意識は3
つに分かれておる。」

1つ目は、信じている者。 中には盲信的にな。 2つ目は、まった
く信じていない者。

そして3つ目は、お主のように自分で見るまで答えを保留している
者じゃ」

「3つ目は結構いると思うぞ？」

思った事を聞いてみるが、天照さんは「頭悪いのう」みたいな表情
で俺を見てくる。

……ムカツクわ。

「ところがそうもいかないのじゃ。」

中にはお主のように本当に答えを保留している者もいるじやろう。
だが大半は、口でそう言いつつもほとんど信じていないのじゃよ」

「なるほど……確かにそうかもしれねえな」

「そして妾達、神の声が聞こえる者は1つ目と3つ目の者だけなのじゃ。」

ここで妾達の事について少し語っておこう。妾達、神の力の源は何かわかるかの？」

力の源ね……突然聞かれても困るが、信仰の事を熱く語っていたしな。

やっぱり信仰心とかかな？」

「今までの話から察するに信仰心とかか？」

とりあえず思ったことを口にしてみた。

すると、天照さんは俺の答えに満足したのか答えを言う。

「その通りじゃ。中々するどいのう。信仰心が薄れてきているせいで妾達の力が減少し始めての。」

だから妾達の声が聞けるお主には死んでほしくなかったのじゃ。先ほど言っただじやろう、お主には素質があると」

「確かにさっき聞いたような気がするな」

「そこでの。妾は妾の声が聞こえるものを助けてきたのじゃ。」

お主の肉体はあそこで死んだが、精神は生きておる。

あいにく元いた場所には戻せないが二度目の生を与えることができるぞ。

二度目の生を受けるなら神を信じると誓ってもらうがの。

もっとも、望むならこのまま天国まで連れて行くことも可能じゃ。

お主はどうする？」

二度目の生ねえ…

もしかしたらマンガの世界行けたりとかすんのか？
俺は思いついた事を聞いてみる。

「……別の世界に行くことはできるか？」

「別の世界？ 物語の中とかかの？」

「そうだ」

「できるぞ。ついでに言うとな能力の付加とかもできる」

その言葉を聞いた時、俺の中で歓喜の声が上がった。
否、すでに口から出てきていた。

「ハ、ハハハハハハハハ！ こいつぁいい！ 傑作だ！
今まで妄想の中でしかなかった願いが現実に叶うんだからな！
ハハハハハハハ！ 笑いがとまらんわ！」

「喜んでもらえたようだなによりじゃ」

くくくつ ホント笑いが止まらんよ。

マンガの世界か…どこに行こうかな。

よし！ ネギまの世界に行けるか聞いてみよう！

「なあ天照さんよ。 ネギまの世界に行くことはできるかい？」

「可能じゃ」

ふむ…。それじゃあ折角だし、出来るだけ願望を述べておくか。

「じゃあネギまの世界に送ってくれ。

スペックはそうだな…… 気と魔力を操れるように。

気はラカンの10倍 ハイ・デライトウォーカー 魔力はナギの10倍。

肉体は吸血鬼の真祖で。

保有スキルに王の財宝と全てとは言わないがFFに出

てくる召喚獣を操れるようにしてくれ。

ただ王の財宝の中の宝具は原形じゃなくて他の伝承に

でてくるような宝具にしてくれよ。

あと後の時代に神々から与えられた宝具も中に入れておいてくれ。
ゲート・オブ・バビロン 王の財宝の宝具は全て真名解放できるように。

あと肉体もイジってくれ。

髪は薄い紫、目は蒼な。あと千里眼も、魔力を込めただけ視力が
上がる仕様で。

身長は170cm、歳は16歳。

できるか？」

とりあえず出来るかどうかは別として、こうしてほしいうて要求を
してみる。

てか叶ったなら叶ったでヤバいチート物になるがいつか♪

「業が深いと思っていたがここまでとはな…… あきれを通り越した
わ。

ふむ…… 中々おおいな…… む、これらの条件ならできるが真祖の肉体
だけ無理じゃな。

確かネギまの世界では真祖は儀式によって成るんじゃないかな……

紫音よ、肉体は無理じゃがエヴァンジェリンが真祖にされる時代
に転生可能じゃ。

真祖の肉体はそこでやってもらうようにするが…… どうする？」

「マジで今言ったものができるのか!？」

さすがは神だな。天照大神は伊達じゃないってか。
真祖になれんならどこまでも行つてやんよ!」

ひゃっほーい! チートばんざーい!

それにエヴァの生まれた時代か…もし会えたら守つてやるか。

「いい返事じゃ。転送する前に一つ聞いておく。記憶はどうする?」

「引き継げるのなら引き継ぎたいな」

原作知識はあつたほうが便利だからな。

それにしても……なんだかツキが回つてきたのか?

こんなに思い通りになるなんて夢にも思わなかったわ…

「うむ、承知した。

じゃが万が一の事態に陥つてこちらが約束を破るのは嫌じゃからな。
お主はエヴァが生まれる6年前に行つて記憶と能力を封じてもらう。
そしてお主が16歳、エヴァンジェリンが10歳になった時、真祖
に成る儀式を執り

行つように運命をいじくつておく。

真祖になったときに封印した記憶と能力も戻るようにしよう。

その後の運命はお主の好きにしてよいぞ。

これらの条件を叶える代わりに神の存在を信じる。

こんなところでよいか?」

「完璧だ! こりゃ神の存在を信じるしかねえな。

天照さんよ、あんたに出会えてよかったぜ!」

「それは重畳。満足してもらいなによりじゃ」

そう言いつつ天照が空間に一つの扉を作った。

「この扉をくぐれば転生先に行けるぞ」

「サンキューな、天照さん。」

この恩は一生忘れねえわ。西東紫音の名にかけて誓う」

こんだけ良くしてくれるのに信じないなんてバチ当たりなマネできないな。

「！ おお肝心な事を忘れておったわ。

向こうでの名前はどする？ もしよければ妾が考えてつけておくが」

「神様が次の俺の名付け親かあ……」

よろしく頼むわ！ 天照さんよ！」

「うむ、確かに承った。

ではな、紫音よ。第二の生に幸あれ」

「ああ。 じゃあ行ってくるぜ！」

扉をくぐり少し進んだところで、俺は光に包まれ意識を失った。

第貳話 『神との契約』（後書き）

神様を信じている人、ごめんなさい！
別に貶めている訳ではありません！ たんにここだけの設定だと思
ってください。

第参話 『いざ別世界！ そしてようこそ！我が永遠の肉体よ！』（前書き）

本日の投稿はこれでラストです。

第参話 『いざ別世界！　そしてようこそ！我が永遠の肉体よ！』

〔1424年　欧州にある城の中〕

俺の名前はメフィスト。　メフィスト・マクダウエルだ。
歳は6歳。

朝から城の中でいろんな人がバタバタと慌ただしく、誰も構ってくれないから寂しくて
独り言を言ってるわけじゃないぞ。

え？　なんで慌ただしいかって？
今、俺の弟だか妹だかが産まれそうなんだよ。

俺の隣では父さんがそわそわして話しかけても上の空だ。
こんな扱いじゃグレちゃうぞ。

そんな事を考えているとき、部屋の中から赤ちゃんの大きな泣き声が聞こえてきた。

「おお！　ついに産まれたか！　見に行くぞ、メフィスト！」

「はい！　父さん！」

慌てて室内に入る俺と父さん。
そこには産まれたばかりの女の子の赤ちゃんがいた。

「よく……がんばったな」

「あなた……立派な女の子ですよ」

母さんが赤ちゃんを抱いて俺達に微笑んでくる。

「そうか……名前はどつする？」

「私が付けてもいいですか？」

「もちろんだ」

「では、…エヴァンジェリンというのはどつですか？」

「エヴァンジェリンか……気に入ったぞ。」

この子の名前はエヴァンジェリン・マクダウェルだ」

俺を放つておいて名前を決めている親達。

いいもん……寂しくなんてないもん……

そんな俺の態度に気がついたのか母さんが声をかけてくる。

「メフィスト……妹を大事にするのですよ」

「もちろんだよ、母さん」

「ふふ、即答ね。母さんは疲れたから寝るわ」

「お休み、ゆっくり休んでね」

俺と父さんは母さんを起こさないようにこっそり部屋から出た。

「1428年 欧州にある城の中」

エヴァが産まれてもう4年。

俺は10歳になり、エヴァはアタナシアとキティという洗礼名を貰っていた。

俺の洗礼名はどうしたって？

名前が気に入らなかったから無かった事としたよ。

父さんも別に使わなくていいと言ってたしな。

のんびりエヴァと日々を過ごしてきたある日、父さんがこんなことを言ってきた。

「メフィストよ。戦争が起こっているのは知っているな？

その余波がこちら辺一体にまで飛び火してきそうなのだ。

お前たちを戦争に巻き込む訳にはいかない。

そこでエヴァとともに。。。の城に行ってくれないか？」

そう、今は戦争中である。

どこどこが戦争しているのかは知らないが、ジャンヌ・なんとかって人が活躍しているらしい。

「父さんたちはどうするのですか？」

「私たちはこの城を守る義務があるからな。ここで残って戦うのだ」

「……わかりました。俺たちがここにいても邪魔ですしね。」

「。。さんの城に避難させてもらいます」

「すまないな。。には不自由させないようにとっておいた。」

エヴァにはもう言い聞かせてある。今日中に荷物をまとめて明日には向こうに向かってくれ」

「わかりました。父さん、母さん。無事に生き残ってください」

「わかっている」

「もちろんよ」

そうして翌日、俺とエヴァは10年過ごした城を出た。

「1434年 欧州の辺境の城」

。。さんの城に来て6年。

ここは辺境に位置するから戦争に巻き込まれることもなく、何不自由することなく俺とエヴァは過ごしていた。

「兄様、兄様。明日は私の誕生日ですよ！」

「いきなりどうしたエヴァ？」

今日も城の中でのんびり過ごしていた時に妹のエヴァが走り寄ってくる。

「兄様は私の誕生日プレゼントを買いに行かなくて良いのですか？」

「なんだ、そんな事か…「そんな事とは酷いです!」…落ちつけエヴァ。」

プレゼントならもう用意してあるよ」

突然やってきて何を言うかと思えば……
どこで教育を間違えたかな。

「ホントですか、兄様!？」

「ホントだよ、エヴァ。 だから明日は楽しみにしているよ」

「ハイ!」

につこり笑って返事をしてきた。
いやされるな。 おもわず抱きしめちゃうぜ。

「っっ!! に、兄様!？ いきなり抱きしめてどうしたのですか!？」

「ん？ 可愛い反応してくれたからおもわず抱きしめちゃったけど、いやだった？」

「い、いやじゃありませんけど……その、はずかしい(「ニョニョニョ」)」

なにこの小動物みたいなの。めちゃくちゃ可愛いんですけど。

そんな会話をしつつこの日が終わった。

そして次の日、悲劇が起こった……

次の日、朝起きたら、俺とエヴァの体は人間じゃなくなっていた。外見は変わらないが自身の体は全くの別物だと認識していた。

「……な、何、これ？ 何が起きてるの？」

エヴァも俺と同じく自分の置かれた状況に困惑している。

「ハッハッハッハ！ 実験は大成功だ！

技術をくれたあいつには感謝してもしきれないわ!」

俺とエヴァが自身の変化にかなり戸惑っている時、そばにいた男が笑いながら声を掛けてきた。

「お前、誰だ?」

「私か? 私はこの城で魔法の研究をしていたものだよ。私を知らないのも無理はない。めったに研究室からでないからね」

こいつか! 俺達をこんな目に合わせたのは!

「お前か? 俺達の身体を変えたのは?」

内心、怒りでブチ切れそうだったが、冷静になり事実を確認する。

「その通りだ! 光栄に思うがいい!

君達は私のおかげで吸血鬼の真祖になれたのだ!」

俺の隣にいたエヴァが殺気立っていた…まあしょうがないよな…

(エヴァ…殺るのはいいが少しだけ待ってくれ)

(く…わかりました)

エヴァに小声で自制するよう注意する。

「1つ聞きたい、魔法使い殿。

君に真祖の技術を教えた人を教えてはくれないか?」

「ふむ…私は今、非常に気分がいいから教えてあげてもいいが、私自身も知らなくてね。」

研究にいきずまっていた私の前に突然現れたんだよ」

（…もう殺っていいぞエヴァ。」

だが俺も一緒に殺る。お前は右、俺は左だ。挟撃するぞ。）
（わかりました）

聞きたいことは聞いた……あとは始末するだけ。

「教えてくれてありがとう、魔法使い殿。ではさよならだ！」

しゃべり終わる前に俺とエヴァが飛び出して魔法使いの身体を爪で串刺す。

「ガハッ！ な、なにを……」

「もう喋るな。空気が汚れる」

「死ね」

1秒も声を聞きたくなかったから、もう片方の手でコイツの頭を掴んで潰す。

脳天を潰したら魔法使いは動かなくなった。

「…兄様…これからどうしましょう？」

初めての人殺しに震えながらもエヴァが聞いてきた。

俺も動揺していたが…真祖になったせいか不思議と人殺しに対する忌避感は無かった。

これからだが、とりあえずこの城主に聞きたいことが出来たな…

「…おそらくこの城主はこの事を知っていたはずだ。今から確認し、知っていたら血祭りに上げる。

エヴァは俺の部屋に行つて誕生日プレゼントを開けていてくれ。事が終わつたらここから逃げよう」

「……わかりました。お氣をつけて…」

「わかつている…心配すんな。俺は死なないよ」

さて、問い詰めて素直に吐けばいいけどな…

【メフィストside】

エヴァと別れて俺は城主である。。の下に向かう。

やつの部屋を開けたら椅子に座つて本を読んでいた。

「おや、メフィストじゃないか。どうしたね、こんな朝早くに？」

…まさか俺が吸血鬼になった事を知らないのか？

だがこの城にいた魔法使いの事を知っているだろうし一応聞くか…

「……聞きたいのは一つだけだ…この城にいる魔法使いの実験の事は知っているか？」

「当然じゃろう。私の城の住人のことだからな」

ふん… 黒か。ではお前は俺の敵だ！

俺はその言葉を聞き終わる前に。。。の心臓を爪で貫く。

「グア！ な、血迷うたか、メフィスト……」

「黙ってそのまま死ね」

心臓を貫いた手を引き抜くと、手が鮮血によって真っ赤に染まっていた。

その手を見て、俺の頭は血を飲むことしか考えられなくなる。

血だ…… 真っ赤な血だ…… 飲みたい飲みたい飲みたい飲みたい飲みたい
たい

飲んでみようか？ おいしんだろうか？ 俺の喉を潤おしてくれるんだろうか？

どんな味がするんだろうか？ 芳醇な味なんだろうか？ さっぱりして
飲みやすいんだろうか？ 喉にはりつくようなコクのある味なんだ
ろか？

飲みたい飲みたい飲みたい飲みたい飲みたい飲みたい飲みたい飲
みたい！

俺は吸血衝動に身を任せて血を舐めてみる。

…… あまり美味しくないな……

なんだか脂っこいと言うのか…… 美味しくないのに喉に張り付く。

こいつ自身太っているしな。 今後は肥満の血は飲まないようにし
よう。

こんな血なんかもう飲みたいくないや。

マズい血を飲んで正気に戻る俺。

。。。を殺したあと俺は、この城にあった金を持てるだけ奪ってエヴ

アの下に向かう。

その途中で手に付いていた血を拭き取っておく。

エヴァを迎えに行く途中に、天照の事、転生の事を思い出してきた。内心は、怒り・憎しみが渦巻いていたが、真祖になった喜びもあって複雑な気持ちになる。

…なるほど…気も魔力もみなぎっているな…

ここから脱出したら王の財宝の練習をしないと…
ゲート・オブ・パレロン

それにしても、俺の名前は「メフィスト」か…ありがとな、天照さんよ。

…

…

…

「エヴァ。プレゼントは開けたか？」

ドアを開け、部屋の中に入って目にしたのは、俺が上げたプレゼント…服を着て

泣いているエヴァだった。

side out

【エヴァ side】

兄様と別れた私は、すぐに兄様の部屋に向かった。

そこで紙で包装された袋を開けてみると、可愛らしい服が出てきた。

一目で気に入った私は早速服に袖を通してみる。

ふふ…兄様のセンスは素晴らしいな…

そこで私は、吸血鬼になった悲しみ、魔法使いに対する怒り、プレゼントを貰ったこと

への喜び、これからの不安、といった感情がごちゃまぜになって感情が制御できず泣き出した。

兄様…私達…これからどうなっちゃうの……………

side out

【メフィストside】

自室のドアを開けたら、俺が上げた服を着たエヴァが泣いていた。なんで？とか、どうした？とか聞く前に俺はエヴァを抱きしめ頭を撫でて落ち着かせる。

「？ 兄様？」

「悪い…遅くなった…まずはこれだけ言っておくよ。服を着てくれてありがと。

似合っているよ」

「えっぐ……ぐすっ……兄様がくれたものですから……
兄様はなんでそんなに落ち着いてられるのですか？」

「……落ち着いてなんか無いよ。心の中では魔法使いへの殺意でいっぱいだ……」

今にも血祭りにしてやりたい……でも、泣いているエヴァを放っておけないからな。

無理やり感情を押し殺しているんだ」

「う、ごめんなさい……私、兄様の気持ちを知らないで……」

「いや、いいんだ。エヴァは泣きたいときに泣いていいんだぞ」

「う、うわああああん！」

しばらくしてエヴァは泣き疲れて寝た。

眠り付いたエヴァを見て俺はある決意をする。

……

……

……

俺は城から抜け出しエヴァを近くの木に寄り掛かける。

幸い外は曇りだったから日光を浴びずにすんだ。

そして、城の方に向かって、

「…6年間だけだが、貴様らには世話になった。真祖にしてくれた恩もあるしな。

よって血祭りは勘弁してやる…だが！ エヴァを泣かせた罪は重いぞ！」

俺は気を拳に貯め始める！

そして俺は、師匠から受け継いだあの技を繰り出すっ！（噓）

「いくぞ！」

流派！ 東方不敗があ！ 最終奥義いいいつ！！

石破！ 天驚けええええええん！！！！」

巨大な拳の形をした膨大な気の塊が城に向かって飛んでいく。そして拳が開き、城を掴むと、

「ヒイイイト！ エンドオ！！！！」

大爆発を引き起こした……

俺は急いでエヴァをお姫様だっこしてその場から離脱する。

そして城のあった場所を見ると……

半径1kmほどのクレーターができていた！

「……………やっべ（汗）。ちょっと調子に乗りすぎたかねえ…まあいっつか」

「…ん……あれ？私…寝てた？

つてええ！ に、兄様！ あのクレーターはなんですか！？」

「ん？ 起きちゃったかエヴァ。」

「ちょっと女の子を泣かした奴らにお仕置きをしただけだぞ」

「……お仕置きってレベルじゃない気がします。あの城……消してしまったのですか？」

「……ああ、そうだよ。エヴァは人を殺した俺を軽蔑するかい？」

「何を言ってるんですか、兄様は……人殺しというなら私もです。それに、あの城での思い出は兄様と過ごしたただけですから。育ててくれた恩はありますが、あんなことするような所なら無くなつて清々してます」

「……そっか、ありがとな」

「ふふ、いいんですよ。兄様、これからどうします？」

「ひとまず身を隠そう。そして一休みしてからどう行動するかを考えようか」

「わかりました、兄様。……あの……少し眠くなってきたのでこのまま寝ていいですか？」

「ああ、いいよ。今日は色々あったからね。お休み、エヴァ」

「おやすみなさい、兄様」

第参話 『いざ別世界！　そしてようこそ！我が永遠の肉体よ！』（後書き）

なんだか書いていると一話ごとに文字数が増えていく…
小説を書くのは難しいとどんどん感じていきます。

誤字・脱字等、教えてくれると嬉しいです。

注意しているんですが見落としている所もあるかもしれませんので

……

第肆話 『主人公設定＋初のエンカウント』（前書き）

今回は主人公のステータスを紹介します。

数値が異常ですが、そこは御愛嬌ということで。

第肆話 『主人公設定+初のエンカウント』

名前：メフィスト・マクダウエル

年齢：16歳

身長：170cm 体重：56kg 性別：男

髪：色は薄い紫 長さは背中の中ばに届く長髪

前髪は左右に分け、長さは肩にかかる程

眼の色：蒼

顔：もはやセフィロス（決して考えるのが面倒な訳じゃないですよ）

体型：やせて見えるがかなり筋肉がある

服装：DMC3のバージル

エヴァが16歳の誕生日にプレゼントしてくれた。

性格：天上天下唯我独尊

自分が気に入ったことしかやらない。

誰かに命令されて動くとかもつての外。

ただし、約束は守る。

エヴァと自分が気に入った者に仇なす者は例外なく見敵必殺。
サーチアンドデストロイ

【パラメーター紹介】（Fate風にしてみた）

筋力：EX 気：EX

魔力：EX 耐久：EX

敏捷：EX 幸運：B

宝具：EX （リンク 高い EX<A E 低い）

【保有スキル】

真祖の肉体：A

吸血鬼の中でも人間が秘術によって遺伝子・細胞・その他神経系や体内機関を変化させた身体。

莫大な魔力を宿し不老不死となるが、その分弱点も多い。
しかし弱点は年月によって解消する。

千里眼：A

魔力を眼に込めることで見える距離を増やす。
最大で50kmまで可能。

真名解放：EX

宝具に魔力を注ぎ込みながら技の名前を叫び、宝具の力を最大限に解放すること。

本来なら宝具の持ち主しか発動する事は出来ないが、神のおかげで全ての宝具の真名解放

が可能になった。

幻獣召喚：B→EX

契約した幻獣を、魔力を消費して現界させる。
呼び出す幻獣によってランクは変動。

現在、考えているのは7体。

話の中で契約したら詳しく紹介します。

戦闘技術の継承：B

天照大神がサービスと称してメフィストの記憶に体術・剣術・槍術などの基礎知識を刻んだ。

これから鍛えることによってこれらの技術はランクアップする。

魔法の知識：A

これも天照大神がサービスしてくれた知識。
原作に出てきた魔法を扱えるようになった。

このスキルは原作とリンクしていて新しい魔法が出てきたら随時更新される。

始動キーは天照が設定してくれた。

始動キー：サタム・サタディア・サタナキア

【宝具】

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝：E↗EX

種別：対人宝具

レンジ：-

空間を繋げ、宝物庫の中にある宝具を自由に取り出せるようになる。ただし、中にある宝具は神々によってもたらされたものや、原形ではなく伝承によって出てくる宝具となっている。

例：原罪^{メロダック}↓グラム、勝利すべき黄金の剣

紹介終了

「欧州 とある森の中」
「夢の中」

「久しぶりじゃの」

「…なんでここにいの？」

眠っていたはずの俺の目の前に天照さんが現れた。

「ここはお主の夢の中だからじゃ」

「あゝなるほど。さすがは神様だ…なんでもアリってわけね」

「とりあえず納得しておけ。話が续かん。
妾が現れたのは、お主の王の財宝と召喚のやり方を説明するため
じゃ」

おっ あっちからわざわざ説明しに来てくれるとは…感謝感謝♪

「なるほど…それは助かるわ。明日から練習しようと思ってたしな。
アフターケアも万全とは、神の仕事は暇なのか？」

「…まあぶっちゃけ暇なのじゃよ…
それにお主のような煩惱まみれの転生は例が無かったからな…
不都合が起きないか心配じゃったのじゃ」

何やら地雷を踏んだっぽいぞ、俺。
俺に対する言葉に棘があるわ。

「……煩惱まみれですいやせんね〜
それで？ 早くやり方を教えてくれよ」

「態度が気に食わんが…まあいいじゃろ…
ゲート・オブ・バビロン
まずは王の財宝じゃ。

これは出したい宝具を頭の中で念じる事で自身の後ろの空間から現れる。

ギルのように宝具を雨のように降らせるのは、適当に宝具を思い浮かべろ。

ここで注意するのが、ゲート・オブ・バビロン王の財宝から出した宝具は、使用者の魔力によつて顕現しておる事じゃ。

宝具のランクによつて使用する魔力も変わってくる。

そして魔力の供給をカットすれば宝具は倉庫に戻るように設定してあるぞ」

「ほう。中々便利になつているな。

わざわざ自分でしまいになくていいってことか…おk 把握した。

召喚の方は？」

「召喚の事じゃが、まずは幻獣を倒して従えるところから始めてくれ。この世界に散りばめて配置しておいたんでな」

「なるほど。最初からチートプレイはさせないってか？」

「まあそんなところじゃ。……もう十二分にチートじゃがの……」

ボソツと毒を吐くなよ……聞こえてるぞ。

「さて、気を取り直して説明を続けるかの…」

ゲート・オブ・バビロン
お主の王の財宝に魔石と呼ばれる手のひらサイズの黒い石を入れて

おいた。

幻獣の近くに來たら点滅して知らせてくれる。

そして幻獣に近づく毎に点滅が速くなり、点滅じゃなく光り輝いた
らそこで石を砕け。

そうすればそこで幻獣が現界する。そこを倒すのじゃ」

説明を聞きながら、世界中つて範囲広くね？と理不尽に感じた俺。

「幻獣はどこにいるか教えてくれない？ あと数も」

「いやじゃ。そんなつまらない事しとうないわ」

……コイツ……いや、落ち着け俺……今すぐ呪殺してやりたいがこれ
は夢だ……

俺には交渉するしか選択肢がない……

「じゃあヒントだけでも教えてはくれませんか？」

仕方がないので下手に出てみる……くそ、頭が上がらないとはこの事
か……

「……お主が敬語を使うとはの……いいじゃろう、礼儀には答えん
とな。

直接は言えないが簡単に教えておこう。

場所は古城・氷の大地・水の神殿・インドにある寺院。数は7じゃ。
そして6体集めてエヴェレストの山頂に行くと、幻獣神バハムート
が現界するぞ」

ハイ！？ 下手にですぐ情報を渡すか！？ まあいいさ……

「それとこれを餞別にやろう」

テテテッテテッテテッ」
メフィストは『イフリート』をてにいれた

「おいおい（汗）。ちょっと神様よお、気前すぎねえか？」

「何、気にするな。これから面白いものを見せてもらっ前料金だと思っ受取っとけ」

俺は賤別の品が良すぎて少し裏があるんじゃないかと思ったが、天照さんはあっさり理由を教えてくれた。

「ふむ、了解した。そっいや幻獣の召喚はどうやるんだ？」

「うむ、それも今から説明しよう。
さっき魔石の話をしたじゃろ？ 召喚も魔石を使うのじゃ。

召喚するときに、召喚したい幻獣を思い浮かべて石を砕くとその幻獣が現界する。

この幻獣も宝具と同じように術者の魔力で現界する。
幻獣を戻すやり方は、倒されるか、魔力供給を切ることによって戻るぞ」

「色々と教えてくれてありがとな、天照さん。これで俺が教わることは終わっかい？」

「あともう一つだけあるぞ。
お主のスキルに「戦闘技術の継承」と「魔法の知識」をサービスしておいた。
どんなものは自分で確かめてくれ」

「サンキュー」

俺の心の中で天照に対する感謝の気持ちが溢れてきた。
…気前よすぎだろ、これ…

「さて、そろそろお別れじゃ。元気にやるのじゃぞ」
「お前は俺の母さんか……」

…昼…

「ん…よく寝た」

俺の横ではまだエヴァが寝ていた。
エヴァを起こさないように起きて少し離れる。
てか今日も曇りか…これは好都合。

…中々アレな夢を見たがホントなのか少し試すか…
そう思い俺は王の財宝ゲート・オブ・バビロンの中からエクスカリバー 1を取り出してみ
る。

「おおお！ これがあのアーサー王が使っていた剣か！
俺は今、猛烈に感動しているッ！！」

いや… この剣を持てる日がくるなんて… もはや感無量だわ…
真名解放できっかな？

「よし！ やってみっか！」

え〜っと 確か魔力を剣に込めて…

「^{エクス}約束された――

俺は剣を大きく振りかぶり……

――^{カリバー}勝利の剣ッ！！」

真名を叫びながら、剣を振り下ろした！
すると……

剣に込めた魔力が黄金の光となり前方へ一直線に放出され木々をなぎ倒した！

「……………（威力に圧倒されて呆けてる）」

おいおいおいおい！ 自分で設定しといてなんだがいいのかこれ！？
人に撃つたら明らかにオーバーキルだぞ！！
いやでも、この世界には賞金稼ぎとかいるんだっけ？
いや、でもなあ……………

などと考えていると「さっきの攻撃はテメエかあ！？」……………誰おまえら？

誰かが声をかけてきた……………その数50人ぐらい……………

……………ハイ！？

俺なんか悪い事したっけ？ まあ昨日、城を一つ消滅させたけどさ

……………

お前らなんか俺しらねえよ？

などと考えていると…

「あいつが標的だ！ やっちまえ！」

などと抜かし、武器を手に持って向かってきた。

ハア…… もう狙われる立場になったのかよ……

まあいいや…今度は魔法のテストをするかね。

「貴様らには俺の実験台になって貰うぞ！

サタム・サタディア・サタナキア！

来れ雷精 風の精！ 雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！

『雷の暴風』！！』

詠唱を終えた俺の手から強力な雷を纏った旋風が敵を襲う。

俺を狙ってきたザコどもは全て消し飛ん「ひ、ひいい！」…だと思

ったが一人だけ

生き残ったようだ…… チツ

まあ丁度いいや。

あいつをこつm、ゲフンゲフン、OHANASHIして誰の差し金か聞きだす事にしよう。

「おい、そのモブキャラ」

「ひいいい！ こ、ころさないでくれ！」

声を掛けただけで怯えられてしまった。

うざったいので脅かして黙らせよう。

「少し黙れ」

「はいいい！」

少し殺気を込めて言い放つと、あっさり黙るザコ。
さて、「お話し」するか。

「一度しか言わないからよく聞け…
俺（いや、俺たちか？）を殺すように貴様らに言ってきたのは誰だ？」

「そ、それは……ギャアアア！」

優しく質問したのに答ええないモブにイラつき、俺はエクスカリバーをモブの足に突き刺した。

「お前は黙って俺の質問に答えればいいんだよ。
喋らないならこのまま剣でもう一方の足を刺す。
次は手だな。その次は胴体と順番に刺していくが……
喋る気になってきたか？」

「ハイイ！ 喋ります！ 喋りますからあ！」

「わかったなら早く吐け」

「私たちに以来してきたのは□□という男です…」

「な！！ なんだと！！」

なぜここで父さんの名前がでてくるんだ！？ こいつが嘘を言って

いるのか？

いや、でもなんのかかわりが無いのに父さんの名前がでる訳がないし…

「あのーもう私は帰ってもよろしいでしょうか？」

「少し黙ってろ」

考え事をしている俺に話しかけるモブ。

だが、ザコに構っている時間はないのでエクスカリバーで首を刎ねた。

まったく…それどころじゃないっての…

「んー兄様うるさいですよー…ひっ！ー」

マズい！ エヴァがこっちに来てこのありさまを見てしまった。

「兄様！？ 何があったのですか！？」

「……俺達の命を狙った傭兵だ」

言い訳できない状況だと判断した俺は正直に話す。

「傭兵！？ 兄様、どこか怪我はありませんか！？」

そう言われて俺は自分の身体を見る…返り血で赤いな。

「いや、大丈夫だ。この血は返り血だ」

そう言ってエヴァの方に近づいていくと、エヴァは少し俺に怯えて

いるようだった…

そりゃ血だらけなヤツが近づいたらビビるわな。

「…エヴァ」

「な、なんですか、兄様？」

「俺はエヴァに誓うよ。俺達はこれからも世界の敵として狙われ続けるだろう。

でも俺とお前に仇なす者は全て俺が屠る。そしてお前を全力で守る。守り通してみせる。

もう世界中……エヴァ以外、信用できる者がいないからな…

だから、エヴァ……お前は、お前だけは、俺を拒絶しないでくれな
いか？」

「あ……私……そんな……つもりじゃ……」

「わかってる。怖いんだろう？ 明日が見えないんだろう？

そんな状態でこんな所を見たら誰だってそうなるだろう……」

そう言いながら俺はゆっくり近づいていきエヴァを抱きしめる。

「だが大丈夫だ。もし世界中が敵に回っても、俺だけはお前の味方だ。

未来が見えないなら俺が切り開く。だが俺にも限界があるだろう……
だから、エヴァも俺のことを守ってくれないか？」

「もちろんです、兄様…

もう私はどんな事があっても兄様を拒絶しません、裏切ったりしません。

私が力を付けたら兄様を守ります」

「…ありがとう、エヴァ。昨日、今日といろんな事が起きているかな。」

今日だけはここでゆっくりしよう」…」

「はい… 兄様も休むんですよ？」

「ふふ、心配してくれてありがとうかな」

「当然です。妹なんですから」
？

第肆話 『主人公設定＋初のエンカウント』（後書き）

ゲート・オブ・バビロン
これから王の財宝の中にある宝具をどんどん出していくので、ここにその説明を載せていきます。

中にはオリジナルの宝具も多数登場するので、読んで納得してくれたら幸いです。

1 エクスカリバー 約束された勝利の剣

ランク：A++

種別：対城宝具

レンジ：1～99

最大補足：1000人

光の剣。人造による武器ではなく、星に鍛えられた新造兵装。聖剣というカテゴリーの中では頂点に立つ宝具である。

所有者の魔力を”光”に変換し、収束、加速させる事により運動量を増大させ、

神霊レベルの魔術行使を可能とする聖剣。

第伍話 『初のボス戦 新たなる力』（前書き）

今回はちよつとご都合主義が入っています。

第伍話 『初のボス戦 新たなる力』

「前話と同じ場所」

「夜」

「エヴァ、ちょっといいか」

「何ですか、兄様？」

「昼間の奴らの事なんだがな、これから首謀者のところに行ってお礼参りをしてくるわ」

「お礼参りってなんですか？」

エヴァがキョトンと首を傾げる…この歳では知らないか。

「お礼参りってのはな、身の程知らずのバカにもうするなよってお話しすることだ」

「なんか物騒な気配がします……」

ぐお、エヴァに突っ込まれた。

だがこれから血生臭い事をするからバレる訳にはいかないしな。

「だからエヴァはここで待っていてくれないか？」

「…わかりました…気を付けてくださいね、兄様」

「心配するな、もはや俺達是最強種の一員だ。そんじゃそこの連

中には後れを取らんよ」

最強種すら超越してる気がするしな」

………

………

…

「さて、そんじゃそろそろ行ってくるわ」

「いつてらっしゃい、兄様」

俺は王の財宝から全て遠き理想郷 ゲート・オフ・バビロン アヴァロン 1を取り出した。
そしてアヴァロンを展開する。

「全て遠き理想郷展開、対象・エヴァンジェリン」
アヴァロン

「兄様？ これはいったい？」

突然の事態にエヴァが困惑している。

「俺がいない間にドブネズミが来ないとも限らないからな。
これは全て遠き理想郷 アヴァロン といって、簡単に言っと最強の盾だ。
エヴァはここから動かないように」

「わかりました。あの、兄様？ ホントに気を付けてくださいね？」

「わかってるよ。夜明けまでには戻ってくる」

俺はエヴァを残して、

「出てこい、『ヴィマーナ』²」

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝から出したヴィマーナに乗って漆黒の空に飛びたった。

「幼少の頃に過ごした城」

俺は昔住んでいたこの城にやってきた…

用件はもちろん昼間の襲撃の件だ。

しらを切るなら瞬殺、認めるなら瞬殺し、増援を呼ぶなら虐殺だ！

怒気を昂ぶらせつつ俺は父さんを探した、そして、

「ここにいたか…父さん…」

食堂で夜飯を食べている父さんと母さんを見つける。

「メフィスト？ なぜここに？」

「久しぶりね、メフィスト。元気にしてた？」

久しぶりに帰ってきた息子に対して素っ気ない態度をとる夫妻。
一応畏の可能性を考慮して問いかける。

「……一つ聞く、昼間の奴らはお前が仕向けたのか？」

「何の話だ？」

「そんなことより久しぶりに家族そろってご飯をたべましょ」

当然の質問にあまり反応を示さず、白々しい態度を取る父親と母親。これは確定だな……

「そうか…なら、死ね『魔法の射手 雷の100矢』！」

俺は問答無用で「魔法の射手」を放ったが、

「ふう、やれやれ。血気盛んだな、我が息子よ」

父さんと母さん、そして、

どこにいたかは知らないが20人ぐらいの魔法使いの障壁に防がれていた。

「……お前らホントに俺の親か？」

ちっ めんどうな事になってきたな…… まあ俺にとっちゃ楽勝だが…

「何をあたりまえなことを行っているのだ息子よ」

「当然でしょう。私たちはあなたの両親よ」

「……わかった。もう俺はお前たちを親だと思わん。俺の敵とみなす」

俺の言葉が終わらない内に魔法使いどもから様々な魔法が飛んできたが、

「こんなシヨボい威力じゃこの俺は倒せねえぞ」

障壁で防いだので俺にダメージはない。

「な！ そんなバカな！？」

「何やってるのよ！ 相手はまだ真祖に成り立てなのよ！ さっさと殺しなさい！」

なにやらあいつらは俺が吸血鬼だと知っている様子だった。

そんなバカどものやり取りをほっといて俺はイフリートの召喚を試してみる。

「私の呼び掛けに応えよ、炎霊召喚！ 来い！『イフリート』」 3

俺の掛け声が終わると同時に石を砕くと、目の前に魔法陣が出てきてイフリートが出てきた。

「我が名はイフリート。マスターの呼び掛けに応え参上しました。マスター、命令を」

なんだか外見に似合わず丁寧な言葉使いをするイフリート。

「俺がマスターのメフィスト・マクダウェルだ。

最初の命令だが、この場にいるクズどもを血祭りに上げる。お前の力を見せてくれ」

「御意」

返事をしたかと思うとイフリートが魔法使い共の近づき、ある者は爪で引き裂かれ、ある者は頭を噛み砕かれた。残りの人数が8人ぐらいになったかと思うと、全員が一ヶ所に固まって呪文を唱えて始める。

「プラ・クテ・ビギナル！

契約に従い我に従え 炎の霸王！ 来たれ浄化の炎 燃え盛る大剣！
ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を死の塵に！
『燃える天空』！！」

どうやら一人じゃ発動できないような上級魔法を複数の人数で詠唱し発動できるようにしたようだ。

詠唱と共に先頭にいる魔法使いから超高温のレーザーがイフリートに直撃し爆発を起こす。

だが、火をつかさどる精霊であるイフリートにその魔法は無意味だ。てかあいつらバカなのか？

「イフリート。あいつらはアホにも炎の魔法でお前に挑んできたぞ。格の違いを教えてやれ」

「承知しました。『地獄の火炎』！」

イフリートが「地獄の火炎」を発動すると、魔法使い共の周囲に結界ができて推定1000

の炎が結界の内部を焼き尽くした。

うはっ！ えげつなっ！

「すげえな、イフリート！ ここまで高威力とは思わなかったぜ！」

「いえ、マスター。それでも抑えた方です。本当は視界に入るものを全てを焼き尽くす事ができます」

さらつと爆弾発言をするイフリート。

「ハハハ！ 気に入ったぜ！ これからよろしくな、イフリート！」
「こちらこそよろしくお願いします、マスター」

イフリートと他愛無い会話をしていると、結界があつた場所から父さんの服っぽいものを着た男が黒コゲの状態で出てきた。

肩で息してるよ…障壁はつてもキツかつたんだろうな
てかあれ俺の父親か？ なんか顔とか体型とか違う……まさか！

「お前……俺の本当の親じゃないな？ さっきまでの姿は幻術か？」

「……ふ……コスモエンテレケイア完全なる世界に……栄光あれ……」

最後にボソツと言い残し倒れ伏した。
コスモエンテレケイア
完全なる世界だと？ この時代でその単語を聞くことになるとはな

……

まあいい…あの大战に介入するかはあとで考えよう。

「イフリート。お前、気配察知とかできるか？」

「この城の中ぐらいの範囲ならできます」

「ふむ。じゃあ早速調べてみてくれ」

「御意。……………いませんね」

いないだと？　どういう事だ？

俺の襲撃を予想していたのか？

まあいい……誰もいないなら好都合だ。

速攻でダイオラ魔法球を作ってこの城をしまってしまおう。

「イフリートはこの城に誰も来ないか見張っててくれ。

来ないと思うが金髪の女の子以外は消し炭にしていいいぞ」

「了解しました」

俺は魔具がありそうな部屋を探すため城の中を捜しまわる。

そして地下への扉がある事に気がついた。

「いかにもってとこだな……んじゃま、行ってみつかね……ん？

魔石が反応している？　この先に幻獣がいるというのか？」

もう新しい幻獣ゲットのチャンス到来ってか！？

テンションあがってきたぜ！！

………

………

………

〔城内 地下2階〕

魔具がいっぱい置いてある部屋を発見つと。

お！　ダイオラ魔法球があるじゃんか！（そこ！　ご都合主義と

か言わない！)

魔石の方はっと…

まだ点滅か……だが確実に速度が上がってきてるな。
階段もまだあるし、この先かな？

………

………

…

〔地下4階〕

おお　点滅速度が尋常じゃなく上がってるぞ。
あれだ…ウルトラマンの胸のタイマーがもうちょいで3分になるってぐらいの速度だ。

そして奥の部屋を開けると、ピカーッと光りだしたよ。
んじゃ、碎いてみるかねっと「バキッ」

おお！　馬と騎士が出てきたわ！
これは、オーデインだな……ん？　まだ石が光っている？
おいおい（汗）　ここに2体も幻獣がいるってか！？
こりゃ幸先いいなあおい！　ほいっと「バキッ」

次に現れたのは額に赤い宝石、身体の色は緑で姿形はキツネみたいな獣…

こいつぁカーバンクルだな。

さてと、じゃあぶつたおしますか！

「出てこい、エクスカリバー！」

速攻で粉碎してやんよ！

「ちょっと待て、メフィスト」

「そうよ、少し私たちの話を聞きなさい」

ん？ この声？

なんか父さんと母さんに似てるな…

「もしかして、父さんと、母さんなのか？」

「そうじゃ」

「久しぶりね」

ジーザス……親が幻獣ってこういう心境なのか……
セシル…今ならお前の気持ち少しだけわかるわ…

「てかなんで幻獣なんかやってんの？ 早く成仏しろよ」

「おま！ 冷たくねえ、それ！？」

それが親に対する態度か！？ 父さんはそんな風に育てた覚えはないぞ！」

「そうよ！ 少しは私たちを労わりなさい！

てかここは感動の再会をするところでしょう!？」

「いや、俺にシリアスなのはあんま似合わんし……ハア……じゃあやり直すか……」

なんで幻獣になつてんの？」

「「私たちもよくわかってない」」

シーーーーー……ン………

オーデインとカーバンクルの合体攻撃!

『いてつく波動』ッ!

周囲の空気を凍らせるッ!

答えに呆れた俺は、

「^{エクス}約束された――

「待て待て待て待て!!」冗談だよ! ちゃんと説明するから!」

「ホントだろうな?」

俺はジト目でオーデイン(父さん)を睨みつける。

「ホントホント」

「……ちゃんと聞いてやるから早く説明しろ」

「まったく……真祖になつて性格が悪化したわ。

どこから話そうか……まず、俺と母さんはお前とエヴァを。の家に預ける前の日に殺された。

だが、俺たちは無念で溢れてたらしくてな、この城に自縛霊として残っていたんだよ。

そこにこのオーディンとカーバンクルが惹かれて来たらしい。それでいつの間にか同化していたんだ」

「…なんともまあ、ご都合主義だな」

「それは言わない約束だ。そんな訳で幻獣と同化した私たちの自我なんだがそのうち消えるらしくてな、幻獣たちに息子に会うまでは待つてくれとダメもとで聞いてみたら了承してくれたんだ。

さて、ここからが本題だ。私たちが不甲斐ないばかりにお前たちが吸血鬼になるのを防げなかった…すまなかったな…」

「気にするな、父さん。別に悪い事ばかりじゃない。

なんだって不老不死だからな。それにエヴァもいる。寂しくもない」

「……そうか、お前は、お前が信じた道を行け。

私が言いたかったのはそれだけだ…母さんは何かあるか？」

「……いいえ、メフィストが元気なら私はそれで満足よ。

ただ、ここにエヴァがいないのがちよつと心残りね」

「エヴァには俺から言っておくよ」

「頼む。そろそろ時間のようだ。がんばれよ」

「ああ、安心して逝け。俺は最強だからな…誰にも負けやしねえよ…父さん、母さん。今まで…育ててくれてありがとな…」

俺の目から一滴の心の汗が流れ落ちる。

父さん、母さん…最後に会えてよかったよ…

オーディンとカーバンクルの意識が塗り替えられる。

「……別れは、済ませたか？」

さて、ここからは泣き言は言わん…

これから殺し合いをするんだからな。

「ああ…もう大丈夫だ…さあ！ 殺り合おうぜ！！
一体ずつか？ 二体同時か！？」

俺が威勢よく問いかけるとカーバンクルが返事をした。

「僕としては二人でやりたいけどオーディンの旦那は騎士だからね。
一体ずつかな。先鋒は僕が貰うよ」

「よかるう」

オーディンが下がり、カーバンクルが俺に近寄ってくる。

「さて、じゃあやろうか。でも僕は本来、戦うタイプじゃないからね。

僕の張るリフレクをやぶる事が出来たら僕の負けでいいよ」

「ハッ！ なんだか簡単そうだな！ なら遠慮なく行くぜ！
サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 高殿の王！ 来れ 巨神を滅ぼす燃え立つ雷
霆！

百重千重と重なりて 走れよ稲妻！『千の雷』！！」

「千の雷」がカーバンクルの「リフレク」に当たって激しくぶつかり合う。

そして、

「オラァ！　ぶっ壊れるお！！」

リフレクを破った雷がカーバンクルを襲った。

「ピギヤアアアアアアアア！」

あ…勢い余って消し飛ばしちゃった…

大丈夫だっけ（汗）

すこしだけ心配したが、それは杞憂に終わる。

どこからともなくカーバンクルの声が聞こえてきた。

「いやー　強いねー　まさかいきなり破られるとは思わなかったよ…
君なら文句なしで合格だ！　僕の主になってくれないか？」

「もちろんおｋだ！　よろしくな、カーバンクル！」

「こちらこそ、よろしくだよ　ご主人」

カーバンクルを倒した後、オーデインに向かい合う。

「まさかあの条件でカーバンクルが敗れるとはな…
お主、なかなかの剛の者だな」

「能書き垂れてねえで殺り合おうぜ！

ただいい加減、そろそろ帰らないといけないんでね…自分が持つ最高の技で決めないか？」

「ほう。ワシの斬鉄剣に勝つつもりか？」

「当然だ。こっちはこのままエクスカリバーでいくぜ」

そう言い捨て、俺はオーデインから距離を取る。

「お前がこの剣を破ったらお前の勝ち。

俺がお前の剣を破ったら俺の勝ち。わかりやすいだろ！？
行くぜ、オーデイン！ 約束された

オーデインが馬を走らせ突っ込んでくる…

———
勝利の剣ッ———

「『斬鉄剣』 ツツツ！！！」

光と斬鉄剣が一瞬だけ交差する……
全てを切り裂く「斬鉄剣」だが、約束された勝利の剣の威力の前には無力。

ぶつかり合った後、オーデインの身体は消し飛んでいた。

「カッカッカ！ お主、強いもう！」

貴殿さえよければワシと契約してはくれないか？ 十二分に働くぞ」

オーデインから契約の話が出てくる。

当然、拒む理由はないので承諾する俺。

「もちろん契約する！ オーディンが味方になるなら大分楽ができそうだ！

これからよろしくな！」

「うむ。よろしく頼むぞ、主殿」

この城でやることはもう終わったので外に出て最後の仕事をするか。

〔地上〕

地上に出た俺はダイオラマ魔法球にこの城…この際レーベンスシュルト城と名付けろか…

レーベンスシュルト城をしまった（どうやったかって？ 勘さ！）

「大量大量つと。今日は召喚獣が大量ゲットできてウマウマです！つと、いたいた。おゝいイフリート。誰か不審人物とか来たか？」

「いいえ。誰も来ませんでした、マスター」

「そつか。じゃあ帰るとすつか…イフリート、お疲れさん」

イフリートへの魔力供給を切る。

そして俺は『ヴィマーナ』を取り出しエヴァがいる場所へと帰っていく。

こうして俺の初のボス戦は終わった…

？

第伍話 『初のボス戦 新たなる力』（後書き）

ごめんなさい！

コスモエンテレケイア

なんか勝手に完全なる世界を出してすいませんっした！

この時代に存在している確証はないです。

ホントにその場のノリで入れちゃいました。

さて、では今回も宝具の説明を…今回はイフリートもいれてあります。

1 アヴァロン 全て遠き理想郷

ランク：EX

種別：結界宝具

防御対象：1人

エクスカリバーの鞘の能力。

鞘を展開し、自身を妖精郷に置くことであらゆる攻撃・交信から対象者を守るこの世最強

の守り。

魔法の領域であり、防御というより「遮断」であるという。

過去・未来・平行世界からの干渉に加え、異世界からの交信は六次元まで遮断する。

2 ヴイマーナ

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：-

空を飛べる、黄金とエメラルドで形成された光り輝く舟。

3 イフリート

クラス：炎の精霊

身長：5 m

属性：火

ランク：B +

筋力：A 魔力：A

耐久：B + 幸運：D

敏捷：B 宝具：-

モデルはFFX(Xをやったことない人は自分の知っている姿形を思い浮かべてください)
姿形は、狼人の身体がこげ茶色で頭から1 mぐらいの角が後ろに伸びている。

攻撃パターンは殴る・蹴る・噛み砕く・地獄の火炎。

必殺技：地獄の火炎

目標が少ない場合は、目標を結界の中に閉じ込めそこで焼き尽くす。
大多数の敵がいる場合は、自身が火を纏い敵の真ん中まで突っ込み周りを焼き尽くす。

半径50 mまで可能。

炎の熱はおそらく8000。

第陸話 『永久に続かない休み』（前書き）

日が経つごとにどんどんお気に入り件数が増えていく。
本当にうれしいです！

あいかわらず未熟者ですががんばります！

第陸話 『永久に続かない休み』

「欧州 森の中」

「昼」

「あゝ ダル……」

「兄様…気持ち悪いですう…」

俺達、吸血鬼共はバテバテ…一方は体調が悪そうだ。

どうやら真祖になったばかりだから太陽光にまだ当たれないらしい。
俺はチート気味だから軽く力が入らない程度だが、エヴァの方はかなり辛そうだ。

しょうがない…

「エヴァ…お前はこれの中に入っている… この中なら太陽光の影響がない」

俺は王の財宝からダイオラマ魔法球を取り出した。
ゲート・オラ・バヒロン

このダイオラマ魔法球だが、

どうやら時間差を設定できるらしい…最大で1日を10日ほどまで出来るようだ。

出入りはいつでも可能。

「わかりました…兄様はどうするんです？」

「俺は獣を何匹か狩ってくる。」

よくよく思えば俺たちは昨日から何も食べてないからな」

「クスッ そういえばそうでしたね…
すっかり忘れていました…
よろしく願います、兄様」

「任しとけ！ 旨いマンガ肉を食わせてやるよ！」

エヴァが魔法球に入っただのを見届けると、

「出てこい『イフリート』」

イフリートを呼び出す。

「御呼びでしょうか、マスター？」

「ああ。俺はこれから食料を取りに行くんだが、
お前にこの魔法球の護衛を頼みたい」

「御意。 お気をつけて」

「無問題だ。 何か問題が起きたら念話で知らせてくれ」

………

……

…

森の中を散策していたらイノシシみたいな動物…ブルファンゴと名
付けよう…

ブルファンゴ5匹と遭遇した。

ヨッシャア！ 昼飯ゲットオ！

「あのザコどもを捕えろ！天の鎖^{エルキドゥ} 1よ！」

空間から突如、金色の鎖が現れブルファンゴを縛る。
そのままブルファンゴの首をはねて王の財宝にしまった。
ゲート・オブ・バビロン

「さて、昼飯ゲットしたし…帰るとするか」

………

………

…

「ただいま」

「お帰りなさい、兄様。何を狩ってきたのですか？」

ゲート・オブ・バビロン
王の財宝の中からブルファンゴを取り出して見せる。

「イノシシっぽい生き物だ。ブルファンゴと名付けた」
「ぽいって…食べれるんですか？」

どうやらエヴァは俺が狩ってきたものに不安を感じているようだ。
だがそんな事は問題ない。

「俺の辞書に不可能という文字はない！
俺はやれば出来る子だからな！」

「……兄様…やれば出来る子って普段やらない子に言うセリフです
よ……」

「細かい事は気にしたら負けだぞ、エヴァ」

俺は王の財宝から肉焼きセットを取り出した。

…なぜか肉焼きセットが入ってたんだよね…

ブルファンゴから生肉を剥ぎ取って、厨房から持ってきた塩・こし
ようで味付けをして、

く テツ テテ テレレレ（肉焼き中）く

く 上手に出来ました！くく

こんがり肉を手に入れた

「ほら見るエヴァ！ 出来たじゃないか！」

「……ホントに兄様はなんでもありですね……
もうつつこむのも疲れました……」

むう…エヴァに呆れられてしまったぞ…

とりあえずこんがり肉を10個ほど生産しといた。

あまりは携帯食料に変えるとして…

そのうちゲリヨスを討伐して強走薬グレートも作らないとな…

「じゃあ気を取り直して、いただきます」

「いただきます」

俺達はこんがり肉（マンガ肉）にかぶりついた。

…お！ 意外と旨いじゃないか！ すごいぞ、俺！

「どうだ、エヴァ？ 口に合うか？」

「初めて食べるので、なんとも言えませんが…
斬新な味ですね…意外とおいしいです」

ふむ…割と評価が高いと見た。
だが、いつまでもこんな食事をしている訳にはいかな。
肉だけでなく野菜も取らないとな…

これからの栄養について考えつつ、エヴァと会話しながら食事を続けた。

…

…

…

〔昼飯後〕

昼飯後エヴァがこう切り出してきた。

「兄様…私、このお城に見覚えがあるんですけど…」

元々話すつもりだったので俺は正直に伝える。

「この城は、俺達が6年前まで住んでいた城だ」

エヴァは気が付いていたのか、納得したみたいな顔をしていた。

「昨日の襲撃の事なんだがな、

首謀者の名前を聞いたところ、父さんの名前が出て来たんだ。

それで真偽を確かめるために両親の下に向かったんだが、

もうかなり昔に殺されて、どこの馬の骨ともわからないような輩と入れ替わってた」

出来るだけ簡単に話したが、エヴァは親が死んでいたと聞いてショックを受けていた。

ショックを受けているエヴァにこれ以上教えるのは正直イヤだったが、両親の最後の言葉を聞かせるためにも話を止める訳にはいかない。

「それで俺は瞬殺しようとしたんだが、他の魔法使い共を呼んでいてね、

俺に喧嘩をふっかけてきたもんだから幻獣を召喚してフルボッコにしてきた。

全員をぶっ倒した後、この魔法球を見つけてこの城を魔法球の中に入れてきたってわけ」

俺の話を聞いていたエヴァは少し泣き出してしまった。

「……そうですか……父さんと母さんが……」

もう両親の記憶はかなりうる覚えですが……グスッ」

俺は泣いているエヴァを抱きしめ頭を撫でる。

「城の中で……霊体になっていた父さんと母さんに会ったんだ。父さんが言ってたよ……お前が信じた道を行って……」

母さんは、俺たちが元気に生きていたらそれだけで良いって……ゴメンな……両親の最後にお前を連れて行ってあげられなくて」

「ううん……いいんです。

兄様は危ない状況になるから連れて行かなかったんですよね？

なら、私は兄様に怒る権利はありません……」

ちよっと哀しいけど……少ししたら大丈夫です……」

少しの間、俺はエヴァを慰めて時間をすごした。

……
……
……

少し時間が経った後、落ち着いたエヴァは問いかけてきた。

「兄様、ちよつと質問が…」

幻獣を召喚って何です？」

「そうだな…それも含めて少し俺の事を説明しておこう…」

俺には、いわゆる前世と言われている記憶があるんだ。

前世で俺は一度死んでね。その時、その神と契約したんだ…

約束を守る代わりに力をくれたな。

でもその力を封印されていてね…真祖になった時に封印が解けたんだ。

神にもらった力というのはね、

神話に出てくる武器を取り出す事が出来る王の財宝、ゲート・オブ・バビロン

幻獣と呼ばれるものたちを操れる幻獣召喚、

あとサービスで戦闘技術の基礎と魔法の知識をくれたんだ。

じゃあ実際に幻獣を呼び出してみせるぞ…

我の呼び掛けに応えよ、獣霊召喚！ 来い！『カーバンクル』

2！」

わかりやすいようにカーバンクルを呼び出す。

「やあ、ご主人。呼ばれたから来たよ」

「……………か…かわいい!!」

エヴァがカーバンクルを気に入ったらしく、ギュッと抱きしめた。

「ぐええ！　ぐ…ぐるぢ…」

「かわいー！　ねえ兄様！　この子ちょうだい！」

「……………気に入ってもらえて何よりだ……………」

そんなこんなではのぼのした時を過ごしていたらイフリートから念話が来た。

「マスター　魔法使いと思しき者が接近中。　その数10」

「了解した。　俺が迎撃に出るからお前はそのまま護衛を続けてくれ」

“御意”

「エヴァ。　ちょっとヤボ用が出来たから外にいつてくるぞ」

そう言うとエヴァが少し顔をくもらせ、

「またこの前みたいなの？」

と聞いてきた。

「…ああ、そうだ」

「私たちが彼らに何をしたっていうんだろ…
なんで私たちを狙ってくるんだろ…」

「（俺はちょっとヤンチャしちゃったけど…）」

人間って言うのは、自分と違うというだけで敵と認識するからな…
こればかりは仕方がない…

だが、降り掛かる火の粉は払うぞ」

「…そうですね… 私たちは、吸血鬼…ですから……」
「……………」

俺は何も言えなくなり、そのまま迎撃に向かった。

「森の中」

く夕方く

【魔法使い s side】

「ここら辺にいるはずなんだがな…」

「おい！ ホントにあの賞金首がいるんだろうな！？」

「落ち着け… うるさくすると向こうに気付かれるぞ」

「しっかし… 賞金200万ドルか… もらったら何に使おうかねえ」

「おいおい！ もう倒した気になってんじゃないよ」

「…誰が200万ドルだって？」

s i d e o u t

【メフィストside】

ダイオラマ魔法球から出た俺はオーデインを出して魔法使い共に挑むことにした。

「私の呼び掛けに応えよ、英霊召喚！ 来い！『オーデイン』」
3

「呼んだか？ 主殿」

「ああ…この先にザコの魔法使い共が10人いるんだ…
オーデイン…お前の斬鉄剣の切れ味、見せてくれないか？」

「カツカツカ！ ワシを試すと言うのか！？」

「いいじやろう…ワシの斬撃、刮目して見よ！」

「ああ！ 期待してるぜ！」

ただ俺が合図をしてからやってくれ。 戦う前に少し聞きたい事があるんでな」

さて、今回はどんなレベルかな……

……

……

…

魔法使い共の会話が聞こえてくる…どうやら俺に賞金200万ドルがかかっているらしい…

さてと、いっちょパーティパーティと行きますか！

「…誰が200万ドルだつて？」

「な！ 誰だ！？」「メフィスト・マクダウエルか？」「ちっバ
レちまったか…」

「俺がメフィストだ。 もう一度聞くぞ…」

「…誰が200万ドルだつて？」

「てめえの事だよ！ 昨日にいきなりの200万ドルだ！
何をしたか知らないが俺たちに黙って狩られるお！」

魔法使い共がみんなやる気を出して魔法を撃ってきた。

「」「魔法の射手 連弾・火の60矢」「」「紅き焰」「
「白き雷」「雷の暴風」「

…ふむ、200万ドルか…城を消滅させたのを誰かに見られたかね
…てかこいつら弱すぎ…

魔法の威力の無さに呆れながらも俺は障壁を展開し、全て防ぐ。

「…弱い…弱すぎる…」

こんな力量でよく俺に挑んできたな…

オーデイン、約束通りお前の力を見せてくれ！

だが一つだけ命令を追加だ。

あそこにいるザコー人だけ生き残らせてくれ。

残りは殲滅しろ」

「了解した、主殿。

ゆくぞ！ スレイプニル！」

オーディンは馬を走らせて魔法使い共に近づき、

「くられ…『斬鉄剣』！」

障壁の上から一人以外、全て上半身と下半身に永遠の別れを告げさせた。

残されたザコはあまりの惨劇に腰を抜かせて怯えている。

「さすがだ、オーディン。」

斬鉄剣の威力、確かに見せてもらった。

これからも俺に従ってくれないか？」

「無論だ、主殿よ。」

ワシは主殿の敵を斬り裂く剣となることを誓うぞ」

「ああ、よろしくな、オーディン！」

オーディンとの会話を切り上げ、俺は生き残ったザコに考えていた事を実行する。

「さて、お前にはある仕事を頼みたいんだが…」

逃げようとしたら…その命、刹那に散ると思え…」

わかったか？」

「はい」

「よろしい。」

では仕事の内容なんだが…」

まず、あそこにいる騎士はなんなのかわかるか？

わかるならはい、わからないならいいえと答える」

「い、いいえ」

「まあ当然だな…」

あれはな、俺が使役している幻獣と呼ばれるものだ。

一種の使い魔だと思ってくれている…

そこでお前には、俺の名前と幻獣を操る事を魔法使い・賞金稼ぎ共、

合わせて100人ぐらいに広める。

わかったか？」

「…はい」

ザコは100人という数字を聞いてやる気を削いでいる様だったが、ここは名を広めるためにも確実に実行させるよう脅しておかないとな。

「ああ、そうそう。

約束をやぶろうとは思わないことだ…

半年間の期限をやる。

それまでに達成できなければ即座にお前の首が飛ぶように呪いを掛けた。

俺のことをどうやって紹介するかはお前に任せる。

なぐに、たったの半年だけ行動が縛られるだけでこの場から生き残れるんだぞ…

命と比べたら安いもんだと思わないか？

この話を受けて生きたいならはいと、受けないで死ぬと言っなら

いいえと答える」

「はい！」

まあ実際はそんな呪いなんて掛けてないけどね。
ここまで言うておけば必ず実行するだろう。

「よろしい。じゃあ後は任せたぞ。

そうだ！

もう一回俺たちの前に現れるようなら問答無用で肉片に変えるかな。

その辺をよく考えておけ…じゃあな…」

最後に軽く脅して、俺はオーディンと共にこの場から離れて行く。
これで少し危険な目に会うかもしれないが、実戦という修行ができそうだな。

それに…くくくっ　どんな異名がつくか楽しみだな。

「ただいま」

「おかえりなさい、兄様」

「なあ、エヴァ。

さっき幻獣のことは話したろ？

その幻獣がまだこの世界のどこかにいるらしいんだ。

そこで俺はそいつらを探しに旅に出ようと思ってるんだが……

「エヴァも一緒に来てくれないか？」

「…旅ですか…
もちろん付いて行きますよ、兄様」

「ありがとな。　まず行くのは、インドだ」

「あの……兄様……」

旅の途中によろしければ…私に魔法を教えてくださいませんか？」

「ん？　いいぜ！

俺の次に最強の魔法使いに育ててやるよ！」

数日後、俺は城を消滅させたこと・魔法使い共を消したことも相まって、

賞金は400万ドルに上がり、「幻獣使い」「災厄の邪神」「破滅の伝導者」などの二つ名で呼ばれ始めた…

第陸話 『永久に続かない休み』（後書き）

今回の矛盾点の説明を少し…

エヴァを第一に考えているメフィストは、エヴァに危険が及びそうな事態には

絶対にしません。

ですが、今回のように幻獣のことを喋らないと「幻獣使い」と呼ばれない状況
になりかねませんでした。

ですので、ちょっと矛盾した部分を疑問に思うかもしれませんが、
納得してく
れると幸いです。

1 エルキドゥ 天の鎖

ランク：B

種別：対神宝具

レンジ：1～20

最大補足：10人

神を律する黄金の鎖。

数少ない「対神宝具」のひとつで、相手の神性が高い相手ほど制約・
拘束力が高まる。

しかし、いくら縛り上げたところで相手を無力化できるわけではな
い。ちなみに神性を持たないものにとっては少々頑丈な鎖。

鎖を分割して展開すれば最大で10人。だが拘束力は落ちる。

2 カーバンクル

クラス：獣霊

身長：1 m

属性：風

ランク：B

筋力：C 魔力：A

耐久：C 幸運：B

敏捷：B 宝具：-

モデルはFFV（わからない人は前話と同じく自分が知っている姿形を…）

姿形は、身体が緑・姿は耳が長いキツネで額に真つ赤な宝石が埋め込まれている小動物。

攻撃はしません リフレクのみです。

必殺（？）技：ルビーの光

味方全員にリフレク（魔法を受け止め、跳ね返すバリア）を張る。
一度に最大で20人まで。

跳ね返せるレベルは、ラカン強さ表で8000ぐらいまで（ネギが闇の魔法習得時、2200）。

3 オーデイン

クラス：英霊

身長：人3 m 馬2 m

属性：無

ランク：A

筋力：A 魔力：B

耐久：A 幸運：B

敏捷：A 宝具：B

モデルは、ストーリーはFFIV・見た目はFFVです（わからない人は（ry）

姿形は、白馬に跨っている甲冑を着た騎士。

ストーリーは、FFIVの設定がわりと好きなので話の基にしました。

それとカーバンクルをどうやって出そうか迷っていたんですが、案がないならいっそのこと

一緒に出してしまおうと考え、父↓オーディン・母↓カーバンクルとしました。

攻撃パターンは、剣で斬る・グングニル（オーディンの宝具）で刺す・馬（名前：スレイプニル）で蹴る・斬鉄剣。

必殺技：斬鉄剣

鉄をも斬り裂く必殺の剣。

その斬れ味はそこらへんの魔法使いの障壁を余裕で斬り裂く。斬れるレベルは、ラカン強さ表で2000ぐらい。

第漆話 『卑劣なる畏 新たなる決意』（前書き）

前話のつけがはね返ってきます。

でも相変わらずのチートで退けるメフィストをご覧ください。

第漆話 『卑劣なる農 新たなる決意』

俺は次の幻獣をゲットするためにインドに向かってエヴァと共に旅をしていた。

今回の話はそんな道中に村によった時のお話だ…

「とある町」

いつまでも同じ服でいる訳にはいかないと思った俺は、エヴァに太陽光を遮る結界と、エヴァと自分に簡単な変装術を掛けて近くの街に寄り、色々
と買い物をして来た。

「わぁ！ 兄様、久しぶりの街ですね！」

「そうだな」 エヴァ、金は出すから好きなものを買っていいぞ」

久しぶりの買い物でテンションが上がっているエヴァ。
天敵の日光も防いでいるので更に上機嫌になっている。

「ありがとございます、兄様」

「いいってことよ。今日はのんびり買い物と行くとするかね」

のんびりと会話をしつつ、俺達は街の中へと入っていった…

………

………

…

【メフィストside】

俺達は、服・保存食（この時代にあんの？ってツコミは無しの方
向で…）・エヴァが気に入った
人形等を買って王の財宝にしまっていく。
ゲート・オブ・バビロン

そんな風にエヴァと買い物を楽しんでいたら、人ごみの中に入っ
てしばらくするとエヴァと
はぐれてしまったことに気付いた。

ちっ！ まずいな……

まだエヴァは簡単な呪文しか覚えていない。

そんな状態で魔法使い共に見つかる厄介なことになっちまうな。

こんなことなら気配察知のやり方を覚えておくんだった。

こんな街中じゃ幻獣呼ぶ訳にもいかないしな。

そんな考え事をしているときに6歳ぐらいの男の子が俺に声を掛け
て来た。

「ねえねえ、お兄さん。」

あつちのほうでお兄さんと同じようなマントをした金髪の女の子が倒れていたけど、

お兄さんの知り合い？」

「！？……その子はどこにいるんだ？」

俺は突然声を掛けられ、考えていた内容と一致する答えを不審に思いついながらも少年に問う。

「あつちだよ。ついてきて」

そう言い残し男の子は走り出す。

「あつ！おい！ 待て！」

俺は用心しながらも少年のあとを追っていった。

side out

【エヴァ side】

マズい……

エヴァの心の中は焦りと緊張で切羽詰まっていた。

早く兄様と合流しなくちゃ……兄様、どこにいるの？……

……兄様あ……私、一人だと不安だよお……

そんなことを考えているとき、

「ポンッ」ビクウッ!!

肩を叩かれたのでかなり驚いてしまった。

「あつ ごめん。 驚かせるつもりじゃなかったんだ…

向こうの方で君と同じマントを着た人が女の子を探していてね。
ひょっとして君のことじゃないかい？」

！ 兄様だ！

兄の居場所が分かって興奮を隠せないエヴァ。

「その人はどこにいるんですか!？」

「おっ 予想的中だね。

こっちだよ、ついてきてね」

青年は本来、メフィストがいる方向と逆の方向にエヴァを連れていく。

そして大分離れるといきなり頭に衝撃が来てエヴァは意識を失ってしまった。

………にい……さま………

s i d e o u t

【メフィストside】

少年のあとを追って俺は街の郊外にまで来ていた。

そしてそこには……50人ほどの魔法使いが待っていた……

「……こいつは一体どういうことだ？」

「その子に暗示をかけて君を連れてきてもらったんだよ……幻獣使
い」

「君、お役目ごころう……街に戻りな」

「ハイ わかりました」

素直に答えを教えてくれるが、俺を取り囲むように魔法使い共が広がっていく。

俺をここまで連れてきた少年はまだ暗示に掛かっているらしく、魔法使いの言葉に

従って街まで戻っていった。

子供が街に戻るのを見届けると、俺を取り囲んでいた魔法使い共が、

「ファンタズマゴリア 幻想空間発動、『無限の奈落』！！」「」「」「」

どうやら準備していたらしき結界魔法を発動させる。

俺はたいして抵抗せずに結界に囚われた……

〔結界内〕

気が付くと俺はレーベンスシュルト城の中にいた。

「さて……ファンタズマゴリア 幻想空間に取り込まれるのは初体験だからな。
今のうちに対処法を考えておかないと……
とりあえず城の中を散策するか」

しばらく散策していると、いきなり背後から剣で貫かれる。

「ぐあ！ いきなりだな！」

身体を修復しつつ振りかえるとそこには幼少の頃に世話になった侍女がいた。

「どういうことだ？」

まさかこの結果は俺の知っている人物が攻撃してくるのか？」

“その通りだよ。よくわかったね”

魔法使いの声が空間の中に響く。

「ハッ！」

うすぎたねえお前らにはお似合いの幻想空間ファンタズマゴリアだな！
ここで死ぬ〃精神の死〃という訳か？」

“正解だ。そういう訳で死んでもらうよ”

マジかよ……簡単に答えを教えるなんてこいつらバカだな。
もうちよつと情報を聞き出してみるか……

「待て。一つだけ質問したいんだがいいか？」
“ふむ。何かな？”

「なぜ俺が賞金首だとわかった？

一応、俺自身に幻術をかけてあったのだが…」

“それは簡単さ。仲間の中に幻術が得意な人がいてね。

すぐに見破ってくれたんだ。

ついでに言う君の妹に軽い幻術をかけて君から引き離れたんだよ。

もう質問はいいかな？　じゃあ死んでくれ”

くくくつ　ホントこいつらバカだな…

問答無用で俺を攻撃すればよかったのにそれをしない。
優位な立場になるとすぐ慢心するのはただのクズだな。

男の言葉が終わると共に侍女が何人か手に剣を持ち斬りかかってくる。

「出る！　エクスカリバー！」

俺はエクスカリバーを王の財宝から出して迎撃し、

数合打ちあった後、侍女を斬り伏せる。

だが、そのあとすぐに起き上がり斬りかかってきた。

「ちっ　面倒な空間だな…うざつてえ！」

斬り伏せつつもどんどん俺を攻撃する人数が増えてくる。

中には殺した人や、父さん、母さん、そして…エヴァの姿もあった。
手に剣、槍、ナイフ等、様々な刃物をもって襲い掛かってくる。

「これは…思いのほか心にくるな……
だが！」

俺はエヴァを守るためにここで死ぬ訳にはいかないんだ！」

俺は大きく距離をとり……

「約束された——
エクス

眼前の敵に狙いを定めて……

——
カリバー勝利の剣！！」

エクスカリバーの真名解放をした。

魔力で生成された光が奴らを襲う。

だが、細切れになっても肉片が集まりだし、また襲いかかってくる。

「……いくらなんでも悪趣味すぎるだろ……」

子供ならトラウマだぞ、おい……」

俺は悪態をつきつつもエクスカリバーをしまい、

「目覚めろ、乖離剣——
エア1」

……これで結界をやぶれなかったら打つ手なしだな……

「いざ仰げ——
エヌマ・エリシュ天地乖離す開闢の星——1を！！」

俺は空に向かって天地乖離す開闢の星を繰り出す！

エア乖離剣から繰り出される魔力でできた紅い渦が、視認できないこの結界の壁とぶつか

り合い、どんどん裂け目を作り上げていく。
そして、亀裂が結界に走り、幻想空間を壊した。

「なっ！ バカな！」「この結界をやぶるとはバケモノか！？」

この幻想空間に絶対の自信を持っていたんだろうか？
結界を破られて慌て始める魔法使い共。

…ラカンでも出来たんだ。

そのラカンをはるかに超えている俺が出来ない訳ないだろうが…

「さてと、
無事に結界から出てみたわけだが……貴様ら、死ぬ覚悟は出来るか？」

「ヒイイイ！」「た、助けてくれ……」「死にたくない……死にたくないよお……」

ここまで派手にやったのに、いざ自分の身が危なくなると命乞い。
所詮は三下か。

「なんともまあ、情けない奴らだな。

そんなんでこの俺に挑んでくるとは……もはやゴミだな。

DUST TO DUST “チリはチリに”

チリにすぎない貴様らは……チリに還れ！

天地乖離す開闢の星！！」

俺は天地乖離す開闢の星を敵がいる範囲まで狭めて放つ。
攻撃された魔法使い共は跡形もなく消し飛んでいた。

「急ごう…エヴァを探しに行かねば…」

side out

【エヴァ side】

……頭……イタイ……

…私…どうしちゃったんだっけ……

「…ん…ん…ここは？」

気がつくとは私は、木の柱に鎖で縛られ広場らしきところで大勢の人物に囲まれている。

そして、

「『殺せ！殺せ！』『死ね！この魔女が！』『これ以上災いを持つてくるな！』」

そんな声がそこら中から聞こえてきた。

ヒイ！ 何！？ なんなの！？

一体どうしてこんなことになったの！？

「混乱していますね。

特別に今あなたが置かれている状況を教えて差し上げましょう。

あなたを気絶させたあと、街の皆さんにあなたを「魔女」として紹介してあげたのですよ。

そして私は神父ですからここで魔女裁判をしてあげました。

光栄に思いなさい」

声が聞こえたほうを見ると、さつき私に兄様のことを教えてくれた人がいた。

な……んで？ さつきの話は…ウソなの？

「……さつきの話はウソだったのですか？」

「そうですよ。」

メフィスト・マクダウェルを討伐するのにあなたを使わさせてもらいました」

私は自分を利用して兄様を罠にはめたと聞いて激しい憤りを感じた。

「酷い！ どうしてこんな事をするんですか！？」

「これも神のお導きです。」

今、この街では不幸が続いてしまてね。

このままだといずれ誰かが生贄にされてしまう…

だが街の住民を差し出す訳にはいきません。

そんなときにあなたたちがこの街にやってきましてね。

丁度いいので生贄に選ばせてもらいました」

…ちょうど…いい？

私は都合がいいだけで捕えられたというの？

……憎い…憎たらしい……

目の前にいる男が、今声を張り上げている男が、金切り声をあげて
る女が憎い！

私はこんな鎖を引きちぎろうとするが、兄様にかけてもらった結果
が解けてしまっていた

ため日光を浴びてしまい、力が入らなかった。

ちくしょうっ！

私は兄様の足手まといになってしまふのか！？

…力が…力が欲しい！

世界中が敵に回っても打倒できるだけの力が欲しい！

「さて、集まってくれた皆さん！

ここにいる魔女はこの街に不幸を届けて来たのは知っていますね
！？

では何故この魔女は我らに不幸を届けて来たのか！？

それはこの魔女は悪魔に魅入られて、だれかれかまわず不幸にしているのです！

そこで私は炎によって、悪魔に汚されたこの女の魂を浄化しよう
と思います皆さ

んは賛成してくれますか！？」

「殺せ！」「早く殺して！」「不幸を無くせ！」

この男の言葉に便乗し、私に向かって怨嗟の声を掛ける愚民どもを
睨みつける。

だが、私の外見は10歳。

いくら睨んでも怯えたりするような人はいなかった。

「皆の気持ちはよくわかりました！

では浄化の儀式を始めたいと思います！

おい、罪人の足下に藁を置け！」

神父の合図とともに数人の神父が私の足下に藁を大量に設置している。
く。

ああ…私は今から火で焼かれるのか…
でも私って不老不死だから死なないのかな…
兄様…助けて！

考え事をしているうちに藁の設置も終わり、神父が火をかけてきた。
そして、藁に移った火が私のことを焼こうとした時、

「ゴメン、エヴァ。遅くなった…」

兄様が私を抱きかかえていた。

side out

【メフィストside】

俺はエヴァを探すため、この街で一番高い建物の上に行き千里眼を
発動する。

そしてエヴァを見つけるため街中を見渡した。

……どこだ……どこにいる……

…ん？ なんだあそこ……人がたくさん集まっているな…

！！ 中央にエヴァが柱に縛られているじゃないか！？

まさか…これは、魔女狩りの光景なのか！？

これはマズい！ なにやら藁をエヴァの足下に置き始めている！

ゲート
転移魔法発動！ 対象・エヴァンジェリン！

俺は自分の影に沈んでいった…

………

………

…

ズズズズズ

俺はエヴァの影から出てすぐ、エヴァを縛っている鎖を断ち切り抱きかかえた。

「ゴメン、エヴァ。遅くなった…」

「………に………にい………さま？」

突然登場してエヴァを助け出した俺に周りの騒音が止む。

「むっ 誰だ、貴様は？」

「ああ、そうだよ。どこか怪我はないか？」

「えつと、えつと……… その、頭が………」

なにやら騒がしいが無視だ無視。

今は全てにおいてエヴァが最優先事項だ。

「おい！ この私を無視するとはいい度胸だな！」

「む、少し血が出ているな…」

傷になるといかん、出てこいケルキオン 2」

俺は王の財宝から医称なる双蛇の杖を取り出す。

ゲート・オブ・バビロン ケルキオン

「この者の怪我を治せ、ケルキオン 医称なる双蛇の杖」

「おい、貴様！　いつまでもこの私をm「少し黙ってる！」は、はいいい」

この俺に対して喚き散らす男に向けて殺気を込めた視線を向けて黙らせた。

そしてオーデインを召喚する。

「出てこい、オーデイン」

「何事ですか、主殿？」

「エヴァを連れてこの街から全力で離れてくれ。

離れるまで何秒かかる？」

「ふむ…ざっと10秒ほどじゃな」

「わかった。ではこの杖を持ってこの場から離脱しろ。

この杖をエヴァから離さないようにしてくれよ。

この街から抜けたら木陰に居てくれ。あとで合流する」

「承知」

オーデインにケルキオン医称なる双蛇の杖を渡して、ここから離れるように指示する。

さて、あとはここにいる有象無象どもに天誅を下そうか……いや、この場合は“人誅”か。

なににせよ……俺のエヴァを傷つける者は消す！

「さて、その神父…

なんで？とかどうして？とかは聞かん。

貴様はエヴァに危害を加えた…

それだけで貴様を断罪する理由には十分だ！」

「ガッ！」

言い終わらない内に俺は神父の顎を蹴り上げ、空に舞わせる。
そして飛び上がって近づきまたも蹴り、飛ばした先へ虚空瞬動で先回りしまたも蹴り上げる。

「いいか…この蹴りはエヴァのぶんだ…」

顔面のどこかの骨がへし折れたようだが、それはエヴァがお前の顔をへし折ったと思え…

そしてこれもエヴァのぶんだ！」

「ぐはっ！　ゴホッ！　ぐえ！　ちょ、まゝ！　ゲバァ！」

「そして次のもエヴァのぶんだ…　その次の次のも…　その次の次の次のも…」

「その次の次の次の次のも…　次の！　次も！　エヴァのぶんだああーッ！！」

これも！　これも！　これも！　これも！　これも！　これも！
これもお！！」

最後の掛け声と共に神父の頭（もはや原形を留めていないが）に全力の踵落としをお見舞いする。

すると神父の身体は頭から足の先まで地面にめり込んだ。

さらに俺は浮遊術で空中に浮きながら言い放つ。

「ふん…雑種風情が…」

我のヱヴァに傷つけようなどと1万年早いわ！

さて、この街も我が判決を下そう…

判決は死刑だ！

サタム・サタディア・サタナキア！

逆巻け夏の嵐 彼の者等に竜巻く牢獄を！

『風花旋風風牢壁』！！』

詠唱とともに魔力で出来た竜巻が街を包み込む。

元々この呪文の範囲は5m程度だが、展開範囲は気合いで街を囲うほどまで広げた。

「これでもう誰も逃がしはしない…

サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 高殿の王！ 来れ 巨神を滅ぼす燃え立つ
雷霆！

百重千重と重なりて 走れよ稲妻！

行くぞ、エア！ 天地乖離す開闢の星！！
（エヌマ・エリシュ）

続いて、『千の雷』！！』

乖離剣から放たれる紅く巨大な竜巻に「千の雷」を纏わせて上空から街に向かつて攻撃する。

攻撃を受けた街は、片っ端から蹂躪され廃墟に変わっていく。

この街に住んでいた人は皆、この広場に集まっていたので例外なく攻撃に巻き込まれていった。

そして、街を囲っていた竜巻が消えるとそこには街が消え失せ、巨大なクレーターに変わっていた。

「またやっちゃった…

こんなことを続けたらいつか俺も殺されるな。

俺に対する怨嗟の声は背負うとしよう。

いつの日か来る俺を討ち滅ぼす裁きの剣も受け入れよう。

だが…それまでは俺とエヴァに仇なす者たちは全て屠っていくぞ

…」

この日を境に、この街は地図上から消えた…

「街の近くの木陰」

俺は転移魔法でエヴァの影に転移した。

「ただいま、エヴァ。

まだどこか痛いところとかないか？」

医称ケルキオンなる双蛇の杖が効いていないとは思っていないが、万が一のことが

あってもいけないので一応エヴァに聞く。

「お帰りなさい、兄様。

兄様のおかげでもうすっかり大丈夫です。

あの…助けてくれてありがとうございました」

「言っただろ？ お前を全力で守るって。

オーデインもお疲れ様」

「何、あの程度の事はこのワシにはどうってことないわい」

「それでもだよ。じゃあそろそろ戻ってくれ。
ケルキオンも戻しておくか」

「承知した」

オーデインとケルキオンの魔力供給を切る。

するとエヴァが何やら硬い表情をして声を掛けてきた。

「あの、兄様：少し相談したいことがあるのですが…」
「ん？ なんだ？」

「最近、魔法の修行をつけてもらい簡単な魔法が使えるようになりました。

でもこの程度じゃ全然ダメなんです！

このままじゃ何時までたっても私は足手まといのままです。

だから、兄様！

私に本格的な魔法を：今日みたいな事態になっても一人で打ち破れるような力を

手に入れるために修行をつけてください！」

俺は突然の発言に戸惑いながらもエヴァに「悪の魔法使い」になる覚悟を問う。

「いいのか、エヴァ？

力を手にするということは、向かってくる敵を……最悪殺すことになるんだぞ？

お前に『悪の魔法使い』になる覚悟はあるか？」

俺の質問に気押される様子もなくエヴァは質問に答える。

「構いません。

私は、どんな怨みの声も背負います。

兄様と自分を守るためならどんな重荷も背負います」

俺は、俺と同じような覚悟をしたエヴァに少し感動した。

「…わかった。

エヴァの覚悟はよくわかった。

では明日から集中して修行をしよう。

幻獣集めはエヴァがある程度強くなってからだな」

「あ、ありがとうございます、兄様！」

「いいさ。

それにその内エヴァに修行をつけるつもりだったしな。

……それにしてもエヴァがそんなに考えているなんて感動しちゃったぞ」

言いながら俺はエヴァの頭をなでる……サラサラして撫で心地がいな〜

（……えへへ〜 兄様に頭撫でもらうと気持ちいいな〜／＼／＼）

「さて、それじゃそろそろ移動するか…出てこいヴィマーナ」

「あっ」

俺はエヴァから手を離しヴィマーナを出す。

「さて、これで移動するぞ、エヴァ……どうした？名残惜しそうな顔をして」

「い、いや…これは…その…」

どうしたんだ？エヴァのヤツ……

ああ！ そういう事か。

「ひゃわっ！ に、兄様！？」

俺は黙ってエヴァをお姫様だっこしてヴィマーナに乗って移動する。
そして舟の上であぐらをかき、その上にエヴァを乗っけて頭を撫で始めた。

「あっ」

「こうして欲しかったんだろ？」

「はううゝ えと、その……はい」

「ふふ、素直でよろしい」

俺はエヴァを愛でつつ、のんびりするよう提案する。

「移動時間は結構あるからのんびりしよゝぜ、エヴァ」

「そつえばどこに向かっているのですか？」

「ん？ ああ、言ってなかったな。

移動先はな、アフリカだ」

第漆話 『卑劣なる畏 新たなる決意』（後書き）

幻獣集めは中断して修行を開始します。
といつてもすぐに再開しますが……

メフィストはエヴァと違って、「女、子供は殺さない主義」を持ち合わせていません。
エヴァを傷つけるものはどんな相手だろうと容赦なく殺します。
まあ自分から進んで人を襲おうといった考えはありませんけどね。

1 乖離^{エア}剣

無銘にして最強の剣。

エアという名前はギルガメッシュがつけたもので、彼の持つ究極の切り札。

剣というより円柱状の刀身を持つ突撃槍のような形状。

真名解放

エヌマ・エリシュ

天地乖離^{エリシュ}す開闢の星

ランク：EX

種別：対界宝具

レンジ：1～99

最大補足：1000人

乖離^{エア}剣による空間切断。

圧縮され絡み合う風圧の断層は、擬似的な時空断層となって敵対する全てを粉碎する。

エクスカリバー
約束された勝利の剣と同等か、それ以上の出力を持つ“世界を切り裂いた”剣である。

2 ケルキオン 医称なる双蛇の杖

ランク：A

種別：対人宝具

レンジ：1～4

最大補足：1人

ギリシャ神話に出てくるヘルメースが持つ杖。

別名、ケーリュケイオン・カドウケウス。

蛇で飾られた一種の杖、2匹の蛇が巻きついた形、また頂部に翼がついているものも。

元々アポロン神のものだったというが、ヘルメースの作った豎琴と交換したのだという。

ヘルメースの神格から平和・医術・商業の象徴とされる。

真名解放すると、怪我の治療から呪いの解呪まで行えるようになる。治療が完了する時間は、数秒から数分。怪我の重さによって変動する。

オリジナル宝具について少し説明を…

名前、ランク、種別などはFate出典の宝具と変わりませんが、その後の説明文の所を。

まず最初の説明文は神話などで出てきた宝具の説明文で、空欄を空けて続いている説明文は作者が考えた能力となります。

第捌話 『今日はひたすらレベル上げ』 (前書き)

PV90000アクセス ユニーク100000アクセスありがとうございます！

正直な所、こんなに見てくれる人がいるなんて思っていないませんでした。

あいかわらず未熟者ですがどうぞこれからも生温かい目で見てやってください。

第捌話 『今日はひたすらレベル上げ』

今日はひたすら修行だ！

「アフリカ・どっかの山の中・ダイオラマ魔法球内」

×月○日

「さて、それじゃ修行を開始する。

まず覚えてもらうのは『魔法の射手』だ。

次に『氷爆』、『凍る大地』と徐々にランクアップしていくぞ」
「ハイ！」

——ネギまの世界の呪文はどうやって習得するのか作者が理解していないため修行風景は省きます——

×月 日

「よし、大分魔法を覚えて来たな。

それじゃ今日はイフリートと模擬戦だ。
出てこい。『イフリート』」

魔法陣よりイフリートが出てくる。

「御呼びですか、マスター？」

「ああ。エヴァと模擬戦をして鍛えてやってくれ」

「了解しました。よろしく願いします妹君」

「よろしくです、イフリート。」

私の事はエヴァでいいですよ」

「わかりました、エヴァ。では早速始めましょうか」

………

……

…

さて、俺も修行をするか」

転移魔法^{ゲート}なんだが、あれは物・人の影を通して移動するのは理解した。

そして転移範囲は術式によって決められているのかねえ…
軽くイジッてみるか…

………

……

…

やっべ(汗)

転移範囲は500km、どんな結界も相手にバレずに転移可能というかなりのチートになっち

まったよ…

そして一度行ったことのある場所の座標を術式に組み込んでおけばいつでも行けるようになったわ。

もはやルー。だな。

まあいつか♪

これで大分移動も楽になるし♪

まだエヴァは模擬戦やってるな

じゃあ俺は剣の修業をしているか…

スキル「戦闘技術の継承」だが、基本的な武器の扱いしか知識にないようだ。

武器をどう扱っていくかわからん俺はとりあえず基礎を繰り返して身体に覚え込ませることからやることにした。

月。日

エヴァは魔法を覚え大分強くなってきた。

今はオーディンを倒せるレベルになっている。

カーバングルのリフレクなんかすぐにぶち抜いた。

俺は気配察知を覚えて50kmまで気配を探れるようになった。
咸卦法まで使えるようになったしね。
そろそろ人形使いのスキルを覚えさせるか…

「おーい エヴァー」

「なんです？」

俺は修行をしているエヴァーを呼び付ける。
そしてスキルを身に付ける提案をした。

「そろそろ人形使いって保有スキルを持つてみないか？」

「人形使いですか…」

それはどういうスキルなのですか？」

おっと、説明するのを忘れてたな。

「人形を作って、魔法で出来た糸を使い操って戦うスキルだ」

「……わかりました。がんばってなってみせます！」

なにやらやる気を出しているエヴァー。

そっぴや最近は修行しかしてないな…

「おう、がんばれよ。」

そっぴや…修行もがんばっていたし人形使いを習得したら何かご褒美をあげよう」

「ご褒美ですか……まだ思いつかないので考えておきますね」

月□日

「にいさまへ 出来ましたよ！」

エヴァが手に人形を持って走り寄って来た……あの殺人^{キリング}人形を持
て…

「ケケケ 才前が御主人ノ兄貴力？」

「ああ、そうだよ。よろしくな。」

エヴァ、この子はもう名前を付けたのか？」

「ううん、まだだよ。」

よかつたら兄様に付けてほしいなって思ったから」

ふむ…俺に名前をね…もう名前は決まっているけどな。

「そうだな…チャチャゼロってのはどうだ？」

「チャチャゼロかぁ。なんかカッコいいね」

「気二人ツタゼ、旦那」

無事に人形使いのスキルを身に付けたことだし、ご褒美の事を聞いてみるか。

「なあ、エヴァ。」

「ご褒美は何か決めたか？」

ん？ なんかエヴァは少し動揺しているようだ。

「！！ その…ですね…えっと／／／

わ、私と仮契約を結んでくだひゃい／／／」

「ケケケツ 御主人ハマセテルナ」

！！　な！　可愛すぎるぞっ！

赤面しながら途中で嘔むなんて高等テクニックを使うとは…エヴァ、恐ろしい子…

「えっと…いいのか、俺で？」

「こういつちゃあなんだが…俺、兄だぞ？」

「構いません！　むしろうれしいですう…／／／」

うれしい事を言ってくれるじゃないか。

そこ！　シスコ言わない！

「わかった。　じゃあ仮契約するか」

「私が従者ということでもいいですか？」

「んゝ　いや、俺が従者になるよ。」

アーティファクトを見たいし、エヴァを守るのは俺の役目だからな。

（それにアーカードごっこもできるかもだし…）

カカカッ

俺はさくつと仮契約の魔法陣を書いて…

「んじゃ…いいか、エヴァ？」

「はう…き、きんちょーしてきました…

で、では…」

ちゅっ！

『バクティオー
仮契約』　！！

光とともにバクティオーカードが出て来る。

さて、試してみるか「アデアット」

なにやらエメラルドが埋め込まれている指輪が左手についた。
なにになに…アーティファクト「永界の指環」か…
えいかい

説明書を熟読中

なるほど…いろんな結界が張り放題という訳か。

「これからもよろしくな、エヴァマイマスター

……どうした？」

「えへへゝ キス……兄様とキスしちゃった／＼／」

よほど嬉しいのか、真っ赤になって照れているエヴァ。

「ああ、もう！ 可愛いぜこんちくしょう！」

「ひゃわ！ な、兄様！？」

いつも通りエヴァを抱きしめて愛でる俺。

「あうう… その、兄様…くるしいです…」

「おっと、ゴメンゴメン」

俺は慌ててエヴァを離す。

「あつ 離さなくてもいいのに………」

「ん？ なにか言ったか？」

「なっ！ なんでもありません！／＼／」

真っ赤になって否定しちゃって…可愛いなゝ 癒されるわゝ

「俺、忘レラレテイルヨナ…」

悪いチャチャゼロ…悪気はあるんだ。

○月 日

修行を始めて何ヶ月か経過し、どこから嗅ぎ付けたのか賞金稼ぎ共が度々現れる。

そしてこの頃にはエヴァはもう十分強くなっていたので、修行の成果を見るためにも時々エヴァにやらせていた。

そんなある日…

「兄様、少し相談があるんですが？」

「エヴァ、どうしたんだ？」

「その、最近私も戦っているじゃありませんか？」

それでその時、私は小さいからよく…なめられるって言うんでし
ようか？

そんな感じの空気を感じるんです…

どうしたらいいでしょうか？」

「ふゝむ（これは原作通りの口調に変える好機か…）」

そうだな、まず口調は強気に。そして敬語を使わない。

そしてどんな相手も格下、せめて同格程度だと思っようにしてみる」

「格下…ですか…」

「口調、口調。それに俺の事も名前でいいぞ」

俺の提案に四苦八苦しながらも試してみるエヴァ。

「えっと、えっと……こ、こうか？メフィスト」

「そうそう、そんな感じた。」

その調子で誇りある悪を目指そうぜ」

「誇りある悪？　なんだそれは？」

「誇りある悪というのは…」

自分の目的・欲望・理想のために他人の犠牲を厭わぬ者。

そして、いつの日か自らも同じ悪に滅ぼされることを覚悟する者だ」

「そうか…ふふ…誇りある悪か…」

なるほどな…今の私たちにはぴったりの言葉だな」

「だろ？」

よし、エヴァも大分強くなったしな。

そろそろ幻獣探しに戻るぞ」

「ああ、わかったよ。今度はどこにいくんだ？」

そっぴや何処から探そうと決めてたんだっけ？

まあいいや…近場で簡単そうな場所から探していこつと。

「これから向かうのはな……インドだ」

第捌話 『今日はひたすらレベル上げ』 (後書き)

台本書きは止めた方がいいと意見を貰ったので、今までの話を全部修正していきます。

修正の過程で少し変わるところや、付け加えるところもあるかもです。
読み返してくれると助かります。

パクティオカード紹介

従者名：メフィスト・マクダウエル

称号：最厄の吸血鬼

数字：XXIV(24)

色調：金(aurum)

徳性：節制(temperantia)

方位：西(occidens)

星辰性：彗星(cometes)

アーティファクト：永界の指環

「永界の指環」の紹介

形：エメラルドが埋め込まれている指環。発動すると左手に装着。

効果：結界生成

メフィストの全力ぐらいでしか壊れない強度の結界から、術者しか認識できない

ステルス性の結界まで幅広く生成する能力。

結界内にいるのならどんな手段を用いても脱出不可能。

展開範囲は最大、半径5 km。

第玖話 『雷獣＋氷霊＋海龍』 幻獣神（前書き）

話の内容はタイトルのまんまです。

今回はひたすらバトル・バトル・バトル・バトル。

ですのでエヴァを蔑ろにしてみました。が勘弁を…

第玖話 『雷獣＋氷霊＋海龍』 幻獣神』

俺達はインドの寺院を片っ端から探しまわっている。。

そんな時に「ジョセ寺院」という寺があることを知った俺はすぐさま向かった…

「インド・ジョセ寺院」

「さて、魔石も反応しているし…ここでアタリだな。

しかし…ジョセ寺院が実在するとは……

これぞ異世界って感じがするわ」

「何をブツクサ言ってるんだ？」

「いや…なんでもないぞ」

ただ単にご都合主義に呆れているだけだ」

「そ、そうか…詳しく聞いたら消されそうだからそこから辺でやめておこつ」

「そうだな…んじゃ、気を取り直して幻獣取りに行きますか！」

ジョセ寺院だし、出てくるのはアイツだろうな……

………

……

…

「ジョセ寺院・地下4階」

よし、この奥っぽいな…

ん？ 道中のダンジョンはどうしたって？

簡単な迷宮のことを書いたって面白くないじゃないか。

そんな事を考えつつ進んでいたら魔石の輝きだす。

ここか…「バキッ！」

石を砕くと近くの空間が裂け中から雷を纏った馬らしき奴がでてきた。

やはりイクシオンだったか。

「俺はイクシオン……お前が私を呼んだのか？」

「そうだ。俺はメフィストと言う」

「そうか、メフィストとやら…俺を従わしたければ倒してみせろ」

言い終わると同時に俺に向かって、イクシオンの角から刃の形をした雷が高速で向かってくる。

それを障壁で受けつつエヴァに離れるよう注意した。

「エヴァ…少し離れていてくれ。」

こいつは俺自身で倒さないと意味がない」

「…わかった。気をつけろよ」
「当然だ」

エヴァには申し訳ないが、こいつらは俺だけで倒さないと従ってくれなさそうだしな。

こいつの属性は雷……なら炎と氷で攻めるか。

「サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 炎の霸王！ 来たれ浄化の炎 燃え盛る大剣！——

「素直に詠唱させると思っているのか？」

俺は「燃える天空」の詠唱を始めるが隙を逃してくれるハズもなくイクシオンが雷の刃を大量に飛ばしてくる。

だが俺は攻撃を避けつつ詠唱を完了させた。

—— ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を死の塵に！

『燃える天空』！！』

俺は雷を避けつつ「燃える天空」をイクシオンに向けて放つ。だがイクシオンは素早くて、あっさり避けられてしまう。

「ちい！ 避けられたか…

ならば！ 出てこい、グングニル 1！」

俺は王の財宝からグングニルを取り出し、

ゲート・オブ・バビロン

「撃ち貫け！勝利を誓う必貫の聖槍！」
グングニル

真名解放をして向けて投げつける。

勝利を誓う必貫の聖槍はイクシオンに高速で飛来した。

イクシオンは慌てて回避行動を取ったが、いかんせん相手は“必ず当たる槍”。

そのまま追尾し後ろ足に刺さり手元に戻ってきた。

「くっ やるな」

「致命傷を避けるとはさすがだな」

だが、これで回避は出来ないはず！

サタム・サタディア・サタナキア！

来たれ氷霊 闇の精！ 闇を従え吹け 常夜の吹雪！

『闇の吹雪』！！』

「これは避けられないか… 『トールハンマー』」

機動力が減少した所に「闇の吹雪」を放つが、イクシオンから強力な雷が放出し俺の「闇の吹雪」を受け止める。

威力は均衡し場が膠着状態となった。

「これを受け止めるとは…」

だが！ これでは避けられまい！

敵を縛れ、幻想成る魔法の紐 2！』

だが動けない状況は俺にとって好機。

幻想成る魔法の紐をイクシオンの近くで展開し縛りあげる。

「くっ 動けん… なんだこれは？」

「その紐に縛られたらもはや脱出不可能だ。

おとなしくこれをくらいな！

サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 氷の女王！ 来れ とこしえのやみ えい
えんのひょうが！

全ての命ある者に等しき死を 其は安らき也！

『おわるせかい』 砕けろお！』

「おわるせかい」で周囲150フィート四方を凍らせて砕く。

イクシオンは逃げられず凍りつき悲鳴を上げる暇もなく砕け散った。

「ふう…少し疲れたな…

今までこんなに魔力を消費したことなかったしな
まあまだまだ余裕だけだな」

「もはや反則だな…

いいだろう…このイクシオン…

あなたを御主人とし仕えることとしよう…」

「ああ、よろしくな！イクシオン」

ふう、やっと契約完了か。

残りはあと3体…先は少しだけ長いな。

…

…

…

〔地上〕

「残りは氷の大地と水の神殿…

よっし まずは北極にでも行ってみるか！

エヴァ！ 行くぞ！」

「ちょ！ メフィスト！？

休みなしでこのまま幻獣を集めにいくのか！？」

「当然だ！ まだまだ余裕だしな！

ほらほら、さっさと乗った！」

ヴィマーナを取り出してさっさと北極に向かった。

〔北極〕

俺は咸卦法の出力を抑えて、エヴァは防寒の魔法を掛けて北極の中心で一番大きな氷の塊の上にいる。

「魔石が反応しているな…

どうやらここの下にありそうだ」

「どうやって行くんだ？

私が魔法で穴をあけようか？」

「いや、大丈夫だ。

少し試したい事もあるしな。

来い、レーヴァンティン 3」

「害なす獄炎の剣！」
レーヴァンティン

「はああああ！爆炎波！」

説明しよう！

爆炎波とは、レーヴァンティンを包む炎を気合いによって増幅させ前方に噴出する技なのだ！

レーヴァンティン
害なす獄炎の剣から出される炎によって、みるみる氷が溶けていき奥の方にひらけた場所が見えてきた。

「あそこっばいな…」

エヴァ。　すまないがここで待っていてくれないか？」

「ああ　わかった」

「じゃ、行ってくるわ！」

………

………

…

かなり距離があつたが無事に到着。

辿り着いた場所にはなにやら何かを祀っているような石像があつた。当然、魔石は反応を示す。

「おっ　ホントにここっばいな」

石を砕くと、前方の氷の床の下から3mぐらいの氷塊が出てきた。

そして氷塊が割れて中から身体が氷で出来た女性が出てくる。

「私の名はシヴァ。」

私の眠りを妨げたのはあなたですか？」

「そうだ、俺はメフィストと言う。」

眠っていたところを起こしたのは謝るが、俺に従ってくれないか？」

そんな事が起きるとは微塵にも思っていないが、一応聞いてみる。

「私に勝てば了承してもいいですよ」

まあ当然こうなるよな。

じゃあさっさとブツ倒しますか。

「その言葉、忘れるなよ…」

サタム・サタディア・サタナキア！

火の精霊100柱 集い来りて敵を射て！

魔法の射手 連弾・火の100矢！！」

比較的、詠唱速度の速い「魔法の射手」を火属性で詠唱し放つ。

魔法の矢がシヴァに向けて降り注ぐが…流石は幻想種。

難なく避けてこちらに先端が尖った氷塊を投げつけてくる…その数30。

「これは…魔法は間に合わんな…」

ゲイト・オブ・バビロン

王の財宝展開、射出」

空間に歪みができ、さまざまな宝具を氷塊に向けて放つ。

氷塊と宝具がぶつかりあい互いに威力を相殺する。

「こい！害なす獄炎の剣！」
レーヴァンティン

レーヴァンティン
俺は害なす獄炎の剣を出して縮地を使いシヴァに斬りかかる。

だがシヴァは氷で出来た剣で防ぐ。

レーヴァンティン
しかも器用に害なす獄炎の剣の炎で溶けだしたところを修復しながら……

「ちつ これではちが明かん……」

一度戻れ、レーヴァンティン。

出てこい、クラウ・ソラス 4」

このまま斬り合っても勝てるが、時間もないのでさっさと決めるためにクラウ・ソラスを取り出す。

「惑わせ！光放する不敗の剣！」
クラウ・ソラス

数時間、視力を奪う光を放つ光放する不敗の剣。
クラウ・ソラス

シヴァの眼が眩んでいるうちに剣を持っている手を切り落とした。

「目が……目があ……！」

「何故知ってる！？」

ゲフンゲフン、
レーヴァンティン
炎熱招来！害なす獄炎の剣！

はあああああ！ てえりやあああ！！」

シヴァが目を抑えてのたうち回っている隙に害なす獄炎の剣を取り
レーヴァンティン

出す。

そしてそのままシヴァの左肩から袈裟斬りに斬りつける。

斬ったところから発火して炎が全身に回りシヴァは燃え尽きた。

「お強いですね……いいでしょう。」

このシヴァ……これからはあなたを主とし、従うとします。

以後はご主人様とお呼びさせていただきますね」

「よろしくな、シヴァ！」

シヴァと無事に契約を交わして、俺は次の召喚獣を探しに行く。

「あとは水の神殿か……ぜんぜんわからん。

太平洋のそこでも探してみるか」

「太平洋の底」

俺はヴィマーナの周りに結界を展開して海底を散策している。

海中で何が起るか分からなかったからエヴァを北海道に置いてきた。

北極海のほうから南に向けてしらみつぶしに探していたら、ハワイのあたりで魔石が反応

を示しだした。

そこから色々な方角を散策してついに神殿らしき建物を見つける。

だが、神殿の入り口らしきところには頑丈そうな門がそびえ立ち行

く手を阻む。

壊そうにもここは深海。

結界を解除すれば潰される恐れがあるな。

どうしようかな……あれを使うか！

「こい、トライデント 5」

ポセイドンが使った槍を取り出す。

「水を操り足場を作れ、トライデント水操なる海神の槍」

トライデント
俺は水操なる海神の槍を使い、眼前の海水を操り門の前に水の無い場所を作りだす。

トライデント
そして水操なる海神の槍をそのまま置き、エクスカリバーを取り出して、

エクスカリバー
「約束された勝利の剣！！」

エクスカリバー
約束された勝利の剣でブチ壊す。
エクスカリバー
約束された勝利の剣の威力の前にはただの頑丈な門など塵にも等しい。

俺は門をくぐったあと宝具をしまい、奥に進んでいった。

………

………

…

「神殿・奥の広場」

神殿の中を進んでいくと開けた場所に出る。

そこには巨大な石板が置かれているだけで他にはなににも無かった。だが、魔石は反応している。

「ここか……なんか神聖な場所って感じだな」

魔石を砕くと、神殿の奥に飾られていた石板が砕けて奥から巨大な蛇らしき奴が出てきた。

「我が名はリヴァイアサン。

汝は何故ここに来た？」

「俺の名はメフィスト。

ここに来た理由は、お前を倒して召喚獣にするためだ」

「なるほどなるほど…

ならばその力…私に示してみろ！ 『タイダルウェイブ』！」

リヴァイアサンはいきなり攻撃をしかけてくる。

大量の水を吐き、かなりの速度で俺に襲い掛かってきた。

俺はそれを障壁で受け止めつつ、

「出る、ブリューナク 6」

ブリューナクを取り出す。

リヴァイアサンの弱点はどう考えても雷属性。

なら取るべき選択肢はただ一つ……圧倒的な雷属性の火力で討ち滅ぼす！

「敵を穿て！必勝を誓う雷撃の槍！」
ブリューナク

必勝を誓う雷撃の槍を遠隔自動操作に設定し攻撃命令を出す。
ブリューナク

「対象リヴァイアサン、ファイア！」

「ぐわああああああっ！」

必勝を誓う雷撃の槍から出る雷撃が幾度もリヴァイアサンを襲う。
ブリューナク

「この、クソがあー！」

雷撃を受けて怒ったリヴァイアサンが尻尾を振りまわし必勝を誓う
ブリューナク
雷撃の槍を叩き落とそうと

するが、自動回避も組み込んだのであるので難なくかわす。

リヴァイアサンが必勝を誓う雷撃の槍に気を取られているうちに「
ブリューナク
千の雷」の詠唱を開始。

「サタム・サタディア・サタナキア！」

契約に従い我に従え 高殿の王！ 来れ 巨神を滅ぼす燃え立つ

雷霆！

百重千重と重なりて 走れよ稲妻！

『千の雷』！！』」

「千の雷」+必勝を誓う雷撃の槍。
ブリューナク
かなりの雷撃がリヴァイアサンを襲い、確実に体力を削っていく。

「ぐ…やはり雷は効く…」

だが、まだ負ける訳にはいかない！ 『タイダルウェイブ』！』」

呪文を唱えた後、様子を見るためにブリューナクを手元に戻して距離を取ってしまったせ

いでリヴァイアサンの行動を許してしまう。

リヴァイアサンはタイダルウェイブを神殿の壁にぶつけて壁を壊した。

するとかなりの大穴が空いたらしく、勢いよく海水が流れ込んでくる。

「ちい、やってくれる。

左手に魔力……右手に気……合成！『咸卦法』発動！」

ギリギリで海水に吞まれる前に咸卦法を発動できた。

てかこれ耐圧もあるのか……ぶつけ本番で成功してよかったわ。

それにしてもリヴァイアサンはどこに行った？……そこか！

「ゲート・オブ・バビロン王の財宝展開、射出！」

多数の宝具を察知した場所に射出するも、あっさり避けられてしまう。

「こちらの居場所が分かるとは……だがこの条件なら当たりはしないぞ」

「なるほど……水中は奴の領域リヴァイアサンのという訳か……」

ちっ 厄介な展開になってきたな。

水中なら機動力が向上するって訳か。

どうやって倒そうか……

「その通り……このままでは汝に勝機は無いぞ……『タイダルウェイブ』！」

またもや大量の水を吐いてくるがさつきと同じように障壁で防ぐ。

「さつき防いだのを見てなかったのか？」「ビシビシ」……なに？
障壁が破れ始めているだ！？」

そうか！ 水中だから威力が上がっているという事か…面倒な…」

威力が上がっている「タイダルウェイブ」を受け止められずに壊れ始める障壁。

「アデアット！ 永界の指環！

防御結界発動…強度、最高レベル！」

障壁が破られるギリギリのタイミングでアーティファクトを呼び出し防御結界を展開する。

「これなら流石に破れないか…

よし、グングニルを使おう」

水中では、自分はまだ身動きが取れない。

逆に相手は機動力が上がっている。

こんな状況で取れる選択肢はかなり限られてしまう。

「撃ち貫け！勝利を誓う必貫の聖槍！」
グングニル

水中だろうと飛行速度は変わらず、確実にリヴァイアサンに突き刺さる。

「ぐあ！ な、なんだこれは？」

「どうやら機動力を奪うことには成功したな…
エルキドゥ
天の鎖よ！」

動きが止まった瞬間に天の鎖を展開し拘束する。
エルキドゥ

「こんな鎖なんぞ…
なに！？ この程度の鎖を破れないだ！？」

縛られたリヴァイアサンは抵抗するも天の鎖からは逃れられなかった。
エルキドゥ

「この鎖は神性があるヤツには天敵なんだよ。
さて、とどめだ。 出る、ヴァジュラ 7」

とどめを刺すためにヴァジュラを取り出し、必要以上に被害を出さないように結界を張る。

「さて、これで準備は万端。
ヴァジュラ
轟け、剛雷！ 雷霆穿つ金剛の槌！」

ヴァジュラ
雷霆穿つ金剛の槌から放出された無数の雷が海水を伝ってリヴァイアサンに放電する。
エルキドゥ
天の鎖で縛られている故に逃げ場はなく、俺は結界で防いでいるのでダメージはなかった。

「グギヤアアアアアアアア！」

感電したりヴァイアサンは真っ黒焦げになり消滅した。

「汝の力…確かに強いな…」

よかるう！

このリヴァイアサン、汝を主とし汝に従おうではないか！」

「そりやありがたい。よろしくな、リヴァイアサン！」

「うむ、これからは汝のことを主と呼ばせてもらうぞ」

ふう、少し疲れたな。

だが残りはあと一つ……

「ラストはエベレスト…バハムートか…
行く前にエヴァを回収しないとな」

「エベレスト・山頂」

「は、ついにバハムートとエンカウントか…
楽しみだな」

「おい、メフィスト…

ホントに休まなくて大丈夫なのか？」

バハムートとの戦闘を楽しみにしているとエヴァが心配してくれた。

「ん？ ダイジョブだって。

ありがとな、心配してくれて」

俺はエヴァの頭を撫でる。

「し、心配するに決まっているだろうが……／＼」

エヴァを愛でるのを止めるのは名残惜しいが、今日のラストバトルを繰り広げるために切り上げる。

「んじや行ってくるわ。」

エヴァはヴィマーナで少し離れていてくれ……結構激しい戦いになりそうだからな」

「ああ わかった……気をつけろよ」

「わかってるって。 エヴァこそちゃんと離れているよ」

さて、死合おうか。

………

………

…

エヴァを乗せたヴィマーナが十分距離を空けるのを確認したら魔石を砕く。

石を砕くと、上空から高速で巨大な何かが近づいてきて目の前の地面に激突し砂埃が舞う。

砂埃がやむと、そこには黒い甲殻に身を包んだ巨大な龍が立っていた。

「我はバハムート…
我を呼んだのは貴様か？」

「そうだ、俺はメフィスト。
お前を倒しに来た」

「ふん…人間風情が生意気な…
だがその意気やよし…見事、我を打ち倒してみせろ！」

言い終わらない内に、その巨体からは想像できないほどのスピードで接近してきて爪で斬り裂こうとしてくる。

それを俺は避けつつグングニルを出して、

「撃ち貫け！勝利を誓う必貫の聖槍！」
グングニル

グングニル
勝利を誓う必貫の聖槍を投げつける。
だがバハムートを覆う甲殻に弾かれてしまう。

「うはっ これを弾くのか…なんつう強度だよ…
ゲート・オブ・バビロン
王の財宝展開、射出」

一度距離を取るため宝具を射出してバハムートの動きを牽制する。
効くか分からないが「闇の吹雪」の詠唱を開始した。

「サタム・サタディア・サタナキア！
来たれ氷霊 闇の精！ 闇を従え吹け 常夜の吹雪！
『闇の吹雪』！！」

「闇の吹雪」を放つが、あっさりと避けられてしまう。

「ちっ これも避けられるか…ならば！」

サタム・サタディア・サタナキア！

氷の精霊500柱 集い来りて敵を射て！

魔法の射手 連弾・氷の500矢！！」

数多の「魔法の射手」がバハムートをめがけて降り注ぐが避けられる…だが、

「竜滅降臨！竜滅す最強の魔剣 ^{グラム} 8！」

俺はバハムートが避けた先に先回りし竜滅す最強の魔剣で斬りつける。^{グラム}

すると硬い甲殻なんぞ無かったように切り傷を作れた。

「むっ 我が傷を負うたと…」

「そりゃそうだ。この剣は竜にとって天敵の剣だからな。
まだまだいくぞ！」

俺はそのまま勢いを殺さずに連撃を放ちバハムートの体力を削っていく。

「これは少しナメすぎていたな…」

そう言うバハムートは高速で空に飛び上がった。
そして、

「我の最強の一撃…受けてみよ！
はあああああああ！『メガフレア』！！」

バハムートの口から大量の魔力が込められた青白い光弾が放たれるのを視認する。
威力はリヴァイアサンの比じゃないと感じて防御を固めることにした。

「こりゃあ…障壁だけじゃ無理だな…

アデアット！ 永界の指環！

防御結界発動…強度、最高レベル！」

最高強度の結界で防ぐが、防御力を上回り結界に亀裂が入っていく。

「うお これをも破りそうか…

熾天覆う――

結界があまりの威力に耐え切れず破られる。

――
熾天覆う
――
アイアス
七つの円環 9！

結界が壊れると同時に熾天覆う七つの円環を展開。

熾天覆う七つの円環とメガフレアがぶつかり合い、花卉が次々に破けていく。

「ぐう！ 4枚持っていかれたか…

サタム・サタディア・サタナキア！

風の精霊100柱 縛鎖となりて敵を捕らえよ！

魔法の射手 戒めの風矢！！」

「ぬっ こんな魔法の矢なんぞすぐに引きちぎってくれるわ！」

どうやら『メガフレア』を撃つとその後少しだけ硬直するようだった。

その隙を見逃さずに風属性の「魔法の射手」を詠唱。なんとか捉えることに成功した。

「魔法の射手」で捕縛され身動きが取れないバハムートが空中から落ちてくる。

落下しつつ拘束魔法を力技で破ろうとしているが、俺は追撃をかける。

「させるかあ！

サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 氷の女王！ 来れ とこしえのやみ えい
えんのひょうが！

全ての命ある者に等しき死を 其は安らき也！

『おわるせかい』 砕け散れえ！！』

「ぐおおおお！ まだ負けんわあ！

はあああああああああ！！」

絶対零度に近い温度で凍らされても驚くべきことにバハムートは少しづつ凍っている身体

を溶かしてメガフレアを撃とうとしていた。

「今度は正面から破ってやる！

目覚めろ！乖離^{エア}剣！」

俺は乖離剣に魔力を装填してメガフレアに備える。

そして…

「メガフレア！」

「エヌマ・エリシユ天地乖離す開闢の星！」

互いに最強の技でぶつかりあう人外の者達。

片や全てを焼き尽くす炎……片や世界を切り裂いた剣。
どちらが勝るかは明白である。

乖離剣より放たれた魔力の渦がメガフレアを切り裂き、そのままバハムートへと向かう。

そしてバハムートを覆っている頑丈な甲殻も難なく切り裂く。

攻撃をモロにくらったバハムートは塵となった。

「まさか我が負けるとはな…
よからう！メフィストよ、我の力を借りたくばいつでも呼び出す
がいい」

「ああ よろしくな、バハムート」

やっと終わったか……

流石に魔力を消費しすぎて少しバテたわ。
もう今日はゆっくり休もう。

こうして、俺の幻獣集めの旅は終わった。
これから大戦開始までエヴァと世界一周旅行にでも行くとするか…

第玖話 『雷獣＋氷霊＋海龍』幻獣神』（後書き）

今回はオリジナル宝具を多々だしてしまいました。
納得してくれると幸いです。

1 グングニル 勝利を誓う必貫の聖槍

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1～99

最大補足：1人

北欧神話に登場する伝説の武器。

オーディンが持つ槍で、この槍を投じると何者もかわすことができず、敵を貫いた後は

持ち手のもとに戻るという。

また、この槍を向けた軍勢には必ず勝利をもたらすともいわれている。

真名解放すると、敵に向かって投げつけると必ず当たり所有者に戻るようになる。

当たるだけで刺し穿つ死棘の槍のように「必ず心臓に当たる」という訳ではない。
ゲイ・ボルグ

2 グレイフニル 幻想成る魔法の紐

ランク：A

種別：対人宝具

レンジ：1～6

最大補足：1人

北欧神話に登場する魔法の紐。

フェンリルを捕縛するためにドワーフたちによって作られ、テュールによってフェンリルに繋がれた。

猫の足音、女の髭、岩の根、熊の腱、魚の息、鳥の唾液から作られた。

これらは、グレイプニルを作るのに使用されたため、この世に存在しなくなったといわれる。

グレイプニルに捕縛されると、自力では如何なる手段を使っても脱出することは不可能。

拘束されている最中は、魔法を行使できなくなる。

脱出するためには外部からの助けが必要。また所有者の意思によって拘束を解除できる。

3 レーヴァテイン 害なす獄炎の剣

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1～2

最大補足：1人

北欧神話に登場する武器。別名、レーヴァンティン・レーヴァンティン。

名前は「害なす魔の杖」の意。

自ら空中で動くことができ、太陽よりも強い輝きを放ち、その威力はいかなる者も抵抗できないという。

真名解放すると刀身が約5000の炎に包まれる。その状態で斬ると斬り口から発火して対象を焼き殺す。

他にも刀身の炎を直線上に飛ばしたり、盾として展開したりなどと応用できる。

4 クラウ・ソラス 光放する不敗の剣

ランク：B+

種別：対人宝具

レンジ：1～30

最大補足：50人

ケルト神話に登場するダーナ神族の王、銀の腕又アザの所有する剣。鞘から出れば周りの者の目を眩ます。

あるいは、相手は抵抗する事すら出来ずに二分される不敗の剣であると伝えられる。

真名解放して鞘から剣を抜くと、視力が数時間奪われるほどの光を放出。

視力が奪われる時間は、攻撃を受けた者の魔力抵抗値によって減少する。

単純ではあるが一对一の勝負ではかなり有効な宝具。

5 トライデント 水操なる海神の槍

ランク：A

種別：対軍宝具

レンジ：1～99

最大補足：100人

ギリシャ神話の海神ポセイドンの武器、三叉の槍。

ティタンの神々との戦いでクロノスを降したのち、キュクロプスよりトライデントを与えられた。

この武器はポセイドンの力の象徴でもあり、岩を裂き風を起こすこ

とができる。

また、トライデントには泉を湧かせる力もあり、愛するアミュモネが旱魃で苦しんでいる時、この戟で岩を突き刺せると三筋の泉が噴き出したという。

また、アテナイを巡ってアテナと争った時、アクロポリスの中央を打ちエレクトーイスという泉を湧き出させた。

真名解放すると、周囲にある水を自由自在に操ることが出来るようになる。

巨大な津波のように操ることが出来るし、反対に針のように鋭く、細くして操ることが可能。

海上でこの宝具を使えばかなり強力な宝具である。

また地面に突き刺し魔力を流すと、そこから魔力量に比例して水が湧き出す。

6 ブリューナク 必勝を誓う雷撃の槍

ランク：A

種別：対人宝具

レンジ：1～99

最大補足：5人

ケルト神話に登場しトゥアハ・デ・ダナーンの太陽神ルーが所持するとされている武器。

穂が5本に分かれており、5つの切っ先から放たれた光は一度に5人の敵を倒したと言われている。

その能力は「必ず勝利をもたらす」だとか、

「投げると稲妻となって敵を死に至らしめる灼熱の槍」などと言われ、

生きていて意思を持っており、自動的に敵に向かって飛んでいくと

も言われる。

真名解放すると、所有者の意思に従って空中を移動し敵をビームで攻撃する。

この時のビームの威力は「雷の暴風」程度。一度に5方向まで撃てる。

はやい話がファン。ル。 それもかなり強力な。

7 ヴァジュラ 雷霆穿つ金剛の槌

ランク：A

種別：対軍宝具

レンジ：1～99

最大補足：100人

インド、ヒンドゥー神話に出てくるインドラ神の武器。 別名、金こん剛杵こうし

稲妻のことで、象徴的に王笏とされることもある。

神々の名匠、トウヴァシュトリ神が作った。

武器としての形状は、棍棒状の槌、ハンマーの形状。

真名解放すると、雷を自在に生成・操作できるようになる。

作りだす雷の威力は千の雷以上。 視界に入る範囲まで雷を操作可能になる。

8 グラム 竜滅す最強の魔剣

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1～2

最大補足：1人

長さ 2 m の長剣で、シグムンドやその息子であるシグルズが扱った魔剣。

シグムンドが持っているときに一度砕かれるが、シグルズが鍛冶屋のレギンに修理させた。

レギンは、竜の姿をした魔人ファフニール（実はレギンの兄）を倒す為にシグルズに与える。

元々、斬れ味は高く対人にも使える剣。

だが竜の属性を持つものに対してはランクがAになり威力が増幅、竜相手に他の剣で傷一つつけなくてもこの剣ならば簡単に着ることがができる。

竜相手にこの剣で切り傷をつけるとそこからグラムが内包する竜殺しの魔力が侵入し身体を蝕み始める。

いわゆる竜限定の毒である。

9 ロー・アイアス 熾天覆う七つの円環

ランク：A

種別：結界宝具

防御対象：1人

投擲武器に対して無敵とされる盾。

光で出来た七枚の花弁が展開、一枚一枚が城壁と同等の防御力を持つ。

投擲武器に対しては非常に頑強である一方、通常武器に対しての防御力は示されていない。

第玖・伍話 『幻獣紹介』（前書き）

幻獣紹介です。

第玖・伍話 『幻獣紹介』

イフリート

クラス：炎の精霊

身長：5 m

属性：火

ランク：B +

筋力：A 魔力：A

耐久：B + 幸運：D

敏捷：B 宝具：-

モデルはFFX

姿形は、狼人の身体がこげ茶色で頭から1 mぐらいの角が後ろに伸びている。

攻撃パターンは殴る・蹴る・噛み砕く・地獄の火炎。

必殺技：地獄の火炎

目標が少ない場合は、目標を結界の中に閉じ込めそこで焼き尽くす。大多数の敵がいる場合は、自身が火を纏い敵の真ん中まで突っ込み周りを焼き尽くす。

半径50 mまで可能。

炎の熱はおそらく8000。

カーバンクル

クラス：獣霊

身長：1 m

属性：風

ランク：B

筋力：C 魔力：A

耐久：C 幸運：B

敏捷：B 宝具：-

モデルはFFV

姿形は、身体が緑・姿は耳が長いキツネで額に真つ赤な宝石が埋め込まれている小動物。

攻撃はしません リフレクのみです。

必殺(?) 技：ルビーの光

味方全員にリフレク(魔法を受け止め、跳ね返すバリア)を張る。

一度に最大で20人まで。

跳ね返せるレベルは、ラカン強さ表で8000ぐらいまで(ネギが闇の魔法習得時、2200)。

オーデイン

クラス：英霊

身長：人3 m 馬2 m

属性：無

ランク：A

筋力：A 魔力：B

耐久：A 幸運：B
敏捷：A 宝具：B

モデルは、ストーリーはFFIV・見た目はFFVです。

姿形は、白馬に跨っている甲冑を着た騎士と想像してください。

ストーリーは、FFIVの設定がわりと好きなので話の基にしました。

それとカーバンクルをどうやって出そうか迷っていたんですが、案がないならいっそのこと

一緒に出してしまおうと考え、父↓オーディン・母↓カーバンクルとしました。

攻撃パターンは、剣で斬る・グングニル（オーディンの宝具）で刺す・馬（名前：スレイプニル）で蹴る・斬鉄剣。

必殺技：斬鉄剣

鉄をも斬り裂く必殺の剣。

その斬れ味はそこらへんの魔法使いの障壁を余裕で斬り裂く。斬れるレベルは、ラカン強さ表で2000ぐらい。

イクシオン

クラス：雷の精霊

全長：10m

属性：雷

ランク：B+

筋力：B 魔力：A

耐久：B 幸運：C
敏捷：A 宝具：-

モデルはFFX てかXしか出てないしね…（FFXII RWに
でてるらしいけど作者はやった
ことないので知りません）

姿形は、真っ白な身体で頭に角を生やした馬。
攻撃パターンは、脚で蹴る・角で突く・トールハンマー。

必殺技：トールハンマー

角から対象に向けて雷を流して動けなくして空中に浮かせ、そこに
超強力な雷の塊をぶつ
けて感電させる。

電圧は10〜1000億V操ることができ、相手によって電圧を弱
くしたり強くしたりする。
最大補足数は100人。

シヴァ

クラス：氷の精霊

身長：2 m

属性：氷

ランク：B +

筋力：B 魔力：A
耐久：B 幸運：B
敏捷：B 宝具：-

モデルはFFX（見た目が良ければXIIIIでも良かったんだけど…タイヤがね…）

姿形は、氷の身体をした女性。

攻撃パターンは、殴る・蹴る・氷で作った剣で斬る・ダイヤモンドダスト

必殺技：ダイヤモンドダスト

対象を絶対零度で氷漬けにして粉々に砕く。

魔法で瞬時に絶対零度まで温度を持っていくので逃げる事が出来ない。

最大補足数は100人。

リヴァイアサン

クラス：海龍神

全長：40m

属性：水

ランク：A+

筋力：A+ 魔力：A（水中時 EX）

耐久：A 幸運：B

敏捷：A（水中時 EX） 宝具：-

モデルはFFXI（知らない人はいつも通り知っているのを…）

姿形は、竜のような顔に蛇のような身体、色は青。

攻撃パターンは、噛みつく・尻尾で叩く・タイダルウェイブ

必殺技：タイダルウェイブ

口から大量の水を放出し対象に当てる。
いかにせん量がはんぱなく多いため水圧もそれに比例して大きくなり、当たった物体は水で濡れるを通り越して削り取られると言ったところか。

最大補足数は1000人。

バハムート

クラス：幻獣神

全長：70m

属性：無

ランク：EX

筋力：EX 魔力：EX

耐久：EX 幸運：A

敏捷：A 宝具：-

モデルはFFV or VI（もはや→と同じく…）

姿形は、黒い甲殻に覆われ翼を持つ巨大な龍。

クラスの「幻獣神」はFFIVを参照。

攻撃パターンは、殴る・蹴る・尻尾で叩く・爪で斬り裂く・メガフレア。

必殺技：メガフレア

大気中のマナをかき集め、自身の魔力と合成して半径5mほどの青白い光弾を口内で生成。

その光弾を放つと、着弾したところから半径500mほど焼き尽くす。

威力は全幻獣内で最強を誇るが発動までにタイムラグが発生する。
だが超上空で発動すればその隙は無くなり、ノーリスクで発動できる。

最大補足数は3000人。

第玖・伍話 『幻獣紹介』（後書き）

土曜日は家を空けているので更新できません…
ですので次の更新は日曜日となります。

第拾話 『若き英雄 VS 幻獣使い』（前書き）

今話から魔法世界の話になります。

早く麻帆良に行きたいと常々思っている作者でした…

第拾話 『若き英雄 VS 幻獣使い』

ここで少し俺が持つ原作知識を説明しておこう。

転生して約500年。

その間にとくに知識の保存をしてないから、もうほとんど原作知識はない。

コスモエンテレケイア
だが完全なる世界については別だ。

あいつらと縁が出来てから俺は、魔法世界での大戦の事・アラルブラ紅き翼の事・完全なる世界等の

知っていた事を簡潔に紙にまとめて保存していた。

あとエヴァが呪われて賞金を消すこともね。

まとめたそれらを時々読み返していた。

少し悩んだが、大戦には介入することにする。

万が一……いや、億が一にも、俺を超えるヤツがいたら戦ってみたい
しな。

さて、では本編をどうぞ。

「1900年ごろ・アフリカ」

世界旅行を終えた俺達は暗黒大陸（今でいうアフリカ）でのんびり
過ごしていた。

アフリカで500年ほど隠居していた中で、エヴァは闇の魔法を編
み出して俺はそれを習得

し、俺は体術・剣術ともに達人の領域に届いていた。

ここだけの話、闇の魔法のことなんだが……本当は使えたんだよ。でも使ってそれをエヴァに教えちゃうと強くなれないと思って黙ってたんだ。

それで闇の魔法を開発したらそれを習得したように見せたんだわ。

アフリカでの生活は、ときどき賞金稼ぎが挑んでくるが、それ以外は割と穏やかだった。

賞金稼ぎを悉くフルボッコにしていた俺達は、この500年でかなりの異名で呼ばれていた。

「ダイク・エヴァンジェルの福音」「ドルマスターの福音」「マガ・ノスフェラトゥの福音」「マカの福音」「あ不死の魔法使い」「おとずれ悪しき音信」など、原作通りの異名だ。
俺はと言つと……

「なあエヴァ、俺の異名ってなんでこんなにあるんだ？」

俺のは、「幻獣使い」「災厄の邪神」「破滅の伝導者」等は最初の内から呼ばれていたが、

「剣帝」「再臨した悪魔」「闇の僭帝」「不敗戦鬼」「人類共通の敵」「人型生物兵器」などかなり増殖していた。

異名の数に伴い賞金の方もかなり上がっていた……

なんと3000万だ。初金額だが、どこぞの海賊王を目指している奴と同じになっちゃったよ。

ちなみにエヴァは600万だ。

「あれだけ賞金稼ぎ共を屠っていればそれぐらいになって当然だろうが……」

光景を思い出しているのか呆れているエヴァ。

「そりゃ屠るだろ」

だつてあいつら俺目当てじゃなくてエヴァの方を狙っていたんだぞ？

それだけでも死罪だつてのにエヴァに傷を付けたんだぜ？

おもわずそいつらが住んでいた街を地表から無くしちゃったからな」

まったく…身の程知らずにも程があるつての。

「ボソボソ……だから悪魔とか生物兵器だとか言われるんだよ……でもそれだけ大切に思ってくれるつてのは、とてもうれしいがな／／／」

「ん？ ゴメン、よく聞き取れなかった」

「っ！！ な、なんでもないぞ／／／」

何かエヴァが言っていた気がするけど…なんだつたんだ？
まあいいや、今年ぐらいだったっけな。

「そうか？ ならいいが… そういや今つて何年だっけ？」

「今は1900年ぐらいだな」

ふむ…そろそろエヴァと一緒にやったことない体術を習得させるか…

「よし、エヴァ。 日本に行くぞ。 そこで少し修行だ」

「日本か… 島国だったから行ったことなかったな…
なんの修行をするんだ？」

「それはな…… 合気柔術だ」

……
……
……

「1980年 日本・富士山ふもとの樹海」

ひと通り合気柔術を学んだ後、俺達は富士の樹海で引き籠もってた。
そんなある日……

「む？ 誰かここに近づいてくるな…… 結構大きい魔力だ」
「賞金稼ぎか？」

俺達に近づいてくる気配を察知した。
かなり大きい魔力だが、どうやら……子供？

「わからん…… どうやらまだガキのようだ。
俺が出て様子を見てくる」

もしかしたら偶々迷い込んだだけか……

……
……
……

魔力をたどってみると、そこには推定10歳ぐらいの赤髪のカキが

いた。

なんか雰囲気的に賞金稼ぎって訳じゃあなさそうだな。
一応声をかけるか…

「おい。 そのガキ…

俺になにか用があるのか？」

「はっ！ てめえがでかい魔力をもった奴か！

俺の名はナギ・スプリングフィールド！ ちょっと腕試しの相手
になってくれよ！」

へえ… まさか未来の英雄に出会うとは…

だが俺の事を知らない様子みたいだ。 俺も名乗っておこう。

「名乗られたからには名乗ろうじゃないか。

俺はメフィスト・マクダウェルという。

もしかして俺のことを知らないのか？」

「ああん！？ メフィストなんて名前、知らねえよ！

ええつと……（あんちよこ見ながら詠唱中）……

いくぜオラアツ！ 『千の雷』！」

「千の雷」が向かってくるが、避けるほどの威力でもなかったため
障壁で防ぐ。

てかコイツ…俺のことを知らないでここに来たのか。
命を狙いに来たわけじゃないし、殺すのは勘弁してやろう。

どうやってこのガキをいたぶろうか考えていたら、

「なんだ？ もう終わりか？」

などとふざけた事を抜かしてきやがった。
…こりやもうあれだな…このガキに現実の厳しさってやつを教えてやらないとなあ…

「サタム・サタディア・サタナキア！

闇の精霊300柱 集い来りて敵を射て！

魔法の射手 連弾・闇の300矢！！」

「魔法の射手」がナギ目掛けて降り注ぐが避けられたり、避けられない矢は障壁で防がれる。

「ぐう！ なんて数の魔法の射手だ！

しかも一つ一つの威力がハンパねえ！」

「この程度で終わりだと思うなよ！

サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 高殿の王！ 来れ 巨神を滅ぼす燃え立つ

雷霆！

百重千重と重なりて 走れよ稲妻！

『千の雷』！！」

「魔法の射手」の攻撃の余韻が残っている内に「千の雷」を詠唱し追撃。

まだ防御の体勢を取っていたナギはそのまま「千の雷」を障壁で受け止めるが、威力のデカさに押され始める。

「ぬおおおお！ なんてだ！？

なんで同じ魔法なのにこれほどまでに威力が違う！？」

「当り前だろうが！」

俺とお前とじゃまず練り込めた魔力量に決定的な差がある！ それに魔力運用

の効率さもっ！ 障壁の術式もっ！ なにかもが圧倒的に負けている！

おまけにあんちょこ見ながら魔法を使いやがって…
貴様は殺し合いをナメすぎだ！^{たたかい}」

俺は縮地でナギに近づき、殴りつけ空中に浮かせる。
そして拳の連打を放つ！

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
！！」

最初の何発かは障壁に阻まれるが、そんなことはお構いなしに殴り続ける。

「ちょ！ ま、待て！ げふっ！ ぐはぁあっつ！」

そして障壁をぶち抜いて拳のラッシュお見舞いした。

「安心しろ、峰打ちだ」

「拳に……峰もクソも……ねえだろうが……」

「む、まだ意識が合ったのか…」

聞け、ガキ。 お前はまだまだザコだ。

今まではその才能によってゴリ押しで勝ててもホンモノの強さにはてんで勝てん。

だから魔法世界に行け。

そしてそこで戦い方を教えてくれる人間を見つけて師事しろ。
ある程度力を身に付けたら俺はお前の前に現れる…
その時まで精々修行にはげめ」

こんだけ言っておけば、あんちよこを使わなくなるだろ…
次にナギに会うのは大戦時かな。

………

………

…

クソガキの教育を終えて俺は家に帰る。

「エヴァ、ただいま」

「おかえり、メフィスト。 やっぱり賞金稼ぎだったのか？」

欲にまみれた賞金稼ぎを想像したのか、エヴァが顔をしかめつつ聞いてきた。

「いや、俺の名前も知らないただのガキだった。

俺の首を狙っている訳でもなかったからちよいとボコって終わりにしたよ」

「子供だと？ それにしてはやけに大きい魔力だったな…」

まあナギだしね…。

ナギがまだ10歳ぐらいなら大戦はそろそろ起きるか。
よしっ、エヴァに行つていいか聞こう。

「まあな。それよりさ、
そろそろ魔法世界で大きな戦争が起きるんだ。それでな…
俺はその戦を見に行きたいんだわ。行ってきていいか？」

自分勝手な理由だが出来れば行きたいのでエヴァに聞いてみる。

「……あまり賛成はできないが…メフィストが負ける訳もないしな…
行ってきてもいいが、あまりムチャはするなよ？」

「おお！ ありがとな〜エヴァ！」

俺はエヴァを抱きついた。

「…！ こ、こら！ 抱きつくんじゃない／＼／」

「しょうがないだろ。これから何年かエヴァと離れ離れになるんだからさ。」

また再会する時までエヴァの感触を忘れないようにしないと

それっぽいことを言って誤魔化す。

まあ実際、離れるのに抵抗があるが魔法世界なんかエヴァを連れていきたくないしな。

ガマンガマン……

「むっ そうか。」

何年も別行動になってしまうのか…寂しくなるな…」

ぐっ…解っていた事とはいえ、エヴァを悲しませるのは心が痛むぞ。

「ごめんな。俺の我儘でエヴァに寂しい思いをさせてしまつて。
何年かしたら帰ってくるからそれまで待っていてくれ」

「なに、構わないぞ。」

メフィストにはもう何百年も助けてもらってきたからな…
少しぐらいは私もガマンするさ」

「ありがとな…じゃあ明日には出発するよ。
久しぶりに今日は一緒に寝ていいか？」

「／／／べ、別にうれしくなんてないぞ／／／
ただ、メフィストがしたいなら一緒に寝てやってもいいが／／／」

ツンデレ全開だな。 あゝもゝ可愛いなゝ

「したいしたい。 ちょゝ一緒に寝たい。
てな訳で一緒にねるぞゝ」

俺は問答無用でエヴァをお姫様だっこしてベッドに運んだ。

「こ、こら！ 急に運ぶな／／／ びっくりするだろ／／／」

「悪いな。 これから寂しい生活を送ると思うとな…
エヴァ分をしっかり補給しておこうと思ってな」

「ぬう ま、まあ今日は許してやろう…
ボソツ……私自身、寂しく思うからな……」

「ふふつ。 お休み、エヴァ」

「ああ。 お休み、メフィスト」

くつくつくつ……待つてろよ、コスモエンテレケイア完全なる世界。

お前たちは俺がボロ雑巾になるように利用してやるぜ。

くつくつくつくつ…ハァーッハッハッハッハ！！

第拾巻話 『メフィスト暗躍 未完の紅き翼との邂逅』（前書き）

もうそろそろPVアクセスが20万を超えます。
こんな駄文に付き合ってくれてありがとうございます！

文章力に関しては…申し訳なく思いつつも力量不足なので進歩できないorz

第拾巻話 『メフィスト暗躍 未完の紅き翼との邂逅』

〔1980年 魔法世界〕

さて…最強の俺なら出来るだろうと思いついてみたが、あんがい簡単に出

来るもんだな、不法侵入。 いや、不法入国か？

そこらへんの達人すらも騙しきる認識阻害の結界を張れば余裕だったぜ。

これからどうやって完全なる世界を探そっかな…

確かどっちの陣営にも信者が紛れ込んでるんだっけ。

思いのほか、さっき使った結界が優秀だったしな。

帝国と連合の中にじかに潜入して調べてみるか。

…

…

…

結論から言えば上手くいった。

割と早く信者を割り出し、そいつに幻術を掛け幻想空間で尋問。ファンタズマゴリア

知っている拠点・人物等を聞きだした後、俺の事を忘れてもらった。その後は拠点に急行。

即座にぶっ潰して情報・金を強奪した。

にしても旧世界とは金の単位が違うから困る。

幸いゲートポートがある所では換金できるので助かった。

拠点を潰した後は、その拠点を調べ上げた別の拠点に行くか、帝国・連合の内部調査をして情報を聞き出したりして潰して回る。そんな感じで2年後、ついに魔法世界の南北を分断する大戦がはじまった。

余談だが、この2年で徴収した金は全てドルに換金し王の財宝の中ゲート・オブ・バビロンにしまっておいた。

王の財宝が金庫がわりになりつつあるのは気のせいだと思いたいね。

「1982年 とある山中」

【ナギ side】

「んっふっふっ こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ
じゃ、早速肉を」

俺は肉を食いたい一心でさっさと肉を鍋に入れていく。

「あつナギ！おまつ…！何先に肉を入れてるんだよ！？」
「トカゲ肉でも旨いのかのう？」
「いいじゃねえか。 旨いもんから先でよ、ホラホラ！」

詠春の注意する声を見せず、ひょいひょいと肉を鍋に放り込む。

「バツ、バカ！ 火の通る時間差というものがあってだな… まず
は野菜を入れて

… あーちょッ！」

「あーうつせ！ うつせーぞ、えーしゅん！」

まったく、うるさいな！

これだから堅物生真面目は困るぜ……

「フフ… 詠春、知っていますよ。 日本では貴方のような者を「鍋
將軍」と呼び習

わすそうですね」

「ナベ・シヨーグン！？」

「っ… 強そうじゃな」

まさか、詠春のヤツ… シヨーグンだったとは恐れ入ったわ。

「わかったよ… 詠春、俺の負けだ。

今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す。 好きにするが良い」

「（鍋奉行じゃ……？）んー… 嬉しくないなあー」

なんで嬉しくないんだ？

シヨーグンって名誉ある役じゃないのか？

………

………

…

〔食事中〕

俺があ野郎…メフィストとか言ったか…

あいつに負けてすぐ俺はあんちよこを使うのをやめた。

そしてお師匠に弟子入りして大分経つが、まだあいつは現れねえ。

ホントに現れんのか？

てか俺はあいつについてなんもしらねえな…

ちとこいつらに聞いてみるか。

「なあ…メフィスト・マクダウエルってお前ら知ってつか？」

すると全員が反応を示した。

「…確か『幻獣使い』『災厄の邪神』『闇の僭帝』などと呼ばれている

吸血鬼ですね」

「俺が聞いた異名は『剣帝』とかいってたな」

「ワシは『人類共通の敵』『人型生物兵器』と聞いておるぞ」

な！ あいつにそんな異名があったとは… てかぶっそつな異名多いな…

「その『剣帝』がどうかしたのか？」

「あ、ああ… 昔ちよつと会って戦ってたな。

その時に完膚なきまでにボコられた。

その時、お前が強くなったらお前の前に現れるみたいなこと言ってたんだよ。

だから、もしかしたらあいつ…この大戦に居るかもしれないと思っ
つてな」

「ちよつ！ おま、よく生きていたな…」

「確かにそうですね… あの方はもはや伝説になるほどの賞金首ですからね」

伝説？　なんで伝説扱いになってるんだ？

「伝説って一体どういうことだ？」

「あの者の賞金は3000万ドルです。歴史上、最高金額らしいですよ」

3000万だと！？　あ、ありえねえ…

そんな賞金首に殺されなかったとは、運がいいのか見逃してもらったか…むっ

上空から剣が飛んできて鍋にぶつかりひっくり返した。

あ、肉が！　もったいねえことするヤツだぜ！

箸で自分の食つぶんを取って食べる。

そして剣が来た方から、

「食事中失礼ッ！」

俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！

いっちょやろうぜッ！」

なにやらでかい声で叫んでくる筋肉ダルマがいた。

「何じゃ？　あのバカは」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな…

えいしゅ…むお！？」

やべっ 詠春が頭から鍋を被ってるぜ…
ありゃ、そーとーキレてんな。

「フ……フフフフ……フ……
食べ物で粗末にする者は……」

「どーしたー！ 来ねーのかあー！
来ねーならこっちから……いッ――

「ヒュン 斬ッ！」

「おほ
斬る」

詠春が筋肉ダルマに速攻で近づいて斬り付ける。
詠春はキレているせいか、かなり本気の様子だ。
だがあのダルマ……半分になった剣で詠春の攻撃を防いでいた。

「お？ 詠春の攻撃、凌いでるぜ」

やるなーあいつ。

「あの大男やりますよ。見たことがあります。
ちょっと前、南で話題になった剣闘士ですよ」

しばらく詠春と筋肉ダルマの戦いを見てたが、詠春が負けそうにな
ったので戦いに割り
込む事にした。

むっ 詠春のヤツ、気絶しちまいやがった。 おらあ！

「ぬんっ！」

俺は筋肉ダルマ目掛けて雷撃を放つがあっさりかわされる。

「おう。出たな、情報その4。

赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴、無敵」

「てめえら… 手工出すなよ」

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ」

ちえ… 言ってくれるぜ、お師匠。

「奇遇だな小僧。俺も南じゃ無敵と滅法噂の男だ」

「へっ おっさん、いいのかよ？ 剣なしで」

「心配すんな。俺は素手のが強え」

はっ！ 素手の方が強いとか…マジでバカだな！
上等だ！

互いに魔力、気を身体に流して身体強化をし闘気を高め…殴りかかろうとしたが、

上空から雨あられのように剣・槍等の刃物が俺の周りに落ちてきて身動きが取れなくなる。

どうやらあの筋肉ダルマも同じ状況に陥っているようだ。
そして、俺を圧倒したあの声が聞こえてくる。

「楽しそうなことやってんじゃねえか…
俺も混ぜてくれよ！」

声がした方を見上げると、尊大な笑みを浮かべた吸血鬼メフィストがいた。

「なんだあ、てめえは！？ 邪魔すんじゃないよ！」

「なんでてめえここにいる！？ メフィスト・マクダウエル！」

side out

【メフィストside】

大戦が始まった後も、俺は隠れて完全なる世界の拠点潰しを続けボ口儲けの最中だ。

この2年ぐらいで集めた金はもうかなり高額になっている。

今日も金稼ぎをしにとある山を通り抜けようとして、懐かしい魔力を感じ取ったので寄り道していく事にした。

「この魔力は…あんときのガキか。結構強くなったっぱいな。

こいつの他に…魔力が2、気が1……少し遠くに1か。

そっぴやあのガキ…アラルブラ紅き翼って呼ばれ始めてたな。

ここで会ったのも何かの縁。少し顔を見ておくとするか」

あれから2年。

あのガキ、少しは強くなったんだろうな。

「出てこい、『バハムート』」

少しドッキリ的な意味も込めてバハムートを呼び出す。

「よお、メフィスト…久しぶりだな」

「そうだな。これから少し遊びを仕掛けに行くんだが…
バハムート、少し力を貸してくれないか？」

「よからう。我を呼ぶということはそれなりに強いんだろう？」

「ああ。おそらくこの世界の中では最強に近いはずだ」

最強という言葉聞いて、何を想像したのか嬉しそうな表情を浮かべる

バハムート。

「ほほ。それは楽しみだ」

「まだ動かないぞ。少し上空で待機だ」

最強と聞いて殺る気を高めるバハムートを諷めて少し待つ。
さて、あのガキは無事に生き残れるかな」

………

……

…

上空から千里眼で紅き翼アラルフラを観察していると、離れていた大きい気を持つヤツが
ちよっかいを仕掛けはじめた。

「むっ　なんか筋肉ダルマみたいなアホがちよっかいを出し始めた

な…

ってあいつはジャック・ラカンじゃないか。

戦っているみたいだが…今はまだ味方じゃないってことか？

だが面白そうだな……いっちゃやるぞ、バハムート」

「応」

「俺が合図したら5割の力でメガフレアをあの赤毛のヤツに向かって撃つてくれ」

「それは構わんが…死んでもしらないぞ？」

「この程度で死ぬならそれまでだ。では頼んだぞ」

「任せておけ」

バハムートと別れ、高速で上空からナギ目掛けて急降下。

そしてナギとラカンが通常の視力で視認できるまで近づいたら攻撃を開始する。

ゲート・オブ・バハムート

「王の財宝展開、射出」

宝具を60個展開。それぞれに30個ずつヤツらの周りに射出して動きを封じる。

「楽しそうなことやってんじゃねえか…

俺も混ぜてくれよ！」

そう楽しそうに声を掛けるとナギ、ラカンが二人揃って、

「なんだあ、てめえは！？ 邪魔すんじゃねえよ！」

「なんでてめえここににいる！？ メフィスト・マクダウェル！」

俺に向かって吼えてきた。

いいねえ〜 人間のくせに威勢がいいじゃないか。

「俺の名前はメフィスト・マクダウエル。

ここに来た理由はな…… ナギ・スプリングフィールド！

てめえを試しに来たんだよ！ “今だ、バハムート”」

“了解だ。『メガフレア』！”

合図と同時に、上空から高速で熱源が接近してくるのを感じた。

「じゃあ、上手く生き残れよ」

俺はメガフレアの巻き添えを避けるため、少し遠くに転移する。

「ちい！ やってくれるぜ！

おい！筋肉ダルマ！ ここは助けあってあれを止めるぞ！」

離れたところで様子を窺っていると、どうやらガキがダルマに協力を要請していた。

「確かにあれは俺様でも厳しそうだ…

いいぜ！小僧！ てめえ、逃げんなよ！」

「逃げる訳ねえだろうが！

俺はあの野郎に一発ぶちかましてやんねえと気が済まないんだよ！

おい、アル！ お師匠！

てめえらもこっちきて手伝え！」

「もう来てますよ」

「さすがにあればヤバそうじゃな。 最強防護ッ！！」

「この周りの武器を退かしてる暇はないな！
はああああああ！気合い防御！！」

ガキ障壁を展開、白いローブを着た男は剣士を担ぎ同じく障壁を張り、子供の容姿をした

ヤツは防壁をたくさん作りだし、最後にダルマが気で身体強化をして攻撃に備えた。

ギリギリで着弾する前に「メガフレア」を防ぐことに成功する。
まさに刹那の差。

ラカンが少しでも迷ったら…アルとゼクトが少しでも遅れていたら…
違う結果になっていたかもしれない。

だが、防いだと言っても威力全てを防いだ訳ではなかった。

全員少なからずダメージを追っている様子だ。

俺はあいつらが「メガフレア」を防いでいるうちに追加攻撃の準備に移る。

「我の呼び掛けに応えよ、氷霊・獣霊召喚！ 来い！『シヴァ』『カーバンクル』！」

「御呼びですか？ご主人様」

「僕たちを呼ぶなんてどうしたの？」

「これから少し遊ぶんでな。 お前らも少し付き合え」

「了解しました」

「わかったよ。 僕たちは何をすればいいの？」

ふむ…呼び出したはいいがノープランだ。

どうしよっかな……よし！

「シヴァは単身で突っ込み、ローブを着た男と小さい男を倒せ。カーバンクルは俺にリフレクを張ってくれ」

「オツケー、『ルビーの光』」

俺に「リフレク」が張られる。

どうやらついでにシヴァにも張られたようだ。

「ついでにシヴァにも張っておいたよ。
魔法を気にせず戦いな」

「ありがとうございます、カーバンクル。
ではご主人様、行ってまいります」

「俺も一緒に行くぞ、シヴァ。
カーバンクルは戻っているか？」

「ん……ここで戦闘を見学してもいい？」

「別にいいぞ。　“バハムートはどうする？”」

バハムートにも念話で戻るかどうか聞く。

“我もここで見ているぞ”

“わかった。だが手を出すなよ。
これ以上やったら死ぬかもしれないからな”

“…仕方がないな。　　ここで行く末を見させてもらおう”

俺が釘を刺さなかったら攻撃するつもりだったのかよ。
あぶね……

「よし。　じゃあ行くぞ、シヴァ」

「はい、ご主人様」

ちょうど「メガフレア」の余波が収まってきたし、追撃に移るか。

「やれ、シヴァ！」

「はい、『ダイヤモンドダスト』！」

「なっ　ちい！　避けるてめえら！」

「サタム・サタディア・サタナキア！

来たれ氷霊　闇の精！　闇を従え吹け　常夜の吹雪！

『闇の吹雪』！！」

シヴァの「ダイヤモンドダスト」でナギ達を周囲の木々ごと凍らせる。

攻撃に気付いたナギが回避するよう注意を促し、全員回避した。
だが、避けると思われた方向に先回りしていた俺が「闇の吹雪」を
放って反撃のチャンス
を与えない。

「ぐはッ！」

「お師匠！」

まず一人目。

ナギを狙って呪文を唱えたがちっこいガキに庇われた。
一応抵抗したようだが俺の魔法の威力は格が違う。
あまり威力を殺せず一発でダウンした。

「シヴァ。」

お前はあっちのローブを着た優男を殺ってこい」
「了解しました」

さて、アルビレオ・イマはシヴァに任せて残りのヤツらの相手をするかね…むっ

「フンフンフンフンフンフンフンフンフン」

「中身が詰まっていない剣で俺に敵うと思うなよ！
ゲート・オブ・バビロン
王の財宝展開、射出」

ラカンが無数の剣を俺に向かって投げってくる。

それを俺は王の財宝で迎え撃つ。
ゲート・オブ・バビロン

いくら強力なアーティファクトといえど、こちらの剣は一つ一つが神話で活躍した武器だ。

当然、数多の向かってくる剣を打ち破りラカンに降り注ぐ。

「おいおい。」

いくらなんでも規格外すぎるだろ！ マジで何もんだ、テメエ！」

なんだ…こいつも俺を知らないのか…

まあ魔法世界の住人じゃしょうがないよな。

「俺の名はメフィスト・マクダウェル。

ヴァンパイア
悪名轟く吸血鬼！ 『幻獣使い』！

天下無双で最凶無敵な“悪の魔法使い”だ！」

「サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 炎の霸王！ 来たれ浄化の炎 燃え盛る大剣！

ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を死の塵に！

ぶっ飛べ、筋肉ダルマアツ！

『燃える天空』！！』

詠唱が終わる頃に上空にラカンを殴り飛ばし魔法をぶつける。これならいかにチートラカンといえども気絶したかな？さて、次はナギだな。

「よう、ガキ。 久しぶりだな。

ん？ あんちよこは止めたのか？」

「ああ、止めたぜ。 あんなもんに頼ってるようじゃアンタに勝てないからな」

「それは重畳。 さて、それじゃあお前の修行の成果、見せてもらおう！」

「っ！！！」

俺は縮地で近づきナギを殴りつけるがたいして効果がなかったのか、影分身をして向かってくる。

「無駄無駄無駄無駄ア！」

俺は影分身全てを音速の速さで殴りつけるが中には本物がいなかった。

「……………百重千重と重なりて 走れよ稲妻！
『千の雷』！！」

今度は「千の雷」か… アンチヨコ止めても唱えられる呪文が限られているな。

唱えられる呪文のレパートリー少ないんじゃないかね？

「千の雷」と「リフレク」がぶつかり合う。

するとさっきのように跳ね返さず「リフレク」にヒビが入って、魔法を正確に

跳ね返さなかった。

むっ 「リフレク」にヒビを入れるとは…

まあこんだけやれば合格だな。

表の役者は紅き翼こうきうに任せて俺はもうちょい暗躍するか…

「『リフレク』によく傷をつけたな、小僧…いや、ナギ。

されど慢心することなくまだまだ精進しろ。

『紅き焰』固定！ 右腕憑依！

いくぞお！ 俺のこの手が真っ赤に燃えるう！

勝利を掴めと轟き叫ぶう！ ばああああくねっっ！」

「ちよっ！ 突っ込んでくるんじゃないやねえ！」

俺の燃えている手に驚いたのか、ナギが声を張り上げる。
それを無視し、俺はナギの前に縮地で移動して、

「ゴオオオッド！ フィンガアアアツ！」

燃え盛る腕をナギに向かって繰り出す。

障壁に当たって弾かれるが、防御をぶち破りナギの顔を掴む。
そして、

「ヒイイトオ！ エンドオ！」

爆発を引き起こした。

説明しよう！ 今使った技だが、闇の魔法のアレンジで体内に取り込むのではなく魔法を右腕に憑依させ、一定時間その魔法の効力を顕現させる事が出来る。そして術者の任意で解放させ魔法本来の効果を使うことができる。これはメフィストがゴッドフィンガーを使いたい一心で開発した呪文なのだ！

余談だが、『燃える天空』を使うと敵の体内から爆発を起こして木端微塵になるぞ」

「まったく……ホントに……規格外だな……」

「安心しろ。 命までは取らん。
ナギ、もう少し仲間を増やせ。 そしてこの大戦の真実を知れ。
時期が来た時、また俺はお前の前に現れる」

「へっ その言葉……わすれんな……よ……」

ナギは最後に捨てゼリフを残して倒れ伏した。
周りを見渡すと全員が倒れ伏していた……シヴァはちゃんとアルビレオの事を倒せたようだ。
力量が不明確だったから少し心配だったが杞憂だったな。

「にしても少しやりすぎたか。」

出る、ケルキオン医称なる双蛇の杖」

俺はケルキオン医称なる双蛇の杖で動ける程度に治療しその場を後にした。

……

……

…

離れた場所で幻獣たちに評価を聞く。

「お前ら、あいつらの事だがどうだった？」

「中々侮れませんでした。

『リフレク』を抜かれませんでした但し傷を入れられてしまいました。

恐らくまだ発展途上でしょう」

「僕もそう思うよ。ただ『リフレク』を抜かれそうになったのは驚いたよ。

そんな事が出来るのはご主人とエヴァちゃんだけだと思ってたからね」

「まだまだ力量不足だな。

5割とはいえ我の『メガフレア』を受け止めたのは評価してやろう」

おつ 三人とも高評価のようだな。

これなら後々に味方しても大丈夫そうだ。

「なるほどな。 とりあえずお疲れ。
それじゃ魔力供給を切るぞ」

さてと、
アラルブラ コスモエンテレケイア
紅き翼が完全なる世界に気付くまでは暗躍するかね…

第拾壹話 『メフィスト暗躍 未完の紅き翼との邂逅』 (後書き)

明日の更新は少し遅れます。
ではまた明日…

第拾弐話 『紅き翼に協力 そして大戦は終幕へ』（前書き）

PV20万アクセス、ユニーク2万アクセス突破ア！

こんな駄文に付き合ってください、本当にありがとうございます！

あいかわらず文章力が残念ですが頑張っていきます！

第拾弐話 『紅き翼に協力　そして大戦は終幕へ』

調査・拠点潰しを続けていた俺は、まだ自分が手を出していないところが壊滅している事

を知った。

… やつと紅き翼^{アラルブラ}は真実にたどり着いたか…

そろそろ本格的に力を貸すとするかね。

じゃああいつらの隠れ家に先回りしておくとしよう。

すでに隠れ家の場所は把握済みだしな。

…

…

…

【ナギside】

「タルシス大陸・オリンポス山」^{アラルブラ}「紅き翼」隠れ家」

あの白髪のヤローに嵌められ、連合・帝国に追われることになった俺達は、まず姫さんが

幽閉されている「夜の迷宮」から助けだし、その後に隠れ家に移動した。

「何だ。これが噂の紅き翼^{アラルブラ}の秘密基地か！

どんな所かと思えば… 掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ？ このジャリはよ」

「何だ貴様！？ 無礼であろう！」

「へっへっへん 生憎、ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね！」

「何い？ 貴様、何者だ！？」

「あのやけに元気のいい少女が…」

「ええ。 ヘラス帝国第三皇女ですね」

俺はあのバカと皇女の嬢ちゃんをほつといて姫さんに本題を切りだした。
ジャック

「さーて 姫さん。 助けてやったはいいけど、こっからは大変だぜ。」

連合にも、帝国にも……あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です、王女殿下。

殿下のオステシアも似たような状況で…

最新の調査ではオステシアの上層部が最も“黒い”…という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか… 我が騎士よ」

「その「我が騎士」って何だよ、姫さん！？
クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろ？
ならば主は最早、私のものじゃ」

「な……」

「連合に帝国…そして我がオステイア。

世界全てが我らの敵という訳じゃな。

じゃが… 主と主の「紅き翼」^{アラルブラ}は無敵なのじゃろ？」

無敵か…あの野郎には完敗してるけどな…
^{メフィスト}

負けのまま終わらせるつもりはないけどな！

「世界全てが敵——良いではないか。

こちらの兵はたったの7人…だが最強の7人じゃ。

ならば我等が世界を救おう。

我が騎士ナギよ。 我が盾となり剣となれ」

「……へっ だから俺は魔法使いだっつーのに…

やれやれ… 相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

俺は姫さんの言葉に感銘を受け、自然と姫さんの前で膝を付いた。
すると姫さんが剣を俺の肩に置く。

「いいぜ。 俺の杖と翼、あんたに預けよう」

そう言うと丁度、影っていたこの場所に太陽の光が降り注いだ。
まるで太陽が俺達の反撃を祝福しているみたいだったな。

その時、遠くから何かが近づいてくる音が聞こえてきた。
何かマズい！

「全員、離れろお！」

俺は声を張り上げ、姫さんを抱えて離れた。

すると、

ヒュウン　ズドオオオン！！

何かが俺達がいた近くの場所に高速でぶつかり砂煙を巻き上げた。
そして、そこにいる何者かが見えてくると、

「久しぶりだな、ナギ」

巨大な龍と、あの吸血鬼がいやがった…

side out

【メフィストside】

隠れ家についた俺は我が物顔で居座り、身体の一部を蝙蝠に変化させ「夜の迷宮」を見張っていた。

そして紅き翼アラルブラが来たのを見届けるとバハムートを召喚し、遙か上空で待機。

蝙蝠を隠れ家の近くに配置し、あいつらが来るのを見ていた。

「暇だな」

「おい、メフィスト。　なぜ我を呼んだのだ？」

なにやらバハムートは敵がいないのに呼び出されて不満のようだ。

「ん？ なぜってそりゃあ…あいつらを脅かすためだ」

「それはそれは…おもしろそうだな。

それで？ 我は何をすればいいんだ？」

どうしよっかな…いきなり「メガフレア」は前にやったしな…

「そうだな　とりあえず俺を乗つけて、あいつらがいるところに音速で急降下とか？」

「ほほお、そりゃまた豪快だな。

攻撃されたらやり返していいのか？」

「いいけどやりすぎんなよ。

おっ　やってきたみたいだ」

(蝙蝠で覗き見中)

へえ…あの我儘なナギ^{ガキ}が王女さんに跪いているよ。

主君って訳か？

そろそろからかいに行くでしょう。

「さて…行くぞ、バハムート」

「承知」

俺はバハムートの背に乗りナギ達が居る所へ急降下した。

…

…

…

ズドオオオオン！！

バハムートが地面と激突したせいで砂埃が舞う。

視界が晴れてきてナギを視認できるようになると、背中から頭の上に移動して

俺は声を掛けた。

「久しぶりだな、ナギ。

他のメンツは久しぶり& a m p・初めまして」

声を掛けると紅き翼全員が殺気立ってこっちを睨んでいた。
アラルブラ

殺気をビシビシ感じるわ… 怖くないがな。

「ひとまず落ち着けよ、アラルブラ紅き翼の諸君」

「いきなり攻撃を仕掛けてきて殺気立つと言う方がムリだろうが
！」

ナギが吼えてくる。 他のメンツも少なからず同意しているようだ。

「なんだよ、怒ってんのか？

これはただの挨拶だよ。 お前らのいたところに降りてないだろ？」

そう言い放ちバハムートから降りてナギ達に対峙する…

全員、戦闘態勢でこちらが不審な動きをすればすぐ攻撃してきそう
だ。

ちよつとハデにやりすぎたな… しゃあないバハムートには戻って
貰うか。

「悪いな、バハムート。 どうやらやりすぎたようだ。

これ以上刺激しないために戻っていてくれないか？」

「……はあ……せつかく暴れられると思ったんだが……
お前の顔を立ててやるよ」
「悪いな」

俺はバハムートへの魔力供給を切った。

アラルブラすると紅き翼の奴らは全員驚いてこつちを見ていた……まあ当然か……

ナギ「おい、さっきの龍はどこいった!？」

「あゝ お前らには見せてなかったつけ……

あれは俺が使役する幻獣だ。

聞いたことないか? 『幻獣使い』という俺の異名を」

そう言う少し納得したようだがまだ警戒は解けてないようだ。

「つと、話がそれたな。

ナギ・スプリングフィールド……並びに紅き翼の諸君、アラルブラ

お前らはこの大戦の真の敵に辿り着いたか?」

「!! ……コスモエンテレケイア完全なる世界の事か?」

ナギが驚きつつも答える。

「そつだ。 よく辿り着いたな。

そこでだ、俺を奴らを潰すための戦いに参加させる」

「……ハア?!?!?」

アラルブラ紅き翼の全員が「こいつ、何言つてんの?」って顔をしてたよ。

うん。 この顔を見ただけでもこの場に来たかいがあったわ。

「………そんな事をして主になんの得がある?」

「一体、何を考えておるのじゃ？」

ん？ 姫さんが俺に問いかけてきた。

俺が名前を知つてると不自然だしナギに聞いてみるか…

「おい、ナギ！ この嬢ちゃん是谁だ？」

「あ、ああ……この人はウェスペルティアのおつかない姫さんだ」

バチン！

あっ すげえ早いビンタだな… ナギの奴殴られてやんの。

「……いいのですか、ナギ？ 王女殿下をあれに教えても」

「まあ大丈夫だろ… なんてあんなこと言つてんのか知らんが…

あいつが本気だせば俺達は全員あの世逝きだからな。

畏つて訳でもねえだろ」

ナギ達がコソコソ話しているのをほつといて姫さんが俺に話しかけてくる。

「もう一度言つぞ……」

そんな事をして主になんの得があるのじゃ？」

「ん…… 簡単に言つと俺はあいつらに怨みがあるんだよ。

その憂さ晴らしだな」

実は恨んじやいない…俺が真祖になるのは決定事項だったしな。

それっぽい事を言えば信用すると思つたが、流石は姫さん…

俺の事を全然信じていないって顔だ。

「……………信用できん」

「まあ当然だな。そこで土産を持ってきた、ホレ」

俺は今まで調べ上げた完全なる世界コスモエンテレケイアの情報が詰まったデータを渡した。

「これは？」

「それにはな、完全なる世界コスモエンテレケイアの信者・拠点など俺が独自に調べ上げた情報が入っている」

「なんだと!？」

おゝ 驚いてる驚いてる…

んゝ？ 他の連中も驚いてんなゝ

「少しいいか？」

「あん？ 誰だ、おっさん？」

今まで黙っていたおっさんが話しかけてきた。

「おっさ！ ……ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグという」

「ふゝん んでそのガトーが「ガトウだ」うるせえよ、ガトーが何聞きたいんだよ？」

「…もうガトーでいい……」

君が調べたというその情報だが…どこで調べあげた？」

なんかさらに殺気立ってんな… 内通者とも思ってたのか？

「そう殺気立つな。

この情報はな、俺が直々に連合・帝国の中に入り込んで調べたものだ。

大変だったんだぞ？ お前らに対する土産を用意すんのは」

「……………俺達の内偵の意味はどこいったんだ……………」

なんか打ちひしがれているな…
まあいいや、ほっとこ。

「それで？ 俺の嫌疑は晴れたか？」

「なあ姫さん。俺はいいと思うが姫さんはどうよ？」
「……………」

はあ……まだ疑ってんのかよ……
しょうがねえ、こつちも最大限に譲歩するか。

「わかったよ、姫さん。 出ろ、ミストルティン不死殺す宿木の槍 1。」

「「「なっ！」「」」 騒ぐな、ガキども！

俺が敵に通じていると思うたらすぐにこの槍で殺してくれていい。
この槍はな、不死の特性を持つ者が刺されると問答無用で死ぬ槍だ。

これを姫さんに預けておく。 疑いが晴れたら返してくれ」

俺が差し出した槍を受け取りつつもまだなお疑っている目で見る姫さん。

「その言葉が本当だという保証がどこにある？」

「ホントに疑り深いな…
いいだろう。来い、エクスカリバー」

俺はエクスカリバーを取り出し自分の左腕を切った。

「なっ！」

「おい、姫さん。 驚いてないでその槍で俺の腕を刺してみろ。
ん？ ああ、心配すんな、俺は自分の身体を再生出来るからな。」

早くしないとその腕無くなっちまうぞ」

「そうか…わかった」

ミストルティン

不死殺す宿木の槍で姫さんは、斬り落とした腕を刺した。すると腕が黒ずんでいき砂のように崩れていった。

崩れるのを見届けると俺は腕を再生する。

「（うお……この槍で刺すとこんな風になるのか……）
これで納得できたか？」

姫さんはどうやら少しは信用してくれた様子だ。

「……よからう、今は納得しといてやる。
最後に質問してもよいか？」

「なんだ？」

「主の怨みとやらを聞きたい」

んゝ 言わないって選択肢もあるが…

手っ取り早く信用してもらうには話した方がいいかね。

「ふむ……あまり言いたくないんだが……

しゃあない、姫さんとナギにだけ教えてやるよ」

「ふふ…私たちは仲間はずれと言う訳ですか」

話す相手を指定したら、その中に入らなかったヤツが文句を言ってきた。

てかそんな不機嫌になってなさそうだな…顔が笑っているし。

「ん？ ああ、前会ったな…名前聞いてなかったけど。
なんつつたっけ？」

「我が名はアルビレオ・イマ。アルと呼んでいいですよ」

「おk、アル。わりいな、あんま人に言いたくないんだわ。」

ホントは姫さんだけにしか言いたくないんだが、それだと納得しないだろうと

思ってたナギにも言うことにしたんだぜ」

理由を言っと、やっぱり不機嫌になっていなかったらしく笑いながら返すアル。

「ええ、わかっていますよ。少し意地悪しただけですよ」

「けっ、腹黒いやツだ。」

おい、姫さん、ナギ。少し離れるぞ、ついてこい」

「わかった」

「ああ」

俺は姫さんとナギを連れて少し離れていった。

移動中

「ここまで来れば大丈夫か…んじゃ、教えてやんよ。」

吸血鬼の真祖ってのはどうやってなるか知っているか？」

「確か、今は失われてる儀式によってなる…とかだったか？」

まさかナギが答えるとは…少しはバカが改善されたか？

「まあそんな感じだ。」

俺がいつ生まれて真祖になったかはもう忘れたが、もう何百年も前の話だ。

そんなときに妹と一緒に世話になっていた家で俺が16、妹が10の時、確か妹の誕生

日だったな。その時にその城で住んでいる魔法使いに真祖にされた。

その魔法使いに真祖に成る術を教えたのが完全なる世界の信者だコスモエンテレケイアだったって訳。

もう何百年も前だから同じか全くの別物かはわからんがな…

そしてこの大戦に同じ組織がいる事を知ったからこうして旧世界からやってきた

って訳だ。

どうだ？ 納得してくれたか？」

なんか二人の表情が暗いな…。だからあんま言いたくなかったんだがな。

「……うむ。辛い話をさせてすまなかった」

「いいってことよ。実際はそんなに恨んでる訳じゃないしな。

結局は永遠に生きる俺の暇つぶしだ」

それに金が入るしな。一石二鳥とはこのことだ。

「いいのか？ さっきの話を俺達に聞かせて？」

「別に構わないぜ。他の奴らに言いふらさなきゃな」

まあ言いふらしてもあまり俺とエヴァに対する意識が変わる訳じゃないしな。

「私は人の過去を言いふらす趣味はないぞ」

「俺もだ」

「なら問題無し。」

どうだ？ 姫さん。 納得できたか？」

「うむ。 これからよろしく頼むぞ」

「任せとけ。 じゃあお前らのお仲間んどこに戻るか」

移動中

「ただいま」

皆の衆、これから一緒に行動するメフィスト・マクダウエルだ。
ちなみに3000万ドルの賞金首。 よろしくね」

俺の自己紹介を皮切りに皆が続く。

「俺はジャック・ラカン！

この前はボコられたが今度はそうはいかねえ！ 勝負だ！」

「俺だけ気絶してたがナギから色々聞いてるぞ。

近衛詠春だ。 よろしくな」

「私はさっき挨拶しましたが改めて…

アルビレオ・イマです。 アルと呼んでください」

「俺もさっき言ったから自己紹介はいらないな。

こっちは俺の弟子のタカミチだ」

「タカハタ・T・タカミチです」

「ワシはゼクト。 ナギの師匠をやっておる」

「ジャックに詠春、アル、ガトー、タカミチ、ゼクトね。
俺の事はメフィストと呼んでくれ」

全員の自己紹介が終わるとナギが突っ掛かってきた。

「さて、俺もジャックと一緒に勝負を挑ませてもらうぜ、メフィスト！」

「いいぜ。 暇なときに二人まとめて相手してやるよ！
だが今はちょっと待て。 いい加減、文字数がやばくなってきた」

こいつらとの戦闘を入れるとちょっとね…

「何の話だ？」

「気にするな」

ナギが疑問に思っているが構っている暇はない。

「さて、王女殿下。 これから俺はお前の配下になる。

だから戦う時には命令^{オーダー}をくれ。

敵がわかったら俺はどうすればいい？」

「決まっておる。 敵は倒す。 それだけだ」

流石は姫さん…少しも迷わずに答えてくれた。

「ならば命令するがいい。 殲滅しろと！壊滅しろと！塵芥と化せと！
そうするがいい我が主、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア」

「よかるう、敵が明らかになったらそうしよう」

「待て待て！ なに、物騒な事を姫さんに教えてんだよ、メフィスト！」

アーカードごっこをするいい機会だと思った俺は、姫さんを某局長のように改悪

を試みるがナギに邪魔される。

だが、邪魔をしたナギを姫さんに見られないように殴りつけて黙らせる。

「いいじゃないかナギ、かつこいいぞ。

それとな、姫さん。流石に長いだろ？

だからな、『命令は唯ひとつ「見敵必殺」』って言えばいいぞ。ほら言ってみ？」

「ふむ、わかった。

『命令は唯ひとつ「見敵必殺」以上』

「認識した、我が主人」

「やべえ……姫さんがメフィストに毒されてきた……」
「ふふ……今の王女殿下はどこかの局長をしていそうですね」
「……なんの話をしている？」
「そんな事より勝負しようぜ、勝負！」
「最後、しまらん……」

世間知らずな姫さんがメフィストに毒されている。
それを傍で見つつも防げない紅き翼。
こんなんで世界が救えるのか！？
次回を刮目して見てくれ！

第拾弐話 『紅き翼に協力 そして大戦は終幕へ』（後書き）

今回出た不死殺す宿木の槍は正直使わないかな…

ミストルテイン

1 不死殺す宿木の槍

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1～4

最大補足：1人

北欧神話に登場しオーディンとフリッグの間に生まれた息子バルドルを殺した武器。

バルドルは誰からも愛されている神だったので、全ての世界の全ての物質は、バルドルを

傷つけないという誓いを立てた、かと思われたが、若いヤドリギだけは若すぎるからとい

う理由で誓いを立てなかった。

それを知ったロキはすぐさまヤドリギを引き抜いてきてバルドルの実弟で盲目の神ホズ

に渡し、バルドルに向かって投げさせた。

するとヤドリギは槍（矢という説もある）に変化してバルドルを射ぬいたのである。

そしてバルドルは絶命した。

この武器は属性に不死をもつ者にしか効果を發揮しない。

真名解放して不死を持つ者を刺すと、どんな耐性を持っていても絶命させる。

まさに不死殺しの宝具。

第拾参話 『ラストバトル！ 披露するは最凶の一撃』（前書き）

今回では選択肢が出ます。

違う話に繋がれたらなという作者の妄想です。

では本編をどうぞ。

第拾参話 『ラストバトル！ 披露するは最凶の一撃』

正式に紅き翼アラルブラの一員になった俺は、敵の調査・拠点潰しなどとして働いていた。

そして暇なときにはナギ・ジャックとガチで戦ってやったよ。
いまんとこ全勝だな。

原作では6ヶ月かったが、俺の情報・戦力強化によって3ヶ月ぐらいで本拠地を突き止め追い詰めた。

その場所こそ…世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」ミストルティンだ。
ちなみに不死殺す宿木の槍はすぐに返してもらえたぞ。

「墓守り人の宮殿付近」

「不気味なぐらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

俺どうしよっかな…

俺が参加しちまうと余裕で勝てそうだしな。

それになにより俺は「悪の魔法使い」だし…敵の親玉を倒す訳にもいかんよな」

考え事をしてたらナギが声を掛けてくる。

「そついや、メフィスト。」

結局お前はどつするんだ？ 一緒に来ないのか？」

「んゝ いやさ、ここは選択肢が出てるんだよ。」

A：ナギ達と一緒に行く

B：外の敵を駆逐する

こんな感じに選択肢が出ててな。どっちが正解なのか悩んでるところだ」

「ふふ……間違えるとB A D E D直行ですね」

俺の上げた選択肢にアルが話に乗ってきた。

「やっぱりアルもそう思うか？」

俺的には親玉を倒しそうにないBのほう为正解に思っただが、Aのほうは新しい世界が開けそうなんだよ」

でもAは行つてはいけない気がする……
行ったら最後……帰ってこれなさそうだ。

「何言つてんのかサッパリなんだが……
結局どつすんだ？」

ナギがどつするのかと聞いてくる。
やっぱりBにするか。

「まあ無難にBつてことで外の敵の相手をしてるわ。
ナギ、姫子ちゃんの事は任せたぜ」
「おう、任せろ！」

ナギたちと話していると、味方の軍の代表の子が話しかけてきた。

「ナギ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「おう」

やっと揃ったか…

んじゃ俺はこいつらの道を開けるためにいっちょドでかい技を放つてやるかね。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入出来る。」

頼んだぜ！」

「ハッ！」

むっ、いかん。

このままだと俺の攻撃の巻き添えになってしまうな。

「ああ、ちよつといいか？

お前らが突入する時に俺が通り道を作ってやるよ。

そしてセラス嬢…

あんたら混成部隊は遠くからの射撃だけにしてくれ、近くに行かれると俺の攻撃

の巻き添いになっちまうからな」

「了解しました！」

すると連合・帝国、両陣営の説得に行ってたガトーからの連絡が来た。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。

帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう…
決戦を遅らせることはできないか？」

曲りなりのも世界の危機だつてヤツなのに…
まだ意地の張り合いをやってんのかよ。
どうしようもないクズどもだな。

「無理ですね。 私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ。 彼らはすでもう始めています… 『世界を無に帰す儀式』
を。」

世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

姫子ちゃんも災難だな。

恨むなら連合と帝国を恨むんだな。
クズの集まり

「ああ… よし行くか！ メフィスト、やってくれ！」

「りょーかいっと。 んじゃとくとご覧あれ」

俺は単身で宮殿に近づいていく。

すると中から自動人形・召喚魔がわんさか出てきて宮殿への道を塞いでいた。

上等！ この魔法は高威力すぎて使う相手がいなかったからな…
腕試しだぜ！

「私の呼び掛けに応えよ、幻獣神召喚！ 来い！ 『バハムート』！
固定！ 掌握！ 術式兵装『龍神烈火』！！」

『龍神烈火』

それは幻獣バハムートを闇の魔法で取り込んで発動する術。
姿形は…身体は黒い甲殻に覆われ、背中に巨大な翼が生え、手足の
爪は鋭くなる。

そして頭には、龍の…バハムートの頭に似た兜を被っていた。

「へえ……かなりかつこいいじゃねえか。

これはあれだな…龍人状態とでも呼ぶとするか」

へえ…ステータスは幻獣のを自身に上乘せ。

そして翼を使った移動ではマッハ2の速度がだせるらしい。

てか俺のステータスって幸運以外EXじゃなかったか？

それにさらに上昇するとなるとEXを超えてGODにでもなんの
かね？

「んじゃ早速いつてみつか！ はあああああつ！」

俺は自身の魔力で作る光弾＋大気中のマナを収束、合成させ、

「喰らいやがれッ！ 『ギガフレア』！！」

「ギガフレア」を悪魔の密集地点に放つ。

バハムートの「メガフレア」も強力だが、闇の魔法で強化された「
ギガフレア」は更に威
力が増幅していた。

膨大な魔力を秘めた光弾が高速で飛来する。

そして悪魔が避けられずに当たったかと思うと、いきなり光弾が巨
大化して射程範囲内のも
のを例外なく焼き尽くした。

この一撃で敵の3分の2は消し飛ぶ。

「おい、メフィスト！ 宮殿に当たったらあぶねえだろうが！
姫子ちゃんに当たったらどうするんだよ！？」

あまりの威力にナギが文句を言ってくる。

でも俺もここまで威力があるとは思わなかったんだ。

「わり（汗） 初めて使う技でな… 威力がわからなかったんだわ。
まあ気にすんなよ。 さっさと行かないと道がふさがれるぞ？」
「それもそうだな… よおしっ、野郎ども… 行くぜっ！」

…
…
…

ちゃんと辿り着いたな。

さて、こっちはこっちで残りのゴミ掃除と行きますか。

「さて、有象無象のザコども… 駆逐される覚悟はできたか？
消し飛ベツ！ 『メガフレア』！！」

敵が密集しているポイントへ何発か撃ちこむ。

流石に「ギガフレア」は範囲が広すぎて「墓守り人の宮殿」を巻き
込みかねなかったので

威力の弱い「メガフレア」を更に弱めて残りを掃除していく。

大体は消し飛んだが、何体かは俺の攻撃を避けて混成部隊のほうに

攻撃を仕掛けていた。

「はっはっはっ！ 今日俺は全力を出せて気分がいい！
ゲート・オブ・バビロン
だから王の財宝も全力全開だあ！」

さすがに味方が近くに居るのに「メガフレア」を撃つ訳にもいかな
いから、宝具を雨あられの
様に投下し残りを撃破していく。
そして生き残りがもはや数えるぐらいの数になった頃、

ズズン…… ズンツ ズドドツ ズドンツ ズガアアアンツ！！

墓守り人の宮殿に衝撃と雷撃が走った。

ナギのヤツ、殺ったか。

だが、このあとにはまだアレがあつたな…

「セラス嬢！」

「なんですか？メフィスト殿」

「なんか、マズい事になりそうだ！ 今すぐ軍を宮殿から離させる
！」

「ハ、ハイ！」

切羽詰まった表情で言えば言うこと聞いてくれるもんだね…
じゃあ俺も離れてアレが封印されるトコを見るか。

……

……

…

離れたすぐ後に、宮殿の中心部から光球が現れ周りの魔力を吸いつつでかくなっていく。

そこに、メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦と、帝国軍北方艦隊の大軍が現れる。

そして大きくなる光弾を包囲するように軍を展開。

姫さんの号令とともに大規模反転封印術式を発動し、光球を封印した。

なんか、いいなここの…

敵同士が共通の敵に向かって力を合わせるって絵になるな…

ん？ その考えでいくと俺も倒される時には絵になるってか？

まあ俺を倒しに来るような勇者なんて誰もなりたがらないか…

とにかく、この幻想的な光景を見て…俺は感無量だ…

コスモエンテレケイア

完全なる世界との最終決戦の後、ナギ達紅き翼は魔法世界の住人に

アラルブラ

「英雄」と崇められた。

そして、しばらくして……………

オスティアが墜ち、アリカ姫と俺が「コスモエンテレケイア完全なる世界」の黒幕だとい
うことで

俺は魔法世界の住民に疎まれ、姫さんは投獄されてしまった。

第拾参話 『ラストバトル！ 披露するは最凶の一撃』（後書き）

ついに出了た、オリジナル魔法。

実はこれのためだけに幻獣を取り入れたと言っても過言ではないです！（おい

今回出た選択肢ですが、原作に追いついたら別のSSをやるうと考えています。

まあ追いつけるまではやらないので……

ではオリジナル魔法の説明を、

『龍神烈火』

幻獣バハムートを闇の魔法で取り込んで発動する術。

姿は、身体は黒い甲殻に覆われ、背中に巨大な翼が生え、手足の爪は鋭くなる。

そして頭にはバハムートの頭を象った兜を装備。翼を使った移動ではマッハ10の速度がだせる。

この状態を龍人状態と呼ぶ。

ステータスはEXを超えてGOD。

効果は4つ。

？・幻獣のステータスを自身に上乘せ。

？・魔力障壁を張らない状態でもほとんどの魔法が通用しなくなる身体になる。（具体的に言うと、ラカン強さ表で戦闘力1万前後が必要）

？・大気中の魔力、更には少しだけだが星の生命力すら掻き集めて

魔力に変換し、自分の魔力として運用できるようになる。

？・バハムートの必殺技「メガフレア」が進化し、「ギガフレア」となる。

青白い光弾から赤黒い光弾へと変貌し凶悪性が増した。

攻撃範囲は、第一被害は半径1 km。さらに着弾した地点から吹き荒れる熱風は周りの木々、建物などを根こそぎ薙ぎ倒してしまう。最終的な被害状況は半径3 kmとなる。

第拾肆話 『メフィスト…魔獣蠢く溪谷で散る』（前書き）

アハハハハハッ！

PV30万アクセス、ユニーク3万アクセス超えたー！

作者は嬉しさのあまり踊り出します！

あいかわらず文章力が残念ですががんばります！

第拾肆話 『メフィスト…魔獣蠢く溪谷で散る』

アラルブラ
「紅き翼の隠れ家」

大々的に指名手配された俺は隠れ家でこれからの事を考えていた。

さて、ここまでは予想通り…

こつからどうやって上手く事を運ぶかによって俺の未来が変わるな…
ナギは姫さんの言つとおり各地の人々を助けた事にしたようだ。
さてと、それじゃ俺の自由のために動きだすしますか…

…

…

…

「なあ、ナギ。

一つ俺の頼みを聞いてくれないか？」

「なんだよ、もったいぶつて？」

考えが決まった俺はナギ達を呼び出す。

「俺を捕まえて連合に突き出せ」

「「「「ハアア！？！？」「」「」

またこれかよ……

いい加減ほかのリアクション取れないのかね〜

「ハア！？何言っただお前！
死に行くようなもんだぞ！？」

いい加減やかましかったので一発ナギの頭を殴って黙らせる。

「まずは落ちつけ、バカ。

捕まえて突き出した後は俺に掛かってる賞金を無くしてほしいんだ」

「なっ！　それが狙いか？」

「まあな。そろそろ俺は静かな隠居生活を送りたいんだよ…
このままだと前より煩わしい事になりそうだからな。

俺の願いを聞き遂げてくれたらお前らの言うことを出来る範囲で叶えてやる」

「……………俺はいいぜ。お前らは？」

「俺もいいぞ。このままメフィストに全部擦り付けていくのは反対だしな」

「そうですね……………私も協力しましょう」

「てかメフィストならメガ口滅ぼせばいいんじゃないかね？」

ジャックがアホな発言をしてきた。

……………それもそれでアリな気がして来ちまったぞ……………

「……………つつい楽しそうな意見が出たから考えちゃったじゃねえか。
それじゃダメなんだよ、ジャック。姫さんはどうすんだ？」

「あゝ、スマン」

アホ丸出しなジャックも姫さんを引き合いに出すと気まずいみたい

だ。

「俺一人が犯罪者になるのはまあいいんだ。これまで通りだしな。だが、姫さんまで俺みたいにする訳にはいかねえ。」

おそらく俺と姫さんはこの国のもつとも残酷な処刑……魔獣つめくケルベラス

渓谷に落とすとかになると思う。

それで処刑の日に俺がなんとかして姫さんを助けてやるよ」

「……………」

「でもまあ………どっかの誰かさんが助け出したいんなら邪魔はしねえよ。」

俺は自力で抜け出すだけだ。

まあ時間はまだある……それまでに答えを出しとけよ、ナギ」

「………けっ、吸血鬼に諭されるようじゃ俺もまだまだだな。」

まだ答えは見つかんねえが……処刑日までには答えを出しとくぜ」

「ああ、わかった。お前らもよろしく頼むぜ」

………

………

………

〔連合最辺境ケルベラス無限監獄〕

俺は今、ケルベラス無限監獄に収監されている。

時々来る議員っぽいおっさんの皮肉めいた話を聞く限り俺の賞金はなくなったらしい。

しょっぱかれた当初は罵詈雑言が嵐のように飛んできてウザかった。中には殴ってきたバカもいたが、魔力は封じられているが気は使えたのでバレないように

身体強化をして迎え撃つたらどうやら腕が折れたようだった…

それ以来、俺に力に対抗しようと思うマヌケはいなくなったわ。

処刑まであと約2年…… ちと先走ったか？…… 暇すぎる……

〔2年後〕

原作通り、俺と姫さんは魔獣蠢くケルベラス溪谷に落とされることになった。

……

……

…

〔処刑場前〕

久しぶりに姫さんにあつたわ。

2年も収監されていたせいで少し痩せ細っていたけど、いまだ凛とした態度でいたよ。

流石だね。

「おゝい、姫さゝん。おひさゝ」

シーーーーーン

あつれえゝ？ 俺嫌われてる？

シカトこかれた……テラシヨックorz

「――古き残虐な処刑法ですが……」

そこの罪人！聞いているのか！？」

うつせゝなあ。俺は姫さんにシカトされて心に大きな怪我を負ってそれどころじゃねえんだよ……あんま喚くとブチ殺すぞ！

俺は殺意の籠もった視線を得意げな顔で処刑の説明してるジジイに送るが、優位の立場に

いたせいかあまり効果がなかった。

ウザってえな…次に魔法世界に来たらメガ口滅ぼしてやろうかな…

「まあいい。この処刑でもって魔法世界全土の民も溜飲を下げるこ
ととなるうぞ。」

さあ、災厄の魔女に闇の僭帝よ！自ら歩いて穴に落ちろ！」

兵士が寄ってきて俺達に槍の矛先を突き付けて催促してきた。

「触れるな下郎。言われずとも歩く」

………おおうorz 名前も出てこないモブキャラには受け答え
するのに俺には答えてく

れないだと……

これはデカい… 俺の心にクリティカルヒットしたわ……

やべっ アホな事考えているうちに姫さんが俺より先に行きそうになってる。

「待て待て、姫さんや。ここは俺が先に行く」

俺はさつさと姫さんを追い抜き穴へとダイブした。

降下中に手枷を力任せに引きちぎる。そして俺を今まさに食おうとしてる魔獣の前歯ら

しき場所に拳を叩きこむ。

拳をくらった魔獣はどうやら歯がへし折れひるんだ。

そのすきに地面に着地。そのまま他の魔獣相手に孤軍奮闘した。

そんなことをしていると、上から姫さんが落ちてくる。

もしかしたらナギが来ない可能性を考え受け止めようとするが、

「任せろ、メフィスト。それは俺の役目だ」

「へっ、随分いいタイミングで来たな」

ナギが姫さんを受け止めた。

さて、あとはここから抜け出すだけか…

………

……

…

うし、到着。

俺は気合いで谷をよじ登ってきた。

登ったとこで見た光景は、紅き翼が処刑を護衛していた軍を一方的に蹂躪している光景だった。

うっわ 楽しそうじゃねえか！

「おい、ジャック！何楽しそうなことやってんだよ！俺も混ぜろ！」

「ん？ おお！メフィストじゃねえか！ここにいてことは無事抜け出せたんだな？」

「当然だろ？俺はもはや誰にも殺せないような最強の魔法使いだぞ」

「ワッハッハッ！そのうち吼えずら掻かせてやるから覚悟しな！」

ジャックとバカ話をしているといつの間にか戦闘が終わってた。くっ……乗遅れちゃった……

戦闘が終わって俺達のもとに紅き翼のメンツが集まってくる。

「おや……無事に抜け出せたようだなによりです」

「俺にとっちゃ余裕だ」

「そっぴやナギと王女殿下はどこだ？」

「あいつらは空でイチャついてるよ……おっ、ナギのやつプロポー

ズしたぞ」

「ふふ……めでたい事ではありませんか」

「まあな、お前らのおかげで俺も自由の身だ。サンキューな」

「いいってことよ。お前が黒幕に仕立て上げられたのは俺等の力不足もあるしよ」

「そういや、メフィスト。俺の故郷の日本で封印されている鬼が復活しそうらしい」

んだ。そこでお前に封印の手伝いを依頼したい」

「おつ さつそく注文が来たな。」

いいぜ、やってやるよ」

日本か…エヴァが呪いを受ける時まで京都に隠居するか…

「おゝい、ナギゝ。悪いんだがこつち来てくれないか？」

やべっ ナギがなんか不機嫌になってる…怖くないがな」

「んだよ、メフィスト。つまんねえ用件だったら殴るぞ」

「そうツンツンすんなよ。お前にはもう一つ頼みがあるんだ」

「なんだよ、頼みって？」

「実はな… 日本に俺の妹がいるんだよ。」

エヴァンジェリンって名前の子がな。知ってるか？」

「エヴァンジェリンってあの闇の福音だろ？」
ダーク・エヴァンジェル

「そうそう。それでな…」

もしお前がエヴァに会ったら、登校地獄を掛けて麻帆良学園つてここに連れて

いってくれ。もし会って呪いを掛けたら俺に連絡をくれよ」

「まあ俺はこれから世界各地を放浪するからな…
会ったらやっておくぜ。でもいいのか？
結構借りがでかくなるぞ？」

「別にいいぜ、俺達是不老不死だからな。
何十年ほど縛られても大丈夫だ」

「そうか…今はまだ特にないしな…
そのうち考えておく」

「ああ、わかった。ちゃんとあの姫さん守ってやれよ」

「当然だぜ」

「ならもう言うことはない。

行くぞ、詠春。ではいつの日かまた会おうぞ、紅き翼の諸君」

「よし、では行くか」

「次会ったらまた勝負だぜ！ 次こそは勝ってやる！」

「何頼むか覚悟しておけよ！」

「ふふ……どうせすぐに会えそうなのがしますね」

「俺の出番これだけかorz」

なんかガトーが落ち込んでるが気にしない〜っと。
それじゃあ京都で静かに隠居だ！

第拾肆話 『メフィスト…魔獣蠢く溪谷で散る』（後書き）

今回の話は鳴る神さんの話を模範させてもらいました。

作者は想像力が乏しいのでこれ以上の賞金の解決策を思いつきませんでした。

申し訳ありません。

鳴る神さんにはちゃんと許可をいただきました。

第拾伍話 『ナギの頼みごと』

〔京都〕

魔法世界から帰ってきた俺は詠春とともに京都までやってきた。

そこで、リョウメンスクナノカミとかいう鬼神が復活してきたので軽くフルボッコ。

さくつと封印して後はエヴァが呪われるまで京都で引き籠もってた。

3年間もやることがないのはあまりにつまらん。

ということで詠春に「京都神鳴流」を教わって時を過ごしていた。

……

……

…

この3年で大体を習得してきた時にナギから連絡が入ってきた。

“ よお、メフィスト。”

約束通りエヴァンジェリンに呪いを掛けて麻帆良に連れてきたぞ”

“ おお、お疲れ。もう麻帆良にいるのか？”

“ ああ、いるぜ”

“ りょくかいつと。それじゃすぐそっちに向かうわ”

おっと、あっちに行く前に詠春に挨拶していくか。

「おーい、詠春。今まで世話になった。」

俺はこれから麻帆良に行くわ」

「そうか……。大丈夫だとは思うが気をつけろよ。
一応、お前の名前は知られすぎているからな」

「まあな、でもトップを抑えておけばなんとかなんだろう。
ああ、それと…神鳴流を教えてくれてサンキュな」

「不条理だよな……。これは3年程度で覚えられるもんじゃないんだ
が…」

「まあ気にすんな。俺が規格外なだけだ。
それじゃあな！子供でも出来たら顔を見に来るわ！」

「なっ！ナギじゃあるまいし…気が早いぞ！」

「頭の片隅にでも置いておけ、それじゃまた会おう」

ヴィマーナでさっさと麻帆良に行くとするかね…

………

……

…

〔麻帆良学園〕

今、俺は麻帆良学園の中にいる。
そして目の前には麻帆良の学生服を着たエヴァが肩を震わせて佇ん

でいた。

「可愛い！実に可愛いぞ、エヴァ！」

「ホ、ホントか、メフィスト！？か…可愛いかな！？／＼／」

「ああ！実に素晴らしい！今までの服もよかったが制服姿も実にいいぞ！」

ホント可愛いな！

このままお持ち帰りしたくなるほど可愛いわ！
あまりの可愛さに抱き締めて愛でる俺。

「アハハハハハハハハハッ！！

似合う！素晴らしく似合ってるぜ、エヴァンジェリン！」

「ホントじゃのう。600万ドルの賞金首にはとても見えんわい」

「あ、ありがとう…メフィスト／＼。

外野、うるさいぞ！少し黙ってる！」

腕の中でエヴァがナギとじじいに吼える。

「まあまあ。学校生活も楽しいもんだって。

経験無いんだろう？」

「学校を中退したヤツに言われても説得力無いぞ」

「ぐっ！い、いいんだよ、俺は！」

ホント、コイツが言っても説得力無いよな…

だからこいつはバカなんだ。

「まあいいさ。おいじじい、エヴァを学校に通わせるのか？」

「フッフッフオ。小学生ではちと可哀そうだしの…

中等部に編入ということでもいいかの？」

個人的にはランドセルを背負っているエヴァを見たい気もするが…
流石に面白いそうだな。

「そんな所だな。ちゃんとエヴァの賞金を消すんなら了承してやる」
「わかっておる。お主には少し学園の警備の方をお願いしたいんじゃないか…」

警備ね…

ここには正義が大好きな人間がウジャウジャいると聞いたが、そこは大丈夫なのかよ。

「……この学園にいる正義が大好きな魔法使いのガキどもを説得出来たらいいぜ。」

そんでもって俺とエヴァに攻撃してきたら殲滅する。
この条件を飲むんなら警備をやってもいいぞ」

「ふうむ……説得がちと骨が折れそうじゃが…
よかるう。かの『幻獣使い』が警備するなら安いもんじゃ。
魔法先生にも徹底させておくぞい」

あつ そっぴやナギの頼みごとをまだ聞いてなかったな。
先にそつちを聞いておくか…

「おい、ナギ。俺への頼みごとは決まったか？」

「ああ、決まったぜ。
そのうち俺のガキが出来たら故郷のウェールズに預けておこうと思ってるんだ。」

そこで一人前になるまでメフィストに護って貰おうと考えている

「んだが、いいか？」

「おお……こりやなんとも面倒な頼み事だな……」

「過保護にするつもりはないぞ……」

「本当に命の危機つてときだけ助けてやる。それでいいか？」

「ああ、十分だ。助かるぜ！」

「了解した。じゃあガキが出来たら連絡をくれ」

「ナギの子供の警護か……」

「やっぱりナギみたいに生意気なのかねえ……」

「っと、じじいに断りを入れとかないと。」

「じじい。悪いんだがナギの方が先約でな。」

「警備の件は後回しになっちまってもいいか？」

「フオツフオツフォ。なぐに構わんぞい。」

「気長に待っているとするかの」

「俺の事は他のヤツらに言うなよ。『闇の福音』が来たっただけで騒ぎそうなのに」

「仕事をしない俺が居ると知ったら更に騒ぎそうだからな」

「……確かにそうじゃのう。」

「ではお主の紹介は、ナギの件が終わって麻帆良に帰ってきたらというカタチでいいかの？」

「それでいいぞ、じじい。」

「まああと何年かはここに居る予定だから、手に負えないようなや」

つらが来たら手伝って
やるよ」

「よろしく頼むぞい」

おっし、これでエヴァの身の安全は確保できたな。
あとはエヴァの了承を取るだけだ。

「なあ、エヴァ。少し窮屈な事になるがここで静かに暮さないか？
もう少ししたらその呪いを解いてやるからさ」

「賞金もなくなるし、メフィストも一緒ならいいぞ」

「よし、決まりだ！

そういう訳でじじい！さっそく俺達の家を建てろ！」

「人使いがあらいのう。まあ任せておけ」

「それじゃそろそろ俺はいくわ。
メフィスト！約束は守れよ！」

「わかったからさっさと行け。立派な魔法使い殿」
マジステル・マジ

………

………

…

業者共を馬車馬のごとくキリキリ働かせ、2階建てのログハウスが

完成。

家具は学園長に全額負担させ住みやすい環境を整えた。

俺はいつ日本を離れることになるか分からなかったので仕事をせず、家で神鳴流の練習をして過ごしていた。

エヴァは学校に通い始め、俺は引き籠もりの生活をしてナギからの連絡を待った。

あつ　ちなみに詠春が結婚したらしい。

そんなある日…

「そっいや、メフィスト。」

魔法世界でなにやってきたんだ？」

「ん？ああ、そっいや話してなかったな。」

紅き翼と協力して世界を壊そうとする集団を駆逐してきた。

そんで何故か俺がその敵の黒幕だつて言われてな」

それを利用して世間的に俺は死んだことにして賞金を無くしてきたんだよ」

「なんでそんな正義の味方のようなことをしてきたんだ？」

「金稼ぎ」

シーーーーー

一瞬時が止まった気がするけど…気のせいだよな？

「え、えつと…気のせいかな？」

今、金稼ぎって聞こえたんだが…」

「大丈夫だ。エヴァの耳は正常に働いてるぞ」

「そんな理由で私を何年も放置してきたのかー!？」

ウガァとエヴァが怒ってきてしまった…

怒るエヴァも可愛いな

そんなことを考えてるとエヴァが少し俯いて、

「…うつぐ……処刑されたと聞いて…ぐすっ…心配…したんだぞ？」

泣き出してしまった。

あゝ ちよつと悪ふざけが過ぎたな…

「悪い悪い。さっきのはウソだ。

なにやら本気の力を使えそうな戦いになりそうだったからな。

腕試しに行ったようなもんだよ。

金稼ぎつてのは敵組織を一人で潰したときにガメてただけで、副業だな。

それで黒幕扱いになったから処刑を利用したんだよ。

ごめんな、心配させて」

俺はエヴァを抱きしめ頭を撫でてなだめる。

「くっっ／／／これも久しぶりだな／／／

メフィストに抱き締められると落ち着くぞ／／／」

しばらく撫でるとエヴァが寝入ってしまった。

今日はこのまま寝てしまうか…

〔5年後〕

神鳴流の奥義を全て極めてやる事が無くなりダラけて来た頃、やっとナギから連絡が来た。

“ よお、メフィスト。久しぶりだな。

ついに俺にガキが出来たぜ、息子だ。まだ生まれてないが予定通りウェールズに

預けることになるから護衛の件、頼んだぜ”

はあ… やつとか…。もう原作知識もないし不測の事態が起きたらどうすっかな…

まあなんとかなるか。

“ やつとか…おせえよ。

それじゃこれからウェールズとやらに向かうとするわ”

さて、じじいにウェールズってとこの情報を貰うとするか。

………

……

…

〔麻帆良学園・学園長室〕

「おい、じじい。ウェールズってところについて情報をくれ」

「いきなりじゃな。ウェールズはイギリスの中にある地方のことじゃ。」

あそこにはメルディアナ魔法学校というところがあるの。ちなみにそこの校長とは友達じゃぞ」

「友達か…なら今すぐ俺の紹介文を書いてくれ。
これからウェールズとやらに行くことになった」

「ほほ。ナギから連絡があつたのかの？」

「ああ、そうだ。ちゃっちゃと行きたいからさっさと書け」

「じじい虐待じゃなかるうか…
サラサラサラっと。ホレ、これを見せれば大丈夫じゃ」

「サンキュな、じじい。
大丈夫だとは思うが、もしエヴァに危害を加えるような事があれば学園を消すからな」

最後に殺気を込めた視線を送り脅しておく。

「ふお！わ、わかつとるわい。
ちゃんと約束は守るからそんな殺気をぶつけないでくれんかの」

メフィ「いいだろう…それではな」

さて、エヴァに了承を取らないとな…

……
……

…

「おつ エヴァー、今ちよつといいか？」

「どうした、メフィスト？」

さて、どう切り出すか…

また何年か一人にさせてしまうな…

「ああ、実はな。ナギに息子が出来たらしくてな。

それでそいつの護衛をすることになったんだよ。

それでしばらく日本を離れることになるんだが…行ってもいいか？」

「……………どうしても行かないとダメなのか？」

「ああ、ナギと約束してしまったしな。

それに俺達の賞金を消すのに一役買ってくれたし。受けた恩には報いないとな」

「そうか……………わかった。

ホントは良くないが行ってきていいぞ」

「ごめんな。またエヴァに寂しい思いをさせてしまう」

「いや、構わん。そろそろこの身体にも慣れてきたからな。

一人で色々と出来るようになるにはちょうどいい機会かもしれん」

「そっか。エヴァはいい子だな」

あまりにも健気な事を言ってきたため頭を撫でてあげる。

「くっ／＼／ 子供扱いするな！／＼」

ハッハッハッ 赤い顔で反論しても可愛いだけだぞ。

さてと、ウェールズに行く前に詠春とこに行って子供の顔を見てい
くかな…

………

……

…

〔京都 関西呪術協会・総本山〕

ふう、到着つと…

へえ…結界があるのか。だが俺には関係ないな。

「アダアット、永界の指環。

気配遮断結界発動。範囲、自身の1m四方」

よし、少し詠春を驚かしてみるか…

………

……

…

おっ、いたいた。なんかやつれて見えるな、過労か？
剣士のくせに長なんかやるからじゃね？

「よお詠春。大分「ぬお！ズバツ！」疲れてそうだな」

浮遊術で逆さに浮きながら声を掛けたら剣で斬られてしまった…
いつてえ…

「いてえじゃねえか！何しやがる！？」

「それはこっちのセリフだ！てか結界は！？
メフィスト！どうやって入ったんだ！？」

やっぱり平和ボケしてるな。
俺が結界なんぞに引つ掛かるわけないだろう。

「はん。俺が結界程度にバレる訳ねえだろうが！
っとそんなことはどうでもいい。まずは子供、娘だっけか？おめでとう」

「あ、ああ。ありがとう。」

今日はいつたいたどうしたんだ？」

「ああ、実はな。ナギに息子ができてな…
それで息子が一人前になるまで護衛を依頼されてしまってた…
これからあいつの故郷のウェールズってところに行くことになったんだよ。」

それで日本を離れる前にお前の娘を一目見ておこうと思ってな」

「そうか…お前も色々大変だな、ガンバレよ。
娘を見るね…手を出したら承知しないぞ」

うわ、こっわ…めちゃくちや殺気が飛んでくるんだが…
てか組織の長やつてるヤツに苦労を労ってもらってもな。
どう考えてもお前の方が大変だろ。

「俺も過保護と自負してるが…お前も相当だな」

「うるさい！娘は友達と遊んでるぞ。
今は川のほうで遊んでるんじゃないか？」

川か…ちょっと千里眼で探してみるか。

搜索中

おつ、発見。ん？近くにいるあの子……

人間じゃない気配がするな…いや、半分は人間…か？

「なあ、詠春。髪をサイドで纏めてる子だけどさ。

あの子って人間か？」

「ふっ…メフィストには隠し事ができないな。

あの子は烏族と人間のハーフだ。両親が死んで里を追われたところを私が保護

したんだよ。今は娘の一番の友達だな」

なる…烏族ね。てことは近くにいたあの子が詠春の娘か。

「そっぴや名前はなんて言うんだ？」

「娘が木乃香、もう一人の女の子が桜咲刹那だ」

木乃香嬢に刹那嬢ね…

「おい、詠春。

ありや将来、美人になると思っただがお前はどっ思っよ？」

「俺の娘だぞ。美人に決まってる！」

「親バカだなあつ、あの子川に落ちちゃったぞ」

「なにい！？おい、メフィスト！

どこの川だ！教える！」

「落ち着け、バカ。お前は仮にもこの長だろうが。
その長がここをそう簡単に離れてどうする？

俺が行って助けてきてやるよ」

俺は影の中に入り転移した。

………

……

…

木乃香嬢の影に転移したからいきなり川の中に転移してしまった。
うおっ、ちよつとビックリしたわ。

着物を着てるから結構重く感じる…

よしっ、あとは川から出るだけだな…ってええ！？

刹那嬢が木乃香嬢を助けようとしたのか川の中に入ってきたよ！

そして…おいおい（汗）

流れに負けて溺れちゃったぞ…

ふう…しゃあない。こっちも助け出さないとな。

…

…

…

二人を抱えて川から上がってきた。

さて、まずは火を起こさないとな。

そこらへんの木から枝とか燃えそうなものを集めてつと。

「魔法の射手 火の1矢」

火属性の魔法の矢で火を起こす。

あとは王の財宝から毛布を出してこの子たちを包んで…
ゲート・オブ・バビロン

刹那嬢の方は巫女服だからこのままでいいが、木乃香嬢の方は着物が水を吸い過ぎてまずいな。
少し脱がしておこう。

やっべ…この光景、詠春に見つかったら斬り付けられそうだなぞ…

“おい、詠春。救助したぞ。迎えよろしく”

“わかった！”

いつまでもここにいる訳にはいかないので迎えの用意を催促した。

「ん…んん…ハッ！このちゃん！？」

どうやら刹那嬢のほうに先に気付いたようだな。

「気がついたか？」

「！！誰ですか？」

ん？なんで警戒されてんだ？

「警戒するな。俺はお前たちを川から助け出した者だ」

「あつ！そうとは知らず失礼しました」

素直だな。やっぱ子供はこれぐらいじゃないとね。

「ん…ここは？あれ、ウチ確か川に…」

「このちゃん！よかった…」

木乃香嬢も気が付いた。

どうやらどこかを怪我した様子もないしケルキオン医称なる双蛇の杖を使う必要はなさそうだ。

「せっちゃん？せっちゃんが助けてくれたん？」

「ううん。この人が」

「そっかあ。お兄さん、助けてくれてありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして。ダメだぞ、詠春を不安にさせるようなことしちゃあ」

長って立場からただの親バカになっちまうからな。

「えろうすいませんなあ。ん？ウチのお父様と知り合いなん？」

「ああ、そうだよ。おっと、自己紹介が遅れたな。

俺はメフィスト・マクダウェル。近衛詠春の友達だ」

「ウチは近衛木乃香や」

「桜咲刹那と申します」

ちゃんと自己紹介も出来るなんて…教育が行きとどいているな。
感心したぞ、詠春。

「木乃香に刹那ね。まずはここで温まって、そのあと家に帰ろうか」

「はいな」

「はい」

うん、満面の笑みだ。詠春が親バカになるのもわかる気がするぞ。
二人の笑顔に癒されていたら刹那が泣き出した。

「……………うっぐ……………グスッ……………」

「せっちゃん？いきなり泣き出してどうしたん？」

「守れなくてごめん、このちゃん。ウチもつとつよおなる」

「えーそんなんええよ…。一緒に遊んでくれるだけで」

まあ俺が口を出す雰囲気じゃないし…
見守っているかね。

ブロロロロロロロッ

ん？これは車の音かな？

「このか！無事か！？」

「お父様！ごめんなあ、心配掛けて」

木乃香が立ち上がって詠春に抱きつく。

「いや、このかが無事ならそれでいいんだ。
メフィスト、ありがとな」

……はあ………バキッ！

俺はおもいつきり詠春の頭を殴っておく。

「お前はあれか？人の言うことをきかんのか？
長がそう簡単に本部から離れてどうする！？」

「娘のほうが協会なんかより重要だ！」

「この親バカがア！」

今度はさつきより強めでもう一発殴っておく。

「まあいいや。目的も果たしたしそろそろウェールズに向かうとするわ」

「一日ぐらいはこっちにいればいいのに。」

夜は宴を開いてもいいんだぞ？」

「俺をなんて紹介すんだよ。俺みたいな日蔭者には居づらいわ」

まったく…他の有象無象にバレたらどうすんだよ。

「メフィストはん。どっかいつてしまうん？」

「ん？ああ、このかか。」

ちょっと用事があってな。ここに寄ったのはついでなんだよ」

「どこに行く予定なん？」

「え〜っと…あそこは確かイギリスだったな。
イギリスまで行ってくるんだ」

そう言うとき木乃香が俺に近づいてくる。
そして服を引っ張りながら言った。

「それじゃあ、助けてくれたお礼をせんといけまへんな。
メフィストはん。少し屈んでくれまへん？」
「ん？これくらいでいいか？」

どのくらいかわからなかったのじゃがむ。
すると…

ちゅっ！

なんとこのかが俺の頬にキスをしてきた。

「えへへ。おれはお礼や」

「あ、ああ。ありがとな、このか。

（げっ これは……マズいぞ……詠春がキレる……）

「メフィストオー！！」

予想どおり詠春が斬り付けてきた。

うおー！！すげえ気迫だな…

顔が般若のようになって夕風を振り回してくる。

「こ、このか！そういう事はもうちょい大人になってからやれ！」
「？大人になつたらやっていいん？」

やべっ さらになんか誤解させてしまった…

「神鳴流奥義ツ！雷鳴剣！」

詠春が奥義まで使ってくるよ。
面倒だ……。

「うお！あぶねえな！」
詠春、てめえ！当たつたらどうすんだ！？」

「うるさいわあ！素直にくらって死ねえ！斬空閃・散！」

おお… どんどん斬撃を飛ばしてくるなあ…
さっさと逃げるか。

「じゃあな！このか、刹那！」
いつの日かまた会おうぞ！ではさらばだあ！」

三十六計逃げるが勝ちってね。

第拾伍話 『ナギの頼みごと』（後書き）

木乃香と刹那のフラグ立ちました。

この2人…作者は大好きです。

これから何人か作者が好きな子のフラグを立てて行きます（笑）。

第拾陸話 『護衛任務 in ウェールズ』

「1993年 ウェールズ」

俺は今、メルディアナ魔法学校の前にいる。

詠春から脱兎の如く逃げ、ヴィマーナを爆走させて到着した次第だ。

「そっぴいや結界とかあんのかね？」

まあ俺にとつちや関係ないけど……」

気配を消してさっさと校長とやらに会いにいくとするか……

……

……

…

「校長室」

おっ それっぽい部屋発見」

中には…… よしっ 校長らしき人物以外、誰もいないな。
それじゃ失礼」

「初めまして、校長殿」

「……だ、誰じゃ!？」

やっぱりバレてなかったか。

イタズラ成功ってね」

「驚かしてすまない。だが俺は訳ありでね…
この手紙を読んでくれると助かる」
「……………承ろう」

—— 黙読中 ——

「事情はわかった。だが何故黙って入ってきたのだ？」
「じゃあねえだろ。あまり人目に付きたくないんだよ」

イタズラの意味もあつたけどな。

「だが、ホントにあの賞金首なのか？」

「……ハア。なんならこのイギリス毎、海ん中に沈めてもいいんだぞ？」

軽く殺気を込めて脅してみる。

「むっ！わ、わかった。疑ってすまんかった…」

「まあいいさ。公には俺は死人だからな。」

俺がここに来たのは最低限の人間に俺が居るってことを理解させるためだ」

「了解したぞい。だがワシに教えても良かったのか？」

「構わん。誰にもしやべらないでバレた時にこじれるよりはいいからな」

「わかった。それでお主はどうやって護衛をするつもりじゃ？」

「まだ未定だが、森の中で引き籠もって過ごすつもりだ」

「うむ、わかった。何か必要になったら言いにきてもよいぞ？
大体は揃えよう」

「ほう。 気前がいいな。流石、じじいと友達だけはある」

「じじい？近右衛門のことか？」

「その通りだ」

さて、こっちの最高権力っぽいヤツに挨拶したし、あとはあいつの息子を守るだけだな。

〔1997年 ウェールズ ナギの故郷の村の郊外の森〕

あゝ ひゝまゝだゝ

ナギの息子、ネギがこの村に来てもう4年。

なんかネギが木から飛び降りたり、冬に湖の中に行ったりとかしやがったが、自分でやつ

ていたので放置した。そのせいで死んでも自業自得だ。

それにしても… 見ている限り生真面目そうな雰囲気だな。

ありや、母親似だな。

にしてもな　暇だな

ナギはともかく、姫さんの息子だから連合のじじいどもがちょっと
いを出してくると思っ

たんだがな…

いまだにそれらしい気配もないしな。

ん？ 何だ？この気配は……………っ！

悪魔の召喚か？それにしても…なんだ、この数は？

ちい！面倒な……

さっさとしてぶちのめしてくるとするか。

………

………

…

「村から30km離れた地点」

俺は今、召喚反応があった地点に来ている。そこには空の青が見え
ないほど…てか見えないな…

おびただしい数の悪魔が召喚されていた。

「おい、悪魔ども。お前らを呼んだクズはどこにいる？」

召喚士がない事に不信感を抱いた俺は悪魔にそのことを聞いてみる。

「ケケケツ。アイツナラ限界ヲ超エテ俺達ヲ呼ボウトシタカラサツキ死ンジマツタゼ」

………はあ？

限界超えて自爆とか………ただのマヌケだろ………

「それで？お前らは今から何をするように命令された？」

「俺達ガ命令サレタノハ、メフィスト・マクダウエルノ抹殺ダ」

………ん？

なんで俺？まあ俺を殺そうとするのはわかるがなんで今更？

「おい、お前らを呼んだ召喚士はどんな格好だった？」

「……ホントハ教エル訳ニイカナインダガ、死ンデルシイイカ。

魔法世界ノメガロナントカツテトコノ人間ダト、以前呼バレタ事ガアルヤツガ

言ッテタナ」

やってくれたな……メガロメセンブリア……

今度会う機会があつたらぶっ潰す。

「もういいや……今度、魔法世界に行くことがあつたらメガロ潰す」

「？ヨクワカラंगा……俺達ハ呼バレタカラニハ命令ニ従ワナイトイカンノダ。

「これはまた…随分と面倒な事になっているな、メフィスト」

「そうだな。少し掃除を手伝ってほしい。やれるか？」

「構わん。ほかならぬメフィストの頼みだからな。

それにこの数だ…少しは楽しめようぞ」

「そうか。じゃあお前は上空から殲滅していつてくれ。
俺は地上から消していく」

「了解した。だがこんなところで我の力を使うと被害がかなり出ると思うぞ？」

「そこは大丈夫だ。戦闘が始まる前に結界を張っておいたからな。
どんなに騒いでも問題ない」

「なるほど。では思う存分やらせてもらおうか！」

言い終わるとバハムートは翼を広げ高速で空に上がっていった。

「それじゃ駆逐を再開するか。出てこい、ヴァジュラ」

ゲート・オブ・バビロン
王の財宝からヴァジュラを取り出す。

「轟け、剛雷！
ヴァジュラ
雷霆穿つ金剛の槌！」

雷霆穿つ金剛の槌から放出される雷を操り、敵を蹂躪していく。
雷に当たった悪魔は例外なく消炭になり還っていった。

…
…
…

バハムート、必勝を誓う雷撃の槌、全砕する破壊の槌、雷霆穿つ金剛の槌。

これらを駆使し無数にいた悪魔を粉碎した後、ようやく俺は村に悪魔の別動隊が向かって
いた事に気づく。

ちい… やられたな。

こつちの悪魔は俺を誘き出す罔って訳だ。

俺は取り出した物の魔力供給を全て切って、再度魔法を唱える。

「私の呼び掛けに応えよ、幻獣神召喚！ 来い！『バハムート』！
固定！掌握！術式兵装『龍神烈火』！！」

俺は「龍神烈火」を発動して村に向かう。
人のままで姿を覚えられたら面倒だしな…

村に着いた時にはもう、村は燃え住民は石化の魔法によって石に変

えられていた。

「ぬかった…早く少年を見つけないと…」

気配察知でネギ少年を探す…

マズい！悪魔共が集まりだしてきた。

俺は急いでネギ少年の元に向かった。

…

…

…

龍人状態のまま最速でネギ少年の元に向かうが、無情にも悪魔の内の一体が少年に殴りかかる。

だが、俺は懐かしい気配を感じていたのであまり慌てなかった。

そう、ナギである。

ホント、こういう空気を読むのは上手いよな

悪魔の拳をナギが受け止め、そのまま「雷の斧」で倒す。

術を放ったナギに周りにいた悪魔が襲いかかるが、それは俺が小規模の「ギガフレア」で

焼き尽くす。

「よお、ナギ。久しぶりだな」

「メフィスト…。約束通り息子を守ってくれたのか？」

「まあな。どうやらこの村の他に俺も消そうという動きがあったら

しい。

俺を狙った悪魔を相手していたらこの村を別動隊にしてやられちまった」

ナギと会話しつつも周りの悪魔に気を抜かないで攻撃を続ける。

ナギが「雷の暴風」で悪魔の集団をまとめて吹き飛ばすと、なにやらネギ少年が怯えて逃げ出してしまった。

「そう…か…。まあ過ぎたことをあれこれ言っても意味がない。今はここの悪魔を倒すことだけ考えよう」

俺はしばし絶句した。

あのアホなナギが冷静だったからだ。

「なんか、精神が大人になったな、お前。色々あったのか？」

「そうだな。この10数年…いろんなことがあった」

なにやら重い気配になったな。

「まあ詳しくは聞かないわ。てかそんな時間もないしな。なんか息子に残してやれよ」

「そのつもりだ」

ナギは走り出した息子を追いかけていった。

それにしてもアイツ…なんか分身みたいな気配がしたな。何があったかはわからんが…難儀な生活してるヤツだぜ。さて、俺はじじいに救助の連絡をしておくか…

“おい、じじい。事件だ。”

この村が悪魔に襲撃され住民は石化状態…おそらく永久石化だ。
生存者はネギ・スプリングフィールドのみ確認。
大至急、救助を呼べ。治癒術者もだ”

“なんじゃと！？わかった。すぐに向かわせる！”

よし、救助の方も手配したし…。

それじゃ俺は、悪魔の生き残りの掃除と行くか。

………
………
………

悪魔の掃除は終わった。

ナギはネギと少女（ネカネの事）を連れて村外れの森に来ていた。
俺は親子水入らずの場に入るほど非常識になった訳ではないから、
あいつらの視界に入らない

程度の距離を開けて周りを警戒する。

あとはじじいの援軍が来ればこの事件も終わりだな。

そっぴや永久石化とはいえ、俺の医称ケルキオンなる双蛇の杖なら治せる。

だが、実際に治すかどうかはじじいと相談だ。

「2002年7月 メルディアナ学校・校長室」

あの事件から5年。

あらからすぐに救助が来て、ネギたちは保護された。

俺は見つかりと面倒なので雲隠れ。

石化された村人たちは、じじいが「魔法世界われわれの魔法使いの問題は魔法世界われわれの魔法使いで解決する」と

意気込んでいたから、その気持ちを汲んでやり俺は治療しなかった。

救助されたあと、ネギはそのままメルディアナ魔法学校に住むことになった。

そして魔法を学び始め、主席で今日の卒業式を迎えていた。

そんな事を考えていたら卒業式が終わったのか、じじいが部屋に戻ってくる。

「おう、じじい。邪魔してるぜ。

少年の修行先はどこになった？」

「うむ。麻帆良で先生をすることになったぞ」

は？なんで先生？

ただのバカだろ…ガキに先生が勤まると思ってるのか？

「……正気か、じじい？」

あのガキはこんな田舎で育った世間知らずだぞ？」

「確かにそうじゃが…。あっちには近右衛門もいるし、大丈夫じゃろ」

楽観的に考えすぎだろ…

まあ困るのは俺じゃないから別にいいけどな。

「まあいいや。それで、いつ頃麻帆良に行くんだ？」

「おそらく、来年の1月じゃな」

あと半年か…。それじゃ俺は少年より少し早目に麻帆良に行くとするか。

〔2002年12月 麻帆良学園・学園長室〕

「入るぞ、じじい」

俺は気配を消して学園に侵入。そのままじじいに会いに来た。

「フオツ！？心臓に悪いわい…

護衛は終わったのかの？」

じじいは突然現れた俺に驚いたのか、少し青い顔をしていた。
くつくくつ いい気味だ。

「ああ、じじいも知ってんだろ？ナギの息子がここで先生をやんの」

「当然知っておる。

ここに戻ってきたということは警備員を承諾してくれるんじゃないか？」

「まあそういう約束だしな。

ただし、タダで請け負うつもりはないぞ」

「わかつとるわい。ちゃんと報酬は払うぞ。

それとメフィスト君には年明けから来るネギ君の補佐をしてほしいんじゃが」

補佐だあ？ これ以上俺を拘束するつもりか、このじじいは？

「なんで俺がそんなことしなくちゃならん…」

「そう言わんで受けてもらえんかのお」

さて、どうすっかな……

「俺は人に物を教えるのは苦手だ。だが先生には興味がある。

だから体育の先生にしろ。体育なら体を動かしているだけでいいんだろ？」

「それだけではないんじゃないが…ちゃんと面倒を見てくれるのかの？」

「まあなんとかなるだろ。引き受けてくれるんなら、暇な時に少年の補佐をしてやる」

「よかるう。それでは年明けに2・Aの副担任をしてもらうぞ。
それに体育の先生、英語の補佐、あと広域指導員もやってもらおうかの」

なんか肩書きが多くね？

「おい、じじい。広域指導員とはなんだ？」

「この学校は無秩序なところも多くての。結構揉め事が起こるんじゃない。それを抑える役と考えてくれて構わんぞい」

「ふむ……合法的にうるさいガキどもを怒れるってことか？」

「そんな感じじゃよ」

「引き受けてやってもいいが、自分から見回りみたいなことはしないぞ」

「それで構わん。普段は他の先生がやっておるしの」

「よし、わかった。ただし、じじい。」

「そんだけ肩書きがあるってことは当然、給料もそれ相応になるんだろっな？」

「そうじゃなくタカミチ君の3倍でどうじゃ？」

「それは警備の件も含めてか？」

「警備は警備で別じゃ。そっちもそれ相応の金を払おう」

「ならばよし。それじゃ警備は年明けからでいいか？
少し休みが欲しい」

「わかったぞい。その間に魔法先生には説明しておこう」

年明けからまた忙しくなるな…

だが、それもまた良しッ！

「そっぴやエヴァにちよつかいを出さなかつただらうな？
もし出していたら……」

殺気を込めてじじいを睨みつける。

「フオツ！だ、大丈夫じゃ！魔法先生全員に徹底させておる」

「本当だらうな？もし嘘だったらこの学校……消スゾ？」

「少し老人を労わってくれんかのお。年寄りにその殺気はキツイわ
い」

この様子なら本当だらうな。信用してやろう。

「ああ、そうそう。警備の件だが、あまり魔法先生と組ませるな。
頭がガチガチの奴らとは話したくもないんでな。
じゃあ、そういうことで」

最後に我儘を言い残して俺は学園長室を後にした。
家に行く前にタカミチに挨拶でもしておくか。

……

……

…

「屋上」

タカミチは屋上で喫煙中だった。

「よお、タカミチ。久しぶりだな」

「っ！！びっくりした」。

気配を消して挨拶しないで下さいよ、メフィストさん」

どいつもこいつも俺に気がつかないとは…

平和ボケしすぎなんだよ。

「悪い悪い。でも気付かないお前が悪いんだぜ？」

「……どこの世界に、あなたの張る結界を破って気付く人がいるんですか？」

タカミチがジト目で見てくる。

「うるさいぞ、タカミチ。俺が悪いと言ったらお前が悪いんだ」
「…………ハア。あいかわらずですね」

むっ 何やらタカミチが呆れてしまった。

「それにしてもタカミチ。お前老け過ぎじゃね？」

「ぐ！ それを言わないで下さいよ」。

結構、気にしているんですから」

なにやらタカミチはダメージを食らったようだ。
でもホント老け過ぎだよ…タカミチ。
なんだかガトーに似てきているぞ。

「まあいいや。そうだ、タカミチ。」

年明けから俺はここで教師やるからよろしくね」

「ハイ？え？本気ですか？」

「当然だ。さつきじいに許可を貰って来たからな」

「ちょ！ええ！？魔王の軍勢でも作るつもりですか！？」

心外だな…タカミチの俺に対する信用度がつかげえるぞ。

「ダメだぞ、タカミチ。そう簡単に人を疑っちゃあ」

「そ、そうですね。ちなみに何を教えるんです？」

「体育と英語の補佐だ。ちなみに広域指導員とかいうのもやらされる」

「……………多忙ですね。大丈夫ですか？」

「無論だ。俺の辞書に不可能という文字はない。
まあ面倒になったら誰か身代わりを置くさ」

「お願いですから僕を巻き込まないでくださいね」

「それは約束できないな。だが、善処はしよう」

言いたい事も言ったし、ここらで帰るとするか。

「それじゃ、タカミチ。俺はそろそろ帰るよ。
これからよろしくな」

「ええ。こちらこそよろしくです」

さて、挨拶もしたし…俺とエヴァの家に向かうとするか。

………

………

…

むっ鍵が掛かっているな。まあ当然か。

ピンポーン♪

「こんばんわ」

とりあえずインターフォンを押してみる。

「ハイ、どちら様でしょう？」

ん？　なんかロボっぽいヤツが出てきたぞ？
とりあえず自己紹介をしておくか。

「俺はエヴァの兄、メフィストだ。君は？」

「私は茶々丸と申します。マスターの従者をしております」

「そっか。じゃあこれからよろしくな、茶々丸」

「ハイ。よろしくお願いします、メフィスト様」

なるほど。エヴァの従者か

10年前は見なかったから新入りっぽいな。

「夜遅くて悪いんだが、家の中に入っている？」

「どうぞ。マスターからメフィスト様がいらっしゃったら中にお通ししろと」

「承っています」

「ホントか？それじゃ遠慮なく入らせてもらおうか」

「ハイ、どうぞ。おかえりなさいませ、メフィスト様」

「ん…。ただいま、茶々丸」

久しぶりに「おかえり」って言われたな。

なんかいいな、こういうのって。

「もうエヴァは寝た？」

「ハイ、マスターはもうお休みになりました」

もう寝ちゃったか…。よし、少しイタズラしようと。

「ふむ。茶々丸」

「なんでしよう？」

「エヴァと一緒に寝ていいか？」

「大丈夫かと判断します」

よし、言質確保！

それじゃエヴァの布団に潜り込みますか…

明日のエヴァの反応が楽しみだぜ。お休みいゝ

第拾陸話 『護衛任務 in ウェールズ』（後書き）

1 クロンド 全碎する破壊の槌

ランク：B

種別：対軍宝具

レンジ：1～50

最大補足：100人

モルゴスがフィンゴルフィンと戦った際に用いた戦槌、あるいは鉄杖。

非常に巨大であり、大地に打ち付ければ大穴を穿ち、煙と火を発するほど。

ミナス・ティリスの城攻めに使われている破城槌は、この名を取って呼ばれた。長さが100

フィート（約30m）もある大きな槌が鎖で吊り下げられ、頭部は貪欲な狼に似せた形になっている。

いる。

普段は手斧サイズだが、真名解放すると大きさが30mになる。（

ゴルディオオンハンマーかギ

ガントシュラクでも想像してください）

特に属性が付加される事はないが、純粋な破壊力なら最強の武器。

第拾漆話 『束の間の平穩……を壊す奴は見敵必殺だ!』 (前書き)

今回はある方に贄となってもらいました。

いるかどうかはわかりませんが、この方のファンの皆さま、
申し訳ないです。

第拾漆話 『束の間の平穩……を壊す奴は見敵必殺だ!』

【エヴァ side】

メフィストがあナギのバカの息子の警護をしに行つて10年。
メフィストのいない麻帆良など牢獄だ。

2年前に茶々丸が出来てからはマシになったが、それでも孤独感は拭えない。

今日も乗る気のしない学園に行くと思つと憂鬱になるが起きないと茶々丸がうるさいからな。

そろそろ起きるか…

目を開けると……私の隣にメフィストが寝ていた。

はあ!?

なんでメフィストが私と一緒に寝ているんだ!?

これは夢か!?!……ああ、夢か。

なるほどなるほど……「闇の福音」と恐れられた私も、メフィストを恋しく思ふあまりこ

んな夢を見ることがあるのか……

それにしても…寝ているメフィストもかつこいいな／＼
夢なら抱きついてもいいよな?

モゾモゾと動いてメフィストに抱きつくエヴァ。

えへへ／＼／ 久しぶりのメフィストだ／＼／（少し幼児化するエヴァ）

メフィストに抱きつくと落ち着く

夢だし…キスしてもいいかな？いいよね？

ちゅっ！

「……記録中、記録中」

はう…ついキスしちゃった。えへへ／／／

それにしても、茶々丸のヤツ…あんなところで何してるんだ？

………つて茶々丸！？！？

え！？ええ！？あれ？

夢……だよな？ え？え？

もしかして……夢じゃない！？

「おい、茶々丸」

「なんでしようか？マスター」

「もしかして…これは現実か？」

不思議そうな目で首をかしげながら茶々丸がこっちを見てくる。

「？……意味がよくわかりませんが、ただいまの時刻は午前7時です。」

マスター、学校に遅れますので早く起きてください。

朝食の準備はできております」

そう言い残し部屋から出ていく茶々丸。

ぬ……ぬあああああああ！

恥ずかしい！

ひじょーに恥ずかしいぞ！

メフィストに甘えていたところを自分の従者に見られてしまうとは…
これも全て私に黙って帰ってきて、あまつさえ一緒に寝ていたメフィストが悪い！

久しぶりに会えたのはうれしいが……ゲフンゲフン。
と、とにかく起こそう！

「おい、メフィスト。起きろ」

軽く揺さ振りながらメフィストを起こす。

「ん、ん… ん？朝か…

おはよ、エヴァ」

「ん？ ああ。おはよう、メフィスト。

ってちがーう！メフィスト！なんでお前がここにいる！？」

「なんでって… 自分の家にいちゃいけないのか？」

不思議そうな顔をして問いかけてくるメフィスト。

「そういう意味ではないわ！

いつ帰ってきた！？そしてなんで私のベッドで寝ている！？」

「帰ってきたのは昨日。なんでかと言われると…そこにエヴァがいたからだ！」

はい？ 我が兄ながら意味がわからんな……

「まあいい。お帰り、メフィスト」

「ああ。ただいま、エヴァ」

side out

【メフィストside】

エヴァに起こされて俺はエヴァと一緒にリビングに向かう。
そこでは茶々丸が朝ごはんの準備をしてくれていた。
久しぶりにエヴァと一緒に食事をするが、

「旨い！すごく旨いぞ、茶々丸！」

「ありがとうございます、メフィスト様」

茶々丸が作る料理はめっちゃ美味しかった。
いやもうマジで旨いわ！

こんなハイクオリティのロボットを作れるなんて麻帆良すげえな！
そっぴい茶々丸ってエヴァの従者なんだっけ？
茶々丸のことエヴァに聞いてみよつと。

「なあ、エヴァ。茶々丸ってロボットだよな？」

「なんだ、いきなり。見ればわかるだろう」

まあそうなんだけどさ… ロボットを見るのは初めてだし、
茶々丸から魔力を感じるんだよね。

「そうなんだけどさ… 茶々丸からは魔力を感じるし、
今の日本じゃ考えられないような性能をしているように感じるんだよ」

「構造はよくわからんが、茶々丸は私からの魔力供給で動いているからな。」

確か、科学と魔法の融合だとか製作者が言っていたぞ」

へえー 魔力を動力に変換をして動いているのか？
それにしても完成度たけえな、おい。

「どこにでも天才はいるもんだな……
そっぴや作つた人は誰なんだ？ここの先生か？」
「いや、ウチのクラスの超 鈴音というヤツだ」

なんと！生徒が作りだしたと！？

「それマジ？」
「おおマジだ。出来た時は私も驚いたがな」

まったくだ…… 麻帆良の科学は世界一イイイってか？
それにしても超 鈴音か。
今度会ったら挨拶しておこう。

「マスター、そろそろ学校に行く時間です」
「わかった。メフィストはこれから何してるんだ？」

ん？そっぴやまだ学校があつたのか。
どうしよっかなー 散歩でもしているか。

「昼間はそこら辺を散歩しているよ」
「そっぴえばメフィストは学校で何か仕事をするのか？」

ふむ……俺が先生をやることは黙っておくか。
その方が面白そうだし。

「詳しくは聞いてないが、警備員になると思われる」
「そうか……大丈夫だとは思うが、正義ヅラした魔法先生には気を
つけるよ」

じじいには釘を刺したが…大丈夫だよな？
一応信じておくぞ、じじい。

「問題ないさ。ジジイには突っかかってきた事も含めて話してある。
ほらほら、早く学校に行かないと遅れるぞ」
「むっ 最後に一つだけ！もうどこにも行かないよな？」

エヴァが俺の服の端を摘まみながらきいてきた。

「ああ、もう何処にも行かないよ」

俺が答えると満面の笑みを浮かべる。

「ならばよし。じゃあ行ってくるぞ！」
「行ってきます、メフィスト様」
「いつてらっしゃい。エヴァ、茶々丸」

さて、エヴァ達が帰ってくるまで散歩でもしているか。

……

……

…

学園都市の中を散歩していると前方から殺気だったガン黒男が近づいてくる。

「君がメフィスト・マクダウエルか？」

「そうだけど、お前誰？」

「私はガンドルフィーニと言う。率直に聞くが、何が目的でこの学園に来た！？」

ハイ？

あれ？　もしかして喧嘩売られている？
それにスーツを着ているし…ここの先生か？

「特に無いが……しいて上げるなら隠居かな」

「ふざけないで真面目に答えろ！？」

正直に答えたのに怒鳴られた…

……なんかイラつとしたわ。
もう殺つてもいいよね？

「……じじいから俺の事を聞いていると思うが、
聞いたうえで突っかかってくるならそれ相応の覚悟があるんだろ
うな？」

俺はいつでも戦闘いくさになつてもいいように結界の準備をする。

「学園長から安全であると聞いたが信用できない！
お前はあの悪名高き“幻獣使い”なのだからな。
だから私は真意を見極めに来たんだが、正直に目的を話せ！」

ウザいな… 「正義」 大好き人間かよ…
俺が「悪の魔法使い」 ってわかってるのに喧嘩売ってくるなんて
な。

ホント… 間抜けだ。
リスク計算を出来ないのかよ。

「さっき言っただろ？ 隠居しにきたって。 耳が悪いのか？」

俺の言葉が癪に障ったのかナイフと銃を抜くガン黒。
そして銃口をこちらに向けながら再度言ってくる。

「最後だ、 目的を言え」

「だからさっきから言っただろ？
ホントに耳が悪いんじゃないか？ 早く病院に行くことをオススメするぜ」

ガンガンガンッ！

ガン黒の銃から3発の弾丸が発砲される。 俺は特に慌てることなく
障壁で防いだ。
すると、ガン黒は不思議に思っただらしく、

「なぜ防げる！？」

と聞いてきた。
まあ冥土の土産に教えてやろう。
教え終わったらぶち殺す！

「捕縛結界発動、 範囲50m。」

障壁突破の効果を入れても無駄だ。

俺の障壁にはそれを無効にする術式を組み込んである。
貫通できるのは俺より力量が上なヤツだけだ」

さて、優しく教えてあげたし、もう殺ってしまったてもいいよな？
ちなみに捕縛結界つてのは脱出不可能な結界のことな。

「来い、ティルヴィング 1」

俺は最強の魔剣を取り出す。

「障壁突破つてのはな、こーやってやるんだよ！
全てを切り裂け！全絶つ破滅を誘う魔剣！」
ティルヴィング

全絶つ破滅を誘う魔剣でガン黒の障壁をバターのよう^{ティルヴィング}に切り裂く。

「なっ！」

「驚いている暇はないぞ！そらそらそらあ！」

ガン黒が驚いている隙にどんどん斬り付ける。
最初はナイフで防がれたが、すぐにそのナイフも斬った。

その後はもはやワンサイドゲームである。

向こうの銃は効果なし。逆にこっちの剣は簡単に障壁を突破して切り傷を作っていく。

だがすぐに命を奪っては面白くない。

少しずつ傷を作って体力を削っていく事にした。

「おらおら、どうしたア！威勢のいい啖呵を切った割には情けねえ奴だな！」

「くっ！バカにして……
学園長も迂闊なんだ。こいつらみたいな危険人物を招き入れるなんて」

ん？　なんかさらにバカにされたか？

しかも「こいつら」だと……

こいつは今、エヴァもバカにしたのか？

「こいつら」ってのはエヴァも含まれるのか？」

「当然だろう！お前たち吸血鬼は悪だ！

悪は黙って滅ぼされていればいいんだよ！」

……………もう殺す。

「もう喋るな、死ね」

さっきまでは手加減していたが、もう我慢ならん。
障壁の上から首を斬るように剣を振るうが、

「そこまでにしてください、メフィストさん」

タカミチによって防がれてしまった。

「……退け、タカミチ。俺の邪魔をするならお前とて容赦せん」

「悪いけどそういう訳にもいかないんですよ。」

ここは僕の顔に免じて退いてはくれませんか？」

俺はタカミチにそれなりの殺気をぶつけるが、あっちも覚悟をしているのか退かなかった。

「……しょうがないな。戻れ、テイルウィング全絶つ破滅を誘う魔剣。

OK。タカミチに免じて殺しはしない」

「?それってどういういm――

「グホッ!」

俺はガン黒に縮地で近づいて、腹を思いっきり殴り付ける。

流石のタカミチも俺の本気の速度にはおいつけなかったようだ。

「ゲホッゲホッ!」

「ちよっ!メフィストさん!?!」

「殺してはいない。これはエヴァを侮辱した分だ」

理由を言つとタカミチは納得したのか苦笑いをしていた。

「それは……しょうがないですね……」

「まあ何割かは憂さ晴らしはできた。それで?コイツの処分はどうなる?」

懲戒免職になれば笑えるんだがな……

「おそらく1ヶ月の謹慎処分でしょう。

学園長の命を破つて単独行動した訳ですし……メフィストさんもそれでいいですか?」

少し甘い処分の気がするが……タカミチの顔を立えると決めちゃったしな。

「それでいいぞ。だが、必ずその処分にしろよ……」

「その点は大丈夫です。僕が責任を持って学園長に言っておきますよ」

タカミチならきっちりと仕事をするだろう。
じゃあ俺は散歩に戻るかね。

………

………

…

「帰ったぞ」

「ただいま戻りました」

「二人ともおかえり」

散策を終えた俺は家でぐうたらしていた。
そうしたらしばらくしてエヴァ達が帰ってくる。

「おい、メフィスト。ジジイからの伝言で“すまなかった”だとさ。
何をしたんだ？」

おっ 誤ってくるなら許してやるか…

「単にガンドルなんとかってガン黒男をボコッただけだよ」

ん？ なんだか二人とも哑然としているな。

「ちよっ！何をしているんだ！？」

「さすがにそれはマズいと思います、メフィスト様」

「じじいも了承済みだぞ。」

向こうから喧嘩売ってきたら相応の態度を取るって」

理由を言つと納得してくれた様子だ。

「それと茶々丸。様付けは止めてくれないか？
せめてさん付けにしてくれ」

「わ、わかりました…メフィストさん」

なにやら困惑させてしまったか？
でも様付けなんて似合わないからな…

「それでは夕御飯の支度をしますね。

マスターとメフィストさんはくつろいでいてください」

「茶々丸のご飯は美味しいからな。

楽しみにしてるぞ」

さて、夕食まで暇だしエヴァを愛でているかな…

s i d e o u t

【茶々丸 s i d e】

昨日帰ってきたマスターの兄、メフィストさん。

まほネットで調べると賞金9000万ドルの歴史に名を刻むほどの
超極悪人扱いでした。

ですがマスターの話を聞く限りそんな極悪人ではありません。

どうやらマスターを守るために人を殺し続けたせいで賞金首になっ
たそうです。

今のマスターは魔力を封じられて弱っています。
ですのでメフィストさんはこれからマスターを守っていくでしょう。

私も…危険な状態になったら助けしてくれるんでしょうか？

考え事をしつつも料理の準備を終える。

そしてマスター達を呼びに行くと、

「気持ちいいか、エヴァ？」

「うむ、とても良いぞ」

メフィストさんがマスターを膝の上に乗せて頭を撫でていました。
とても嬉しそうなマスター…これは記録せねば。

「……記録中、記録中」

「ハッ！ちょ、ちょっと退いてくれ、メフィスト」

「ん？どうした？」

マスターが慌ててメフィストさんから離れて私の方に向かって来ました。

「何をしている、このポケロボ！

ええい！まいてやる、まいてやる」

「あああつ、いけません、マスター。そんなにまいては…」

「消せ！今見た物を全て消せ！」

こんな貴重な映像を消す訳にはいきません。

ですので晩御飯の催促をしてメフィストさんを味方にしましょう。

「マスター、メフィストさん。」

夕食の準備が出来ましたのでいらしてください」

「こら、茶々丸！主を無視するとはいい度胸してるな！」

「エヴァ。そろそろ終わりにしてご飯にするぞ」

茶々丸のご飯を劣化させる訳にはいかん」

メフィストさんが私の味方をしたせいで、マスターが若干涙目になっ
てしまいました。

「メ、メフィスト！？お前まで私の敵になるといつのか！？」

「何を言ってるのかサッパリなんだが…腹減ったからさっさといくぞ」

メフィストさんがマスターを抱き抱えて行きました。

マスターは抵抗しつつも諦めたのか、されるがままに抱えられます。

私も給仕をするために行きましょう。

s i d e o u t

【メフィストside】

晩御飯を終えた俺は部屋でくつろいでいた。
その時にじじいから念話が来る。

“ 昼間はすまんかったの、メフィスト君 ”

“ ある程度はうさが晴れたからかまわんど。
それで？何の用だ？ ”

わざわざじじいが謝るためだけに連絡してくるハズない。
それにさっき伝言を聞いたしな。

“うむ。ガンドルフィー二君のことを謝るのも兼ねてだったが、お主に警備の確認をしておこうと思うての。”

警備を開始するのは年明け。一緒に仕事をする人は魔法先生以外なら誰でもいいかの？”

その条件でいいか…

今日みたいな事態にならない人なら誰でもかまわん。

“それでいいぞ。ただしタカミチなら一緒にやってもいいがな”

“助かるぞい。それでは年明けで会おうぞ”

それにしても…麻帆良の警備ね。

それ相応のレベルのヤツらが来れば楽しめるんだけどな。

ただのザコだったら、その時に一緒にいるヤツに任せるか。

第拾漆話 『東の間の平穩……を壊す奴は見敵必殺だ!』 (後書き)

ちよつとした補足。

魔法世界の大戦の元凶と言われたので賞金が3倍となりました。

ちよつと休暇をとらせていただきます。

3日ほど他の小説を読んだりストックを作ったりさせてもらいます。
これからようやく原作の話に突入しますが、ここまでの感想・改善
点などを

教えてもらえると嬉しいです。

1 テイルウイング 全絶つ破滅を誘う魔剣

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1～2

最大補足：1人

北欧の古エツダ、サガに登場する魔剣。

オーデインの血を引く王、スウアフルラーメがドヴァリン、ドウリンという二人のドヴェ

ルグを捕らえ、命を救うのと引き換えに黄金の柄で錆びることなく

鉄をも容易く切り、狙

ったものは外さない剣を作るように命じた。

ドヴェルグたちはこの要求を飲み剣を鍛えた。

しかし彼らは去り際に、この剣が悪しき望みを3度は叶えるが持ち主にも破滅をもたらす

呪いをかけたことを明かし、岩の中へ逃げ込んだ。

スウアフルラーメはティルヴィングを帯びて戦場におもむき勝利した。

しかしアルングリムと戦ったときに剣を奪われ、これで刺されて命を落とした。

その後アルングリムの息子アングンチユールに受け継がれたが持ち主や近親者がこの剣により死んだ。

この剣は、切れ味が抜群でどんなものでも切り裂くが、呪われているため使用者の幸運値

がB以上ないと不幸な目に会い、最悪死亡する。

第拾捌話 『2・A そこは魔窟なり』（前書き）

やっと麻帆良学園に突入…
長かったよ…

第拾捌話 『2・A そこは魔窟なり』

「2003年1月某日 麻帆良学園長室」

俺はじじいに呼ばれて学園長室にいる。

激しくメンドいんだがスーツを着てくるように言われたので着てきた。

当然の如く金はじじい持ちだな。

それにしても…よくこんなの着て毎日生きられるな…

ウザってえ…着崩していこう。

ちなみにもう新学期は始まっているぞ。

「いきなり呼び出してなんの用だ、じじい？」

「すまんの。今日からネギ君が就任してくる事を教えようと思っての」

俺の先生ライフは年明けからじゃなくネギと一緒に就任することになった。いた。

すぐに先生をやろと思っていた俺は、お預けを食らった気分がして少し不機嫌だ。

「やつとか…おせえよ、じじい」

「仕方がないじゃろう。詳しい日にちを調整しなくちゃならなかったしの」

それにしてももう新学期は始まっているんだぞ？

あれ？そーいや俺…教員免許もってないや。

「おい、じじい。俺、教員免許もってないぞ」

「フオツフオツフオ。そんなものはウチの大学のをくれてやるわ」

……流石じじい。話がわかるな。

でも面倒な事態になっても知らねえぞ？

「それじゃ頼むわ。それとネギ少年には俺の事を教えるなよ」

「その予定じゃ。自分で気付かないまでは教えないつもりじゃよ」

つもりねえ…頼られてもウザいし絶対に教えないよう脅しておこう。

「つもりじゃなくて……絶対に教えるな」

「フオツ！わ、わかった。わかったからその殺気は止めてくれ」

殺気を込めて睨んでおく。

これで約束を破ったら殺れる口実ができたな♪

コンコン

「学園長。ネギ君をお連れしました」

ドアをノックする音と共にタカミチが声を掛けてくる。

「うむ、入っ正しいぞ」

「はい、失礼します」

「失礼します」「」

タカミチとネギ…それに昔見た木乃香に似た少女と、オッドアイのオレンジの髪をした少女が入ってくる。

じじいに用があるっぽかったから、邪魔になりそうだったので部屋

の端にタカミチと立つ

ていよう。

それにしてもあのオッドアイの子……もしかして姫子ちゃんか？
タカミチにあの子のことを聞いてみるか。

“おい、タカミチ。あのオレンジの髪の子ってもしかして姫子ちゃんか？”

聞かれると面倒なので念話で話す。

“そうですよ。昔と大分違うでしょう？”

ホント……かなり雰囲気変わったな……

大戦時に会った時にはかなり無表情だったのに。

今はじじいに突っ掛かったり、ネギにイラだったりといろんな表情になっている。

ただ……見ている限り感情豊かになったが、頭のほうが悪くなっている印象を受けるぞ。

「——それではネギ君を助けてくれる先生を紹介しよう。

しずな君、メフィスト君」

「はい」

ん？　なんか呼ばれたか？

「呼んだか、じじい？」

考え事をしていたからまったく話を聞いていなかった。
じじいとタカミチは苦笑いを浮かべている。

「まずしずな君は指導教員じゃ。」

わからない事があつたら彼女に聞くといい。

そしてメフィスト君は、2・Aの副担任をしてくれるぞ」

「よろしくね」

「自己紹介はどうせクラスでやるから後でな」

どうせあとで言うことになるんだしいいよな。

ん？なんだか木乃香似の子がこつちを見て笑みを浮かべているぞ。
なんなんだ？

てか見れば見るほど似ているな……ひょっとして本人か？

「それじゃネギ君はクラスに向かつてくれ。」

メフィスト君はちよつと話があるので残ってくれんかの？」

「ハイ！」

「ちよ、ちよつと！学園長っ！」

「さあ行きますよ、ネギ君、神楽坂さん」

なんだか姫子ちゃんは文句があつたらしいがしずな先生に連れてかれた。

てか俺に話つてなんだよ？

「なんだよ、話つて？」

「これから授業が始まるんじやが……やはり積極的に助けてはくれんのかの？」

くどいぞ、じじい。

心配なら先生なんてやらせなければ良かったんだよ。

それを俺に助けてもらうなんてムシが良すぎるわ。

「そんなことはせん。どうしようもない事態に陥った時だけ助けて

やる。

それはナギとも約束したしな。ではクラスに向かうぞ」

じじいはまだ何か言いたそうだったがさっさと学園長室を出る。
そしてそのまま「A」に向かった。

……

……

…

クラスに辿り着いたら、中では頭からバケツを被り、矢尻が吸盤の矢を何本か身体にくっ

付けて転がっているたネギがいた。

そこにクラスの何人かが駆け寄ってきている。

なにやってんだ？

とりあえず自己紹介も出来ないのでクラスに何歩か入り、気を微量だけ脚に纏わせて地面

に叩き付けた。

すると…まだ威力が強かったのか、校舎が揺れる。

そのせいでクラスの中は静まり俺に視線を向けていた。

まあ丁度いいか…このまま自己紹介をしておもう。

「今日からこのクラスの副担任、体育の教師、英語の補佐、広域指導員をやることになっ

たメフィスト・マクダウェルだ。俺の事はメフィストと呼んでくれ。

これからよろしく頼むぞ。ホラ、お前も自己紹介しろ」

俺は床に座ったままのネギを立たせる。

「ハ、ハイ！」

ええと……今日からこの学校で英語を教えることになりました、ネギ・スプリングファイ

ールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願いします」

「……………キヤアアアツ！ 格好いいー！！（かわいいー！！）……………」

うお…音波攻撃かよ。

いくら俺でもこの黄色い声は耳に来るわ！

ちなみに格好いいとかわいいの声の比率は7：3ぐらいだったぞ。

「なんか若く見えるけど何歳なんですか！？」

「その髪って地毛なの！？」

「なんでスーツを着崩しているの！？でもそれもカッコいい！」

「彼女はいますか！？」

うるせえ…無邪気すぎるのも考え物だな…

てか何人かは俺に殺気を飛ばしてきているし。

たんに驚かせただけだろ？そんなに警戒すんなよ…

おつ、エヴァはあんぐりと口をあけているぞ♪

ドッキリ大成功♪

さて、あまり騒がせている訳にはいかな…

ホントは担任のネギがやるべきことなんだが、最初だし俺がやるか。

おもしろいな。あの子供先生。

それにしてもクラスの皆…先生に質問したくてウズウズしてるわ。皆はどっちに興味があるんやろ？

やっぱりかつこええメフィストはなんやるか？

でもあの子供先生に視線を送つとるのも何人かおるな。

「……………しょうがないな」

なにやらメフィストはんが教卓に近づいていくえ。何するんやろ？

「こんな空気じゃ授業にならないからな。今から担任への質問タイムにするぞ」

メフィストはん、流石やな。話がわかるわ。

「マ、マクダウェル先生！？」

「こんな空気じゃ授業をしても意味はない。それに俺の事はメフィストと呼べと言ったぞ、少年」

「メフィスト先生は話が解るね！

それじゃお言葉に甘えて質問タイムに行くよー！」

「……………おおー！！」「……………」

朝倉の掛け声とともにクラスの皆が両方の先生に殺到した。アカン……………乗り遅れたわ。

大半は子供先生に向かったが朝倉はメフィストはんの方に向かっていくなあ。

子供先生はもみくちゃ状態や。

メフィストはんの方も囲まれていたが、朝倉が皆を抑えて質問し始めていた。

「メフィスト先生。ちょっとインタビューに応えてよ」

「ん？なんで俺の方に来るんだ？
担任の方に行けばいいだろ？」

「いや、向こうも興味が惹かれるんだけどさ。
報道魂がこつちのほうがいいと囁くんだよね。
そんな訳でインタビュータイム入りまゝす」

何アホな事、朝倉は言ってるやろ？

「そうかそうか…魂が囁くんじゃ仕方がないな。なんでも聞いてこい」

なんでメフィストはんは納得してるんや？ようわからんわ。

「それじゃ質問です。名前、年齢、身長、体重は？」

「名前はメフィスト・マクダウェル。

身長は170cmぐらいだったかな。

体重は60kgぐらいのはず。

歳は内緒だ（本当は600歳だがな）」

あつ、教室を出てもうた。
声かけるタイミング逃してもうたわ。

「いやゝカッコいいね、メフィスト先生！」

「スーツを着崩していたけど、それがまた似合ってたいいよね！」

「ネギ君の方がいいよゝ」

「気になる人でエヴァちゃんの事を上げていたけど、ひよっとしてシス。ン！？」

「それにしてもさっきの震脚…かなりの使い手とみたアルよ」
「手合わせしてみたいでござるな」

なにやら騒がしくなってきたなあ。

まあウチのクラスはそれがデフォなんやけど。

「それじゃ放課後は先生達の歓迎会をやるよ！

アスナはネギ先生を呼んできてね」

「ゲツ、なんで私なのよ？」

朝倉がアスナに子供先生を呼んでくるように言った。

「だってアスナはあの子と面識ありそうだったし。

よろしくねゝ」

「ちよ、ちよっと待つてよ！」

「それじゃメフィスト先生はだれが呼びに行く？」

むっ、これは話せる機会やな。

「朝倉ゝウチがいつでもええ？」

「オツケー。それじゃメフィスト先生は木乃香に任せるよ」

【メフィストside】

2-Aに行った時にクラス名簿で確認したらやっぱり木乃香だった。あれから10年ぐらいか…大きくなったもんだ。てかホントにじじいと詠春の縁者か？どっからどうみても似てないんだが…これが人間の神秘か。奥が深いな…それと姫子ちゃんは神楽坂明日菜だったか？長いわ！アスナでいいや。アスナは感情豊かになっていたが頭がバカになっていた。喜ぶべきか悲しむべきか判断に迷うぞ。

「あつ、いたいた。メフィストは〜ん」

考え事をしていたら木乃香が声をかけてきた。

「ん？木乃香か…どうした？」

反応したらなにが嬉しかったのか知しらんが、満面の笑みを浮かべてる木乃香。

「えへへ〜やっぱりメフィストはんなんやな。ウチの事覚えててくれたん？」

そついう事が…あんな事態になったのに忘れる方が珍しいと思うぞ。

「そりゃあな…木乃香の方こそ俺を覚えててくれたのか？」

「もちろん覚えとるよ。あんときはお世話になりました」

「気にすんな。それにしても可愛くなつたな」。

詠春にもじじいにも似ないで良かったよ」

俺は木乃香の頭を撫でる。

すると嬉しそうな顔をしてくれた。

……ちなみに一瞬だけだが殺気も来たぞ。

「えへへ。なんや懐かしいな」。

ちよつとしか会えへんかったけどウチは一度も忘れなかったえ」

あれ？……もしかしてフラグはまだ立ってるのか？

あら〜（汗）詠春に会ったらまた斬り付けられそうだな。

「そ、そついや木乃香。何か用があつたんじゃないのか？」

「おおつと、そうやった。この後教室に来てほしいんだけど大丈夫？」

「構わんさ……俺は少しここで用があるから木乃香は先に行つてくれ」

さつきつから視線を感じるしな。

喧嘩を売るようならぶつ殺」

「了解や。ほな後でな」

さて、用事も出来たことだし早めに片づけるか。

……この気配は刹那か？

「出てこい、刹那。いるのは解っているぞ」

俺が声をかけると物陰から刹那が出てきた。

「お久しぶりですと言っべきなのでしょうが、先生。どうして私がいると？」

甘いわ、小娘が！

俺を出し抜こうなんざ14年程度しか生きていないヤツには無理だ。あと刹那も俺の事を覚えてくれたんだな…嬉しいぞ。

「そうだな、久しぶりだ。」

あと俺を出し抜こうなんてできる訳ないだろうが。

それで、刹那は俺になんの用だ？」

「本当は監視するだけのつもりでしたが…バレていたなら仕方ありません。」

では率直に聞きます…メフィスト先生は何者ですか？」

何者ねえ…

どうやら殺気立っているし俺の事は少しは知っているようだ。

「ただの吸血鬼だけど」

「やはり…何が目的でお嬢様に近づいたのですか？」

また目的かよ…そんなに信用ないか、俺？

あれ？そっぴや俺の賞金って歴史に名を刻むほどまで膨れているんだっけ。

そう考えれば俺を知らないヤツが警戒するのは仕方がないか…

「目的なんてないぞ。この学園に来たのは隠居が目的だ」
「その言葉…信じていいんですよね？」

おつ、この前のガン黒男よりは頭が柔らかいな。

やっぱり正義を名乗ってふんぞりがえるのは良くないね。

「別に危害を加えるつもりはねえよ。

それに殺すつもりならもうとっくにやってるつつの」

「……わかりました。その言葉、信じます」

まったく…生真面目になっちゃって。

昔はここまで生真面目じゃなかったような気がするぞ。

さて、教室に向かいますか。

「ああ、そうそう。木乃香同様、大分可愛くなったな、刹那」
「なっ／＼／＼ か、可愛いだなんて／＼／」

くっくっく…生真面目なヤツは面白いな。

動揺している刹那は放っておいて教室に行こう。

………

………

…

教室に着くと、ちょうど同じタイミングでネギとアスナが来る。
そして教室のドアを開けたら、

流石はアイツの息子だ。

そのまま見ているとアスナがショックを受けたらしく教室を出て行く。

それをネギとクラスの何人かが追っていった。

「くつくつく…タカミチ。心を読まれてしまったな」

「面白がらないでくださいよ、メフィストさん」

「これが面白がらずにいられるか。魔法使いだって解っているのにお前に読心術を使う」

とはな…流石はナギの息子だ。バカさ加減は遺伝だな」

「まさかあんなのがナギの息子とは…ウェールズでの教育はダメダメだな」

あまりにもバカだったのでエヴァも失望していた。

まあバカでも俺達は困らないしいいだろ。

「ほつとこうぜ、エヴァ。そして見世物として笑っていようじゃないか」

「それもまた一興か…」

「それにこっちに危害がくるようならさっさと呪いを解呪してとんずらでもいいし」

「僕を前にしてそういう話をしないでくれませんか？」

なにやらタカミチが気まずそうだがそんなことはどうでもいい！

「うるさいぞ。タカミチ。」

気になるんならお前があの小僧を教育してやればいいだろう」

「そうしたいのは山々なんですが…僕も忙しくて」

「ハッ！人手不足なのは15年前も一緒だろ。
その間に人を育てないジジイが悪い」

確かに15年もあればタカミチクラスとは言えないが、それほどの
力量の人物に育て上げる

ことも可能だしな。

エヴァも性格が悪い♪

タカミチは何も言えなくなっちゃったぞ♪

「さて…クラスの奴らもどっか行っただしそろそろ帰るぞ、エヴァ」

「わかったよ、茶々丸帰るぞ」

「ハイ、マスター」

さて、明日から本格的に授業か…

どんな内容にしようかな

第拾玖話 『初の授業はBR? (前編)』 (前書き)

メフィストの授業内容は激しく作者の妄想とご都合主義がてんこ盛りです。

これはないだろってコメントはあまりしないで欲しいかな…

第拾玖話 『初の授業はBR? (前編)』

今日は俺の授業がある。

何をしたらいいのかわからんからとりあえず映画を見て学んできた。
俺が授業をやるには普通の授業なんてやらないぜ！

とりあえずじじいに話をつけに行くか。

……

……

…

【アスナ side】

今日の時間割は予定変更で体育をやるらしい。

体操服に着替えて教室で待っているようにと朝のHRでメフィスト

先生が言ってたけど…

何をするんだろう？

「おっ、ちゃんと揃っているな」

メフィスト先生が入ってくる。

特に変わった様子もなく、昨日と同じでスーツ姿だ。

そして朝の連絡をするようにさらっと、

「それでは…今日は皆さんに殺し合いをしてもらいます」

とんでもない発言をしてきたわ！
ちょッ！ええええ！？

いきなり何言つてんの、この人！？
殺し合いつて……ええええ！？
周りを見渡すと…全員が困惑しているようね。

「ちょっと、メフィスト先生！殺し合いとは一体どういう事ですの
！？」

あつ、いいんちよが立ってメフィスト先生に噛み付いたわ。
他のクラスメートも同じ意見のようだった。

「なんだ、雪広？なにか不満でもあるのか？」

メフィスト先生は意味がわからないって顔をしているわね。
ホントにわからないのかしら…

「不満も何も！？殺し合いなんて出来る訳ないでしょう！？」
「なんだ……雪広は俺に従えないって言うのか……」

あれ？なんだか空気の温度が下がった？
メフィスト先生は懷から…何やら黒光りする物を取り出し…
いいんちよに突き付けて、

「ちょっ！いいんちよ！？」
パアンッ！

私は慌てて立ち上がりいいんちよに声を掛けるが、メフィストさん
が持っている物——銃

なんだか元気ね…

ホントに大丈夫なのかしら？

「悪かったな、雪広。初めは見せしめを作るって映画にあったから
実戦してみた。」

服はこの授業の後に全員分をじじいが弁償するからガマンしろ」

映画って…やっぱりバトル。ワイヤル？

冒頭のセリフといいこれといい…教師がこんなことやっていいのか
しら？

「さて、全員立っているか…なら丁度いい。」

一度クラスを出て出席番号順に少しずつ入ってこい。ほら早くし
ろ」

一体何をやるっていうの？

………

………

…

一度出て、一人ずつ入っていくと自分の席じゃない席ならどこでも
いいと言われて適当に

座っていく私たち。

全員がそろったのを見届けるとメフィスト先生が切り出してくる。

「よし、ではこれからやる事の説明をする。」

こんな時期に俺は赴任してきたので、正直みんながどの程度なのか知らん。

そこでメンドくさいから今日ここで大まかな成績を付けるために殺し合いをしてもら

う！では準備をしてくれ！」

パンパンっと手を叩くとドアからやつれた大学の工学部の人々が私たちの席の上に荷物を置いていく。

ちっさいケースから大きなアタッシュケースなど種類は様々だった。

私の机の上には縦が30cm、横が1mぐらいのアタッシュケースが置かれる。

隣のこのかはその半分ぐらいの大きさだ。

「さて、今配ったのはこれから使う武器だ。中には刀、銃など様々な武器が入っている。

これらは教室を出た時に開封できるようになるぞ。

安全面は完璧。刀は刃を潰してあるし、銃の弾丸はさつき雪広に撃ったヤツと同じだ」

「先生、質問があるんですけど」

「なんだ、朝倉？」

「さつきいいんちよに撃った弾ってなんなの？」

それは私も気になるわね…

近くで見ても血に見えたし。

「それはここの大学の工学部の連中に徹夜で作らせた特注品のペイント弾だ。」

匂いから見た目までかぎりなくホンモノに近い一品だぞ」

工学部のみなさん…ご愁傷様です。

「言い忘れたが銃はモデルガンだ。ではあと使うのを配布する」

するとゴーグルと、赤色の胸当てのようなものが配られていく。

「念のためにゴーグルを配っておく。これを外すものは失格だ。胸当ては、そこに衝撃が来ると割れて中につまっている液体が飛び出てくる。」

この胸当ては脆弱だからすぐに壊れるので注意しろ」

なんだか本格的ね…

でもこんなことやっていいのかしら？

質問してみよつと。

「先生。こんなことやって大丈夫なんですか？」

「なにも問題はない。すでにじじいから許可は取ってある。」

今日は丸一日、これに時間を使うことにした」

丸一日って、学園長…

そんなの許可しちゃダメでしょうが！

「ではルールを説明するぞ！

ルールはいたってシンプルだ。他人を蹴落としてでも勝ち残れ！

銃弾によって、頭に1発、胴体には2発当たったら失格。胸当てを破られても失格だ。

失格になった者はすぐさま自分が持っている武器をその場に置き。そしてこの教室まで帰ってこい。

落ちている武器は誰でも使っていい事とする。

次に弾薬だが、弾が尽きたらこの教室にいる俺のどこまで来い。そうすれば弾を補充してやろう。この教室は戦闘禁止エリアとする。

優勝者はただ一人。だが一人につき一人だけ同盟を結ぶ事を許可しよう。

同盟を結んだ状態で勝利すれば優勝の恩恵も2人に与えられる。同盟を結ぶ相手はクラスメートなら誰でも結んでいいぞ。

この授業で評価するところは二つ。いかに生き残るか、何人殺したかだ。

こんなところだな…何か質問はあるか？」

な…なにがなんやら……

急ピッチすぎてよくわからないわよ。

え、ええっと…とりあえず全員を倒せばいいのよね！

「質問が無いようなので早速開始する。明石から番号順で1分置きに出発して行け。

全員が出払ったあとの2分後に放送で開始の合図をするぞ」

ゆーなからどんどん順番に教室を出て行く。

そろそろ私の番ね…優勝してやるわよ！

side out

【メフィストside】

さて、全員行ったな…じゃあ俺も準備をするか。

パンパンッ

もう一度俺は手を叩く。

するとまた工学部のメンツが集まってきて機材の設置をしていった。

何を隠そうこの機械。この校舎のいたるところに監視カメラを設置して、カメラを通して

見える画像をモニタリング出来るようになっていたのだ。

胸当てには発信機を仕込んであるのでどこに誰がいるかも映像で把握済み。

じゃあそろそろ開始の放送を入れるか。

『聞こえているか？2-A諸君。ではこれよりバトルロイヤルを開始するぞ！』

各人、己の全力を尽くせっ！』

さてさて…どうなることやら…

side out

【エヴァ side】

まったく、メフィストは…アホな授業をしておって。
殺し合いで成績を決めるなんぞ前代未聞だぞ。

「マスター。ここにいましたか」

「ん？茶々丸か」

茶々丸が私を見つけに来たようだ。

それにしても…なんてものを持っているんだ、コイツは…

「茶々丸…それはなんだ？」

「ハイ。これはH&P・K PSG-1ですね」

なんで狙撃銃を平然と持っているんだよ！？

まあそういう私もAK-47（アサルトライフル）を持っているんだが。

それにしても良くできているな…

「マスター。恐らくですがこれは本物です」

なんだと？というか茶々丸…心を読むな。

「何を行っているんだ、茶々丸。どう考えても本物の重さじゃないぞぞ。

本物だったら強化していない私が持てる代物じゃないからな」

何を言ってるんだ、このバカ従者は…

そもそも本物なんてメフィストはどこで手に入れてきたんだ？

……そういえばこの世界で大規模な戦争が起こった時にフラッと出かけて行った時があつたが…その時に集めてきたというのか!?

「いえ…構造を調べたところ、重量・反動などを軽減するような魔法が掛けられています。

おそらくメフィスさんが改造したんでしょう」

これらを昨日の内に全て済ませたと言うのか…
いろんな意味で規格外すぎるぞ。

「マスター。前方に綾瀬さんと宮崎さんを発見しました。

どうしますか？」

サーチアンドデストロイ

「見敵必殺だ。一発で仕留めろ」

「了解」

茶々丸がPSG-1を構えて照準を頭に合わせる。

そして引き金を二回引いて弾丸を撃つ。

すると見事命中し…二人は見た目がかなりグロテスクな状態になった。

「これは…もはや戦場だな…」

「確かに臨場感はでそうですね」

とりあえず落とした武器の回収に行くか…

……

……

…

綾瀬夕映が落としたのは手榴弾2個。

宮崎のどかはキャリコム100（サブマシンガン）か。

武器を回収すると物陰からまたも誰かが現れる。

向かってくるのは二人…誰かはわからないがどうやら得物は刀のようだ。

AK-47では相性が悪いと判断し、さっき拾ったキャリコをフルオートで連射して撃つ。

「アカン…死んでもうた」

「残念だね、亜子」

どうやら今殺した相手は和泉亜子と大河内アキラのようだ。

「大丈夫ですか、マスター？」

「ああ、問題ない。茶々丸、その仕込み杖を拾っておけ」

「薙刀はよろしいので？」

「これだけ重装備ならいらん」

「了解しました」

最初は茶番だと思っていたが…中々どうして、興が乗ってきたぞ」

side out

授業？が始まった時の初期装備

ちなみにこれは作者がくじ引きで決めたぞ。

でもなんだか偶然とは思えないわ……茶々丸とか超とかハカセとか

……

- 1 番 相坂 さよ 幽霊のため棄権
- 2 番 明石 裕奈 デザートイーグル（ハンドガン）
- 3 番 朝倉 和美 防弾チョッキ
- 4 番 綾瀬 夕映 手榴弾（2個）
- 5 番 和泉 亜子 仕込み杖
- 6 番 大河内 アキラ 薙刀
- 7 番 柿崎 美砂 M P 4 0（サブマシンガン）
- 8 番 神楽坂 明日菜 日本刀
- 9 番 春日 美空 ピコピコハンマー
- 1 0 番 絡繰 茶々丸 H & a m p ; K P S G - 1（狙撃銃）
- 1 1 番 釘宮 円 サバイバルナイフ
- 1 2 番 古 菲 ハリセン
- 1 3 番 近衛 木乃香 ベレッタ M 9 2（ハンドガン・サイレンサー付き）
- 1 4 番 早乙女 ハルナ S V Dドラグノフ（狙撃銃）
- 1 5 番 桜咲 刹那 グロック17（ハンドガン）
- 1 6 番 佐々木 まき絵 M 4カービン（アサルトライフル）
- 1 7 番 椎名 桜子 U Z I（サブマシンガン）
- 1 8 番 龍宮 真名 手裏剣（10個）
- 1 9 番 超 鈴音 R P G - 1（予備に1発の合計2発・ロケラ

ン)

20番 長瀬 楓 スタンガン

21番 那波 千鶴 ワルサーP99 (ハンドガン)

22番 鳴滝 風香 フォーク

23番 鳴滝 史伽 ヘルメット

24番 葉加瀬 聡美 M79 グレネードランチャー (連射はムリ)

25番 長谷川 千雨 クロスボウ (矢尻が吸盤)

26番 エヴァ AK-47 (アサルトライフル)

27番 宮崎 のどか キャリコム100 (サブマシンガン)

28番 村上 夏美 AN-94 (アサルトライフル)

29番 雪広 あやか 手榴弾 (1個)

30番 四葉 五月 ロープ

31番 サジ ちくわ

前編終了時に判明している状況。

死亡 4番 綾瀬 夕映 茶々丸の狙撃でヘッドショット

死亡 5番 和泉 亜子 エヴァのキャリコによる蜂の巣状態

死亡 6番 大河内 アキラ 上と同じく

死亡 27番 宮崎 のどか 茶々丸の狙撃でヘッドショット

10番 茶々丸と26番 エヴァンジェリンは同盟

第拾玖話 『初の授業はBR? (前編)』 (後書き)

くじで決めたら驚くほどパワーバランスが崩れた。
鳴滝ズとかもうびっくりですw

茶々丸に狙撃銃とか…決まった瞬間展開が限られました。

第貳拾話 『初の授業はBR? (中編)』 (前書き)

いつの間にかPV60万、ユニーク6万突破。
ホントーにありがとうございます！

今日の夜の更新は出来なさそうなので出かける前の昼に更新です。

第貳拾話 『初の授業はBR? (中編)』

【木乃香 side】

ウチの武器はベレッタM92っていうハンドガンや。

使い方はようわからんけど、親切にもアタッシュケースの中に説明書みたいなモンがあつて助かったわ。

校舎の中を歩いているとアスナとばったり会う。

「あゝアスナや!」

「ん?このかじゃない!」

アスナは日本刀を持っておつたわ。
なんだか様になつとるえ。

「なゝなゝアスナ。ひよつとして一人?」

「そうよ。そういうこのかも一人?」

「そうや。よかったら同盟結ばへん?」

「オッケー。そうと決まればサクサク倒していくわよ!」

ホンマ心強いわゝ

アスナと一緒になら勝ち残れそうやな。

.....
.....
...

そのまま校舎を歩いているとぼったりまきちゃんとお会った。

「むっ、アスナとこのか！覚悟お！」

アカン、やられる！

おもわず目を瞑ってしまいが、

カチンカチンッ

「「「……ん？」「」」

いつまでたっても弾丸が来なかった。

まきちゃんは慌てて銃をいじくるも撃てないようで隙だらけや。
とりあえず撃つとこつと。

「えいつ」

パシユッ

「え〜ん！　なんで撃てないの〜！？」

何やらまきちゃんが泣き出しちゃったわ。

うう…罪悪感が湧き出てくる。

「ごめんな、まきちゃん。これも授業なんやし勘忍な」

「しょうがないな」。はい、これあげる」

このかは『M4カービン（アサルトライフル）』をてにいれた

この銃よく見ると安全装置がONのまんまや。

このせいでまきちゃんは撃てなかったんやな。

それにしても、説明書はあったのに…流石はバカピンクや。

予想しない事をやるもんやね。

「アスナゝ装備が増えたえ」

「躊躇なく撃つなんてやるわね、このか。よし、私も負けないわよ！」

まきちゃんを倒した後、アスナと一緒に校内を歩きまわる。

そして窓から校庭を見下ろすと、そこではサジさんとさっちゃんが戦っていた。

「なゝなゝアスナゝ。あれ見てみい」

「……ちよつとシユールすぎない？てかあれって決着つくのかしら？」

サジさんは右手にちくわ…さっちゃんはロープを両手で握りしめて対峙している。

ウチらはどんな決着がつくか興味津々で見守っていたら、

タアンツタアンツ！

2発の銃声が轟いた。

すると校庭にいた二人に弾丸が当たり、頭がべつとりと赤く染まった。

「うひゃゝ誰が撃ったんやろ？」

「すごい命中率ね」

「これぞハルナの底力ってヤツかね」

あれ？

誰か違う人の声が聞こえたよ…

「ああー！美空ちゃんじゃない！なんでここにいるのよ!？」

「ホントやー。というか美空ちゃんの武器って何？」

「偶然通りがかった次第です。私の武器はこれだー！」

美空ちゃんはなにやら小振りのオモチャみたいなハンマーを取り出した。

なんや、ピコピコハンマーみたいやな。

アスナも同じことを思ったらしく、

「ねえ美空ちゃん。それって…ピコピコ——」言わないで、アスナ

やっぱりピコピコ「言わないでって言ったでしょ、このか……」

「美空ちゃん……つよく生きるんやで」

「ど、どんまい美空ちゃん」

「ありがとう二人とも…今はその優しさも辛いよ……」

アカン…落ち込ませてもうた。

ええっと、話を変えんと…

「そ、そうや美空ちゃん。なんでさっきの銃声はハルナだとわかったん？」

「さっき狙撃銃を持ったハルナを見かけたんだ。もしかしたら他の人が撃つたのかもしれない」

「れないけどね。二人も狙撃には気を付けるんだよ」

「……ねえ美空ちゃん。せっかく会ったんだしバトルしようよ」

アスナ…殺る気マンマンやな。

美空ちゃんは顔が引きつっているけど。

「どーしてもやらなきゃダメ、アスナ？」

「とーぜんでしょ！アンタはここで私が倒すわ！」

アスナは日本刀を抜いて美空ちゃんに斬りかかる。

「ちょ！日本刀！？アスナ、待って！タイムタイム！」

「待たないわよ！うりゃー！」

美空ちゃんは器用にピコピコハンマーで受け止める。

おもしろいからウチはここで観戦や。

「……流石はアスナ。こりゃ厳しいね。

てなわけで！逃げさせてもらうよ！（アデアット）」

あつ、美空ちゃんが逃げ出してもうた。

「あつコラ！待ちなさいよー！」

慌てて追いかけるも驚愕の速さでウチらの前から走り去ってしまう。
早いなーアスナでも追い付けないとは…

「しゃあない。美空ちゃんは諦めよか」

「仕方がないわね。このか！次の獲物を探しに行くわよ！」

獲物って、アスナ…

段々と物騒になってくるなあ。

【メフィストside】

時は少しさかのぼり、校庭で四葉とサジが狙撃された時。

俺は映像で早乙女の狙撃するシーンを見ていた。

「ほう…ただの中学生にしては精度が良いな。」

この学園の生徒はこんな遊びにだけはスペックが上がるのか？」

「麻帆良の生徒は基本的にハイスペックですよ。」

でもいいな…みんな楽しそうです」

むっ 相坂が反応を示したぞ。

でも今この教室には失格した者が何人かいるしな。

よしっ、念話で話そう。

“スマンな、相坂。お前は幽霊だったのでこのゲームに参加させられなかった”

「うひいッ!!」

あれ？驚かれたぞ？

“何を驚いているんだ？”

「そ、そそ、そりゃあ驚きますよ！なんで私の声が聞こえるんです

か!？」

“俺に出来ない事はないと言ったはずだ”

「ま、まさか…あらゆる霊能者にも見えなかった私を見れるなんて…」

ふむ…まあ正直なところ、昨日この教室に来た時にこの子を見たときは驚いた。

まさか幽霊がいるとは思わなかったぞ。

麻帆良はホントになんでもアリだと実感したわ。

“これからはこの教室に来る機会もあるし、英語の補佐とか暇なんだわ。

だから英語の時間とか俺の話し相手になってくれないか?”

「…ハ、ハイ!私なんかでよければですけど…」

“じゃあこれからは友達だな。よろしく、さよ…”

「あつ!………よろしくお願いします、メフィスト先生!」

幽霊か…

そのうち人形とかで動ける肉体を与えてやらないとな。

俺は目線を画面に戻す。

むっ、早乙女が殺られたな。

殺ったのは……真名か。

「流石は真名だ。狙撃銃を見逃さないで回収にいくとは…」

刹那も銃声を聞きつけて来たぞ。

どうやら刹那も狙撃銃を回収したかったらしいが、真名のほうが上手だったな。

同盟を結ぶか…戦闘になるか…見ものだ。

「は…やっぱり龍宮さんはすごいですね。
時々見ますけど強いんですね」

時々…見る？

ひよっとして…この教室に地縛しているんじゃないのか？
ひよっとして…夜の警備時にも学園内を徘徊しているのか？

“なあ、さよ。ひよっとしてお前…魔法使いつて知ってるのか？”
「ん？もちろん知ってますけど…けっこついますよね、魔法使い」

あら…バレバレだよ…この幽霊に。
確かにステルス性は高そうだしな、この子。

「それにメフィスト先生が警備しているのも何度か見てますよ。
何回か龍宮さんと組んでますよね？」

そう…俺は年明けからの警備で何回か真名と組んでいる。
下の名前で呼ぶぐらいには仲が良くなっていた。

まあバレていてもどうでもいいか…
今のところ、さよとコミュニケーションを取れる人物はいなさそうだし。

“モロバレか。あんま魔法使いの事は言いふらすなよ”
「了解です」

画面に視線を戻すと…真名が刹那を倒すところだった。
しまったー！見逃した！

てかSVDドラグノフとは別の銃を手に持っているな。

あれは……ワルサーP99か。

てことは那波も真名がやったってことだな。

流石の刹那も愛刀なし+得意じゃない獲物じゃ分が悪かったか。

……ん？魔力を感じる。

これは……春日のアーティファクトか。

授業で堂々と使うとはな。

少し……灸をすえておくか……

俺は急いで教室から出て行った。

……

……

…

あゝ楽しかった♪

「ど……どこに行つて来たんですか？」

さよが恐る恐る聞いてきた。

なんでビビッているんだ？

“ ちょっとアホな子に教育してきた ”

教室の後ろにはボロ雑巾のようになった春日が転がっている。

失格者の面々は視界に入らないように必死だ。

てか大分増えているな。さよに聞いてみるか。

“なあさよ。俺のいない間になんでこんなに増えてるんだ？”
「ええつとですね。こんな感じです——」

鳴滝姉妹は長谷川にやられた↓その後、長谷川は村上と遭遇・戦闘開始

↓膠着状態の時に柿崎& a m p ;釘宮& a m p ;椎名に漁夫の利作戦で死亡↓喜んでいるところに
雪広が手榴弾を投下・爆殺↓新しい武器を拾っているところに茶々丸が狙撃。

——こんな展開になっていました」

この短時間でかなり濃い展開になったようだな…

むっ、超と葉加瀬が組んで明石と朝倉を狩っているな。

あいつらの装備はヤバい状態になっちゃったよな…

R P G - 1とグレネードランチャーって。

どんだけくじ運良いんだよ！

あっ、あっけなくグレネードランチャーの餌食になったわ。

明石が持つデザートイーグルは超が所有か。

朝倉の防弾チョッキは葉加瀬が装着。

それにしても大分数が絞れてきたな。

こりゃ場所を校庭に限定するか。

ん？……これは……

別の画面をのぞいてみると古菲が倒れていた。

なんか気絶してるな…長瀬のスタンガンにでもやられたのかね。

まあいいや、ほっとこつと。

『あーあー聞こえるか？

そろそろ人数が絞れてきたので場所を校庭のみに指定しようと思
う。

よって今から俺の合図までは戦闘行為を禁止するぞ。

今戦闘をしている者は即刻止めて校庭に移動しろ。これを破るも
のは失格とする』

では最後の見世物を楽しむとするか。

今回の死亡者リスト

- | | | |
|-------|---------|------------------------|
| 2 番 | 明石 裕奈 | 葉加瀬のグレネードランチャーで爆殺 |
| 3 番 | 朝倉 和美 | 上と同じ |
| 7 番 | 柿崎 美砂 | 雪広の手榴弾で爆殺 |
| 9 番 | 春日 美空 | メフィストによる肅清で失格 |
| 1 1 番 | 釘宮 円 | 雪広の手榴弾で爆殺 |
| 1 2 番 | 古 菲 | 長瀬のスタンガンで気絶後、胸当てを破壊される |
| 1 4 番 | 早乙女 ハルナ | 龍宮の手裏剣で胸当てを破壊される |
| 1 5 番 | 桜咲 刹那 | 龍宮のワルサーP99で撃たれる |
| 1 6 番 | 佐々木 まき絵 | 木乃香のベレッタM92で撃たれる |
| 1 7 番 | 椎名 桜子 | 雪広の手榴弾で爆殺 |
| 2 1 番 | 那波 千鶴 | 龍宮の手裏剣で胸当てを破壊される |

22番	鳴滝	風香	長谷川のクロスボウで胸当てを破壊される
23番	鳴滝	史伽	上と同じ
25番	長谷川	千雨	柿崎のMP40で撃たれる
28番	村上	夏美	釘宮のサバイバルナイフで胸当てを破壊される
29番	雪広	あやか	茶々丸にヘッドショット
30番	四葉	五月	早乙女に胸当てを破壊される
31番	サジ	上と同じ	

生存者リストと所持武器

8番	神楽坂	明日菜	日本刀
10番	絡繰	茶々丸	H&A m p ; K P S G - 1・仕込み杖・手榴弾2個
13番	近衛	木乃香	ベレッタM92・M4カービン
18番	龍宮	真名	S V Dドラグノフ・グロック17・ワルサ
19番	超	鈴音	R P G - 1・デザートイーグル
20番	長瀬	楓	スタンガン
24番	葉加瀬	聡美	M79グレネードランチャー・防弾チョッキ
26番	エヴァ	A K - 47・キャリコM100	

同盟している組み合わせ

茶々丸とエヴァ
 アスナと木乃香
 超と葉加瀬

第貳拾話 『初の授業はBR? (中編)』 (後書き)

ちょっと補足を。

知っているかもしれませんが、銃器は安全装置というものがあり、それを解除しないと撃てません。

バカピンクに銃が渡った瞬間に思い付いたネタなので違っている箇所があったら申し訳ないです。

あと真名と刹那がばったり会ったところでは、刹那は真名に狙撃銃が渡るのを警戒して回収しに行きましたが、先を越されたので戦闘となりました。

あとはクラスメイトたちか…

こればかりは謝るしかありません。

強引に間引いてしまつて申し訳ありませんでした。

第貳拾壹話 『初の授業はBR?』(後編)『(前書き)

いよいよ授業は大詰めです。

第貳拾壹話 『初の授業はBR? (後編)』

【長瀬 side】

拙者は古を倒した後、狙撃銃を持った真名に狙われているでござる。状況は圧倒的に不利。

向こうは狙撃銃を持ちかなりの距離を取っている。こちらはスタンガンのみ。

それにさっき春日殿がメフィスト殿に肅清されるのを目撃してしまったでござるからなあ。気を使うのはダメっばいでござるよ。

(ホントはアーティファクトを使ったのが理由だが、楓は魔法使いという存在を理解していないのでわからなかったのだ。by 隴識)

『あーあー聞こえるか？
そろそろ人数が絞れてきたので場所を校庭のみに指定しようと思
う。』

よって今から俺の合図までは戦闘行為を禁止するぞ。
今戦闘をしている者は即刻止めて校庭に移動しろ。これを破るも
のは失格とする』

メフィスト殿から停戦の連絡が入る。
すると真名がこちらに歩いてきたでござるよ。

「命拾いしたな、楓」

「気が使えないのはツライでござるな。真名にはかなわんでござ

る」

「何の話だ？」

「さっき気みたいなのを使った春日殿がメフィスト殿にお仕置きされていたのを目撃し

たんでござるよ」

「（ひよつとしてアーティファクトの事かな…）」

たぶんバレない程度なら使っても大丈夫のはずだぞ…多分」

「不安になる答えでござるなあ」

真名と会話しつつ校庭に向かう。

そこでは…アスナ殿とこのか殿、茶々丸殿とエヴァ殿、超殿と八力セ殿がそれぞれ組んで距離を保ち対峙していた。

これは…同盟を結んだほうが賢明な気がするでござる…

「……真名…一つ提案があるでござる」

「賛成だ、楓。私はなんだか戦場に来た気がしてならない」

同感でござる。この張りつめた空気…拙者は来るところを間違えたでござるか？

『よしっ全員そろったな。それでは最終決戦を始めようと思う！
だがこのままではつまらんかな。失格者にも救済措置を急遽作
った！』

また何かするつもりでござるか。

メフィスト殿はやりたい放題しているでござるなあ。

『優勝者を当てたヤツにはある程度、成績に色を付けてやるぞ！

では生き残ったメンバーを紹介だ！まずはバカレッドと木乃香チムだ！』

「誰がバカレッドよ！」

「がんばるえ〜」

アスナ殿…ドンマイでござる。

『日本刀を担いで返り血を浴びる姿はまさしくレッドの称号にふさわしいぞ！

「返り血なんて浴びないでしょうが！何口走ってんのよ！」

パートナーの木乃香も容赦ない銃撃には主催者も驚愕だ！

さて、お次はア……茶々丸とエヴァだア！』

「殺る気は十分です」

「茶々丸…物騒だからその邪気はやめろ」

こちらは近・中・遠距離の武器を全て持っているから手ごわそうでござるな。

『茶々丸の狙撃は正確無比！相方のエヴァも火力は十分！

この中では一番火力が安定しているか！？

……そうそう、一つ言っておく。少しでもエヴァを傷つけたら、

コ・ロ・ス・カ・ラ』

「こ、こら、メフィスト！学校で殺気を飛ばすんじゃない！」

「ご安心をメフィストさん。マスターには指一本触れさせません」

……音声だけでも十分の殺気を感じたでござる。
メフィスト殿は何者でござるか？

『ゴホンゴホン、では気を取り直し…

お次は超と葉加瀬のマッドサイエンティストチームだ！』

「くくくつ、科学に魂を売った我々に敵はいないネ」
「この武器も凶悪ですしね」

このチームからは目を離せないでござる。
離れたら最後、いつ爆撃されるかわかったものじゃないでござるかな。

『RPG-1にグレネードランチャー！

一つだけでも凶悪なのにその二つが組んでしまったー！
これはかなり期待が出来るぞ！

そして最後に残ったのは、真名とバカブルーだ！』

「戦場に招待してくれてありがとう、メフィストさん」

「バカブルーって紹介は勘弁してほしかったでござるよ」

失礼でござるな、メフィスト殿は。

『真名は銃装備だが、ブルーはスタンガンのみ。

中編をみて思ったが、やはりバカレンジャーは銃器を扱えないのかア！？』

し、失敬な！

拙者は訳あつて銃を使わないのであつて、決して使えない訳ではないでござるよ！

ホントでござるよ！

『一番人気は超と葉加瀬か…やはり大火力は人気だな。

次にエヴァと茶々丸か…真名&ブルーとレッド&木乃香は同じくらいだな。

またしてもバカレンジャーが足を引っ張っているぞ！』

「もお勘弁して〜！」

アスナ殿が涙目だ…

メフィスト殿は鬼でござるな。

「ボソツ……そりゃあ吸血“鬼”だからな」

「ん？なにか言ったか、真名？」

「いや、なんでもない」

真名が何か言った気がするが…

『それじゃあ集計も終わったことだし、戦闘開始だ！』

s i d e o u t

【木乃香 s i d e】

メフィストはんから合図が来る。

でもウチらは互いに牽制したままで動けんかった。

「このか…どうする？」

「ウチも困つとるんよ、アスナ。でも下手に動けないやで」

とりあえずウチはM4カービンを構えてるんやけど。
全員が全員を狙っているから身動きがとれへんよ。

「……………このままではジリ貧だな。超、ハカセ。
この場は組まないか？」

あ！エヴァちゃんが超りんとハカセと組もうとしとる！
これはアカンえ！

「ア、アスナ！どないしょ！？」

「こうなりやこつちも…楓ちゃん、龍宮さん！
私たちも組みましょう！」

アスナが楓たちに協力を要請する。

「だそうだが…どうする、楓？」

「ん…超殿たちは組む気のようにだし、こちらも組むほうがいいでござるな。」

明日菜殿、拙者らも組むでござるよ

やったー！楓たちが味方になってくれるなら怖いもんナシやで！

「よそ見をしている暇はありませんよ」

え？

「このか殿！」

スドオオオオンッ！

「ひゃあ！」

よあわからんが茶々丸さんかな？
いきなり爆発したけど楓が抱えて避けてくれたわ。

「ありがとな〜楓」

「なんの。今は仲間でござるからな」

「あ、危ないじゃないのよ、茶々丸さん！

当たったらどうするのよ！」

「申し訳ありません。ですがこれも授業ですので…」

アスナ…あれを避けられるなんてスゴイなあ。

でも茶々丸さんの言うとおりやで。

「えいッ！」

ウチは茶々丸さん目掛けてM4カービンを撃つ。
でもあっさり避けられてもうた。

「アカン、よけられてもうた」

「このか殿も容赦ないでござるな…」

あれ？楓が呆れておる。

「それよりも楓。これからどうするんや？

超りんたちはどっか行ってもうたで」

「そうでござるな〜。みな意見を聞くでござるよ」

あたりを見渡すと向こうのチームはいつの間にか全員隠れてもうた。
これはアカンなあ。

「ここで意見を言う前に私たちも隠れるぞ」

「了解でござる」

「あっ！ちょ、ちょっと待ってよ〜！」

アスナが移動するウチらを慌てて追いかけてくる。
ウチは楓が抱えたまま移動だったから楽チンやわ。

………

……

…

「さて、どうするでござるか？」

「まず各自が持っている装備を見せてくれ」

楓が切り出し、龍宮さんが提案をする。

「ウチはこれや」

「私は日本刀だけよ」

「拙者もスタンガンのみでござる」

それぞれ自分の武器を広げていく。

「ふむ……火力が心もとないが無い物ねだりをしてもしかたがない
ね。」

楓と神楽坂はなんとか接近して敵を叩いてくれ。

近衛は障害物を盾にしつつ隙さえあれば撃ち続けるんだ。

私は遠距離でみなを援護と狙撃をする」

ほえ、龍宮さんすごいな。

瞬時に作戦を立てられるなんて流石やわ。

「それしかないでござるな」

「が、がんばって優勝するわよ！」

「がんばるゝな、アスナ」

「では仕掛けとする——ッ！」

タアンッ！　ズドオオオンッ！

「ひゃあ！」

「ど、どうしたのよ！？」

「攻撃か、真名？」

「RPG - 1だ！全員、戦闘開始ッ！　ここから離れる！」

超りんの攻撃かゝ

こうなりや勝っても負けても恨みつこなしやで！

「承知！」

「やったるわよ！」

「ほないくでゝ」

龍宮さんを除くウチらが敵目掛けてかけだしていく。

side out

【茶々丸side】

超鈴音のRPG - 1が撃ち落とされた後、3人がこちらに向かって来ます。

格好的なので私はPSG - 1で狙撃を行います。

まずは近衛さんからですね。

タアンッ！

当たるタイミングを計算して撃ちましたがハズれたようです。どうやら龍宮さんが撃ち落としたようです…やりますね。

「マスター。このままだと接近を許してしまいます。

お気をつけてください」

「わかっている。茶々丸は龍宮を殺れ」

「了解しました」

それでは龍宮さんとの勝負と行きましょう。

AIの計算速度を超えられるかどうか…試させていただきます。

s i d e o u t

【エヴァ s i d e】

近づいてくる敵は神楽坂明日菜、長瀬楓。

少し離れて近衛木乃香が手に持つ銃で撃ってくる。

こちらは超鈴音がキメの一手を撃つために離れているため、迎撃するのは私とハカセのみ。

茶々丸は龍宮と戦っているからな。

まずは威嚇射撃か。

「ハカセ、2発ほど撃って動きを止めろ」

「了解ですー。うりゃあ！」

先行してくる二人を目掛けてグレネードランチャーが火を吹く。

長瀬楓は余裕で避けるが、神楽坂明日菜はかなりギリギリのようだ。

……それでもただの人間が避けられるのはすごいと思うがな。

だが、その致命的な隙を見逃さない手はないぞ。

シュカカカカカツ！

キヤリコM100から繰り出される弾丸の嵐は神楽坂明日菜を襲う。

だが…驚いたことに神楽坂明日菜は弾丸を避けきる。

「あ、危ないじゃない！エヴァンジェリンさん！」

お前こそなんで人間のくせに銃弾を避けられるんだ！？

おもわず叫び出しそうになるが、すんでの所で抑える。

「隙ありでござるッ！」

「——ッ！しまっ！」

神楽坂明日菜の非常識さに意識を奪われていて長瀬楓の事を忘れていた。

後ろからスタンガンを放電させつつ迫ってくる長瀬楓を見て一瞬諦めるが、

「——マスターには指一本触れさせません」

「よくやったぞ、茶々丸」

茶々丸が仕込み杖でその攻撃を防いだ。

「真名はやられたでござるか？」

「腕に一発もらいましたが、まだ失格にはなりません」

なるほどな、茶々丸に一撃を与えとはやるじゃないか…龍宮。
だが、ウチの従者のほうが上手だということだ。

「（茶々丸。敵を一ヶ所に集めるぞ）」

「（了解しました）」

小声で茶々丸に指示を出し、そのあとハカセにもその趣旨を伝える。
まずは神楽坂明日菜と近衛木乃香を一ヶ所にまとめないとな。
超鈴音なら好機と見れば自主的に動くだろう。

「ほらほらほら！上手く避けないと当たってしまうぞ！」

「あはははー。弾幕ゲーですねー」

「ちょ！こっちは日本刀だけなのよー！」

「ア、アスナ！？今援護するえ！」

近衛木乃香がこっちに向けて銃を乱射してくるが…所詮は素人。
それなりの距離を空けていれば怖くはないな。

上手く神楽坂明日菜の行先を誘導して近衛木乃香に近付けたころ、
超鈴音からの砲撃が来た。
た。

着弾する直前に茶々丸が長瀬楓の攻撃を捌き、捉えて、そのまま二人のいるポイントへ投げつける。

空中に投げ飛ばされていたけど、虚空瞬動を使わずに直撃。
三人はそろって真っ赤に染まった。

なんで長瀬楓は回避行動を取らなかったんだ？
その気になればあんなものは回避できた事態なのに…

「まあいいさ。さて…最後の闘い^{いひぐわい}と行こうか」

「あー、申し訳ないですけどエヴァンジェリンさん。

私のグレネードランチャーですけど、弾が切れちゃったんですね」

……………なんだか一気にやる気なくなつたぞ。

元々、弾数が少ないのは承知していたがメフィストから予備の弾を補充しておくぐらいし

ておけよ、ハカセ。

「マスター？大丈夫ですか？」

「あ、ああ……大丈夫だ。でもこうなると超鈴音のほうも火力が無いな。

確かRPG-1もさっきので弾切れだったはずだ」

「その通りネ」

むっ、超鈴音か。

武器がないのに姿を現すとはな。

「なんだ、超鈴音？降参するのか？」

「もともと私たちが勝つには一網打尽にするしか手がなかつたネ。

唯一、近接で使えるデザートイーグルも弾切れだよ。

相棒のハカセも弾切れだし…素直に降参ネ」

「じゃあこの授業…私の勝ちだ」

ズガガガガガガガガッ！

私はAK-47を超鈴音とハカセ目掛けて撃つ。

この瞬間、私の勝利は決まった。

：

武器の回収が終わって生徒は全員帰っていった。

俺はいらないゴミ（ヘルメットやちくわ）を捨てて、銃器を全部王^{ゲイ}の財宝の中にしまつて
帰ろうとしたら、

「メフィスト・マクダウェル先生…いや、『幻獣使い』サン。
少し個人面談をしてもいいかな？」

クラスのチャイナ娘が一人、教室の中に佇んでいた。

第貳拾壹話 『初の授業はBR? (後編)』 (後書き)

さて、思いつきでやってみたネタでしたが、どうだったでしょうか？

この後もこんな授業をやるかもしれないのでアイデアを募集したいです。

いろんなアイデアをお待ちしてますね♪

第貳拾貳話 『2・Aの授業風景』

俺は今、放課後の教室で超鈴音と対峙している。

それにしても…この地にて、その名で呼ばれるとは思わなかったぞ。

「超鈴音か。茶々丸を製作したことから一般人ではないと思っていたが…」

俺の事を知った上で接触してくるとは驚いたぞ」

「エヴァンジェリンを調べた時に色々とすごい話が出てきたヨ。

賞金は9000万ドル。魔法世界を混乱に貶めた元凶。

ついた異名は、『幻獣使い』『災厄の邪神』『闇の僭帝』などなど…」

「悪事については上げていったらキリがないネ」

へえ……裏の世界での俺の評価ってヤツは知ってるって訳か。それを踏まえた上でこの子は何を聞きたいんだろうかね。

「よく調べたじゃないか。

それで、超鈴音は何を俺に聞きたいんだ？」

少し警戒するそぶりをするが、超は言った。

「……私は今年の麻帆良祭で魔法使いに闘いを挑むヨ。

そこでメフィスト先生には仲間に…最低でも不干渉を貫いてくれると助かるネ」

おいおい…

遮蔽物もないこの場所でそんな重要なことをカミングアウトするなよ。

「なぜ魔法使いである俺にその事を言うんだ？」

「計画遂行においての不確定要素を排除しておきたいネ。本当は隠したままにしようかと

思ったが、メフィスト先生には正直に言った方がいいと判断しての行動だヨ」

なるほどね…別に俺は超鈴音が何をしようともどうでもいいしな。エヴァに害がないなら勝手にしてくれ。

「どうかな、メフィスト先生？」

「俺がお前に敵対…つまり魔法先生側につくことはありえないな。

というか俺が味方するだけでその陣営は勝ってしまうし…
そういう理由でお前に味方するのもなしだ。

無粋なマネはしたくないしな」

存在がチートの俺を引き込みたい気持ちは理解できるが、それは卑怯だからな。

俺が力を貸す事態でもなさそうだし。

気が変わったら味方につくかもしれないがな」

「それじゃ話す事もないし俺は帰るぞ。

ああ、そうだ。茶々丸を作ってくれてありがとな、超。

おかげで助かりまくっているぞ」

仲間になれないが、ズバツと言ってくる物言いは気に入った。
さて、超に礼を言っただし帰るとするか。

……
……
……

「メフィスト！ 今日の授業はいつたいつつもりだ!？」

家に帰ったらエヴァがご立腹だ。
なぜに？

「なんでそんなに怒ってるんだよ？」

「これが怒らないでいられるか！ どこの世界に殺し合いで成績を決める教師がいる！」

「いや…エヴァの目の前にいるんだが…」

「そういう事を言ってるんじゃない！」

おかしいな。エヴァも結構ノリノリだった気がするけど。
なぜに俺が怒らなければならないのだ？

「そういうエヴァだって結構やる気になってたじゃないか？」

「そっ！……それはそうだが……ただでさえ目を付けられているのにこれ以上、バカ共を

刺激するようなマネはよせ」

あゝ心配してくれたのか。

流石に遊びすぎたかな…ゴメンよ、エヴァ。

「ゴメンって。こんな遊びはこれで終わりにするからさ……………多分」

「ボソツと付け加えるな！」

「あつ、茶々丸！ 茶々丸もすごかったな。まさか真名を倒すとは驚いたぞ」

「こ、こら！メフィスト！ 話をそらすんじゃない！」

「ありがとうございます、メフィストさん」

「さて、明日も学校だからそろそろ寝るぞ。ほら、エヴァも一緒に来い。寝ようぜ」

「こら！いきなり抱きかかえるんじゃない！ まだ話は終わってないんだぞ！」

「こらこら。そんなに怒っているとエヴァの可愛い顔に皺ができるぞ」

「誰のせいで怒っていると思っている！？／＼／＼」

おつ、嬉しい顔と怒っている顔が入り混じった顔だ。

エヴァ…恐ろしい子。

はい、お休み。

……

……

…

次の日からは普通の授業をやっていた。

内容はくじ引きだな。

ここからは一つ一つが短いから複数日、乗っけていくぞ。

「では1時間目を始めます。――（英読中）――」

ネギが英語の授業を始める。

今日は授業が無かったのでさよとおしゃべりするために教室にいた。

“そついやさよって勉強すんの？”

「60余年ほど地縛霊をやっているので中学生の範囲は楽勝ですよ」

“そうか。60年もここにいたら面白い生徒や先生をたくさん見たんじゃないか？”

「昔の事はあまり覚えていませんが、結構いましたね」

さよと話していると和むぜ。

毎日、正義バカどもの視線を無視するのはストレスがたまるわ。そのうちどっかで発散しないとな。

「――それじゃ今のところを訳してもらおうかな」

ネギが教卓から離れて教室を歩きまわる。

その間、生徒に視線を送るが悉く避けられた。

そのまま歩いてアスナのところに来ると、

「じゃあアスナさん」

「なっ、なんで私に当てるのようっ!？」

「え、だって…」

「フツ―は日付とか出席番号で当てるでしょ!？」

……… 激しく不本意だがバカレッドに賛成だ。

「でもアスナさん、ア行じゃないですか」

「アスナは名前じゃん!」

「あと感謝の意味も込めて」

「何の感謝よ!？」

……… これも激しくバカレッドに賛成なんだが…。

俺だけか？俺だけがバカレッドと思考することが一緒なのか!？

「要するにわからないんですわね、アスナさん。

では委員長のわたくしが代わりに…」

雪広の言葉が癪に障ったのか、慌てて読みだすアスナ。

「わ、わかったわよ。訳すわよ。

えーっと…ジェイソンが…花の上…に落ち…――」

たどたどしく和訳していくが、そのアスナの様子にネギがからかう様な声を掛ける。

「アスナさん、英語ダメなんですねえ」

「なっ!」

「アスナさんは保健体育しか取り柄がないんですよ」

ネギの一声にクラスに笑い声が発生する。

晒しものようなアスナは真っ赤になり震えていた。

ネギ…教師のくせにそれはイカンだろ。

イジるのは結構だがTPOを弁えないとな。

しょうがない…少し助けてやろう…幸いクラスの視線はアスナに向いているしな。

パンパンッ！

「うひっ！」

「ひゃあ！」

BRで使ったハンドガンを取り出し、ネギと雪広を目掛けて一発ずつ撃つ。

弾は二人の頭に当たり、中々ホラーな状況になった。

「少年…教師のくせに生徒を貶めるような発言してはダメだろ。

そんなんじやダメ教師だぞ。雪広もあまりイジめてやるな。

次にそんな発言をしたら——」

「……し、したら？」

「間違つて実弾を装填して撃つてしまつかもな。

おっと…今のは聞き流せ。少年と雪広が神楽坂に謝ったらその可能性は減るぞ」

「アスナさん、ごめんなさい（ですわ）！！」

おおっ、なかなかの反応速度だったな。

「神楽坂もここは聞き流しておけ。じゃあ授業を再開しろ」

授業が再開するも、誰一人として口を開かない。

くっくっく…おそらく全員がビビッてしゃべれないんだな。

いいね、恐怖政治というのもいつかやってみたいものだ。

「かなりの悪役のような顔をしていますよ」

“むっ、顔に出ていたか。見るよさよ、クラスが恐怖で支配されているぜ”

「その元凶がなに言ってるんですか…」

“おもしろくないか?”

「どこがですかー!?’」

英語の時間はさよと喋って時間を潰した。

……

……

…

このあと、ネギがホレ薬らしきものをアスナに渡して媚びるが、逆にアスナに飲まされる。

ピーンッ!

俺はある事を思い付いた。

「茶々丸」

「なんでしよう?’」

「これから起こる事を録画してくれないか?’」

「了解しました」

「サンキューな。ちゃんと出来たら頭を撫でてやろう」

「……………そ、それでは行ってまいります」

あれ?反応が遅かったな。
もしかしてイヤだったか?

「くくくつ、おもしろい事になってきたな」

「エヴァか。やはり少年はバカだな。堂々とホレ薬を作って、それを自分で飲むとは」

「もはや道化か」

「ハハハッ、違うない」

茶々丸が撮ってきた映像を編集して保存しておこう。

いつかナギに会った時に映像を見せて存分にイジるとするか。

次はバカレンジャーの補修風景だ。

「——というわけで2-Aのバカレンジャーがそろったわけですが……」

「誰がバカレンジャーよっ！」

「お前ら以外いないだろう。そんな事がわからんからお前はバカレツドなんだ」

なんで俺がこのバカ共の面倒を見ないといけないんだ。

タカミチめ…ぬけぬけとダマして俺を連れて来やがって…

大体、ネギがいれば問題ないだろうが。

あゝも〜めんどくさい。

帰るわ。

補修イベントを見逃した

「ん？なんの事だ？」

なにやら電波を受信したがよく解らなかったので放置。

「とある日の昼休み」

職員室は窮屈なので中庭の木陰で昼寝をしようと思い移動する。
昼休みは学生が遊び出すがたいして気にならずに寝入った。

しばらくして、まどろみかけた時に突然揺さ振られる。

「ちょっと先生！ こっちで揉め事が起きたから助けてよ！」

「んゝ…なんだ、明石か。俺は今、壮絶に昼寝がしたい。
てなわけで諦める」

俺の邪魔をするヤツは万死に値するが…生徒だし自重しよう。

「ちよつ！先生！？ 見捨てるのは酷いんじゃないかな！

先生も広域指導員でしょ！？」

「そっぴやそんな肩書きがあつた気がするが…どうでもいいことだ
つたな」

「どうでもよくないよー！」

なんだか涙目になっているな。

それになんだか中庭の方がギャアギャアと煩い。
少しは慎ましくできないのか!?

「うるせーぞ、ガキども!」

「「「「「ッ!」「「「「「」

俺は騒がしい集団に近づき一喝いれる。

どうやらアスナ & amp・雪広と高等部のやつらが喧嘩していたようだ。

だが、そんなことはどうでもいい!

「貴様ら…こんなところでギャアギャアと騒ぎやがって…

おかげで俺が昼寝出来なかったじゃねえか!」

「「「「「(ええー!ー!)」「「「「「」

文句を言えない空気を悟ったか…全員が心の中で絶叫する。

「高等部の貴様らは先輩ヅラして下級生をいびってんじゃねえぞ!

ガキかお前らは!高校生を辞めて小学生からやり直してこい!

おら!さつさと散れ! 授業の時間だ!」

「「「「「は、はいいいいっ!」「「「「「」

まったく…俺の昼寝を邪魔するとはふてえ輩だ。

「メ、メフィストさん…さすがに生徒に殺気を向けるのはどうかと

…」

「むっ、タカミチか。悪いな、昼寝を邪魔されたからイラだったんだ。

あ…このあとの授業はダルいな。そうだ!タカミチ!」

「な、なんでしょう?(嫌な予感が…)」

「このあとの授業はお前に任せたわ！」

「そんな笑顔で言わないでくださいよ……」

「じゃあ俺は昼寝をするんであとよろしくな」

さて、邪魔の入らなそうな屋上でサボるか。

………

………

…

余談だが、

「ねえねえ、メフィスト先生ってすごくない？」

「ちよつと怖かったけど頼りがいあるかにゃー」

「なんだか暴君って感じだね」

「いやいや、もはや魔王でしょ！」

「まあネギ君よりかは頼りがいあるよねー」

そんな会話がクラスでなされていた。

だが、これらがメフィストの耳には入る事はない…かな？

第貳拾參話 『面倒事を押し付けるとはいい度胸してるな…』

「メフィスト先生！」

それはいつもの朝だった。

いつもの如く、職員室にいないで屋上でぐーたらしてたらいきなり呼ばれて連れてかれる。

なんつったっけかな…まあいいや。

いつか印象に残るようなことをすれば名前を覚えんだろ。

教室に着くと、なにやら中が騒がしかった。

「HRの時間なのにネギ先生こないね」

「さっき一応メフィスト先生を呼びに行ったけど…」

「どうしちゃったんだろうねー」

なに？ネギがいないだと？

寝坊するとは大層な御身分だな。

しょうがない…俺がやるか。

「さっさとHRを始めるぞ。席につけー」

多少ザワツているがちらほらと席に着き始める。

「いないのは…：数えるのが面倒だ。雪広、教える」

「ちよっ！メフィスト先生！あなたそれでも教師ですか！？」

「それでも教師だよ。何か文句でもあんのか！？」

「「「「（自分勝手すぎるよ先生ー！！）」」」」」

この瞬間、2 - Aの全員が心を通わせた。

「……いないのは綾瀬さん、アスナさん、古菲さん、このかさん、ハルナさん、まき絵さん、

長瀬さん、のどかさんの8名ですわ」

「多いな。もしかして少年を含めて全員寝坊か？

どいつもこいつもいい御身分だな……うらやましいぞ、この野郎！」

まったくズルいぜ。俺もサボツちゃおうかな……

「みんなー、大変だよ！ ネギ先生とバカレンジャーが行方不明になっちゃった！」

早乙女と宮崎が遅れて教室にきた。

それにしても……行方……不明……だと？

まさかネギのヤツ、俺を差し置いて授業放棄したと言うのか！？

「……おい、早乙女、宮崎。なんでお前らがそんなことを知っている？」

「あ……アハハハ……実はですね。

頭が良くなる魔法の本を探しに図書館島の奥まで昨日行っていたんです。

そこで通信が途切れてしましまして……」

あのガキ……教師のくせに、そんな物を探しに行くために俺に面倒を押し付けたと言うのか！？

そもそもそんな都合のいい魔法書が手に入る訳ないだろうが！？

バキィッ！

「「「「ひつ！」「」「」

おもわず名簿を持っていた手に力が入ってしまう。

「く……くくくっ……アッハッハッハッハ！

そんな事のために俺に面倒事を押し付けるとはな。

これは少し灸を据えてやらねばなるまいよ」

とりあえず今日の授業が終わったら図書館島に潜るか。

どんなお仕置きをしてやるか、楽しみだ……くっくっくっ……

「（なあ茶々丸……メフィストがすごく邪気を纏っているように見えるんだが……）」

「（おそらくその通りかと……ご愁傷様です、ネギ先生）」

………

………

………

放課後、とりあえず図書館島に来たはいいが道がわからん。

あとネギに魔法使いだとバレても面倒だしな。

道中は気のみで攻略か。

ダルいし身体を蝙蝠に変化させて進んでいくとしよう。

………

………

………

どんどん進んでいくにつれて極めて微弱だが懐かしい気配を感じ取る。

それにしてもこんな所でアイツ、なにしてんだろうな…

バカ共がいる辺りの近くにいたようだし様子を見に行こう。

どんどん進んでいくと目の前に祭壇らしき所に出た。

部屋の真ん中には大きな空洞があり、ここから落ちれば目的地に一直線のような直線があった。

「んじゃま…ちよっくら行きますか」

ノーロープバンジーってか？

………

……

…

落下していくと湖らしきものが眼前に広がる。

とりあえずこのまま当たると痛いので浮遊術で少しだけ浮いて近くの砂浜に降り立つ。

「さて…なんだか開けたところに降り立ったが…」

バカ共はどこでなにをやっているのかな」

気配を追って歩いていくと…寛ぎながら本を読む者、どこから取ってきたかは知らんが

「ご飯を食べている者、寝ている者等々。

キ・サ・マ・ラ……

「いい度胸してるじゃねえかあああああああ！！」

「「「「「うひいッ！」「」「」」

とりあえず特大の怒声を上げる。

「メ、メフィスト先生！？　なんでここに……」

「そんな事はどうでもいいわ！　貴様らア！　そこに正座しやがれッ！」

「「「「「は、はいい！」「」「」」

バカレンジャー＋木乃香＋バカ教師が瞬時に身体を起こし正座する。

「貴様らのせいであ……俺の仕事が増えたじゃねえかアッ！」

「「「「「（あれ？　私たち、地雷踏んだ？）」「」「」」

ここでも心が通じ合う2・A諸君。

実はここのクラスメイト、なにげにシンクロ率が高かったりして。

「読めば頭が良くなるなどという蜜に吸い寄せられやがって……脳みそ湧いてんじゃねえの

か！？　そんな都合のいい本なんざあるわきやねえだろうが！

そんなのも解らんからバカレンジャーなんだ！

今日はその弛んだ根性を叩き直してやる……期末試験までみつちり勉強を見てやるから

覚悟しろ！」

「「「「「い……いやあああッッ！」「」「」」

まったく…近頃のガキはすぐ目先の楽できる方法に惹かれる。そんなだからゆとり教育はダメと言われるんだよ。

「あ、あの…メフィスト先生…」

「なんだ、少年？」

「怒るのはそれぐらいにして欲しいんですけど…（そういえばメフィスト先生って僕の事、

名前で呼んでくれないな）」

それくらいにして…だと？

貴様にも怒っているんだと理解できていないようだな！

「黙らっしゃい！　そもそもお前が教師として行動していれば何も問題はなかった。

それを生徒と一緒に図書館島に来て、あまつさえ授業放棄をするとは…

ダメ教師にもほどがあるぞ！」

「ガーン！　僕ってダメ教師…」

おっ、なかなか面白い顔になっているな。

なにやら、教師失格…クビになる…等とブツブツ言っているが放っておこう。

「メフィストはん…ちょっと言い過ぎとちゃうん？」

「木乃香か。誰かが言わないといけない事だからな。

決して腹いせという訳ではないぞ」

「そういう事ならしゃあないやな。アスナ達にも優しくしてやってな」

「まあ努力はしよう。木乃香の成績は問題ないからバカレンジャー

い!!」

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

「貴様らア！ これで少しはマシなマゲッツになれたか!？」

「「「「「ハイ!」「「「「「」

「バカ者オ！ 返事はイエッサーだ!」

「「「「「サー！イエッサー!」「「「「「」

「返事が小さいわ！ もっと声ださんか!」

「「「「「サー！イエッサー!」「「「「「」

「ふん！ これで少しはマシになったようだな。

まだまだ訓練しゅんれんを続けるぞ!」

「「「「「サー！イエッサー!」「「「「「」

肉体言語で授業をするメフィストを見た木乃香が最後にこう語った
そうだ。

「ウチ…頭悪くなくてよかったわ…」

バカレンジャー、地底図書室にて散る…

「死んでないわよッ!」

ちなみにネギはバカレンジャーの中でも更にダメだったアスナに付
きつきりで勉強を教えていたぞ。

………

………

…

特別授業（憂さ晴らし）が終わり、期末試験を前日に控えた夜。そろそろ地上に上がらないとマズい時間になってきたので俺は出口を探しに行く。

そこら辺を散策していると滝の裏側に非常口を発見した。

なにやら中学生向けの問題が設置されており、おそらく問題を解くと扉が開ける仕様のようだ。

帰る目途が立ったのでガキ共を呼びに行くと、

「誰か助けてー！」

「フオフオフオ、ここからはもう出られんぞー。覚悟するのじゃ」

じじい口調のゴーレムがいて、そのゴーレムに佐々木が捕まっていた。

てかじじい……やっぱりテメエが仕組んだことだったのかよ……

「死ね、じじい！ 衝撃のお——

「フオ？」

——ファーストブリットオツ！」

「フオオオオオオオオオ！」

とりあえず気を纏った拳で胴体目掛けて必殺の一撃を放つ。

攻撃を喰らったゴーレムはそのまま遙か前方へ飛んでいく。

飛ぶ前に佐々木を掴んでいた手は離れたようで、佐々木は地面に放り投げられていた。

「よ、容赦ないアルな……」

「教官！ かっこよかったです！」

威力に驚いている古菲と、何故かキラキラした目でこっちを見るアスナ。

「時間を無駄にしたな。帰り道が見つかったから帰るぞ」
「「「「「サー！イエッサー！」「「「「「

むっ、なんか本が落ちているぞ。
じじいが置いていったのか？
とりあえず拾ってみる。

「あー！その本は！？」

うるせえよ。叫ばなくても聞こえるぞ、少年。

「メルキセデクの書じゃないですか！ ちょっと貸して下さい！」
「ダメだ」
「ガーン！」

拒絶するとまた面白い顔をした。

「これは俺があるべき場所へ戻しておく。さっさと帰るぞ」
「「「「「サー！イエッサー！」「「「「「
「あうう。でもそれがないと僕は…」

ウザってえな。そもそもこの本は読めば頭が良くなるなんて本じゃねえし。

無視してさっさと進むか。

さっき見つけた非常口の前に来るとアスナが聞いてくる。

「教官。これはなんですか？」

「この扉は問題を答えると開く仕組みのようだ。

これを答えるのはバカレンジャーのみでやってもらおう」

「むむむっ、これはレッドアルね」

ピンポン

正解音とともに扉が開いていく。

扉をくぐった先には螺旋階段があり、さっきのような扉がいくつも
のあるようだった。

それにしても簡単すぎないか…ん…よし、こうしよう。

俺はマシンガンを取り出す。

「メ、メフィスト殿…それは一体…」

「なんだか簡単そうだな。これからお前ら目掛けて乱射していく。
当たりたくなかったらサクサク答えていけ。では開始だ！」

シユカカカカカカカカカッ

「よ、よしみんな！サクッと答えて帰るわよ！」

「……オー！」「……」

アスナの掛け声とともに士気を上げていくバカレンジャー。

勢いに乗ってどんどん問題を解いていき、着々と階段を上っていく。
途中で綾瀬が足を挫いたりもしたが長瀬が担いで進んでいった。

上り始めて1時間になるころ、

「あっ、見て！地上へ直通のエレベーターよっ！」

やっと出口を見つけた。

さて、それじゃあ俺は本を戻すのとアイツに会いに行くか。

「それじゃお前ら。明日の試験、ガンバレよ。」

遅刻なんかしたら再授業だからな」

「……「サー！ イエッサー！」……」

「それじゃ俺はまだやる事があるから失礼する、さっさと行け」

地上に行ったのを見送った後、また地底へ逆戻りする。

勉強していた場所から奥へ向かって進んでいくとでかい門がある所に出て、竜が門番をし

ていた。

気配はこの奥からしていたので、とりあえず竜をボコッて気絶させる。

仮にも門番なので殺すのはマズそうだな。

そのまま門を開けて進んでいくと、

「お久しぶりですね、メフィスト」

「なんか貧弱になってるな、アル」

アルビレオ・イマがいた。

「とりあえずコレあげる。ネギ少年が盗み出そうとした本だ」

「これはこれは、ありがとうございます。ですが学園長が監視をしていたハズでは？」

「それなんだが…殴り飛ばしてしまった」

「相変わらずですね。これは私が戻しておきましょう」

苦笑するアルだが、ついやってしまったものはしょうがない。

「それにしてもお前、なんでそんな弱ってるんだ？ 貧弱キャラじゃねえだろ」

「10年前に少し…。それから隠居生活ですよ」

なるほどね…。

とりあえず収穫はあったし、ナギの事を聞いたら帰るか。

「なあ、アル。お前のカードって生きてるか？」

「ええ、生きてます。よって彼もどこかで生きているでしょう。

私にも場所はわかりませんが…」

「しぶといヤツだな。聞きたい事も聞いたしそろそろ帰るぜ」

「メフィスト、少しお願いが…。私がここにいるのは内緒にしておいてください」

「了解だ。そのうちまた顔を出しに来るわ」

「ええ、お茶を用意してお待ちしていますよ」

これでようやく終了か。

早く帰って寝ようとしよう…。なんか疲れたわ。

ちなみに期末の結果は、2 - Aがダントツのトップ。
バカレンジャー全員、平均が80点超えというすごい成績となっていた。

そしてネギが正式に教師として採用されらしい。

第貳拾肆話 『忍び寄る闇の福音』

教師がこんな面倒だとは思わなかったぜ。
成績を付ける作業がまた面倒なんだわ…

春休みに入ると俺は基本的に家でのもんぶりしていた。

時々エヴァに内緒でアルのところに遊びに行つて茶を飲んだりしていたが、それ以外はエヴァと一緒に家にいた。

だらけきつたある日、じじいからエヴァだけ呼び出しが掛かる。

「私に來いだと？ ジジイが一体なんの用だ？」

「エヴァ…人様に迷惑かけるなどあればと言つたたる…」

「マスター。メフィストさんに心配かけるのはどうかと…」

「煩いぞ！ バカ兄貴にボケロボ！」

そもそもメフィストのほうがよくばど好き勝手にやっているだらうがー！」

「ガン！ エヴァにバカ兄貴呼ばわり……orz」

「？ 何か問題を起こしたのではないんですか？」

首をかしげる茶々丸。

二人の信用がない事に若干腹を立ててるエヴァは怒鳴り返す。

「起こす訳ないだろうが！ 怒られるとしたらメフィストの方が万倍怒られる要素を持つ」

「ているわ！ もういい！ 茶々丸、行くぞ！」

「マスター。メフィストさんが打ちひしがれています…」

「放っておけ。散々好き勝手にして心配させた罰だ」

そのまま学園に向かっていくエヴァ。
おろおろしながらもエヴァの後ろについていく茶々丸。
うう…そんな子になるように育てた覚えはないぞ…。

【エヴァ side】

「入るぞ、ジジイ」

「フオフオフオ、来たか」

ノックをせず入ったが、そんな事は気にしない風に対応するジジイ。
まあいつもノックしないから諦められているのかも知れんがな。

「それで？なんの用だ？」

「実は少し頼みたい事があるんじや」

「くだらん…頼みならタカミチにでも言えはいいだろう」

「そうもイカンのじや。新学期にネギ君の前に悪の魔法使いとして
立ち塞がってはくれな

いかのお」

ほう…戦闘など15年もやってないからいい息抜きになるが…

「それで？私は負ければいいのか？」

「そうしてくれるとうれしいんじやが…どうじや？」

「くつくくつ、無理だな。あの甘ちゃんにはキツいのお見舞い
してやりたかったんだ。

頭の片隅には置いといてやるが、約束はできんぞ」

「…まあ覚えていてくれるだけマシかのお。あとメフィスト君の事じゃ」

「むっ、メフィストがどうかしたか？」

やはり小言が言われるか？

「ネギ君を攻撃する際、メフィスト君には手を出させないで欲しいんじゃ。」

エヴァンジェリンのほうから言っではもらえんか？

……あいつが出てきたらどう考えてもぼーやが死ぬな。

流石に子供を殺るのは気が引けるし、一応言い聞かせてはみるが…
言う事を聞いてくれな
いだろうな…。

「悪いがジジイ…絶対にメフィストに手を出させないという約束は
できん」

「やっぱりかの…言うだけ言っしてほしいんじゃが…」

「別段、私はぼーやを殺すつもりはないし、メフィストにも言っ
ておくが…。

あいつは過保護だからな。もしぼーやが私に傷でも付けたら約束
はできん」

「もしかしたらと思っただんじゃが…ネギ君が無事にこの試練を乗り
越えることを祈ってお

くかの」

「その点はぼーやに同情するぞ。これで話は終わりだな？」

「終わりじゃよ」

「それでは帰る。くれぐれも他の魔法先生に介入させるなよ」
「わかっておるよ」

メフィストになんて説明しようかな…

side out

【メフィストside】

「ただいま」

「ただいま戻りました」

おっ、帰ってきたな。

「お帰り。じじいの用件はなんだった？」

「ああ、実はな。——（説明中）——こういうことだ」

「ほお、少年に試練ねえ。面白そうだな、俺にもやらせる」

そう言つとエヴァがため息をつく。

「ダメに決まっているだろ。」

メフィストが手を出したらオーバオーキルどころの騒ぎじゃなくなるだろうが…」

それはそうなんだが…

そんな面白そうなイベントを目の前に蚊帳の外はなんかイヤだな。

「どうしてもダメか？」

「ダメだ」

「ちよつとからかうのもか？」

「ダメだ」

「魔法の射手を一矢だけ撃つのもか？」

「ダメだ（それだって威力が段違いだろうが…）」

「……わかったよ……俺は一人孤独に脇で見ているよ……」

俺だけ一人除け者…「災厄の邪神」と恐れられたこの俺が…

「そ、そう落ち込むな…罪悪心が湧いてくるだろ…」

「マスター。このままではメフィストさんが可哀想です」

「そうは言ってもな…過剰戦力にも程があるし、なによりぼーやを殺しかねない」

「それはそうですが…」

茶々丸の援護もむなく俺の不参加が決定した。

これから少しずつ魔力を集めて、新学期に仕掛けるらしい。
俺は一人むなく高みの見物としよう。

……

……

…

〔新学期・3 - A〕

「3年A組！ ネギ先生ーっ！」

「バカどもが…」

「アホばっかです…」

同感だよ…長谷川、綾瀬。

「えっと…改めまして、担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。」

これから来年の3月までの一年間よろしくお願いします。
ではお次にメフィスト先生」

ん？俺も何か言わないとイカンか？

「このクラスの副担任をやるメフィストだ。よろしく頼むぞ」

「「「「「「「「「「「「はーいつ！　よろしくですー！！」「」「」「」」」」」」」」」」」」

元氣なヤツらだな。

これが若さかね……　って俺はじじいか！？

ん？エヴァのヤツ…ネギに向かって殺気を飛ばしているな。
流石に気付いたようだが、この程度で怯えてどうする。

ネギの動向を観察していたらしずな先生がやってきた。

「ネギ先生。今日は身体測定なのですぐに準備してくださいね」

この言葉を聞いた時、ネギがアホなことを口走ると思いきずに教室
を出る。

「わかりました、しずな先生！　で、では皆さん身体測定ですので…
えと、あのつ、今すぐ脱いで準備してください！」

予想は的中。ナギ…お前の息子はホント、アホに育ってるぞ。
見事、才能は受け継がれているな。

「……ネギ先生のエッチーっ!」「……」
「うわ〜ん! 間違えました〜!」

慌てて教室から飛び出してくるネギ。

ここにもやることがないので屋上で夜まで時間を潰しているか。
今日の夜にエヴァが仕掛けるようだしな。

……

……

…

夜も更けたころ、エヴァがいつも通り魔力を集めに吸血活動を桜通りでしているところに、

ネギがやってくる。

俺は屋上で千里眼を発動して見学していた。

「やあ、メフィストさん。こんなところで何をしているんだい?」

「ん? 真名か。そういうお前こそこんな所で何してんだよ。」

どうせじじいからの依頼で俺の監視つてところだろうがな」

「やれやれ、バレていたか。そんな訳で派手なことはいしないでくれよ」

じじいも意味のない事するね。小娘一人で俺が止まるとでも?

「善処はする。それより真名、あれの見学に行くぞ。」

アダアット、永界の指環。気配遮断・認識阻害結界発動。範囲、

10m」

「なにをするんだい？」

「なに、バレないように見学だ。出てこい、ヴィマーナ」

ヴィマーナを取り出し、結界を縮小させてヴィマーナに飛び乗る。

「ほら、真名も来い」

「あ、ああ。話には聞いていたが実際に見るとすごいな」

真名が乗ったのを確認したら、ヴィマーナを発進させた。

「メフィストさん。秘匿のほうはいいのかい？」

「心配しなくても俺が張れる最高強度の結界を張っておいてある。見破れるのは世界に5人いればいいほうだぞ」

「なんとも規格外な回答をありがとう」

なんだか真名に呆れられたようだが気にせず爆走する。

エヴァ達に追いつくと、ちょうど空中で戦闘をしている最中だった。

「へえ…風の中位精霊を8体。見習いにしては出来るな」

「流石は魔法学校の首席卒業ってところだね」

ネギは精霊魔法で追い詰め、武装解除を行う。

魔力が封印されているエヴァは抵抗できずに喰らった。

「少しは考えているようだが…自分一人で解決しようとするのはミスだな」

「ネギ先生は一人で抱え込むタイプだ。それに加えて自分はなんでも出来ると思ってるの行

動だろう」

「そこはまだまだ坊やだよな。おっ、茶々丸が参戦したぞ」

茶々丸が参戦したことに動揺するも呪文を詠唱しようとするネギ。だが茶々丸に妨害されて詠唱を完了させられずに捕らえられた。それにしても……あのガキ、エヴァの下着姿を見やがって……

「メ、メフィストさん。邪気が溢れてきているが……」

「あのガキ……俺のエヴァの下着姿を見やがって……」

「落ち着いて、ここで手を出すとエヴァンジェリンに嫌われるぞ」

「ぐはあっ！」

「（学園長と高畑教諭に言われた抑え方だが……効いてよかった）」

真名の一言で飛び出したくなる衝動を抑える。

エヴァの方に視線を送ると、散々ネギを脅かした後に首筋に噛み付いた。

そのすぐ後にアスナが出現。

そして茶々丸とエヴァに飛び蹴りを喰らわせた。

「ちよっ！メフィストさん！ さっきより邪気が強くなっているんだが！」

「アスナめ……エヴァに飛び蹴りをするとはいい度胸じゃないか……」

「飛び出してはダメだぞ」

「くう……この怒り……どこに発散すればいいんだ……」

破壊衝動に駆られるが、さっきの言葉を思い出しギリギリで踏みとどまる。

エヴァは障壁を抜かれた事に驚くが、不利な状況になったと判断し離脱した。

「それにしても神楽坂はすごいな。真祖の障壁をやぶるなんて……」
「不思議だ。これがホントの馬鹿力ってヤツだな。」

（ホントは魔法無効化能力だな）」

役者も舞台裏に引いたし、見世物は終了だな。
真名を寮の近くに届けて帰るとするか。

……

……

…

家に帰ると頬を冷やしているエヴァがいた。
やっぱり報復活動してくるかな…

「おい、メフィスト… なにか不穏な事を考えてないか？」
「別に、神楽坂を血祭りに上げようとか、エヴァの下着姿をみた少年をくびり殺そうとか

考えてないぞ」

「……お願いだから止めてくれ」

「メフィストさん。遅くなりましたが夕食になります」

「おっ、ご飯だ。いただきま〜す」

「話を聞けエツ！」

第貳拾肆話 『忍び寄る闇の福音』（後書き）

大学が始まり思うように時間が取れない…

もしかしたら更新速度が落ちるかもしれませんが、そうなたら連絡します。

第貳拾伍話 『殺していいのは、殺される覚悟のある者だけだ』

エヴァ襲撃が終わった次の日。

いつも通り学校に向かう途中で見たのは、アスナに担がれたネギだった。

「なあ、エヴァ……」

「言うな……情けなさ過ぎてコメントで……」

「子供相手にやりすぎたのでは？」

チーム吸血鬼は見習い魔法使いに対して辛口の様子。

「これも試練らしいぞ、茶々丸。でもじじいの悪趣味という可能性も否定できん」

「そうだな……案外あのジジイは学園長室で笑って見ているかもしれん」

「ご愁傷様です、ネギ先生」

じじいの信用度も低い様子だ。

「あの様子じゃ誰かしら頼るかもな。

頼られてもウザいだけだし教室には近寄らないようにするか」

「それじゃ私と屋上にいるか？」

「それがいいな。幸い今日は授業がないし決定」

……

……

…

【茶々丸side】

マスター達と別れて教室に向かうとネギ先生が神楽坂さんに手を引かれて入ってきました。

相当怖がっていますが、マスターがいないと解ると安心したようです。

「あ、いない…エヴァンジェリンさん」

「マスターは学校には来ています。すなわちサボタージュです」

「わ、わあっ！」

「お呼びしますか、先生？」

「い、いや…とんでもない！いいです！」

声をかけてマスターの不在理由を言つと、怖がられてしまいました。私も恐怖の対象のようです。

そのまま授業を開始しますが、昨日の事が気になり授業に集中していません。

今は和泉さんが教科書を朗読していますが、耳に入っていない様子。すると、考え事をしながら時々クラスメイトを眺めはじめました。なにやらメフィストさんの言う面白い事とやらが怒りそうなので録画モードを起動。

そのままネギ先生を撮り始めました。

「先生、読み終わりましたー」

「え！あ、はい。ご苦労様です。」

えーと…あの、つかぬことをお伺いしますが…

和泉さんはパ、パートナーを選ぶとして、10歳の年下の男の子

なんてイヤですよー」

「えええええ！」

大胆ですね、ネギ先生。

授業中にクラスメイトを口説き始めるとは恐れ入りました。

録画モードを起動させといて正解でした。

あとでこれを見せてメフィストさんに褒めていただきましょう。

ネギ先生のパートナー発言により騒がしくなるクラス。

その対応に慌てるも授業終了のチャイムが鳴り教室を出ていくネギ先生。

出ていく時、この世の終わりのような表情をしていました。

ご愁傷さまです、ネギ先生。

side out

【メフィストside】

今日は特にイベントはなかったが、家に帰ると今日の授業風景を茶々丸が撮っていてくれたようだった。

何を撮ったのか気になりつつも見てみると、ネギの大胆発言とこの世の終わりみたいな顔

を見たときは不覚にも笑ったね。

しかもどうやら俺がエヴァの兄ってことを忘れてるようだ。

ちよつと考えればわかりそうな事だが、エヴァに気を取られて失念してんのか？

…
…
…

次の日はネギに会いさえしなかった。

それとエヴァが侵入者を察知したが、あまりに弱い気配だったので放っておいたらしい。

まあ心配しなくてもその次の日に正体が判明した。

エヴァと一緒に登校すると、どうやらネギとばったり遭遇するタイミングで学校に着いたようだ。

まだ正体を知られたくないので認識阻害結界を発動する。これで俺は通りすがりの通行人Aと認識されるハズだ。

効果通りネギは俺の事を見向きもせず肩に乗っている小動物と話している。

「よう、兄貴。さっきから何をキョロキョロしてるんだよ」
「え…いや、ちよつとね…」

この小動物が侵入者らしい。
確かに今日初めて見たしな…調べたら下着ドロの小心者らしい。ちよつと面倒事を起こしたら強制送還でもさせればいいだろう。こつちから声をかける気にもならんわ。

「なに、落ち込んでんだよ？ 相談に乗るぜ、兄貴！」
「うーん…実はウチのクラスに問題児が…」

問題児言つなよ…まあ教師の立場からみればその通りなんだけどさ。

「おはよう、ネギ先生。今日もまったりサボらせてもらつよ。
フフ、ネギ先生が担任になってからいろいろ楽になった」

「エ、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん！」

あらら、からかう為に声を掛けて…。

とつさに杖に手を掛けるなよ、ネギ。

てかいまさらだけど誰もネギの持つ杖につっこまないのか？
どう考えてもネギって魔法を秘匿する気ないだろ。

「くっ…」

「おっと、勝ち目はあるのか？」

校内では大人しくしておいた方がお互いのためだと思うがな」

なんかアスナが後ろで呆氣にとられているよ。

もはや完全無視だよな？放置プレイだよな？

杖に手を掛けたが、エヴァが止めなかったら使ってたのかよ…。
やっぱり魔法を秘匿する気ないよな？

「そうそうタカミチや学園長に助けを求めようなどと思つなよ。
また生徒を襲われたくはないだろう？」

「うぐっ、うわああああん！」

あつ、逃げ出した。

この程度で敵前逃亡とは…情けない。

「アベアット。さて、教室に向かうとするか」

「くつくつつ、隠れて盗み聞きとはお前も性格悪いな。
やはりラスボスはお前のようなだよ、メフィスト」

ふむ…ラスボスね。

封印されてからのエヴァの娯楽は日本のゲームだからな。
そう考えるのもわからなくはないが…

「むしろ俺ってストーリークリア後の裏面で登場する全ステータス
カンストして弱点なし、

状態異常は全て無効、レベル限界突破したような隠しボスなんじ
やないかと思うんだ」

自分の思った事を口にすると啞然とするエヴァ。

「そ、そうだったな…お前は規格外という言葉すら超越してるよう
だしな。

ぼーやが主人公になるのなら間違いないだろうよ」

褒めるなよ、照れるじゃないか。

「褒めてないわ!」

「うお! 心を読むなよ」

「バカ言っでないでサボりにいくぞ」

「ああ、今日も俺は一緒に行くんだ」

「当然だろ」

「了解した、お姫様」

屋上に向かう途中、仮契約の儀式の発動を感じた。

学校の…それも階段の踊り場で仮契約をするとは…いやはや、恐れ
入ったよ。

いくら切羽詰まっているとはいえ学校でやるとはね。
再度言うが魔法を秘匿するつもりないだろ？

……

……

…

放課後、エヴァと茶々丸は茶道部に向かう。
俺は暇だったのでついていき一杯もらっていった。

「なあ、エヴァ。朝方の仮契約の気配だが…」

「十中八九、ぼーやと神楽坂明日菜だろう」

「だろうな。まだエヴァは満月にならないと行動できないんだろ？」
「そうだ」

となると茶々丸が一人の時に襲撃してくる可能性が高い。
クソ真面目なネギ一人じゃ思い付かないかもしれないが、あの小動物が入れ知恵して襲うように唆すかもな。

しょうがない…襲撃された時は助けるか。

「あ、いたいた。エヴァ、メフィストさん」

ん？タカミチか…

「何か用事か？」

「仕事ならちゃんとやっているぞ」

「学園長がエヴァとメフィストさんに来て欲しいそうだ」

あんのじい…ぬけぬけと言いおる。
近衛近右衛門…貴様、見ているな！

「わかった。すぐ行くと伝える。」

茶々丸、すぐ戻る。必ず人目のある所を歩くんぞぞ」

「俺は却下だ。これからやる事が出来たんでな。」

じいには地球が滅んでもいいなら行つてやると伝える」

「なんつう理由ですか…わかりましたからその笑顔と握りこぶしをやめてください」

ちっ、解らず屋に肉体言語で説得しようと思ったが失敗。

エヴァを連れてタカミチがじいいの所に向かつていったのを見届けた後、認識障害と気配

遮断の結界を発動。

茶々丸の後方に少し浮いた状態で着いていった。

………

………

…

茶々丸はネコの餌を買った後、帰り道で様々な人助けをしていた。
女の子の風船を飛んで取ってあげたり、歩道橋を上っているおばあちゃんを移動先まで

背負ってあげたり、川に流されている子猫を拾ってあげたりと。

なんて心優しいんだ…不覚にも俺、感動したぞ。

エヴァの従者を2年もやっているのに悪に染まっていけないとは…。

我が家に欠けていた要素を開花してくれてありがとう。

ああ、そうそう。

俺の予想通り、ネギとアスナが尾行をしていた。

会話を聞く限り、小動物がこいつらをけしかけたようだ。

ダメだな…教師としても男としても最低の選択をしたぞ、ネギ。

茶々丸は助け出した子猫を頭に乗せ、猫の溜まり場らしき所で餌をあげていた。

どうやら結構前からあげていたらしく、茶々丸が来たら一斉に寄ってくる猫たち。

ああ…和むぜ…

そんな空気をブチ壊す発言をする小動物。

人目が無いからここで倒せと言われ、イヤイヤながらも言われるがままに行動するネギ。

さてさて、生徒に向かってどの程度の魔法を使うのかな？

side out

【茶々丸side】

子猫たちに餌をあげていると近づいてくる気配を感じ後ろを振り向くと、

そこにはネギ先生と神楽坂さんがいました。

「こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん。油断しました…でもお相手はします」

「茶々丸さん、あの…僕を狙うのは止めてもらえませんか？」

「申し訳ありません、ネギ先生。」

私にとってマスターの命令は絶対ですので…」

私の解答に不満があるらしくネギ先生は顔をくもらせました。

「うつ、仕方ないです」

戦闘開始のようですので頭のぜんまいを取り外しておきます。

「では行きます！ 契約執行10秒間！

ネギの従者『神楽坂明日菜』！」

ネギ先生の魔力供給を受けた神楽坂さんがこっちへ向かってきます。予想外の速さに驚き片手を払われて少し体制を崩されます。次にもう片方の手でデコピンを狙ってきますが防ぎました。

「はい！ 素人とは思えない動き——ッ！」

ネギ先生が魔法を詠唱している事に気付き、急いで離れるため神楽坂さんの足を払って逃げようしますが、

「うつつ、『魔法の射手 連弾・光の11矢』！」

無情にも魔法が放たれました。

「追尾型魔法、至近距離多数…よけきれません。すいません、マス

ター。

もし私が動かなくなったらネコの「その心配は必要ないぞ——え？」

当たって壊れるかと思いましたが、突如私の目の前にメフィストさんが入りこんできて

「魔法の射手」を全て防いでくれました。

「「「なっ！！」」」

ネギ先生たちは驚いていますが、そんな事はお構いなく、

「どこか怪我でもしてないか、茶々丸？」

「え、えと、問題ありません」

「そうか。よかったよかった」

私の無事を確認するなり頭を撫でてくれました。

この瞬間、胸の主機関部が熱を持ちましたが、これは一体…。

「おいコラ！ いいところだったのに邪魔してくれんじゃねえよ！
アンタ誰だ！？」

「ん？なんだ、小動物？ 人間に向かって意見するとはいい度胸じゃないか」

「ひっ！」

メフィストさんが殺気を飛ばすと小動物が怯えています。

ネギ先生と神楽坂さんも同様でした。

「まあいい。新顔もいることだし自己紹介といくか。」

俺の名は、メフィスト・マクダウェル。『幻獣使い』『災厄の邪

神』などと恐れられてい

る悪の魔法使いだ」

「な、なにiiiiiiiiiiiiiiii!?!?!?」

あ、兄貴！ この状況はマズすぎる！ い、いい、今すぐ引きま
しょう！」

「力、カモくん？」

「そんなに慌ててどうしたのよ？」

どうやらメフィストさんの悪名をしっているのはあの小動物だけの
ようでした。

ですが、尋常じゃない様子になにかマズい事をしたのじゃないか等
という顔に二人ともな
っています。

「あの『幻獣使い』にたつた2人じゃ――

「おい、小動物。話が出来ないから喋るな」

――はiiiiiiiiiiiっつ！」

この小動物はとことん小者ですね。

「おい、少年。俺はじじいに、攻撃されるなら反撃してもいいと許
可をとつてある。

茶々丸はエヴァの従者だが、エヴァは俺のもの…つまり遠回りに
なるが茶々丸も俺の

ものと言つ訳だ。ここまではいいか？」

「は、はい…」

「お前は俺の所有物を殺そうとしていた。よって今からお前を殺す。
なにか遺言はあるか？」

言い終わると同時にさっきより強い殺気がネギ先生を襲います。

尋常じゃない殺気に腰を抜かせたネギ先生と神楽坂さん、あと小動物は口から泡を吹いて倒れていました。

「この程度で腰を抜かすとは情けない。弱すぎて殺す気も失せた。茶々丸、帰るぞ」

「ハイ」

「あ、あの！」

最後にネギ先生が何か言いたそうです。ですがメフィストさんはそれを遮り、

「そうそう、少年。一つ言っておこう。

たとえ敵だが一人の生徒相手に複数で闇討ちとは…教師としても男としても最低の選択

だ。そこを良く考えておくんだな」

「っ！！」

ネギ先生の心を攻撃するような事を言い残していきました。

打ちひしがれている先生を放っておいてジェット噴射でその場を離脱。

メフィストさんも付いてきて、そのまま家に向かってっていると、

「でも茶々丸が無事でよかったよ。ホントに怪我とかないか？」

メフィストさんが満面の笑みで私の頭を撫でてくれました。

「だ、大丈夫です」

また胸の主機関部が熱を持ちはじめました。

この現象は一体何なのでしょう…

第貳拾陸話 『試合に勝ったが勝負で負け』（前書き）

吸血鬼編の終幕です。

第貳拾陸話 『試合に勝ったが勝負で負け』

茶々丸襲撃失敗の翌日。

ネギとアスナは寮の部屋でカモとこれからの事について相談していた。

〔学生寮〕

「兄貴、ヤバいぜ！ あの『幻獣使い』が敵なのはヒジョーにマズい！」

「なんでそんなに怖がってるの？ 確かにメフィスト先生って怖いところあるけどいい先生よ」

「昨日は確かに怖かったけど…なんでそんなに怖がってるの、カモ君？」

これまでのメフィストの動向をしっているアスナは、カモの言うように危機感を感じていなかった。

ネギも悪行を知らないので不思議に思っている。

「甘い！ 二人とも認識が甘い！ 真祖の吸血鬼が一人でも厄介なのに、さらに大物の吸血鬼の真祖が出てきて状況は最悪なんですぜ！ おまけにもう一人はおそらく封じられていない！ こっちはロボにちよっかいを出しているから報復活動するに決まっている！」

「え！ メフィストさんって吸血鬼だったの！？」

「下の名前がマクダウェルって時点で気付けよ、兄貴！」

まったくもってその通りだよ、カモ。

カモの力説に圧倒されるもアスナは擁護する。

「そこまで言う事でもないんじゃない？ 吸血鬼だったのは驚いたけど…」

メフィスト先生に会ったのは最近だけど話のわかる良い先生だし、エヴァンジェリンも茶々丸さんも二年間私のクラスメートだったんだよ？ 本気で命を狙ったりとかまでするとは思えないんだけどなあ…」

赴任してすぐのネギの授業で、メフィストがアスナを庇ったのが好感度アップにつながって良い印象を持たれているようだ。

「甘い！ 姉さんも甘々っスよ！
見てください、俺っちが昨晚まほネットで調べたんスけど…」

カモが小型のノートパソコンらしきものの画面を二人に向ける。

「まずエヴァンジェリンって女のほうだが… 15年前までは600万ドルの賞金首だったんで
すぜ！」「600万ドル！？」 次にメフィストの野郎なんですが…」

口ごもるカモに、内心驚きながらも続きを促す。

「メフィスト先生はなんなのよ…」
「……こっちは18年前までは9000万ドルだったんです…」「きゅ、9000万ドル！？」 二人とも今は賞金首じゃないが、メフィストの方は闇の世界でも名前を口に出すことが憚れる超極悪人さ！

俺っちも昔、メフィストってやつの評判を少しだけ聞いただけなん

ですが…まさかまだ生きていたとは…」

カモの言葉にネギとアスナは焦りが生まれ始める。

「ど、どうしてそんな奴らがウチのクラスにいるのよー!」

「そいつはまだわかんねーけどよ…。とにかく奴らが今、本気で来たらヤバイッス。

姉さんや寮内の他のカタギの衆にまで迷惑がかかるかも…」

「えっ、マジ!?」

不安を煽るような言葉にネギの内心では逃げ出したくなる感情が大きくなった。

「とりあえず兄貴が今、寮にいるのはマズイッスよ」

「うーん…そ、そうね。今日は休みで人も多いし…」

「うっ…うわあぁーん!」

自分の受け持つクラスメートに迷惑がかかる。

その現実能耐え切れずネギは杖を持って出て行ってしまった。

「ちょっ! ネギーーーー!」

「兄貴ーーーー!」

「あ、あんたがあんなこと言うから!」

「姉さんだつてー!」

「と、とにかく追うのよ!」

「合点だ!」

慌ててアスナとカモはネギを追いかけるために部屋を飛び出していた。

……
……
……

飛び出したネギは麻帆良の近くにある森まで来ていた。
そこで誤って木にぶつかり墜落。
杖を落としてどこにあるかわからない状態に陥る。
大いに焦るが、ここで修行中の長瀬楓に発見された。

その日はそのまま長瀬と過ごすネギ。
ネギが落ち込んでいる事に気付いた長瀬は気を紛らわせるように修行に付き合わせる。
そして夜に、多少の助言をした。

（僕：魔法学校をいい成績で卒業してなんでも出来るっていい気になつていたんだ。

それなのに、いざ自分にどうしようもない問題が起きたらアワアワあわてて逃げる

事ばかり考えていた。

メフィストさんも言っていた：闇討ちするのは男じゃないと……。
帰ったら正々堂々と闘いを挑もう！）

決意した翌日、集中して杖を探し出して呼びもどす。
そして帰る途中に探しに来ていたアスナとネギを連れて寮に帰っていった。

……

…
…

「以上、分身からのレポートでした」

「なにを言っている？」

「いや、ちよつと分身体からの視覚情報を電波に乗せていたんだ」

昨日はちよつとやりすぎた気がしたからな。

分身を作つて見張らせていたが、杞憂に終わったようだ。

それにしても長瀬…いい仕事するじゃないか。

「……茶々丸、メフィストが何を言っているのかわかるか？」

「……いえ、わたしにも理解できかねます」

なんだか茶々丸が昨日から反応が鈍い。

何か考え事でもしているのか？

まあいいや…明日には元に戻ってんだろ。

次の日、エヴァが風邪を引いた。

「ゴホッ、ゴホッ」

「あーもー、夜に薄着で飛び回るからだぞ」

「好きで薄着になった訳ではないわッ！……あう」

くらくつとしてベッドに倒れ込むエヴァ。
風邪なのに叫ぶからだ。

「とりあえずこれを飲んで置け。出てこい、エリクサー」1

エリクサーを取り出してエヴァに飲ませる。

「これで風邪は治るはずだ」

「ありがとう、メフィスト。少し寝ることにするよ」

「私はマスターの花粉症の薬を貰って来ます。メフィストさんはマスターを見ててあげてください」

「了解だ。……それにしても花粉か……」

俺はなったことないから解らんけど……つらいんだろうな……

この時期は確かスギの花粉だったか。

この地域一帯のスギの木を蹴散らしてこようかな……

「おい、メフィスト。不穏な事を考えてるんじゃないぞ」

「失敬な……俺はこの地域に住む花粉症に悩める者達の救世主になるうと思っただけだ」

「どうせスギの木を根絶させようとか考えていたんだろ……」

「否定はしない」

「はあ……」

呆れられてしまったぞ。

何故だ？ 花粉症に悩める者にとっては救世主^{メシア}となれると思っただが……

「怒る体力もないので私は寝るぞ」

「ああ、ゆつくり休め。今日は俺も学校をサボる」
「……いや、もう何も言うまい……お休み」

学校にはじじいに電話しておいた。

エヴァの看病と教職のどっちを取るかなんて愚問だろう？

……
……
……

時刻は8時半ごろ。

エヴァは夢の世界に飛び立ち、俺は横でエヴァの寝顔を堪能していたら、

カ「黙れ、殺すぞ」

我が家に設備されている呼び鈴が鳴りだす。

本当はカランコロンと鳴るハズだが、エヴァを起こさないように呼び鈴が鳴り終わる前に

速攻で外に出てベルを止め、訪問者ののどを掴んだ。

至福の時を邪魔された＋エヴァを起こしそうになった事で殺気が流れ出るが、来たのがネ

ギだった事に気付いて殺気を抑えて手を話した。

「なんだ、少年だったか…エヴァは風邪で休みだと連絡したはずだぞ」

「（こ、怖かった…）ホントに風邪なんですか？
不老かつ不死である彼女が風邪をひくなんて…」

まあまだガキだし優しく教えてやるか…

「今、エヴァは魔力を封じられて身体能力は10歳と変わらんからな。

風邪を引くのは仕方が無い。

それより少年は何か用があつたんじゃないのか？」

用件を聞くとなにやら懷から紙を取り出して、

「エヴァンジェリンさんとメフィストさんへ果たし状です！」

………なんだと？

「エヴァへの果たし状は理解できるが…俺への果たし状は却下だ」

コイツ…もしかして自殺願望者か？

「な！　なんでですか？」

「理由は簡単…お前じゃ俺は殺せない。人生を終わらせたいなら相手をしてもいいが…」

自ら死にたいなら引導を渡してやつてもいいが…

ネギは首を横に激しく振って否定していた。

「とりあえずエヴァ宛てのは受け取っておく。

準備が出来たらエヴァの方から呼び出すように言っておくから少年は学校に行け」

果たし状を受け取って貰えたのがうれしいのか、ネギは顔を綻ばせ

るが、

「メフィストさんは学校にいかないんですか？」

その何気ない一言で顔は恐怖に染まった。

「俺にエヴァの看病より教職を優先しろってのか！？ ああん！？」

響き渡る怒声。

もはや過保護の領域を出そうな気迫だ。

憤怒の顔を間近で見たネギは脱兎の如く、

「す、すいませんでしたー！ー！ー！ー！ー！」

学校へ文字通り飛んで帰っていく。

ネギを送り返した後、俺はエヴァを愛でに戻っていった。

………

………

…

そして数日後、学園都市全体のメンテナンスの日が来た。

夜8時。

これから4時間の間、メンテナンスで学園都市全ての電力が落ちる。エヴァの魔力を封じている学園結界は電力によって稼働しているため、今から4時間の間

は魔力が戻っている。

そして、今夜は満月。吸血鬼がもつとも力を発揮する夜であった。

「満月か…今夜、少年とエヴァが遊ぶと思うと俺も暴れなくなるぞ」
「それを抑える私の身にもなってくれ」

気配はしていたので敵対するものではないだろう。
聞こえてきた声は知っている者だしな。

「いいじゃないか、真名。……ってなんで刹那と長瀬を連れてきてるんだよ」

振り返つてみると刹那と長瀬まで付いてきていた。

二人とも俺を止めるストッパーの役割か。

刹那はともかく長瀬の方はいいのかよ。

「いいのか？ こつちのことを教えても」

「大丈夫だろう。楓は口が堅いし信用できる。実力も申し分ない」

「まあ別にいいけどな。俺のことは教えたのか？」

「いや、流石に許可を取ってない秘密を勝手に教えるのは気が引けるね」

てか長瀬って忍者だよな。

語尾がござるっていかにもすぎて怪しさも大きいが。

「では自己紹介だ、長瀬。俺はメフィスト・マクダウェル。
悪の魔法使いにして吸血鬼の真祖…化け物だ」
「ッ！」

どの程度の力量なのかを測るため、少し殺気を飛ばしてみる。

長瀬は驚いて汗を一筋流すが、気を失わずにいた。

「なるほど…真名が連れてくる訳だ。少年よりも大分強いじゃないか」

「お褒めに預かり光栄でござるな。……それにしてもクラスの副担任が人外とは…」

「くつくつく…驚いたか？」

「驚いたでござるよ。只者ではないと思っていたが、それほどの力量とは…正直、勝てる気がしないでござる」

14年しか生きていないガキに負けていたら悪の魔法使いなんて名乗れねえよ。

「気に入ったよ、楓。おいおい魔法使いの事について教えてやる。

おっ、エヴァが動き出したようだ。見学に行くぞ」

カードを取り出してっ…

「何をしてるでござるか？」

「まあ見てろ…出てこい、ヴィマーナ。アデアット、永界の指環。認識障害・気配遮断・対物対魔結界発動、範囲10m」

今回は前回より激しいものとなる気がするので対物対魔結界も追加だ。

流れ弾に当たったら面倒だしな。

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝を初めて見る刹那と楓は驚いている。

「これがメフィストさんの固有スキルですか…」

「魔法とはすごいものでござるな…」

「いや…単にメフィストさんが規格外なだけだ」

うるさいぞ、真名。

刹那と楓…こっちを見るなよ。

「ほら、ガキども。さっさと乗れ」

三人がヴィマーナに乗り込んだのを確認したあと、結界の範囲を狭くして俺も飛び乗る。

そしてエヴァとネギの遊びを見学しに向かった。

エヴァはどの程度遊ぶつもりなんだろうかね…

………

……

…

現場に着くと、ちょうど寮の風呂場の窓ガラスをネギとエヴァの魔法が突き破る瞬間だった。

重力に従って落ちていくネギ。

それを氷属性の「魔法の射手」が追尾していく。

だが、ネギは杖で浮遊し装備してあった魔法銃で「魔法の射手」を撃ち落としていった。

「いいなー面白そーだなー」

「だから勘弁してくださいと言っただろ…」

「それにしても…けっこうやりますね、ネギ先生は」

「エヴァンジェリン殿が遊んでいる節もあるでござるがな」

まあわかるヤツにはわかるよな。

その気になれば、あんなガキなんて力の戻っているエヴァに掛ければ3秒で片付く。

向こうは空中でドッグファイトを繰り返していた。

「氷爆！」

「あう！」

「氷爆」を障壁で防ぐネギ。

威力は障壁を少し抜くぐらいの威力に抑えているようだ。

「ハハハッ！ どうした、逃げるだけか！？ もっとも呪文を唱える暇もないだろうがな！」

リク・ラク ラ・ラック ライラック！

来れ氷霊 大気に満ちよ！ 白夜の国の凍土と氷河を！ 『こおる大地』！！』

どうやらネギは橋に用があるようだ。

橋に降り立つタイミングで「こおる大地」を放つエヴァだが、やっぱり手加減しているらしく当てなかった。

だが体制を崩し橋の道路に転がっていく。

「ふ…なるほどな。この橋は学園都市の端だ。私は呪いによって外には出られん。

ピンチになれば学園外へ逃げればいい…か。意外にせこいじゃないか。え？ 先生」

蔑むような視線でネギに一步一步近づいていくエヴァ。

そして倒れたままのネギとあと10歩と言うところで足下が光り出

す。

「なっ！こ、これは……捕縛結界！？」

あらら…油断してたら捕まっちゃったよ。

「や、やったー！ えへへへ、ひっかかりましたね、エヴァンジェリンさん！

もう動けませんよ！これで僕の勝ちです！さあ、大人しく観念して悪い事はもうやめてくださいね！」

「喜ぶのは解るが戦場じゃ命取りだな」

「ここでエヴァンジェリンに追撃を掛けるのが常識だ」

「二人とも…相手は子供ですよ…」

「おしかったでござるな、ネギ坊主」

俺と真名は酷評だが、刹那と楓は比較的、ネギに甘いようだ。

エヴァは呪われてからは結界破壊に力を入れていたらしく、茶々丸が捕縛結界を破壊した。

ネギは結界を破壊されたことに動揺するも魔法を唱え始めるが、茶々丸にあっさり杖を奪われる。

そしてエヴァに杖を川へと投げ捨てられた。

「うわーん！ひどいー！あれは僕の何よりも大切な杖…
ひ、ひどいですよー！ 本当なら僕が勝っていたのにー！——（男の言い訳は見苦しいのでカット）——」

ネギは涙目になって殴ろうとするが、茶々丸が頭を押さえて動きを

封じる。

情けない様子にエヴァはイラだちビンタして怒鳴りつける。

「一度鬨いを挑んだ男がキャンキャン泣きわめくんじゃない！ この程度でもう負けを認めるのか！？ お前の親父ならばこの程度の苦境、笑って乗り越えたぞ！」

エヴァの叱咤する声にネギは涙を流さないように気張る。

「いや…だが今日はよくやったよ、ぼーや。一人で来たのは無謀だったかな……」

さて、血を吸わせてもらおうか」

「うつつ…」

エヴァの大層な悪役っぷりにコメントを。

「役に入り込んでいるなーエヴァは」

「あの場にいるネギ先生はたまったもんじゃないだろうね」

「あのー、流石に止めた方がいいのでは……」

「アスナ殿が向かって来ているので大丈夫でござろう」

真名は自分の仕事じゃないので無関心。

刹那は生真面目が故にネギを助けるよう言っが、楓の言葉で踏みとどまる。

「コラー！ 待ちなさいっ！」

「ふん、来たか…神楽坂明日菜」

やっと来たかと内心思っているエヴァだが、これで条件は同じになると思い笑みを浮かべ

る。

だが、体制を整える隙を与えないエヴァは茶々丸に相手をするよう指示するが、カモの目

くらましによって接近を許してしまう。

「フン… たかが人間が私に触れることすらできんぞ」

障壁を展開するが…………… アスナの飛び蹴りが綺麗にきまって蹴り飛ばされる。

「

……………」

「メ、メフィストさん？ こ、ここで手を出すのはマズいよ…」

「こ、これがメフィストさんの殺気… 気押される」

「これはすごいでござるな…」

真名・刹那・楓は冷や汗がダラダラと滝のように流れている。

それもそのはず… この至近距離で俺の殺気に当てられているからだ。

「くくくつ、神楽坂明日菜… 俺のエヴァを足蹴にするとは、いい度胸ジャナイカ…」

「手を出すとエヴァンジェリンに嫌われてしまうよ」

「ぐつ…………… じじいめ… あとで覚えていろよ…」

「…（ご愁傷様です、学園長…）」

三人は心の中で学園長に無事を祈った。

すると橋の一角が突然光り出す。

おそらくパクティオーだろうな… 姫子ちゃんも難儀な人生送ってるね。

「ふふつ… どうした、ぼーや？ お姉ちゃんが助けに来てホッと一

息か？」

エヴァの挑発にネギは言い返そうとしたが力モに窘められる。

「何言ってるのよ！ 2対2の正々堂々互角の勝負でしょ！？」

「いや、2対2なのは一緒だが互角ではないな」

「すごいな神楽坂は…真祖の障壁を抜くとは」

「メフィストさん…いい加減、子供に突っ込むのをやめましょうよ」

「ネギ坊主はどうやってエヴァンジェリン殿を倒すんでござるかな」

思った事を口にしてるだけなんだが…

とりあえず結末を見守るか…。

向こうでは茶々丸 VS アスナとエヴァ VS ネギに分かれていた。

茶々丸とアスナはデコピン合戦というなんとも微笑ましい闘いだ。

エヴァとネギは「魔法の射手」の撃ち合いになっている。

17矢…29矢…43矢と徐々に数が上がっていく。

「アハハ、いいぞ！ やるじゃないか、ぼーや！」

「まだです、エヴァンジェリンさん！ ラス・テル マ・スキル
マギステル！

来れ雷精 風の精！——」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック！ 来れ氷霊 闇の精！——

——」

「えっ？」

「フフッ」

ネギは同種の魔法を何故撃つのかわからなかったが詠唱に集中する。

「雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！」

「闇を従え吹け 常夜の吹雪！」

二人とも最後の節の詠唱をするだけになった。

「くるが いい、ぼーや！『闇の吹雪』！！」

「『雷の暴風』！！」

互いの魔法がぶつかり合う。

やっぱりエヴァは手加減しているらしく威力は均衡状態。まったく心優しい子になって俺はうれしいぞ！

「メ、メフィストさん？ なんで泣いているんですか？」

「刹那…これは心の汗だ…」

「は…はあ…」

魔力の均衡状態は唐突に崩される。

ネギの魔力暴走が一時的に威力を底上げしてエヴァの「闇の吹雪」を上回った。

「（マズい！ かくなる上は…）」

エヴァはこのまま攻撃を喰らっても死ぬことはないが、もし傷でも負ったとなるとメフィ

ストが暴走してしまうと思い、身体を蝙蝠に変化させネギの傍に降り立った。

「中々よかったよ、ぼーや。流石は奴の息子なだけはある…」

「バ、バカな！ 『雷の暴風』を喰らって無傷な訳がねえ！」

「とつさに身体を蝙蝠にして攻撃を避けたんだ。じゃないとメフィストが出てきてしまう」

「からな」

「くっ！」

カモがありえないと喚くが一蹴し、ネギは戦闘を続ける意思を示す。

「やめとけ、ぼーや。流石に魔力が切れているだろう。」

私も反則技を使ったし、ここは引き分けということで手を打たないか？」

「わ…わかりました…」

フラフラして倒れるネギをとつさに近づいたアスナが支える。

「起きたらぼーやに伝えておけ。私に回避という手段を取らせたのだから誇りにこそ思えど、落ち込むのは許さないとな」

最後にフォローをするエヴァの言葉にアスナとカモは言葉を失う。

「久々の枷が無い戦闘で心躍るひと時だった。茶々丸、帰るぞ」

「ハイ、マスター」

こうして若き英雄の息子と悪い魔法使いとの闘いは幕を閉じた。

「どうだった、楓？」

「魔法使いとはまっこと奇怪なものでござるな」

「少年はまだまだ巢立った雛鳥のようなもんだ」

「メフィストさんは辛口ですね」

「メフィスト殿はどのくらい強いでござるか？」

「俺？ やる気になればたぶん地球を壊せるぞ」

「……絶対にこの人を敵に回すのは止めよう！」

観客席ではある決意をした3人がいた。

第貳拾陸話 『試合に勝ったが勝負で負け』（後書き）

原作と違ってネギは勝たせませんでした。

もし原作通りにネギの魔法がエヴァに当たっていたら…

翌日、麻帆良在住の教師一人が死亡したとニュースになっていたでしょう。

ではまた明日。

第貳拾漆話 『修学旅行・初日』（前書き）

PV100万、ユニーク10万突破……………

これは現実か！？

読者の皆様！本当にありがとうございます！

皆さまへの感謝の念で胸が溢れています！

今後ともがんばっていきますのでどうぞよろしくお願いしますね！

第貳拾漆話 『修学旅行・初日』

「あ……」

「ぬ……」

翌日、コーヒーを飲むために「STAR BOOKS COFFEE」に立ち寄ったらネギ・アスナとばったり会った。

「こ、こんにちは、エヴァンジェリンさん、メフィストさん」

「よお、少年」

「言いつけどおり落ち込んではいないようだな、ぼーや」

「こんにちは、ネギ先生、アスナさん」

「あの…メフィスト先生…」

アスナが恐るおそる聞いてくる。

「メフィスト先生が吸血鬼ってホント？」

「事実だ」

「はあ…あっさり暴露しますね」

「聞かれたから答えただけだ」

今度はネギが聞いてくる。

「あの、エヴァンジェリンさんと父さんってどういう関係だったんですか？」

「なんで父さんに呪いを掛けられたんですか？」

まだガキに話す事じゃないな。

やれやれ…父さん父さんと、ファ。コンだな。

「もう少し少年が大きくなったら教えてやる」

「は、はあ…」

「そんなにナギの事が知りたいのなら京都に行け。

確か奴が一時期住んでいた家があったはずだ」

「ホ。ホントですか!？」

ナギの情報。

思わぬところから手に入った父親への手がかりに舞い上がっている
ネギ。

ナギにどんな幻想を抱いているのかね…

「あつ、そうだ。アスナ、ちょっとこっちに來い」

「なんですか?」

「ていッ!」

「みぎやあああああああ…」

エヴァを足蹴にした報復として、気で強化したデコピンをアスナに
放つ。

喰らったアスナは5回転ぐらいして吹っ飛んだ。

「エヴァを足蹴にした分だ…今回はこれで勘弁してやる」

「(ヒ、ヒイイイイイイイ!!)」「」

ネギとカモはビビりまくっていた。

修学旅行が週明けに迫った金曜日。

俺はじじいに修学旅行の件で呼び出されていた。

「なんだよ、じじい」

「実は今度の修学旅行の件じゃが…このかの護衛をしてはくれんか？」

関西呪術協会のゴタゴタか。

詠春め…お前がすっかりしないから俺の仕事が増えたじゃないか！
いや、でも…交換条件であれを…

「どうじゃ？ 引き受けてはくれんか？」

「そうだな…エヴァの登校呪いを修学旅行の期間だけ解呪してくれ
たらやつてもいい。」

修学旅行は学業の一環だし、出来るだろ？」

「やってみた事はないんじゃないが…よかるう、試してみるぞい」

京都か…詠春に会うのも久しぶりだな。

「そついや少年には何か仕事をさせるのか？」

「ネギ君には関係改善の親書を携えた特使として向こうに言っても
らうぞ」

特使ねえ。どんな妨害行為がくるやら…。

「まあいいや。とりあえず今夜呪いの件を試してみてくれ」

「了解じゃ」

上手く行けばいいんだがな。

……

……

…

その日の夜。

じじいはエヴァを呼び出して呪いの解呪をしている。
そしてしばらく経った後、俺も呼び出されたので学園長室に向かった。

「どうした、じじい？ 成功したか？」

「した事には変わらないんじゃないが…時間が5秒までなんじゃ…」
「このクソジジイ！ もっと気合いを入れて解呪せんかー！」

部屋の中ではエヴァがじじいの首を掴んでブンブン振っていた。
いくら妖怪でもポツクリ逝ってしまうぞ。

「5秒か…十分だ。エヴァ、この指輪を試してみろ」

俺はある指輪をエヴァに渡す。

「呪いが解呪されたら付けてくれ」

「わかったぞ」

「よし…じじい、再度解呪をしてくれ」

「わかったぞい」

じじいが呪文を唱えて登校呪いを解呪する。
そして制限時間の5秒が過ぎるが、

「解呪されたままじゃと！」

「そうだ。この指輪には俺のアーティファクトの力を込めてあつてな。」

エヴァの呪いが無い状態を維持するように設定した。

俺からの魔力供給が切れれば呪いは戻るが、問題ないだろう」

「フフ…フハハハッ！…これで外に出られる！」

エヴァはあまりの嬉しさに舞い上がっている。

魔力供給もあまり魔力を持っていけないようにしたから修学旅行が終わるまではもつだらう。

「じゃあ、エヴァ。念のため、学園都市を出てみるぞ」

「わかったよ。」

「護衛の件、よろしく頼むぞい」

「了解した」

窓から飛び出して学園都市の端にある橋に向かう。

橋に近づくと何を思ったのか、エヴァは航路を下げて降り立った。

「どうした、エヴァ？」

「い、いや！…つい緊張してしまっただけ…」

別にメフィストの力を見くびっている訳ではないんだが…」

エヴァは恐るおそる橋を渡りきるように歩いていく。

「まあしょうがないか。ホレ、手を繋いでやるから一緒に行くぞ」

「あっ… ああ！」

嬉しそうな顔をして手をつなぐエヴァ。
そして橋をあと一步で渡り…… きた。

「やった… やったぞ！ フハハハハハハッ！」

「よかったな」エヴァ

「人にとっては小さな一歩だが、吸血鬼^{わたし}にとっては大きな一歩だ」

「確かに人間が月に降り立ったのは驚いたが…」

呪いが一時的とはいえ解けたエヴァはかなりご機嫌だった。

「おお、そうだ。折角だしチャチャゼロも連れて行こう」

「は？ しばらく見てなかったから廃棄処分にしたのかと思ってたぞ」

「流石にそこまで外道ではないわ。魔力が無かったからただの置きもの扱いだな」

全然出てこなかったからリストラされたのかと思ったぞ。

〔修学旅行当日〕

「ヤバイヤバイヤバイ！」

「マスター、落ち着いてください」

「お前が時間通りに起こさないから慌てているんだろうが！」

「ですがマスターがあと5分、あと5分と…」

「修学旅行が楽しみで眠れなかったんだよなー」

「頭を撫でるなー！」

当日にエヴァは寝坊した。

寝坊に気付いて慌てて準備している映像を茶々丸に録画してもらっているのは内緒だ。

「メフィスト！ 子供を見守るような視線を止めて手伝え！」

「了解だ、お姫様」

十分堪能したし、そろそろ向かわないと危ないからな。

準備が出来次第、転移魔法で飛ぶか。

………

……

…

「ま、間に合った…」

「エ、エヴァンジェリンさん！？ 呪いで学園から出られなかったんじゃない…」

「ちよつとじじいに協力してもらってな。エヴァも参加するぞ」

「で、でも…エヴァンジェリンさんが所属している班は解体しちゃったしな…」

班を解体？

よくやったぞ、少年。

「いや、かまわんぞ、少年。エヴァは俺と一緒に行動することにする」

「わかりました。ではそろそろ新幹線が動き出すので乗ってくださいね」

さて、なにが起きるやら…

……

……

…

「フハハハハッ！ 新幹線から見る景色がこれほど良いものだっ
たとは！」

「よかったな〜エヴァ」

「うれしそうなマスター…記録中」

ああ、もう…可愛いな！

茶々丸のフォルダにエヴァの動画が着々と追加されていく。
そろそろPCに映して保存しておかないとな。

「あの、メフィストさん…エヴァンジェリンさんは一体どうしたの
ですか？」

「ん？刹那か…学園が知られて舞い上がってるんだよ」

「は、はあ…」

心配そうな顔すんなよ。

「あと木乃香の護衛だが、俺もやる事になったから」

「ホントですか!？」

「ただし、必要以上に頼るなよ。本来はお前の仕事だからな」

「あつ、解りました…手に負えなくなったら連絡してもいいですか？」

「状況にもよるが…了承しておくよ」

イレギュラーが起きたら代わってやらないとな。

「それでは私は護衛に…ッ！」

「あれは…式神か？」

刹那と話をしていたら新幹線の中にカエルが大量発生しだした。なんぞ、これ？

「な、なあ…刹那…」

「恐らく呪術協会からの妨害でしょう。私は様子を見てきます」

カエル出してどうすんだよ…

こんなんで親書を取れるんだったら苦労しないわ。

あとで刹那に聞いたら親書を取られかけたらしい。
呼び名を少年から野菜にランクダウンしようかな。

……

……

…

「清水寺」

「京都おーっ！」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「誰かつ！ 飛び降りれっ！」

「ここが清水寺…来てよかった…」

クラスメートが騒がしいなか、エヴァは感動していた。

「よし、メフィスト！ 飛び降りてみる！」

「了解だ！ ひゃっほおおおおおおお！」

「では拙者も」

「何をやっているんですかー！」

問題ないよ、少年。

俺って不死身だし、楓は忍者だし。

戻ったら雪広に怒られたけどな。

この後は地主神社に流れていった。

そこでネギフォーリンラブの雪広・佐々木・宮崎の3人が恋占いの石を試していた。

「マスターはやらないのですか？」

「必要無いな。私の願いはとうの昔に叶っている」

うれしいことを言ってくれるね。

俺は黙ってエヴァの頭を撫でつけた。

良い雰囲気になっているところに、恋占いをしていた雪広・佐々木

が落とし穴に落ちて騒
がしくなる。

「まったくこのクラスは……」

「しょうがないな。だが、あれも妨害なのか？」

「なんだか酷く稚拙ですね」

なんだか一気にやる気が無くなってきた。

この後は音羽の滝に向かい、縁結びの水を飲み始める3 - Aの連中だが、酒にすり替えられていたらしく、飲んだ連中は酔っ払って倒れていた。

「なあ、エヴァ……ほつといて京都の観光に行かないか？」

「それは魅力的だな。正直私もどっかに行きたくなってきたぞ」
「油断させる罠では？」

その可能性もあるが……なんだかやる気がね。

まあいい……そのうち本命が仕掛けてくるだろう。
ホテルに向かう前に酒を回収してあとで飲むか。

……
……
……

【三人称 side】

その後、酔いつぶれたクラスメートをバスに詰め込み、ホテルに向

かう。

そして教員が風呂に入る時間になったのでネギは力モと一緒に露天風呂に入っていた。

「ふー。すごいね、これが露天風呂って言うんだってさ。

風が流れてきもちいいねー」

「おうよ。これで桜咲刹那の件がなければなあ」

親書を取り返してくれた恩を忘れて刹那を疑っているネギと力モ。剣士である刹那にはかなわないと力モと話していたら誰かが入ってきた。

「ん？誰か来たよ。男の先生がたかな？」

音のした方を向くと噂していた刹那が入ってきた。

「（さ、桜咲さんー！？）」

いきなり現れたのは驚いたが、生徒の裸姿に見とれるネギ。だが、すぐにマズい事態だと思い直し、ゆっくりその場から離脱するネギと力モ。

そんな中、また扉が開く音がして…今度はメフィストが入ってきた。

「（ええー！今度はメフィストさん！？ど、どど、どうしよう力モくん！？）」

「（スマン、兄貴…俺っち、あの人苦手なんだ…）」

ヘタレ精神旺盛な力モ。ネギはどうするべきかアワアワしていた。そんな二人に気付かず、刹那とメフィストは互いに視線を合わせる。

「……大声を上げてもいいですが、メフィストさん？」

「ここで教員を呼んでも時間を守らなかった刹那が悪いことになるぞ」

「じゃあ私が出ます」

「いや、ここにいろ……ちょっと聞きたい事があるしな」

刹那が風呂から出て行くのを止めてメフィストも湯船に入る。

「（どうする、カモ君！？ 僕、どうすればいいの！？）」

「（流石の俺っちもどうすればいいか解らないや……）」

状況に着いていけないネギとカモ。

「少年をどう思った？」

「魔法先生であるネギ先生ならなんとかしてくれるとは思いましたが……」

「案外頼りなくて困りました」

「（え！？ なぜ僕が魔法使いだと……やっぱり桜咲さんはスパイ！？）」

「まだまだ小僧だからな……むっ、刹那」

「はい、誰だ！？」

近くにあった小石を投擲し、風呂場の明かりを消す刹那。

「（しまった！ 見つかった！）」

対象が岩の向こうにいるのを感じとり、一気に斬り付ける。

「逃がすか……神鳴流奥義、斬岩剣！」

岩を真つ二つにする刹那、潜んでいたネギは驚くが武装解除を行う。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！
風化 武装解除！」

攻撃を喰らった刹那は夕凧を手放してしまうが、

「残念だったな、侵入者。注意力が散漫だ」

いつのまにか移動していたメフィストにネギは頭を押さえられる。
そして刹那も怯まずに喉と男の象徴を掴んで脅しかける。

「何者だ？ 答えなければひねり潰すぞ」

「(ってあれ？ これって少年じゃないか)」

「ってアレ？」

「あわ、あわわわわ」

「ネ、ネギ先生？」

いち早く気付いたメフィストは満面の笑みを浮かべてからかう。

「大胆だな、刹那♪ まさかそんなところを掴むとは驚いたぞ♪」

「い、いや！これは！ 工作上、急所を狙うのがセオリーでして…」

え、えつと…ごめんなさい、ネギ先生！」

「や、やいてめえ！桜咲刹那！ やっぱりてめえ関西呪術協会のスパイだったんだな！？」

「なっ！違う、誤解だ！」

「何が違うもんか！ ネタは上がってるんだ！

さっさと白状しろいっ！」

こんな小動物の戯言なんて聞き流せばいいのにと思っているメフィ

スト。

カモと刹那が言い合っていると女子更衣室から悲鳴が上がる。

「こ、この悲鳴は!？」

「このかお嬢様！」

すぐに更衣室に向かう刹那とネギ。だが、

「お前はここで留守番だ、少年」

メフィストに首根っこを掴まれていた。

「なんで止めるんですか、メフィストさん!？」

「なんだ、少年は女子更衣室を覗きたいのか？」

大層なマセつぶりだな」

「はっ！」

メフィストの指摘で思いとどまるネギ。

一方、女子更衣室では、

「このかお嬢様！」

刹那が扉を開けると小猿の式神がアスナと木乃香の下着を脱がそうとしていた。

「おのれ、小猿ども！」

「桜咲さん!？ それってもしかして真剣!？」

慌ててアスナは刹那の動きを止めるように動き、そのせいで刹那は式神を倒せないでいた。

その隙に式神は木乃香を外に連れ去ろうとするが、

「神鳴流奥義、百烈桜華斬！」

刹那は奥義を使い式神を一蹴する。

「せ、せつちゃん…なんかよーわからんけど、助けてくれたん？

…あ、ありがとう」

「あつ…いや…」

木乃香の笑みに動揺して、その場から脱兎の如く逃げ出す刹那。

「（やはりこのままではマズいな）」

一方メフィストは今後の対策を考えていた。

夜が更けてきたころ、

「このか、ちよつと話があるんだが…」

第貳拾捌話 『俺の掌で踊れ』

「さて、木乃香を攫おうとする動きがある訳だが…」

「介入するのか？」

「一応すでに手は打ってあるんだが、攫われるようなら刹那に荒療治をする」

ホテル嵐山の一室で、俺とエヴァが今後の動きについて相談している。

さっきの浴場での出来事は刹那が傍に入ればすぐに防げたことだ。おそらくこのままでは誘拐は成功するだろう…
そばにいない護衛など、なんの価値もない。

「マスター、メフィストさん。お茶が入りました」

「頂こう」

「おっ、ありがとな」

危機管理の甘い坊やたちがどこまでやれるか見せてもらおう。

………

……

…

「3 - A 防衛隊結成ですよ！」
ガーディアンエンジェルス

「えー、何その名前…」

「関西呪術協会からクラスみんなを守りましょう！」

水晶にネギ達は何をしているのか映しだしてみたら、なにやら酷くガキっぽい名前を付けていた。

一緒にいるアスナと刹那は恥ずかしそうに顔を赤くしている。この後、ネギは外に見回りをしにホテルから出ていった。

「くくくつ、暢気なものだな」

「坊やだからな…簡単に侵入されたことを忘れて護衛対象から離れる。」

つくづくウェールズでの教育はぬるいんじゃないかと麻帆良に来てから思うよ」

ネギがホテルの入り口から出ようとすると、ワゴンを持った従業員らしき人物とぶつかった。

ぶつかった女だが…さっきの風呂場で同じ気配がしたな。

こいつが犯人って訳か。

刹那がドアの所に結界の呪符を貼っていたようだが…無駄に終わったな。

「今のはちゃんと説明しない刹那が悪いな」

「やれやれ…面倒な修学旅行になったもんだ」

「そもそも東を快く思わないところに行くのに、魔法先生があまりいないのが問題ですね。」

もし一般人に被害が出たらどう責任を取るのでしょうか…」

茶々丸の言う通りだな。じじいはいつも責任は自分が取ると言っているが…

本来ならそういう事態を引き起こさないようにするのが長としての仕事だ。

まあこつちに被害が出ないなら勝手にやって勝手に責任を取って辞めるなりすればいいさ。

「魔法先生ね。来てるのは少年と…あとは誰だったっけ？」

「確か瀬流彦とか言う教師だな」

「ああ…いつもガン黒とつるんでる優男ね。役不足にも程があるな」

「私が言うのもなんだが…とことん麻帆良の教師共を嫌っているな」

「当然だ。正義という言葉を多用する人間にロクな奴はいない。」

「防衛戦ばかり…しかも上位の実力者が全然こないような闘いしか経験していないガキど」

「もなんざ名前を呼ぶ価値もないな」

魔法が使えないタカミチですらあの実力を手に入れたんだ。

「魔法を使える」——この時点でアドバンテージを持っているのに努力を怠る。

自分の力を過大評価しすぎだ。

「まあジジイからして甘ちゃんだからな。実力が伴っていないのは致し方あるまい。」

むっ、近衛木乃香が攫われたぞ」

「やれやれ…どいつもこいつも危機管理がなっていない…」

水晶に目を向けると、猿のきぐるみをした女が木乃香を抱えてホテルから飛び出した。

そのままホテルから離れていく。

刹那とアスナは大分離れた後に気付いたようだった。

「メフィスト…予想通り攫われたが、いつやるんだ？」

「そうだな…もう少しガキどもの力量を見てからにするよ」

猿女はそのまま駅に向かって走っていく。

途中でネギとばったり会ったが、小猿の式神で呪文詠唱を邪魔されてあっさり逃げきる。

ネギの方はその後すぐに来たアスナと刹那に式神を取ってもらい猿女を追いかけた。

駅に着くと、人払いの呪符が貼っており、人の気が無かった。

猿女はそのまま電車に乗り逃走を図るが、間一髪でネギ達は間に合う。

そのまま先頭車両まで追い詰めようとするが、陰陽術で大量の水が発生し車両が水で満たされる。

だが刹那が斬撃を飛ばしてドアを斬り、水を猿女のいる車両にも流し込んだ。

「陰陽術とはなかなか面白いな」

「速攻性では西洋魔術に勝るが…威力では劣るといったところか」

「それにしても、誘拐犯の人は中々ファンシーな格好ですね」

「おそらくあれがあの子の式神なんだろう」

「猿女の限界のレベルがあれなんだよ、きっと…」

駅に着いてすぐ猿女は逃げ出す。

追ってくるネギ達に向かって炎属性の呪符を放つがネギの魔法によってあっさり掻き消された。

「逃がしませんよ！ このかさんは僕の生徒で…大事な友達です！

契約執行180秒間！ ネギの従者『神楽坂明日菜』！」

「よし、行くよ桜咲さん！」

「え…あ、はい！」

前衛にアスナと刹那。後衛にネギという布陣に分かれて猿女に向か
つていく。

ネギはアスナのアーティファクトを出すが、

「ただのハリセンじゃない！ もー、こーなったら破れかぶれよ！」

出てきたのはドでかいハリセンだった。

刹那と一緒にハリセンで叩きに行くが、猿と熊の式神に邪魔される。

「ウチの猿鬼と熊鬼はなかなか強力ですえ。一生そいつらの相手でも
していなはれ」

「こんのー！ たあー！」

猿鬼はアスナのアーティファクトの一撃を喰らい還された。

「流石はアスナのアーティファクト…魔法使いにとってとことん不
利になるようなものが

出てくるな」

「メフィスト…お前、神楽坂明日菜の何を知っている？」

「あれ？エヴァに話してなかったっけ？」

「聞いてないな」

「アスナはな、完全魔法無効化能力を持った魔法世界のお姫様だっ
たんだよ」

「何だと！？」

まあ普通は驚くわな…

「どうりで私の障壁を安々と抜ける訳だ…」

「おっと、話がそれたな。そろそろ動き始めるかね」

向こうは式神とアスナ、刹那と神鳴流の剣士がそれぞれ戦っていた。この隙に逃げ出そうとする猿女だが、

「ラス・テル マ・スキル マギステル

風の精霊 11 柱 縛鎖となりて敵を捕らえよ！

『魔法の射手 戒めの風矢』！！」

「しもた！ ガキを忘れてたー！」

「戒めの風矢」が飛んでいくが、

「ひい！ お助けー！」

「あつ！ 曲がれ！」

木乃香を盾にする猿女。

「戒めの風矢」なんだから当たってもダメージはないだろうに…

「はは〜ん、なるほど…読めましたえ。

「甘ちゃんやな。人質が多少怪我するくらい気にせず撃ち抜けばえーのに」

「同感だよ、猿女」

「ぐえっ！」

猿女の手を払い、ボディーパーブローを喰らわせて怯んだ隙に組み伏せる木乃香。

「……へっ！？」「」

「なあっ！ あんた、このかお嬢様じゃありませんな！？」

「企業秘密だ。悪いがお前にはここで退場してもら——ッ！」

「木乃香を呼び出して眠らせて、俺の分身を作りだし、木乃香似の幻術を掛けて、時々――

人になるように動かしていたらこういう事態になった」

揃いも揃って引っ掛かってくれてびっくりだ。

「さて、刹那。お前は明日から木乃香の傍にずっといろ」

「なっ！」

「お前に拒否権はない。

そもそも今日の事は木乃香の傍にお前がいれば全て未然に防げたことだ」

「ッ！」

刹那は身分がどうか考えているんだろうが……そんなことを気にするようなら詠春は初め

から引き合わせたりしない。

そのの所を理解できないところが生真面目の面倒なところなんだよな。

「これを守らないようなら……それ相応の代価を貰うぞ」

「……わかりました。明日からお嬢様の傍にいます」

「ちよつとメフィスト先生！ 桜咲さんに無理をさせるべきじゃないわよ！」

「黙れ。お前も分身とはいえ木乃香の傍にいながらも誘拐にすぐ気付けなかった。

一般人が感情論で物事を語るんじゃない」

「うっ」

まあ頭でっかちなネギにはお似合いのパートナーだろうよ。

「そういえばメフィストさん。このかさんはどこにいらっしゃるんですか？」
「ここにいますけど」

「……見えませんけど」

当然だろ。俺の結界で覆っているんだからな。

「アベアット」

「あつ、このかさん！」

「夜だから静かにしろ」

「う、ごめんなさい」

このガキはいちいちオーバーリアクションだな。

「今日はもう遅い。木乃香を連れて部屋に戻れ」

「はい…あの、メフィストさん。」

お嬢様を守ってください、ありがとうございます」

「気にすんな」

「それでは失礼します。おやすみなさい」

刹那達は木乃香を連れて部屋から出ていく。

それにしてもアーウェルンクスが出てくるとはな。

確か10年前に二番目をナギが倒したはず。

まったく…面倒な修学旅行になったものだ。

「なあ、メフィスト。最後に出てきた白髪のガキは何者だ？」
コスモエンテレケイア

「完全なる世界の構成員だ。名をアーウェルンクス」

「ほお…思わぬところで本物が出てきたという訳か」

「だが俺達がいることは気付いていなさそうだ」

まあ気付いていてもどうでもいいがな。
あの程度の力量じゃ俺の脅威にはなりえん。

「これから私たちはどう動く？」

「とりあえずは少年たちになんばつてもらおう。

最初から俺達に頼るようになるといけないからな」

「ならばなんで今日は助けたんだ？」

もつともな質問だな。

「答えは簡単。刹那への荒療治だ。

たぶんまだ必要だろうが少しずつやっていくつもりだ」

刹那も本心では木乃香と話したいのに、影で見守るだけでは人生の意味が無い。

人間の生は100年も満たなく終わる場合が多いからな。

子供の内から必要以上にガマンをしているとのちのち後悔することになる。

「くくくつ、なんだかお前が教師に見えてきたよ」

「冗談も大概にしとけ、エヴァ。俺ほど教師に合っていない化け物は存在せんよ」

「そもそも私たちのようなケースが珍しいがな」

「それもそうだ……そっぴや麻帆良にもう一人、人外のヤツがいたな」

「私はジジイを見るたびに近衛木乃香と血縁関係にあるのが信じられないんだが……」

「これぞ人類の神秘というらしいぞ」

もはや、じじい「妖怪説はかなり有力である。
じじいが聞いたら泣きそうな説だが…いや、すでに耳に入っているか。

とにかくまだ修学旅行は1日目が終了しただけだ。
どうなることやら…

第貳拾捌話 『俺の掌で踊れ』（後書き）

これから大学が忙しくなるので1週間ほど更新を止めます。
そして更新速度も3日に一度にします。

修学旅行の途中なのに我儘を言って申し訳ありません。
次の更新は4月19日に行います。

第貳拾玖話 『修学旅行・二日目』

〔ホテル嵐山・一階大広間〕

「お、お嬢様…あの、一緒にご飯を食べませんか？」

「せつちゃん……うん、ええよ！　一緒に食べよーな！」

「は、はい！」

「よかったー！　せつちゃん、ウチのコト嫌ってる訳やなかったんやな！」

「き、嫌いになるはありますが……お嬢様」

朝食の時に約束通り刹那が木乃香の傍に寄っていった。

昨日は葛藤していたが、内心嬉しそうじゃないか。

「メフィスト〜ね〜む〜い〜」

「朝ごはんだからな。寝過ぎす訳にもいかん。ほら、口を空けて」

「はむ……もぐもぐっ」

（記録中……記録中……）

俺はと言うとエヴァ・茶々丸とご飯を食べている。

エヴァはあんまりにも眠そうだったので、膝の上に乗っけてご飯を食べさせているぞ。

初日から寝不足だったからな。

致し方ない……うん、しょうがないよな。

茶々丸はなにやら正面からじつと見てくる……時折、うらやm……な
どと呟いているし。

ちよっとマズいんじゃないか？

一度、超にメンテしてもらっておくかな。

クラスメート達はギャップの激しい今のエヴァに驚き…萌えているようだった。

こっち見んなよ。

「み〜ず〜」

「はい、こぼすなよ」

「うん…」

「ああもう、言ったそばから垂らして…今拭くからな」

「ありがと…」

眠気でかなり幼児化しているが……断言しよう、可愛いと！
薄目しか開かなく、小動物のように食べる仕草が可愛いんだ！

「これぞ至福の時……」

「ねえねえ先生…私もエヴァちゃんにご飯食べさせていい？」

『ギロツ！』

「うひいッ！」

おもわず効果音が出るほどの視線を送ってしまう。
あー誰だっけ…まあいいや。

「ご飯〜」

「はい、次はこれだ」

「はむはむ……」

さっきの事は脳内から排除だ。

俺の至福の時は何人たりとも邪魔させん。

（これはもはや結果といってもいいレベルですね。

魔力を使わないで生成するとは流石です、メフィストさん)

………
………
………

ご飯を食べ終わって部屋に戻るとエヴァはようやく自分が何をして
いたのか気付いた。

顔を真っ赤にして——嬉しそうに笑ったり…頭を押さえてウガァッ
と叫んだり…

「マスター、うれしそう」

「そうだな。これを見ただけでもこの修学旅行に参加した意味が
ある」

ホント、可愛いな

でもはたから見れば俺達ってどんな風に見えるんだ？

「エヴァが一人娘。俺が父親、茶々丸が母親か？」

「母親………ツッ!!」

「あれ？声に出してたか、スマン。嫌だったか？」

「い、いえ……そういう訳ではありません……」

なんか茶々丸があっちこっち見たりオロオロしてるけど…ホントに
大丈夫か？

エヴァは……今は嬉しそうな顔をしている。

そろそろ班別行動の時間だが、もう少し喜びの時間に浸っていてい
ても大丈夫だろう。

「そっぴや茶々丸。いつもエヴァがやってるアレをやってやるよ」

「えゝ！」

「ホラ、穴をこっちに向けて」

「え、えっと…その…お願いします…」

「ああ、任せておけ。上手にやるからな」

「あの…マスター以外は初めてなので優しくお願いします」

「優しくね…了解。それじゃ入れるぞ」

「んっ！」

「どうかしたか、茶々丸？」

「い、いえ…なんでもないです…」

「じゃあ続けるぞ」

「あう！ も、もうちょっと弱めにお願いしますううう！」

「これくらいか？」

「ん！（こ、声が出てしまいます…）」

「なんだか反応が怖いんだが大丈夫か？」

「だ、大丈夫です…気持ちいいだけなんで…」

「そうか♪ ならもつと強くしても問題ないな」

「%& \$#!**@?¥〒 ——— ツツ！！」

「あれ？下手だったか？」

「い、いえ！ とても上手というか気持ちいいというか…」

「なら問題ないな♪ もつと行くぞ！」

「%& \$#!**@?¥〒 ——— （マスター、助けてください

い！）—— ツツ！！」

………

……

…

なにやらピクピクしながらぐてーっと倒れている茶々丸。

本当に大丈夫か？

え？何をしていたかって？

ただの茶々丸のゼンマイ回しだよ。

何を想像したんだ、読者諸君？

「そろそろ班別行動だし俺達も出発するぞ」

「あー！メフィストはん見つけたえ！」

ホテルから出ようとしたら木乃香に声を掛けられる。

「どうかしたか、木乃香？」

「えつとな、『刹那』は木乃香のことを嫌いになってないから安心しろ」だっけか？

昨日言ってくれたやん？」

「そっぴいや昨夜に言っとな」

「ウチちよつと落ち込んでたんけどその言葉で元気づけられたんや、ありがとな」

「それはよかったな。そっぴえば朝、刹那と話していたじゃないか」

「そっぴいなんよ！それがうれしくてなー、今日の班別行動も一緒に行動するんや。」

メフィストさんも一緒に行かへん？」

確か木乃香の班は奈良だったか。
京都内は明日行けばいいし…エヴァが乗る気になれば奈良に行くとしよう。

「なあエヴァ、奈良に行ってみたいか？」

「奈良か…いいぞ、ぜひ行こう」

乗る気になったな…それじゃ今日の行先は奈良に決定。

「OKだ、木乃香」

「了解や。ほな行こか」

…
…
…

「見てください、アスナさん！ 鹿がいっぱいいますよー！」

「ハイハイ…ガキね」

「見てみる、メフィスト！ こいつ、私が持つせんべいを食べてくれたぞ！」

「よかったな、エヴァ」

奈良公園に着いたら真っ先にエヴァとネギがはしゃぎだす。
微笑ましいな…ネギはいらないけど。

「せっちゃん、これ一緒に食べよ」

「は、はい…お嬢様」

「あん、昔みたいにこのちゃんって呼んでーな」
「い、いえ…恐れ多い」

刹那と木乃香は百合フィールドを展開中。

「えへへ…ネギ先生…」
「よくやったー、のどか！」
「キヤー！」

宮崎、綾瀬、早乙女はなにやら盛り上がっていた。

「マスターは修学旅行に来てから活き活きしていますね」
「牢屋のような場所で15年間過ごしていたからな。
取引のためとはいえ…受け入れたくはないよ」
「ですが、そのおかげで今は平穩に暮らせています」
「そうだな…その通りだ」

いくら賞金を消すためとはいえ、エヴァを牢獄暮らしのような生活にってしまったのは
事実だ。

だが茶々丸の言葉でいくらか心が晴れた。

「メフィスト！ 今度は大仏を見に行くぞ！」
「鹿の餌やりはもういいのか？」
「うむ、存分に堪能した」
「了解、それじゃ行くか」

昨日、誘拐は失敗してるし…戦力を立て直すために今日は来ないハズだ。
少しぐらい旅行を楽しんでもいいだろ？

もちろん油断はしないけどな。

………
………
…

一通り寺の中を見て回った後、外に設置されていた団子屋で休憩している。

途中で見つけた刹那と木乃香も誘っておいた。

「うれしそうだな、木乃香」

「もちろんや。せっちゃんとお話できるようになったからな」

「そうかそうか。ちゃんと刹那が逃げないように掴んで置けよ」

「もちろんやで！」

「（うう…お嬢様と話せるのは嬉しいが、やはり身分が…）」

嬉しそうな木乃香とは対称的に刹那はなにか悩んでいるようだった。まったく…生真面目なところは詠春に似やがって。

でも今言っても仕方が無いか。

「マスター、口元に団子のタレが…今拭きますね」

「ん？ ありがとな、茶々丸」

エヴァは団子を何個もパクついている。

時々口元に垂れるタレを茶々丸に拭いてもらっているのを見ると和むね。

それに団子屋の茶は旨い。

「ずず、はふう…これぞ日本人の在り方だな」

「なんだか一気に老けたように見えるえ」

「実年齢から考えたらとても若々しく見えるはずだが？」

「??」

「いや、なんでもない…忘れてくれ」

木乃香相手になにを口走ってるんだよ、俺。

「よわからんけど…まあいいや。

そろそろ帰らなアカン時間やし、アスナ達をさがしに行くえ」

「もうそんな時間か。エヴァ、そろそろ行くぞ」

「んむ？　ちよつと待て、これを食べたらな」

エヴァは最後の団子を急いで食べ始める。

「急いで喉に詰まらせるなよ」

「そんなベタなマネはせん！」

なんだ、しないのか。

「それじゃあ、アスナ達を探しに行くとするか」

どこにいるのかね？

………

………

…

探し回っていると芝生の上にぶっ倒れているネギと、それを介抱しているアスナを発見した。

「ひゃー！ ネギ君どうしたん！？」

木乃香はネギに駆け寄っていく。

刹那も心配なのか、一緒についていった。

「まさか敵の攻撃か？」

「いや…そんな気配は感じなかったぞ。それに見たところ目立った外傷もないし」

「精神攻撃の類では？」

「ふむ…情報不足だな。アスナに直接聞いてみよう」

（事情聴取中）

「少年が宮崎に告られたんだとさ」

「……この場合、宮崎のどかはシヨタコンになるのか？」

「むしろ……見た目的には小学生のお遊びで付き合ってみました的な？」

「そんな感じがするな」

「それにしても…さすがはナギの息子。」

「わずか10歳で女を落とすとはな」

このあとホテルに帰るまでずっと気を失っていたのでアスナが背負って連れて帰った。

第貳拾玖話 『修学旅行・二日目』（後書き）

なんか大学生活が始まると毎日更新とか…もうね…
自分には夢物語に等しいです……orz

そんな訳でこれからは三日に一度の更新になります。
まことに申し訳ありません。

P・S・ 今まで載せ忘れていたメフィストのパクティオーカード
を第捌話に
追加したので気が向いたら見てやってください。

第参拾話 『ラブラブキッス大作戦』

【三人称 side】

「朝倉に魔法がバレたー!？」

「はい……」

ホテルのロビーの隅でネギが涙目になりながら報告する。
それを聞いたアスナは叫び、刹那は呆れていた。

「なんでアンタは魔法をすぐに使うのよ!? そんなにオコジヨになんたいの!？」

「仕方なかったんですよ……」

——（事の顛末を説明中）——

憤るアスナと落ち込むネギ。

刹那はどうフォローしようかと考えるが無理だと判断する。

「朝倉さんにバレたのは痛いですね……」

「そうね…朝倉にバレるという事は、世界にバレるという事だからね」

「あううう……」

容赦ない意見でさらに落ち込むネギ。

「問題はメフィストさん・エヴァンジェリンさんにどう説明するかを考えるべきですね」

「……やっぱり言わないといけませんよね？」

「はい。もし対応を間違えたら口封じにされる可能性も…」

刹那は物騒な事を口走るが…もし吸血鬼の二人の情報を表に流出したとなると、報復活動をする可能性だってある。

「やばいわね…武闘派であるあの二人は簡単に口封じとかやりそうだわ」

「あわわわわつ。あ、朝倉さんを逃がさないと！」

「どこに逃がすつてのよ？ それとネギも同罪になるのよ」

「否定はできませんね」

「な、なんでですか？」

「当然でしょ！？ むしろバラしたアンタのほうが酷い目に会う可能性もあるのよ！？」

普段どんな印象を持たれているかがわかる一瞬である。

そんな中、当事者が力モを肩に乗つけて暢気にやってきた。

「おい、ネギ先生ー」

「朝倉……今まで世話になったわね…」

「は？」

「朝倉さんの事は忘れません」

「桜咲さんまで…何の話？」

「ごめんなさい、朝倉さん…一緒に逝きましょうね…」

「先生！？ 字が違うよ！」

朝倉、京都で散る。

そんなテロップが付きそうな空気を三人は醸し出していた。

【メフィストside】

魔力を風呂場で行使した気配を感じ、その原因であるネギを探していたが…

朝倉になにやら説明するアスナ、落ち込んでいるネギ、悩んでいる刹那をロビーで発見した。

「そ、そうだったんだ…（思わぬところで地雷を踏んだようね…）」
なにやら朝倉に魔法がバレたらしい…更に何故か俺に口封じされる展開に…
ホントにどうしようもない野菜小僧だな。

「別にそんな事を気にする必要はないぞ」

「「「メ、メフィストさん（先生）！？」「」」

なにやら怯えられているようだ。

あれ？ もはや俺の口封じは確定事項なのか？

「そんなに怯えるなよ。口封じなんかしないって」

「そ…そうですか……よかった……」

「別に魔法がバレてもそこにいる野菜が困るだけだしな。

あと朝倉の頭の中が弄られて記憶を消されるくらいか」

「や、野菜…」「頭の中って…」

ネギは呼び名がランクダウンして落ち込み、朝倉は驚いていた。

「何を驚いている、朝倉？ 魔法をバラすなんて行為をしても本国の連中が簡単に阻止し

てお前の記憶を無くすだろう」

「何やらヤバそうな感じね…」

「俺はどうでもいいが、あいつらはかなり神経質になっているからな。」

「下手な事をやったら…最悪消されるぞ」

魔法をバラす…その行為の先にある事を話すと朝倉は顔を青くする。朝倉は今、どんな世界に足を踏み入れたのかを理解したようだった。

「まいったね…特大スクープの匂いがしていたんだけど…。」

「個人で知るだけにしておくかな」

「それが賢明だ」

まあバラしたいなら勝手にしてくれ。

そうなったら俺はまた賞金首時代のような生活をするだけだしな。

side out

【三人称side】

朝倉の件が片付いたことでひとまず部屋に戻っていったネギ達。その隙に力モと画策していた計画を実行に移す朝倉であった。

「ねえねえ、みんな。一丁、派手なゲームをしない？」

騒がしくして新田先生に怒られていた大半のクラスメートたちに向かって提案する。

さっきまで怒られていたメンバーに含まれていた雪広は反対するが、その他は賛成のようだった。

「名付けて『くちびる争奪！ 修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦！』」

「ええ——っ！」

「ネギ君とキス——ッ！」

「（コラコラ大声出すなって！ また新田が来るぞ）」

「（ネギ先生とキ、キキキ、キス！？）」

ゲーム名を発表したら騒がしくなるクラスメート。

宮崎は顔を真っ赤にしているがやる気はあるようだ。

朝倉はルールの説明をしていく。

ルールは巡回中の新田先生の目を避けてネギ先生にキスをする。

各班より二名ずつ選出し、各班対抗戦とする。

武装は各部屋にある枕を使用。

妨害可：ただし派手に騒げば新田先生に発見される可能性あり。

なお新田先生に発見された場合はホテルロビーで正座によるリタイア。

死して屍拾う者なし！

本作戦の成功者には豪華特典あり。

六班は解体されて無いが、参加したい者がいれば六班枠で参加可能。希望者は朝倉まで。

先着の二名を以って六班枠として参加を認めるとの事。

ルールを聞いてやる気になっていくクラスメート。

最初は乗る気じゃなかった雪広も、ネギとのキスという事に動揺して許可をした。

「なあなあ、朝倉。メフィスト先生にキスしてもええん？」

木乃香の何気ない言葉でその場は膠着した。

「え、えーっと……（どうする、カモっち？）」

「（被害が出る訳じゃないし大丈夫だろう）」

「OKだよ、木乃香」

「やったー！　じゃあウチは六班枠に参加するえ」

木乃香が参加表明をした。

それに呼応するように龍宮も、

「メフィストさんが対象になるなら私も参加しよう」

参加を表明した。

「むーっ、龍宮さんもメフィストはん狙いなん？」

「そうだよ、近衛」

「……負けへんで」

「こちらこそ…」

木乃香と龍宮が笑いながら視線を交合わせる。

周囲にいる者たちは、中にはメフィスト狙いの者もいたが…二人の
気迫に当てられて誰も

名乗り出ることが出来なかった。

………

………

…

1 班代表選手。

鳴滝 風香

鳴滝 史伽

「あぶぶぶ…お、お姉ちゃん、正座いやです…」

「大丈夫だって。僕らはかえで姉から教わっている秘密の術がある
だろ」

「そのかえで姉と当たったらどうするんですか…」

涙目で楓とぶつかる事を訴える史伽と、聞く耳持たずにこのイベン
トを楽しもうとする風

香の姿がモニターに映る。

2 班代表選手。

長瀬 楓

古菲

「一位になってしまたらどーしよアルかね。

ネギ坊主は弟子とはいえ、ワタシ初キスアルよ」

「ん——」

嬉し恥ずかし初キスを想像する古菲。

そんな古を楽しげに見つめる楓の姿が画面に映っている。

3班代表選手。

雪広 あやか

長谷川 千雨

「うぐぐ…なんで私がこんな事を…（那波に村上にピエロめ…）」

「つべこべ言わずに援護してくださいな！ ネギ先生の唇は私が死守します！」

やる気無しの千雨に過剰なまでの使命感で突き進むあやか。

チームワークは最悪の二人の映像がそこにあった。

4班代表選手。

明石 裕奈

佐々木 まき絵

「よーし！ 絶対勝つよー！」

「エヘヘー」 ネギ君とキスカ……んふふ」

気合十分の裕奈と結構気になる少年との初キスを思い浮かべるまき絵。

若干方向性は違うが勝つ事に集中しているチームが廊下を歩いていた。

5 班代表選手。

綾瀬 夕映

宮崎 のどか

「ゆ、ゆ、ゆえ〜」

「まったく…うちのクラスはアホばかりですね。

せつかくのどかが告白をした時にこんなアホなイベントを…」

「あ、あのね…ゆえ、これはクラスのイベントだから」

「いいえ、勝つのです！

ネギ先生は私を知る中でも最もマトモな部類に入る男性です。

のどか、あなたの選択は間違っていないませんです」

「ゆ、ゆえ…」

親友の為に勝利へと貢献しようとする夕映と、その彼女の為に恥ずかしくても頑張ろうとするのどか。

チームワークという点では最高かもしれない二人が出陣した。

6 班選手枠。

近衛 木乃香

龍宮 真名

「狙うはメフィストはんのみや」

「とりあえず道中は協力しようじゃないか、近衛」

「おっけーやよ。それと公平に順番はじゃんけんにせーへん？」

「了解した」

メフィスト目掛けてずんずん進んでいく木乃香と龍宮。
もはや障害である新田など眼中にない様子である。

『それでは、ラブラブキッス大作戦開始!!』

こうして役者は揃い、開演の準備は整った。

主催者は地獄への扉を開けたと気付かずに……

side out

【メフィストside】

時は少し遡る。

風呂からあがって部屋で休んでいると、エヴァが眠そうにしていた。

「初日から睡眠不足だし、今日はもう寝たらどうだ？」

「だが…今日ここで寝てしまうとマズいことになる」と私の勘が告げている」

「そんな眠そうな顔で言われても説得力が無いぞ」

「そうですね…マスター、今日はもうお休みになられたほうが宜しいかと」

「……メフィスト、信じているぞ」

「俺になにか降りかかってくるのか？」

「なんとなくだが…勘はそう言っている」

ここまでエヴァが警戒するのも珍しいな。
それほどの脅威は感じないんだが…

「まあ大丈夫だろう」

「わかった…信じているぞ」

余程、嫌な気がしたのかね…。
随分と心配しているようだ。

「さて、茶々丸。俺はこれから風呂で飲んでくる。
その間エヴァのことを頼むぞ」

「わかりました」

昨日回収した酒をまだ飲んでなかったからな。
月を見ながら楽しく飲むとしよう。
今は10時だし…1時間ぐらい飲んだら戻ってくるか。

…

…

…

わりと大きい樽に入った日本酒もすぐに底をついてしまった。

なんだか物足りなかったので王の財宝に内包ゲート・オブ・バビロンされている神代の酒を
飲み始める。

するとこれがまたすごいなの…

現代の酒では到底味わえないような味…もはや別次元のような酒だった。

良い感じに酔ってきたところへ誰かがやってくる。

「見つけたえ、メフィストはん！」

「ん？ 木乃香か？」

俺は今、気分が良いから就寝時間を過ぎて出歩いていても見逃してやるよ」

「それはありがたいね」

「真名も一緒か…こりやまた珍しい組み合わせだな」

まあどうでもいいな。

今はこの酒を飲むことしか考えられん。

「約束通り近衛からどうぞ」

「お先や、龍宮さん」

何やら木乃香が笑いながら近づいてくる。
はて？ この酒でも飲みたいのだろうか？

「この酒は飲ませんぞ。流石に中学生には刺激が強い」

「そうじゃあらへんよ。メフィストはん、ちよつと目エ瞑ってくれへんか？」

「ん？ これでいいか？」

俺は言われたとおりに目を瞑る。

「おっけーや。それじゃいただきます」

は？

ちゅっ！！

はい！？

「こ、木乃香！？ いきなりなにを！」

「何って…キスしただけや」 えへへ… やつと小さな頃の約束を果たせたえ」

……詠春にバレたらまた般若になるな・
もうちよつとする相手を考えようぜ。

だがこの後起きた事態によつて、思考が一時中断される。
木乃香とキスをしたあと、木乃香の身体から魔力が放出され始めたのだ。

「え？ ええ？ なんやこれ？」

ヤバイ… 木乃香の魔法使いとしての才が目覚めてしまった。

木乃香とキスした時に仮契約の魔力を感じ取ったが… 予想的中って訳か。

だが、今自覚させる訳にはいかん。

「『眠りの霧』」

「はえ？ ……ぐう」

ひとまず眠ってもらおう。

「アデアット、永界の指環」

とりあえず木乃香の魔力を察知されると面倒だしな。

エヴァに施したように木乃香にも結界を付与した指輪をしておこう。

とりあえず気配遮断だけでいいか。

「メフィストさん。そろそろ終わるかい？」

「真名……いや、お前に怒っても仕方が無いな」

「そうだね…近衛が仮契約をしようとも私には関係ないしね」

「まったく…お前はいい性格してるよ」

「それより目をつぶってくれないかい？」

「ん？　こうか？」

ちゅっ！！

なんですと！？

なんてことだ…同じ過ちを繰り返すとは…

これでは俺は三流に成り下がるぞ…

いや、今は酔っているからな。全ては酒が悪い。

そしてその酒を飲む原因となった猿女が悪い。

よって俺は悪くない…うむ、完璧だ。

「ごちそうさま」

なんだか嬉しそうな顔をしている真名。

しかしマズいぞ。

詠春は木乃香に魔法を知らせずに育てていた。

それなのに仮契約をしたせいで木乃香の魔法使いとしての素質が目覚めてしまった。

今はまだ使い方を知らないだけだが…

やっちまったな……詠春になんて説明しようか……

「色々言いたい事があるが…まあいいや」

今、最優先事項なのは…この事を企てた愚者を探し当てに行く事だな。

「真名…ちょっと俺は用事が出来た」

「っ！ 随分といきなりだね／＼」

湯船から立ち上がると真名が顔を赤くしていた。

…………… ああ、そっいや俺何もつけてないな。

「何やらホテル内も騒がしくなってきたから木乃香を連れて早く部屋に戻っておけよ。」

あと明日にでもコピーカードを渡す」

「了解した。楽しみにしているよ」

さて、狩りの時間だな。

深夜24時。

木乃香・龍宮以外のラブラブキッス大作戦に参加した者は新田の手により全員ロビーで正座を強制させた。

首謀者である朝倉を新田が発見した時にはすでに虚ろな目をした朝倉と、ボロ雑巾のよう

な状態のオコジヨが発見された。

新田はどうしてこうなったのか訝しんだが、朝倉も例外なく連行した。

第参拾話 『ラブラブキッス大作戦』（後書き）

たいして真名のフラグ立ててないのにごめんなさい！
ついやってしまった……でも後悔はしていない……
あつ、やめ！ ごめんなさい、石を投げないで！

第参拾巻話 『修学旅行・三日目』 (前書き)

ここから少し原作展開を変化させていきます。

第參拾壹話 『修学旅行・三日目』

「まったくもー…ちよつとどうすんのよ、ネギ？
こんなにカードを作っちゃって一体どう責任取るつもりなのよ！
？」

ネギを糾弾するアスナ。

もはや魔法関係者の相談場所と化したロビーの隅であつた。

そこにはネギ・アスナ・刹那・朝倉・カモと前日までのメンバーは
そろつているが、今日

は、俺・エヴァ・真名までもいる。

「メフィスト…もう私には飽きたのか！？　やはり若い女のほうが
いいのか！？」

「メフィストさん…もはや取り返しのつかない事態になつてしまひ
ました」

エヴァは涙目になつて俺の首元を掴んでブンブン揺さぶっていた。
非は全面的に俺にあるので甘んじて受けるが…頭の中がシェイクさ
れて気持ち悪い。

まあ昨日の忠告を軽く無視してしまつたからな…

刹那は魔法秘匿の任を果たせなかつたので悔しそうな顔をしていた。

「木乃香に関しては弁解のしようが無い。俺が詠春のところに行つ
て謝ってくる。

最悪、仮契約を解くが…もはや無駄だろうがな…」

「え…このかさんとの仮契約は何かマズいんですか？」

「マズいなんて物じゃない。木乃香の内包する魔力量はナギやお前

を超えている。

今までは力が目覚めずにいたが、仮契約したせいで魔法使いとしての才が覚醒してしまった」

詠春の、魔法に関らせたくないという気持ちは理解できるが…こんな世界に生まれたから

には嫌でも関わってくる。

遅かれ早かれ木乃香は覚醒しただろう。

俺が原因になるとは思わなかったが…

「え…僕、修学旅行の前にス力でしたが仮契約しちゃったんですけど…」

「なんだと!？」

「うひいッ!」

すでに手遅れと言う訳か。

だが刹那が護衛をしていたはずだが…ああ、そうか。

麻帆良にいた時はまだ近くで護衛をしていなかったからな。

「おい、淫獣」

「淫獣!？」

カモが心外だ、という顔をしていたが構わずに話を続ける。

「金目当てに今まで好き勝手にやっていたらしいが…これ以上面倒事を起こすなら強制帰

国など言わずに消すぞ」

「わ、わかりました!」

はあ…俺が仮契約をしなくても木乃香は遅かれ早かれ目覚めていた

…か。

どうせ刹那からスカの件は詠春に報告されているだろうが、「英雄^{ナギ}の息子だから

しょうがない」だと思って諦めているんだろう。

じじいはバレてもいいと思っているからな。

知っているんだろうが放置…それで不始末がバレたら「子供だからしょうがない」…か。

いい御身分だよな…この野菜風情は。

「おい、メフィスト…何を殺気だっているんだ？」

「ん？ああ、スマン。ちょっと思うところがあつてな…」

いかん…殺気が漏れていたか。

少し感情的になりすぎたな。

「とりあえず木乃香にはまだコピーカードは渡さない。

詠春との相談次第で渡すことになるだろうな」

「はい、それをお願いします」

豪華賞品らしいから機能しないようなカードを作って渡したけどな。なんだか目を輝かせていたが…

「はい、真名」

「ありがとう、メフィストさん」

真名には約束通りカードを渡しておいた。

「アデアット」

「ほお…中々強そうなアーティファクトだな」

何やらエヴァが感心するほどのものらしい。

真名の手には無骨な銃が2丁握られている。

呼び出された物の名は「デッドリー・ストーム」

日本語訳すれば…致命的な暴風雨ってところか。

「なんともまた危なっかしいアーティファクトだな」

「説明書を読むと、契約した主の魔力を使って弾丸を撃つ。

弾丸は実弾でも併用可能。

そして銃を連結させれば狙撃銃に変形可能…か。

なかなか優秀じゃないか」

魔力を使った弾丸か。

改造次第では障壁突破や転移効果みたいなのも付与できそうだ。

「なんか龍宮さんのアーティファクトって強そう…

あれに比べて私のは…」

「ア、アスナさん…効果はすごいじゃないですか」

アスナのアーティファクト「ハマノツルギ」は本来の姿じゃなく、ハリセンの形だ。

おそらくまだ剣の形をするまでもないと精霊が判断したんだろうが、真偽はわからないな。

「野菜、親書はいつ渡しにいくんだ？」

「えっと、今日に行こうかと…」

「ふむ…なら丁度いい。木乃香・刹那を連れて俺も本山に行くとしてよう」

「ホントですか!？」

「だが頼るなよ。敵が来たらお前たちで対応しろ。

俺は基本的に木乃香の護衛だ」

「ちょ、ちよつと待って下さい！」

これなら、親書を届ける・木乃香の護衛を兼ねて本山に匿える・詠春に謝れると一石三鳥なんだが…

刹那はなにが不満なんだ？

「なんだ、刹那？ 何が不満なんだ？」

「そのですね…今、本山にお嬢様を連れていくとなると危険ではないでしょうか…」

「アホだな。木乃香を攫おうとしたのはほんの一部の過激派だ。

それに詠春がみすみす木乃香が攫われるような事態にすると思っ
か？」

「それは…そうですね…」

「話は終わりだ。お前らは移動する準備をしに行け」

ネギ・アスナ・朝倉は俺と刹那が何を言っているのか全然わからな
いようだったが、それ
そのの部屋に帰っていった。

「それで？ 私たちを残したのは何故だい？」

「エヴァはわかってるだろう？」

「大体はな」

「状況次第では俺も動く。敵の中に厄介な奴がいてな。

面倒な事態に陥ったら真名にはクラスの何人かを連れて現場に来
て欲しい」

「それは仕事かい？」

「じじいに請求しておけ。俺名義で構わん」

「了解だ。楓・古あたりでいいかな？」

「古菲か…実力は知らないが真名が勧めるなら大丈夫だろ」

楓の実力も知らないが、俺の殺気に耐え切るレベルだからな。
アーウェルンクスと殺り合わなければ問題ない。

「エヴァ。京都巡りだがもう少し後にしてもいいか？」

「仕方があるまい。昼ぐらいには終わるだろ？」

「そうだな…そのくらいには終わると思う」

「それなら私は茶々丸とこの嵐山近辺を散策している。

用事が終わり次第、京都巡りといこうじゃないか」

「オツケー、それで行こう。真名はどうする？」

「私はこれからUSJに行く事になっていてね。残念だが無理だな」
「それじゃしょうがないな」

さて、そろそろガキ共と合流するか。

………

………

…

ホテルを出て少し歩くと、ネギとアスナが何やら焦っているようだった。

どうやら無関係の宮崎・綾瀬・早乙女を撒いてくるつもりだったが失敗したらしい。

「宮崎・綾瀬・早乙女。俺の目を見る」

「「「はい？」」」

「お前らは、シネマ村に行きたくなる」

「私たちは」「シネマ村に」「行きたいです」

よし、暗示は成功したな。

3人は虚ろな目になりシネマ村に向けて歩いていった。

「では出発するか」

「ちよつとー！ あの3人になにしたのよ！」

「軽い暗示を掛けたただけだ。半日もすれば解ける」

木乃香が不思議そうな顔をしているが無視だ。

さつさと本山に向かおう。

「そついやメフィストはん、朝起きたらこの指輪が付いてたんやけど…」

ひよつとしてメフィストはんがつけてくれたん？」

「よくわかったな、その通りだ」

「って事はひよつとしてこれってエンゲージリングってことなん！？」

「「「ぶっ！」「」「」

なにやら木乃香が興奮気味に聞いてくるが、そんな訳はない。だから刹那…そんなに睨んでくるなよ。

「そついう訳じゃないんだが…出来るだけ外さないようにしてくれよ」

「了解や」 えへへ…まさか小さい頃の約束がこんなカタチになるとはな」

「なんだ…まだ覚えていたのか」

「当然や」 昔、お父様はいつもメフィストはんに近いと思ったらダメっていつも言ってくるんや。

おかげで逆に忘れなかつたんやで」

詠春よ…いくら一人娘だからと言って、洗脳まがいをするのはどうかと思うぞ。

それと対応を間違えてしまったな。

さて、目的地の関西呪術協会本山の入り口らしき？毘古社とかかれた鳥居があるが。

「ここで合ってるのか、刹那」

「はい。ここを抜ければ本山に行けます」

「懐かしいなあ。実家に帰るのは久しぶりや」

「俺も詠春に会うのは久しぶりだな」

電車の中でネギとアスナには木乃香の父、近衛詠春が協会の長をしている事は話してある。

なのでもう驚かない。

それよりもこれからの襲撃に緊張しているようだった。

「ここからが正念場ね…」

「そうですね。十分気を付けていきましょう」

入り口なんて、どう考えても罠が張られている場所に向かってバカ正直に向かっていくネギとアスナ。

それを慌てて追うように刹那と木乃香が着いていくが…どんどん進

んでいく。

「まあまだガキだし仕方が無いんだが…呪いでも仕掛けられていたらどうすんだ？」

罨に掛かると知りつつも行くしかないか…

………

………

…

はい、予想通り罨にハマったぜ。

「うわーん！ 出してー！」

「えーん！ 待って、アスナさーん！」

ネギとアスナは正面に向かって走りだした。

俺はメンドくさいから歩いている。

刹那は本当は追っていきたいけど俺の傍で歩いていた。

刹那の解説で、「無限方処の咒法」とかいうやつらしい。

一定の空間の中しか移動できない結果だ。

端に着くと反対側に転移。しかもそれを認識できないような術だった。

「やはり陰陽術のこういった呪いの類は優秀か。

だがこれは俺のアーティファクトでも再現可能…やはり本物の呪いを見てみたいな」

「感心しないで打開策を考えてください！」

む、刹那に怒られてしまった。

ちなみに木乃香は夢の中へ旅立ってもらい俺が背負っている。
まだ「魔法」を認識させる訳にはいかないからな。

「お前らが解決しろ。結界なんてのは起点を潰せば解除できるもんだ」

「それはそうなんですが…」

本当にどうしようもない事態に陥ったらなんとかしてやるが…まだその時ではないな。

「あつ！ ネギ先生、アスナさん！」

「休憩所ね…（今まで見なかったのに今頃発見するとは…）」

敵も甘いね。

こっちは楽できるから良いんだけどな。

「とにかく現状の把握と打開策を考えましょう」

「そもそも何であいつら妨害してくんのよ！」

刹那の意見にまったく関係ないことを叫ぶアスナ。

「陰陽師は西洋魔術師を嫌っているからだ。

元々日本には陰陽師しかいなかったのに、ある日西洋魔術師がやってきて瞬く間に勢力

を広げていく。

自分たちの領土に赤の他人が土足で入り、そこででかい顔をすれば誰だっていい顔をし

ないだろう」

「そう言われればそうね…」

「最近は特に酷いらしいぞ。なんせ西洋魔術師は個で比べるなら陰陽師のほうが上だと教

育しているらしい」

これは麻帆良に侵入してきた陰陽師に聞いたんだがな。比べること自体がお門違いだというのに…

「ともかくまずは戦力の分析から始めようや」

「そうですね。敵が来たら私と神楽坂さんが前衛、ネギ先生が後衛で迎撃しましょう」

刹那とカモが戦力の確認をしていたらアスナが問いかける。

「ん？ メフィスト先生は？」

「俺は手を出さないと云っただろう。だがお前らの手に負えなくなったら手を貸そう。

だが基本は木乃香の護衛だ」

「ケチね」

「うるさい、バカレツド」

俺が何から何まで面倒を見たら成長しないだろうが。

「でも私と桜咲さんが前衛ねー。私って役に立つの？」

「それは実際にやってみた方がいいかな」

なにやら解説役のカモが契約執行した効果を説明をする。

アスナは近くにある岩を魔力供給されている前と後とで蹴り付けたが、その威力の違いに

驚いていた。

「もしかして私って強い？」

「調子に乗るなよ。お前たちなど本物が来れば10秒と持たん」

「うっ…で、でも私たちエヴァちゃんに引き分けたんだよ！」

「アスナさん…それは違います」

「ネギ？」

流石はネギ。

見習いとはいえ真祖のバケモノ性を勘違いしないか。

「エヴァンジェリンさんはあの時本気じゃありませんでした。

それに最後の最後しか真祖の力を使いませんでしたし」

「よく解っているじゃないか、少年」

「ひょっとしてホントにエヴァちゃん、手加減していたの？」

「当たり前だろう。見習い相手に本気を出すまでもない」

その気になれば魔力の糸で縛りあげて、糸を解こうとする隙に必殺の一撃を喰らわせば勝ちだからな。

自分の力を過信しないのは評価してやろう。

「俺達の話はどうでもいい。今は打開策でも考えろ」

「そうですね。ひとまず結界の起点を探しに行きましょう」

「起点って何？」

「結界の源とでも言いましょうか。そこを壊せば結界は壊れます」

「わかりました。どこから探しに行きましょうか？」

「一番怪しいのは鳥居ですね。何箇所か壊しましょう」

「それじゃ行きましょー！」

ネギ・アスナは左の鳥居へ、刹那は右の鳥居に向かっていった。だが、

「ちょっと待ってもらおか」

「フフ、刹那センパイ。少しウチと遊びましょ」

ネギ達の方にはバカでかい蜘蛛に乗ったガ克蘭姿のガキが。刹那の方には一昨日見かけた神鳴流剣士が立ち塞がっていた。

「色々探られて結界から抜けだされるのは困るんや。

そんな訳でいっちょ俺と闘おうや、西洋魔術師」

「アスナさん！」

「うん！ やるわよ、ネギ！」

こっちはやる気を出してきたな。

「ウフフ、ほな始めましょーセンパイ」

「くつ、メフィストさん。お嬢様を頼みます」

「よそ見をしている暇があるなら眼前の敵に集中しろ」

なんかバトルマニアどころか戦闘狂とでも言うような雰囲気的神鳴流剣士。

なんか俺が今まで出会った神鳴流剣士は、生真面目か戦闘狂しかないな……

ひょっとして技術しか教えないで心構えは教えていないのか？

とりあえず変な事を考えるのはやめよう。

「アデアット、永界の指環。対物・対魔結界発動」

流れ弾が当たらないように俺と木乃香を結界で覆っておくか。

「ガキ共、思う存分に眼前敵を排除しろ」

「はい！」「」

どこまでやれるか見せてもらおう。

第参拾巻話 『修学旅行・三日目』（後書き）

宮崎・綾瀬・早乙女にはついてこれないようにしました。
いても邪魔なだけですしね…

そっぴや書き忘れていましたが、原作通りのどかはネギと仮契約済みです。

第参拾貳話 『お前らじゃレベル不足だ』

「契約執行90秒間！ ネギの従者『神楽坂明日菜』！」

「ガキだからって容赦しないわよー！」

一方ではアスナがいつも通りバカ力を發揮して蜘蛛を倒し、

「ざーんがーんけーん」

「喰らうか！ 神鳴流奥義、斬空閃！」

一方では神鳴流剣士の奥義合戦が勃発していた。

「ふむ… 犬の方は拳士といったところか… 少年にはまだ荷が重そう
だ。

刹那の方は問題なさそうだな。 気掛かりの木乃香は俺が守ってい
るから眼前の敵に集中

できている…… むっ」

なにやら衝撃が来たので後ろを見ると、猿と熊のぬいぐるみが結界
に殴りかかってきてい
た。

「くっ… なんなんや！？ なぜウチの猿鬼と熊鬼の攻撃が通らんの
や！？」

通る訳ないだろ… そんな弱そうな外見の式神に抜かれたら自信を失
うわ。

「無駄無駄。 お前程度の實力者が俺に太刀打ちできる訳ないだろ」

「くう！ アンタ、何もんや！？」

「何者つて…今は麻帆良の教師だぜ」

「魔法先生ってヤツなんか！？ でもそれにしてもこの結界は堅過ぎるえ！」

ネギ達は、犬が殴りネギが障壁でガード、アスナは軽くあしらわれる。

刹那達はまだ斬り合っていた。

「少年が勝てないのは仕方が無いが、刹那が勝てないのは意外だな。あの戦闘狂はわりとレベルが高いのかな」

あつ、ネギが障壁抜かれてやんの。

刹那も気付くがフオローに回れないようだ。

「ハハハ！ やっぱ西洋魔術師はアカンな、弱々や！」

見習い相手に勝ち誇ってもらっては困るな。

そんなガキに勝ったところで西洋魔術師全てが弱いと片付けられるのは心外だ。

まあ弱い奴らもゴロゴロいるけどな。

「仕方が無い…助けるか」

「障壁突破『石の槍』」

手助けしようとしたら、いつからいたのかアーウェルンクスが障壁突破の槍を背後から

発動させていた。

油断していたので腹に石の槍が突き刺さっちゃったよ。だが、何も問題はない。

「メフィストさん（先生）！」

アスナと刹那の心配する声が聞こえるが後回しだ。
不用意に近づいてきた白髪野郎の手首を掴む。

「こんなものが効かないのは解ってるよな、アーウェルンクス」

俺は王の財宝を30個ほど展開し刃先を白髪野郎に向ける。
ゲート・オフ・バビロン

「やはり…メフィスト・マクダウェル——幻獣使いか…」

「理解出来たならば死ね」

一斉に宝具が降り注ぎ、アーウェルンクスを串刺しにするが…分身
だったらしく水に還つた。

俺はそのまま木乃香を担ぎ、腹の傷を再生させて犬の傍に移動し、

「吹っ飛べ、オラア！」

「なに！？　ぐはあっ！」

「あゝれゝ」

戦闘狂のほうに蹴り飛ばしてぶつけた。

アーウェルンクスまで来るとは思わなかったが、来てしまったなら
状況は変わる。

「遊びの時間は終わりだ。刹那、木乃香を持っている」

「は、はい！」

「ちょ！　メフィスト先生！？　お腹は大丈夫なの！？」

「問題ない。目覚めろ、乖離剣^{エア}」

結界とはいえこの空間に存在している限りこの剣で切り裂けないものなどない。

「アスナはネギを担いで脱出の準備をしろ。刹那、結界が壊れたら本山まで走りぬけろよ」

「わかりました」

「わ、わかったわ!」

(ネギの成長フラグ? なにそれ、おいしいの? By 朧識)

アスナがネギとネギの杖を持った事を確認すると真名解放をする。

「させるか!」

「いざ仰げ……天地乖離^{エヌマ・エリシユ}す開闢の星を!」

途中にさっきの式神が攻撃してきたが、何の事はない。
一緒に攻撃に巻き込めばいいだけだ。

乖離^{エア}剣から出る紅い竜巻はそのまま猿と熊を切り裂き、勢いは変わらないまま結界の境界線まで行き、結界の壁を粉々にブチ壊した。

「……………(ぽか〜ん)……………」

この行動を見ていた一同全てが時が止まったように呆けていた。

ネギは思った。前に果たし状を受け取ってもらえなくてよかったと。アスナは思った。エヴァちゃんは本気を出していないというのは本

当だと。

刹那は思った。やはりメフィストさんを敵に回すのだけは避けよう
と。

天ヶ崎千草は思った。こんなことを仕出かすコイツはホンマ何モン
やと。

犬上小太郎は思った。このにいちちゃんには絶対に勝てんと。

月詠は思った。この人と斬り合ったら面白そうだが死ぬだろうと。

「おい、刹那。何を呆けている…」

「あつ、はい！ 神楽坂さん、行きますよ！」

「う、うん！」

「さ、させへんで！」

刹那達が逃げるのを見た猿女は再度式神を召喚し、犬はなにやら影
を犬の形にして飛ばし、

戦闘狂は斬撃を飛ばしていた。

だが、そんなものは全て徒労に終わる。

「捕縛結界発動。範囲範囲500m四方。対象猿女、犬、戦闘狂」

捕縛結界は俺が中に閉じ込めたいと思ったものしか入れない結界。

展開範囲にいて、なおかつ対象ではないものは結界外に弾き飛ばさ
れることとなる。

「くくく…残念だったな。俺に目を付けられたのが貴様らの運のツ
キだ」

「へっ、どうせさっきのはマグレや。パートナーのおらん西洋魔術
師なんぞ敵じゃないで！」

犬が瞬動を使い一気に距離を縮めて殴りかかってくる。

単調な動きだったので全て交わしてみせると何やらイラだっているようだった。

「この程度か？」

「なめんなや！ この程度じゃないで！」

犬はそう吠えると膨大な気を拳に乗せて殴りかかってきた。

「調子に乗るな。犬では化け物^{おれ}は倒せない」
「がはあっ！」

最大の一撃らしかったが、俺も同じように気だけを込めた拳を振るう。

犬風情とは比べ物にならない威力だったらしく、攻撃を喰らった犬は4回転ほどして吹っ飛んでいった。

「お命かくごー」
「おっと」

今度は戦闘狂か。

真上から躊躇なく斬り付けるとは良い感じにとち狂っているな。

「出る、エクスカリバー」
「わー、すごいですねー」

クスクスと笑う女…

いいね、命の危機を感じつつも楽しそうな顔をする。

「なにがそんなに楽しそうなんだ？」

おもわず口から出てしまった。

「楽しみですね。ほんとーは強い女の子しか興味はないんですけど。なぜかあなたと殺り合うのは楽しみに思えてくるんや」

「くくくっ…… かなりの戦闘狂だな。愉快だ… 心躍る相手ではないのが残念だな」

「……どうゆー意味です？」

「そのまんまの意味だ。お前ではレベルが足りない」

「かもしれませんが… でも楽しみましょうよ」

神鳴流か。久しぶりに使ってみるのもいいな。それに実戦では使った事が無いし。

「行くぜ… 神鳴流奥義、見よう見まね斬魔剣 弐の太刀！」

「ほえ！？」

「まだ行くぜ… オラオラオラオラオラオラオラオラ！」

一撃にとどまらず、数多の斬撃を飛ばしていく。

女は斬魔剣 弐の太刀を教えてもらっていないらしく、必死に逃げ回っていた。

宗家の人間じゃないから詠春は俺にも教えてくれなかったが、そこは気合いでカバーだ。

「ウチを忘れてもらっては困るで！」

「忘れていたんじゃない。考える価値もなかったただけだ」

猿と熊の式神が襲ってくるが、問題なくエクスカリバーで斬る。

「西洋魔術師に……ここまでやられたのは初めて… やで。

にいちちゃん…名前は…なんて言うんや？」

おや…犬がボロボロの状態で帰ってきた。
吹っ飛んだまま気絶でもしていれば楽になれたのにな。

「メフィスト・マクダウエル。俺の事を知りたければ調べてみる。
簡単にいろんなことが解るハズだ」

「メフィスト…マクダウエル…：覚えたで。
だが…まだや。まだ終わらへんで！」

何やら犬の外見が変わってくる。

「小太郎！ ムチャしはるんでないで！」

「千草ねえちゃんには悪いが…ここで引き下がる訳にはいかんのだ
！」

髪が伸び、爪は鋭くなり、筋肉が膨張している。
身に纏っている気の密度も上がっていた。

「それは獣化つてやつか？」

「そうや…こっからが本番やで！」

今までの速度とは比べ物にならないほどのスピードで接近してくる
犬。

そのまま振り下ろした拳は難なく避けるが、その一撃で少し地面が
えぐれた。

「クハハハハハ！ やれば出来るじゃないか！」

「くう！ 獣化してもダメなんか！」

「行け！ 猿鬼、熊鬼！」

「私も行きますえー」

威力が上がった拳で諦めずに殴りかかってくる犬。
だが我流のような大雑把な体術では当たらんよ。

猿女の式神は相変わらず弱い。

威力が紙の様だから障壁で全てスルー。

狂女はさっきの斬魔剣 忒の太刀を見て真似れたらしく、俺の障壁を抜くような斬撃を飛ばしてきた。

「ククククツ！ いいぞ…これぞ闘争の空気ってヤツだ」

「なんで西洋魔術師のくせに体術がこなせるんや!？」

「そもそも『西洋魔術師』なんて枠組で俺を測るな。

それに上級者になれば体術なんぞ誰でも学んでいるわ」

中々面白くなってきたが…このあと予定が入っているしな。
そろそろ終わらせよう。

俺はしつこく殴りかかってくる犬の腕を掴み、

「何やて!？」

斬り付けてきた狂女の腕も掴んで、

「あゝれ」

猿女の式神を蹴り飛ばし、防ぐ手段を除去した後で掴んでいた二人を投げつけた。

「ちょ！ げふっ！」

三人はぶつかった後、もんどりうつて転がっていった。

「サタム・サタディア・サタナキア！」

光と闇の精霊97柱 集い混ざりて敵を消せ！

『魔法の射手 連弾・殲滅の97矢』！！」

「魔法の射手 殲滅の矢」

これは咸卦法をヒントに作り出したオリジナルの呪文だ。

相反する力を混ぜ合わせると強大な力を生みだす。

実験程度の気持ちでやってみたら予想外の威力が出て驚いたぜ。

この矢に当たるとその箇所は粒子分解されて芥子粒になるという寸法さ。

まあ当てて消し飛ばしてもいいんだが……じじいや詠春がうるさいかな。

あいつらの周りに降らせるだけにしよう。

「ひ、ひいいいいいいいい！」

「……アカン。こんなヤバイ状況になるとはおもわなかったわ」

「メガネメガネ……」

慌てたり、諦めたり、メガネ探したりと……見ている分には面白いぞ。だがまあ、これも仕事なんだな。諦める。

「『眠りの霧』」

「しまっ！」

「「はれ？ ぐう」」

殲滅の矢に気を取られているうちに背後に回って「眠りの霧」を發動する。

生け捕りなんて柄にもない事をしたのは初めてかもな。

………

………

…

眠らせて幻想成る魔法の紐で縛りあげる。
グレイブニル

そのあと結界を解除して本山に向かうと詠春が出迎えてくれた。

「ほら、詠春。土産だ」

「ありがとうございます、メフィスト。これで事態も収拾に向かっていくでしょう」

実行犯のこいつらを詠春に手渡す。

「そこはお前の腕の見せ所だ。……それにしてもタカミチ同様、お前も老けてきたな」

「ハハハ、人間ですからね。そこはしょうが無いですよ」

「そうだな…おっと話がそれた。詠春、少し忠告だ」

「なんででしょうか？」

「アーウェルンクス…過去の亡霊が動き出している」

「ッ！………本当ですか？」

流石は詠春。

昔のような空気に一瞬で戻ったな。

だが…今の状態じゃ太刀打ちできないだろう。
実戦から約20年も離れていては流石のサムライマスターでも錆付く。

「嘘を言っでどうする？ 俺の事を知っていたし確定だろう。
本体ではなさそうだけだな」

「ありがとうございます。十分に警戒しておきましょう」

「まあ精々きばれ。マズい事態になったら連絡しろよ」

「了解しました。それとメフィスト…刹那君から少し気になる報告を受けたんですが…」

空気が張り詰める。

詠春の手には…何故か夕風が握りしめられていた。

「あ、ああ…実はな、昨日、木乃香と仮契約をしてしまったんだ…
スマン！」

「フッフ…娘に手を出すゴミは……斬る！！」

またこの展開かよ！

まあこの件は俺が全面的に悪いし…最初の一撃ぐらいは受けてやるか。

「……と思ったんですが、ちょうどいいでしょう」

「ん？ どうした？ 斬らないのか？」

「ええ、斬りませんよ。」

もう木乃香に魔法について隠し通すのは難しいでしょう。

なにも知らないままいて、今回の騒動に巻き込まれてしまいました。
た。

このままでは良いように使われるのが目に見えます。

メフィスト、木乃香に魔法を使えるように教えてやってはくれま

せんか？」

ふむ… まあ俺も原因の一端を担っているしな。
自分の身を守る程度には鍛えてやってもいいか。

「いいのか？ 魔法に携わって欲しくなかったんだろ？」

「もう我儘を貫く余裕はなくなりました」

「……了解だ。お前の娘は俺が育て上げてやるよ」

「お願いしますね」

「任せておけ。それじゃ俺はこの後用事があるから失礼するぞ」

「ええ、危なくなったら連絡しますよ」

「わかった… それじゃまたな」

さて、時間はまだ昼前。これなら何箇所か回れそうだ。
転移魔法を使えばかなりの個所を見て回れるだろう。
早くエヴァと合流しないとな。

第参拾弐話 『お前らじゃレベル不足だ』（後書き）

なんか修学旅行のところがダラダラと長く続いてしまう…
書きたい箇所を書いているうちにどんどん長くなってしまう…申し
訳ないです。

第参拾参話 『動き出す老害』（前書き）

ここから才り敵出現です。

第参拾参話 『動き出す老害』

【刹那 side】

関西呪術協会の総本山に私たちが着いた後、少ししたらメフィストさんが主犯格を捕まえてきたそうです。

ネギ先生も気になったらしく、長の元へ一緒に聞きにきました。

「長！ 主犯格を捕まえたというのは本当ですか？」

「刹那君…ネギ君も一緒ですか。ええ、メフィストが捕まえてきてくれました」

こうも簡単に捕まえるとは…やはりすごいですね。

「刹那君…木乃香のことなんですが…」

「は、はい…（お嬢様に魔法がバレたことの叱咤だろう…）」

「魔法のことを話すことにしたので刹那君からそれとなく教えてやってはくれませんか？」

……………は？

「え、えつと……よろしいのですか？」

「ええ、構いません。メフィストとも話したんですが、もはや隠し通していてもこうした

事件に巻き込まれてしまうでしょう。

ですので自衛の意味もこめていろいろと話す時期が来た…そういうわけです」

「長がよろしいのでしたら私はいいんですが…」

正直なところ、私が影ながら護衛をしていたということでお嬢様が悲しんだら…そう思う

とあまり話したくはありませんが長が決めたことです。

「あの、長さん」

「どうしました、ネギ君？」

「メフィストさんとは親しい仲なんですか？ 名前を呼び捨てだったので…」

私も気になりますね。

長は紅き翼に所属していたので、悪の代名詞であるメフィストさんとはむしろ険悪な関係になりそうですが…。

「そうですね…あまり詳しいことは言えませんが、メフィストとは昔から…20年前からの付き合いですよ」

「は…あのメフィストさんと友達とは…すごいね、カモくん」

「吸血鬼の旦那は謎だらけだぜ」

「ついでに言うとなネギ君。」

私もですがメフィストは君のお父さん、ナギ・スプリングフィールドと腐れ縁ですよ。

私たちと一時期、行動を共にしたこともありますしね」

これを聞いて私も驚きました。

昔、少しだけ聞いた英雄、ナギ・スプリングフィールドとも交友関係だったとは…メフィ

ストさんには驚かされてばかりです。

「もう僕、メフィストさんがわからなくなってきました…」
「俺たちもさつぱりだ…確か旦那って賞金首だったよな…」
「？メフィストさんは賞金首だったのですか？」

悪名高さでいえばエヴァンジェリンさんをはるかに超えると聞いています。

やはり賞金首だったんですか。

「おうよ。確か旦那の賞金は9000万ドルだったぜ。今は解消されているが」

「9000万ですか！？」

「そういえばそうですね…懐かしい」

「長…どうしてメフィストさんの賞金が無くなっているんですか？」

「ふむ…メフィストに聞いてみるといいでしょう。正直に答えてくれるとは思えませんかね。」

断りもなく話すのは憚れることをやった…とだけ答えておきましよう」

あまり触れてはいけない話題のようですね。

そういえばメフィストさんは本山に來ないでなにをしてらっしゃるんでしょうか…

side out

【メフィストside】

「これが金閣寺…夜来て酒の肴にするのも風情がありそうだ」

「おつ、それいいな。明日にでも詠春をさそつて来よう」

エヴァと合流したあとは予定通り神社巡りだ。

最初に竜安寺に行き、今は金閣寺にいる。

この後は北野天満宮↓銀閣寺↓南禅寺↓二条城と回っていく予定だ。

「それにしてもよく予定通りに事を運べたな」

「ん？ ああ、面倒なヤツが本体で来なかったからな。

他のヤツらは対して強くなかったただけだ」

「……殺さなかったらどうな？」

「さすがの俺も自重する。今面倒ごとを起こす訳にいかないからな」

まあ殺す価値もなかったんだけどな。

それにいろいろとマズい事態になるし…

「それにしても何故…アーウェルンクスだったか？ そいつを放置したのは何故だ？」

「ああ、それはな。今回の黒幕とでも言うのか…猿女の雇い主をいぶり出すためだ」

あんなレベルの低い術者が過激派のトップに置かれるとは思えん。もし置かれているならば……そんな事があるとは思えないが、置かれているのなら関西呪術協会のレベルはその程度なんだろう。

「くつくつく…お前の思惑に乘せられて危険な目に会うあいっ等にはいい迷惑だろうよ」

「まあアーウェルンクスが焚き付けないと動くとは思えんがな」

この修学旅行の最中に他の術者が現れなかったのは…おそらく保身だろう。

西洋魔術師は嫌悪するが、長である詠春に睨まれたくない…こんなところだな。

まったく…人間とは何年たっても自分勝手に我侭な生き物だ。

「動くならよし、沈黙を守るのなら猿女の口を割ればよし。

どちらにせよこの事件の主犯は逃げ道など存在しない」

「哀れだな…私たちがいなければ問題なかったのだろうが、運が悪かったな」

「くくくつ、それも最悪にだな」

そういやアーウェルンクスは何故この地にいるんだろうか？

リヨウメンスクナノカミの力を制御…またはその力の回収あたりか？
まあ霊格は格別だからな。

力を奪われたとなると色々と問題が生じるんだろうが…そうなるても俺にとっちゃどうでもいいか。

今回依頼されたのは木乃香の護衛及び力の制御を教えるだしな。

情報が漏洩されたとなってもそれは関西呪術協会並びにじじいのミスだ。

「さてさて…今回の結末はどうなることやら…」

「私たちが良いとこ取り。このような形になると思うぞ、それもあり高い確率で」

「どうだろうかね…もしかしたら少年が親玉を倒すかもしれんぞ」

まあそんなことは100%ありえんがな。

「ハッ、自分でもありえないと思っているのにくだらないうことを言うな」

「くくくつ、それはすまん。

とりあえずマズい事態になったら詠春と刹那に連絡するように言
つてあるし、それまで

は観光を楽しもうじゃないか」

「うむ、そうしよう」

side out

【フェイトside】

——時は親書を渡す前に遡る——

「まさかあの『幻獣使い』がいるとはね…」

少し離れたところで天ヶ崎さん達を見ていたが「幻獣使い」がいる
のを確認した。

分身体で攻撃したがその行為は無駄に終わってしまった。

あの吸血鬼はどんなに攻撃しても決して倒れ伏さない…その理不尽
な力はあるの「千の呪文

の男」をはるかに上回っている。

「このままではあの場にいる全員が奴に捕まってしまうだろう。

だが救出は成功するのか……………ッ！」

次の瞬間、奴がいる場所から膨大な魔力の発動を感じ取る。

その魔力は、ドーム状になり高速で広がっていき僕のいる場所まで
迫ってきた。

とっさに回避行動をとるが間に合わず…

「やれやれ…相変わらず理不尽な強さだよ…」

ここまでだと諦めたが…そのドーム状の魔力が僕にぶつかってもダメージはこない。

だが僕をこの場から消えるようにと、その魔力は僕をドームの外へと押しのけていった。

「これは一体…『幻獣使い』のやることは予想できないから困るね」
中に入ろうとしてみたが拒絶される…おそらく結界の一種だろう。
色々な呪文をぶつけゲートでの侵入も試してみたが、どれも無駄に終わった。

「これじゃ天ヶ崎さん達の救出は無理だ…奴の張る結界など、とても壊せるとは思えないよ」

だがどうする……

天ヶ崎さんが捕まるとなると、リョウメンスクナノカミの復活は叶わない。

20年の歳月が経っているとはいえ協会の本山にはあの近衛詠春がいるし、なにより「幻獣

使い」もいる。

僕の思惑通りにことを運ぶには相当困難になるだろうね。

「仕方がない…あの老人たちに動いてもらおうか」

……
……

…

ここは本山から離れたある神社の中。
名前は忘れたが、一般公開されてなく関西呪術協会が保有する神社だ。

本来の使用用途は駐屯所などであるが、今この場所は廃止されており外見はオンボロ神社である。

だが中は修復されており、今では10人前後の老人がその場にいた。

「こんにちは、近藤 辰己さん」

近藤 辰己。

彼は関西呪術協会のナンバー2である。

表向きは長である近衛詠春を補佐しているが…思想は陰陽師至上主義であった。

近衛詠春は近衛近右衛門の傀儡に化していると思っている近藤は今の状況は受け入れられなかったんだろう。

そこに未来の長候補で才能もある近衛木乃香を関東に送ったことで堪忍袋の緒が切れた…

といったところだろうね。

この場にいる老人たちはみな、大なり小なり同じ考えである。

この神社はかなり前から西洋魔術師を受け入れられない術者が集まって今後の動きを話し合う場所と化していた。

「お前は天ヶ崎の… 用件はなんだ？」

「単刀直入に言います……天ヶ崎さん、部下である犬神小太郎、月詠の3名が捕らえられました」

確認はしていないがその必要はないだろう。

奴がそう簡単に眼前の敵を見逃すなどありえない。

僕の報告に何人かの老人はざわめき始める。

役立たずとか、我等はどうなるとか……自分勝手な声が聞こえてきた。

「静まれエツ！」

近藤が喝をいれる。

するとピタリとざわめきはおさまった。

「今話し合うのは責任の擦り付けることではない、どうやって状況を覆すかだ！」

それに我等にはもはや西洋魔術師に勝つしか逃げ場はないのだぞ！」

言いたいことはわかるけど……少々、時代遅れだね。

もはや人口数から言って陰陽師と魔法使いとでは差が激すぎる。

日本にいる魔法使いを排除したところで魔法世界からどんどん魔法使いが送られてくるだろう。

現実を見ていない老人など……害悪でしかない。

そんな老人たちが集まるからこのような事態が起きたんだろうね。

まあ僕にとっては都合がいいんだけど。

「ひとつ提案があります……」

「ほお……聞こうではないか」

「まず僕が――」

side out

【三人称 side】

関西呪術協会本山の空気は緩みに緩んでいた。

ネギたちがきて親書を渡し、メフィストが主犯を捕まえたことでの事件はもう終わり。

そのように捉えている者が大半をしめていた。

中にはまだ警戒するものがいたが、徐々に周りの空気に流されるように一人……また一人と

警戒心を無くしていく。

そんな中で詠春は、メフィストに言われていたアーウェルンクスのことを考えていた。

「アーウェルンクス――過去の亡霊か……でももう私は太刀打ちできないでしょうね」

警戒はしているが、足止めできれば良いと……そしてメフィストに連絡できれば上々だと思っていた。

だがその一瞬が命取りとなってしまう。

「『石の息吹』」

「ッ！ しまつ！」

いつから入り込んでいたのか…フェイトが一瞬の隙を突いて石化の呪文を唱える。

詠春は抵抗するも、^{レジスト}ゆっくりだが徐々に体が石化していった。

「またお前に会うとはな…アーウェルックス」

「あなたは衰えたね、近衛詠春。昔は触れれば切れるほどの鋭さを持っていたと

いうのに…20年という歳月は人間が錆付くには十分な期間と言
う訳だ」

「お前の目的はなんだ？」

「敵のあなたにそう簡単に言うわけないだろう？ それでは僕はま
だ仕事があるので失礼
するよ」

詠春は自分の不甲斐無さを嘆くが、今は自分のプライドよりも事態
の対応のほうが優先と
思い直しメフィストに連絡をいれる。

「メフィスト、聞こえますか？」

「どうした？ アーウェルックスが動いたか？」

「ええ、不甲斐無いのですがやられました。申し訳ない」

「くくくつ、やはり衰えたな。お前の状態は？」

「何も言い返せませんね。私は石化の呪文を食らって右足から侵食
中です」

「了解した」

これでメフィストは動くだろう…あとは…

念話がきれたあと、まだ石化するまでは時間がある。
そう思い、この屋敷にいるネギ君の刹那君に忠告するために歩いて
いった——自分の足が壊れないように注意しながら。

次の瞬間、ズガアアンツ！ という轟音と共に屋敷が震えた。

——時は少し戻る——

ネギたちが親書を届ける任務を終えた後、壮大な宴会が開かれてお
り、ネギたちは戸惑い
ながらもその場の空気を楽しんでいた。

そして夜。

汗と疲れを流すために刹那はアスナと一緒に風呂に入っていた。

「あーいい気持ち」

「汗と一緒に疲れも流してくださいね」

本当は木乃香もつれてこようかとアスナは言ったが、刹那はまだそ
こまで仲良くなること

に対して踏ん切りがつかなかった。

「それにしても今日は色々あって疲れたわねー」

「そうですね…ですが主犯も捕まったことですし、明日には修学旅行を楽しめるでしょう」

この二人も例外なく警戒心が薄れていた。

そのまま本山の立派な風呂を楽しんで疲れを流している。

少したった後、刹那はアスナに木乃香をこのあと風呂場につれてきてもらおうと思い、

「あの…神楽坂さん…」

「ん？ 何？ というか明日菜でいいよ。長いでしょ？私の苗字つて」

「では明日菜さんと…私のことも刹那でお願いします」

「オッケー、刹那さん」

話す前に、アスナと仲良くなるイベントが発生して話がそれた。

「あの、明日菜さん…色々話しておきたい事があるので、この後お嬢様をここに連れてきて欲しいんです」

「わかったわ。てか私も着いてきちゃっていいの？」

「大丈夫です。明日菜さんにも聞いて欲しいので」

この後もう少し風呂を楽しんだ後、刹那とアスナは風呂から上がった。

…
…
…

風呂から上がった後、刹那は木乃香にはどのくらいまで話しているのか聞くために詠春を探していた。

同じころ、ネギもようやく宴会が終わって一息ついたので詠春に自分の父親の話を聞きたくて詠春を探していた。

同じ人物を探している二人がばったり会うのは必然であった。

「あつ、刹那さん」

「ネギ先生。先生も長に用ですか」

「はい、もう少し父さんの話を聞きたくて…でも見つからないんですよ」

「ではこれからいつも長がいる部屋に行くので一緒に行きましょう」

だが部屋を訪れても詠春はいなかった。

近くの部屋を探しても見つからず、どうしようかと迷っていたら、

ズガアアンツ！ という轟音が響てきて屋敷が震えていた。

「せ、刹那さん！ 今のは一体…」

ネギが驚きの声を上げるが、刹那は聞こえていなかった。

いや、耳には入ってきたがそれよりも優先して考えることが今発生していたのである。

「まさか……本山の結界が破られた！？」

刹那は結界で浄化されている本山の空気が徐々に薄れていくのを肌で感じ取る。

「それってまずいんですか？」

「アニキ…結界つてものは大抵は破られたらマズい物だぜ！」

「はい！とても不味い事態です！ 早急に長と対策を考えないといけません！」

一体誰が？

二人とも同じ考えが頭の中を埋め尽くす。

そこに下半身が石に変わりつつある詠春が現れた。

「ネギ君、刹那君……ここにいましたか」

「長！？」

「長さん！？ その足はどうしたんですか！？」

現れた詠春の姿に驚いた二人は動揺する。

「一瞬の隙を突かれてこのザマです。まったく…情けない」

「長……」

「ネギ君、刹那君。白髪少年には気をつけなさい、格が違う相手です」

「わかりました…」

「二人とも、木乃香をお願い…します」

話している間も石化の進行速度は止まらずに上半身まで届いていた。そんな詠春の様子に、ネギたちは何も言えなくなる。そんな時、

「こらこら詠春よ。そんなに死亡フラグを立てるもんじゃない」

「情けないな、近衛詠春。そんなザマじゃ紅き翼なんて名乗れんぞ」

詠春の影から不敵な笑みを浮かべた吸血鬼たちがいた。

フェイト・アーウェルンクスは詠春を石化させたあと、天ヶ崎 千草を開放するために屋敷

内を探し回っていた…途中に見かけた術者は例外なく石化させながら。

大体、罪人は地下牢とかにいるものだが…ここも例外じゃなく、予想通り地下牢に繋がれている天ヶ崎を発見する。

「助けに来ました、天ヶ崎さん」

「お前は新入り！？ どうやってここまできたんや！？

まあええ、はよウチをここから出してくれやへんか？」

「わかりました」

言われたとおりに天ヶ崎を開放するフェイト。

額に陰陽術を発動できないようにする札が貼られていたが、問題なくはがすことができた。

「外で近藤さんたちが待っています。

僕はまだやることがあるので天ヶ崎さんは犬神と月詠さんの救出をお願いします」

「なんやて！？ あのじいさんたちが動いたんか！？

やるやないか、新入り！ あと木乃香お嬢様はどうするんや？」

「それも僕が…ではよろしくお願いします」

そう言い残し、その場からすぐに離れていくフェイト。

天ヶ崎はフェイトの不明確な力量に首を傾げながらも、強力な味方ができたと樂觀的に考
えるだけであつた。

そのあと、自分が捕らえられていた近くの牢にいる小太郎と月詠を
発見し、本山から抜け
出そうと行動を開始した。

………

………

…

フェイトは今、本山を覆う結界の楔の近くにいる。

ここを壊せば結界が壊れるが、全壊させるとこの場に溜まっている
魔力が暴発し本山は半
壊する事態になるだろう。

だが、この地で人を殺すわけにはいかなので楔を多少壊す程度に
まで力加減を調整しな
ければならなかった。

「ヴィシユ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト

おお 地の底に眠る死者の宮殿よ 我らの下に姿を現せ

『冥府の石柱』！！」

特大の石柱を一つだけ作り出しぶつけて楔に亀裂を入れる。
ぶつかるど轟音が響いて、この地を覆っていた結界も消滅した。

「これで僕のやるべきことはあと一つだけだね」

そうフェイトは呟き、この場所からゲートを使って移動した。

第参拾参話 『動き出す老害』（後書き）

不思議に思ってたんですね。

過激派のトップが天ヶ崎に勤まるはずもなく、天ヶ崎のチームだけで構成されているはずもないんですよ。

です。ので簡単な黒幕さんを登場させました。

まあしょせん噛ませ犬なので…

第参拾肆話 『同情するぜ…負けしか未来がない事にな』

〔ホテル嵐山〕

「さて、詠春からゴミが動き出したと連絡が来たんだが…」

「まさかもう動き出すとはな。」

勝算があるのか、タダの馬鹿なのか…」

「おそらく前者だ。奴らはリョウメンスクナノカミという力を持っている。」

それを召喚すれば東に勝てると思っているんだろう」

18年前に俺が封印した事は覚えていないんだろうけどな。

初めからゴールが負けしかないレースに立たされるとは…同情するぞ。

「それで？ 私たちはどう動く？」

「とりあえず真名に援護要請して、その後は本山に行こう」

「わかった。それでは少し準備をしてくる。茶々丸」

「はい、マスター」

さて、俺も真名に連絡するか。

「聞こえるか、真名」

「聞こえているよ、メフィストさん。今朝言っていた件かい？」

「そうだ、話が早くて助かる」

「私たちは何処へ向かえばいい？」

「関西呪術協会本山の場所はわかるか？」

「大丈夫だ」

「よし。最優先事項は木乃香の安全の確保。敵勢力の排除はその次

だ”

“あとは臨機応変につてわけだね”

“プロだからこのぐらいで問題あるまい”

“了解した。では戦場でね”

これでこちらの戦力は過剰戦力とまで膨れ上がった。

あとは詠春と合流して浮き彫りになった猿女の雇い主を捕らえれば終了だな。

「メフィスト、こちらの準備は整ったぞ」

「それじゃあ、哀れな子羊を狩りに行くか……………それと迷い込んだ亡霊もな」

詠春の影に転移すると、目の前に下半身が石化し上半身も石化しかけている詠春がいた。

そして詠春の目の前にいるネギと刹那に、

「二人とも、木乃香をお願い…します」

などと遺言めいた事を述べていた。

「こらこら詠春よ。そんなに死亡フラグを立てるもんじゃない」

「情けないな、近衛詠春。そんなザマじゃ紅き翼なんて名乗れんぞ」

おもわず情けない詠春に対して辛口のコメントをしてしまった。

「メフィスト……忠告されていたのにこのザマです。
後はよろしく…お願いしま…す……」

そう言い残し完全に石化してしまう詠春。

ネギと刹那は目の前で詠春が石化したことに動揺している。

「刹那、少年。呆けている暇はないぞ。

お前たちは木乃香の安全を確認してこい」

「わ、わかりました！」

「メフィストさんは何をするんですか？」

「俺はちよつとコイツに用があるからな」

俺は石となった詠春を指さす。

「くつくつく、ぼーや。

早く行かないと近衛木乃香の身に何かあったらどうするんだ？」

「ッ！ 行きましよう、刹那さん！」

「ハイ、ネギ先生！」

軽く煽って行動するように促したエヴァ。

無垢な少年少女は慌てて駆け出していった。

「さてと、外野もいなくなった事だし治療をするか。

この者を癒せ、ケルキオン医称なる双蛇の杖」

ケルキオン医称なる双蛇の杖で石化を解除していく。
すると徐々に詠春の石化が治っていった。

「すごいですね、メフィストさんの治癒魔法は…」

「厳密には違うんだが…まあいいか。茶々丸、アレを常識で測ろうとするな。」

「アレは世界最大級のバグなんだよ……」

「バグ、ですか……」

「そうだ…思えば600年前から容赦ないバグ性を誇っていたな…」

「流石です、メフィストさん」

なにやら後ろでエヴァと茶々丸が話している。

まあ問題ないだろうよ。

今は詠春の治療をしないと。

「そろそろ大丈夫かね」

「ん…んん…私为一体…」

どうやら問題ないみたいだな。

「気が付いたか、詠春？」

「メフィスト…なるほど、私の治療をしてくれたのですか」

「どこか問題ある個所はないか？」

「ええ、大丈夫です。ありがとうございました」

「気にするな」

石化の治療をしたのは初めてだったが、成功してよかった。

「さて、詠春。俺達は今から敵の排除に向かう。

お前は今の屋敷にいる術者の治療の手配を頼む」

「わかりました。大丈夫だとは思いますがお気をつけて」

「ハッ！俺を誰だと思っている？」

「愚問でしたね。それでは…」

それじゃこつちも仕事をしに行きますか。
まったく…長い夜になりそうだ。

………

………

…

【三人称 side】

結界が破壊された時、アスナと木乃香は風呂場にいた。

刹那に呼び出されていたのに、この場に刹那がいないことに訝しむ
が何か用事があるんだ
ろうと思ひ直す。

二人は魔力を感じ取ることが出来ないので結界が破壊された事に気
付かなかった。

そんな二人にフェイトが木乃香を攫う為に背後から近づく。

「なーなーアスナー。せつちゃんが話があるって言うたんやろ?」

「そうなんだけどね…刹那さんどうしたんだろ?…」

二人は気付かないで暢気に話している。

一般人の域を出ない二人に気付けというのは無理難題であった。

「お嬢様は貰っていくよ」

「ひゃあ! アスナッ!」

「ッ! アデアット!」

フェイトは式神を召喚して木乃香を抱き込む。
そしてそのまま式神を外に向かわせた。

アスナは状況がよくわからなかったが、敵なんだと認識しアーティファクトを出して式神を叩こうとする。

だがフェイトに防がれてしまった。

「この！ 木乃香を返しなさいよ！」

「君にも眠ってもらうよ、『石の吐息』」

「あつ！ え、キャアアツ！」

フェイトは「石の吐息」を使ってアスナを石化させようとしたが、魔法無効化能力によって無効化され服だけ石化するという事態になった。

（なぜ僕の石化が効かない…）

「やあん！ 何よコレー！」

何故効かないのか不審に思うフェイト。
何かしら耐性を持っているのかと思って別の呪文を唱える。

「ヴァーリ ヴァンダナ 『水妖陣』」

「げっ！？ お湯が！」

日本に来て学んだ陰陽術を発動させるフェイト。
すると湯船にあるお湯が手の形を取って無数に伸びてきた。
そしてアスナを掴むと、

「なっ、あははははははは！ きやはははははははっ！」

くすぐり始めた。

（あれ？ こんな呪文だったか？）

アスナはくすぐられて笑い転げている。

なにやら文句を言っているが、フェイトは考え事をしているので反応しなかった。

「僕の石化呪文を抵抗…いや、無効化したよね？」

「アーティファクトだけの力じゃない…どうやったの？」

「へ？ な、何？ 知らないわよ、そんなの！」

「そう…じゃあ死ぬまで笑っててもらうね」

「ギャー！ 待って待ってッ！」

アスナの制止の声を聞かずくすぐりを再開するフェイト。

時々どうやったのか聞くが知らないようなので、呪文をそのままにしてその場から離れた。

………

………

…

フェイトが屋敷から出ると、本山の結界が健在だったときにあった境界線のすぐそばに近

藤たち10名が立っていた。

そしてその10人の後ろには20人ほどの人だけがあった。

アスナはフェイトが使った「水妖陣」の効力が切れるまでくすぐられ続ける。

効力が切れるとそのままアスナは風呂場に放置されていた。

そこに木乃香を探しに来たネギと刹那がやってくるが、

「「ア、アスナさん!?」」

裸の状態のアスナを見て慌てて駆け寄る刹那。

「大丈夫ですか、明日菜さん!? 何があつたんです!?」

「う、うう…刹那さん…わ、私…も、ダメ…」

「ハッ! ま、まさかアスナさん…」

何を思ったのか顔を青くする刹那。

「どうしたんですか!? アスナさん、何されたんですか!?」

「え…えっちなコト…とか?」

「ええっ!」

「されてない!」

刹那の的外れな発言につっこむアスナ。
わりと余裕そうである。

そこへメフィストとエヴァと茶々丸がやってきた。

「その前に服を着ろ、アスナ。その格好は色々とマズい」

「くつくくくつ、無様な神楽坂明日菜。ほら、武士の情けだ」

エヴァは昼間アスナが着ていた服を投げてよこす。
文句を言いたそうだったが、何も言わずに服を着ていく。

「服を着たら外に行くぞ。何やら騒がしくなってきた」

「あの、メフィスト先生…このかが攫われちゃったんですけど…」
「わかっている。とりあえず外だ」

………

……

…

屋敷の外に出ると、そこには何百体という鬼の列が出来ていた。
もはや百鬼夜行の数を超えている鬼たちは全員こちらに向かってこようとしている。

「ふん…これが協会の膿という訳か…」

「おそらく900体以上は存在するかと…詳しい数まではわかりません」

茶々丸が鬼の反応数を教えてくれる。

だが、今この瞬間にも鬼の召喚が続けられている。

おそらく1000体ぐらいは膨れ上がりそうだとメフィストは思っていた。

「な、なんなのよコレー！」

「関西呪術協会はなかなか愉快な膿を内包しているようだな…」

「これからキレイに消し飛ばすけどな」

アスナがあまりの数に叫ぶが、メフィストとエヴァはどうでもいいといった風に相手をしていなかった。

「メフィストさん…私たちはどうすれば？」

「ん？ ああ、そうだったな。お前たちはこれから木乃香の奪還をしてもらう」

「目の前の鬼はどうすんのよ！？」

「こいつらは俺達が相手をする。」

私の呼び掛けに応えよ、雷霊召喚！ 来い！『イクシオン』！
「今度はなに！？」

メフィストはイクシオンを呼び出す。

「御主人、ご用件は？」

「こいつらの足になってやってくれ。」

それと道中に転がっているかもしれない小石の除去だ
「御意」

ネギたちは状況に追いつけていないようだった。

メフィストはため息を一つだけはくと説明する。

「こいつの名はイクシオン。俺の召喚獣だ。」

少年は杖で飛べるが刹那とアスナは徒歩だろう？ 刹那とアスナはこいつに乗って木乃

香の下に迎え

「わかりました！」

「えっと…よろしくお願いします？」

「こちらこそ…振り落とされぬよう気をつける」

「わ、わかったわ…」

刹那とアスナがイクシオンの背に乗つくと、そのまま走りだした。ネギは慌てて二人の後を杖に乗って追いかける。入れ替わるように詠春がメフィストの下に來た。

「刹那君たちは行つてしまいましたか」

「俺達はこのまま敵の殲滅を行うが…お前は どうする？」

「ハッ！ 衰えた剣士など引っこんでいても構わんぞ！

なんせ私も呪いから解放されているからな！」

「ふう…あなたたちを前に力不足は否めませんが…これも仕事でね。一人だけ後ろでゆっくりしている訳にはいきませんよ」

殺る気満々の吸血鬼たちに気押される詠春だが、解決されるのを待てる人物ではなかった。

詠春と話していると突撃命令が出たらしく、前方にいる鬼たちがこちらに向かって押し寄せてくる。

「それじゃあハデに暴れるとしようか！

前衛は俺と詠春で後衛にエヴァ。茶々丸はそのエヴァの護衛と後方支援で！」

「それが妥当でしょう。エヴァンジェリン、私を魔法に巻き込まないでくださいね」

「くくくつ、腑抜けた貴様には良い眠気覚ましだろうよ」

「ホラ、來たぜ。王の財宝展開、射出」
ゲート・オブ・バビロン

20体ぐらいに並んで鬼たちがつつこんでくる。

その後ろの奴らも殲滅するためにメフィストは宝具を100個ほど取りだして降らせた。

「出る、ティルヴィング！」

メフィストの攻撃をはじめとして、全員が戦闘態勢を整え始めた。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック！」

来れ氷霊 闇の精！――

「神鳴流奥義、雷鳴剣！」

「必裂災臨！全絶つ破滅を誘う魔剣！」
ティルヴィング

――『闇の吹雪』――！！」

それぞれの技を繰り出して駆逐していく猛者たち。
その威力は瞬く間に鬼の数を減らしていった。

………

……

…

「サタム・サタディア・サタナキア！」

契約に従い我に従え 炎の霸王！ 来れ 浄化の炎 燃え盛る大
剣！

ほとばしれよ ソドムを焼きし火と硫黄 罪ありし者を死の塵に！

『燃える天空』――！！

「リク・ラク ラ・ラック ライラック！」

来れ氷霊 大気に満ちよ！ 白夜の国の凍土と氷河を！

『こおる大地』――！！

10分後には敵の数は4分の1になり、鬼たちはメフィストとエヴ

アの銃弾爆撃のような魔法から必死に逃げ回っていた。

「容赦ないですね…」

「私の護衛はいららないのでは？」

詠春と茶々丸は、前衛に行くのと逆にこっちが攻撃を喰らいそうなので空中で観戦中だった。

だがそんな事はお構いなしに攻撃を続けるメフィストとエヴァ。

「フハハハハハハハハッ！」

これだけの数を揃えたのは称賛に値するがな！ いかんせん質量ともにたりんなあ！

この俺を倒したくば質・量ともにこの100倍は持つてこい！」

「アハハハハハハハハハッ！」

麻帆良に囚われて15年…退屈な日々だったがこんなにも楽しい日がやってくるとは！

もっと…もっとだ！ この程度では私の鬱憤が晴れんぞ！」

エヴァにとって、枷のない闘いというのは4月にやっていたが…あれはほぼ出来レース。

完全に本気で戦ってはいなかった。

そういう意味でこの闘いは初めて枷のない闘いであり、高揚しているのは仕方が無いことである。

「近藤！ 奴らは一体なんだ！？」

「知らん！ だが西洋魔術師には違いない…故に我等は負ける訳にはいかん！」

鬼が作り出す長蛇の列の後ろには、呼び出した術者たちが集まって良い争いをしていた。

「近藤さん！ あんな奴らがいるなんて聞いてませんよ！ どうするんですか！？」

「落ち着け！ リヨウメンスクナさえ召喚されればこちらの勝ちだ！ 儀式の準備は終わっている…あそこに木乃香お嬢様を連れていけばすぐにでも召喚可能

なのだ！」

中にはこのまま勝てるのだろうかと不安になる術者がいたが、近藤が勝てるという希望をチラつかせて抑え込んでいた。

そして、その会話をメフィスト達は聞いていたのだった。

「なあ、詠春。関西呪術協会とやらはつくづく頭の中が愉快な人物が多いらしいな」

「……………」

「まあお前も苦労してるんだろうけどな…下にいる者たちが何を考えているかは把握して

おけよ」

「……………ですね……………」

「まあイジめるのはこのへんにしといてやるよ」

詠春は黒幕が近藤だと知りショックを隠せないようだ。

「茶々丸！。鬼はあと何体いる？」

「そうですね…約100体ほどです」

「ふむ。それじゃさっさと終わらせるか」

メフィストは広域殲滅呪文でさっさと終わらせようとしたが、

「やれやれ…私たちの見せ場がなくなるじゃないか…」

「アイヤー、この鬼たち本物アルか？ 強そアルねー」

真名と古菲がやってきた。

「いまさら登場か。それじゃ残りはお前らに任せるぞ」

「しょうがないんだよ…ここまで来るのに時間が掛かってしまったからね。」

むしろ褒めてくれと言うほどの速度で来たんだよ」

「それにしてもメフィスト先生、すごく強いアルね。」

今度、勝負してほしいアル」

「メンドい」

「即答アルか……」

「それじゃ俺は黒幕を捕まえに行ってくるわ。あとよろしく」

メフィストはそのまま近藤たちのもとへ向かっていった。

「それじゃ試し撃ちと行こうか…アデアット、デットリーストーム」

「行くアルね！」

………

………

…

「こんにちは、時代遅れのじじい共」

メフィストは、近藤の考えがもはや理解できなかった。
そしてその近藤の考えに共感したであろう、周りにいる術者も理解できなかった。

「サタム・サタディア・サタナキア

小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ 時を奪う毒の吐息を
『石の息吹』」

まああとは詠春とじじいの問題だとメフィストは考え直し、生け捕るために石化の呪文を唱える。

呪符で抵抗しようとする術者もいたが、この場にいる者は例外なく石化した。

「とりあえずこちらはこれで問題ないだろう」

「メフィスト、こっちの鬼も片付いたぞ」

「エヴァか。それじゃあ少年たちのほうに向かうか」

メフィストは詠春に一言言う為にさっきいた場所まで戻っていく。

「詠春。此度の件、おそらくお前が木乃香を麻帆良にやったせいだろう。」

全ての人間を信用しろとは言わないが、側近には一言相談するべきだったな。

お前にとっては娘の問題だが、陰陽師にとっては次の長候補…それも筆頭候補になる者

を魔法使いが蔓延る東に送ったのはマズかった。

お前は今は関西呪術協会の長なんだよ…俺が言えた立場じゃないが自分の下にいる者が

何を考えるかをよく考えておけよ」

言いたい事は言ったといわんばかりにそのままそこから離れるメフ
イスト。

残された詠春はこれからどうやって組織を運営していいところか悩みだ
した。

第参拾肆話 『同情するぜ…負けしか未来がない事にな』 (後書き)

小説風に地の文を三人称でやるのがとてもやりやすい…
でも今更変える訳にもいかないしなあ…

後悔先に立たずという言葉を感じました。

第参拾伍話 『大鬼神？ ただのザコだ』（前書き）

前話で学んだ三人称が続きます…

ホント楽だ…

第参拾伍話 『大鬼神? ただのザコだ』

【三人称 side】

メフィストたちが本山で鬼と戦っている（一方的に駆逐している）時、ネギは杖に乗って

刹那たちよりも先行していた。

刹那たちはイクシオンに乗って移動をしているが、空中を移動して二人を落とすわけにも

いかなので地上を移動している…なのでどうしても機動力は劣ってしまう。

イクシオンは自分に乗る少女たちを振り落とさないように注意しながら移動していたので

遅れるのは仕方のないことだった…それでも徒歩で行くよりは遥かに早いが…。

「えっと…イクシオン…さん？」

「何か？」

「ネギ先生と少し離れてしまいましたが大丈夫ですか？」

「問題ない…御主人より敵の最終目的地は教えられている」

刹那は不安そうに声をかけるが問題ないと一蹴するイクシオン。

ちなみにアスナは振り落とされないようにしがみ付いているのに精一杯で話に参加できなかった。

「むっ…前方になにかいる…」

「っ！ アスナさん！」

「な、なに!？」

「敵が見えたそうです！」

「問題ない…しっかり掴まっている」

「は、はい！」

「わかったわ！ ひゃあ！」

イクシオンは二人に注意を促すと移動速度を上げる。
そして、

「失せろ、『トールハンマー』！」

イクシオンの必殺技、「トールハンマー」でおおよそ50体ほどいた鬼を一蹴した。

雷撃を受けた鬼たちは黒焦げになり還っていく。
そのあまりの威力に刹那とアスナは呆けていた。

「これがメフィストさんの召喚獣…」

「すごい威力ね…」

「俺の力など中の上程度だ。バハムートと御主人はもっとすごいぞ」
レベルの差に着いていけなくなる刹那とアスナ。

「では先を急ぐぞ」

ちなみにだが…月詠が伏兵としていたが、イクシオンの攻撃に巻き込まれて気絶していた。

杖に乗って先行していたネギは、待ち構えていた小太郎の犬神で撃ち落とされ足止めを喰らっていた。

「昼間るときよりやるやないか、西洋魔術師！」

「くっ！」

「アニキ！ 自身への契約執行はそれ以上はやめておけ！
未完成だから体への負担がヤベエ！」

前回の戦闘と同じように、詠唱をする暇を与えないように近接攻撃をする小太郎だが、ネ

ギは強引に自身に向けて魔力供給をして均衡していた。

「そついや名前を聞いてなかったな…俺は犬上 小太郎や！」

「僕はネギ…ネギ・スプリングフィールドだ」

「ネギか…西洋魔術師のくせに根性あるやんけ。あの兄ちゃんには敵わんけどな」

（兄ちゃん…メフィストさんのことだろうか？）

メフィストに敵う魔法使いなど存在しないだろうと思っている…もしかしたら自分の父親は勝てるかもしれないとネギは思っているので無駄な反論はしなかった。

昔、ナギがフルボッコにされていたと知ったときの反応が楽しみだ。

「ねえ、小太郎くん！ どうしてあのお猿のお姉さんに協力しているの！？」

「あの人は悪い人なんだよ！」

「んなもん関係ないで！ 俺は西洋魔術師を倒せばなんでもええんや！」

千草姉ちゃんがなにを企もうと知ったことやないッ！
でもお前に会えてうれしいで！ あの兄ちゃんは規格外やったけど
ど同年ぐらいで俺とこ

こまで戦える奴は始めてや、ネギ！
「くっ！」

説得しようとしたネギだが、取り付く島もなく反論される。

「お前はこの先に進みたいんやろうけどな…進みたくば俺を倒してからいけ！」

「アニキ！ 挑発に乗せられんな！」

「通りたいんなら拳で来いッ！ 男やる！」

「ッ！ ……わかったよ」

安い挑発に乗せられてたネギは、肩に乗っているカモを下ろして戦闘態勢をとる。

（ああー！ 不味い！ アニキの子供の部分が悪い方向に出ちまった！

つつか勝算は！？ 木乃香姉さんの奪還が最優先って言われたのに無視したらどうなる

のかアニキはわかってるのかよ！？ 失敗したらどうかんがえてもメフィストの旦那に

お仕置き確定になっちまうだろ！？）

カモはメフィストに対する恐怖心で埋め尽くされるが、そんなことはお構いなくネギは小

太郎と殴り合いをしようとしていた。

（終わったー！ これじゃお仕置きは確定したー！）

そこへ、今まさに殴ろうとする二人の間に巨大な手裏剣が飛んでくる。

そして何者かが乱入してきて小太郎を吹き飛ばした。

「がつ！ …………… 残像… 分身！？ 何者や！？」

「ネギ坊主… 勇ましいのは結構だが大局を見誤るでないでござるよ」
「なっ、長瀬さん！？」

突然の乱入者に驚いて思考が停止するネギとカモ。

そんなネギの様子に気付いた楓は近づいてコッソと軽く頭を小突く。

「コレ、ネギ坊主。ここは拙者に任せて先に行くでござるよ。

ネギ坊主にはやるべきことがあるでござろう？」

「あつ！ …… 長瀬さん… ここはよろしくお願いします！」

「すまねえ、糸目の姉貴！」

「あつ、待て！ ネギ！」

先を進もうとするネギを止めるために攻撃しようとしたが、楓がクナイを投げて動きを先

制して止める。

ネギはそのまま杖に乗って行ってしまった。

「姉ちゃん… 邪魔すんなや。俺は女を殴るのは趣味とちゃうんやで

…」

「ふ… コタローと言ったか、少年。

ネギ坊主をライバルと認めるとは… なかなかいい目をしているでござるな。

だが、今は主義を捨て本気を出すのがいいでござるよ。
今はまだ拙者のほうがあのネギ坊主よりも強い」

そう言うとともに16人に分身して、

「甲賀中忍、長瀬 楓…参る」

名乗り上げた。

小太郎は楓の気迫に圧倒されかけるが、

「……上等ッ！」

自分を奮い立たせて迎え撃った。

湖の上に設けられた祭壇で天ヶ崎はリョウメンスクナノカミの召喚の儀式を着々と進めていた。

フェイトは傍で儀式が終わるのを見守っている。
そこへ杖に乗ったネギがやってきた。

「ちっ、またあのガキか…」

「あなたは儀式を続けて」

フェイトは自分の式神を呼び出して迎撃に向かわせるが、逆に返り

討ちにあってしまっ。

そして魔法で水煙を作り出して視界を悪くして接近し殴ってきた。

「わあああああああああ！」

バチイイイン！ とフェイトの障壁で防がれてしまっが、そこで遅延魔法の設定をして

いた「戒めの風矢」を発動してフェイトを捕らえた。

「なるほど…認識を改めるよ、ネギ・スプリングフィールド。でも『幻獣使い』が傍にいらなくても大丈夫なのかい？」

ネギは魔法の使いすぎで余裕がなく、言葉を返せなかつた。

代わりにカモが罵詈雑言を浴びせる。

ネギはそのまま木乃香を探す時すでに遅し、リヨウメンスクナノカミが目の前に召喚されてしまつた。

「ど、どど、どうする、アニキ！？」

「完全に出てくる前に倒すしかないよ！ ラス・テル マ・スキル マギステル！」

来れ雷精 風の精！ 雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！

『雷の暴風』！！』

ネギが持つ最大の魔法をぶつけるが、スクナはあっさりと「雷の暴風」を弾いた。

その様子を見ていた天ヶ崎は高笑いをする。

「フフフフ…アハハハハ！ それが精一杯か！？」

まるで効かへんな！ このかお嬢様の力でこいつを完全に制御可

能な今、もう何もコワ

いモンはありまへんえ！

この力があれば東に巢食う西洋魔術師に一泡吹かせてやれますわ！

アハハハハハハハハハハハハ！」

「くそおつ…はぁ…はぁ…このかさん…」

自分の魔法が効かない状況に絶望感がネギの頭の中を支配する。

その感情を増幅するようにフェイトが「戒めの風矢」の拘束を解いて迫ってくる。

「殺しはしない…でもこうしてやって来たってことはなんらかのリスクを負う覚悟はでき

ているよね」

「そんななりの小僧が覚悟している訳ないだろう」

「ッ！」

突如、フェイトが横に飛ぶ。

するとすぐ後に雷の刃が回転してフェイトがいた場所に振って来る。そしてイクシオンと、イクシオンに乗った刹那とアスナが到着した。

「ネギ！ 大丈夫！？」

「アスナさん…すいません…このかさんを…」

「随分とまた懐かしい顔を二つも見るとはな」

「イクシオンさん？ 知り合いでもいるのですか！？」

「つと失言だ。聞き流せ」

「『石の吐息』」

「ッ！」

刹那に気を取られていた隙に無詠唱の「石の吐息」を唱えるフェイト。

満身創痍で動けないネギをイクシオンは蹴り飛ばして、刹那とアスナは急いで回避行動をとる。

思ったよりも広範囲に「石の吐息」が発動され視界が悪くなったので、フェイトはイクシオンたちがどこにいったのかすぐに掴めなかった。

「全員、問題ないか？」

「大丈夫です」

「ネギがヤバそうなんですけど…」

「僕なら大丈夫です」

「なら役割分担だ、俺があのでカブツをやる。倒せはしないが時間稼ぎは出来るだろう。」

あとはあの白髪と戦う役、木乃香嬢を取り返す役だ」

イクシオンが提案すると、刹那はなにやら悩んだが切り出してくる。

「……お嬢様は私が助け出します。私なら……あそこにいきますから……」

「でもあの高さよ！ 刹那さん、どうやって!？」

アスナはリョウメンスクナノカミの肩にいる木乃香を見て叫ぶ。

「ネギ先生、明日菜さん……私、二人にも……このかお嬢様にも秘密にしておいたコトがあり

ます。この姿を見られたらもう……お別れしなくてはなりません……」

「え……」

「でも、今なら……あなた達になら……」

刹那はそういうと背中から真っ白の翼を出した。

あまりの状況にネギとアスナは口を空けて呆けていた…イクシオンは興味なさそうだったが。

「これが…私の正体…彼らと同じ、化け物です」

ネギたちの様子を見た刹那は焦って続きを話し出す。

「でもっ…誤解しないでください。私のお嬢様を守りたいという気持ちは本当です！

今まで秘密にしてきたのは…この醜い姿をお嬢様に知られて嫌われるのが怖かっただ

け…私！ 宮崎さんのような勇気も持てない、情けない女です

！」

「……ふうーん」

「ひゃ！」

刹那の話を聞いた後アスナは刹那の翼を弄りだす。

そして触ったり抱きついたりして堪能した後、刹那の背中を思いつき叩いた。

「なーに言ってるのよ、刹那さん。こんなの背中に生えてくるなんてカッコイイじゃん」

「え……」

「あんたさあ…このかの幼馴染でその後2年間も陰からずっと見守ってたんでしょ？

その間あいつの何を見てたのよ？

このかがその位で誰かのことを嫌いになったりすると思う？
ホントにもう…バカなんだから」

「あ、明日菜さん……」

アスナの言葉に刹那は心が軽くなっていく。

「行って、刹那さん！ 私たちが援護するから！ いいわよね、ネギ！」

「ハ、ハイ！」

「ホラ早く、刹那さん」

「……ハ、ハイ！」

刹那は飛び立つために少し屈む。

だが飛び立つ前に言わなくてはいけないことを思い出した。

「イクシオンさん…メフィストさんに伝えてください。

このちゃんを守ってくれてありがとうと」

「そういうことは自分で伝える」

「ふふ…そうですね」

言いたいことは言った。

そう思い刹那は翼を使って大空に飛び上がっていき、イクシオンはスクナの相手をするために駆けていった。

空中の刹那に気付いたフェイトは魔法で妨害しようとしたが、ネギが「魔法の射手」でフェイトの攻撃を防いだ。

「へへ、カモ君…これからどうしようか…」

「どうすっかな…こっちは手を出し尽くしちゃったぜ…」

ネギたちは早くも手詰まりの様子。

そこに念話が届いた。

“ぼーや。聞こえるか、ぼーや”

「!? この声は!?」

“フッフ… わずかだが貴様の戦い、覗かせてもらったぞ。

まだ限界ではないハズだ、ぼーや。意地を見せてみる!

あと1分半持ち堪えられたなら私たちが全てを終わらせてやる!”

「この声…これってまさか!」

「ああ、姉さん!」

突然やってきたエヴァの念話に喜びの色を隠せないアスナとカモ。

“ぼーや、さっきの戦い・作戦といい見事だった。

だがな…貴様、少し小利口にまとまり過ぎだ。今からそれじゃ、

とてもアイツには追い

つかんぞ?

たまには後先考えず突っ込んでみたらどうだ? ガキならガキら

しく後のことは大人に

任せてな!”

「! アスナさん…いきます!」

「OK!」

ネギとアスナがフェイトと戦おうとする時、メフィストとエヴァは
空中で浮いていた。

手助けしてもよかったが、刹那が頑張ろうとしていたのでネギ達に

も頑張らせようとネギに念話で奮起させる。

そして水晶でネギたちの様子を映し出していた。

「ふむ…ぼーやも神楽坂 明日菜もそれなりにがんばっているが…」
「こればかりはしょうがない。なんせいきなりラスボスに会ったようなものだからな」

“御主人”

メフィストたちが観戦しているとき、イクシオンから念話が届く。

“どうした？”

“そろそろ来てほしいのだが…こいつの相手は俺だけでは荷が重い”

“スクナと戦っているのか？”

“少年少女にやらせる役でもあるまい”

“そりゃ同感。もう少し少年たちの本気を見てから介入する”

“御意”

イクシオンのほうを見ると、雷撃を飛ばしながらスクナの周りを駆け回る。

スクナは4本ある腕を振り回して殴りかかってきたり、口から光線を吐いたりして中々ハデな戦いを繰り広げていた。

「あっちは中々ハデにやっているな。さすがは関西呪術協会の切り札か」

「それでも18年前、暴れだした時に俺がボコって封印した相手だ」

「つまらん結末だな…」

「マスター、そろそろあの場に介入するべきでは？」

茶々丸はネギたちのほうを指差しながら言う。

見るとフェイトがボコボコに二人を殴っているところだった。

「まだだな…あの程度では助ける気が起きん。せめて奴に一発入れるぐらいは欲しいな」

「才はあるからな。アスナと上手くやれば出来るんじゃないかね」

メフィストとエヴァはどのタイミングで介入するか見極めるために、ネギたちを集中してみる。

するとアスナがフェイトの障壁をハマノツルギで吹き飛ばし、そこにネギが魔力で強化した拳を顔面に叩き込んだ。

同じころに刹那が、イクシオンの対応に気をとられていた隙にすぐ傍まで近づいて木乃香の奪取に成功する。

制御を失ったスクナは予測不能の動きを見せ、イクシオンに攻撃を当てて還してしまった。

「中々やるな、スクナ。それじゃ行こうか、エヴァ」

「うむ…茶々丸、手はずどおりに頼んだぞ」

「了解しました」

………

………

…

「…身体に直接、拳を入れられたのは初めてだよ……ネギ・スプリ

ングフィールド」

「ネギッ！」

フェイトが殴りかかってきてアスナが声を上げるが、ネギの陰から出てきたエヴァの手によって攻撃を止められてしまった。

（影を使った…ゲート！？）

「ウチのぼーやが世話になったようだな、若造」

そのまま障壁の上から殴り飛ばす。

そしてフェイトが飛んでいった先にはメフィストが待ち構えており、

「ついでにコレも貰っていけ。返品はなしだな」

追撃でラカンの右ストレートを遥かに凌駕するパンチをお見舞いして数十メートルとさらに吹き飛ばす。

メフィストとエヴァはフェイトを排除したあとネギたちの傍に行く。

「エヴァンジェリンさん！ メフィストさん！」

「アデアット 永界の指環。」

「防御結界、最高硬度。展開範囲、10m」

「ひゃあッ！」

声を掛ける暇もなく、制御を失ったスクナの攻撃がやってきた。

「やれやれ…エヴァ、俺はさきに行って相手をしてくるぞ」

「わかった。ぼーや、よく見ておけよ」

メフィストはその場を後にし、空中に飛び上がる。

「私の呼び掛けに応えよ、海龍神・幻獣神召喚！ 来い！『リヴァ
イアサン、バハムート』！」

リヴァイアサンとバハムートの登場にネギとアスナは「怪獣映画？」
といった疑問が頭の中を埋め尽くしていた。

木乃香を助け出して空中を飛んでいた刹那も、あまりの迫力に顔を
引きつらせてその場を
急いで離れる。

「主、これはまた面白い状況で呼んでくれたな」

「だが面白そうだ。私の血は高ぶってきたぞ」

「そうだな…確かに面白そうだ」

「やる気になってくれてなにより…ただ殺しだけはダメらしい。

それ以外ならなにやってもいいがな」

「御意…では先行は俺がもらおう」

「ならば我が撃とうぞ」

「俺も忘れるなよ」

こうして話している間もスクナが攻撃してきているが、全てメフィ
ストの結界で阻まれて
いる。

スクナの肩にいる天ヶ崎はなにやら金切り声を上げていたが、メフ
ィストたちには届いて
いないようだ。

「それでは行かせてもらおう…『タイダルウェイブ』！」

リヴァイアサンの口から吐き出される高水圧の水がスクナに当たる。この場所にある水も吸収しているので威力はかなりのものだろう。実際にスクナは耐え切ったがかなり辛そうだった。

「ほお…さすがにこの程度では倒れんか…ではこれも喰らえッ、
メガフレア」！」

空中から高密度に圧縮された魔力弾を放つバハムート。

攻撃に気付いたスクナはあわてて腕2本を十字にして耐えようとするが…耐え切れるはずもなし…あっけなく腕は吹き飛んだ。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「おいおい。俺もいるのに余裕じゃないか。

来い、エクスカリバー」

メフィストは痛がっているスクナを気遣いもせずにエクスカリバーを構える。

「約束された
エクス

メフィストの行動に気付いたスクナは口から光線を吐くが…

勝利の剣！！
カリバー

約束された勝利の剣の威力の前ではまったくの無意味だった。

放出された光の剣はスクナの光線を飲み込み、そのままスクナの残っている2本の腕を切り落とす。

「茶々丸、やれ」

「結界弾セットアップ…ファイア」

「グオオオオオオオオ……………」

腕が全て吹き飛んだスクナは、結界弾の中から抜け出そうともがくが…その動きは弱弱しくて、とてもじゃないが結界の中から出れる力は出ていなかった。

「メフィストさんって…ここまで強かったなんて…」
「圧倒的ね…」

さっきのメフィストの戦いを見ていたネギとアスナが思ったことを口にする。

「メフィストの強さはこんなものじゃないぞ。まあ今のままでも十二分に強いが…」

　　つとまずはあのデカブツをかたさないといかんな。

　　いいか、ぼーや。このような大規模な戦いにおいて魔法使いの役目とはな、

　　究極的にはただの砲台！　つまりは火力がすべてだ」

エヴァはネギに軽い講義をしつつ、飛ぶために蝙蝠を集めてマントを作り出す。

「今からそれ相応の魔法を見せてやるからよく見ておけよ！」
「は、はいっ」

エヴァは空中にいるメフィストの元へ飛び立つ。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！」

契約に従い我に従え 氷の女王！ 来れ とこしえのやみ えい
えんのひょうが！」

「おわるせかい」の準備段階として150フィート四方を凍らせた。

「つつ、次から次へと何や、何なんや！？ あんたら何者や！？」

「くくくくつ、相手が悪かったな女… ほぼ絶対零度、150フィート四方の広範囲完全凍結

殲滅呪文だ。そのデカブツでも防ぐこと適わぬぞ」

「それにスクナはもう虫の息だしな。そろそろ引導を渡してやるか」

「そうだな。女！ よく覚えておけ！

我が名は吸血鬼エヴァンジェリン！ 『闇の福音』！」

「おつ、名乗りか… それじゃ俺も。

そして最強最悪の魔法使い、メフィスト。『災厄の邪神』だ！

冥土の土産に覚えていけ！」

乗り降りて悪役を演じる二人の様子にネギたちは置いてきぼりの様子。

「サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 炎の霸王！ 来れ 浄化の炎 燃え盛る大

剣！

ほとばしれよ ソドムを焼きし火と硫黄 罪ありし者を死の塵に！

「全ての命ある者に等しき死を 其は安らき也！

『おわるせかい』！！ フツ… 碎ける」

「そして跡形もなく消え去れ、『燃える天空』！！」

「我らもやろうか、『メガフレア』！！」

「殺してはマズいんだろ？ だが面白そうだしいいか、『タイダルウェイブ』！！」

攻撃を一身に喰らったスクナはもはや原型を留めておらず、粉々に砕け散った。

「あー面白かった。それじゃリヴァイアサンとバハムートは戻って
いてくれ」

「御意」

「わかった」

最後の掃除を終えた二人はネギたちのところに降りてきた。

「くくくつ、どうだ、ぼーや？」

私たちのこの圧倒的な力をしかとその目に焼き付けたか？」

「すごいよエヴァちゃん！ メフィスト先生も！」

「すごかったです…メフィストさん、エヴァンジェリンさん…」

「この程度じゃ全力を出せないんだがな…」

「メフィスト…お前が本気を出したらこの地が平らになってしまう
だろ…」

「……………」

「まあな。だがまあコレでこの事件は終了だ」

メフィストの事件終了の声とともに安堵の息を吐くネギとアスナ。
そこに刹那と木乃香が駆け寄ってきた。

「メフィストはーん！ すごかったなー！ まるで怪獣映画みたい
だったえ」

「メフィストさん…この度は色々ありがとうございました」

「怪獣映画…俺の召喚獣が怪獣映画程度だと…ブツブツ」

「おいメフィスト…何を落ち込んでる？」

怪獣映画といわれてしまったメフィストは少なからず心にダメージ

を負ったようだ。

「ハッ！ 木乃香の誤解は後で解くとして…

エヴァ。あの女がどうやら逃げたみたいだ。チャチャゼロで追いかけてもらってもいい

か？」

「わかった…おい、起きろチャチャゼロ」

「ゴ主人…久シブリノ登場ナノ二扱イガ雑ジャネエカ？」

「うるさい、役たたずめ。仕事が出来た」

「アイサー。把握シテイルゼ」

「そうか…それじゃ後は頼んだ」

「ジャアチョックラ狩り出シテクルゼ」

チャチャゼロを見送るとエヴァはネギたちのほうを向く。

「いいか、ぼーや。

今回のことを私が暇な時にやっている日本のテレビゲームで例えるとだな。

最初のほうの洞窟で死にかけていたら、なぜかラスボスが助けに来てくれたようなものだ」

「何ソレ…」

「次にこんなことが起こっても私たちの力は期待できんぞ。そこん所をよく肝に命じておけよ」

「は、はい……」

「むっ…さすがにキツそうだな、ぼーや。大丈夫か？」

——地の底に眠る死者の宮殿よ 我らの下に姿を現せ

『冥府の石柱』！！」

「防御結界、最高硬度。展開範囲10m！」

スクナを倒した後、少しばかり空気が弛んだ時にフェイトが「冥府の石柱」を発動する。

その数、20本。

メフィストはいち早く気付き、「永界の指環」で防御結界を張る。

「冥府の石柱」は時間差をつけて降り注いでくるが、結界の前には無力と化した。

だがフェイトにとって少しでも気を向けられたらよかったのである。

「障壁突破、『石の槍』」

ゲイト・オフ・バヒロン

「ッ！ 王の財宝展開！」

障壁を抜く魔法を唱えたフェイトだが、メフィストが宝具を盾代わりに展開して防ぐ。

「これも防がれるとは…だが、『永久石化』」

「させんぞ、若造！」

フェイトがメフィスト目掛けて「永久石化」を当てようと接近してきたが、エヴァが魔力を手に込めて周囲ごと吹き飛ばす。

攻撃を喰らったフェイトは…分身だったらしく上半身と下半身が分かれていた。

「おしかったな、アーウェルンクス」

「やれやれ…これだけやって奇襲が成功しないとはね。分が悪すぎるので僕はこれで

失礼するよ」

「ふん…分身か…」

フェイトの身体が水になり形が崩れていった。

「はあはあ…」

ゴトンと音を立ててネギが倒れる。

「お、おい！ぼーや！ 大丈夫か！？」

「あらら、石化を喰らっていたのか…」

「なんとかならないの！？ エヴァちゃん！？」

フエイトの石化魔法を喰らっていたネギの様子に慌てるエヴァ。

一緒に戦っていたアスナは知っていたが、どうすることも出来ずにいた。

「わ、私は治癒魔法は苦手なんだよ…不死だから…」

「そんな！？」

「だがメフィストなら治療できる…よな？」

「まあ未熟だがエヴァを守ろうとしたからな。」

特別サービスだ。この者を癒せ、ケルキオン医称なる双蛇の杖」

ケルキオン

医称なる双蛇の杖で治療を始めると、見る見るうちにネギの石化が治っていく。

その様子にアスナとエヴァはほっと息をついた。

ネギの治療をしていると、真名と古 菲、小太郎と楓がやって来る。

どういう結果になったのか気になっていたらしいが、刹那がコトの顛末を説明すると全員

がメフィストに畏怖の念を抱いたらしい。

「それじゃ本山に戻るとしよう。出る、ヴィマーナ」

畏怖の念なぞ腐るほど抱かれているメフィストは大して気にせずに

ヴィマーナを取り出して全員を乗せる。
そして本山に戻っていった。

メフィストとエヴァは、昼間に話していた事を実行するために詠春を連れて夜から人払いの結界を展開して金閣寺のすぐ傍で飲み会をしていた。

詠春はお礼を言ったが、メフィストも木乃香の事で後ろめたい気持ちがあり、お互い様をいうことにして飲み始める。

本山の警護は今回ネギたちと面識が出来たイクシオンにさせていた。

そして翌日の早朝。

天ヶ崎を捕らえたとチャチャゼロから連絡が入る。

そこに刹那が少し顔を暗くしてやってきた。

「猿女は捕らえたぞ。エヴァの従者がだな」

「今回は何から何まで色々とうございました、メフィストさん」

「気にするな。俺も少しミスをしてしまったからな…おあいこだ」

「刹那君…ネギ君たちはいいいのかい？」

「……会えば辛くなりますから…」

刹那の一族の掟。

それは自分の翼を見られたらそこから去るという掟。

詠春はそれを知っており、メフィストとエヴァはそうなるだろうと予想していた。

刹那はメフィストに礼を言うタイミングを失っていたのでこの時間まで残っていたのである。

「それではメフィストさん、エヴァンジェリンさん。

あとのことはよろしくお願いします」

「……おい、刹那。少し目を閉じる」

「はい？」

「早く！」

「は、はい！」

メフィストに言われて、慌てて刹那は両目を閉じる。

メフィストは気配を完全に消して刹那の目の前に立ったかと思うと、気で強化したデコピ

ンをお見舞いした。

刹那はいきなりの衝撃に対して反応できず、5回転ほどして傍にある木にぶつかって止まる。

「おい、刹那。お前のことは少しだけ詠春から聞いている。

その上でお前に言うが…ホントにお前はバカだな」

「……へ？」

いきなりバカ呼ばわりされた刹那はなぜそんなことを言われたのか理解できなかった。

「なぜ自分が追放されたところの掟を律儀に守っている？

そんな下らない掟なんか守ってないで木乃香の傍にいろ。

人間なんざ100年立てば死んでしまふ…半妖のお前がどうなるかわからんが不老という

訳でもあるまい。

そんな短い時間を棒に振って下らない掟に縛られるな」

「で、でも……私は……」

「迫害を恐れているなら俺たちを頼れ。なんせ人間に嫌われている歴にいたっては俺たちを超えるものなどいない。

お前に後ろ指を指す奴らなんか悉く消してやるよ」

「でも私は！ 私にはメフィストさんたちのように強く生きられません！

そんな言葉を掛けられたら…私は…私は…」

刹那の中ではこのまま去らなければならないという気持ちと、メフィストの言うように掟に縛られないでこのまま木乃香の護衛を続けたいという気持ちが葛藤していた。

それに自分の翼が知られてしまったことで…昔された迫害が再開されるかもしれないという

恐怖心もあった。

だがそれすらもメフィストが助けてくれるという。

この言葉で刹那は自分の中にある気持ちが抑えられなくなり、涙を流しながら叫ぶ。

「私は怖いんです！ 昔受けた迫害がまた起きると思うと！

メフィストさんたちが受けたであろう迫害には遠く及びはしないと思いますが、私には

耐え切れない出来事だったんです！

でも私は……」

「だが、ここにいたいという気持ちがあるんだろう？」

「……はい」

「ならばそれを貰えばいい。さつきも言ったが下らない事をする人間なんぞ討ち滅ぼして

やるよ。それに木乃香やアスナは人間じゃないとか気にしないと思っぞ」

「そうですね……お嬢様たちは受け入れてくれました…」

昨夜の反応を思い出した刹那は少しうれしそうに微笑む。

「なんだ、もう答えは決まっているようなものじゃないか。

あとはお前が下らない掟を忘れることと、少しの勇気を出せば完璧だ」

「は、はい！ あの…私…やっぱり、お嬢様の傍にいたいです！」

「だってよ、詠春。文句ないだろ？」

傍で黙っていた詠春はメフィストに話をふられる。

詠春はもはや答えは決まっていた。

「当然でしょう。そもそも文句があつたら木乃香に引き合わせたりしませんよ」

「長……」

「それじゃ早く木乃香のそこへ戻ってやれ。イクシオンから木乃香とアスナが刹那を探し

ていると連絡が来ているぞ」

「はい！ メフィストさん、エヴァンジェリンさん、長！ ありがとうございます！」

どこか吹っ切れた様子の刹那はそのまま本山に向かって駆け出していった。

「くつくつつ、メフィスト…教師の真似事なんてどういう風の吹き回しだ？」

「柄でもないことをしたぜ。だが刹那には昔から思うところがあったからな。」

これで半妖なんて気にせず過ごせばいいが…」

「ふふ、メフィストが面倒を見るんでしょう？」

「まあ木乃香のついでに見てやるか…やれやれ、最近は人間との繋がりが増えてきたものだ」

「そうだな…近衛詠春！ まだまだ飲むぞ！」

「ふふ、そうですね、エヴァンジェリン」

「人払いはまだまだ続けるぞ。 詠春、何か陰陽術で余興をやれ！」
「わかりました…ではこれなんか——」

メフィスト達はこのあともずっと酒を飲み続けて修学旅行の四日目を迎えた。

第参拾伍話 『大鬼神？ ただのザコだ』（後書き）

一万ワードを超えてしまったア！

でも後悔はしていない！…打つのは大変だったけど…

はやくブラインドタッチをマスターしたいなあ。

第参拾陸話 『修学旅行・最終日』（前書き）

PV200万、ユニーク20万突破！

この作品を見てくださる読者様に無上の感謝を！

第参拾陸話 『修学旅行・最終日』

修学旅行四日目。

「ホラホラ、メフィスト！ 精度が甘くなつてきているぞ！」

「本職のヤツに勝てる訳ないだろうが！」

「起きたと思ったら… どういう状況なんです？」

「詠春様、これを… 酔い覚ましです」

刹那が帰った後、少ししたら詠春が酔いつぶれた。

それでも俺達はまだ酒を飲み続けていたんだが…

「まさか現実で格ゲーの真似事をするとは思わなかった」

「くくくつ、単純の戦闘では敵わないが… これなら勝てそうだぞ」

さて、今の状況を説明しよう。

詠春が寝た後、エヴァが「なあ、メフィスト。二体分の分身を作りだしてくれないか？」

と言いだしたのが始まりだった。

当然のように作り出してエヴァの要望に応えたんだが…

何を思ったのか、人形を操る時に使う糸を出して分身体を操りだした。

そして、「メフィスト、これを使って対戦しよう」などと言ってきた。

だがまあ外見が二体とも俺だからな。

幻術魔法を掛けて俺の方をナギ、エヴァの方を若いころの詠春にしておいた。

本当はジャックにしようと思ったんだが、筋肉ダルマは不評でな。

準備がそろっていざ闘おうと思ったら、「あれ？俺、人形使いのスキルないぞ？」と

致命的な欠陥に気付いたが、エヴァは「お前はバグだから問題ない。負けたら今日一日、

私の下僕な」などと言ってきた。

そんなことを言われたら当然必死になるよな？

とりあえずぶつけ本番でやってみたらなんとか出来たが…
本職にはかなわないです…

「ホラ、メフィスト！よそ見をしている暇はないぞ！行け、近衛 詠春！」

「くっ！コラ、ナギてめえ！英雄なんだからちつとは気合い入れろや！」

セリフだけみれば熱い展開になりそうだが…実際に戦っているのは分身（ナギと詠春）だけだ。

俺とエヴァは酒を飲みつつ遊び続けていた。

「大分慣れてきたみたいじゃないか！そうでなくては面白くないぞ」

「余裕だな…それじゃこれはどうだ！？かめ。め波！」

「なあ！？」

「ハハ…なんともハイレベルな遊びですね…」

………

…
…

時刻は昼ぐらい。

茶々丸がご飯を手配してくれたおかげで腹は減らなかったが酔いがそろそろヤバイ。

そしてエヴァとの決着もつかないままだったので時間の感覚が狂ってきた。

「な、なあエヴァ…そろそろ俺の魔力がヤバそうなんだが…」

「ならば負ければいいだけの話だろう」

「くっ…まだだ、まだ終わらんよ…」

エヴァへの魔力供給＋3日間の戦闘＋今日の遊び。

いかなチートの俺と言っても魔力は無尽蔵ではない。

それに3日目の夜は相当はっちゃけてしまったからな。

「仕方が無い…そろそろ大技で決めてやるよ…」

「くっ、ならばこちらもやってやるわ！」

魔力量なんて考えないで思い付きの技を繰り出そうとしたが、

「と、父さん!？」

空気を読まない野菜小僧がやってきた。

アスナ・刹那・木乃香も揃っていた。

「父さん！ 父さんですよね!？」

「ちげえよ、ファザコン小僧」

「あいたっ！」

しつこく食い付いてくるネギの頭をとりあえず殴っておく。
殴られたネギはなぜ自分が殴られたのか解っていないようだ。

「まったく…これから決着つけようつてところに…」

「興が削がれたな。この遊びはまた今度にしよう」

「！？ 父さん！？」

分身体を消すとまたネギが慌て始めた。

「よく聞け、少年。今は俺が作り出した幻術だ」

「え？……」

「そもそもお前らはなんでここに来たんだ？」

動揺しているネギを見かねた刹那が受け答える。

「えっと…私たちは長にネギ先生のお父上の家を紹介させてもらう約束をしていたんです」

「そうなのか、詠春？」

「アハハ…酔い潰れていてすっかり忘れていました…」

ふむ…ナギの別荘ね…

見物に行くのも悪くなさそうだ。

「エヴァ、ちょっと見に行つて来たいんだがお前はどうか？」

「ここに残っていても仕方があるまい。私もついていこう」

「了解。てなわけで詠春、道案内を頼む」

「わかりました。では行きましようか」

「……です」

詠春の案内でやってきた場所には、京都の風景にはあまり合わないような外見の家が建っていた。

「10年の間に草木が茂ってしまいました。中はキレイなものですよ。」

どうぞ、ネギ君」

「わー！ここに……昔、父さんが……」

中は定期的に掃除していたのか……キレイに掃除されていた。ネギは父親の家に訪れたことになにやら感激している様子。ホント……あのバカにどんな幻想を抱いているんだか……

「それにしてもキレイな状態で保存しているな」

「当然です。私たちが掃除してましたからね」

「ガキどもが本を読みあさり始めたが……読めるのか？」

「無理だろうよ」

本のタイトルを見ただけでも日本語じゃない本ばかりだ。大抵がギリシャ語で書かれていた。

「どうですか、ネギ君？」

「ハ、ハイ！ 見たいものや調べたいものがたくさんあって…時間がもつとあれば…」

「ハハハ、またいつでも来ていいですよ」

「あの…長さん。父さんのこと、聞いてもいいですか？」

「ふむ…そうですね…。みなさん、少しこちらに集まってもらっていいですか？」

詠春は自分の親友の息子に目をかけているようだった。

ネギは遠慮しながらもネギの事を詠春から聞きたそうにしている。詠春は悩みながらも少しだけ話すようだった。

「なんだ、詠春？ 話しちまうのか？」

「少しだけですよ」

詠春はある写真を見せてくる。

「この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友達…黒い服が私です」

ん？ 写真だと？

「戦友？」

「ええ、20年前の写真です」

「わひゃー、これ父様！？ わかーい！」

「私の隣にいるのが15歳のネギ…サウザンドマスターです」

そっぴや戦時中に撮ったような…

「へー、どれどれ？ どれがネギのお父さんなの？」

「この人やて。かつこえー」

「あれ？　ここに居る髪が長い人って…」

「あー！　メフィストはんもおるやん！」

「なんで！？　メフィスト先生って悪い魔法使いじゃないの！？」

あー、説明すんのメンドくさい…

適当に流しておけばいいか。

「大人には色々あんだよ。あの時は利害が一致したから行動を共にしただけだ」

「はー…」

「ではやはり敵対関係だったんですか？」

「なんでそう思うんだ、刹那？」

「えゝ？　やはりメフィストさんは悪の代名詞ですし…」

正義の味方の代表格とは折り合いが悪かったのではないかと思いまして…」

「本国のガンコジジイどもとは険悪の仲だがナギとの仲は良好だ」

「そ、そうだったんですか…」

「まあ俺の話はどうでもいい。今はナギの話だろう？」

俺とナギ達の間を話すとアーウェルンクスのことと喋っちまいそうだからな。

少し黙っているか。

「私はかつて大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。

そして20年前に平和が訪れた時、彼は既に数々の活躍から英雄

…サウザンドマスターと

呼ばれていたのです」

詠春の説明に着いていけるのはネギと刹那。

よくわかっていないのがアスナと木乃香。

エヴァは興味がなさそうだった。

「天ヶ崎 千草の両親もその戦で命を落としています。」

彼女の西洋魔術師への――

「なあなあ、メフィストはん」

「どうした？」

「大戦ってなんなん？」

「今から20年前に魔法世界で起きた戦争だ」

「魔法世界？」

「あー…詳しい話は修学旅行が終わってからしてやるよ」

「了解や」

――彼の最後の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。

ただし公式の記録では1993年、死亡。

それ以上のことは私にも…すいません、ネギ君」

「い、いえ…そんな。ありがとうございます」

父親の手がかりを掴めなかったと聞いて意気消沈していた。

「それじゃここで少し裏話をしてやろう」

「なんですか？」

「少年の父親、ナギ・スプリングフィールドがサウザンドマスター
というのは理解したな？」

ではなぜナギがそう呼ばれるようになったかわかるか？」

ナギのことをまったく知らないアスナと木乃香は全然分からず、知
っていると言っても少

しだけなので刹那も解らなかった。

唯一知っているネギが答えるが、

「えっと…確か千の呪文を唱えられるからです」
「ブブー、はいハズレ。他に解る奴はいるか？」

ガキどもを見渡すが、全員わからないようだった。

詠春は由来を知っているし、エヴァは興味がないので口を挿まなかった。

「正解はな、アイツ自身がそう名乗り始めたからだ。

自分は10個程度の魔法を使えないのにハツタリをかますためにそう名乗った。

魔力量だけは特級品だったからな。

有象無象共が騙されるのはそんなに時間が掛からなかった」

「………」

「父さん…僕が抱いていたイメージが…」

アスナ・木乃香・刹那はどう反応していいのか分からなく、ネギは自分が抱いていたイメージが崩れ落ちていくのを感じていた。

「くつくくつ…やはりあいつは道化の類だったか」

「まあ人間にしては珍しいタイプであるのは確かだな」

「ネギ君…実はこれなんだがね…」

詠春がネギになにか渡していた。

まあ俺にとつちゃどうでもいいことだな。

………

：

宿の帰宅時間が迫ってきたためにナギの別荘を出る。
色々面白い本があったので詠春に断ってもらってきた。

「それじゃ詠春。また縁があつたら会おう」

「このかの事、よろしく願いします」

「任せておけ」

翌日、午前中に麻帆良に帰ってきた。

俺は関西呪術協会と木乃香の事をじじいと話すために、家にエヴァを置いた後学園長室に向かった。

「じじい、いるか？」

「フオフオフオ、メフィスト君か。今回の事は御苦労じゃったな」

「よく言う…詳細は聞いていると思うが木乃香が覚醒した。

その原因である俺が色々と教えることになったんだが…魔法協会の長である近衛 近右

衛門は何か文句があるか？」

「ワシは問題ないんじゃないかな。他の面々が反対するかもしれん。

じゃが、ワシがなんとかしよう。ちゃんと面倒を見てくれるかの？」

「善処しよう。だが自分からやりたくないと言ったなら放り投げるぞ」

「承知したぞい」

「ではな…そうそう、他の有象無象の魔法使いどもには言うなよ。また絡まれたらうつかり殺してしまうかもしれないからな」

それじゃ帰るか。

魔力の補給もしておかないといかんな…

だがどうすっかな。

出来れば魔力量の多い血を飲んでおきたいが…木乃香はダメだろ。刹那は魔力がないし…真名なら行けるか？

“真名。今ちよつといいか？”

“どうしたんだい、メフィストさん”

“ちよつと血を吸いたいんだが良いか？”

“高くつくよ”

“値段なんてなんでもいいや。部屋に行ってもいいか？”

“大丈夫だよ”

“それじゃ今から行くぞ”

転移開始つと。

…

…

…

「血を分けてもらいに来たぞ」

「メフィストさん！？」

部屋に移ると真名と刹那がいた。

部屋の中ではそれぞれ武器の手入れを念入りにしている。

刹那は突然来た俺に驚いていた…真名め、説明してなかったな。

「おいおい、学生のする事じゃねえな」

「それより血が欲しいんだろう？ 腕で良いかい？」

「いや…出来れば首筋が良いな。俺はそこからしか飲まないようにしているんだ」

腕からの吸血なんて絵にならないだろう？

「わかったよ、ホラ」

「ありがとな」

「うっ」

（うう…うらやましいな…って私は何を考えているんだ！？）

真名の首筋に噛み付くと、少し声が漏れたがあまり痛そうではないようだ。

そのまま血を吸っていくが…やはり子供の血は旨い。もし機会があれば木乃香の血も吸ってみたいものだ。

刹那はそばで頭を抱えているが…どうしたんだ？

「っぷは。美味だったぞ、真名」

「お粗末さま…とでも言えればいいのかな」

「おい、刹那…頭を抱えてどうしたんだ？」

「ハッ！ い、いえ！ なんでもありません！」

「そ、そうか。それで、真名？ 駄賃はどうすればいい？」

「金はいらないよ。そうだな…今度デートしてほしいね」

「なっ！」

何やら刹那が驚いているが…ホント大丈夫か？

「そんなんでいいのか？」

「ああ、むしろそれがいいね」

「そうだな…それじゃあそろそろ学園祭だったな。」

そこで一日デートをするか」

「ありがとう、メフィストさん。血に困ったらまた来てもいいよ」

（そういえば龍宮はメフィストさんの従者になったんだっただな…こ
うなったら！）

「メフィストさん」

「ん？ どうした、刹那？」

用事も済ませ帰ろうとしたら刹那が声を掛けてきた。

「え、えつとですね…メフィストさん！ 私と仮契約してください
！」

顔を赤くして叫んでくる刹那。

隣にいた真名は驚いて口を空けていた。

俺はと言うと…冷や汗を流していた…

（あれ？ この事が木乃香にバレるとマズそうだな…それとエヴァ
にも…）

「イヤ…ですか？」

「イヤじゃない…イヤじゃないぞ！」

少し涙目になってしまった刹那を慌ててフォローする。

ええい、しょうがない！

「OKだ…俺は覚悟を決めるぞ。エヴァのお仕置きは怖いが…とても怖い…」

よし、刹那。仮契約するか」

「あ、ありがとうございます！」

「それじゃ私は少し部屋から出ているよ」

「すまん、龍宮」

「ネギ先生のペットを連れてきた方が良いかい？」

「いや、魔法陣なら俺が書くからいらん」

「了解だ。それではごゆっくり」

真名が部屋から出ていった。

刹那は顔を真っ赤にしているが、決意は固い様子だ。

「それじゃ、するぞ？」

「は、はい！」

ちゅっ！

『バクティオー
仮契約』！！

光と共に刹那のカードが形成されていく。

「これで刹那は俺の従者だ。これからよろしくな」

「はい、メフィストさん／＼（これで条件は同じ…お嬢様・龍宮、負けませんよ！）」

なにやら意気込んでいるが大丈夫だろう。

「そういえばメフィストさん。なぜ龍宮の血を吸いに来たのですか

？」

「修学旅行で少しはっちゃけすぎたからな。手っ取り早く回復しておきたかったんだ」

「そうですか…それでは、その…わ、私の血も吸いますか？」

なんですと？

興味が無いと言えばウソになるが…

「いいのか？」

「構いません。そもそも私の力不足もメフィストさんの負担になっているんですから」

「ふむ…それじゃ遠慮なく…」
「っ」

ガプッと首に噛み付く。

刹那の血は魔力の代わりに気が混じっていて…こっちも美味だった。

「ごちそうさま。刹那も美味しかったぞ」

「それはよかったです」

「それじゃそろそろ俺は帰るぞ。」

ああ、そうだ。木乃香にあつたら伝言を頼む」

「なんでしよう？」

「いつでもいいからウチに来てくれって。魔法のことを色々教えてやらないといかんかな」

「わかりました、伝えておきます」

さて…エヴァにはなんて言い訳しようか…

第参拾陸話 『修学旅行・最終日』（後書き）

大学のほうでテストがあるので、その勉強のために10日ほど更新を止めます。

ちょうど修学旅行が終わってキリがいいのでね。

第参拾漆話 『木乃香 & amp・刹那、魔改造計画・始動』

修学旅行から帰ってきた翌日。

「エヴァンジェリンさん、メフィストさん！ 僕を弟子にしてください！」

ネギ坊主が我が屋を訪れてきて叫んだ。
だが俺はそれどころではなかった…

「悪いが少年…今はお前に構っている時間がないんだ…」

「メフィスト！ そっぽを向いているんじゃない！」

まだ説教は終わってないんだぞ！」

「ごめんなさい……」

「ネギ先生、アスナさん。マスターとメフィストさんは忙しいのでこちらへ。」

お茶を出しますね」

「茶々丸さん…あれって放っておいていいの？」

「問題ありません。この件は全面的にメフィストさんが悪いので…」

「あわわわ…縄に縛られて宙吊りにされてるよ、カモ君」

「やっぱりこの家の住人は恐ろしいぜ…」

好き勝手言いやがって…

ネギが言った通り、今の俺の状態はエヴァによって縄で縛られて天井から逆さの状態で吊り下げられている。

昨日、刹那と仮契約した事を言ったら直ぐにこの状態だ…

「な、なあエヴァ…そろそろ許してくれよ…」

頭に血が上りすぎて破裂しそうだ…」

「破裂したら再生すればいいだろう！　そもそもお前は他の女に甘すぎる！

400年ぐらい前のときだってなあ――

もう勘弁して下さい…

………

……

…

ネギとアスナがこの家に来て1時間。

ようやくエヴァが許してくれて――本当はあまり許していないようだが――縄を解いてくれた。

「ようやく解放された… もう1時間遅かったらマジで破裂していたぞ…」

「フン！　自業自得だ！」

「ハイハイ、ごめんな」

「あ、あの… メフィストさん」

「ん？　ああ、そういえば少年とアスナが来ていたな。何か用か？」

お仕置きされている間、離れたところに座っていたネギが傍に寄ってきた。

「エヴァンジェリンさん、メフィストさん！　僕を弟子にしてくださいー！」

「断る」
「ヤダ」

俺とエヴァは速攻で断る。
その様子にアスナは憤慨したようで叫ぶ。

「ちょ、ちょっと！　すぐ断るなんて酷いじゃない！」
「なんで俺が正義の魔法使いを目指している小僧を鍛えないといか
んのだ？」

俺は絶対に嫌だね」

「そもそも私たちは弟子など取らん。戦い方などタカミチにでも習
え」

「それを承知で今日はきました！　タカミチは海外に行ったりして
学園にいないし…」

何より京都での戦いをこの目で見て魔法使いの戦い方を学ぶなら
お二人しかいないと！」

ふむ…褒められて悪い気はしないが…
いかんせんメンドくさい。

「ほう…つまり私たちの強さに感動した…と？」
「ハイ！」

「だそうだ。どうする、メフィスト？」

なんかエヴァが乗る気みたいだ。

「…エヴァは乗る気か？」
「態度次第だな」

「わかったよ、好きにしていーぞ」

「うむ。ぼーや、本気で私たちを師事するつもりか？」

「ハイ！」

「フン…よかるう。そこまで言うならな。」

ただし、ぼーやは忘れていたようだ…私たちは悪い魔法使いだ。悪い魔法使いにモノを頼む時はそれなりの代償が必要だぞ…くく」

「ん？」

まあ当然の話だな。

アスナは話の流れが悪い方向に行っている事に気付いたようだ…エヴァは片足をネギの方に突き付けて、

「まずは足を舐める。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ」

女王様発言をした。

アスナはそんなエヴァの様子にすぐ反応する。

「アホかーッ！ ってキャアッ！」

ハリセンを取り出してエヴァを叩きに來たが、それを受け流すように投げ飛ばす。

投げられたアスナは悲鳴を上げながらすっ飛んで行った。

「いたた…何すんのよ！？」

「フン…エヴァに手を出そうとするからだ」

「そもそもエヴァちゃん！ 何、突然子供にアダルティな要求してんのよ！？」

「それなりの代償が必要だと言っただろう？」

「ネギがこんな一生懸命頼んでいるのにちよっと酷いんじゃない！？」

「お願いしただけで自分の要求が通ると思うなよ。世界はそんなに甘くはない」

まったく…やはりメンドくさい。

弟子なんてやつぱり却下しようかな。

このガキ、ウジウジしてるからイラっとしてつい殺ってしまうかもしれない…

「なあ、エヴァ。やつぱりやめない？」

「ふむ…それじゃ、ぼーや。来週の土曜日にまたここに来い。」

弟子に取るかどうかテストをしてやる」

「あ、ありがとうございます！」

「テストか。まあそれなら両方にチャンスがあるしそれでいいや」

チャンスを掴み取れたネギは嬉しそうにして帰っていく。

「なぜ俺が ガキを鍛えて やらないと いけないのかな ああ面倒だ」

「季語がありませんね」

「ぱつと頭に浮かんだだけだからな」

「なあ、メフィスト。」

そんなに乗る気じゃないならお前がテストの内容を考えてみるか？」

「それもまた一興か。OKだ、それでいい」

どんなテスト内容にするかね…

……

……

…

「メフィストはーん。来たえー」

「お邪魔します、メフィストさん、エヴァンジェリンさん」

昼飯を食べた後、木乃香と刹那がやってきた。

「さっそくか。行動が早いヤツは嫌いじゃないぞ」

「くくくつ、桜咲刹那…よく私の前に顔を出せたな…」

エヴァのヤツ…なんか黒いオーラが出ているぞ…
めっちゃ怖いんだが…

「エ、エヴァンジェリンさん？ ……えっと…聞いてちゃいました？」

「ああ、聞いたぞ」 メフィストに手を出すとはいい度胸じゃないか」

「それならば話は早いです…エヴァンジェリンさん！私は諦めませんから！」

「ほう…少しは前向きになってきたな。気に入ったぞ、刹那」

なにやらエヴァが刹那を気に入ったらしい。

生い立ちなんかは共感するところがあるからな。

「なあなあ、メフィストはん。せっちゃんとも話したんやけど…
ウチも諦めへんで！」

えっと…頑張れとでも言えればいいのか？
だが意外だ。

刹那が俺と仮契約した事を木乃香が知ったら喧嘩になるとばかり思

つていたが…

「認めたくないものだな…若さゆえの過ちというものを…」

「メフィストさん。木乃香さんに話があるのでは？」

「ん？ どうした、茶々丸？ なにか不機嫌そうな感じがするんだが…」

「い、いえ…なんでもありません」

「そうか？ ならいいんだが」

木乃香と話していると茶々丸が少しだけ不機嫌そうな顔をしていた。なんか最近、茶々丸の様子が時々おかしくなるな。

大丈夫なのかね。

「それじゃ、木乃香。昨日の修学旅行で俺とエヴァ、少年と言った者が魔法使いだという

のは理解できたか？」

「なんとなくやけどな」

「十分だ。そしてお前には魔法使いとしての素質がある。

魔力量なら少年を超える量だ。だが世の中には腐っている奴らもいてな。

お前の持つ魔力を利用しようとする者もいる。この前の猿女みたいな奴だ。

「ここまでは理解できるか？」

「うん…ウチが凄い魔力を持っていて、それを狙っている悪い人がおるんやな」

「簡単に言っとさういう事だ。

そこで詠春に頼まれたんだが…木乃香、もしお前に魔法を学ぼうという意志があるのなら、俺がある程度鍛えてやる。護身の意味も含めてな」

俺の話を聞いた木乃香は少し考えだした。
やはりいきなり言われたんじゃ戸惑う内容だしな。

「すぐに答えを出さなくても構わん。重要な分岐点になるしな」

「せやけど…」

「それとこれを渡しておこう」

俺は修学旅行で作った木乃香のパクティオーカードを渡す。

「あれ？ これって前もらったえ」

「それは俺が作った偽物でな。こっちのが本物だ。これを持ってア
デアットと言ってみろ」

「んつと、アデアット…ひゃあ！」

アーティファクトを呼び出すと、木乃香の服装が陰陽師の物となり
手には二つの扇が握ら
れていた。

アーティファクトの名は東風ノ檜扇、コチノヒオウギ 南風ノ末廣。ハエノスエヒロ

効果のほうは3分間までだが、その間に受けた傷を完全治癒する。

「これがお嬢様のアーティファクトですか…」

「効果は3分以内ならどんな怪我也完全に治療するぞ」

「そないなこと言われてもウチ使い方判らんわ…」

「魔法使いを目指すならその使い方も教えてやるよ」

「うん…とりあえず今日一日考えてみるえ」

………

………

…

「メフィスト、近衛 木乃香にはああ言ったが、近衛 詠春からの頼みだろ？」

だからてつきり無理やりにも納得させて鍛えろと思っただけだ。だが……」

「無理やりにやらせてもその先は見えている。

この前まで一般人の木乃香には忍耐力があるように見えないしな。だから自発的に魔法を習いに来るようにしたまでだ」

まあ本当に来るかどうかは五分だがな。

刹那が反対してしまうかもしれないし、木乃香自身が魔法使いを拒絶する可能性もある。

だが…魔法という物はファンタジーだから学びたいという理由で来たらどうすっかな…

「まあなるようになるだろうよ……」

「ん？ なんの事だ？」

「いや、なんでもないさ」

とりあえず魔力が全快してないし、今日はゆっくりしていよう。

翌日、学校が終わった後に木乃香が刹那を家にやってきた。

「メフィストはん、ウチに魔法を教えてください！」

「…とりあえず理由を聞いておこう」

ファンタジーだからとかだったらどうしよう…

「あのあとおじいちゃんとお父様に色々話を聞いてな、あとネギ君にも。」

マギステル・マギ
立派な魔法使いっていうのにウチの力が役に立てればええなあって思ったんよ。

おじいちゃんたちもウチならなれるっていつとつたし。

マギステル・マギ
せやからウチ、まだなれるかわからんけど立派な魔法使いを目指してみたいんや！」

マギステル・マギ
立派な魔法使いねえ…

まあまだ現実を知らない子供だしな…このへんはこれから矯正していくとしよう。

マギステル・マギ
立派な魔法使いなんぞ、メガロの都合の良い奴隷といっても差し支えない役職だからな。

「ふむ…刹那も納得しているのか？」

「ええ、メフィストさんなら安心してお嬢様をお任せできますので」「よし、わかった。じゃあ早速授業を開始するか」

どうすっかな…久しぶりのアレを使うか。

時間がない学生を鍛えるにはもってこいの代物だしな。

「とりあえず奥のほうに行くぞ、着いて来い」

………

…
…

「はあゝ魔法ってすごいんやな」

「これは…すごいですね…初めて見ました」

今、俺たちは「MEPHISTO'S RESORT」の中にいる。
レーベンスシュルト城とは別に新しく作った別荘だ。

ずっと前に作って王の財宝の中にしまっていたが…壊れていなくて
安心したぞ。

この別荘は、基本的には真っ白い空間の中に休むための家が一軒建
っているだけだが、家

の中で別荘の設定を変更することができる。

具体的に言えば、草原だとか山岳地帯だとか…大体は再現可能だ。
俺の魔力を喰らうけどな。

時間差も設定変更が可能…今は外での一時間が中での一日となっ
ている。

「それじゃ早速始めるぞ。まずは魔力を感じ取るところからだ」

「なにすればいいん？」

「目を瞑ってろ」

「はいな」

「契約執行、無期限。メフィストの従者『近衛 木乃香』」
「うひゃ！」

魔力供給を受けた木乃香が驚いていた。

知らないが気持ちいいものらしいからな…

まったく…昔の魔法使いはなにを考えていたんだか。

「木乃香、今お前を覆っているのが魔力だ。それを手に集めるように動かしてみろ」

「そないな事言われても……」

「こればかりは自分で感覚を掴むしかないからな。とりあえず1時間だ」

さて、次は刹那の相手をするかね。

「刹那、得物は持っているな？」

「？ ハイ、いつも持ち歩いていますが……」

「木乃香が頑張っている間、少し稽古をつけてやる。構えろ」

「ッ！」

俺は気絶しない程度の殺気を出して王の財宝からエクスカリバーを取り出して構える。
ゲート・オフ・バビロン

刹那はすぐに距離をとり、夕凧を構えた。

「征くぞ、刹那。精々気張れ」

………

……

…

【木乃香 side】

ウチが魔法を動かしてみるのに手こずっていると、なにやら騒がしくなってきた。

少っだけ目を開けてみたら、メフィストはんとせつちゃんが戦っていた。

「はあ、あのせつちゃんが圧倒されとる」

「当然だ。だがあれでも手加減しているぞ」

「あや、エヴァちゃんや。エヴァちゃんはあれに参加せえへんの？」

「私はお前の監視だよ、木乃香。下手打って死なれたらメフィストが困るからな」

見てくれるんか。

エヴァちゃんにコツとか聞いてみよっかな。

「エヴァちゃん、これってなんかコツとかないん？」

「くくくつ、甘えるなよ。修行に近道などない」

「そっか、せつちゃんも頑張っているしウチも頑張るえ！」

s i d e o u t

【刹那side】

「征くぞ、刹那。精々気張れ」

メフィストさんが黄金の剣を構え、殺気を発しながら斬りかかってくる。

向こうは西洋剣、こちらは野太刀。

刀身を折られないように気で強化して迎え撃つが、メフィストさんは身体強化の術を使わ

ないで剣を振るっていた。

（ツ！重いツ！ つくづく化け物ですね、メフィストさんは！）

身体強化なしでこの重さ… いったいどのくらいの長さを鍛錬したのか…

人の身では到底達成できないような時間を掛けてきたのだろう。

何合か斬り合ったあとメフィストさんが動きを止める。

そして私に問いかけて来た。

「刹那、お前に… いや、お前たちのような魔法に関わっているガキどもに足りないものは

なんだと思う？」

「足りないもの… ですか？」

私たちに足りないもの…

技術？ 経験？

「経験、でしょうか？」

「まあそれも含まれているな。だがもつと圧倒的に足りないものが存在する。

なんだと思う？」

「わ、わかりません」

「正解はな、覚悟だ。それも人を殺す… な」

「人を殺す… 覚悟…」

戦争を経験していない私たちが実際に人を殺す事態に陥るなどあま
りないだろう。

龍宮は戦場に行っていたから経験しているかもしれないが…

「少年の父親…ナギは確かに戦争を終わらせた英雄として祭り上げられているが、同時に

戦争での敗者から怨みを買っている。

だが今ナギは行方不明…さて、行き場の無くなった怨みはどこに行くと思う？」

「そ、それは…ネギ先生かと…」

「正解だ。そして遅かれ早かれ襲ってくる敗者は怨みの感情のみで行動してくるだろう。

どうせ少年と繋がりが出来たお前たちは手助けするに決まっている。

そんなときに平和ボケした中で育てられたお前たちが敵うと思うか？」

「で、ですが…そうすぐに襲ってくるというわけでは…」

「その時点で平和ボケと言っているんだ。

それにナギの息子、ネギ・スプリングフィールドは関東魔法協会の特使として関西呪術

協会に親書を受け渡したと公式に記録として残っている。

確かにすぐにはバレないだろう…だが調べればすぐに判る事だ。

それをまだ負けたことを受け入れられない者たちの耳に入ったらどうする？」

そう言われると…確かに樂觀し出来ない状況に見えてくる。

麻帆良学園は魔法先生たちが警護しているが、その上に行く実力者が来たのなら話は別だ。

その上、高畑先生が不在時に襲撃されてしまったら…

「だから刹那、俺とスポーツ試合のようなヌルい空気じゃなく殺す気で来い。

そして俺の放つ殺気に慣れろ」

「ッ！　くうッ！」

あ、危なかった…

一瞬意識が飛びそうになった…

「こ、これでも本気ではないのですね…」

「ほう、このくらいでは気絶しないか。今の身体の状態はどうだ？」

「手足が緊張で上手く動きませんね…ですが行けます！」

「良い気迫だ。峰打ちなどではなく刀身をこちらに向けていろ、そしてどんな手を使って

も俺に一太刀入れる。

達成できたら次のステップに進むとしよう」

「ハイ！　アデアット！」

私は翼を出し、アーティファクト「七首・十六串呂」も出す。

メフィストさんは私の用意が整うまで待っていてくれた。

やはり手加減されているのだろう…今はまだ敵わないが…いつかは！

「神鳴流奥義、雷鳴剣ッ！」

「いいぞ、来いッ！」

side out

—— 30分後 ——

【メフィストside】

まあそう簡単に攻撃は喰らわんよ。

「はあ…はあ…ま、まさか…一撃も当たらないなんて…」

「当分はこの課題だな。俺が木乃香のほうに構っている間は召喚獣と戦闘だ。」

当然、死と隣り合わせの闘いになるがな」

「は、はい……」

「それじゃゆつくり休んでいる。俺が戻ってきたら修行再開だ」

さて、木乃香は課題を達成できたかな？

というか出来てくれないと困るんだが…

「木乃香、課題は出来たか？」

「少しだけでも出来たえ！ 見ててな…」

すると木乃香の右手に少しだけだが魔力の密度が上がっていた。

「ふむ…ならば次は簡単な呪文だ。これを持ってる」

俺は魔力供給を切り、オモチヤのような練習用の杖を木乃香に渡す。

「これは？」

「練習用の杖だ。さっき感じ取った魔力はどんなものだったか覚えているか？」

「漠然としかやけど…覚えとるよ」

「さっきの魔力は俺のだから木乃香の魔力とは少し違うが…基本的には同じだ。」

自分のなかにある魔力を手に持っている杖に集めるようにイメー
ジし、

『プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ』と唱えてみる」

「むむむっ、『プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ』 ひゃあッ！」

ほう、魔法自体を発動させることは成功したか。
だがこれではすぐに切れてしまうな。

「驚いていないでその状態を保つようにしろ」

「え？ は、はいな！」

木乃香が微弱ながら魔力を杖に注いでいく。
するとさっきまで消えそうだった火が少しだけだが大きくなってい
った。

「その状態を10分間維持しろ。出来たら一度火を消し、もう一回
点けて20分、30分と続

ける。失敗したら最初からやり直した」

「わ、わかったえ！」

「それじゃ刹那の相手をしてくるか…我の呼び掛けに応えよ、炎霊
召喚！ 来い！『イフ

リート』！」

「ご用件はなんでしょう、マスター？」

「あそこにいる半デコの修行相手だ。揉んでやれ」

「了解しました」

こんな感じで修行をつけていくとしよう。

第参拾漆話 『木乃香&・刹那、魔改造計画・始動』 (後書き)

やばい… MGS PWがおもしろすぎる。

おもわずハマってしまいちストツクを増やせなかった…

え？テスト？ 8割とれたから大丈夫でしょうw

第参拾捌話 『弟子入りテストは波乱の幕開け!?!』 (前書き)

さて、問題の弟子入りテストです。

最初に警告しておきますが、ネギ・スプリングフィールドファンの方は絶対に閲覧しないでください。

メフィストが鬼畜です。そりゃあもう鬼畜です。果てしなく重要なので2度言いました。

それでもどうしても見たいと言う方はどうぞ…

第参拾捌話 『弟子入りテストは波乱の幕開け!?!』

「日付は知らんが水曜日・早朝」

昨日も木乃香と刹那の修行をつけ、そのあと夜間警備の仕事をエヴァと終えてきた。
そんな帰り道。

「そういえばメフィスト、ぼーやのテストの件はどうした？」

「色々候補は考えているんだがな…どれにしようか迷ってたんだ」

「だが約束の日は近づいている。焦れたぼーやが突っ掛かってきても知らんぞ」

「だな、さつさと決めることにしよう」

エヴァと一緒に家に帰る途中、世界樹のふもとを通りかかるとネギがなにやらカンフーの練習をしていた。

「ほお…中国拳法か」

「なんだ、ぼーや？ 私たちへの弟子入りは諦めてカンフーを習い始めたのか？」

「メフィストさん!? エヴァンジェリンさんも!」

どうやら気付いてなかったらしく、ネギは慌てていた。

「い、いえ！これはあの少年の戦い方の研究を…」

「よし、テスト内容を決めたぞ、少年。時間は次の土曜日の23時。場所はここ。」

内容は自分が持てる全ての手段を用いて俺に一撃でも有効打をいれることだ」

「おいおい、メフィスト……」

「え、ええええええええええええええええッ！」

「うるせえ！」

「へぶッ！」

あ、やべ…

やかましくてつい殴っちまった。

「なんだ、エヴァ？ 何か文句があるのか？」

「いくらなんでも無理難題過ぎないか？」

「なあに、徹底的に手加減してやるし、一応はクリアできる方法も用意した。」

少年が気付くかはわからんがな」

まあ気付かなかつたらそこで終了。

これまでの少年なら気付かないかもしれないがな。
今度の土曜日が楽しみになってきたぞ。

s i d e o u t

【三人称 s i d e】

「ど、どどど、どうしよう、カモくん！」

「ア、アニキ！ まずは落ち着け！」

「ネギ？ 一体どうしたの？」

「ネギ君、いったいどうしたんやろ？」

「なにかから朝から悩んでいますね」

朝、部屋で学校へ行く準備をしていたアスナは準備をしていないネギが頭を抱えて唸って

いたのに気付きどうしたのかと聞いた。

木乃香と、朝からこの部屋に訪れていた刹那もネギの様子を気になっ
っていたようだ。

「アスナさん…実はエヴァンジェリンさんたちのテスト内容なんです
が…」

「あっ、決まったんだ。それでどうしたの？」

「そ、それが…テスト内容はメフィストさんに一撃でも有効打を
入れることだそうです……」

「な、なんですってー！？」

「メフィストはんも無理難題を言いよるな」

「ネギ先生…その、頑張ってください」

内容を聞いたアスナは驚きの声を上げ、木乃香と刹那はネギに同情
した。

「ム、ムリだよー！ メフィストさんに一撃入るなんで……」

「真祖の旦那も無理難題を言ってきたもんだぜ」

ネギとカモはあまりにもムチャな内容に頭を悩ませていた。

「ネギ先生、メフィストさんは何と言っていたか解りますか？」

「はい？ えつと…『自分が持てる全ての手段を用いて俺に一撃で
も有効打をいれること

だ』だそうです」

「全ての手段ですか……もしかして、あいたツ！」

刹那がひよっとしたらと考えついた事をネギに伝えようとしたら、突如窓から矢尻が吸盤

になって矢文が飛んできて刹那の頭に当たる。

自分が気付かなかった事に驚いたが、刹那はとりあえず文を読みだす。

するとこう書かれていた。

『少年にヒントを与えたら地獄の特訓コースへ御招待♪』

刹那は読み終わった瞬間に冷や汗をダラダラと掻き始める。

なぜ解ったとか、どうやって飛ばしてきたのかなどという疑問はすでに忘却の彼方へと消えていた。

「せ、刹那さん……それにはなんて書かれていたんですか？」

刹那のタダならぬ様子に恐る恐るネギが聞いてみるが、刹那の反応はない。

すると訝しんだ木乃香が横から手紙を覗きこんで読み始めた。すぐに内容を理解するなりネギに説明する。

「ゴメンなあ、ネギ君。せっちゃんはメフィストはんの特訓が恐ろしくてリリースしとつ

たんよ」

「刹那さんがこんなになるなんて…ネギ、大丈夫なの？」

「あわわわわ……」

頼もしい刹那がこんな様子になることにネギは、メフィストと対峙

することへの恐怖心が

沸いてくる。

アスナはこのままネギにテストを受けさせていいのかと考えるが、
ネギが自分で選んだ選

択だと思い直し傍観することにした。

「だ、大丈夫だってアニキ。真祖の旦那も命まで取るようなことは
しないって……多分」

「そ、そやでネギ君。メフィストはんは厳しいけど命までは取らへ
んよ……多分」

「ちよつとツ！ ホントに大丈夫なのーッ！」

「ううっ……カモ君、僕テストを受ける前に遺書でも書いていくよ

……」

「ア、アニキ！ いくらなんでもそれは！」

「アスナさん……もし僕の身になにかあったら父さんの事を願ひし
ます……」

「ちよつ！ネギ！？ 私に頼んでも意味ないわよ！？」

ネギパーティは今日もドタバタ騒がしいのであった。

〔土曜日・23時頃〕

「さて、そろそろ時間だな」

そろそろ23時になる。

指定した場所にネギはまだ来ておらず、先にメフィストたちが到着した。

「オイ御主人、ココじゃ試合が見エネーゾ。モットイイ位置二座ラセロヤ」

「まったく、役立たずのくせに口うるさいやつだ」

「ショウガネーダロ、動ケネエ نداカラ」

「しかしいいのですか、マスター？」

ネギ先生がメフィストさんに有効打を入れる確立はおよそ約0.01%以下。

メフィストさんがどれほど手加減するかによってこの数値は変動しますが、それでも難しいでしょう。

ネギ先生が合格できなければマスターとしても不本意なのでは？
「おい、勘違いするなよ茶々丸。私は別に弟子などどっちでもいいのだ。」

それに一撃当てれば合格など破格の条件だしな」

エヴァは、ネギを弟子にした暁には正義気取りの魔法使いたちへの意趣返しと暇つぶしにしようと考えていた。

メフィストは、まあどうでもいいやとほとんどネギの修行はエヴァに任せるつもりでいる。

時々修行をつけてやろうとは考えてはいるが…

「あーヤダヤダ、真面目小僧の相手なんかしたくないぞ」

「おい、メフィスト。自分で決めた内容だろうが…」

「ちょうど23時になったがあの小僧、奇襲一つ仕掛けてこねえ…

実行していたら一発合格にしようと考えていたんだが」

「あのぼーやがそんな邪道を実行するわけないだろう。」

どうせ正面からぶつかるしか考えていないんだよ」

「はあゝ…、ホント面倒な部分はナギの遺伝子を受け継いでねえのな…」

メフィストがやる気を失いつつあるとき、ネギがクラスメートである明石・和泉・大河内・

佐々木を連れて来た。

そして魔法を知っているアスナ・木乃香・刹那、ネギに中国拳法を教えていた古菲の姿があった。

「メフィストさん！ ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました！」

「よく来た、少年。では早速はじめよう…と行きたいところだが…」

なんだ、そのギャラリーは？」

「はあ、ついてきちゃいまして…」

魔法を知らない人がいることに對して、メフィストはさらにやる気を失っていく。

おまけに予想通りネギが一人で自分と對峙する構図になっていたの
でどんどん萎

えていった。

とりあえず邪魔なギャラリーを排除しようとシュリンクス 1を取り出す。

突然出てきた葦笛にギャラリーは少しざわめくがメフィストは構うことなく発動させた。

「対象明石・和泉・大河内・佐々木。奏でろ、万眠を誘う葦笛」
「……はにや」「……」

シリリンクス

万眠を誘う葦笛を発動させると、明石・和泉・大河内・佐々木の4人はその場ですぐ

眠りに落ちる。

そのままメフィストは強制転移魔法を発動させてそれぞれを寮の部屋に送った。

「メフィストさん、何を？」

「邪魔だったから寮に送り返したただけだ。

それでは始めよう。時間は30分間以内に「え」？……なにか文句があるのか？」

「い、いえいえ！ なんでもないです！」

ネギは時間制限を以前聞いていなかったなので、合格できるまでダラダラと続けるつもりであつた。

その企みを即効で潰されたネギは動揺した表情をする。

メフィストは、そんなネギの様子にやる気を失うどころか少しだけイラツキを覚えた。

「……まあいい。テスト内容はいぜん言った通り俺に一撃入れること。」

俺は攻撃魔法・身体強化などの魔法は使わない、ハンデはこれでもいいか？」

「ハイ！」

「それでは開始ッ！」

「契約執行、180秒間！ ネギ・スプリングフィールド！」

メフィストの合図と共にネギは自身に魔力供給をして殴りかかる。それをメフィストは受け止め、カウンターをお見舞いしようとする

が、ネギはにわか仕込

みの中国拳法で受け流しつつさらに攻撃を続けた。

「ねえ、くーふえ。ネギの奴、勝てるの？」

「最初の1分で決めないと難しいアル。

メフィスト先生がどの程度の実力なのか私も正直わからないアルよ」

少し離れた位置で残っているギャラリーがメフィストとネギの戦いを見ていたが、どうも

ネギに勝ち目が薄そうだとみんなが思っていた。

メフィストはネギの大きな隙を見つけて蹴り飛ばす。

するとネギが少しグラつき体制を崩しかけていたので終わらせようと追撃するが、そこは

ネギの誘いだったらしくメフィストの腕を掴みカウンターを決めようと拳を放つ。

ギャラリーはこれで決まったと思ったが、メフィストは蹴りをネギの顎に放ってカウンタ

ーごと潰す。

蹴りを喰らったネギは、空中に舞ったあと地面に転がっていった。

「どうした、少年？ まだまだ時間は残っているぞ？」

手札は体術だけではないだろう？ 呪文を使い、待ってやろう」

「ま、まだです…ラス・テル マ・スキル マギステル！

雷の精霊37柱 集い来りて敵を射て！

『魔法の射手 連弾・雷の37矢』！！」

「ふん」

ネギは「魔法の射手」を詠唱しメフィストに向けて放つが、障壁を

抜ける威力な訳もなし。

全て防がれてしまう。

だがネギもそれは承知しており次の呪文の詠唱を開始する。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！

来れ雷精 風の精！ 雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！

『雷の暴風』！！」

さつき放った「魔法の射手」の余韻が終わる前に「雷の暴風」を追撃として放つがそれも障壁に防がれる。

だが、ネギにとって一瞬でもメフィストの意識が自分と違うところに向けばよかったのである。

エーミット

「開放！！」

「ほう…考えたじゃないか」

「雷の暴風」の余波で周りの砂や木の葉が舞っており、少しだけ視界が悪くなる。

その少しだけの時間でネギはメフィストの懐に入り込み、このテストの前に詠唱し遅延し

ておいた「魔法の射手 戒めの風矢」を開放して捕まえたのである。

「やあああああああああああ！」

「だが甘い…甘すぎるぞ！」

自分が掴んだ最大のチャンスにネギはメフィストの顔を目掛けて突きを放つ。

しかしメフィストはバキンと「戒めの風矢」を腕力だけで破り、ネ

ギの突きを掴んで放り投げる。

再度転がっていくネギは自分が考えられる最高の戦法をあっさり破られてしまったので意気消沈としていた。

「やはりこの程度か…」

「ま、まだです！ やああああああ！」

ネギは魔法も効かないと悟るなり先の拳法で攻める方針へと変える。だが、魔力供給もない動きなどメフィストには子供の遊びに思え、やる気の底辺が見えてきてしまう。

単調・愚鈍な動きにあきれたメフィストはカウンターを何発か叩き込む。

ボロボロになりながらも心が折れる様子が見えないネギに対して、メフィストはあることを問いかける。

「少年、そこまでやる気があるのに何故俺が言ったように自分が持てる全ての力を使わない？」

「な、なんの事ですか？ 僕は全部使っています！」

「いいや、お前は使っていない。まだ使っていない手段があるだろう？」

「一体なんのこと…」

「判らないなら教えてやろう。お前が持っている従者のことだ」

魔法使いの従者。

分類的に言えば確かに魔法使いの持てる力となるだろう。

だがネギにとって、自分のわがままにアスナを付き合わせるなど考えもしなかった。

「アスナさんを巻き込めと言っんですか!？」

「何をいまさら…自分からコチラに巻き込んでおいてそれを言うのか？」

「そ、それは…」

「お前のもう一人の従者、宮崎のどこにしてもそうだ。

彼女のアーティファクト『いどのえにつき』は心を読むもの。

まあ彼女をいまさら巻き込むなんてお前は思いつかないかもしれないが、もし巻き込んでいたなら簡単に俺を攻略できたかも知れんぞ。

アスナにいたっては俺が障壁を展開して魔法を受け止めているときに、彼女のアーティ

ファクトを使えば攻撃が届いたというのに…」

「……………」

ネギはメフィストの言葉を噛み締めながらも拳を当てようと殴りかかる。

だがやはり拳は届かずにメフィストにあしらわれてしまい攻撃は当たらなかった。

「なぜ一人で全てを片付けようとする？」

メフィストの問いかけに応じずに攻撃をやめないネギ。

そんな様子にあきれつつもメフィストは問いただすのをやめない。

「春の吸血鬼事件についてもそうだ。

なぜ襲われた後すぐにタカミチやじじいに助けを求めない？」

エヴァに告げ口をするなど脅されたのは最初の襲撃から何日か経った後。

メフィストからすれば、なぜ自分が敵わない敵に狙われたのに人を頼らないのか不思議で仕方がなかった。

「なぜお前は絶対に敵わないと判っている俺に一人で対峙している？」

勇氣と蛮勇はまったくの別物。

時には命を掛けてでも対峙しなくてはいけない事態になるかもしれないが、今日の試合は別物である。

「なぜ…お前は自分が守るべき生徒を巻き込みつつも自分の父親を探し続ける？」

「ッ！ 違います！ グッ！」

ネギはこれだけは否定しないといけないと思い、即否定の言葉を吐く。

だが気を取られたせいでメフィストの拳が顎へ直撃してしまった。

「何が違うんだ？」

お前の今の立場は麻帆良学園3-Aの担任であり魔法使い見習い。そんなお前が肝心の修行を疎かにし、秘匿すべき魔法をバラして関わらせ、そして何も

問題がないと思い込みそのまま魔法バレを放置。

ハッ！笑わせるなよ、少年。そんな問題だらけの小僧が父親を探したいなどというわが

ままを話し、あまつさえ協力させているではないか」

ナギ・スプリングフィールドの搜索。

それはネギ・スプリングフィールドにとって何事にも優先されてしまふ事である。

4歳のころに遭遇した悪魔の襲撃によるトラウマによつての行動かもしれないが…

幼いネギは自分がトラウマ持ちということを自覚していない。

「……今まではネギの気持ちを優先させて好きにやらせていたけど…もう我慢できないわ!」

「アスナさん!？」

「私もいくアルよ、アスナ!」

「古まで!？」

ついに耐え切れなくなったアスナと、自分の初弟子がボロボロになっている様子とアスナ

の行動に誘発された古菲がネギの隣に走りよつてきた。

「ダ、ダメです、アスナさん、古老師」

「ちよつと黙つてなさい、ネギ! 私はあの大魔王に言いたいことがあるんだから!」

（大魔王つて、おいおい……）

メフィストは自分が大魔王呼ばわりされたことに憤慨しかけたが、さっきの自分の言動を

思い出しようがないかと納得する。

古菲もアスナほどではないが怒っているようだ。

「ちようどいい、古菲も言いたいことがあつたら言ってみる」

「じゃあ言わせてもらつアルよ。」

メフィスト先生、子供相手にちと厳しすぎではないアルか？」

「そうよ！　いくらなんでも言いすぎよ！」

「……………ハア」

メフィストは乱入してきた二人の言い分に呆れる。

そんなメフィストの様子に二人はさらに憤慨するがそれに構わずにメフィストは言う。

「お前たちはどいつもこいつも子供だから子供だからと……

ふざけるなよ！！　そんな理由で全てが許されていたら世界はどこも厳しくなんてない！！

このガキはゆるつゆるすぎるが魔法学校を卒業してここに来た。

その時点で子供だからという理由で許される境界は通り越しているんだよ！

子供ならここに来るべきではなかった！　それでもここに来たのなら最低限の義務が発

生するんだよ！

それを疎かにして自分のわがままを通すのが正しいことだとお前たちは言うのか！？」

「そ、それは…そうアルけど…」

「でも私は自分で選択してここに立っているのよ！

確かにネギはいつもいつも自分の事しか考えていないけど、それでも私は自分で選択し

たわ！　アデアット！」

メフィストの言葉に動じずアスナは「ハマノツルギ」を呼び出して構える。

そして一人でメフィスト目掛けて駆け出していった。

「たあっ！」

「そんな単調の動きじゃ無理だな」

颯爽とメフィストにハリセンが届く距離まで近寄ると、迷わず「ハ
マノツルギ」を振りか

ぶり叩こうとするが…当然の如く無駄であった。

メフィストは「ハマノツルギ」を掴むなりネギたちのほうへと投げ
飛ばす。

アスナは上手く受け身を取れずにいた。

「あいたたた…まだまだ終わらないわよ！」

「ネギ坊主！ アスナに負けられないアルよ！」

「ハ、ハイ！ 古老師！」

（ふむ、予定外ではあるが…一応考えていた構図になりつつはある
な…

あとは合格条件をクリア出来るかどうかだが…素人にいきなり集
団戦が出来るかな？）

まずさつきと同じでアスナが叩きに来て、その次に古菲。

そしてネギが魔法で攻撃するという構図になりつつある。

メフィストは簡単に受け流す程度まで力を抑えて対応してみせた。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！

光の精霊67柱 集い来りて敵を射て！

『魔法の射手 連弾・光の67矢』！！」

「くーふえ、危ない！」

「ぬ、助かったネ、アスナ」

古菲に魔法が当たりそうになったときにはアスナが自分の特性を活
かして守っていた。

「なかなか頑張るじゃないか」

「それはどうも！ 余裕こいていると痛い目見るわよッ！」

時々障壁が壊されてしまいが、壊されてからきっかり5秒後に障壁を展開しなおしていく

メフィスト。

一応はクリアできるように条件を整えていくが、時間のほうは刻一刻とタイムリミットに近づいていく。

残り時間、10分。

（やっぱりだ！メフィストさんの障壁はアスナさんのアーティファクトで無効化できていく。でも破った後5秒ぐらいで再展開されていくけど……ここを攻めれば！）

ようやく糸口を見つけたネギであつたが、体力のほうが限界に近づいていた。

それでもと、気力で体制を整えて攻撃を決めるために詠唱を開始する。

「アスナさん！これから大きな魔法を放つので上手く合わせてください！」

「ちよつ、ちよつと！こっちは素人なのよ！？ムリ……だけどやるしかないのね！？」

「ハイ、すいませんが古老師にも言ってもらえますか？」

「わかつたわ！」

「ラス・テル マ・スキル マギステル！——」

「くーふえ！決めるわよ！」

「了解ネ、アスナ！」

（ふむ、どうやら決めるようだな…まあお手並み拝見と行こうか）

メフィストは詠唱を中断させるなどと言う無粋なマネはせず、正面から受け止めるようネギの方へと向き合う。

アスナと古菲はネギの魔法の方を見向きもせずにメフィストの方へと突っ込んできた。

—— 来れ雷精 風の精！ 雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！

『雷の暴風』——！』

「雷の暴風」が放たれる瞬間にアスナと古菲はメフィストの左右に分かれて挟撃を仕掛ける。

そして「雷の暴風」が放たれメフィストにぶつかる瞬間にアスナと古菲の攻撃のタイミングがバッチリ合った。だが、

「これでは一手足りないな」

「「なっ——！」」

メフィストは自身を覆っている障壁を掌サイズまで縮小させて右手に展開して「雷の暴風」を受け止め、アスナの「ハマノツルギ」は右足で威力を殺し、古菲の突きを左手で受け止めたのである。

そのまま古菲の腕を掴み、右足を「ハマノツルギ」に絡めて、アス

ナと古菲の位置が逆になるように投げ飛ばす。だが、投げ飛ばそうとした瞬間、ネギが杖に乗ってメフィスト目掛けて突っ込んできた。

（ふむ…一応は協力していたし…喰らってもいいか）

ゴスツと杖の先端がメフィストの腹に突き刺さり、そのまま吹っ飛んでいき壁にぶつかる。メフィストは飛ばされる前に古菲とアスナを離していたので一緒に飛んで行かなかった。

「ハア、ハア……」

「やった…やったじゃん、ネギ！」

「ホントにやったアルか？」

ネギたちは一応審判のような役割のエヴァのほうへ視線を向けるが…エヴァは何も言わない。

むしろこっちを見るとは余裕だな、とでも言いそうな表情をしていた。

あわててメフィストが飛んでいった方へ顔を向けるが、

「あそこで追撃をかければ満点だったんだがな」

背後からメフィストの声が聞こえてきたのである。

「そ、そんな…」

「あれで効果ないの!？」

「くっ！」

アスナと古菲は慌てて構えるが、ネギは魔力が尽きかけているらしく、フラフラしていた。

まだ続ける覚悟をするが、

「いや、一応攻撃は届いた。よって合格しよう」

「……へ？」

メフィストの呆気ない合格発言によって粉々に打ち砕かれた。

「合格……ですか？」

「ああ、クリア条件を達成出来たからな」

「や、やったー！！」

「やったアルな、ネギ坊主！！」

「ハ、ハイ！！」

「おめでとーネギ君！」

「おめでとうございます、ネギ先生！」

木乃香と刹那は合格したネギの元へ駆け寄り褒める。

それと対照的にエヴァたちはメフィストのほうへと寄っていく。

「くくくつ、大した悪役っぷりだったよ、メフィスト」

「お疲れさまでした、メフィストさん」

「まあ丁度いい機会だったしな。あの小僧には言いたい事が山のようにあっただよ」

「ケケケ、良い感じニアノ小僧ノ精神ヲ攻撃シテイタゼ」

「チャチャゼロ、この程度など精神攻撃になど入らんよ」

「ア……ソウイヤソウダナ」

「とりあえず帰るとしようか」

「そうだな」

持ってきたものはないのでそのまま家に帰ろうとするが、エヴァは
言っておく事を思い出
しネギたちの方へと向かっていく。

「ぼーや、約束通り稽古をつけてやるよ。いつでも我が家に来い。
それとカンフーの修行は続けておけ。どのみち体術は必要になる
からな」

「は、はい…わかりました」

「そうそう、木乃香と刹那。

これから少年の修行をつけるとしてもお前たちの修行は無くなら
ないから安心しろよ」

「わ、わかりました…」

「わ、わかったえ…」

実は内心少しだけ楽になるかなと期待していた二人だが、あっけ
なくその幻想はブチ壊
されてしまった。

第参拾捌話 『弟子入りテストは波乱の幕開け!?』 (後書き)

はあ……… つかつとなつて書いた、でも後悔はしていない。
それと相変わらず戦闘描写が苦手の臆識です。

さて、今回の話はメフィストがネギに物申す話となりました。
これを機に少しは変わっていけばいいのですが…難しいかなw

この展開はないだろ、と思った方は、あるあr…ねーよwと流して
下さいませ。

1 万眠シュリンクスを誘う葦笛

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1～50

最大補足：100人

ヘルメスが作つてアポロンにあげた葦笛。

ヘルメスは全身に百の目を持つ巨人アルゴスを殺すため、葦笛の音を聞かせてアルゴスの

目を全て眠らせ、その隙に剣で首を刎ねた。

その時の葦笛の名前が特に表記されてなかったので名前をシュリンクスと設定しました。

音色を奏でると眠らせることができる。

また、眠らせる対象を選ぶ事も可能。

第參拾玖話 『マギステル・マギなんぞ目指す物ではない』

弟子入りテストの翌日。

曜日は日曜なので昼からみっちり刹那と木乃香の稽古をつけている。いつもいつも別荘を使っていると人間にはリスク（年齢的な意味で）があるので今日は近

くの森で結界を張り、そこで修行をしていた。

「それじゃひとまず休憩をはさむぞ」

「「あ、ありがとうございます」……」

俺の休憩の合図と共に二人とも地面に座り込む。

木乃香はともかく刹那までバテているとはな…平和ボケ乙。

「メフィストさん…声に出ていますよ…」

「こりゃ失敬。つい本当の事を言ってしまった」

「……『魔法の射手』を無制限で絨毯爆撃のごとく撃ってくるのをどう捌けと？」

「死の気配を感じ取れるだろ？」

「感じ取るを通り越してポックリ逝ってしまったらどうするんですか！？」

文句ばかり言いやがって…

即死する威力を込めてないから当たっても問題ない…ハズだぞ。

「それにしても木乃香。初心者にくせに物覚えが早いな」

「あ、エヴァちゃんが褒めてくれた！」

「これならもう少し進行速度を早めても問題なさそうだ」

「……………え？」

「よし、そうと決まればこちらもう少し準備をせんとな」

エヴァはなにやら考え込み、木乃香育成のプランを考えていた。

……どうでもいいが、やはりエヴァって面倒見がいいよな。
なんだかんだ言っただけで木乃香と刹那の面倒を見てくれるし。

「それにしても木乃香、俺が言うのもなんだがよく付いてこれているな」

「ちゃんと寮に戻っても復習しとるからかなあ。（忘れると後がめっちゃ怖いし……）」

「ふむ……ここ数日はずっと実戦訓練だったし、そろそろ座学もやるか」

「？　どんな勉強なん？」

「とりあえず30分の休憩を取ってからな」

そろそろ“マギステル・マギ”について教えといてやろう。

………

………

…

「とりあえずイスはこれでいいな」

転移魔法を使い、学園の空き教室におかれている椅子を5つこつち
に持ってきて設置する。

少し長い話になるかもしれないので俺とエヴァ、茶々丸のぶん
も持ってきた。

全員が座ったのを確認し、俺は話します。

「さて、木乃香。お前は以前こう言ったな…マギステル・マギを指すと。」

マギステル・マギとはどういったものかは理解しているか？」

「確か…世のため、人のために陰ながらその力を使う、魔法世界で最も尊敬される仕事」

の一つ…やったかな。ネギ君がなりたいものやったなあ」

「…まあそれが世間一般で言う『立派な魔法使い・偉大な魔法使い』とよばれるものだ」

話の流れがドロドロしそうな空気に二人はまだ気付いていない。

エヴァはもうすでに知っているので我関せずとも言つような感じだ。

「だがな、人を助けたいならさっさと治癒魔法を習得するなり医療の知識を詰め込んで紛

争地域にいけばいい。それを実行しないのは何故だと思う？」

「ん…ウチはわからんわ」

「刹那は？」

「わ、わたしにもわかりません…」

まあ15歳ぐらいのガキに気付けと言う方が無理だったか？

だがこれは言っておかないといけないしな…

「答えはな、大体の術者が『魔法』という力を使いたいんだ。

確かに治癒魔法を習得するのは他の呪文と比べて難しいが…それでも出来ない事はない。

多かれ少なかれ、どいつもこいつも魔法を使って他者を踏み躪りたいと思ってるんだよ」

「そんなことはないと思うんやけど…」

「こちらの世界の紛争地域なぞ魔法が飛び交っていないんだぞ？
ならば最低限の障壁を張りつつ治癒魔法を掛けてやれば…それで
簡単に人助けが出来る。」

結局のところ、『立派な魔法使い』など、魔法世界のじじい共が
敵対勢力を蹴散らす

ための都合のいい役職…否、奴隷といってもいい役職なんだよ」

俺の辛辣な評価を木乃香と刹那は…なにやら夢を壊されたような顔
で聞いている。

魔法世界に行った事が無い故に良い印象を抱いているようだが、ど
この世界も腐った権力
者が蔓延っているものだぞ。

「そして、木乃香。お前や少年のような、力はあるが世間知らずの
子供なんて奴はまっさ

きにそのじじい共に利用されるという事を覚えておけ。

今はまだ良いが…中学卒業までには、魔法社会の仕組みという物
を理解しておけよ」

「はいな！」

「それじゃ次は心構えについてだな」

今はまだ無知でも過ごせるが…いつかは利用し利用される世界に行
く事になるだろう。

そのときまでに、どう生き残っていくかを学ぶことが出来るのかね
え…

…

…

…

この日は夜までみっちり修業をつけてやった。
色々と話をしたので、木乃香と刹那は大分精神が向上したと思う。
甘えなど微塵も出さなかったからな。

「それじゃ私たちも帰るとしよう」

「それにしてもあいつら……ここ数日でかなり上達してきたんじゃないか？」

「そうだな、私が見ている感じでもかなりの速度だ。若いとは呑み込みが早いものだな」

「マスター、老人の発言ですよ」

俺もエヴァと同じ事を思ったとは言わないようにしよう、うん。

「それにしてもエヴァ、なんだかんだ言っちゃんとして面倒をみているじゃないか」

「そ、それは！仕方なく……コ、コラ！頭を撫でるな！」

「マスター、うれしそうですね……」

「ちゃ、茶々丸！？なんで主である私にそんな不機嫌そうな声を出せる！？」

「申し訳ありません、優先順位を変更しました」

「超——ッ！！ 早急にメンテナンスを行え——ッ！！」

夜、エヴァの心からの叫びが響き渡った。

後日超に聞いたら、なんとなくだが聞こえていたらしい。

翌日の早朝。

まだ頭が覚醒していない時に無粋な念話が入った。

“メフィスト、少し緊急の要件なのですが…”

“テメエ……今、俺がどういう状況かわかってやっているんだよね？”

“それはもうバツチリと♪ エヴァンジェリンの隣で寝ていたのに、私の念話で起こされ

てかなり不機嫌になっていますね♪”

“そこまでわかっていているなら簡単だ……ここに第一次麻帆良戦争の開始を宣言しよう！”

俺の至福の時を邪魔する奴は殺す！

相手が誰であろうとなあ！

“バカ話はこころへんにして…ネギ君が図書館島の裏口を進んできているんですよ”

“どうでもいい…そのような些事、じじいにも言っ解決しろ”

“今、タカミチ君は出張でいませんし…なによりメフィスト・マクダウェルともあるう者

が一度約束したことを反故にするのですか？”

“ちっ……わかったよ。今、少年はどの辺りだ？”

“今しがた地底図書室に到着したようです”

“了解”

さて、忌々しいことだがナギとの約束だ。

今、あそこにいる竜と出くわしたら死ぬかもしれんし…

……
……
……

アルがいるところの扉に移ると、ちょうどネギが門番と対峙しているところだった。

それならまだよかったんだが……なぜ綾瀬に宮崎までいる？

「とりあえずお前は落ち着け」

「ギャウッ！」

竜の顎に右ストレートをお見舞いして、意識を昏倒させる。

「メフィストさん！？ どうしてここに！？」

「メ、メフィスト先生！？」

「助かったぜ……真祖の旦那」

ネギたちは驚いているようだが……

とりあえず言っておかない事があるな。

「少年……一般人をこんな場所まで連れてきておいて、どう責任を取るつもりだ？」

「え……えっと……」

「まあいい……お前が誰を巻き込もうが俺には関係ないしな。

巻き込んだからには自分で面倒を見るよ」

「あ、あの！」

えつと…綾瀬か。

俺が少年と話しているのを承知で割り込んできているのか？

「なんだ、綾瀬？」

「率直に聞きますが…ひょっとしてメフィスト先生も魔法使いなんですか？」

「そうだ」

「なるほど…」

なにやら綾瀬がウンウンとうなずいている。

まあそれよりも早くここからこいつらを回収しないと。

「それより地上に戻るぞ」

「あ、あの！待って下さい！ この先に父さんの手がかりが！」

「一人でこの程度の竜を倒せずに大口叩くな。」

この先の扉を通りたかったら自力でこの竜を倒せるようになってからにしろ」

まだ何か文句を言いたげだったが、問答無用で転移魔法を発動。
図書館島の裏手に強制転移させた。

“アル、完了したぞ。この竜の治療をしてから帰るわ”

“ご苦勞様でした、メフィスト”

「癒せ、医称なる双蛇の杖」
ケルキオン

治療を終えて家に戻ると…

「お帰り、メフィスト♪」

満面の笑みを浮かべて仁王立ちし…背後に真つ黒いオーラ？のようなものを発生させていた。

あれ？ 俺はここで終焉を迎えるのか？

「あれほど勝手に何処かへ行くなと言ったのに…それを無視してどこまで行っていたの

だ？」

アルのヤローには内緒にしてくれって言ってたし…
しょうがないな。

「じ、実はだな…じじいに呼び出されてだな…」

「ほう…ジジイが、ねえ…」

「修学旅行の事後処理が残っていて、それをやらされてきた…次第であります」

「本当か？ 実はまた新しく従者を増やしてきたんじゃないのか？」

おおっ…すげえ目でこっちを見てくるぜ。

だが、嘘を貫けばそれは真実になるのだ！

「否！ 断じて否！ エヴァは俺が信じられないのか！？」

「……この前勝手に従者を増やしておいてそれを言うのか？」

「すいませんっした—— ツツ——！」

俺は音速を超える速度で土下座を実行。

恥や外聞なんて気にしていたら終わってしまう！

「ならば侘びとしてだな…今度私と二人でデ、デートをしろッ！／＼」

「デートでいいのか？　OKだ」

そろそろ学園祭だしな…それじゃあ最終日にエヴァとデート決定。

「エヴァ、デートは学園祭の最終日でいいか？」

「もちろんOKだぞ」

「そいじゃ決定だ。そろそろ学校だしご飯食べて出かけるぞ」

「（マスターとメフィストさんが学祭デート…私はどうすれば…）」

「ん？　どうした、茶々丸？　頭を抱えて…何か悩んでいるのか？」

「その…出来れば、その…やはりなんでもありません、朝ごはんの準備を致します」

茶々丸の不可解な言動に俺とエヴァは顔を見合わせて頭をひねる。
超にメンテをさせようかと相談したが、茶々丸が断ったので止めておいた。

…

…

…

放課後。

我が家の裏にある少し開けた場所に修行を受けに来たネギをつれてきた。

同伴者にいつものメンツであるアスナ・木乃香・刹那の他、師匠の古菲と今日の図書館島探索に巻き込んだ宮崎と綾瀬の姿があった。

「それじゃ早速始める。ぼーやは従者へ魔力供給を360秒しろ」
「ハイ！ 契約執行360秒間！ネギの従者、神楽坂明日菜・宮崎のどか！」

「あっ」

「ん…」

「次だ…対物・魔法障壁、全方位・全力展開」

「ハイ！」

「次…対魔・魔法障壁、全力展開」

「ハイ！」

「そのまま3分持ちこたえたのち、北の空へ魔法の射手199本。結界を張ってあるから遠慮せずやれ」

「うぐっ…ハイ！」

どうでもいいけど暇だな、コレ。

これだけなのにネギの息が少し上がっているし。

「刹那、暇だから少し稽古をするぞ。古菲も参加するか？」

「オッケーアルよ！」

「拳士がいるから俺は無手でやろっ」

「ハイ、お願いします！」

余波がいくと面倒だし、少しだけ離れよう。

「ハイヤー！」

「ほれ」

「せいッ！」

「無駄無駄」

古菲と刹那の攻撃をいなししていると、3分経ったらしくネギが「魔法の射手」の詠唱を始める。

そして魔法を放つと同時に倒れ伏して気絶した。

「ハア…この程度で気絶かよ。ほら、起きろ少年」
「へぶっ！」

2、3回顔を叩いて意識を覚醒させる。
するとエヴァは予想よりも軟弱すぎて怒りだす。
俺は予想外すぎて落胆気味だ。

「フン！ この程度で気絶とは話にならんわ！
いくら奴譲りの強大な魔力があっても使いこなせなければ宝の持ち腐れだ！」

「よーよー、エヴァンジェリンさんよ。そりゃ言い過ぎだろ。
兄貴はまだ10歳だぜ？」

2人同時契約6分＋魔法の矢199本なんて修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねえか。

気絶して当然だぜ。並みの術者ならこれで十分…」

小動物がひよった意見を言うが俺達に通用するとも思ってたのか？

「黙れ、下等生物が…並みの術者程度で満足できるか。
貴様…煮て食うぞ？」

「ヒイヒイヒイヒイ！！」
「おい、メフィスト！」

なにやらエヴァが呼んでいるな…

こいつらをあしらいつつ出来る用件ならいいんだが。

「なんだ？」

「このぼーやたちにお手本を見せてやれ！」

ふむ…お手本ね。

「とりあえず契約執行、無期限。桜咲刹那・近衛木乃香」

あとはなんだったかな。

「対物、対魔・魔法障壁展開。

あとは…『魔法の射手 連弾・闇の1001矢』」

詠唱はめんどくさかったから無詠唱だ。

俺の放った「魔法の射手」は結界に当たり、粉々になったが…残り50本ぐらいで結界を壊してしまった。

「っとヤバ…アダット、永界の指環。対魔結界展開」

元の結界を覆うように堅牢な結界を張って俺が放った「魔法の射手」を防ぐ。

「こんな感じでいいのか、エヴァ？」

「あ、ああ……ぼーや、こればかりは謝ろう、スマン」

「い、いえ…改めて規格外さを自覚できましたし…」

失礼な奴らだな、まったく…

つて刹那も驚いて動きが止まっているし…古菲も魔法はわからないが凄いいアル…みたいな顔をしているし。

「と、とにかく私たちを師と呼び教えを乞う以上、生半可な修行で済むと思うな。」

いいか、ぼーや。今後、私の前でどんな口答えもなく事も許さん。少しでも弱音を吐けば貴様の行き血、最後の一滴まで飲みほしてやる。心しておけよ。」

「はい！ よろしくお願いします、エヴァンジェリンさん！」

「む…？ わ、私の事は師匠と呼べ（やりにくいガキだなー）」

「は、はい師匠！」

あのつ、ところでドラゴンを倒せるようになるにはどれ位修行しなければいいですか？」

「何？ ……もう一回言ってみる？」

「ですからドラゴンを…」

「ほうほう、ドラゴンか……ってアホか——ッ！」

「ぺぷあ！？」

なんかいきなりエヴァがネギに殴りかかっているが…なんかヘマしたのか？

まあいい…ある程度育つまでエヴァに任せよう。

「ほらお前ら、まだ終わっていないのによそ見とは余裕だな」

「へぶっ！」

「あいた！」

ネギの方に気を取られていた二人の頭を軽く小突く。

二人はハッとなりすぐに構えた。

「それじゃ修行を続けるぞ」

「よし、今日はここまでだ。解散！」

「ハイ、^{マスター}師匠！」

「それじゃ木乃香と刹那はいつもどおり家に来いよ」

「はい！」「はいな！」

時刻は夕刻。

そろそろ帰って茶々丸の料理が食べなくなる時間だからな。

「どうだ、エヴァ？ 少年だがちつとは使えるようになってきたか？」

「ハッ、まさか！ この程度鍛えただけでは全くもって足りんよ。」

これは私も別荘を設置しないといけないかもな…教師とは時間が圧倒的に足りんし」

「ふむ…確かにあれと俺のを繋げれば一々俺が地形を変化させないでいいし…帰ったら探

しておくか」

「多分地下だな…とりあえず頼んだ」

エヴァと今後の修行について話していると、アスナとネギがケンカしていた。

「なんだあれ？」

「さあ……」

「ケンカのように」

二人とも小学生レベルの返し合い↓怒ったアスナが「ハマノツルギ」でネギを叩き帰っていった。

「……まったく何バカやってんだ、ガキ共が？」

「ぼーや、お前には少し話がある。帰りはウチに寄っていけ」

………

………

…

ここにエヴァンジェリン先生のありがたい授業が開講した。

それにネギ・木乃香・刹那が参加。ただし…

「お前たち二人の魔力容量は強大だ。

これは修行などで強化しにくい…言わば天賦の才、ラッキーだったと思え。

但しそれだけではただデカイだけの魔力タンクだ。

使いこなすためにはそれを扱うための『精神力の強化』、あるいは『術の効率化』が必要

になってくる。どちらも修行だな。

………つて人の話を聞け、貴様ら——ツ！！」

「あうう…アスナさんとケンカしちゃった………どうしよう…」

「まーまー、ネギ君」

アスナとさつき喧嘩し、絶賛落ち込み中のネギとそれを慰めている木乃香はまったく聞いていなかった。

「うじうじしていると縊るぞ、ガキが！」

「うう…でもアスナさんが…」

「ちっ！ まあいい…ばーやにはこれからの修行の方向性を決めるため、お前には自分の

戦いのスタイルを選択してもらおう」

「戦いのスタイル…ですか」

「うむ、お前の進むべき道は二つ考えられる。二者択一、簡単に言おう。

まずは“魔法使い” 前衛をほぼ完全に術者に任せ、自らは後方で協力な術を放つ。

安定したスタイルだ。

そして“魔法剣士” 魔力を付与した肉体で自らも前にでて術者と共に戦い速さを重視

した術も使う。変幻自在のスタイルだ」

エヴァの提示した選択肢に考え込むネギ。

「あの、サウザンドマスターのスタイルは？」

「フツ…言うと思ったよ。だがそれはこの中で一番ヤツについて詳しいメフィストに聞け」

「ん？ ナギのスタイル？ 常識外れだな」

「メフィストさんが言っても説得力ありませんね」

「生意気な刹那にスペシャルメニユーを作ってやろう」

「申し訳ありません！！」

からかうと面白いな。

「あ、あのー」

「ん？ ああすまん、ナギのスタイルねえ…一定の強さを超えるとあまり関係ないが…あ

えて言うならナギは“魔法剣士”の部類になるだろうな」

答えを言つとネギは納得した顔をしていた。

まあ後先考えずに突っ込んでいくタイプだからな。

後ろでチマチマ魔法を撃つのがまどろっこしいとでも思ったんだろ
うよ。

「とりあえず話は以上だ。精々よく考えて選択しろよ」

「ハイ！ ありがとうございます！」

「それじゃメフィスト、後は頼んだ。私は少し疲れたので寝る」

「任された」

茶々丸の出してくれた紅茶があるのでネギはそれを飲んだ後で帰る
ようだ。

ネギはさっきの選択肢を悩んでいて、アスナにどっちがいいかとお
もわず聞いて…ケンカ
している事を思い出していた。

「立ち直りがはえーと思つたら…」

「忘れてただけみたいですね」

「くくく…相変わらず空気が読めない小僧だな」

「真祖の旦那はなんで姉さんが怒ったか解るんですかい！？」

「理由なんぞしらんが…女が怒ったときは男が悪いという方式があ
るんだよ」

これぞ「惚れた女には絶対勝てない法則」という。

「いいか、少年。過程がどうあれアスナが怒っているのは事実。ならば漢が取るべき行動は一つ…心の底から謝罪だ」

「で、でも僕何も悪いことした覚えはないのに…」

「グダグダいつてんじゃねえ！ いいからさっさと直接顔を見て謝ってこい！」

「ハ、ハイッ…！」

怒鳴られたネギは脱兎の如く寮へ帰っていった。

「……真祖の旦那は漢がわかっているぜ」

「そうですね…やはり経験則なんですか？」

「まあ600歳やっているからな…色々やっただわ…」

400年前にある国の王女と恋仲になってしまったこともあるし…そのせいで色々問題が発生して面倒だったぜ。

「そいじゃ気を取り直して修行するぞ」

「はい！」「はいな！」

「あつ、俺たちも見学していいですかい？」

「別に構わん」

それじゃ今日も張りきっていくか。

刹那は動きがどんどん良くなってきているし、木乃香も魔力の扱いが上達してきた。

木乃香にはそろそろ治癒魔法と簡単な攻撃魔法を覚えさせないとな。

ちなみにネギはその日の内にアスナと仲直りが出来たので、南の島イベントは発生しなかった。

第参拾玖話 『マギステル・マギなんぞ目指す物ではない』(後書き)

ちよつとこの回は面白くなかったですね、スイマセン。
物語の進行速度が遅くてイヤになってくる。

第肆拾話 『何事もフォローを怠ると碌な事にならん』 (前書き)

乗らねえ……全然気分が乗ってこねえ……

相変わらずダルい展開から抜け出せませんがご容赦を。

第肆拾話 『何事もフォローを怠ると碌な事にならん』

〔別荘内〕

エヴァの別荘を探しだし、俺の別荘と接続させてその中でネギ・木乃香・刹那の修行の面倒をみている。

今はネギとエヴァ、俺と木乃香がエヴァの別荘に、刹那はイフリートと一緒に俺の別荘内にいる。ちなみに地形は森だ。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック

来れ 虚空の雷 薙ぎ払え！ 『雷の斧』！！」

「ひゃああー！！」

「…今のが決めとしてそれなりに有効な雷系の上位古代語呪文だ」

「うう…しび、しびれる…」

「ちなみに今のはサウザンドマスターが好んで使っていた連携の一つでもある。

覚えておいて損はないぞ？」

「父さんが…」

あっちも白熱してるな。

こっちはそこまでじゃないが、木乃香の顔は真剣だ。

「ほらほら、もうちょいだぞ？」

「くう…プラクテ ビギ・ナル！

ものみな焼き尽くす浄化の炎 破壊の主にして再生の徴よ
我が手に宿りて敵を喰らえ！ 『紅き焰』！！」

少しだけ堅い結界を張って木乃香にそれを壊させる修行を今はしている。

さつきから頑張っているが、あまり攻撃呪文を覚えていないので苦戦しているようだ。

「んっ…難しいえ……せや！

プラクテ ビギ・ナル！

来れ氷精 爆ぜよ風精！ 『氷爆』！！」

ほう…さつきまで「紅き焰」の一点張りだったが急に「氷爆」へと変えたな。
何をするつもりやら…

「これで、決まりや！ プラクテ ビギ・ナル！

ものみな焼き尽くす浄化の炎 破壊の主にして再生の徴よ
我が手に宿りて敵を喰らえ！ 『紅き焰』！！」

結果は結界を壊すこととなった。
温度差による劣化を狙ったか。
自身の魔力の低さを自覚し、知恵でそれをカバーする…ね。

「よくやったぞ、木乃香」

「ハアハア…あつ、えへへ」

ご褒美で頭をなでてやる。

ただな、褒めるだけじゃ成長しないし厳しいことも言わんと。

「だが次からは小細工なしで壊せるようにしろよ」

「うっ！ 痛いところをつかんといてえな」

「なあに、木乃香ならあとちょいで壊せるようになる」

ある程度魔法を使えるようになったら木乃香にもやらせよう。

………

………

…

「それじゃ今日はここまでだ」

「「「あ、ありがとうございます……」「」「」

ネギはボロボロ、刹那は所々焦げていた。

木乃香は外傷はないが、フラフラしている。

「なあ、エヴァ。俺の修行って辛そうか？」

「素人には辛いと思うけど…問題は無いと思うぞ」

「だよな」 それじゃグレートダウンはしないでいいか」

「「「（そんなこと言わずにお願いします（や）！！）」「」「」

どうやら弟子三人の心は一つになったらしいが…

ネギと木乃香はともかく、刹那までひよってるんじゃないか。

翌日。

「ど、どどどどどどなのよ、ここ——ッ！—」

我が別荘に不法侵入者が発生しました。

てかこれから刹那の修行を見に行こうと魔方阵に入るところで現れるとか…ラック値は低

そうだな、古　菲に朝倉、綾瀬、宮崎、アスナよ。

「って訳で犯罪者は排除します」

「……へ？」

「捕らえる、グレイプニル幻想成る魔法の紐」

問答無用で侵入者を捕らえる。

五人はギヤイギヤイ文句を言っていたがそんなことは知らん。

「あ、ここにいたか」

「むっ、メフィスト…後ろにいるそいつらはなんだ？」

「不法侵入者」

「ほう…貴様ら、犯罪者に人権がないのはわかってるよな？」

「ちよっ！エヴァちゃん！？　ふざけてないでここから助けてよッ

！」

「自分で何とかしろ」

それじゃ俺も放置しよつと。

適当においておけば誰かがなんとかするだろう。

「これじゃ修行にならんだろうし…刹那を呼んでくるわ」

「わかった、こいつらはどうするんだ？」

「俺が帰ってくる前に少年が何とかしてみろ」

「ええ！？　僕がですか！？」

「頑張ればできるさ。ただの神話に出てくるグレイプニルだからな」

「むしろ難易度がめちゃくちゃ高いんですけど！」

やらない前から諦めるとは…そんなんじゃダメだな。
まあやつてもとける事はないんだけどさ」

「グレイプ…なに？」

「アスナさん…グレイプニルとは、北欧神話で出てくるフェンリルをラグナロクまで縛り

つけていた紐です。

その紐で縛られたフェンリルは何をやっても紐をとけられなかったと言われています」

「なんでそんな代物をメフィストさんが持っているのよ——ッ！」

バカレッドに言っても理解できないと思うぞ。

………

……

…

今日の俺の別荘の状態は砂漠。

フィールドと敵によって熱さを攻められている刹那は、耐熱術式をつかっていても汗だくだった。

ただ、イフリートを見据えている目には……いい感じに殺意を帯び

ている。

いいね、思惑通りに育ってきた。

二人は互いに気と魔力を高ぶらせて対峙している。

どうやら勝負を決めるつもりようだ…ここで割ってはいるのはあまりにも無粋。

決着がつくまで見守っているとしよう。

「神鳴流奥義ッ！ 真・雷鳴剣ッ！」

「『地獄の火炎』！！」

イフリートの「地獄の火炎」と刹那の「真・雷鳴剣」がぶつかる。最初は刹那が押されていたが、圧倒的な火力を誇る「地獄の火炎」を刹那の「真・雷鳴剣」が真っ二つに切り裂き、そのままイフリートまで攻撃が届いた。

「よくやったな、刹那」

「ハア、ハア……み、見ていたんですね、メフィストさん」

「申し訳ありません、マスター。負けてしまいました」

「勝負とはそういうものだ。刹那の力量がイフリートを上回った…それだけの話だ」

「ふう…人間に負けるのはかなり久しぶりです。とても心躍る戦いでした、刹那」

「こちらこそありがとうございました」

刹那はペコリと頭を下げる。

イフリートはそれを見届けると、そのまま還っていった。

「それじゃ風呂に入ったらエヴァの別荘に来てくれ。今日の修行は中断になった」

「中断…ですか？」

「そつ、訳なら来たら判る」

それじゃあ俺もあっちに行っているでしょう。

……次の刹那の修行相手は誰にしようかな。

なんでこうなった……

「んゝ うまいアル！」

「あ、コラ！ お前ら、それは私の秘蔵の食料！」

「これおいしいわねゝ、なんていうジューズなの？」

「わ、バカ！ 未成年はそんなもん飲むんじゃないっ！」

俺とエヴァの貯蓄していた食料が…食い漁られていく。

最重要な酒はまだ手をつけられていない…というか絶対に飲ませないがな。

そんな騒がしい様子をエヴァと一緒に酒の肴にしていると綾瀬と宮崎が魔法を教えてくださいと迫ってきた。

「メンドくさい」

「向こうに頼め、魔法先生にな」

当然、答えはこうなる。

これ以上メンドくさい事態になって堪るかつての。

「な、なぜですか！？ 木乃香さんには教えて私にはなぜ教えてくれないですか！？」

「木乃香に魔法を教えているのは、戦友であるあいつの父親に頼まれたから。」

それに興味本位に魔法を教わりたがる世間知らずに時間を割く気は皆無だ」

「な！」

「わかったら少年に頼みな」

「ま、まってくださいです！」

待ちません。待つ気ありません。

むくれる綾瀬だったが、気を取り直してネギに頼みに行く。

「あのー、いいんでしょうか、^{マスター}師匠？」

「勝手にしろ。どうなっても私は知らんがな」

「教えるんならちゃんと自分で面倒を見ろよ」

師である俺達が投げやりなので、ネギは教えることにしたようだ。

初級呪文である「火よ灯れ」を実践し、それをガキどもは面白そうに試していく。

「なかなか愉快的事になってきたじゃないか」

「俺的にはどうでもいいって感じた。」

ただこのまま行くなら1年後までに誰が脱落するか楽しみではあるがな」

今は「魔法」という夢溢れる力にあこがれ、学んでいくのもいいだろう。

だが、道を踏み外した時にどう感じるか…一般人がどういう道に転落していくか見させてもらおうぞ。

…
…
…

夜になったので全員寝る準備を始める。

ただこんな大人数が来たのは初めてだったので、設置してあるソファをベッド代わりにしておいた。

そしていざ寝ようとしたとき、ネギが話があると全員に言ってきた。

「それで、少年…話とはなんだ？」

「…皆さんには話しておくべきではないかと思ったんです。

父さんの事と…6年前の事を…」

ふむ…ついに来たか…

いつかはくると思っていたが…俺の顔自体は大丈夫だろう。

あのときは闇の魔法を使って変貌していたからな。

「少年が良いなら俺に止める権利はないさ。好きにするといい」
「はい」

カモがここにいて全員を覆うように魔法陣を描いていく。

そしてネギは自分の思い描く世界を見えるようにするための魔法を唱えた。

気がつくと、雪に覆われた山村に俺達はいた。
そして自分の格好が裸だと気付き騒ぎですが、ネギが構わずにどんな映像を流していく
ので気にしていられなかったようだ。

映像はどんどん進んでいったって色々なものを見せてくれた。
従姉妹であるネカネと幼なじみのアーニヤ。
そして幼少時にはどういう暮らしをしていたか。

「ちっ、歪みの原因はここから出来ていたのか」

「そうだな…ぼーやのおじだったか？ 食事と住居は与えていたが、あれはどう見ても育

児放棄だ」

「周りは自分の子ではないし、なによりナギの息子という肩書きが邪魔をして口出しでき
ていないようだしな」

遊ぶ友達のいない寂しい幼少時代をすごすネギ。

どこから見ても異常の一言で済むんだが…さらに厄介なのはこれを見せているネギ自身が

これを異常と認識していないことが問題だ。

「少年…理解できているのか？ この事態がすでに異常な事を」
『えっと…おじさんは忙しかったし、他の子供は魔法学校に行っていたので…』

その魔法学校でも友達を作っていないんだろうよ。

これは…思った以上に面倒な思考をしているようだ。

考え事をしているうちに、場面は変わる。

ネカネがウェールズに帰ってきたとき、遠くの空にいる無数の影を発見したのが発端と

なった。

そのころネギは少し離れた湖で釣りをして過ごしていたが、ネカネが帰ってくることを思

い出し村を目指して走っていく。

その様子をガキ共は微笑ましそうに笑っていたが…次の瞬間に驚愕した。

村は焼かれ、住人は石化していたのである。

「な、なんなのよ、コレ——ッ!」

「石化…魔族の襲撃!」

“うつ、ぼ、僕が…僕がピンチになったらって思ったから…?”

ピンチになったらお父さんが来てくれるって…”

実に歪んだ考えだな。

4歳児といえど、なまじ頭が良いだけに見当違いの可能性が正しいと思ってしまうとは…

「ちょ、ちょっと…何よ、何なのこいつら…」

ガキどもは映像という事も忘れて、次々と現れる悪魔たちに恐怖している。

そして、戦闘にいる悪魔が拳を振り上げ、ネギ目掛けて振りおろそうとする様子を金切り

声やら悲鳴やらをあげるが…

ナギが颯爽と現れて速攻で撃退した。

そして次に周りにいる悪魔が一斉に襲い掛かってきたが、それは映像の俺が吹き飛ばしたのである。

「ネギのお父さんがきたと思ったら、今度は誰なのよー!？」

「さっき出てきた悪魔の仲間なのでしょうか？」

「それにしても仲間を容赦なく消し飛ばしたえ」

「あの圧倒的な力…（もしかして、だが姿形が…）」

映像では竜の外殻をした人型の生物だ。

正体が俺と関連付ける難しいだろう。

まだ闇の魔法を使った姿を見せていないのだからな。

ナギと俺の圧倒的な力に怯えたネギは逃げ出してしまう。

そして逃げた先に悪魔が出現し石化の魔法を使うが、ネカネとスタンというツンデレジジイ

がネギの事を守り撃退した。

この後の映像は、ナギがネギに杖を渡し言葉を残していた。

それにしてもアイツ…どこで生き延びているんだか…

その後、生き残りであるネギとネカネはメルディアナ学校がある街に引き取られた。

ネギは引き取られた後、全てを無視し勉強をしていた。

力をつければ父親に会えると勘違いしたまま…そしてそれを学校の連中は知らないふりをして放置していた。

実に腐っていやがる…碌に心のケアをせず放置して立派な魔法使いを名乗るとはな。

どういつもこいつも樂觀的すぎる思考を持つ患者ばかりだ。

『僕は今でも時々思うんです。あの出来事は“ピンチになったらお父さんが助けに来てく

れる”なんて思った…僕への天罰なんじゃないかって…』

ここで魔法の効果が切れる。

だがそんなことはお構いなしにアスナがネギに食ってかかった。

「え……な！？ 何言ってるのよ！そんなことある訳ないじゃん！
今の話であんたのせいだったところなんか一つもないわ！」

「ア、アスナさん…」

その通りだ。

子供が願った程度で大量の悪魔が出現するような事が起きるなら…

今ごろいたるところで

悪魔が出没している。

本当は気付いているとは思うんだが…そうアレと思いこんでいるのか？

「少年、自分のせいであの事態を引き起こしたなどと思いあがるな」

「……え？」

「全ての現象には理由がある、原因がある。

子供が願った程度であのような事件が起きると本気で思っているのか？」

「で、ですが……やっぱり僕がいけないんです…」

こいつ…もしかしてPTSD（心的外傷後ストレス障害）か？

ここまで過剰に自分のせいになると…ほぼ確定だな。
まったく…6年間も心のケアを怠るとは、つくづく楽観的思考だ。

「まあいい、俺はそこまで面倒を見る気はない。あとは勝手にしておけ」

「ちょっ！メフィストさん!？」

「なんだ、アスナ？」

「自分の弟子なのに投げやりすぎない!？」

「知らん。俺が何を言っても少年は自分の考えを改めるとは思えんからな。」

もついいか？ 俺は寝るぞ」

………

………

…

別荘内で夜が明けた後。

ガキどもと一緒に家へ戻るため別荘から出た。

「エヴァちゃん、テスト勉強の時間足りなくなったらまた別荘を使わせてよ」

「別に構わんが…女には薦めんど、歳を取るからな」

「うゝ!？そうか!」

「いいんじゃない？ 2、3日歳取っても」

「若いから言えるセリフだな、それ」

むっ、なんだ？この気配は…

「やれやれ、やっとうるさいのが行っただか」

「楽しそうでしたが、マスター？」

「……………むっ？」

「エヴァも気が付いたってことは確定だな」

「…侵入者か？」

「だろうな。隠密に気を使っているらしいが…捕らえた」

やれやれ…先日取り逃がしたアーウェルンクスの手の者かな？
なんにせよ、今日はまだ休むことが出来なさそうだ。

第肆拾話 『何事もフォローを怠ると碌な事にならん』（後書き）

実は作者、ここらへんの話があまり好きではありません。

4歳という子供がこんな場面に出くわしたら確実にトラウマが発生するのにメルセデシア学校はそれを放置。

ネギ自身の言動はどこか「悲劇のヒロイン」ぶっているように感じ
てしまつてどうもね…

てかなんでネギは「自分のせい」だと思ひ込んでいるんだろう？

第肆拾壹話 『悪魔（笑）の襲撃』

【アスナside】

メフィストさんの態度はこのガキンちょに取るべき態度ではないと思った。

そりゃ確かに、あの事件を自分のせいだと思いこんでいるのは少しヘンだと思ったけど…

それを踏まえても、師匠になったんだからこう…助言？て言うのかな。

そんな感じのフォローをすべきなのよ！

エヴァちゃんちから帰ってきててもネギはまだ何か考えている。

自分の過去を自主的に話してくれたのは進歩したと思ったけど…やっぱり何でもかんでも

抱え込む性質は変わっていないかったってことか。

でも…気を紛らわせようとして話しかけている木乃香や刹那さんを無視するのはダメダメね！

「あいたッ！」

「このバカネギッ！ 悩むのもいいけど人の話を無視するのはダメよ！」

「ア、アスナさん……」

「こらこら、アスナ。叩いちゃいかんえ」

「うつ……ごめん、木乃香」

ついムカムカして叩いちゃった…

そりゃ私がなんとかできるような問題じゃないんだけどさ、もう少し

し私たちに……ん、
頼る？…なんか違うような気がするけど…と、とにかく！
ウジウジするなど言いたいよ、私は！きつと！

「ネギ！私はアンタが頭の中で何を考えているのかわからないけど
ね！

ウジウジしている暇があつたら身体を動かしなさい！
そうすれば悩み事なんて吹き飛ばんだから！」

あれ？　なんか違うような…

「で、でもアスナさん…」

「違う！やっぱさっきのなし！」

「へ！？」

「アスナ…」

「アスナさん…」

やばッ！木乃香と刹那さんに呆れられちゃってる！？

「アンタはその…もう少し私を頼りなさい！

私はその…パ、パパ、パートナーなんだからさ！」

「アスナがデレた……」

「これがツンデレというものですか…」

「え？……あつ！ち、ちが！　何口走ってんのよ私——ッ！！」

「ア、アスナさん！？」

ひとまず先に部屋に向かって走り出す。

すると目の前に水の塊があっただけ…私は気付かずにそのまま見事に突っ込んで意識を失った。

【メフィストside】

侵入者は爵位級と思われる上級悪魔とスライムが3体。
気配を悟られないように術を使っているようだが、俺にとっちゃ関係なかった。

「エヴァ、侵入者は学生寮に向かっていているようだ…俺たちはどうする？」

「特にジジイから指示はなかったな。私としては手を出すつもりはない」

「ふむ…それなら俺も傍観しているとしよう」

弟子が自力でどこまで頑張るか…それを見るのもいいだろうよ。

遠距離から監視していると、爵位悪魔は那波・村上・雪広の部屋へと向かっていった。

なぜそんなところへ行くのか不思議だったが…なるほど、いつぞやの犬（小太郎）がそこでやっかいになっていたようだ。

「いつの間に入ってきたんだ、あの犬？ 俺としたことが気付かなかったとは…」

「もしかしたら別荘にいるときに入ってきたのかもな。
あそこにいたのなら気付けというのもムリがあるし」

なるほど…それにしても他の魔法使いは何をしているんだ？

敵がこんな地点まで入り込んでいるというのに…

まあいい、俺が気にすることでもなかったな。

「スライムのほうがガキどもを攫っていったぞ」

「詳細は？」

「神楽坂 明日菜・木乃香・朝倉 和美・綾瀬 夕映・宮崎 のどか・古 菲だ。

あと刹那がさらわれかけていたが、とつさに斬り伏せたみたいだな」

ほう…刹那は不意打ちにも反応できるようになったか。

特訓の経過はマズマズといったところだな。

それにしてもマズいのは…木乃香か。

「ちょっとあの悪魔とOHANASHIしてくるわ」

「あ、ああ……」

ちよつくら目的を聞いてくるかね。

………

……

…

今、奴らは世界樹のふもとにあるステージに陣取っている。

小太郎と接触した理由は不明のままだが…それは捨て置いていいだろう。

「こんばんは、公爵殿」

「むっ！」

「ナッ！ ハイ・デイトウォーカー 吸血鬼の真祖ガナゼココニ！？」

カタカナで喋るな。打ちにくいんだよ！（作者の心からの叫び）

「黙っている、三下。俺はその悪魔に話があるだけだ」

「グッ！」

「これはこれは…私に何か用ですか、ハイ・デイトウォーカー！？」

「くくくつ、最低限の礼儀は知っているか…いいだろう、お前の目的を言え」

「…：学園の調査及び、ネギ・スプリングフィールドとカグラザカアスナが今後どの程度

脅威となるかを調べて来いと言われておりますな」

「ナッ！旦那！ ソンナ簡単二言ツチマツテイノカヨ！？」

「構わん…どの道見つかったのだからな」

調査ねえ…これはアーウェルンクス関連の線がかなり濃厚になったものだ。

俺は公爵の後ろで水の固まりにぶち込まれているガキどもに視線を送る。

「そのガキたちはどうするつもりだ？」

「彼女たちは人質だよ、ネギ君たちがこちらに来るようにするね」

「一つ言っておく…他はどうでもいいが、近衛 木乃香を殺すようなことになればお前を消

滅させる」

俺は殺気を込めて睨みつける。

公爵は気圧されて満足に喋れなかったが、必死に顔を縦に振っていた。

「木乃香、俺からの課題だ。その水牢は自力で何とかしてみろ」

「これはウチの油断」という訳やね、了解や」

「ちょ、メフィスト先生！？ 助けてくれないの!？」

「朝倉か… お前らの面倒は少年が見るといっただろう？」

これを機会に魔法とはどういう事態を引き起こすか学んでおけ」

そろそろネギ・小太郎と合流した刹那がやってくるな。

離れた後で木乃香は助けないように言っておくでしょう。

……

……

…

エヴァは世界樹の枝の上にいた。

そこに転移するともう一人観客が増えていたようだ、エセ忍者っぽいが由緒ある忍びである長瀬 楓だ。

「楓も観戦か？」

「少し気になってきてみたら、ネギ坊主が大変そうなことになって

いたでござるからな」

「言っておくが手出し無用だ」

「承知したでござる」

それじゃ刹那にも連絡しておくでしょう。

“刹那、聞こえるか？”

“メフィストさん！ 申し訳ありません、お嬢様が…”

“過ぎたことをグチグチ言っても無意味だ。率直に言っぞ、木乃香を助けるな”

“な、何故です！？”

“修行の一環だ。木乃香には自力で現状を打破するよう言っている。幸い杖は持っているようだし、監視の目が緩くなったら出来るはずだ”

“で、ですが！”

“くどい。師匠命令だ、拒否は認めん”

これで舞台は整った。

あとは役者たちがどう立ち回るかによって展開は変わっていく。

side out

【刹那side】

お嬢様が攫われた。少し目を放した隙にあっさりと…

ネギ先生が犯人と接触し、アスナさんと他のクラスメートが攫われたという情報を教えてくれた。

修学旅行で敵対関係だった犬神 小太郎という少年もこちらきており、この3人で救出にいかうという話になったのだが…

メフィストさんの無情な仕打ちを受けました……orz

「せ、刹那さん？ あ…さっきの念話はなんだったんですか？」
「ネギ先生…その、メフィストさんは木乃香お嬢様を助けるなど…」
「ええ！？」
「なんでもお嬢様自身に切り抜けさせるためだとか…言っまでもなく助ける気は皆無でした」
「ああ…やっぱりあの真祖の兄ちゃんってドSなんやな…」

ふふ…私も最初はそういう認識でしたが…
違うんですよ！もはやそういう領域じゃないんですよ！
全ての修行が死と隣り合わせ…それに気絶しないギリギリの力でや
っているから下手な修行方法よりも格段に厳しいんです！

ああ…思い出して来たら気分が悪くなってきました…

「な、なあ、ネギ？ この半デコの姉ちゃんやけど…大丈夫なんか？」
「？」

「刹那さん！？ 戻ってきてくださーい！」
「ハッ！す、すいません！ つい意識が飛びかけてしまいました」

いけない！ですが私はお嬢様を助けられないとなると何をしましょ
う…

「とりあえず指定された場所に行きましょう、ネギ先生」
「ハイ！」
「よっしゃ！ 待つとれよ、ちずる姉ちゃん！」

side out

【メフィストside】

刹那に念話をした後すぐにネギ達はやってきた。

ネギと小太郎は杖に乗り、刹那は地を走っているようだ。

ネギはステージが攻撃範囲に入ると「魔法の射手」を詠唱して先制するも、なんらかの手

段を使われ魔法が打ち消されてしまう。

「なんだ、さっきのは？」

「魔法が消えたでござる」

「アスナの魔法無効化能力を利用したのか？」

ネギ達も俺達同様訝しむが、考えても答えが出ないと踏んだらしい。

「あなたは一体誰なんです！？ こんなことをする目的は！？」

「私はただ君達の実力が知りたいだけだ。私を倒せたら彼女たちは返そう」

「ふ、ふふ……そんな目的のためにお嬢様を……」

おや？ 刹那の様子が…なにやら黒いオーラが吹き出ているぞ。

「せ、刹那さん？」

「そんな命知らずの貴様は…」

「むっ？」

「斬るッ！」

刹那は木乃香を助けたくとも助けられないこのもどかしい状況を作

った元凶にキレて斬り
かかった。

ネギと小太郎はドン引きである。
ヘルマンは斬撃を避けつつ、悪魔パンチ！だとか悪魔アッパー！だ
とか叫びながら応戦し
ていた。

「おい、メフィスト… お前が修行をつけたせいで威力が依然と比べ
物にならないものとな

っているぞ…」

「腕を上げたでござるな、刹那」

「爵位級とはいえ、あれぐらいの悪魔なんぞ簡単に勝てるぐらいに
は強くなっているはず
だ」

とはいえさつき魔法を掻き消したのは気掛かりだ。
だがまあ… なんとかなるだろう。

俺はそろそろこっちの相手をしてやらんな。
隠れているつもりなんだろうが… 俺にとって気配を感じ取るのは簡
単だ。

「おい、出てこい無能共。 隠れるならもう少し上手にやれ」

俺が声を掛けると、向こうもその気だったのか… 様々な格好をした
悪魔が俺達を囲うよう
に現れた。その数10体。

「ふむ… 一応、目的を聞いておこう」

「我等の目的は貴様だ、メフィスト・マクダウェル」

「以前は質より量の戦法で負けたらしいが… 今度はそうもいかん」

「貴様ノ命、貰イ受ケルゾ」

確かに6年前だったか？ ネギの護衛をしていた時に遭遇した悪魔よりかは格上みたいだが、それでも俺に届く実力ではなさそうだ。

「いいぜ、だがここだといささか狭い。少し場所を変えるぞ」

「ふん、まあいいだろう」

「精々よく選ぶんだな」

「だが貴様らは信用できん。

なので保険を掛けておこう、私の呼び掛けに応えよ、氷霊召喚！
来い！『シヴァ』！」

「用件は何でしょう、ご主人様？」

「エヴァの護衛を頼む。敵が現れたら消せ」

「御意」

それじゃさっさと消してくるとしよう。

……

……

…

「ただいま」

「お帰り……ってメフィスト！ミストルティン不死殺す宿木の槍を持ち歩くのは止めろ！」

「ん？ ああ、スマン。あのザコ共を消すのに使つてな」

「メフィスト殿？ その槍は何でござるか？」

楓が興味津々と言った様子でこちらを見てくる。

「これは不死の属性をもつ者には天敵の槍でな。これで刺されると例外なく消滅するんだ」

「長瀬、間違っても使おうとか考えるなよ」

「ハッハッハ、エヴァ殿。拙者にメフィスト殿の手から武器を奪い取れるとでも？」

「……スマン」

いい加減俺を化け物扱いすんのやめようぜ？

「それよりメフィスト。お前に喧嘩を売ってきた悪魔の名前はなんていう奴だったんだ？」

「なんつったつけかな…確かレヴィアタンだとかベルゼブブだとかアモンだとかマルコシ

アスだとか色々位が高そうな奴らだったな」

「……七つの大罪にソロモン72柱。つくづく思うよ…お前は規格外すぎると」

「そんなに褒めるなよ」

「褒めとらんわ！ それより消滅させてよかったのか？悪魔界の序列が変動するかもしれ

んぞ」

「知らん、俺には関係ない事だ。それに俺は敵対した者を生かしてやるほど優しくはない」

個人的には悪魔界の中で最強であるルシファールと戦ってみたいはあ
るな。

七つの大罪の悪魔を呼び出せたんだからそのうち会えるか？

「それよりこっちはどうなった？」

「刹那が圧倒していたが…どうやらあの悪魔はぼーやの村を襲った悪魔の内の一体だったらしくてな。トラウマを刺激されたボーヤが魔力暴走を起こすも反撃を喰らい体制を整える所…といったところか」

ふうん…どうやら小太郎がネギを説教しているようだ。

刹那はネギが暴走しているときにスライムを倒したらしく、近くには見当たらない。

監視の目がなくなったので木乃香が「紅き焰」を使い水牢を壊して脱出。

そのままアスナの近くにより首飾りを取り外した。

どうやら魔法を掻き消した装置はアスナの首飾りがタネだったらしく、それを外されヘル

マンは動揺を隠せないようだ。

「ネギ！ よくわかんない首飾りはもうないわ！

思う存分やっちゃって！」

「ハイ！」

「やるやないか、ねーちゃん達！」

「ふふふ…見事にしてやられたよ。もはや策など無用！来たまえ！」

「おっちゃん、何笑つとんや！？ もう魔法は防げんのやで！」

小太郎が前衛、ネギが後衛の形で最後のトドメを刺すようだ。

小太郎は6体の影分身を作り突っ込むが、ヘルマンはすの全てを殴り倒す。

そのままネギに向かって石化魔法を撃とうとするが、小太郎の本体がヘルマンの顎を撃ち抜きそれを防ぐ。

ネギは、修行中に教えられた無詠唱の「魔法の射手」↓「雷の斧」のコンボを決めて止めとなった。

「君達の勝ちだ。トドメを刺さなくていいのかね？
休眠したあと復活してしまうかもしれんぞ」

攻撃を喰らったヘルマンは体力の限界らしく、身体が煙状になり還ろうとしていた。

「僕…トドメは刺しません」

「……ほう」

「6年前…あなたは召喚されただけだし…今日だって人質に酷い事はしなかった。

僕には…あなたがそれ程酷い人には…」

「どうかな？ やはり私は全くの悪人かも知れぬぞ。何せ悪魔だからねえ」

「それでも…トドメは刺しません」

「———それなら俺が止めを刺そう」

「グッ！ ガハアッ！」

今日呼び出されたなら見逃すつもりだったが…6年前なら話は別だ。貴様の不運は俺の敵側にいた、それだけが不幸だったな。

「メフィストさん！？ 何を！」

「甘い…まったくもって甘すぎる。酷い事をしなかったから見逃す？
ハッ！ バカバカしい。一度敵対した者を見逃すなどやはり貴様はまだまだ甘々だ」

「ですが！」

話しているうちにヘルマンは黒い砂となり、風が吹いてきてどこへともなく散っていった。

「もし次現れた時、今度は人質らしい人質の扱いをされたらどうする？」

今日の人質は5人だったが、今度は人質の人数が増えていたら？人質を見せしめのために何人が殺されたら少年はどうするつもりだ？」

「ッ！」

「木乃香と刹那も覚えておけ。戦いの勝者とはいつ復讐されてもおかしくはない。

復讐という行動を起こさせないために“殺し”という手段を取るのも悪くない手だという事をな」

「……………」

「まあ小言はこんなところでいいだろう。今日は修行はなしだ。寮に戻ってゆっくり休め」

それじゃ俺も帰るとしよう。

「待って下さい、メフィストさん！」

「ん？ どうした、刹那？」

世界樹にいるエヴァの元へ歩き始めると刹那が声を掛けてきた。

「さっきの話ですが…メフィストさんの経験則ですか？」

「……内緒だ。俺の過去が知りたいのか？」

「興味が無い…といったらウソとなります」

「ふむ…もう少し大人になったら教えてやるよ」

俺が歩んできた道は血一色で染められているからな。
そう簡単に子供に語れる内容じゃないんだよ。

第肆拾壹話 『悪魔（笑）の襲撃』（後書き）

レポート×2＋テスト×2のイベントが来週の火曜日に発生w
なので申し訳ありませんが更新は来週の金曜日にさせていただきます。

とてもじゃないが小説を書く余裕がありませんorz

第肆拾貳話 『フラグ乱立て漢の末路』

「学園長室」

ヘルマン襲撃から数日後。

俺はじじいに朝から学園長室に呼び出されていた。

「何の用だ、じじい？　くだらない用事だったら縊るぞ」

「フオツ！　メフィスト君や…その殺気を引っ込めてくれんかのお。年寄りにはちとキツイんじゃないよ」

「俺のエヴァを愛でる時間を削る奴は万死に値するのは自然の摂理だから仕方がない」

それにこの程度じゃお前は問題ないだろう？

並みの術者なら即気絶できるレベルなんだがな…

「それはすまんかったのお。聞きたいのはネギ君の出来具合じゃ」

「少年の？　修行風景なんぞ覗きでもして把握してるんだろ？」

「…さすがに別荘の中までは見る事ができんぞい」

それもそうか。

むしろ中まで入られていたらセキュリティ面を見直さなければいけないな。

「今のところは基礎のみだ。独学である程度学習していたようだが、いかんせん素人の浅

知恵だったからな。まあそれでもここの教員にはある程度勝てるはずだ」

「フオツフオツフオ、それは頼もしいのお」

「……ハア。10歳のガキに負けるかもってところにショックは受けねえのかよ？」

「ナギの息子じゃからな。悔しさよりも嬉しさのほうが強いんじゃないよ」

まあこいつらの意識なんてどうでもいいか。

「少年の出来具合いを聞くなんて何か仕事でもさせるのか？」

「その通りじゃ。」

世界樹発光が1年早まったせいでいろいろやらなくちゃいけないことが出来てのお。

ネギ君にも協力してもらおうと考えているんじゃないよ」

「ふうん…まあ何とかなるんじゃないかねえの」

殺す云々のような内容じゃなければ問題ないはずだ。

「それとメフィスト君。一応聞くが君は手伝ってはくれんのじゃろ？」

「ハッハッハ、愚問だな」

「やっぱりダメかの？」

「くどい。俺に被害がないからこつちが手伝う義理も義務もない。話が終わりなら帰るぞ」

「仕方がないのお、わかったぞい」

そっついや超が学園祭で何か行動を起こすとか言ってたような…
まあ別に言わなくていいか。

……
……

：

「ジジイの用は何だったんだ？」

「なんか学園祭で仕事ができたらしい。少年の出来具合を聞かれましたよ」

家に帰った後、エヴァが聞いてきた。

「私たちにも何かあるのか？」

「いや、警備じゃないらしい。断ってきた」

世界樹の発光がどうか言っていたが：

今年の学園祭は色々面白くなりそうだな。

「そういえば茶々丸、超はこの学園祭でなにかやるのか？」

「……メフィストさんは超の勧誘を断ったんですね？」

「特に協力する理由もなかったからな」

「なんだ、茶々丸。超 鈴音が何か面白い事をやらかすのか？」

エヴァが興味を示し始める。

茶々丸は主の質問に答えるかどうか少し考えるが、主に逆らう訳にもいかに答えた。

「世界樹の魔力を使用し、全世界に魔法の存在をバラすのが目的です」

「ほお…超 鈴音め。なかなか面白いことを企むじゃないか」

「そりゃ学園側と戦いになるわな」

魔法をバラす……ねえ。

超も大それた事を計画するじゃないか。

「てか茶々丸、そんな簡単に教えちゃっていいのか？」

「超 鈴音には特に止められていないので問題ありません。

それにマスターとメフィストさんに嘘をつく訳にもいきませんので」

もし成功したら学園の魔法先生はおるか本国のジジイどもも大慌てになるだろう。

俺たちにも被害が出そうだが、そうになったらまたどこかで引きこもっていいかい。

「マスター、メフィストさん。超 鈴音の計画の障害と成りますか？」

「こつちに突つかかってこなければこちらは何もしないぞ」

「そうだな。茶々丸、超 鈴音に言っておけ」

「了解しました」

「それじゃそろそろ学園にいくぞ」

学祭準備期間だからサボってもよさそうな気がするけどな。

……

……

…

「やあメフィストさん、おはようございます」

「なんだ、タカミチ？ 朝から笑顔を見せるな。男の笑顔を見て喜

ぶ趣味はないぞ」

朝、職員室に入るとタカミチが笑顔で待ち構えていた。
キモいわぁ…

「今日から学祭中は僕と一緒に学園内の見回りをする事になりましたよ」

「……………なんだと？」

「ですから、今日から学祭中は僕と一緒に学園内の見回りをする事になりました」

「なんのバツゲームだよ、ちくしょおおおおおおおおおおお
おおお！！」

これはアレか！？孔明の罠か！？

「なんで俺がそんなことをしなくちゃいけないんだ？」

「やっぱり忘れていましたね。メフィストさんがこちらに来たときに色々な役職の中に『広

域指導員』を引き受けたじゃないですか」

し、しまったああああああああああああああああ！！
俺の凡ミスだったああああああああああああああああ
ああああ！！

「ちくせう……………」

「それじゃ行きましょうか」

暇なときだけって条件だけに断れねえじゃねえか…

……
……
……

「それでどこを見て回るんだ？」

「そうですね……特に決めていないんで適当に回っていきましょうか」

俺たちは学園を出て適当にブラブラと歩き回っていく。

今の時期、大抵は学園で何を出すかを決めているはずなので学生は見当たらなかった。

「そういえばメフィストさん。ネギくんの修行はどんな感じですか？」

「ん？ 少年の出来具合いか？」

今の實力ならお前とじじい以外の魔法先生程度なら大抵は倒せるようになっているぞ」

「そうですか…ネギくんが」

タカミチがなにやらうれしそうな顔をしている。

何がそんなにうれしそうなのか不思議なんだが…

「何をそんなにうれしそうにしてるんだ？」

「昔、ネギ君が小さかったときに手合わせの約束をしましてね。

どれくらい強くなったか楽しみなんですよ」

「ああ、そっぴやウェールズに来ていたことがあったな」

「やっぱりバレてましたか？ さすがですね」

俺がウェールズにいたってことはじじいとナギぐらいしか知ってい

ないはずなんだが。

じじいあたりに聞いていたのか。

「っておい見るタカミチ。なにやら柔道着を着たのとチンピラみたいな格好をした学生達

が睨み合っているぞ」

「おや、本当ですね。それじゃ行きましょうか」

なにやら一触即発？みたいな感じでにらみ合っているガキどもの間に入るように割り込んでいく俺たち。

チンピラ風のガキどもはタカミチを見るなり顔を青くして後ずさるが、柔道着のほうはいきりだっていた。

「なんだデメエ！？途中で割り込んでくるんじゃねえッ！」

「ヤベエ…デスメガネだ…」

「それでタカミチ？俺は何をすればいいんだ？」

「そうですね…突っかかってくるような学生には殺さないように意識を刈り取ってくれ

るとありがたいですね」

「ふうん…まあいいや、俺に挑みたい奴らは誰からでもいいから掛かって来いよ」

「ナメんじゃねえッ！」

柔道着の生徒10数名がいつせいに殴りかかってくる。

だが悲しいかな、素人丸出しの動きでは俺は捉えられんよ。

「ほいほいっ」と

高速で迫ってくるガキどもの顎を拳の皮一枚でかするように殴りつける。

すると面白いようにガキどもが次々と落ちていった。

「な、なにをしたんだテメエ!？」

俺の行動を見てリーダー格と思われる人物が声を荒げて聞いてきた。

「なにつて、脳を揺らして脳震盪を起こしただけなんだが」

「なっ!？ そんなこと出来るわけっ!」

「出来るからこそこういう状況になっているんだよ。お前はどつする?」

「こ、降参します……」

「なんだ、やらないのかよ」

それじゃ救急車の手配をしてから見回りに戻るとするか。

「行くぞ、タカミチ」

「ハハ…容赦ないですね、メフィストさん」

「相手の実力がわからないのに突っかかってくるほうが悪い」

こんなのが学祭終了まで続くのかよ。

麻帆良は無法地帯としすぎていないか？

「デスメガネを呼び捨て……」

「あの男は教師なのか?」

「そっぴや春ぐらいに赴任してきた先生だぜ。メフィスト・マクダウェル先生だ」

「これはあれだな…デスメガネよりも凶悪だし、あだ名は『魔王』にしよう」

「魔王メフィスト…なんか妙にじっくりこねえか？」

「激しく同意。魔王の情報を回しておこう、絶対に逆らわないようにしてな」

後日こんな会話があったらしいってことを耳にした。

それとゴツいガキたちが俺を見たときたん逃げ出したりしたんだよ。これぐらいならそこらへんの使い手にも出来そうな技なんだがな。

一通り見回ったあと学園に戻ることにした。

じじいから朝聞かされた仕事の勧誘をタカミチもしてきたので一発殴っておいてやったよ。

そしてクラスに戻ってみたら…

「なんでクラスのバカどもと少年が新田に怒られてんの？」

なんか大半が正座して怒られていた。

怒られていないのは常識派の連中のみ。

それと常識派だと思っていた長谷川までもが一緒に正座していた。

「ああ、メフィストか。これはいつものことだよ」

「そうか、いつものことか」

これで大体の流れが判ってしまうのが少し悲しくなってくるぜ。

「それよりいままで何処行っていたんだ？」

「……ミスって余計な仕事を引き受けちゃってな。それをこなしてたんだよ」

「そうか…とりあえずそれでも飲んで元気になれ」

なにやらエヴァがカクテルらしき飲み物を差し出してくれた。とてもうれしいんだが誰が造ったんだ？

「四葉さんがさっき作ってくれました」

——お口にあえばいいんですけど。

「うむ、中々の腕だな。うまいぞ」

——ありがとうございます。

まさか学生の造ったカクテルでこのような味に出会えるとはな。

3 - Aは不思議で満ち溢れているもんだ。

「マクダウェル先生！勤務時間に何を飲んでいるんですか！？」

「ん？俺に構ってないで少年を叱っているよ。あと学生に飲まれるよりは俺が飲んだほうがいいぞ」

うが有意義だろ？」

「どちらもダメです！あなたはもう少し教師だという自覚を持つてください！」

「わぁーったよ。少年、しっかりやらないとダメだぞ」

「ハ、ハイ！」

「私はあなたにいつているんですよ、マクダウェル先生！」

今日も3 - Aは騒がしいです。

それから数日は何をやるかも決まらずに時間だけが過ぎていった。
3日後ぐらいにようやく何をやるか決まったが、そのあとになぜかさよが悪霊だと思われ
て除霊されかけたり、なぜか茶々丸が大学の研究室で暴れまわったりと色々と事件が起きていた。

ようやく準備が整い色々と作業を始める3-A。
だが最初のほうはあまり作業をしていなかったために全員大忙しで仕事をしていた。

俺はというと、今日もタカミチと見回りだ……ツマラン。

「なあタカミチ…俺いる意味なくね？」

「そんなことを言わないでくださいよ、メフィストさん」

「ぶつちやけお前一人でも問題ないだろ？」

そろそろエヴァがばつくて帰ってくる頃だから相手をしてやりたいんだよ」

「あゝ…それじゃあしょうがないですね。」

わかりました、学園長には僕から言っておきますよ」

おお！言ってみるもんだな。

それじゃあ学園に一度戻るとしよう。

……

……

：

教室目掛けて歩いていくと、前方に見知ったあの赤毛のバカらしき人物が見えてきた。

ってナギか、アレ！？

ちようどいい、最近溜まっているストレスを発散させてもらおうじゃないかあ！

「うおおおおりやあああああああああああ！！！」

「もげるぺあああああああああ！！！」

「ちよっ！ネギ！？」

まずは右ストレートで奴の顔面にぶち込んで吹っ飛ばした。

ってネギだと？

そっぴやあのバカにしては簡単に吹っ飛んでいったが…あれ？

「メフィストさん！いきなりネギに殴りかかってくるなんてなに考えてんの！？」

「あれ？ ひょっとして今のは少年だったのか？」

「ネギ以外に誰がいるのよ——！！！」

これはしまったな、失敗失敗。

今ので少年は意識を失っているようだ。

ひとまず回復させようと俺は近づいていくが、エヴァが帰る途中だったらしく少年が飛んだ目の前にいた。

さて、今少年の姿はナギにとっても似ている+15年前に事情があったとはいえ不便な身体に

された恨みもあるエヴァは…

「くつくくつ、よく私の前に顔を出す事が出来たな！ナギ・スプリングフィールド！」

ガシツと首を掴んで息の根を止めようとしていた。
だがあれを実行させるのはマズい。

エヴァの首元を掴んでネコのように摘み上げてやめさせる。

「コラ、メフィスト！何をするんだ！？」

「エヴァ、ストップだ。それはナギじゃないぞ」

「なんだと？……そういやあいつはこんなに若くないな」

「少年が幻術を使っているみたいだ。ホレ、おきろ」

「あぶぶっ！」

ペシペシツと頬を叩いて意識を覚醒させる。

「すまなかつたな、少年。あまりにナギと似通っていたので勘違いしてしまった」

「ぼーや、なんでそんな恰好してるんだ？」

「ええと、格闘大会に出るためです。元のままだと子供の部にされてしまうので」

格闘大会ねえ。

弟子の実力を測るために出てみるのも一興か…

「よし、決めたぞ。その格闘大会には俺も出ることにしよう」

「むっ、なら私も出るぞ。弟子の成長ぶりが気になるからな」

「ええ！？　メフィストさんと師匠^{マスター}が！？」

「おおッ！」

少年は驚愕、犬は喜びと恐れの入り混じった表情をしていた。

「ただし貴様がこの最弱状態の私に勝てなければ、死よりも恐ろしい特訓が待っているぞ」

「おっ」 楽しみになってきたな、少年」

「えっ！ えええええええええええええええええッ！！」

くつくつく、楽しみだなあ。

「メフィストさん、少しよろしいですか？」

「ん？どうした、茶々丸？」

「茶道部の野点の招待状を届けにきました」

そっぴや俺って茶々丸の点ててくれたお茶を経験していないんだよね。

いい歳してるけどこっちも楽しみになってきたね。

「それと、あの…もし時間があればですが…

学祭期間中のいつでもいいので…その…私、私と…」

「一緒に回ればいいのか？」

「ハ、ハイ」

「いいぜ、予定が決まったら連絡するよ」

今のところ、真名・エヴァ・茶々丸か。

これだけなら3日フルで使えるんだが…木乃香と刹那もくるんだろ
うか…

「ちゃ、茶々丸……お前までもが私の敵に回るのか…」

「申し訳ありません、マスター。ですがこの気持ちを止めることは

できませんでした」

「どんな良い感じに壊れてきている気がしてならんな…」

「お褒めに預かり光栄です」

「褒めとらんわッ!」

なんかエヴァと茶々丸が漫才をしてるけどどうしたんだ?

「あつ!メフィストさんみつけ! せつちゃん、はよ行くえ!」

「お、お嬢様! そ、その…やはり心の準備がまだ…」

「アカン!アカンで、せつちゃん!

このままだとウチらはどんどん置いてかれてしまふんよ!」

やはり来てしまったか…

「一応聞くが…二人ともどうしたんだ?」

「メフィストはん!ウチらと一緒に学祭を回らへん?」

「そ、その…私も一緒に回りたいです!」

「まあなんとかなるか…いいぜ」

むしろ断ってしまうと血の惨劇が起こりそうで怖いわ。

ハーレムってのは茨の道だぜ。

「やったー! せつちゃん、がんばろーな!」

「ハイ!お嬢様!」

「フ、フフフ…メフィスト…少しあっちでOHANASHIしようか…」

「だが断る!」

この場は逃げるが勝ちだ!

さて、待ちに待った学祭の始まりだ。

第肆拾貳話 『フラグ乱立て漢の末路』（後書き）

さてさて、9巻部分を相当省略してしまいましたが大目にみてください。

火曜日にテストが終わりそのまま今日まで遊びまくってしまっただけ全然小説を書いてませんでした。

なので頭に浮かんだ内容をそのままノンストップで書いての投稿w

この話は特に誤字報告をおねがいしますorz

では次は学祭デートでお会いしましょう。

第肆拾参話 『デート開始!』

ついに始まった麻帆良祭。

思い返せば10年くらい来ていなかったから楽しみではあるな。

「それで、メフィスト? 今日はどの女を侍らせるんだ?」

「エヴァ…言葉の中に棘しか感じられないんだが…」

「今日は龍宮さんと木乃香さんと桜咲さんだそうです、マスター。
一氣に3人とは良い御身分ですね…」

「茶々丸まで俺に冷たい…」

これが世の中の父親の心境なのか…
辛いぜ…

「それじゃ俺は先に行ってるぞ。エヴァ、知らない人についていく
なよ」

「子供扱いするんじゃない!」

「では私も超 鈴音の手伝いに行ってきますね。」

マスター、人様に迷惑を掛けないように気をつけてくださいね」

「2歳半のくせに一端の口を聞くようになったな、茶々丸ウ!」

最近、茶々丸が主であるエヴァに口ごたえする時が増えてきたな。
進化していると考えていいんだろうか…本当にあの子はロボットな
んだろうか?

『只今より第78回 麻帆良祭を開催します!!』

side out

【刹那 side】

学園祭が始まり、私はお嬢様とアスナさんと一緒に出し物を見て回っている。

でも今の私はこのあとのメフィストさんとのデートの事で頭がいっぱいだっただ。

きよ、きよきよきよ、今日は……メ、メフィストさんと……そ、その……

「せつちゃん…せつちゃん…」

デ、デデデ、デデデデ、デート……なんですよね……
あ、あわわわわわわわ。

「せつちゃん？　もしかして聞こえてないのかな？」

そっういえば私……男の方とデートするなんて初めて……うう、どうすれば……

「せつちゃん！ー！」

「わひゃあー！」

「よかったー、やっと反応してくれた」

「ハッ！申し訳ありません、お嬢様！　その…私…」

「メフィストはんとこのデートを考えて緊張してるん？」

「……ハイ」

見た感じお嬢様はあまり緊張しておられないように感じる。
この程度で緊張するなんて私は未熟なんだろうか…

「せつちゃん、手えだして」

「？　こうですか？」

「せや、ウチも緊張してるんよ」

お嬢様が私の手を握る。

するとお嬢様の手も少し震えていた。

「ウチも初めてや。だからそないに緊張することないで」

「お嬢様…」

「それに緊張してメフィストはんと会っても迷惑かけるんとちゃうか？」

「そうですね…」

私は昼過ぎからデートとなっている。

お嬢様より先なのは気が引けるが、お嬢様は部活の出し物があるのでこつこつ順番となつてしまった。

真名は昼過ぎから仕事らしい。

「そういえば刹那さん。服装とかどうするの？」

「ハッ！　どうすればいいんでしょうか、アスナさん？」

「ん…私もそんなにオシャレとかよくわかんないし…エヴァちゃんに聞いてみたら？」

メフィストさんの好みとか解るかもよ」

「おお！流石アスナさんです！　そうとわかれば早速行ってきますね！」

「それじゃ私たちはこのまま部活の方に行っちゃうね」

「せつちゃん、有力な情報があつたらウチにも聞かせてな！」
「わかりました、お嬢様！」

エヴァンジェリンさんの気配を辿っていけば辿り着けられるか…
メフィストさんの修行で少しか出来るようになってきたが、こんな大人数でも的確に気配察知をできるメフィストさんはどれぐらい修行をつんでおられるのだろうか…

まあいい、まずはエヴァンジェリンさんをみつけないと。

side out

【木乃香 side】

せつちゃんと別れた後、アスナが唐突に聞いてきた。

「ねえ、このか。あんたの恋をどうこう言う権利は私には無いんだけどさ…」

ホントにメフィストさんの事を好きでいいの？」

「？ それは魔法使いからのメフィストはんの評価の事を言ってるん？」

「それもあるけど…メフィストさんてその……人間じゃないんだよ」
「ん…ウチには魔法使いの事も吸血鬼の事もどうでもいいんだよ。」
「というか未だによくわ

からんしなあ。でもウチがメフィストはんの事を好きなんは変わらへんよ」

アスナが心配してくれるのはうれしいけどな。

せやけどやっぱり自分の気持ちに嘘はつけられんのや。

「心配してくれてありがとな、アスナ」

「友達なんだから当り前でしょ。それじゃこのかもデートがんばんなさいよ」

「アスナもな。高畑先生とのデートは3日目だっけ？」

「ううゝ…私も緊張してきたー！」

ウチはどんな服着ていこかな。

s i d e o u t

【メフィストside】

今日の予定はまず真名とデートだ。

待ち合わせとして世界樹広場で待っているが…まだ来ないな。

「おっと、待たせてしまったかなメフィストさん？」

「いや、俺もさっき来たばかりだからな。大丈夫だ」

真名は薄い黄緑色をしたサマードレスを着ていた。

褐色の肌とマッチしていて中々良い感じた。

「似合っているぞ、真名」

「フフッ、ありがとうメフィストさん」

「それじゃブラブラと回っていかうか、真名はどこがいい？」

「メフィストさんに任せるよ。しっかりエスコートしてくれ」

「任された」

それじゃ面白そうなところから入っていくとしよう。

……

……

…

クラスのお化け屋敷にやってきた。

「メフィストさん……なぜこのチョイスなんだい？」

「ん？ 俺も一応副担任だからな、クラスの出し物を見ておこうと思っただが…真名は

怖いのが苦手だったか？」

「そういうわけじゃないんだが…（楓や古に会ったら何を言われるか）…まあいいか」

よくわからんが早速行くとしよう。

「あー！ メフィスト先生と龍宮さんがデートしているー！」

「……」な、なんだって—— ツツ！

！「……」

「いつ来てもうるさいな、ココは」

「いや、私たちが来たからじゃないのかな？」

俺たちを見かけたガキどもがぞろぞろと寄ってくる。

どいつもこいつも目をキラキラさせて興味津々となった様子でこっちを見ていた。

「とりあえず落ち着け、俺たちは客だぞ」

「そんな事よりもメフィスト先生！

教師と学生というのは不味いんじゃないですか！？」

「別に恋仲に成っているって訳じゃないんだし問題ないだろ」

「それじゃ先生、3つの中からコースを選んでくださーい！」

ええつと…「ゴシックホラー」、「日本の怪談」、「学校の怖い話」か。

個人的には「ゴシックホラー」に興味があつたりするんだが一番恐そうな「学校の怖い話」にするかな。

「真名、『学校の怖い話』でいいか？」

「いいよ、面白そうだ」

「それじゃ大河内、案内を頼んだ」

「わかりました」

ドアを開け中に入っていくと、廊下が何処までも続いていた。ここって教室だよな？

「なあ真名、ここってこんなに長かったっけ？」

「超の奴が何かしたそうだよ」

「超さんの最新技術らしいですよ、先生」

「へえ…よくできてるな」

歩いていると、ぐにゃつと何かを踏んだ感触がした。ふと下を見ると……

「おい、じじい？ こんなところで寝てないで仕事しろよ」

「それは違うんじゃないかな、メフィストさん…」

じじいがここでぶっ倒れていた。

後で文句言われてもこんなところで寝ているほうが悪いんだぞ。

「せ、先生…予定外の事が起こってしまった。

どうやら私たちは学園に潜む怨霊たちを怒らせてしまったらしい」

これはアレだな、乗ってやらないとダメな空気だ。

だがそんな器用なことは俺には出来ないぜ、くっくっく。

「早く逃げないと先生も私も世にも恐ろしい呪いにとり殺されてしまふ……かも」

「それはヤバそうだな…くくくっ」

「フフ、そうだな」

全く恐がっていない俺たちの様子を見て軽く涙目になる大河内だが、そこは案内人の役目

を全うしようと台本通りに動く。

俺の手を引いて出口に向かおうとするが、何かにぶつかった音がしたかと思うと大河内の

首から下が消えて転がっていた。

「おお、これはよく出来ているな」

「それじゃメフィストさん、先に進むとしようか」

「うう……全く恐がってくれない」

そんな発言しちゃダメだろ、大河内。

そのまま大河内を放置して先に進むとすると、隣にあった窓に赤

い手形が次々と現れ、

窓が赤い手形で覆われたかと思うと窓を破ってこっちに手を突き出してきた。

そんな簡単に窓を壊して大丈夫なのか？

「あれ？ メフィスト先生じゃん」

「あれ、ホントね」

「中々いい感じだったぞ、柿崎、那波、釘宮」

「あちゃー、メフィスト先生は恐いのも大丈夫だったか。完璧超人だね」

「フツ、俺を恐がらせたくばこの100倍は持つて来い」

先を進んでいくと鳴滝姉と春日がいきなり頭を下にしてぶら下がってきた。

春日のほうは俺を見るなり顔を青くしていたが大丈夫か？

最後にさよという本物の幽霊が出てきて一番驚いたぜ。

今回はさよも本気だったらしく回りに青色の炎が浮かんでいて結構迫力があつたわ。

「中々面白かったな」

「最後のが一番効いた……」

真名が多少疲れた表情をしていた。

そりゃあ本物の幽霊が出てきたら驚いてしまうよな。

「疲れている暇はないぞ、真名。時間は有限だからな」

「そうだね、それじゃどんどん回っていこうか」

「そっこなくっちゃ」

それじゃ今度はどこに行こうかな。

………
………
…

あれから時間が許すまで遊び倒した俺たち。

射撃ゲームで俺たち両方が最高得点を叩き出して景品をもらったら、
その定員が涙目だ

ったのは笑ったな。

今は昼時なので喫茶店で軽い食事を取っていた。

「今日は楽しんだけたかな？」

「そうだね、久しぶりに遊びというのを体験できたよ」

その割にはあまり楽しそうな顔をしていないな。
なにか対応を間違えたか？

「あんまり楽しそうな顔をしていないぞ？」

「ふう…表情に出していたつもりはないんだが…メフィストさんには隠し事が出来ないね」

「何か俺が不味いことをしたか？ そうだったら謝るが…」

「いや、メフィストさんは悪くない。これからのことを考えるとね
…」

これからのこと？ 何のことだ？

「俺には話せないことか？」

「……私は超 鈴音の計画に参加することにしたんだ」

へえ……「魔法をバラす」計画に賛同したのか。
我が従者ながら大胆な計画によく賛同したもんだ。

「いいのか？ そんな事を俺に言っても」

「メフィストさんがこの魔法先生の味方をする可能性は皆無に等しいからね、問題ない」

さ。むしろ超から味方に出来るようならしろと言われているし」

「それこそ言っちゃダメだろ……」

「私がねだつても味方にはなってくれないんだろ？」

「そりゃあな。興味ないし」

魔法がバレてもバレなくても関係ないし。

ぶっちゃけどうでもいいわ。

「なんで超の計画に参加したか聞いていいか？」

「私はね、昔マギステル・マギの従者としてNGOに参加していたんだ。

来る日も来る日も紛争地域で救助活動……だが魔法が認識されていないこちらの世界で

はあまり大っぴらに活動できない。

力を出し惜しみして救えるはずの命をたくさん取りこぼしてしまつた……だから魔法がバ

レた世界になつてもいいかなって思つてね」

「……俺の従者ならちゃんと信念を持ち、何を言われようとも自分の信じる道を貫ける意

志を持て。それを貫けるなら俺からは何も言うことはない」

何を言われようとも自分の信じる道を貫けるなら問題ない。

だがこのままだと真名は友人たちとぶつかるが乗り越えられるのかな。

カチャカチャ…

「ん？どうした？ 首飾りを外しだして」

「……そろそろいい加減決別するときだと思つてね」

そう言うなり真名は首飾りを軽く上空に投げ、太ももから銃を取り出して撃つ。

弾丸は首飾りについていた勾玉を正確に貫いて粉々に粉碎した。

「いいのか？ あれつてお前にとっては大切なものだったんじゃない？」

「いいさ、確かに昔は好きだったが故人だ。いつまでも既にいない人に縛られているより

本気で新しい恋にいくでしょう」

「真名が納得しているんなら俺からは何も言わないよ」

「それよりメフィストさん、少し目を瞑ってくれないかい？」

「こうか？」

言われたとおり目を瞑っていると、突然唇にやわらかい感触が――

――真名の唇が押し当てられた。

突然の行動に面食らっているとレロツと舌まで俺の口内に侵入してきて…そのままデイー

プキスを10秒ほどしてきた。

「プハッ、いきなりだな」

「フフッ、私なりの本気を出してみたよ。もう少し私が大きくなったら私の全てをメフィ

ストさんにささげるね」

「……そういうませた事はもう少し大きくなってから言え」

「期待して待つてくれ。それじゃ私はそろそろ仕事に行くよ。」

今日は私に付き合ってくれてありがとう、メフィストさん」

真名はそのまま立ち上がり駆け出していく。

俺はというと……絶対にこのことはエヴァに言わないようにしようと誓っていた。

side out

【刹那 side】

そろそろ約束の時間。

朝、アスナさんたちと別れて運よくエヴァンジェリンさんを見つけ、
て助言を仰ぎ、言われたとおりの服装を準備をしたところまではいいんですが……

いざ着ようと思うと……その、恥ずかしかったです……頑張ってきました。

待ち合わせの場所で待つっていると、通りすがりの人々が全員私を見ているように感じる。

うう……やっぱり変なんでしょうか……

「悪い、刹那！またせ……た……な？」

「い、いえ！私も今きたとこでしゅー！（うっ！噛んでしまった！）」

うう、恥ずかしい／＼

メフィストさんは私の服をみて硬直しているし、やっぱり変なんじゃないかな？

「あ、あの、メフィストさん？ ど、どうでしょうか？」

「あ、ああ……ネコミミといいメイド服といい最高です！」

そう、今の私の服装はネコミミ+メイド服なのです。

とても恥ずかしいのですが、エヴァンジェリンさんがメフィストさんはこれが一番好きだ

と言っておられたので羞恥心を乗り越えて着替えてきました。

「それじゃ刹那！行こうじゃないか！ メイド・イン・ヘブンへと！」

「あの、メフィストさん？ 何を言っておられるのかよくわからないんですが……」

「おっと、スマン。つい妄言……ゲフンゲフン、考えていたことがつい口から出てしまった」

メイド・イン・ヘブン？

何かのアトラクションなんですか……

それにしてもいつになくハイテンションでありますね。

「そんなに私の服装がお気に召しましたか？」

「ああ！最高だ！ よく似合っているぞ！」

「あ、ありがとうございます／＼」

少し複雑ですが……やはりうれしいですね。

「それじゃ刹那、色々と見て回っていくか」

「ハイ！」

side out

……

……

…

【メフィストside】

最初、刹那は緊張していたが、遊んでいるうちに慣れてきたみたいだ。

色々回っているうちに発見したんだが、この学園内にジェットコースターがあつたのは正

直驚いた。

ここの学生の科学力はハンパねえ。

流星は茶々丸を産み出しただけはあるわ。

今は休憩を兼ねて巨大な飛行船に乗りこみ学園の街並みを上空から見て眺めている。

すると刹那がこっちを微笑みながら見ていた。

「どうかしたか？」

「ええ、メフィストさんにはきちんとお礼を言っていなかったかなと思います。

こんなふうに穏やかな心で学園祭を楽しんだり、お嬢様達と仲良くできているのも全部

メフィストさんのおかげです」

「そのことが…気にすんな。」

お前の境遇は共感すべきところもあったし…放っておけなかっただけだ」

「ありがとうございます。メフィストさんは私の恩人…特別なんです。」

まだ力及ばずながらも必ず私はメフィストさんの力に成りに駆けつけます」

「まあ気長に待っているとするよ。このまま修行を続ければ間違いなく最強クラスには成れるからな」

こんなに俺の事を想ってくれるのは…正直うれしい。

だが俺は吸血鬼の真祖——人間ではない。

そのところをこいつらはどう思っているんだろうか？

あとで木乃香と一緒に聞いてみるとうしよう。

………

………

…

予定の時間となり、刹那と別行動することとなった。

別れる前にあとで合流するように言ったときは怪訝な顔をされたがちゃんと来てくれると

願いたい。

さて、今日の残りの予定は木乃香とのデートだな。

第肆拾参話 『デート開始!』（後書き）

ど…読者のみんな……

この私にはこのレベルが限界でございま……ガフッ。

だ……だが後エヴァと茶々丸と木乃香と刹那がちょっと残っている

……

が、頑張るよ!

でもこれが終わったらもう……ゴールしてもいいよね?

第肆拾肆話 『二人の決意』（前書き）

予約投稿というヤツを試してみた。

第肆拾肆話 『二人の決意』

さて、残るデートは木乃香とのデートのみとなった。
急ピッチだがそこは気にしないでくれ！

「誰にいつてるん？」

「気にするな。オリ主としての義務を勤めていただけだ」

「？ よわからへんわ」

「そんなことより早く行こうぜ」

「せやね。メフィストはん、ウチはジェットコースターとか行つてみたいえ」

「それじゃアトラクション系で遊びまくるとしよう」

だがどんなものがあるかまったく把握していない俺。

デートコースは事前に調べておくものだった？

しようがないじゃん…デートすることが決まったの前日なんだもん…

「はよ行こ、メフィストはん」

「そうだな…」

満面の笑みでこっちを見てくる木乃香。

この娘の笑みをこの後で消すことになってしまつかもしれないが…

今だけは遊ぶことしか

考えないようになるとしよう。

「やはり麻帆良の科学力は侮れんな」

「大学生は学祭で本気を出しているなあ。面白そうや」

某夢の国のようなアトラクションがちらほらそこらじゅうに設置されているよ。

むしろコレだけである程度金が稼げそうだわ。

「それじゃサクサクいこうか」

「はいな」

とりあえず近くにあったジェットコースターに並ぶ俺たち。

「そういやこんなアトラクションで遊ぶなんていつ以来かねえ」

「メフィストはんはあまりこういうところに来なかったん？」

「そうだな、10年前にはこんなのは無かったと思うし…某夢の国が開園したときぐらいか

なあ」

「あはは……ホンマに不老不死なんやね」

「あの頃は日本中がその話題で持ちきりになったもんだ」

その後も雑談をしていると俺たちの順番が回ってきた。

「おっ、やっとだな」

「楽しみやわ、メフィストはんも久しぶりなら目一杯楽しもうな」
「当然だ」

……

…
…

その後もウチのクラスのじゃないお化け屋敷、乗馬体験、バンジージャンプなんてのもあったな。

木乃香は終始笑顔でいてくれた…満足してもらえて何よりだ。

武道大会のほうは内容が変更されたとかで時間が大幅に遅くなった。なのでギリギリ間に合うので今日のメインイベントであるショーをみてから向こうに向かうことにした。

ショーがよく見える位置の校舎の屋上に陣取って開始の時刻まで待っている。

それと刹那も呼んでおいた。

「お待たせしました！」

「グッドタイミングや、せっちゃん！」

『只今より麻帆良祭名物、光と火と水のマジカルショー！

マホラ・イリユージョンを開始します！！』

刹那が到着したと同時にショーが開幕した。

様々な花火で形作っていく様子は絶品であると言えるだろう。

「きれーやなー」

「これはすごいですね」

「なあ木乃香、刹那。今日は楽しめたか？」

ショーを堪能していた二人は突然の俺の質問に戸惑いいつも返事を返す。

「もちろんや！」

「とても楽しかったです」

「そっか……最後に少し嫌な話をしてしまうが勘弁してくれよ」

二人は頭の上に？マークを浮かべつつも了承してくれた。

「単刀直入に言うが…俺は吸血鬼の真祖——バケモノだ。

人は強大すぎる力を持つ自分たちとは違う存在を拒絶する習性があつてな…俺とエヴァ

は何百年も命を狙われ続けてきた」

「……………」

二人はいきなりの内容に戸惑いつつも口をはさまずに聞いてくれた。

「そんな生活が続けてきたせいで殺しを経験している。それも何百人、何千人とな。

お前たちが俺を想ってくれているのは素直に嬉しい。

だがな…こんな俺と一緒に歩いていくことは『賞金首側』になつてしま

う可能性を秘めている事になる。

お前たちはまだ15歳ぐらいだろう？ 少し考え直して少年側にいった方がいいかもしれんぞ？」

二人は内容の重さに顔を俯かせて考え込んでいる。

まあ別にすぐ決めるってわけじゃあないんだが…思春期特有の「愛は全てを超える」って

考えで来られると困るからな。

最低限の覚悟をしてもらわないと…

「メフィストさん」

最初に顔を上げたのは刹那だった。

「私はメフィストさんが修学旅行の時に言ってくれた言葉で、もう立場や常識に囚われな

いと決めたんです。

正直、メフィストさんとエヴァンジェリンさんが歩んできた道を完全に理解できる訳

じゃありませんが…それでもここで諦める訳にはいかないんです

！」

「せやな…」

刹那の啖呵に続くように木乃香も覚悟を決めたような顔をしていた。こいつら二人ともそんな簡単に決めて大丈夫なのか？

「ウチは正直メフィストはんがどれくらい他の魔法使いに恐れられるんかよわからへ

んのや。でもな、そんな立場の違いってだけで諦めるんはちと難しいえ」

「いいのか？ 俺の側に着くって事をちゃんと理解したのか？」

「私たちが危なくなったらメフィストはんが助けてくれるんやろ？」

「お嬢様……」

くっ…… 木乃香、上目遣いで俺を見るな…

そんな風に見られたらつい守ってしまうじゃないか！

いやいや、待て待て俺！これは孔明の罠だ！

「曲がりなりにも俺の従者だからな。ちゃんと守ってやるよ」

って俺の口は何を喋ってるんだ!?

思っていたことと実際にしゃべっていることがちつが——う
!!

ハッ！ まさか新手のスタンド使いが現れたか!?

「それとメフィストはん。ちょっと屈んでくれへんか?」

「ん? これでいいか?」

あれ?このパターンって…

考え事をしていたら木乃香が唇を押し付けてきた。

……いかな、最近反応が出来ない。

気持ちいいのはいいんだがこれは少し問題じゃね?

「つと、いきなりだな木乃香」

「えへへ、メフィストはんは競争率が高いからなあ。

少し強引に行かないとウチらには勝ち目が無いんよ」

一度唇を離してもすぐに木乃香がキスをしようと迫ってきた。

すると顔を真つ赤にしながらもこっちをチラチラ見てくる刹那が視界に入ってきた。

「ちょ、木乃香!

さっきは突然だったから許すが、さすがに人前でもう一回するのはちょっと……」

「ダメやで。今はウチだけを見て、メフィストはん」

俺の顔を両手で掴んで自分の顔へと近づけて涙目になりながら可愛いことを言う木乃香。

そんなことを言われたら…

「グハアッ！！ 涙目でそんなことを言わないでくれ……」

精神にダメージを受けている隙にまた唇を奪われるオレ。

なんだかなあ…うれしいんだが中学生に半分襲われている俺って情けねえ…

「ん」 ウチはここまでで満足や。次はせつちゃんの番やで」

「わ、私はけ、けけけ、結構です！ 恥ずかしすぎて死んでしまいます！」

恥ずかしがり屋の刹那は羨ましそうにしながらも拒否する。

でも刹那だけキスしていないからなあ。

これは流れるにすなくちゃダメだろう。

俺がしたい訳じゃないぞ！ まあしたいかたくないかで言えば勿論したいが…

ええい！ ままよ！

「んん！！」

「わっ！ 大胆やわ……」

俺は刹那を抱き寄せて唇を奪う。

刹那は驚いて少し抵抗したがすぐにされるがままになった。

それどころかおずおずといった感じでこっちに舌を出してきた。

刹那の大胆な行動に少し驚いたが、すぐに俺もディープキスを開始。ピチャピチャと卑猥な音を醸し出しながらも俺たちはディープキスを続けた。

ちなみに木乃香は傍であわわ～と言いながら興味津々といった様子でガン見していた。

結構ハズい。

「あうう／＼／」

「中々よかったぞ、刹那」

「あ、ありがとうございます／＼／」

刹那の頭を撫でてあげると、はにかみながら礼を言われた。
何この可愛い小動物ちつくな仕草。

「うゝ！　ウチもディープキスしたいー！　メフィストはん、もっかいキスしよ！」

「お、お嬢様！？」

「ダゝメ、今日はこれで終わりだ。

そろそろ武道大会の会場に向かわないといけないからな」

「そんなこと言わないでもつかいしよ！　ね？　ね？」

木乃香がキスをねだりに迫ってくるが、もう流されるわけにはいかん！

サービスタ임は終わったんだよ！

「そこまでだ！　メフィスト・マクダウエル！」

「は？」

「なんや、あの先生たち？」

「あの方々は魔法先生です、お嬢様」

煩惱と戦っているといきなり怒鳴られた俺。

アホどもが何の用だ？

いつか見たガン黒を筆頭にどっかのSPのような格好をしたおっさんが4名ほど——合計5

名のザコがこっちを見て睨んでいる。

特に問題は起こしていないと思うんだが…

「ついに本性が現れたな、吸血鬼め！世界樹の魔力を利用して学園長のお孫さんを手に入

れようとすると…この薄汚い悪魔が！」

あゝ？今のはケンカを売っていると判断していい内容だったよなア？

「なあ刹那…殺つてもいいよな？」

「そ、その…穏便には出来ませんか？」

「ムリだ、俺の心は敵に情けを掛けるほど寛大に出来ていない。

てなわけでレッツKILLINGタイム開始！　　つとその前に刹那は木乃香の目と耳を押さえてる。

スプラッタシーンを見せたいなら別にかまわんが」

「お嬢様、失礼します！」

刹那が木乃香の目と耳を押さえたのを確認した後、縮地でアホ共のすぐ隣に移動。

そのまま気付かれないうちにガン黒以外の取り巻きを上空へと殴りつけて吹っ飛ばす。

反撃の隙を与えないために俺は上空へ吹っ飛んでいったザコ共の隣に飛び上がり幾度も拳のラッシュを全身にお見舞いした。

この間、約0.7秒。

全員の骨が複雑骨折の状態になったと思われたので、一人ずつ頭を掴みガン黒の周りに刺さる

ようにと頭を下にして投げ飛ばす。

そして最後の獲物を狩ろうと虚空瞬動で高速に接近。

拳に死なない程度に気を纏いガン黒目掛けて右ストレートを繰り出す。

ガン黒はまともに攻撃を喰らいその場に倒れ伏すが…そこで攻撃をやめないのがオレクオリティ。

ガン黒がいた場所に降り立ったと同時に連続ラッシュを100発ほどお見舞いして地面を陥没させた。

この間、約0.9秒。

最後のシメとして2人ほど陥没した穴を覆うように敷いて、その上に一人を頭を下にして垂直になるように立て、残りの一人を立てた奴と垂直となるように縛り上げた。

「ジャスト1秒。これは芸術だな」

出来上がった作品は、さながら墓標のように仕上がっていた。うむ、ガン黒ここに散ると書いておこつ。

「よし、完成だな」

「何をしておられるのですか——ッッ!」

「なんだ、刹那？ 見て判らんのか？」

「見て判るからこそこうして怒ってるんですよッ!」

「メフィストはん、これはやりすぎなんじゃない？」

むっ、従者二人はこの芸術に不満のようだ。どこが不満なのかサッパリわからんのだが…

「二人とも何が不満なんだ？」

「全部ですよ（や）！」

「まったく、殺さなかっただけマシだ。それどころか芸術作品に昇華させてやったんだ。」

感謝こそされ怒られる筋合いは無いぞ」

「どうしよう、せつちゃん……ウチ、考え直したほおがええかも……」
「私も同じことを考えていました、お嬢様……」

そっぴやこれどうすっかな。

じいじに連絡したほうがいいんだろうが……生意気言っていたしこのまま放置にしよう。

「それじゃショーも終わったことだし武道大会に向かうとしよう。
お前らはどうする？」

「他にやることもないですし……ついて行きます」

「ウチも行くえ」

場所は変わり龍宮神社。

主催者が変わり、それに伴い武道大会の開催場所はここに変更となつたらしい。

「おつ、エヴァ発見」

「ん？メフィストか。ふん……今日は3人とデートできてよかったな」

まだ怒ってるのかよ……頼むからnice boat みたいな展開

は勘弁してくれよ。

ん？ nice boat ってなんだ？

「まったく…ほれ」

「わっ！ い、いきなり何をする！？／／／」

とりあえずご機嫌取りにエヴァをお姫様抱っこをする。

エヴァは真っ赤になっていたがうれしそうな顔をして喜んでいっつぽい。

「とりあえず今日はコレで我慢してくれ」

「し、しょうがないヤツだな／／／

お前が抱っこしていたいのならこのままでいてやらんでもないぞ

／／／」

ツンデレありがとうございます。

素直じゃないエヴァも可愛いなあ。

『ようこそ！ 麻帆良生徒及び学生及び部外者の皆様！ 復活した「まほら武道会」へ突然

の告知に関わらずこれほどの人数が集まってくれたことを感謝します！』

なんか朝倉が司会をやってるな。

そのあと主催者になったらしい超 鈴音が出てきた。

……どうでもいいがただの学生に資金面で負けてる大人はみんな涙目だな。

『私はここに最盛期の「まほら武道会」を復活させるネ！ 飛び道

具及び刃物の使用禁止！

そして呪文詠唱の禁止！ この2点を守ればいかなる技を使用してもOKネ！』

「アハハハハハ！ 最高だぜ、超 鈴音！」

くくくつ…魔法をバラすのが目的なのは知っていたが、こうもズバツといくとはなあ。

その度胸、気に入ったぞ！

「随分とご機嫌じゃないか、メフィスト」

「くくくつ、これが気分良くならずにいられるか。これほどまでに無謀にも正面から魔法

と戦おうとしているんだぞ。極上の見世物になりそうじゃないか」

「確かにそうだな…超 鈴音の本気を見て酒の肴とするか」

「それいいな。そのときはオレの秘蔵の酒を飲むでしょう」

エヴァと見世物の楽しみ方を話していたら前のほうが騒がしくなる。何事かとそっちを見ると、そっちには少年と犬がなにやらギヤアギヤア騒いでいた。

「古老師は僕の拳法の師匠だし、コタロー君だって楓さんに負けたんですよ！？」

コテンパンにされちゃうよ！」

「アホ！ 俺かてあれから毎日修行は怠ってへんわ！」

「龍宮さんにいたっては…殺られるかも！？」

「アホ！ 冷静になれ！」

たつみー姉ちゃんは拳銃使いやろ！？ 素手なら勝負はわからんわ！」

「で、でも勝てる気がしないってゆーか…」

「どうがんばってもコタロー君と僕4位と5位だよ——ッ
！」

「勝手に負けることにすんな——っ！——」

犬：お前はホント樂觀的だな。

達人はどんな得物でも敵を殺すことが出来るんだぞ？

「少しだけハンデが出来たからって勝てる気になるとはまだまだだな。それじゃまずは軽く脅かしておいてやるとしよう。」

「4位と5位になれると思うとは、なかなかの自信じゃないか。え？ 少年と犬よ」

「私たちのことを忘れてるんじゃないか？ ぼーや」

「^{マスター}師匠とメフィストさん——ッッ！——すっかり忘れてた——ッ
ッ！——」

「げっ！ 真祖の……」

いい感じに顔が青くなっているな。

真名と楓と古 菲も参加するみたいだし、面白くなってきた。

「ちゃんと約束は覚えているか？ 最弱状態の私に負けたら地獄の特訓だよ」

「ハ、ハイ！ もちろんであります！」

ピシッと敬礼をする少年と冷や汗をかいている犬。

「（ムリだよ！ やっぱりの大会ムリ！）」

「（た、確かに真祖の兄ちゃんはやバいけど……もう一人のほうは魔力を封じられとんやろ？」

「ほならただの10歳の女の子やん！ いけるって！」

「聞こえているぞ、その犬。みてくれと前情報だけで戦況を判断

すると痛い目を見るぞ。

なんならこの場でひき肉にしてみてもいいが？」

「おっ、面白そうだな。俺に任せてくれよ。最近剣が血が欲しいって騒いでるんだわ」

「（こ…怖っ！！）」

最近本気バトルをやってないからな」

ん？ スクナとフェイト？ あんなのザコザコ。

「やあ楽しそうだね」

「え？……あつ！タカミチ！」

「ネギ君たちが出るなら僕も出てみようかな」

「なんだ、タカミチ？ お前も調教されたいのか？」

「いやいや、調教って……ホントはちょっと覗くだけのつもりだったんですがね。」

ネギ君が小さい頃ある程度力がついたら腕試ししようって約束してたもんで」

「い、いや、あの、タカミチ！ 僕まだぜんぜん修行の途中だしまだずつと先でいいよ！」

「あれ？ そうかい？」

「あ、あの！ 高畑先生が出るなら私も出ます！」

中々カオスな状況に成りつつあるぜ。

この分だと3 - Aの関係者がトーナメントの大半を埋めそうだね。

「つとちよつとゴメンね。メフィストさん、ちよつとこちらへ…」

「ごめん、エヴァ。タカミチの奴が内緒話をしたいらしい。降ろさせてもらうな」

「仕方が無いな…」

タカミチが会場から少し離れた場所まで俺を引っ張っていった。

「そのですね…ガンドルフィーニさんの件なんですけど」

「？ 誰それ？」

「え、ええっと……ついさっき病院に運ばれた魔法先生なんですが……」

「……ああ、そっぴやさっきガン黒男と黒服野郎を潰したな。それがどうした？」

そう言っているとタカミチが少しだけ溜息を付いて頭を抑えていた。

「たぶんまたガンドルフィーニさんが何かしたんだと思いますので謝っておきますね。」

申し訳ありませんでした」

「ん、報復活動はしたから別にもう気にしていない」

「はは……次はもっとお手柔らかにお願いしますね。それでは大会のほうへ戻りましょうか」

「ああ、そうだな」

どんな展開になるか楽しみだ。

『では参加希望者は前へ出てくじを引いてください！ 予選会はくじ引きで決まったそれ

ぞれ20名1組のグループで行われるバトルロワイヤル！

予選会終了ギリギリまで参加者を受け付けます！ 年齢性別資格制限一切なし！

本選は学祭2日目、明朝午前8時より！ 只今より予選会を始めます！』

それじゃくじを引くでしょう。

ええつと、おれは……Fか。

「タカミチ、お前は何番だった？ 俺はFだ」

「ええつと僕は……Hですね」

「それじゃ陳腐だが本選で会おうじゃないか」

「むしろ会えないほうがおかしいでしょうに……」

「おつ、タカミチとの話はもう終わったのか？」

タカミチと話しているとエヴァがやってきた。

どうやらグループは俺と一緒にのFらしい。

エヴァと一緒にステージへと上がるとマンガで出てくるような無駄な筋肉を付けているガ

キ共が一斉にこつちをみてきた。

「おい、メフィスト？ なんか注目されているぞ」

「あれ？ まったく身に覚えが無いんだが……殺気とか全く出してないよな？」

「全然出ていないが……やっぱり何かしたんじゃないか？」

んん？ 全然判らんわ。

なんでこんなに見られるのか考えていると司会である朝倉が教えてくれた。

『Fグループでは魔王のあだ名を持つメフィスト・マクダウェル選手が全員に注目されているぞ』

「……！！ 広域指導活動での傍若無人ぶりに恐れた学生がつけたこのあだ名！

まさにピッタリだとこの私も思います……！！』

「だとさ、メフィスト」

「なんだかなあ……あながち間違っていないから別にいいけど……」

「まあいいや、メンドくさいから全員一気に掛かって来い」

「なっ！ 魔王だかなんだか知らねえが調子乗ってるんじゃない……
ゲバアツ！！」

何か喋っているうちに場外へ殴り飛ばす。

3人ぐらい巻き込まれて一緒に飛んで行ったが…鍛えてなさすぎるわ。

まあ一般人に期待するだけムダか。

ちっちと終わらせるつもり。

[illegible]

ディオも真つ青な速度で拳のラッシュを全員に2発ずつお見舞いする
1発目で意識を奪い、2発目で場外へと叩きだした。

「こ、これは！？ 一体何が起きたんだ——ッ！ Fグループ
ではいきなりメフィスト

選手・エヴァンジェリン選手を残して全員場外へと吹き飛んだ！^④

これで俺とエヴァは本選出場が決定したな。

他のグループはまだ決まっていらないが……そろそろ終わるだろう。

「つてあれ？ 刹那がなんで参加してるんだ？」

「それならさつき神楽坂明日菜と一緒に参加していたぞ」

「ふん……闘う機会があったら刹那の方も腕試しをしてやるとしよう」

それとアル……なんでお前まで参加してるんだよ？

エヴァとタカミチは気付いていないが、俺の目は誤魔化されんぞ。

……
……
……

『皆様お疲れ様です！ 本選出場者16名が決定しました！

本選は明朝8時より龍宮神社特別会場にて！ では大会委員会の
厳正な抽選の結果決定

したトーナメント表を発表しましょう！ こちらです！』

【第1回戦】

〔第1試合〕 田中 VS 高音・D・グッドマン

〔第2試合〕 村上小太郎 VS 山下慶一

〔第3試合〕 神楽坂明日菜 VS タカミチ・T・高畑

〔第4試合〕 龍宮真名 VS 古菲

〔第5試合〕 長瀬楓 VS クウネル・サンダース

〔第6試合〕 メフィスト・マクダウェル VS 佐倉愛衣

〔第7試合〕 エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル VS

桜咲刹那

「えっと…佐倉愛衣って誰だ？」

「くっくく、刹那あ…覚悟しておけよ」

「お、お手柔らかに頼みます、エヴァンジェリンさん…」

「た、たたた、高畑先生と——ッ！！」

「アイヤー、マ、マズイアル…」

「よかった…強そうな人達じゃないよ…」

各々思うところがあるが、まずは予選終了。

それとアル、不正は良くないぞ…くっくく。

「それじゃエヴァ。ちょっと最近ぬるま湯に浸かっていたせい少し鈍ってきていてな。」

別荘に籠もるからあと頼んだ」

「わかった、ほどほどにしておけよ」

「もちろん、それじゃあな」

それじゃこの弛みきつた精神を叩き直すでしょう。

第肆拾肆話 『二人の決意』（後書き）

武道大会のトーナメントは、イベントバトルである真名 VS 古
菲のみ固定としてその他は作者がくじ引きで決めました。

そしたら…高音さん、ドンマイ！

脱げ女の称号は運命付けられているなあと感じましたw
あと愛衣もドンマイ！

アルの思惑は粉碎されてしまいナギとの約束を果たせるのだろうか？
……………作者はネギが嫌いだからやらないかも？

第肆拾伍話 『麻帆良武道会開始』（前書き）

アルVSネギはいらないって意見が来たので考え中の臆識です。
どうしよっかな〜……

そうそう、久しぶりにアクセス解析を見たら、
PV 300万 ユニーク 30万突破 Σ（□、□、！）ナ、ナン
ダッテー！！
とてもびっくりしましたw

いつもこの作品を見てくれている読者皆さん！ いつもいつもホントーにありがとうございます！！

第肆拾伍話 『麻帆良武道会開始』

【三人称 side】

麻帆良祭1日目の打ち上げを朝方まで続けていたアスナ・木乃香・刹那・ネギ・小太郎の5

人は、ネギたちの修行場所であるエヴァの別荘で休んでいた。

睡眠を取った後、小太郎とネギは武道大会へ向けて修行を開始し、アスナたちは試合のこ

となんでどうでもいいわー！と思いつつ遊んでいた。

アスナの場合は相手はタカミチなせいもあって諦めとうれしさが入り混じっていたが…

「そういやせっちゃん、メフィストはんはどこにいるん？」

「エヴァンジェリンさんの話だと自分の別荘で修行をしておられるとか…」

「メフィストさんの修行ってどれぐらいヤバいのかな？」

アスナは少し興味津々といった様子で刹那に聞くが、刹那と木乃香はメフィストの修行風景をまったく見たことがないので答えようがなかった。

そこにネギに指輪上の魔法発動体を渡しに来たエヴァがやってきたのでエヴァに聞いてみよう。アスナたちは駆け寄っていく。

「ねーねー、エヴァちゃん。メフィストさんって今なにやってんの？」

「お前には関係ないことだよ、神楽坂 明日菜」

「ムカツ！ そんな言い方はないんじゃない、エヴァちゃん！？」

「ア、アスナさん落ち着いて」

「せやで、アスナー。ここでエヴァちゃんに怒っても仕方あらへんよー」

「刹那と木乃香も興味あるのか？」

刹那と木乃香がアスナと一緒にいたのでこいつらもどうせ一緒のことを考えてるんだろう
と思ひ質問するエヴァ。

自分の想い人であるメフィストのことはどんなことも興味がある二人は大きく頷いた。

「ハア…仕方がない、特別に見せてやるよ」

「…やったー!!」

「なんやなんや？ 何かするんか？」

「^{マスター}師匠、何かするんですか？」

騒がしいのに反応したネギと小太郎が近寄ってくる。

エヴァはそれに反応せず自分の水晶にメフィストの別荘内を映し出す。

するとそこには……漆黒の巨龍——バハムートに巨大な海蛇——リ

ヴァイアサン、白銀の

毛並みを持つ馬——イクシオン、身体が氷で出来ている女性——シ

ヴァ……合計4体の

幻獣がメフィストとガチバトルを繰り広げていた。

「……………」

次元の違う戦いを初めて見た5人は言葉を失ったが、メフィストと長い時間を一緒に過ご

してきたエヴァは笑みを浮かべていた。

「ちよっ！何よコレ——ッ！！」

「これがメフィストさんの修行風景ですか……」

「腕がもげてもすぐに再生して戦つとるんか？」

「一回戦は勝てるとしても、その次にはマスターか刹那さん……万が一勝てたとしても次

は確実にメフィストさんになる………ガクブルガクブル」

「なんや？ あの実祖の兄ちゃん、笑いながら闘つとらんか？」

「当然だ、メフィストの本気はこの程度ではないぞ。宝具を使わずに身体能力と魔法のみ

で闘っているみたいだしな」

エヴァの発言に絶句する子供たち。

そして絶対に敵にだけは回さないようにしようと硬く心に誓った。

「さ、さてネギ。さっきの瞬動の練習をしようや」

「そ、そうだね小太郎君。さっきの光景を忘れるよう一心不乱に練習しようね！」

「アスナさん、私たちも練習しましょうか」

「そうね、相手が高畑先生だけど……なんとか一撃だけは与えたいかな」

「怪我したらいつでもウチが治してあげるえ」

ネギは何がなんでも負けないために、小太郎はネギと戦うために、刹那は師と戦えるかも

しれないので少しでも届くよう自分の力量を高めるために、それぞれ修行を開始した。

side out

【メフィストside】

〔学祭2日目・龍宮神社〕

昨日の戦闘で昔の感覚を思い出した。

幻獣4体との縛り有りの戦闘は中々にハードだったがそれ以上に心躍る戦いでもあった。

大会の待合室に入ると…どうやら大体が揃っているようだ。
真名や楓たちの姿もある。

「おはようございます、メフィストさん」

「ん？ ああ、刹那か。おはよう」

「なんだか今日は纏っている空気が違いますね」

「まあ昨日はいろいろとやっていたからな」

少しやりすぎ感もあるけど…まあいいか。

『おはようございます、選手の皆さん！』

適当に時間を潰していると、奥から朝倉と超が出てきた。

朝からテンション高い司会だな、朝倉。

『ようこそお集り頂きました！ 30分後より第1試合を始めさせていただきますが――』

ここからはルールの説明。

戦う場所は神社内に設置された舞台。

「ダウン10秒」「リングアウト10秒」「気絶」「ギブアップ」
で負けとなる。

それにしても銃器・刃物禁止と魔法詠唱禁止か、
どうやって戦おうか悩むな…

「なあ、エヴァ。俺はどうやって戦ったらいいと思う？」

「私に聞いても仕方がないだろう…。無詠唱でやればどうだ？」

「どうせお前のことだ、大抵の呪文は無詠唱でいけるんだろ？」

「確かに出来るが…いまいち面白いな。新術でも開発するか」

「今からか!？」

「ああ。(どうせアルと戦うことになるだろうし、やっという損はないだろうな)」

そっぴゃきつからアルの野郎がこつちを見てくるんだが…

昨日のトーナメントを操ろうとしていたところを妨害したのを怒っているのか？

“こつちみんなよ、アル”

“フウ…これが怒らずにいられますか。折角友との約束を果たそうと計画したんですよ”

“あゝ…お前のアーティファクトの能力を使うのか？”

“そのつもりで舞台も揃えようと考えていましたが…やってくれませんでしたね”

なんかアルがご立腹だ。

だが他人の良い様に操られるのは好かないからな。

“くつくつく、残念だったな。ナギとの約束はあとでやってやれ”

どうやら朝倉の説明も終わったみたいだし、そろそろ試合開始だな。

『只今よりまほら武道会、第1試合に入らせて頂きます!』

第1試合はロボットと女子高生らしい。

まったく興味がわかない組み合わせだったので覚えてなくても俺は悪くない。

「ええっと……これとこれを組み合わせ……これで放出されるように……ブツブツ」

「何やらメフィストさんが不穏な行動をしておられませんか?」

「なんか新術を編み出すらしいぞ」

「ええ! そんな簡単に編み出せるもんなんですか!?!」

「無理に決まっているだろうツ! こいつが規格外なだけだ!」

なにやら周囲がうるさい。

もうちょっとでわりと実用性もありネタ武器でもある物が出来そうなんだ。

これをこうして、魔力を注ぎ込めば……

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ
ツ!!--』

なんだ？ いきなり会場が騒ぎ始めたが…

「あつ、コラ！ 見るんじゃない！」

「え？ちよっ！？ 目を塞ぐんじゃない、エヴァ！ 何も見れないじゃないか」

「見なくていい！ いや！むしろみたら殺す！」

「見るだけで殺されるのか！？」

どんな状況なんだよ…

『えー、大変なハプニングがありました、何故か会場は色々な意味で大盛り上がり！』

くそっ！ なんつー気になる煽りなんだ！

だがもう終わった気配がするし…くう…

『次は第2試合に行きたいと思います！ 村上選手！山下選手！壇上へお上がり下さい！』

この試合はわざわざ語るまでもないだろう。

いかに犬とはいえ一般人が少し武術をかじった程度の奴に負けることなどあり得んからな。

放っておいて最後の仕上げといくか。

ここにアレを仕込んで…これとあれを繋げて…よし！

「完成だッ！！」

「も、もう出来たのか！？ ちゃんと使えるんだろうな？」

「多分出来る！」

「多分って…才能あるバカは手に負えん」

いくらなんでも酷くね？

とりあえずこれはアル戦にとっておくでしょう。

『では第3試合を始めたいと思います！』

ありや、こっちに気を取られたら次の試合が始まっちまった。

えっと…ああ、アスナとタカミチか。

こりやどう考えてもタカミチの勝ちだな。

「フフ、それはどうでしょう」

「いきなり湧いてくんなよ、アル」

「アルだ…と？ まさか貴様ツ！？」

「お久しぶりです、エヴァンジェリン。ですが今はクウネルとお呼びください」

結果が解りきっている試合にまたもや興味を失っていたらいきなりアルが反論してきた。

どうでもいいがなんで俺の考えがわかるんだ？

「表情に出っていたので予測するのは簡単ですよ。」

それはそうとメフィスト、少し賭けをしませんか？」

「賭けだと？ いいぜ、乗ってやろう」

「ではこの試合の勝者を予想するという内容で…私はアスナさんの勝ちに賭けます」

「ハッ！ 何を考えているかと思えば……当然俺はタカミチだ」

いくら姫子ちゃんとはいえ今のタカミチに敵うはずがないだろう。

「では賭けは成立ということ…そうですね、ではタカミチ君が

負けた場合はエヴァン

ジェリンがこれを着て次の試合に出てもらいましょうか」
「ちよつと待ていいいいいいいいいい！！」

アルが笑い名ながらスクール水着をエヴァに着るように言ってきた。
当然エヴァは絶叫して反論しようとするが…

「待て待て、アル！ それならアスナが負けたのならこっちにしないか？」

俺はランドセルと麻帆良小学校の制服を見せる。

アルはそれもよさそうですねっといった表情をしていたがエヴァは大層ご立腹だ。

「き・さ・ま・ら・は——！！！！」

私しか損しないじゃないかア！！ そもそも貴様らにリスクが無いとはどういうことだ！！

それになんで私で遊ぶような内容なんだよおおおおおおおおおおおお！！」

俺の首を掴んでブンブン揺さぶってくるエヴァ。

そんなに照れるなよ。

「照れとらんわああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

「なぜ…俺の…考…えが…わかつ…たし…：…ちよ！これキツイ」
「フフ、メフィスト。試合が面白くなってきましたよ」

アルに言われて視線を舞台に向けると…なんとアスナが居合拳を避けたり時にはアーティ

ファクトで受け止めていた。

それだけでも驚きなんだがさらに驚くべき事に…

「なぜ神楽坂明日菜が咸卦法を使えている!？」

そう、咸卦法を使えていたのだ。

これはもうびつくり、だがタカミチは驚きと嬉しさが入り混じった表情をしてた。

「おや？ メフィストは知らなかったのですか？

アスナさんは昔、咸卦法を一発でやってのけたんですよ」

「なんともまあ…アスナも主人公補正が付いていたとは…」

俺は主人公補正の代わりにチート満載だけど。

羨ましくないぞ、ああ全然羨ましくなんかないぞ。

試合は均衡していた。

どうやらアルが念話で入れ知恵して対応させているらしく、素人の動きじゃない動きが見受けられる。

まあどっちの結果に転んでも面白そうな事になりそうなので入れ知恵結構。

タカミチはどうやら少しだけ本気を出すらしく、アスナを舞台端に飛ばし、その隙に自身

も咸卦法を使った。

「タカミチのやつ、力だけは本気を出すみたいだな」

「これはどうしようかね」

「アル！貴様、何を入れ知恵している!？（スク水よりかは小学生のほうはまだマシだが…って違うだろ!! 私は何でこの賭けを

受け入れているんだ！？）」

またガツクンガツクン首を揺さ振られる攻撃が始まった。
そんなに照れるな……また揺さ振りが強くなったよ。
そろそろ脳内がシェイクされて気持ち悪くなってきたんだが……

一方試合は咸卦法の密度の差が出てアスナが押されている。
野菜と犬はやれ卑怯だ、やれズルいだとか抜かしているが…これは
真剣勝負。
闘争の場にいちいち卑怯などと言っていたらキリがない。

「無極而太極斬」
「むっ！」

なんと！ タカミチの咸卦法を打ち消しやがった。
なんかしらんが咸卦法を打ち消したアスナはそのままタカミチの頭
をハリセンで叩く。

一撃を入られたアスナは嬉しそうな顔をして油断しているが…やは
りまだまだ素人で未
熟者。

あの程度の力で叩いても大して意味はなく、タカミチがアスナの首
筋を強打して意識を刈
り取った。

「なんだ、結局タカミチの勝利だな」
「フフ、残念です。エヴァンジェリンの慌てふためく様子が見れた
事だし良しとしましょう」
「なっ！貴様あ！さてはそれを狙って！」

エヴァが爪で切り裂こうとするが、なぜかアルの姿がフッと消えて

しまい避けられる。

転移魔法なんかじゃなかったし…ひょっとして分身体か？

『それでは第4試合を始めたいと思います！』

次の試合は真名と古菲。

試合が始まるなり真名の手から500円玉が弾け飛んで古菲の額に当たるが…

古菲はまだ終わらず、試合を続けた。だが…

「真名のヤツ、精度が欠けていないか？」

「やはりそうか…龍宮の実力はこの程度ではないと思っていたが…」

「ええ！？ 龍宮隊長はあれでも本気じゃないんですか！？」

周りで一緒に試合を見ていた少年が食い付いてきた。

一緒にいる3-Aのメンツも気になるらしくこっちを見てきた。

「古菲は気の扱いを完全に理解していないからか…または別の理由で手加減しているのは

確実だ。だがまあ、ある程度は本気を出しているようだかな」

真名が500円玉の弾幕を張り、古菲がそれを避けつつ突っ込み攻撃を当てようとするが…

真名は冷静に返り討ちをして距離を取る。

そして弾を雨あられのように降らせて古菲の全身にぶつけて行動力を奪い倒れ伏せさせた。

「まあこんなもんか」

「いや、まだやるようだぞ」

古菲はここで終わるのかと思ったが、ネギの応援で目に力が戻ったらしい。

尻尾のように服に付いていた布を持ち、真名の片手と顔を固定するようにして捕まえた。

「あれは何と言ったかな……おお！そうだ布槍術だったな」

「布槍術か…中国拳法は色々面白い技術があるな」

捕まった真名は布を500円で貰って拘束を解く。

古菲は布を槍のように扱い攻撃するが真名はそれを悉く避け、古菲の左手を撃つ。

攻撃を喰らい体制を崩す古菲だが、その反動を利用して真名の片手を布で掴み自分の方へ

と引き寄せることに成功した。

まだまだ未熟だが気を集中させて真名の腹目掛けて攻撃を繰り出す。

一方真名も攻撃を喰らう瞬間に数十枚の500円玉を一斉に連射するが…古菲は攻撃に耐え、

真名は倒れ伏した。

なんだか出来レースっぽかったが布 VS 500円玉という面白い闘いを見れたし良しとしよう。

次の試合は 長瀬楓 VS クウネル・サンダース

今の楓じゃアルに勝つのは不可能だろう。

試合は、それはそれは一方的なものだった。

楓は色々な手を使いアルに攻撃するが全て無効化されてしまい攻撃が通らなかった。

だがアルのほうも決定打を打つことが出来ずにいた。

そこでアルは自分のアーティファクト「イノチノシヘン」の能力を使い、ナギの身体能力を使って止めを刺した。

「……………中学生相手に大人げなさすぎないか？
まあいい、次は俺の試合だ。」

「そついや佐倉愛衣ってヤツを俺まだ知らないわ」

「大方、魔法生徒の一人なんじゃないか？ 魔法先生の姿はないし
「まあ実力のほどは期待したらダメだな」

それじゃ行くでしょう。

壇上に上がると、対峙しているのは麻帆良学園の制服を着た中学生だった。

あと付け加えるとしたら……………めっちゃ涙目になっているところだな。

どうやら俺の悪名のせいでも怯えているようだった。
そんなに涙目になられたら……………イジリたくなってしまっぜ。

『それでは第6試合開始！！』

「うう…ホントはやりたくないのに…お姉様の命令とはいえこれはないよ…」

相手がああ悪名高い『幻獣使い』なんて…」

「そんなに怯えるなよ」

「うひゃあい！！」

試合が始まってブツブツと文句を言っていたので後ろに回って声を掛けたらおもいきり

驚かれた。

なんだかなあ…

「ほら、試合は始まっているぜ。抵抗しないでいいのか？」

「うう、アデアット！『オソウジダスキ』！！」

距離を取ってアーティファクトを取り出し何をするのかと思えば…

「『全体…武装解除』！！」

なんというか…ネタ武器だな。

こんな公衆の面前でためらいもなく武装解除をするとはいい性格している。

だが、この程度の力量では俺の服を飛ばす事は不可能だ。

「こんな観客がある中で武装解除を行うとはな。くつくつく、いい性格しているな」

「はう！ も、申し訳ありません！」

「まあいい、それじゃ次はこっちの番だ」

周りにある風をかき集め、圧縮……

そして縮地で移動し、これをあの子のすぐそばで破裂させると…

「きゃあああああああああああああああああああああああ

……………」

パン！という音と共に場外へと吹っ飛んでいった。

ドップラー効果つきの悲鳴をあげて吹き飛んでいく佐倉とやら。そして水の中へと突っ込んでいった。

『これはエグい！　どうやったかは解りませんがメフィスト選手は佐倉選手を20mほど吹

き飛ばしました！　場外へ出たのでカウントを開始します！』

ただの風で吹き飛ばしただけだ。

距離的に戻ってこれないと判断し帰ろうとするが、

『あの、メフィスト先生…佐倉選手が溺れているので助けてあげてください』

なんですと？

飛んでいった方を見ると…なるほど、確かにバチャバチャもがいていた。

「つたく、しょうがない」

濡れるのは勘弁だったので水の上に魔力で足場を作ってその上を走る。

落ちた地点に辿り着くと俺は佐倉をお姫様抱っこをして抱きかかえた。

「ふえ！？！？」

「悪いが少しだけガマンしている」

「ハ、ハイ！（噂のような傍若無人じゃなく泳げない私を助けてくれたし…）なによりカッコイイ／＼」

なんだか真っ赤な顔をしていたが怪我でもしたのか？

風だけで飛ばしたから怪我はしないと思っただが…まあいいや。

舞台に戻って降ろしてあげる。

まだ顔を赤くしたままだがこつちをみて礼を言ってきた。

「あ、あの… 助けてくれてありがとうございます」

「まあ俺のせいだし気にすんな」

申し訳なさそうにしていたので頭を撫でておく。

するとびっくりしていたが笑顔になってくれたぜ。

試合が終わり舞台から降りるとエヴァが仁王立ちして烈火の如くお怒りだった。

「えっと…… エヴァ様？ 何をそんなにお怒りなのでしょうか？」

「メフィスト… また新しい女に手を出して… 今日と言う今日はもうガマンならん！！」

「ちよつとこつちに來い！！」

「え？ ちよつと待て！ 次はエヴァの試合じゃ」「そんなことよりお前への説教が先だ！」「」

俺が何をしたって言うんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！

第肆拾伍話 『麻帆良武道会開始』（後書き）

ホントは一回戦を全部終わらせたかったが、どうかんがえてもエヴァVS刹那が収まらなかった。

ですのでラヴァーズ同士の戦いは次回へ持ち越しとさせていただきます。

……ちゃんと書けるかなあ

第肆拾陸話 『本妻 VS 愛人』 (前書き)

多くは語りません。

タイトル通りの戦いを御覧あれ。

第肆拾陸話 『本妻 VS 愛人』

メフィストがお仕置きで死亡したためここからは三人称で語ります。

【三人称side】

人気がない場所までメフィストを引っ張っていったエヴァが、しばらくして選手の控え室に帰ってきた……

……頬に赤い血を付けながら。

血に気が付き、それをペロリと舐める姿を見た刹那は戦いたくない気持ちが溢れてくる。

それに気が付いたエヴァが軽くフオーロした。

「そんなに気負うな、刹那。何も命まで取ろうというわけじゃないぞ」

「は、はい……（全然安心できません——ん！！）」

内心涙目になりつつも師の一人であるエヴァに反論できない刹那。他の選手は刹那に同情する者が後を絶たなかった。

『それでは第7試合を始めます！ 選手は壇上へ上がってください！』

「おつ、始まるようだ。行くぞ、刹那」

「はい……（このちゃん、ウチ生きて帰れるんやるか……）」

颯爽と壇上へ向かうエヴァ、それと対照的にどんよりとした空気を纏う刹那。

その様子を見て愛衣がネギに質問した。

「あ、あのー、ネギ先生。あの人があのだ金首のエヴァンジェリンさんなんですか？」

「ハ、ハイ」

「御本人？ 娘さんとかじゃなくて？」

「ハイ、僕の師匠です」

「ええっ!？」

御本人だというのにも驚きなのに、ネギの師匠だということを聞かされてさらに驚く愛衣。
だがもつと重要な聞きたいことを思い出し再度ネギに質問する。

「さっき私と戦っていたメフィストさんって、その……エヴァンジェリンさんのお兄さんで90億円の賞金首なんですよね？」

「そ、そうですね…カモ君、日本円にすると相当な額だね」

「だな、それほど危険な野郎だってことだ」

メフィストが90億円の賞金首らしくなかったので少し首を傾げる愛衣だったが、ネギの背後にいる人物を見て冷や汗をダラダラ掻いた。

愛衣の只成らない様子に首を傾げていると、後ろから声を掛けられた。

「おい、淫獣。誰の許可を得て俺を野郎呼ばわりしてるんだ？」

「そんなの俺たちの勝手………ではありません、ハイ。申し訳ありませんでした」

「フン」

反射的に反論するカモだったが……メフィストだったことによりすぐにヘコヘコ陥つ。

メフィストは特にリアクションをせず試合の方へと視線を向けるが、愛衣が声を掛けた。

「あ、あの！？ 怪我は大丈夫なんですか？」

「ん？ ああ、お前はさっきの…怪我なんてすぐに治るから問題ない」

「そ、そうですか……よかったです」

メフィストは、なぜ正義の魔法使いを目指している愛衣が悪の魔法使いである自分を気遣うのか理解できなかった。

自分を憎んだりする者の視線などいつもは気にしないのだが、今日はこっちに——厳密に言うくと愛衣に声を掛けたがっている金髪の少女——高音の睨むような視線が気になっていた。

「おい、佐倉とかいったか？ あつちにお前に声を掛けたがつているヤツがいるからあつちに行っておけ。あんまり俺に関わらないほうがいいぞ」

「あつ、お姉様。それじゃ失礼しますね（関わるな……かあ。まだはつきりした気持ちはわからないけど、そう言われると少し寂しくなっちゃうかな）」

愛衣は自分の中にあるモヤモヤした気持ちをはつきりと認識できず、呼ばれるがままに高音の近くによっていく愛衣。

高音がガミガミ怒ってきたが愛衣はそれを右から左へ流して自分の気持ちを考えていた。

「エヴァと刹那か…エヴァが暴走しなくちゃいいんだが…」

さっきまでお仕置きを受けていただけにありえないと言えないメフィスト。

ネギたちも絶対にありえないとは言えなかった。

「だが、今気になるのは……なぜ刹那は服がミニスカメイド服にデッキブラシを持っているんだ？」

……

……

…

刹那は試合前に朝倉からこれを着るように言われていたのでその通りに行動をした。

よく中身を見ずに服を身に着けていたので…着終わった瞬間にマズいと思い元の服に戻ろうとしたがタイミングよく朝倉が帰ってきて連れて行かれたので着替えることができなかったのである。

そして今現在。

舞台上ではエヴァと刹那が軽いにらみ合いをして対峙していた。

「エヴァンジェリンさん…メフィストさんが見ている以上無様な姿は見せられないので……本気で行かせていただきます！」

「くつくつく、いいぞ。メフィストの修行のせいか良い気迫だ」

吸血鬼の真祖とはいえ相手は魔法が使えないので10歳の女の子。刹那は奥義を使わずに戦おうと考えていた。

『第7試合 FIGHT!!』

試合開始の合図と共に手にしたデッキブラシをエヴァの首下を狙う

よう得物を振るうが、エヴァの持つ鉄扇を使った合気柔術で逆に地面に叩きつけられてしまう。

（なっ！？）

（フッ、他愛ない）

その後も攻撃を仕掛ける刹那だが、悉くを受け流されて決定打を打てなかった。

そのうち大きく投げ飛ばされてしまうが、着地と同時に瞬動ドールマスタを使おうと足に気を貯めているところに、エヴァのスキル「人形遣い」の技能である魔法で出来た糸で足を取られて転倒してしまう。

「くっ！」

即座に受身を取り体制を立て直そうとするが、追撃にきたエヴァの攻撃を避けられずにまた地面に倒れ伏せられてしまう。

そして倒れているところに糸が絡みつき刹那は地面から10cmほどに浮くように吊り上げられた。

（魔力がほとんどない状態でこれか……メフィストさんといいエヴァンジェリンさんといい、やはり格が違う！）

「どうした、刹那？　ここで終わりなのか？」

「まだです！」

気を使い糸を断ち切ろうとするが、相当強度を増しているのか簡単に切ること出来ない刹那。

だがエヴァはここで以前から聞いておこうと思っていたことを口にした。

「この程度とはな…まだまだ甘い。刹那、貴様…この程度でメフィ

ストの隣に立てると思っているのか？」

「ッ！！」

メフィストの最も近い人からの指摘。

自分はまだ甘いと思っけていても無視できない言葉であつた。

「た、確かに今はまだムリですがそれでも「貴様は人外……いや半分か。そこらの有象無象よりかは資格があるがそれでも寿命があるかないとでは決定的な違いがある。お前はそれを本当に理解しているのか？」……そ、それは……」

完璧に理解しているとはとてもじゃないが言えはしない。

まだ立場の違いからの対立などを理解していない刹那には少しだけ早い内容だつた。

困惑する刹那に追い打ちをかけるようにジリジリと精神を蝕んでいくような問答を続けるエヴァ。

「貴様と……まあ仮に相手がメフィストだとして、幸せになれると思つのか？」

「……………」

「人間と人外……そのどちらでもないハンパ者の貴様が本当に幸せになれると？」

「ッ！」

「……フフ、お前のその背中の翼……白かつたな」

「なっ！？」

「その黒髪はどうした？染めたのか？ 瞳は？カラーコンタクトか？」

「くおら————っ！！こおのバカエヴァちゃん！！」

あんたその先ちよつとでも口に出してみなさいよ、ブツ飛ばすわよ！！
ちよつとでもいい奴じゃんって思つてた私がバカだつた！

あんたやつは大悪人よ!!」

エヴァの辛辣な言葉に耐え切れなかったアスナが心赴くままにエヴァを罵倒する。

ネギに止められるがそれでもギヤイギヤ罵倒し続けた。

刹那は心が折れ掛けたがアスナのおかげで少しばかり持ち直す。

エヴァはこれ以上は意味が無いと思い幻想空間へと引きずり込むことにした。
ファンタズマゴリア

「刹那、私の目を見る」

「……え？」

「いいから見ろ、刹那」

エヴァの目を見た刹那は幻想空間へと引きずり込まれていった。
ファンタズマゴリア

ちなみにだがメフィストがなぜ口を挿まなかったかという点、エヴァのお仕置きのおかげだったので口ごたえをし難かったからだ。

〔幻想空間・エヴァの別荘〕

「なっ……これは？」

巫女服を軽量化し背中に布がまったくない服——鳥族の格好をした刹那は突然の出来事に困惑する。

手には自分の得物「夕凧」を持って自分の状態を確認しているとエ

ヴァが姿を現した。

「白い翼は…タブーとされ遠ざけられたそうだな。どんな幼少期を送ったか容易に想像がつくよ。」

親もなく里を離れんとした貴様を、本山を継ぐためにナギと別れ日本へ戻った詠春が拾ったか」

その通りだったので刹那は反論しなかった。

「さあ！貴様のためにこの場を用意してやったぞ！

余興に過ぎぬとはいえ、ここならば人目はない。全力でくるがいい！もっとも私も全力でいかせてもらうが…この空間までは呪いも届かぬ、私もかつての力を使えるぞ」

「エ、エヴァンジェリンさん……あなたにとってはおそらく塵にも等しい私のような者に何故ここまで？」

さっきまでの辛辣な言葉は自分の心を折る為ではなく、自主的に諦めるようにするためでは？と考える刹那。

「他のアホなガキどもよりかは気に入っているからな。」

本当に覚悟を持っているのならば文句はないんだが…いや、無い訳じゃあないが、いかんせん貴様も木乃香もまだ恋をしている状態じゃないかと思えん。

そんな状態ではどちらも傷付く結果になるのは簡単に想像出来るんでな」

（恋…か。どうやら思った以上にこの道は茨の道のようにです、お嬢様）

エヴァは喋りながらも右手に「断罪の剣」を生成していく。

エヴァの言葉を頭で考えながらも武器を構える刹那。

「生まれた時から不幸を背負ったお前には共感を覚えるが…同族意識で認めてやるほど私は寛大ではないんでな。刹那、貴様がここで私に負けたのならば…メフィストのことは諦めてもらっぞ!!」
「ッ!!」

言い終わるなり攻撃を仕掛けてくるエヴァ。

刹那はとっさに避けるが威力が強すぎて余波を受けて後方に吹き飛ばぶ。

一緒に飛んでくる石つぶてを避けるために意識をそっちに向けるが…エヴァは後方に回り込んでいて殴りつけてくる。

「ハハハハハハッ!! 話にならんぞ! どうした!? 己が力の全てを見せてみる!!」

このままでは翻弄され…最悪死ぬかもしれない。

刹那は鳥族としての力を解放し翼を出して応戦しようとするが海面に叩きつけられてしまう。

「この程度で終わるはずがないよな? 私を失望させないでくれよ」

追撃で「氷神の戦鎚」を刹那の落下した地点に投げるが、刹那はその氷の塊を真ん中から斬り裂いてエヴァ目掛けて颯爽と飛ばぶ。

「刹那…貴様が負けるようならば、メフィストを諦め剣を捨てろ。自分の想いを貫きたいのならば、己が力を以って勝ち取ってみせろ」

今ここに、本妻 VS 愛人のガチバトルが勃発した。

現実世界では刹那とエヴァは身動きせずじつと止まっていた。

最初はわからなかったがすぐに幻想空間で戦っているのだとメフィストは理解し観戦しに行くために夢見の魔法を使う。

ネギたちは状況がわかっていなかったたので置いてきたのは内緒だ。

幻想空間に行くと、そこでは小規模の戦争のように苛烈な戦いが繰り広げられていた。

エヴァが後ろから攻撃をしつつ追い、刹那が逃げながら反撃を度々行っている構図だ。

魔法詠唱禁止のルールなので無詠唱魔法と魔力強化による体術のみでエヴァは戦っているが、それでも神鳴流剣士の刹那を圧倒する実力だ。

「随分と保つじゃないか！もう7分だ！驚いたぞ、刹那！」

（勝てない……）

自分の想いを貫くために全力でエヴァに挑んでいる刹那だが、どうやっても勝てる気がしなかった。

「メフィストさんはハンパ者である私を受け入れてくれました！」

それに私は……いまさら諦めることなど出来ません！お嬢様を守ることはメフィストさんを追うことは私の全てです！」

「ハ！全てか！大仰だな！くだらん！！」

剣など気にせずに拳を振るうエヴァ。

数多の猛攻を必死に捌く刹那だが首を掴まれて地面に叩きつけられてしまう。

「全てだとか夢だとか誰もが良くやる勘違いさ！ そんなたいそうなモノにすぎらずとも日々の小さな幸福と愉しみがあれば人間って奴は生きていけるらしいぞ！？」

フフ……誰もが夢破れて裏切られる！それでも生きられると知ってつまらん大人と相成る訳だが……それも悪くない。お前もそうして生きるがいい、刹那」

意味深な言葉に少しばかり思考するが、それよりもエヴァを振り解くことが優先だと思い直し投げ飛ばす。

「で、でも！」

「メフィストの傍ににいるということは魔法社会を敵に回すことになる。

そんな人生よりも人間として生きるほうがずっとマシなのかもしれないぞ？」

「ッー！（あれは……マズイー！）」

エヴァの右手に集中していく高密度の魔力。

刹那は即座に自分が持てる最大の防御術式を展開する。

「神鳴流対魔戦術絶対防御！ 四天結界独鈷鎖殻！！」

術を発動させたと同時にエヴァからの攻撃が襲い掛かってきた。

自分を中心に防御の術を発動させエヴァの攻撃を耐えようとするが、あまりの威力に防ぎきれず少しばかりダメージを喰らってしまう。

（か…勝てるハズがない、この人に……最強状態のエヴァンジェリンさんがこれほどまでの魔物とは…しかもこの人はまだ遊んでいる。しかし理不尽な話だ。私の力で勝ち取れと言ってもこの圧倒的な実力差。

いくら幻術空間の中とはいえ、これでは最初から選択肢はないに等しい……幻術？……そうか！）

出口がない戦いだと思っていたが、今思いついた打開策を試してみようと顔を上げる。

すると視界に、いつから居たのかはわからないがメフィストが黙って見ていてくれる姿が入ってきた。

「今の一撃、よくぞ耐えたな。だが次は耐え切れまい……これが最後だ！刹那！」

今度は高出力の「断罪の剣」だった。

だが刹那はあせらずに自分は勝てると思い奥義を使う。

「神鳴流奥義……極大！雷鳴剣！！」

「ぬっつー！！」

現実よりも強力な一撃を繰り出すことが出来た刹那。

その一撃はエヴァの「断罪の剣」を相殺したのだからかなりの高威力だ。

ここは幻想空間。

自分の思いがそのまま自分の力量に作用されるのだった。

ようやくこの空間の糸口を見つけた刹那は、さっきメフィストを見て自分の想いが変わらないことを再確認し自分が思っていることを口にする。

「エヴァンジェリンさん。やっぱり私…メフィストさんを追うこともお嬢様を守ることも捨てられません」

「何？」

「私の全てを受け入れてくれた人の中で一番恩を感じているのはメフィストさんですし…お嬢様は小さいころから私なんかと遊んでくれました。どちらも大切に…切り離すことが出来ない存在なんです」

「……………それで？」

「確かにまだ私には魔法使いと敵対することが理解できていません。ですが昨日誓ったんですよ、諦めないで。この思いだけは譲れません！」

声高々に宣言をする刹那の様子に少しばかり気押されるエヴァだが、その覚悟が本物なのかどうか確かめる。

「ホザけガキが！！ 甘ったれの貴様にそれが出来るのか！？！？」

ゴツ！と声と一緒に風が吹き荒れて刹那を襲う。

それでも自分の想いを貫くために昂然と返答した。

「……………はい」

「……………ふっ、はっはっはっはっは！」

「？」

「精神は肉体に影響を受ける。ガキの姿のまま不死となった私は他の化け物どもよりも若いつもりなんだがな……………くっくっく、お前達というると本当に歳を実感するよ」

刹那の自信に溢れた表情と態度をみて、これ以上はもう諦めさせるのはムリだと判断した。

それに若さゆえの理想を追いかける意志を羨ましいと感じてしまったエヴァ。

「フフ…いいだろう、お前の意志の力の程を見せてみる」
「はい」

刹那が考えるのは、メフィストへの想いのみ。

その想いを貫くことだけを考えて最大の一撃を放つために気を高めていく。

対するエヴァは「断罪の剣」を構える。

両者の気と魔力…そのどちらもが最高峰に達した時、合図もなしに両者はほぼ同時に技を繰り出した。

「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！！」

「エクスキューションーソード！！」

二つの技がぶつかり合い、その余波で幻想空間が壊れる。
それほどの意志を持っていたことにメフィストは嬉しさが込み上げてきた。

…
…
…

幻想空間から抜け出し現実世界に戻ってきた刹那とエヴァ。

何故か爆発が起きたが、刹那がエヴァの胸元へ一閃。

エヴァは避けて攻撃を受けて倒れ伏した。

『ぎゃ、逆転！？ 決まった———っ！—！』

避けられると思っていた刹那は思わぬ展開に慌ててエヴァに駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか！？ エヴァンジェリンさん！」

「ああ、私の負けだよ。よくぞ我が幻術を打ち破ったな」

言いたい事は全て言ったので悔いはないエヴァはどこか清々しかった。

「あ、ありがとうございます！エヴァンジェリンさん！」

「何？」

あれほど苛めたのに刹那から感謝されることに困惑するエヴァ。

「先ほどの闘い…力であなたに勝つことではなく、自らの意志の力を示して幻術自体を打ち破ることが答えだったのですね！」

「ん？ あ、いや…まあな」

「確かに色々な話を聞いて難しい問題なのは理解していたんですが…それをこの様な形で諫め諭して頂けるなんて！ 流石はエヴァンジェリンさんです！ありがとうございます！」

「オ、オイこら刹那！ 何をポジティブな方向にカン違いしているか知らんがな！」

私はただ単にメフィストにくつつこうとする貴様を苛めなくなっただけだ。

本当は諦めさせるつもりだった、誤解するなよ」

メフィストと自分以外がくつつくことを受け入れたくないエヴァは本当にここで刹那の心を折るつもりだった。

エヴァの嫉妬心は海より深いかもしれない。

そんなエヴァの心中を気にせず刹那は褒め称える。

「いえ！そんなご謙遜を！ 私、感動しました！」

「ええいつ、手を離せ！ 生まれに似合わぬその純朴さがつまらんと
言うのだ！」

思い通りに行かず、そればかりかこつちを褒める刹那に少しだけイ
ラつくエヴァ。

口論に発展しようとしたところにメフィストが舞台に上がってきた。

「はい、ストップ。おそらくエヴァはさっきの一撃で骨にダメージ
が行ってそうだからな。救護室に運んでいいか？」

「す、すいません！思わず力が入ってしまった！」

「手合わせだから怪我は仕方が無い。それじゃ運ぶぞ」

「コ、コラ！ こんなところまでその運び方をするな！／／／」

いつもの通りにメフィストはお姫様抱っこでエヴァを運ぶ。

恥ずかしがるが嬉しがっているエヴァは面白い表情をしていた。

side out

【メフィストside】

〔救護室〕

「容体はどうだ、エヴァ？」

「心配はいらん。アバラが何本かイッていただけだ」

「それくらいなら俺が治しておくでしょう。幸い養護教諭は席を外しているしな。『治癒』」

「か、回復魔法を無詠唱ですか…」

今、救護室にはベッドの上に胸に包帯を巻いたエヴァが座っており、付き添いに俺と刹那、アスナの計4人がいる。

野菜小僧も来たが…包帯付きとはいえエヴァの裸を見せることを断じて認める訳にはイカン！

なので早々に部屋から叩きだした。

「エヴァンジエリンさん、よろしいですか？」

「ん？」

「先ほどあなたは生まれた時から不幸を背負ったお前には共感を覚えると言いました。

これは…あなたも、いえあなた達、御兄弟も不幸を背負っていたという事ではないですか？」

「む？」

しまったという様な顔をしているが…やっちゃったな。

そんな簡単にネタバレはよくないぞ。

ネタバレ、ダメゼツタイ。

「おいおい、エヴァ……ネタバレはいかんよ」

「ス、スマン。つい口が滑ってしまった」

刹那とアスナはすごく聞きたそうにしてこっちを見ている。
まあ対応はエヴァに任せるか。

「は、話は終わりだ。とつと出ていけ、ガキども」

「そうはいかないわよ！エヴァちゃんがさっき刹那さんに言った事は許してないんだからね！」

「……許さんでいい。私は悪い魔法使いだ、それでいいだろう」

「ダメよ、エヴァちゃん！ちゃんと話して！良い逃げズルイよ！」
「なっ！」

「エヴァンジェリンさん、私にだけ勝ち負けの条件を出すのは不公平ですよ。私を買ったんですから昔話ぐらい……」

「ぬぐっ……貴様」

くっくくく、ガキに押されているぞ。

「メフィスト！黙ってないでお前も何か言え！」

「フフ、ちゃんと自分で撒いた種は自分で回収しないといかんぞ」

「ぐっ……解った解った。話してやればいいんだろう」

ありゃ、ホントにネタバレ発生かよ。

「エヴァ……」

「わかつている」

どうやらあまり深い話はしないようだ。

俺の事とかを聞かれると困るからな。

「さて……大昔の話だ。私たちは動乱続く中世欧州でどこぞの領主の城にあずけられ何不自由ない少女時代を過ごしていた」

「ちゅ、中世！？」

「お城！？ てことは……二人はお、お姫様と王子様なの？」

「黙って聞かんか」

「くくくっ、王子って……ぷくくくく」

何だよ、王子様って……くくく。
全然俺の柄じゃねえな。

「その頃の私はまだ正真正銘の人間だった。10歳の誕生日までは……
10の誕生日、目が覚めると私とメフィストはもうこの身体だった。
私たちは自分をこんな姿にした男への復讐を果たして……城をでた」

そっぴやそんな感じだったな。

もう600年ぐらい前になるのか……あの頃は色々とはっちゃけていたな。

「この姿で生きていく力を得るまでの数十年が最もキツかったよ。
最初の頃は吸血鬼らしい弱点も残っていたしな。
魔女狩りの時代は面倒だった。何しろこの姿だ。成長しないことを
疑われれば同じ場所に数年とはとどまれない。一度ミスって捕まっ
た時は違う意味で大変だったが……」

ん？　なんでこっちを見てるんだ？

「そ、その時なにがあっただんですか？」

「どうしても知りたいか、刹那？」

「は、はい……」

「その時は街全体が魔女狩りを行っていてな……暴走したメフィスト
が街を丸々消滅させたんだ。比喻なんかじゃなく地図上からな」

「……」

何やら絶句している刹那とアスナ。

しょうがないじゃないか、街の住人が寄ってたかってエヴァを魔女

呼ばわりするんだぞ。

「話がそれたな。……魔法使いどもの国でも受け入れられることはなかった。

殺さなければ生きられぬ時代があつたし…殺さずに済む数十年もあった。

まあ大抵は私の代わりにメフィストが肩代わりしてくれたんだが…それでも私が人殺しをしなかった訳じゃあない」

あまりの内容の重さにコメント停止中の二人。

まあそれが中学生の反応として正しいんだがな。

「暗黒大陸——今のアフリカに居を構え人と交わらずに生きる術を得て私たちに近づいてくるのが私たちと戦い、命を落とす覚悟のある者だけになってからは……楽になった。

刹那…お前はまだ間に合うだろう…意志は変わらぬだろうがもう一度言っぞ。

人間として生きるのも悪くは…」

「エ、エヴァちゃん…あんた…」

「ん？どうした？ 今更私たちの事が怖くなったか？」

俺達を恐れるどころか涙目になって同情するような視線を送ってくる二人。

なんだか…こう、こそばゆいってやつか？
よくわからん。

「エヴァンジェリンさん！メフィストさん！ あなたは自ら真祖になったのではないのですか！？」

「じゃあじゃあエヴァちゃんもメフィストさんも自分から悪い人になったんじゃないじゃん！ 二人とも悪くないじゃん！」

予想外の反応に困惑するエヴァ。

「アホか！話を聞いていたのか神楽坂明日菜！？圧倒的に悪いわ！経緯はどうあれ私は悪の…ん？」

アスナに反論しようとするが頭を撫でられて二の句を継げられなかった。

「大丈夫、エヴァちゃんは何も悪くないよ」
「な…？」

パシッと撫でつける手を撥ね退けて反論するがエヴァ。

「貴様！全然人の話を聞いとらんな！？私が何人手にかけたか教えてやろうか！？」

「んー、それはホントに難しい話だけど…んー、何てゆーか、その…エヴァちゃんの場合、多分大丈夫！…と思う」

「テキトーに発言するな！このバカ頭！何もかんが…えて…ないくせに…」

エヴァの様子がおかしい！

「刹那、アスナ。そろそろ少年の相手をしてやれ。外で膨れているかもしれないぞ？」

「ゲッ！メンドくさいガキンチョねー…ってメフィストさんが追い出したんじゃない！」

「なんでもいいからさっさと外に行け、刹那もだ」
「え、あ、ハイ！」

慌てて二人を部屋の外に追い出してエヴァのほうを見みると、ベッドの上をポンポン叩いてこっちにこいと言いたげにしていた。俺は言われたとおりにベッドの上に乗つてみると、俺の膝と膝の間にチヨコンと座り込んできた。

しばらくは黙ったままだが、ポツポツとエヴァが話しだす。

「神楽坂明日菜の頭は空っぽなのか？」

「まあバカレッドだからなー」

「刹那のポジティブ思考はなんなんだ？」

「あれは俺もわからん。不思議だよな」

「この学園はいつもこいつも樂觀的すぎる」

「きつと認識阻害と一緒にポジティブになる魔法を掛けてるんだよ」

「まったく… どのいつもこいつも…」

まだ文句が出てきそうだったが、後ろからエヴァを抱き締める。すると体重を全部こちに掛けてきたがエヴァの身体は軽いので全然苦にはならなかった。

「いまなら人は俺しかない。溜まった物を出すなら思う存分発散しても大丈夫だぞ」

「そうだな… 今は… 今だけは兄様に甘えてもいいですか？」

突如エヴァの口調が幼少期のものになる。

少しだけ面喰ったが何も言わずに抱きしめを強くした。

「ありがとう、兄様… 随分と長い間ほかの人間に優しい言葉を掛けてもらえなかったから… 気持ちを抑えきれなかったの。私がここにも行けないように… 強く抱きしめていて」

「嬉しかったか？」

「どうなんだろ… 嬉しさと… 羨んだのかな？ 今の私にはとても出来

ない考えを刹那と神楽坂明日菜がしていたから…うん、たぶん羨ましかったんだと思う」

「そっか…」

「兄様…ちよつと胸を借りるね」

「好きなだけ使え」

この後、次の俺の試合まで小さなすすり泣く声が出ただけ言っておくでしょう。

第肆拾陸話 『本妻 VS 愛人』（後書き）

愛衣の好感度を上げつつ、刹那の覚悟を強め、エヴァの弱さを少しでもだけ書かせて頂きました。

つつい書きたいことが増えて文字数が1万を超えてしまいました。が、最後まで読んでいただきありがとうございます。

さて、ちよつと原作と違い精神面が弱いエヴァ。

これは600年もの間、メフィストが過保護にしたために原作よりも精神を弱くなってしまう。

まあそれでも他人にはその様子を見せたりしません。

とまあ言い訳っぽくなりましたが愛衣・刹那・エヴァの誰かしらで2828して頂けたら幸いです。

第肆拾漆話 『過去からの伏線？ いいえ、こじつけです』

【第2回戦】

〔第9試合〕 高音・D・グッドマン VS 村上小太郎

〔第10試合〕 タカミチ・T・高畑 VS 古菲

〔第11試合〕 クウネル・サンダース VS メフィスト・マク
ダウエル

〔第12試合〕 桜咲刹那 VS ネギ・スプリングフィールド

いつのまにか少年の試合が終わっていた。

まあ負けることはないと思っていたので見るつもりもなかったがな。

犬と金髪の戦いも見えていなかったが……なにやら会場から大きな歓声が上がったのが少しだけ不思議だった。

そっぴいや一回戦でも同じような歓声が上がっていたが……結局なんだっただろう？

とりあえず犬が勝ち上がったらしい。

第2試合は古菲が骨折により棄権、タカミチは仕事のため棄権と犬どころが戦わずに決勝に出場したのは驚いた。

タカミチは超の動向を調査しに来たらしいが……タカミチと戦うのも楽しみにしていたから拍子抜けだ。

そして次は俺の試合となったわけだが……

「エヴァ……張り付いているとこ悪いんだが、次は俺の試合……」
「ヤダ。まだこのままがいい」

俺はまだ救護室でエヴァを慰めていた。

幼少期の言葉使いをやめたがまだどこか幼児化している……少しだけ引き剥がそうとすると涙目＋上目使いという究極の萌え落としコンボが来て……とてもじゃないが引き剥がせん。

だがとても可愛いぞ！

「だがエヴァ……今度の相手はアルだし、俺も奴とは戦いたいんだ」
「……どうしても？」

ぐっ！またこのコンボかつ！

だがここは心を鬼にして……ごめんなさい、ムリです！

こんな甘いってくるエヴァを引き離すなど俺には出来ません！

「……しょうがないな、今回はこれで勘弁してやろう」

「ん？ そっちから離れてくれるとは思わなかったぞ。もういいのか？」

「ああ、どうせ明日にはデートなんだ。だから今日はもう満足だ」

それじゃ俺も名残惜しいが変態野郎をフルボツコしに行くでしょう。
アル

「始めは少年と刹那の修行程度しか考えていなかったが……お前と殺

り合えるとはとても愉しみたぞ、アル」

「私は勘弁したいんですがね……まあやるだけやってみるとしまし
よう」

壇上には俺とアルが対峙している。

あいつは一見やる気なさそうに見えるが……目は諦めていなかった。
ようやくあの兵器……ゲフンゲフン、オモチャが使えるぜ！

『それでは第11試合！ FIGHT！』

試合開始の合図が来たと同時にアルの得意分野である重力魔法が襲
ってくる。

これなあ……無詠唱かつ魔法が発動するまでに隙がないから初見には
かなり厄介だ。

俺は初見じゃないけど。

軽く避け、右肩から斜めに爪で切り裂く。

確かに攻撃は通ったと思ったんだが……攻撃が通った手応えがない。
立体映像に攻撃しているみたいな心境だ。

「おいおいアルウ……まあだズルしてんのか？」

「フフフ、あなた相手には丁度いいと思いますよ。なんせあなたは
存在自体がズルですからね」

「くくく、違いない。だがそれほどまでにあのバカの遺書を聞かせ
たいのか？」

「無論ですよ、我が友との10年来の約束事ですからね」

「なら俺に勝ってみせな！」

俺は王の財宝の中にしまっておいた30cmほどの金属の棒を取り
出す。

アルは不審がるも、俺が今居る位置とその周囲・俺の避けるルートを予測した場所に計7つの重力球を発動させた。

「さあ、出番だ……起動せよ、ライトセーバー!!」

重力魔法なんぞ紙切れの如く斬り裂く。

初めてみるこれにアルは驚きを隠さずにこっちを見ていた。

「ちょ、メフィスト先生！ それ本物なの!?!」

「私情が入っちゃダメだろ、司会。それとこれを説明するならこれは昔、ある緑色の肌をしたジェ。イの騎士に貰ったんだ」

ウソだけだな！

「詳しく聞きたい内容でもありますがそれは後で！ た、確かに本大会のルール上問題はありますが……主催者！これはアリなんでしょうか!?!」

すると超の顔が映った映像が舞台を覆うように展開された。

……オーバーテクノロジーすぎるだろ、なんで学園側はこれについて追求しないんだ？

「ウム、面白そうだからアルでOKネ」

「だそうだ、アル。これで勝負をつけてやるぜ」

「……まさかSF映画で出てくる架空兵器を再現するとは……」

去年ぐらいにエピソード2が上映されてな。

いつか作ってみようと思ってそのまま放置してたんだよ、コレ。ちなみに刀身部分の色は赤だ。

「さて、いくぜえッ!!」

再度攻撃を仕掛ける。

今度は右手を切り落とすようにライトセーバーを振るうが、ロープ部分を破く程度に終わる。

だがそれだけでもアルのヤローは驚いているようだ。

「まさかこの術が破られるとは…」

「どうやら世界樹の魔力を利用しているようだな、気配でわかるぞ！」

さっきの攻撃で破ったロープはすでに再生済み。

だがその防御力・再生力を上回る攻撃をすれば倒せるハズ。

ならばやることは一つ、この武器の出力を上げればいいだけだ！

「いくぜ……………秘剣、燕返しッ!!」

さらに多重次元屈折現象を再現するように神鳴流の斬空閃を応用して、全く同じタイミングでライトセーバーの斬撃と違う軌道を取る斬撃を2つ発生させた。

慌ててアルは回避しようとするが、二閃は避けられてしまうが一閃だけきれいにアルの胴体を真つ二つにするように決まった。

だが衰えても大戦の英雄。

重力魔法を胴体付近に小さめに発動させてライトセーバーの斬撃を屈折させて避けられてしまった。

「ちっ、これで決まったと思ったんだがな」

「捨て身の覚悟で実行したんですが…思惑通りに進んでよかったで

す」

ライトセーバーの刀身は「燃える天空」をベースに1m程の長さになるように固定し、超高温になるように俺の魔力で強化して初めて本物のライトセーバーになるのである。

だが元が火の魔法であるために曲げるのはどうやら簡単だったようだ。

「だが要はお前の魔法を上回る威力を発揮すれば良いだけだな」

「それをされると私には打つ手がないんですが……いいんですか？」

どんどん魔力を注入して強化していると、アルが気になることを言ってきた。

「なにが言いたいんだ、アル？」

「いえ、その武器は見たところ雑な造りの様なので……無茶をしても大丈夫なのかと」

アルの言葉を聞くと共に、ボンッ！という音がしてライトセーバーが木っ端微塵にぶっ壊れた。

「俺のライトセーバーがあああああああああああああああああああああああッ！！」

「くつくつく、なんともまあ……予想通りの行動を取るものですね」

「許さん！ 許さんぞおッ！ー！アルビレオ・イマアッ！ー！」

「いやいや……自業自得じゃないですか」

そんなことはどうでもいい！

重要なのはこの試合中に壊れてしまったという事実だ！

「……………ホントに頭大丈夫なのか？　一応超の指令なんじゃないのか？」

最近、激しく不安になる茶々丸の言動。

本当に大丈夫なんだろうか…… AI的な意味で。

「まあいつか。それじゃ早速行くでしょう」
「ハイ」

「茶々丸のヤツ、主である私を放っておいてメフィストとのデートに行きおって……
なんなんだ？この扱いは……一度ちゃんと説教しないといかな、コレは」

なにやらエヴァがブツブツいていたらしい。

ちなみにこの後の試合の結果は、
桜咲刹那 VS ネギ・スプリングフィールドは刹那が買ったので
結局アルの思惑通りには行かなかったそうだ。

第肆拾漆話 『過去からの伏線? いいえ、こじつけです』(後書き)

ちよつと今回は中身薄いし短めとなつてしまいました、申し訳ありません。

なんだか無性に「チョコボの不思議なダンジョン2」をやりたいくなつたのでついやったら…またハマってしまったw

やはり古い物は良い……難易度が高くてな。

あとライトセーバーについての突っ込みは全て受け付けませんのであしからず。

パツと頭に浮かんだネタなのでねw

第肆拾捌話 『良い子 悪い子 普通の子』

麻帆良武道会終了後、茶々丸が所属している茶道部の出し物を見るため野点会場に向かっていた。

会場に着くと、雰囲気から楽しむために和服のレンタルをしていた物は試しと茶々丸が着て見てくれと言ってきたので、着替えてみた。だが今まで着た事が無かったので茶々丸に手伝ってもらい、軽くはだけた状態でいると、

「茶々丸さん、いるんだろ？ あんたにやもう少し詳しく聞きたい事が……」

学祭準備中に化けの皮が剥がれていた長谷川がいた。

さて、今の俺の状況はと言うと…上半身が半分裸、そこに茶々丸が服を整えようと跪いている。

何を勘違いしたのかしらんが長谷川は失礼しますと言って扉を閉じてそそくさところから離れていった。

「あの、長谷川さん？ 何か深刻なカン違いをされているのでは？」

「別にしてねえよ。いいからついてくんな」

「そういう訳には……」

茶々丸が慌てて長谷川の後を追っていく。

俺的にはどうでもいいんだが、少し茶々丸が困っているようだし…引きとめるとしよう。

「まあ落ち着けよ、長谷川」

「うお！ いきなり目の前に現れないでください！ 何なんですか

！？その瞬間移動は！？」

さっきまで武道会にいた奴のセリフとは思えんな。
大分いろんな奴が使っていたのに。

「今から野点に参加するんだが…長谷川も参加しないか？ 茶々丸に聞きたい事があるんだろ？」

「いや、だからそれは後でいいし…」

「それじゃ茶々丸、用意してやってくれ」

「わかりました」

「拒否権なしだよ！？ あっ！コラ！ ぐいぐい引つ張んな！」

長谷川はそのまま別の部屋に連行されていた。

それじゃ俺も用意するでしょう。

茶々丸が行ってしまったがなんとかなるだろうよ。

………

………

…

無事に着替え終わり、設置されていた野点の席で茶々丸の点てられる茶を待っている。

着物を着せられた長谷川はまだブツブツと文句を言っていたが、大人しく座って一緒に茶を待っていた。

少し経つと茶々丸から茶を差し出された。

だがはつきり言って作法など全くわからん。

なので何も気にせずに飲んでみた。

「とてもうまいぞ、茶々丸」

「ありがとうございます」

この見事な日本庭園と野点の雰囲気…落ち着くもんだ。
だがそれを壊そうとする無粋な輩がいるのは戴けないな。

「あつ！いました！ メフィスト選手！少しインタビューのほうを
——「黙ってそのまま消えろ」——ハイ」

4、5人ぐらいのマスコミ風な学生がそろそろと騒がしく迫ってきたので、軽く暗示を掛けて追いつ返す。
だが長谷川が近くにいたことを思い出し、軽く後悔した。

「メフィスト先生……今のはなんですか？」

「さあ？ ご飯でも食べたくなっただんじゃね？」

まずは誤魔化してみる作戦で行くでしょう。

「いやいや！ 明らかに不振だったじゃないですか！？」

「気のせいだ。奴らはきつと重大なことを忘れて取りに帰ったのかもしれないぞ」

明らかにムリがあるわ！

「メフィストさん、もうバラしてもいいのでは？ 幸い千雨さんはさっきの武道会である程度真相にたどり着いていますし」

「もつと早く言おうぜ、茶々丸ウ！」

ならムリして誤魔化さなくてすんだじゃないかよ！

「バラすってことは……メフィスト先生やネギ先生はその……こんな事口走るのは抵抗があるんだが……ま、魔法使いなのか？」

「……まあ丁度いいか、今から俺が魔法使いだという証拠を見せてやるよ。」

アデアット、永界の指輪。認識阻害結界発動」

マスコミがこれ以上近づいてこないように結界を発動させると長谷川は状況が全くわからないといった様子だった。

「ご覧の通り、俺は魔法使いだ。それも『幻獣使い』『災厄の邪神』などと恐れられている最悪の魔法使いだよ」

「……一つ目もよくわからんが、二つ目はなんつう邪悪な異名だよ」

「今は解消されていますが20年前までメフィストさんは9000万ドルの賞金首でした」

「なっ！？ 9000万ドル！？」

俺の話を聞くなり長谷川は顔を青くして怯えていた。

別に取って食う訳じゃないんだし、そんなに怯えるなよ。

「何をそんなに怯えているんだ？」

「これが怯えないでいられますか！？ 目の前に日本円にして約90億円の賞金首がいるんですよ！？ うがー！ 何やってるんだよ、少し前の私！？ 超特大の地雷踏んでんじゃねえか！」

いやいや、そんな人生終了みたいな空気醸し出すなよ。

「千雨さん、落ち着いてください。メフィストさんは敵意ある者しか攻撃しませんから」

「……え？ それマジ？」

「はい、マジです。ですが敵対なさるのでしたらお覚悟を……………
今まで敵対した者は生きておりませんので」
「さらっと怖えこと言っくんじゃねえぞ！」

ホント化けの皮が剥がれてきたな。

あのクラスにいるから個性なしとは思えなかったが…中々に面白い。
「くつくつく、準備期間にメイド服でいたから普通な奴だとは思って
いなかったが…まさかここまでいい性格をしていたとはな……面白
いぞ、長谷川」

「あ、いや……これはそうじゃなくて」

「まあいいや、それで？ 長谷川は魔法使いに興味があるのか？」

魔法使いという単語を口にしたので、そこらへんにいる一般人と一緒な「魔法」という物に興味がある年頃なのかと思ったんだが…長谷川の表情をみるなり違いそうだな。

「多少は興味がありますが…普通の学生生活を送りたいので関わりたくないってのが本音ですね」

「ふ〜ん、まあ考え方は人それぞれだ。俺からは特に言うことは…
いや、合ったな、俺は別に良いんだが魔法をバラすのはやめておけ。
記憶をいじられ、最悪消されるぞ」

「……それは警告ですか？」

消されるという単語を聞いた瞬間に少し顔が青くなる長谷川。
それでもはい、わかりましたと言わずに突っかかってくるとは…た
いしたもんだ。

「いや、只の忠告だ。死んだとなると色々と後処理が面倒になるか
らな」

「メフィストさん、それは些か薄情すぎやしませんか？」

「自分のクラスメートってだけだろ？ 俺は少年ほど優しくはないんだよ。」

忠告はしたし、その上で暴走するってんなら俺の許容範囲外だ」

自分の行動には責任を持たないとな。

「さて、俺の話は終わりだ。あとは好きに茶々丸と話していればいい」

「まあこれつきりだろうし色々聞いておくとするか」

俺は興味ないので日を浴びながら茶を楽しんでいるとしよう。

……

……

…

「むっ……ここは……」

「お気付きになられましたか？」

どうやら眠っていたようだ。

今の状況はと言うと、茶々丸に膝枕されている状態だ。

「悪い、茶々丸。今日はお前とのデートだったのに俺一人だけ寝てしまっ」

「いえ、メフィストさんはさっきの武道会でお疲れのようですし…
…もう少し私もこうしてたいです」

「そうか？ ならもう少しだけこのままでいいか？」

「はい」

満面の笑みで了承してくれる茶々丸。
おもわず頭を撫でてしまった。
ちよつとびっくりしていたが嬉しそうだ。

「茶々丸は今のまま、俺やエヴァみたいな悪に染まらずにいてくれよ。」

俺たちに長年欠けていたポジションなんぞな」

「？ おっしゃっている意味がよくわかりませんが…」

ちよつと変なことを言ったか？

最先端のAIとはいえ2歳半には難しいことだったかな。

「ようは今のままでいてくれってことだ」

「いえ、そういうことではなく、私の中ではマスターもメフィストさんも悪ではありません」

「……へえ」

「自衛のためにしか人を殺していないと聞いていますし、普段の人となりを見れば悪人か否かなど私でも判断可能です」

あー、良い子過ぎるよ、茶々丸。

なんだか眩し過ぎて直視できないほどだ。

「そんな良い子の茶々丸にはもっと頭を撫でてやろう」

「なんでしょうか…メフィストさんに頭を撫でてもらうと安心します」

「それは重畳」

こんなに健気な子を作ってくれるなんて…超鈴音、グッジョブだ。

「なあ、先生……教え子とイチヤついていいのかよ？」

「長谷川……無粋なことを言うんじゃない」

まあそろそろ場合か。

本格的な学祭デートと行くでしょう。

「茶々丸、そろそろ学祭を回りにいくとしようか」

「わかりました。千雨さんも一緒にどうですか？」

「なっ！　なんで私も一緒に行かないと行けないんだよ！？」

俺も不思議なんだが…

二人も侍らせたのがバレたらまたエヴァが拗ねかねんぞ。

「いえ、こうして話すのも何かの縁ですし…千雨さんはこれから一人で学祭を回るのですか？　一人なら一緒に回ったほうが面白いと思うのですが…」

「いやいやいやいや！　さっきみたいな空気を醸し出す二人と一緒にいるなんて真っ平ゴメンだ！」

文句を言う長谷川。

まあ赤の他人だったら気まずいこと間違いなしだからなあ。

でもそれがわからない茶々丸ではないと思うし…話の馬が合ったのか？

「そう言わずに一緒に行きましょう」

「バ、バカ！　腕を引っ張るんじゃない！」

なんだか茶々丸の雰囲気若干嬉しそうになっているのいつか。

「それじゃ行くとするか」

「ハイ」

「こら！ボケロボ！勝手に連れて行くんじゃないやねえ！」

聞こえない、聞こえないって。

……

……

…

この後昼飯を食べて、エヴァに見つからないように気配を探りながら遊びまわった。

長谷川は最初のうちはブツブツと文句を言っていたが、強引に引つ張りまわす茶々丸に色々と諦めたらしく少しは面白そうにしていた。

「ん？ 小物店か……茶々丸、少しここに寄っていいか？」

「ハイ、問題ありません」

歩き回っていると、路上にアクセサリーを売っている出店があったので寄ってみることにした。

どうやら学生が経営しているらしいが……この出来具合、本当に学生かよ。

「なあ、これはお前が作ったのか？」

「そうですよ、これらはかの超 鈴音の技術を使って加工した本物です」

ネックレス・イヤリング・指輪などなど。

それらには小さいがダイヤモンド・エメラルド・ルビー・アメジス

ト・サファイア……
かなりの種類があつた。

これで1万を行かないとか……とても怖いんだが、俺が見たところ本物であつた。

「なあ、これマジで本物？」

「ええ、本物です。大学の考古学部と採掘サークルが掘りにいって取ってきたのを分けてもらったんです」

「価格設定おかしくないか？」

「これらは学生が頑張ったら買えるようにと設定しているので……多少は安くしていますね」

多少じゃねえよ、めちやくちやだよ！

まあ好都合だし少し買っていくとするか。

「それじゃあこれとこつちを一つずつくれ」

「はい、金額はこちらになります」

「……ホント、パチモンじゃねえかと思うほどの価格設定だな」
「毎度、ありがとうございます」

金額のほうは内緒だ。

長谷川は商品を見つつツツコんでいて、それに茶々丸が相槌を打っていた。

「お前らは何か欲しいものがあるのか？」

「いえ、私は結構です」

「先生、これってとてもじゃないが本物に思えないんですけど！」

その気持ちはよくわかるが、俺の見立てじゃ本物のようなんだよ。

「茶々丸、少し調べてみてくれないか？」

「了解しました……スキャン中……スキャン完了、純度100%の本物です」

「おかしいだろ！？　なんで日本の学園祭で本物の宝石がついたアクセサリーがこんな値段で売ってるんだよ！？」

「麻帆良学園ですので」

「麻帆良だからな」

そうじゃないと説明がつかんよ。

ああ、長谷川が頭を抱えてまたブツブツ文句を言い始めてしまった。

……なんか面白いな。

「買いたいものがないなら行くぞ」

「わかりました……千雨さん」

「自分で歩けるから引つ張らんでいい！」

「そろそろパレードの時間だし場所取りに行くのでしょうか」

………

………

…

校舎の上で某夢の国のような派手なパレードを見ている。

具体的な名前は出せないぞ。

出したら消されてしまうからな！

「茶々丸と……まあ突然の参加だったが長谷川も今日は楽しかったか？」

「ハイ、とても楽しかったです」

「…どっちかって言うとお楽しかったかな」

頬を薄く赤くしてそっぽを向きながら言うなんてツン娘かよ。
似合っているけどな。

「ふふ、まあいい。今日一日俺に付き合ってくれた礼だ。二人とも受け取ってくれ」

俺はさっき買ったネックレスを二人に渡す。

突然の物に驚く二人だったが、茶々丸は嬉しそうに、長谷川はこんなの貰えないというような顔をしていた。

「長谷川、今日は勝手にこっちの都合に巻き込んでしまったからな。それはお詫びの意味も込めている。だから返品はなしだ」
「で、でもこれってさっきの本物のやつなんですよね！？　いくらなんでも恐れ多いんですが！」

俺に返そうとする長谷川だが、一切受け取るそぶりをみせない俺に焦れてしぶしぶと言った様子で諦めた。

「メフィストさん、つけてみてもいいですか？」

「ああ、是非つけてみてくれ。もちろん長谷川もな」

「わかりましたよ」

茶々丸のはチェーンに指輪を通したやつで、装飾してある宝石はダイヤモンド。

長谷川のは指輪ではなくロザリオで、宝石はアメジスト。

「その宝石は二人の誕生石となっているからな。大切にしてくれる

と嬉しいが…」

「もちろん大切にします。ありがとうございますね、メフィストさん」

「あ、ありがとうございます、メフィスト先生…／＼／＼（ヤバい…リアルで年上の男からのプレゼントなんて初めてだ…）」

喜んでもらえたようであり。

二人ともすぐにネックレスをつけてパレードを見ていた。

時折、ネックレスを指でイジりつつ見ていたのでかなり気に入ってもらえたようだ。

「そろそろパレードも終わりだな」

「そうですね…メフィストさん、この後私は超 鈴音に呼ばれているのでそろそろ失礼します」

「わかった、バレないようにしておけよ」

「心得ています」

そのままジェットを噴かせて飛んでいく茶々丸。

長谷川はまだ慣れないらしく、少し口を空けていた。

「俺はこの後、超 鈴音に少し挨拶しに行くとするが長谷川はどうする？」

「私はこのまま帰るとしますよ」

「そうか、それじゃ行くとするわ。あまり夜更かしするなよ」

さてさて、超鈴音はどんな考えで魔法使いに戦いを仕掛けるのか…それとこっちと敵対しないという事を再度確認しておかないとな。

第肆拾捌話 『良い子 悪い子 普通の子』（後書き）

自分で決めた期限を破ってしまつて申し訳ないです！

レポート・小テスト・チョコボ・遊びなどが重なつて、さらに茶々丸との話の展開が詰まつてしまったため遅れてしまいました……。

r
z

第肆拾玖話 『正義とは?』

超鈴音を気配察知で探し出し接近しに行くと、同時にエヴァの気配も近くで感じ取った。

どうやらエヴァも超に用事があるらしい。

近づく、葉加瀬と茶々丸と話し中のようでこっちは気が付いていなかった。

「でも超さん、いいんですかー? このまま作戦を続けると……ネギ先生には問題児・悪者と記憶されたままになりますよー?」

「それは構わないネ」

葉加瀬が超に気遣っているが、関係ないといった様子の超。

声を掛けるのは躊躇う空気だったので隠れて聞き耳を立てていた。

「しかし味方に引き込めそうにないのは残念ネ。

大会でも観察していたが歳に似合わずアレは堅物ヨ。こっちはつくまい……」

エヴァは超達の少し上空に簞に乗って聞いていた。

「あの子に目的があるように私も目的があつてここに来たネ。誰にどう思われても構わない……私は私の目的を果たすまでネ」

誰にどう思われても構わない……か。

くつくつく……中々どうして、気に入る言動じゃないか。

そんな超を気に言ったのかエヴァが声を掛けるようだ。

それじゃ俺も挨拶と行くとしよう。

「くつくつく……なかなか良い心意気だ、超鈴音」
「その言動、目的遂行の心構え……実に俺好みだ」
「エヴァンジェリンさん！メフィスト先生！」
「マスター！メフィストさん！」

葉加瀬と茶々丸が驚いていたが超は慌てずにこっちに向き合ってた。

「これはこれは…かの『闇の福音』と『幻獣使い』に褒められるとは…私も捨てた者ではないネ」

「安心しろ、手は出さん。明日も祭りだ。酒の肴に見物させてもらう」

「俺もこつちと敵対しなければ手を出さないぞ」

てかたぶん1日エヴァとデートだからそんな暇はないからな。

「こちらとしては絶対にあなたがたに攻撃の意志はまったくないネ。……それよりいいの力？あなたたちの弟子のネギ坊主に敵対して困らすことになるかもヨ？」

「命を取らないなら好きにしていーいぞ」

「素晴らしい♪存分にやってくれ。あのぼーやはどんどん困らせてやって構わんよ。」

茶々丸は貸してやる。壊すなよ」

「ありがとうございます、マスター」

聞きたい事は聞いてのでこのまま帰るとするか。

「メール？誰からですかー？」

「フッフ、最終日を前に相對することになりそうヨ」

どうやら少年から呼び出しを受けたようだ。

そっちも少し面白そうなことになりそうな予感はしたが、楽しみは明日にとっておくか。

「それじゃエヴァ、家に帰ろうか」

「そうだな。……ああ、そうだ。今私の別荘で神楽坂明日菜がうだうだやっていたんだった」

アスナがうだうだやってる？

「アスナは何かあったのか？」

「なんでもタカミチにフラれたらしい。そろそろ大体別荘に入って3時間ぐらいか」

それはそれは…タカミチももつたいないことをするもんだ。

「それはそうと、メフィスト……茶々丸の首に付いていたネックレスはお前がプレゼントした物か？」

「おや、なんでわかつたんだ？」

「分らないでか。茶々丸がお前も見るとなりネックレスをイジリながらちらちらと見ていたからな」

茶々丸のやつ、思いのほか気に入ってくれたようだ。

「まあいい、茶々丸なら許してやる。それに明日には私にも何かプレゼントをくれるんだろう？」

「フフ、了解した」

何をあげようか…折角だし手作りでなにか作るとするか。
幸い宝石の類いは王の財宝に何個か貯蓄しているからな。
ゲート・オブ・バビロン

家に戻りエヴァの別荘に入ると…なるほど、アスナがうだうだして
た。

そんなアスナを見るなりエヴァは近づいていき蹴り付けた。

「うつとおいしいわ——ッ！！ シャキツとせんかぁ！神楽
坂明日菜！」

「ギャ——ッ！？」

ベッドから落ちて砂浜の上に転がっていくアスナ。

「何だ貴様！失恋程度で情けない！」

人の別荘に上がり込んでうだうだぐじぐじと！」

「まあまあエヴァちゃん。失恋は乙女にとっては大事件やし」

木乃香がフォローするも聞く耳を持たないエヴァ。

「はんつ、4日もうだつてれば十分だ。大体あんな朴念仁のどこが
いいんだか…」

「何ですって——！ 高畑先生の悪口は許さないわよ！」

「何だ元氣じゃないかバカ。ほら、来客らしいぞ」

どうやら超と一戦してきた少年たちがここにやってきたようだな。
だが、いつもの気配ではなく何人か増えてやってきたようだ。

……
……
……

上に着くと、いつものメンツに古菲・楓・早乙女・長谷川など……
順調にこの野菜小僧は魔法をバラしておいでのようにだった。
長谷川は俺がバラしたんだが、その前に少年との会話や大会で確信
したようだし……俺のせいではないよな？

「なあ、エヴァ……魔法を秘匿するべしって考えはどこに行ったんだ
ろうな……」

「言うな。私も少しイラっている」

魔法使いたちに吸血鬼だとバレないように何百年も生きてきた俺たち
は、この簡単に魔法を一般人にバラす少年に少しイラっていた。

「まあいい……どうせ後で困るのは少年だ。世間にバレてもしたら被害
が飛び火しないうちに俺達は雲隠れするでしょう」

「私の呪いはどうするんだ？」

「当然、解呪していくに決まっているだろ」

向こうではなにやら作戦会議を始めていた。
なんでも超は少年の子孫だとか……火星入だとか……歴史の改変のため
に魔法をバラすだとか……

「おもしろびつくりな単語が飛び交い過ぎやしないか？」

「極めつけなのはタイムマシンだな……科学の進歩には驚くべきこと

ばかりだ」

いいなあ…タイムマシン…

もし行けるなら神話の時代に行っているんな奴と闘ってみたいもんだ。

「「アデアット！」」

どうやら綾瀬と新参の早乙女のアーティファクトのお披露目をやっていた。

前衛はアスナ・刹那・楓・古菲

後衛は木乃香・宮崎・綾瀬・早乙女

「いやいやいや、急場しのぎにしちゃかなりグッドなメンバーじゃねーか、こりゃ！」

「デコボコパーティーだな」

「経験知不足にも程があるだろ。まあ最初のボスが超ならちようどいいんじゃない？」

ぶっちゃけどうでもいいわ

バレようとバレまいとなるようにしかならん。

「私たちは一切手を貸さんからな、頼るなよ」

「ハ、ハイマスター師匠。もちろんです」

エヴァが少年に頼らないよう釘を刺すが、どうも考え事に没頭しているようだ。

クラスメートの超と闘いたくないとか考えていそうだな。

そんな少年の心境に気付かず、ガキどもははしゃいでいた。

早乙女のアーティファクト「落書帝国」で遊んでいたデコボコパーティは、そろそろ寝ようと言いだしベッドへと向かっていった。

……

……

…

時刻は夜。

騒いでいたガキどもは夢の世界へ旅立ち、別荘内は静まっていた。俺はと言うと新しい呪文を開発しようと思い、古代語で書かれている本を読んで考え事に没頭していた。

「メフィストはん、ちょっと相談ごとだあるんやけど…」

「ん？木乃香と刹那か…。いいのか？寝なくても」

相談があると言って木乃香と刹那がやってきた。どうせ超のことだろうな…さて、どうしたもんか。

「ちょっとだけや、あんな…超りんのことやけど、ホントに悪い事をしてるんかなあって…」

「なるほどな…刹那はどう思っているんだ？」

「私は…よくわかりません。魔法をバラす理由が解りませんが、お嬢様たちが不利益を被るなら阻止するまでですが」

「なるほどな…」

まだ確固たる自分の意志ってやつを形成していないのでは…この戦いは厳しいのかもしれないな。

「ちょうどいいか…下の砂浜に行くぞ。少し稽古をつけてやる」
「……へ？」

……
……
…

「いくぞ、二人とも……死にたくなければ構えろ」

問答無用で無詠唱の「魔法の射手 闇の29柱」を二人目掛けて撃つ。

刹那は剣で防ぎ、木乃香は障壁で防いだ。

俺はそのまま刹那へ体術で、時々木乃香へ魔法を放つように闘うことにした。

「今までどうだったか知らないが、この世の真理を一つ教えておこう！」

正義の反対は悪ではない！違う種類の正義だ！

その正義と正義がぶつかり合い、負けた方が『悪』と成るんだよ！」

「プラクテ ビギ・ナル！」

闇夜切り裂く一条の光 我が手に宿りて敵を喰らえ！『白き雷』！

！」

「おっと！」

刹那に向けて攻撃していると木乃香が「白き雷」を撃ってきた。

ちゃんと当たれば俺だけに攻撃が当たるコースだったが…まだまだ！

「刹那！お前は自分の考えを持っているのか？」

木乃香に付き添うだけで本当は自分の考えを持っていないんじゃないのか？」

「そ、そんな事はありません！ グッ！」

「手を止めるな！動きを止めるな！思考を止めるな！」

人間は他人から与えられた考え・嘘などが事実だと勘違いするようになり自分で考えることを止めた時、人間から物へと成り下がる！

ちゃんと自分で確かめ、考え、そして行動するようにしないと奴隷と変わらんつまらない物になってしまうぞ！」

刹那を木乃香の方へと投げ飛ばし、そこへ威力を弱めた「雷の暴風」をブチ込む。

まあこれくらいでくたばるようならまた一から修行のやり直しだな。

「木乃香、お前はどうか？ さっきの物言いだと、超鈴音を悪と断定できる事実があればお前は容赦なく断罪できると言うのか？」

「そ、そうは言うてまへん！」

「何が違う？ お前達は客観的に物事を見ていない。

魔法をバラすのだって将来的には良いことがあるかもしてんぞ？」

俺の言い分に動きを止め考え込んでしまう二人。

まあ中学生に背負わせる問題ではないと思うが、それはこいつらが自分で進んできた道だ。

自分の行動には責任を持たないとな。

「木乃香、刹那。お前達はまだ若い。今は俺の言うことが理解できんかもしれないがよく覚えておけ。

感情論で動くことだけは止めておけよ。それと他人の意見を一から十まで信用するな。

真実なんて自分で確かめて初めて意味を持つ。他人から教えられた

物事なんぞ事実かどうかなんて完璧な判断は出来ないからな」

読心術を使えばそんなことはないが… ああ、そういえばいたな、一人。

「俺の従者ならば他人がなんと言おうとも自分の意志を貫く覚悟を
持て。

それを守るならなにをやっても俺から言うことはない」

真名も確固たる意志をもって超に協力しているからな。

この二人にもあれぐらいの意志を持ってもらいたいもんだ。

「それじゃ小言はこれで終了だ。あとは自分で考えておけ」

あー、やだやだ。ガラでもないな、じじ臭いぜ。

明日はエヴァとのデートだしさっさと寝ようつと。

第肆拾玖話 『正義とは?』 (後書き)

次回はついにエヴァとのデート。

臆識は皆さんの期待に応えられるのか!?

次回を乞うご期待!

第伍拾話 『真打ちは最後に登場!』

学祭3日目。

今日はエヴァとのデートだ。

家からの出発じゃ面白味に欠けると言い出し俺は一人で先に待ち合わせ場所に向かっている。

女は総じて準備が掛かるからな。

待ち合わせ場所はいつもどおり世界樹広場だ。

少し待っていると、ピンクと白を基準としたゴスロリ風の服を着てエヴァがやってきた。

ちなみにだが、俺の服装はスーツにしてある。

「待たせたな、メフィスト……ってなんだ？お前のその服は」

「いいんだよ、男の服は女の服を映えるように質素にしておくものだ。まあちゃんと金はある程度つき込んであるから問題ない」

「そ、そうか…私の服装はどうだ？」

少し恥ずかしそうにしながら聞いてくるエヴァ。

そんな質問に答える解など一つしかないわ！

「ああ、可愛いぞ。文句なしに可愛い」

「あ、ありがとう……／＼／＼」

「それじゃ見て回るとしようか。エヴァはどこに行ってみたい？」

「そうだな…あついかからアイスクリームが食べたい」

アイスかー。

それならワゴンカーがどこかにあるだろうし、色々みながら探すと

するか。

「よし、それじゃ行こうか」

「あつ、ちよつと待て」

「ん？」

歩き出そうとしたらエヴァに止められた。

何事かと思っていると、エヴァは顔を軽く赤くしながら俺の手と自分の手を繋いでそっぽを向いていた。

「フフ……」

「なっ！笑うんじゃない！／＼／　私が繋ぎたいんじゃないんだからな！

メフィストが迷子にならないように仕方なく手を繋いでやったんだ！そこんところを勘違いするんじゃないぞ！／＼／」

「そっかそっか。それじゃ俺が迷子にならないようにしっかり掴んでいてくれよ」

「し、仕方がない奴だな……／＼／」

俺の手を掴むエヴァの手が少し強くなった。

いつのまにかツン娘ちゃんになっちゃってまあ……可愛いじゃないか！

……

……

…

少し歩くだけでアイスクリームを売っているワゴンを見つけた。

その女性店員が笑顔で「こんなちっちゃい女の子相手に援交ですか？」と言われて、血祭りに上げようかと思ったのは内緒だ。どうやらその店員…学祭前にタカミチと一緒にやっていた指導員の活動でボコした男の彼女らしい。とても悪意ある質問を受けて俺のハートは傷だらけになってしまったよ。

おかしくね？

肉体年齢だったら俺は16歳だぞ？

絶望した！ 幼女と歩くだけで援交と勘違いされる世の中に絶望した！

「おい、何を打ちひしがれているんだ？」

「エヴァ……今の俺に必要なのは癒しなんだよ……」

「よくわからんが…これでも食べて元気出せ」

エヴァが自分のアイスを差し出してくれた。

「ありがとよ、エヴァ！」

「こ、コラ！ こんなところで抱きつくんじゃない！／＼／」

傷心中の俺にとってエヴァの優しさは最高の特効薬だぜ！

感激して後ろから抱き上げるようにして喜びを体現していたら、店員の視線が「この変態」と言っていた。

もうやだコイツ…今すぐこの場から離脱だ！

……

……

…

「さて、気を取り直して…次は遊園地に行くとするか」

「ならジェットコースターに行ってもいいか？ それとコーヒーカー
ップにお化け屋敷と…」

「時間はいつぱいあるからな。色々回ろうか」

「ああ！ ほら急ぐぞ、メフィスト！」

フフ、あんなにはしゃいじゃって…

だが俺の勝手でエヴァをこの場所に縛り付けてしまったからな。
不自由していないか後で聞いてみるか。

ジェットコースターやらコーヒークップなどに乗って午前中が終わ
ったので、昼飯を食べることにした。

ご飯は茶々丸がサンドイッチを作って置いてくれたので助かつ
たぜ。

ホント、よく出来た従者だな。

「なあ、エヴァ。茶々丸ちょうだい」

「ヤダ」

「いいじゃんー。ケチー」

まあ普通はそうだな。

「それじゃ食べるとしようか。いただきます」
「いただきます」

何を食べよっかな。

卵・ツナ・カツ・レタスとトマトなど…

まずは卵から行くか。

「やっぱり茶々丸の作るご飯はおいしいな」

「まったく。まったく、メフィストの料理ときたら竜の丸焼きとかだからな」

「でもおいしかったろ？」

「まあそれは否定せんが……ぬグツ!!」

いきなりエヴァが咽こんだかと思ったら今食べているサンドイッチを吐き出し始めた。

もしかして毒か!?

毒は俺たちにとって最もツライからな

なまじ不死身だからぽっくり逝けないのでいつまでも苦しいのが続くし…ってそんな事を考えている場合じゃない!

「おい、エヴァ! 大丈夫か!？」

「大丈夫ではない! あんのボケロボツ! ツナの中にんにくを潜ませていたわ!」

「あゝ…、俺たちの好き嫌いを無くそうとしてくれたんだろうけど…」

ぶっちゃけ俺も苦手だ。

食べられないことはないけど…真祖に成り立てのとき、天敵だったのを忘れて食べてしまい…何日か寝込むことになってしまったからなあ。

そのときエヴァも一緒に食べてしまったから俺たち二人とも軽いトラウマ状態って訳だ。

「だが折角茶々丸が作ってくれた物だし…残すのは気が引けるんだが」

「だが私は正直、食べたくないぞ」

「俺も食べたくないが…しょうがない、漢を見せるときがきたようだ」

天国の父さん、母さん。

不肖このメフィスト、エヴァのために漢を見せることにします。

「これが俺の逝き様だ!!」

敵は5体。全て一口で食べるしかない！
まずは1体目。

口に入れる瞬間までにんにくの臭いがしないとは…茶々丸め、これは完璧に俺たちへの挑戦と受け取ったぞ！

「ええい、ままよ!」

まずは一つ！

ぬぐっ！一つだけなのにもうキツイぞ。

一気に飲み込もうとしただ予想以上に精神へのダメージがかいな…

だがまだ俺のターンは終わりじゃない！

「お、おいメフィスト？ 無理しすぎてないか？」

「問題ない。エヴァ、漢とは無理してなんぼの生き物なんだよ」

2体目エッ！

メフィストはにんにく入りサンドイッチを倒した。
精神に500のダメージを負った。

にんにく恐怖症が状態異常で発生した。

3体目ッ！

メフィストはにんにく入りサンドイッチを倒した。
急所に入った！

精神に5000のダメージを負った！

「ガハッ！！」

「吐血！？」

「まだだ！まだ終わらんよ！」

4体目エッ！

メフィストはにんにく入りサンドイッチを倒した。
急所に入った！

効果は抜群だアッ！！

精神に20000のダメージを負った！

「ラストオッ！！」

5体目エッ！！

メフィストはにんにく入りサンドイッチを倒した。
言葉では表現できないほどのダメージが精神にクリティカルヒット！

精神に700000のダメージを負った！

「フツ…強敵だったぜ…」

「メフィスト？　だ、大丈夫なのか？」

「エヴァ…我が生涯に一片の悔いなし！！ぐふッ！！」

「メフィスト！？　死ぬな！メフィストオッ！！」

何やってんだよ、俺。

………

……

…

「んお……ここは…」

「おっ、バカが気が付いたな」

どうやらあれから少し気絶していたようだ。
さらにエヴァの膝枕イベントが発生していた。

「どのくらい俺は気絶していたんだ？」

「ほんの10分程度だ。まったく、無茶なんてするな…と言っても意味ないな」

「ハハッ、何百年も一緒にいたらさすがにわかるか」

「当たり前だ」

よし、なんだかいい雰囲気だし聞いてみるとするか。

「なあ、エヴァ……この地に縛られてもう15年。不満やら不自由

な思いかしていないか？」

「……………フン！」

「イデデデデデデデデデッ…！」

ぬお！いきなりエヴァが俺の頬を両手で引っ張ってきた！

「ノー気なガキどもに紛れて勉強しなくちゃならん不満は山のようにあるし、魔力のないこの身体の不自由でしかないと言いたいことはたくさんあるんだぞ！」

「うつ！ス、スマン……………」

「だがな……………」

引っ張る手を止め、今度は俺の頬を撫でだす。

「この15年間は襲撃者に備える必要はなかったし……………何よりメフィスト、お前とこんなにも穏やかに暮らせているんだ。不平不満を我慢しても享受するだけの価値はあるぞ」

「ありがとう……………エヴァ……………」

満足してもらえたなら重畳。

学園での仕事が少し面倒だが、俺も概ね不満は……………まあ正義バカ達がつつかかってこなければ不満はないな。

「なあ、メフィスト」

「ん？なんだ？」

「私はお前の物だし、お前は私の物だ。だから一人だけ先に逝かないでくれよ……………」

「フツ……………心配するな。この世で俺を殺せる奴なんて存在しない」

よく光が強くなれば闇も強くなると言われるが、俺というイレギュ

ラーに対抗できる存在を世界が作るとは思えんし…あつ、俺は闇のほうだな。

作れたとしても完全なる世界の連中が何かするぐらいかねえ。

まあそんなことはどうでもいい。

今はエヴァの不安を取り除くことが最優先だな。

とりあえず名残惜しいがエヴァの膝枕から頭を上げて起き上がる。

そしてあぐらを掻いてその上にエヴァをちょこんと乗つけた。

「そんなに心配しなくても大丈夫だつて。俺たちは不老不死だろ？」

「その慢心がとても怖いんだよ！」

「慢心せずして何が最強種かッ！」

「やっぱりバカだな、お前は！」

ぬう…怒られてしまった。

「まっ、冗談はこころ辺でやめといて…プレゼントがあるから少し目を瞑っていてくれ」

「さらつと流しおつて…まあいい」

それじゃエヴァの首にこれを通してつと…

気に入ってくれるといいんだが。

「付け終わったから目を開けてくれ」

「これは…タリスマンか？」

「ご明察。俺の別荘にあつた宝石を利用して作ったものだ。持ち主に危機が訪れたら障壁を張るように術式を組み込んである」

ナギぐらいの攻撃を受け止められるぐらいの出力だけだな。

え？ 十分すぎるって？

「よし、似合っているぞ」

「あ、ありがとう、メフィスト／＼」

はにかんじやって…可愛いよなあ、もう！
健気なエヴァの頭を撫でてやろう！

「ん……なんだかこういうのも久しぶりだな」

「そうだったか？ それなら午後はこのまままったりしているとしようか」

「それも魅力的だな……だがやられっ放しというのは性に合わん」

するとゆっくりだったがエヴァの唇が迫ってきた。

特に避ける理由もなかったから俺もそれに応える。

数十秒ほどキスを続けているとエヴァのほうから唇を離れた。

「フフ、キスも久しぶりだ／＼」

「そうだな…だが俺もやられっ放しも好きではないぞ」
「ん！？」

今度はこっちから唇を奪うことにした。

一瞬驚いたエヴァだが目を閉じされるがままになる。

この後はただイチャついて過ごしていた。
リア充死ねという意見は受け付けないぞ。

まったりして過ごしていると、学園中がなんだか騒がしくなってきたことに気付き、見に行ってみることにした。

すると、超 鈴音 VS 麻帆良学園とでも言うような戦いが起きることをしり、今日最大の見世物を逃さずにすんだ。

今はヴィマーナを呼び出し、空中で会戦を今か今かと待っているところだ。

もちろん認識阻害の結界を張っているぞ。

「ええつと、何々…見世物の名前は『火星ロボ軍団 VS 学園防衛魔法騎士団』というらしいぞ」

「平和ボケした学園側がどの程度がんばるか見物じゃないか」

別荘内に貯蓄していた年代物のワインを持ってきてヴィマーナの上で飲みながら待っていた。

学園側の配置が半分を過ぎた頃、海の中から武道会に出てきた田中とか言う奴が大量に搭乗。

いきなりの展開に慌てながらも学生たちは応戦していた。

時間が経ち魔法先生が参戦していくが学園結界が陥落。

さらに超側は、スクナほどではないが上位の霊格を持つ鬼と科学が融合した巨大な機械の身体を持つ鬼が数体出現させた。

さらに被弾した者を3時間先の未来へ飛ばす弾丸を使用してきてアホな魔法先生どもはこぞつて飛ばされていた。

「なあ、メフィスト。今、超 鈴音が使用し始めた弾丸を回避できるか？」

「色々試してみないと判らんが…遠目で見たところ、あの周りを覆う球体を破壊するなりすれば回避は出来そうだな。エアでの空間切断ゲイ・ジャルグか破魔の紅薔薇で無効化、世界樹の魔力を利用してゐるなら破戒ルブレイカーすべき全ての符でなにも能力が付与していない状態に戻すなど色々手はありそうだな」

だがあの弾が接触してから効果が発動までのタイムラグがあまりないのが面倒だ。

もし不意を突かれたなら何かをぶつけて、覆われる前に瞬動で逃げるしかないか。

「その方法を使えるのは世界でお前だけだろうが！」

「じゃあそれなりの力量がないと回避は困難だな」

見ているうちにタカミチまでもが脱落。

はてさて、今のところは超側が優勢となっているが…少年がどう立ち回るかが麻帆良側の勝利の力ギとなるな。

魔法先生・魔法生徒たちが消えたため、火力がごっそり落ちた学園側は拠点を守れずに一つを占拠されてしまった。

どうやら魔方阵の柱の役割を担うらしく、光の柱が上空へとその地点から伸びていた。

「おっ、一つ落ちたか。さて、どうするばーや？ 劣勢だぞ」

「それにしてもタカミチを含めて情けない奴らばかりだな。こぞつて排除されて恥ずかしくないのかね？」

「そう言わんでくれんかの」

すると俺たちのすぐそばにじじいが突然現れた。

「フン、平和ボケしているバカどもにはこれ以上の言葉は思いつかんわ」

「ふおふおふお、手厳しいのお」

「何のようだ、ジジイ？ 酒が不味くなるからどっかへ行け」

なにやら不機嫌になるエヴァ。

だがじじいは不穏な空気を感じ取りつつもここから離れるつもりはないようだ。

「二人ともこのままで良いのかの？ 超君の計画が成功すれば可愛い弟子とは二度と会えなくなるぞ？」

「フン、ぼーやの今後なんぞどうでもいいし、私が学園側に助太刀する義理も義務もないな」

「今回は俺の関与する事態じゃない。よって手を出す気は皆無だ」
「相変わらず身内以外にはとことん優しくないのお」

身内以外に優しくするなんて感情はとうの昔に消えうせたわ。

「まあワシも手を出す気はないんじゃ。混ぜてとくれい」

「勝手に酒を飲むなッ！」

「ふおふおふお、沢山あるんじゃから一つくらいはいいじやろ？」

「おい、じじい。こんなとこにいないで止めにいってこいよ。麻帆良のトップだろ？」

「若い奴らが止められれば止めるじやろ。止められんかったら責任は取る」

まったく…責任を取るような事態にしないのがトップの仕事だろうが。

こんな耄碌じじいがトップじゃ平和ボケするのも必然だったな。

「まあいいさ。どっちに転ぼうと俺たちには関係ないしな」

「そうだな、ジジイはここでハラハラしながら見ていればいいさ」

「…年寄りにはもうちょい優しくしないとイケないんじゃないぞ？」

戦いはすでに終盤に差し掛かっていた。

防衛地点が6個の内、5個が陥落。

そして最後の場所にも敵が接近しており、生徒たちが一斉に魔法を放つがあまり効いていなかった。

「おやおや、あつけない最後になりそうだぞ、じじい」

「まだじゃよ。まだネギ君が残っておる」

「なんだ、ようやくお出ましか、少年」

あつさり勝負が付くかと思われたが、少年が「雷の暴風」を敵の腹にぶち込んで動きを止めた。

どうやら朝倉が超の居場所を探し出したらしく、その場所を少年に教え、少年は世界樹の上空へと杖で飛んでいった。

だがたどり着く前に二セ茶々丸と田中の量産型が大量に出現。

苦戦するも生き残っていた魔法先生・魔法生徒が敵を引き付け、その隙に少年が超の元へとたどり着いた。

「今日の見世物のクライマックスだ。ぼーやがどれほど頑張るか見ものだ…」

「そついやどつちもタイムマシンを持っているんだつたな。ならば面白い戦いが見れそうだ」

超の攻撃は特殊弾を指と指の間に挟んでの体術。

それに加えてタイムマシンを使い距離を簡単に詰めての限りなく察知し辛い戦法を取って少年に止めを刺した…かと思つたが、同じ戦

法を少年も取り逆に超に反撃をした。

タイムマシンを使い敵の裏に回り込む戦法を使い続ける二人。客観的に見て完全な瞬間移動を駆使した戦いのようで、とても闘争心が燦ぶられる闘いだった。

心理戦を仕掛ける超だが、少年は自分の考えを貫き逆に超のカシオペアを壊す。

だが同時に少年のカシオペアも壊れてしまった。

「よかったな、じじい。少年が勝ちそうだな」

「少し危ない個所があったが、こんなものだな」

「ようやってくれた、ネギ君」

まだ諦めずに抵抗をする超。

特殊弾を大量に連射するが避けられる。

これで終わりかと思ったが、なんと超が魔法を使い始めた。しかも使う呪文は「燃える天空」。

じじいが止めようとしたが、そんな無粋なマネはさせなかった。

「いいからそこで見てろ、じじい。あの程度で死ぬほどやわに鍛えておらんよ」

「そういうことだ。ジジイは飲んだくれていればいいんだ」

まったく優しくない俺達の態度に涙目になるじじい。

だがそんなことはどうでもいい。

闘いはついに終幕へと近づいていた。

魔法を駆使して少年を追い詰めようとする超だが、いかんせん経験不足。

捕らえきれなかったが、少年の方は超に攻撃するのを戸惑っている

ようだった。

だが超が何か言ったらしく正面から打ち倒す覚悟を決めたみたいだ。超が「燃える天空」、少年は「雷の暴風」で最後の決着をつけることになったらしい。

互いに自身が持てる最大の魔法をぶつけ合い…遠目からではよく解らなかったが超が競り負けた様だった。

「超のやつ…最後のアレはどうしたんだ？」

「わかん。呪文が消えたように見えたり、何かあったんだろう」

「おっ、世界樹が光り始めたぞ。防衛地点が全て占拠されたか？」

最後の場所を見てみると…まだ占拠はされていなかった。

それなのに発動してるってことは不発になってしまふのか？

「どうやらこの見世物はここまでのようだ」

「かなり珍しい闘いを見れたから及第点をやろう。少し甘かったのが不満だな」

「そう言ってるな。まだまだガキばかりだしな」

まだ上空でウダウダやっていたが見る価値はなさそうだ。

あの後、強制認識魔法は発動せずに超の計画は失敗。どうやら自分の時代に帰るらしい。

少年に残って欲しいと言われていたが…流石は少年の子孫。
ガンコ頭は遺伝しているらしく決意は変わらないようだった。

それでも引き下がらない少年に対して超は最終兵器「超家家系図」
を使用。

その場を3分でカオスな状態にしてその隙に帰ろうとしていた。
俺達は遠目からその様子を見ていたが、不意に超が俺達の方へと寄
ってきた。

「学園長、申し訳ないがメフィスト先生とエヴァンジェリンにだけ
話がある。

なので少し離れてくれないか？」

「ふおおおお、最後のあいさつじゃしな。構わんよ」

文句を言わず学祭の後始末をしにいくと思われるじじい。

「さて、二人に忠告ネ。未来人であるこの私からの…ネ」

「御宅はいい。早く言ってみろ」

「せっかちネ。まあいいヨ……メフィスト・マクダウェルさん、私
はこの時代に来る前にちゃんと下調べをした。だがあなたの名前だ
けは発見できなかったネ」

あー…イレギュラーの存在だからな…
だがそれを言う訳にはいかんし…

「このことから予測するにメフィスト先生…あなたは名前を歴史か
ら抹消されるほどの事件が起きると推測されるネ」

「なんだとッ!？」

「それは本当なんですか、超鈴音!？」

「それってマジなん、超りん!？」

「刹那と木乃香……あつちで遊んでいろよ……」

「「あんなものよりこっちの方が重要や（です）！」」

おい、いくらなんでも少年が涙目になっちまうぞ。

「むっ、すまない二人とも……そろそろ時間のようだ」

「待て、超鈴音！ さっきの話をもっと詳しく！」

刹那と木乃香がなんとしても聞き出そうとするが、超鈴音はタイムスリップの準備に入った。

「さらばだ、ネギ坊主！ また会おう！」

たくさんの世界樹の魔力が集まり……光ったかと思ったら超鈴音の姿は消えていた。

こうして麻帆良祭は終わった。

超の最後の言葉のせいでエヴァの監視の目がきつくなったり、刹那と木乃香が時々建物の影から俺をみるようになってしまったがな。最後にいらん置き土産を放置していきやがって……恨むぞ、超鈴音。

第伍拾話 『真打ちは最後に登場!』（後書き）

さて……色々好き勝手にやったデートですが満足していただけたら幸いです。

これ以上は作者の発想力の問題で難しいかと。
なにぶん国語が出来ない非才な身なのでw

それと重要なお知らせ

実は1ヶ月後に期末テストという最悪なものがあり、臆識はまったく勉強をしておりません！

なのでちゃんと勉強をしないとりゅー ねんという事態になりかねないので1ヶ月後間の間、お休みさせて頂きます。

勝手だとは重々承知していますが…なにとぞご理解の方、よろしくお願ひします。

番外編 『嘘予告だよ！信じちゃダメだよ！』（前書き）

現実逃避に脳内で妄想爆発した内容を一心不乱に書いていたらいつのまにかこんな文字数にw

そんな訳で番外編でございます！

時系列は第拾参話の分岐点でナギと一緒に造物主をぬツ殺しに行くんですが……色々あって返り討ちにされます。

ライフメイカー

ああ、石を投げないで！

無理があるって自分でもわかってますから！

でもマジな話、始まりの魔法使いとか呼ばれていたんだから対吸血鬼の武器とか持ってたりに造れたりしそうな気も…

番外編 『嘘予告だよ！信じちゃダメだよ！』

魔法世界で勃発した南北を二分する大戦。

そこに主人公補正のない主人公、メフィスト・マクダウエルが参戦した結果、造物主^{ライフメイカー}に殺されてしまった。

そしたら天照大神との契約はまだ継続しているらしく、次の世界へ行ってくれとくじを差し出される。

アニメ知識が欠落したメフィストへの配慮で天照が用意してくれたらしい。

……余談だが元の世界には返れないと言われたメフィストは天照に殴りかかるが軽くあしらわれることとなった。

600年もの間、鍛錬をし続けても上には上がいることを実感したメフィストであった。

これは嘘予告です。実際にやるかどうかは臆識のテンションと相談となります。あと完璧なネタ話なので描写が適当となっております。

それを踏まえた上で閲覧してください。

「まずはつきりさせておこう。この作品はフィクションだ。
実在の人物、団体、事件などにはいつさい関係ない。すごく似てい
る名前だが全て別人だ。故にエヴァンジェリンを出せと言う願望は
聞き届けられないことを諸君は理解してくれ」

〔真・恋姫†無双〕

メフィストが目を開けると…そこは広大な荒原がどこまでも広がっ
ていた。

それだけならまだいい。

それだけなら許せる範囲だとメフィストは思いなおす。

気を取り直し自分はどいつだった状態でこの世界にやってきたのかと
色々確かめる。

すると…

「あああああああ〜まああああああああ〜てえええええええ
〜らあああああ〜すうううううううううううううううううう
うううううううー!」

『呼んだかの?』

「100年後に絶対天界に攻め入ろう、絶対攻め入ろう……ブツッ」

『今の貴様のチート能力は吸血鬼の真祖のみじゃ。それと武器を王トオラ・ハレロン^{ハイ・デライトウオーカー}の財宝の中から一つだけ使えるようにしてやる。一つだけなら永続的に現界させようぞ』

「ん……なら刺し穿つ死棘の槍で頼む」
ゲイ・ボルグ

『了解した、ほれ』

「確かに受け取った。地獄に落ちろ、天照さん」

『負け犬の遠吠え乙じゃ』

ゲイ・ボルグ
刺し穿つ死棘の槍を肩に担ぎ、とりあえず適当に……心の赴くままに歩いていくメフィスト。

色々見ていくうちにここが中国大陆、それもかなり昔だということがわかった。

「ふむ……しばらくは融通が利かなくなるし名前もメフィストから変えるか……そうだな、司馬懿にするか。あいつってお気に入りなんだよね」

こうしてメフィスト改め司馬仲達と改名し、さらに歩いていくと……なにやら頭に黄色い布を巻いたノッポ・チビ・デブが仲達の前に現れた。

「くつくつく……やあ、お嬢ちゃん。こんなところに一人でいると怖いお兄さんに攫われちゃうぜ」

「そうなたらいけないから俺たちがすぐそこまで送ってやるよ」

「お、俺たちと気持ちいいことが出来るかもよ…」

（これは……非常に不愉快だ。なるほど、不躰なナンパはこれほどまでに不快という訳か）

「黙ってないでなんか言ったらどうだ、お嬢ちゃん？」

（だがそれ以上にこんなクズにお嬢お嬢連呼されるほうがもっと不愉快だ！）

「アニキ、早く連れていきましょーぜ」

「ホントはもうちょっとお喋りしたかったが反応ないしそうするか、ゲヘヘ」

仲達は自分の腕を掴もうとしたアニキと呼ばれていた男の顔に槍をぶち込む。

すると反応できなかったのか、まったく避けようとせずに顔に風穴が開き後ろに倒れた。

「なっ！？ このアマ！よくもアニキを！」

「ゆ、ゆるさないんだな！」

「ザコに話す言葉など持ち合わせていない」

慌ててチビとデブは剣を抜くが、瞬きした瞬間には自分の胸に真紅

の槍が突き刺さっており二人はすぐに絶命した。

「それじゃ気の赴くまま…風の赴くままに流れていくでしょう」

「お待ちください！」

「あん？ 今度は誰だよ？」

「我が名は関雲長！ あなた様は天の見遣い様であられますか？」

「そんな宗教に出てくるような役職になった覚えはねえ、じゃあな」

「愛紗ちゃ——ん！ 見つかった——？」

「鈴々も早く見てみたいのだ！」

「桃香様！ 鈴々まで来たのか？ こちらが天の見遣い様かと」

「ちげえって言うてんだろ、え〜っと……愛紗とか「っ！ 貴様！」おっと」

仲達が「愛紗」口走った瞬間、愛紗が青龍円月刀で仲達の首を刎ねようと振るうが、刺し穿つ死棘の槍で防がれる。

「なんだ、いきなり？ 高々名前を呼んだだけでなんで俺がキレられてんだ？」

「何をぬけぬけと！ 我が真名を呼んでおきながらその態度！ もはや許さん！」

「真名？ 何の話だ？」

「愛紗ちゃん！ダメだよ！ 天の人はもしかしたら真名を知らないかもしれないよ！」

「そうだ、愛紗！ やめるのだ！」

桃香と鈴々が二人掛かりで愛紗を仲達から引き離す。

「（真名…ねえ。真名開放のことじゃなさそうだし…もしかしてそういう風習かなんかかね？） もしかして俺ってなんかマズいこと言ったか？」

「あのね、見遣い様…真名って知らない？」

「名前とは別物なのか？ それならば知らないな」

「やったよ、愛紗ちゃん！ やっぱりこの子、見遣い様だよ！ 真名のこと知らないし、何よりこの服装！ ああ、もう！超可愛い！」

「ええい、抱きつくな！」

「申し訳ありませんでした、見遣い様…まさか真名を知らないとは露知らず…」

「いや、俺も軽はずみなことを言ってしまったようだしな。さっきの怒りようから察するに大切なものなんだろう？ だからおあいこつてことで互いに水に流そうじゃないか」

かっこいいことを言っているが、今の状況は桃香に抱きかかえられ

た状態で頬ずりをされている。
まったく締まらないのである。

「それにしても見遣い様、うっん、見遣いちゃんって本当に可愛いね！　愛紗ちゃん！私この子欲しい！」

「俺は物じゃねえぞ！」

さて、ここらで仲達の格好の説明と行こう。

身長　151cm

体重　43kg

スリーサイズ　B79（Bカップ）／W50／H79

髪型　以前のまま薄紫でロングヘア　だが後ろで結わえてある、俗に言うポニーテール

顔　性別が変わったのでカッコイイ面構えから凛々しい顔へと変わった

服装　巫女服

「完全に遊んでるよな、天照め……」

この後、桃香たちによる天下泰平へと誘われるも、それを辛辣な言葉で虐めるにはまた別の機会に……

ここからはセリフのみとなります

『虎牢関の戦い』

仲達「我の名前は司馬仲達！　この俺がいるからにはこの虎牢関より先は誰一人通さん！」

華林「関羽にあの司馬懿とかいう子……欲しいわね」

一刀「司馬懿だと！？　なんで司馬懿が董卓軍に！？」

恋「恋もいる……死にたいやつだけ掛かって来い」

『袁家掃討戦』　原作なし

仲達「命令を、我が主」

月「オーダー　オンリーワン　サーチアンドデストロイパー命令は唯一つ、「見敵必殺」以上」

詠「月……そんな物騒なこと言わないでよぉ……」

月「へう……仲達ちゃんがそう言えって聞かなくて」

詠「仲達！　月に何すりこんでんのよ！」

恋「月……かつこよかった……恋にも言つて……」

霞「あはは！　やっぱりおもしろいわ！」

詠「ほら、アンタたち！　さっさとあのバカの一族を狩ってきなさい」

！
」

『許昌攻略戦』 原作なし

仲達「天の見遣い、北郷一刀。その命…貰い受ける！」

一刀「そう簡単に負けてたまるか！」

華林「一刀オ！ 死んじゃだめよ！ 死ぬなんてこの私が許さないわよ！」

仲達「意気込みは良し…だがひよっこではな！」

『まさかの一刀と仲達の間にはフラグが…』

仲達「ねえよ！ 男となんか絶対に寝てたまるか！ もし俺と寝たいんなら俺より強くなってからだ！」

桂花「そうよ！ 男なんかみんなケダモノなのよ！ 仲達、私たち友達になれそうね！」

仲達「ああ、よろしくな（人格は男だって言ったら殺されそうだな）
」

桂花「男には罰を！ ケダモノには死を！ 北郷一刀には死すら生温い苦痛の限りを！」

仲達「頑張れ、桂花。俺は応援しているぞ」

—The END—

恋姫をやるならおそらく百合要素をふんだんに使います

〔F a t e / Z E R O〕

くじの結果はF a t eの世界。時系列は第四次聖杯戦争。
メフィストはキャスターのサーヴァントとして参戦することとなつた。

聖杯戦争・サーヴァントなどといった基本知識は世界を移動するときに天照より与えられた。

「問おう：貴様が俺を呼んだマスターか？」

「えと、雨生龍之介です。趣味は——」

名前の後は自分の趣味：すなわち殺しについて語った龍之介だが、メフィストは部屋の隅にいた縛り上げられている子供に興味がいっており聞いていなかった。

「まあいい、ここに契約は完了した。マスター、あそこの子供はな

んだ？」

「それならお近づきの印に献上しようと思って。気に入りませんでした？」

龍之介の言動、部屋の血貯まり、震え上がる子供。

それらをみてメフィストはどうしてこうなったかを理解し、行動を起こす。

吸血鬼の特性である魔眼の効力を最大限にして解放し、龍之介の人格を完全に掌握、二度と自意識で動けないようにして自分の操り人形へと変貌させた。

「まさかこんなクズのマスターに出くわすとは…誤算どころの話ではないな」

メフィストはその場にいた子供に忘却の魔法を掛け、龍之介の首を掴み引きずるようにしてその場を後にした。

こうして冬木市に7組のマスターとサーヴァントが揃い、第四次聖杯戦争が開始することとなった。

……

……

…

龍之介を必要最低限生きれるように処置した後、メフィストは昼間の冬木市の中をどうと散策していた。

以前いた世界では聞いたことが無かった町名であったために気分はちよっとした観光気分なのは内緒だ。

数時間観光していたため、敵を探そうという気概が消え失せていたメフィストであったが、今回のマスターのせいで幸運値が下がったようで、金髪のサーヴァントとばかり出くわしてしまった。そう、セイバーとアイリスフィールである。

「……」

当然無言になる。

メフィストは面倒なことになったと思い、セイバーはアイリスフィールを守るためいつでも行動できるように戦闘態勢を取り、アイリスフィールはメフィストの威圧感に当てられて喋れなかった。

「おいおい金髪……そんなに街中で殺気立つなよ」

「……そういう貴殿は油断しすぎではないか？すでに聖杯戦争は始まっている。ここで私に切り捨てられても文句は言えんだぞ」

「ハッ、そんななりの嬢ちゃん相手にどう用心しろと？それにその程度では俺は殺せん」

「……試してやろうか？」

セイバーは殺気立ち、メフィストは早く帰りたいと思い、アイリスフィールは二人のサーヴァントに気押されて言葉を発せなかった。いつまでたっても油断しまくりのメフィストである。

そんなメフィストの様子に本気で斬ってやろうかと思い始め、剣を取り出す……が、

「おい、貴様……それをこちらに向けた瞬間、貴様を敵とみなし排除

するぞ」

「ッ！」

今までの油断しまくりとは思えないほどの威圧感を出すメフィストの気迫に飲まれて剣をしまうセイバーだった。

（これほどの気迫…ランサーか？アーチャーか？それにしても私が気押されるとは…）

「先程は失礼した…よろしければ貴公のクラスを聞きたいのだが」

「ふむ、まあ隠す事もないし教えてやろう…俺はキャスターだよ」

「バカな！？ それほどの力量を持っていながらキャスターだと！？」

「そんなことで驚くなよ…それより一緒に観光しようぜ。そっちのマスターもどうだ？」

当然文句を言うセイバーだが、メフィストに言い包められて渋々付き合うことになったセイバーとアイリスフィール。

その様子を遠くでハラハラしながら監視する切嗣がいたらしいがメフィストは特に気にせず観光を楽しんでいた。

……余談だがそこでセイバーにフラグを立て始めたらしい。

この後、とある港で六つ巴の闘いが勃発するのはまた別の話……

「魔法少女リリカルなのは」

それは唐突の出来事だった。

この作品の主人公、高町なのはは今日はもう寝ようと思い自分の部屋へ向かったら、自分の部屋の方で突然バキヤア！と大きな音がした。

慌てて確認しに部屋に入ると、そこでは天井の木片を辺りに撒き散らしながらもまったく悪びれずにベッドに足を組みながら腰かけている男がいた。

なのはは何から言っているのか分からずに茫然とその男を見つめていると男は唐突に喋り出す。

「む？この家主と見た。申し訳ないが少しでも匿ってくれないかなにぶん俺も自分が置かれた状況を把握していないんでな」

これが高町なのはと、男——メフィスト・マクダウエルファーストコンタクトだった。

………

……

…

P T 事件、闇の書事件に携わっていき、多少は信用できると思った

メフィストは自分の事を語りだす。

吸血鬼の事・前の世界の事など…

だがそれがどこからか漏れ、吸血鬼の存在を認めないと判断した管理局の武装局員が襲撃しにきた。

「死ね！」

なんの警告もなく背後からナイフを脇腹に刺そうとする敵。

それをメフィストは右に避け、突き出した肘を蹴り上げてへし折り、上げた脚を頭に落として地面へとめり込ませた。

「突然襲い掛かってくるからあつさり殺ってしまったじゃねえか。

ひい、ふう、みい……全部で6人か。物足りないにもほどがあるが

……」

メフィストのセリフが終わらない内にバインドを手足に掛けて動けないようにする。

2人がバインドの制御、2人が後方に移動し砲撃の準備、残りの2人が何やら液体のついたナイフを持ち脇腹と首目掛けて斬りかかってきた。

（あの様子だと毒…それも致死量の毒だろうな…まったく、どの時代、どの世界でも吸血鬼は排斥されるべき対象…という訳か）

まずメフィストは自身を縛るバインドを力任せに壊して破る。

その非常識さに驚いた隙に最も近い奴らへ、自身の手をまっすぐに伸ばし鋭利な爪を顔面に突き刺して風穴を開ける。

次にバインドの制御をしていた2人へは宝具を5個ずつそれぞれへ放って細切れに、残りの2人のうち1人へは「グレイブニル雷の暴風」で消炭にし、もう一人は幻想成る魔法の紐で拘束した。

一方メフィストは次元世界を転々として管理局の追跡から逃れていた。

そんな生活が続いて半年後、あるマッド・サイエンティストとメフィストは出会う。

「初めまして、メフィスト・マクダウェル君。私はジェイル・スカリエッティ、ただの化学者だよ」

「俺にコンタクトを取ろうとは…貴様、自殺願望者か？ 悪い事は出来ないから俺と関わろうとしないほうがいいぜ」

こうして「無限の欲望」と「幻獣使い」は出会った。

この出会いの影響でミッドチルダが過去にない程の混乱に陥るのはまた別の話…

T o B e C o n t i n u e d

あとがきと言う名のいい訳

朧識「つい期末テストを無視してはっちゃけた！でも後悔はしていない！」

メフィスト「バカだな。テスト勉強のために更新を止めてんのになにやってんだよ」

朧識「物書きゆえの宿命ってやつだな」

メフィスト「ボソッ……どうせ単位とれないんだから続きを書いたらどうだ？」

朧識「作者モノリツキに向かってなんたる言い草！出番削るぞ！」

メフィスト「くっ……地獄に落ちろ。この性悪作者め」

朧識「まあいい、こころへんでいじるのは止めておいていい訳タイムと行こうか」

メフィスト「まずは恋姫か……ふ！　ざ！　け！　る！　なああああああああああ！」

朧識「おお！いつになくメフィストがキレてる！？これが最近のキレる若者か……」

メフィスト「俺じゃなくてもキレるわ！性転換とかマジふざけるなよ！」

朧識「ついカツとなつてやった！文句はBase。onに言え！萌将伝をやつて思ったが…マジあそこそふざけるなだよ。愛紗がない恋姫なんて恋姫じゃないぞ！だが雛里の「あわわ…。。。もげる」は萌えた。思えばあれこそが雛里の見せ場だったんじゃないかと俺は思う」

メフィスト「知らんがな！それと俺の性転換とどう関係するんだよ！あと雛里の見せ場はそこではないと断言しておく！」

朧識「いいじゃんか、百合だぞ、百合」

メフィスト「OK、俺の最大の敵はお前だということが今わかった。
ゲイ・ボルグ刺し穿つ死棘の槍！」

朧識「笑止ツ！デザイア・ファンタズム妄想具現化！貴様の攻撃は全て無効になる！」

メフィスト「やはりそう簡単に殺らせてはくれないか」

朧識「愚息は放っておいて次！」

メフィスト「誰が愚息だコラ！ えつと次はFateの世界か」

朧識「うむ。ZEROは色々と熱い話が多くて俺は好きだ。とくにギル様とイスカンドルが闘うとことか」

メフィスト「今回はあまり暴走しないでいたみたいだな。ただセイバーにフラグ建築を始めたのが気になるが…」

臃識「いやいや、ホントは最初の夜の闘いも書きたかったんだが…
「あれ？ここで話終わらないか？」と思ってしまい断念したんだ」

メフィスト「まあサーヴァントが持つてる宝具って基本俺が所持しているからな。不死殺しの宝具を持つてこない限り勝機はないだろ」

臃識「ZEROが終わったらstay nightについてマスターをやつて、サーヴァントはEXTRAのマスターとか考えていたんだがな」

メフィスト「キャス狐は正義！あれは良いサーヴァントだ。癒的な意味で」

臃識「テスト勉強の合間に少ししかやってないから全クリしてないけどな。最初キャスターでやると苦労するらしいがそんなに苦労した覚えが無い」

メフィスト「どうせeasyなんだろ？」

臃識「ハッ！easyモードが許されるのは小学生までという格言を知らんのか？故に俺はnormalだ。最初のターンにアサシンの宝具で逝ったのは御愛嬌だがな」

メフィスト「って脱線しまくりだ。Fateの話に戻せ！」

臃識「むう、最後に一言…キャス狐可愛いよキャス狐。さてメフィストに聞きたいんだが、Fate世界に行ったら何をしたい？」

メフィスト「死徒二十七祖とのバトルはとても興味が惹かれる」

隴識「物騒すぎるから却下。てか死徒二十七祖って名前は把握しているけどそいつらの全ての能力とか俺知らないし」

メフィスト「残念だ、暴走アルクとかとも闘ってみたかったが…」

隴識「とりあえず町が何個か消えるな。完璧に巻き込まれる形だが」

メフィスト「サーヴァント全員を配下にして世界征服とかも面白そうじゃないか？」

隴識「ルールブレイカー破戒すべき全ての符ですね、わかります」

メフィスト「そう考えると型月世界も面白そうに感じてきた！」

隴識「えらいひと抑止力に怒られそうだからこころに辺にして次！」

隴識「次は魔法少女リリカルなのは…名前を見るといかにも子供向けだが驚くことなかれ！中身は大きい子供向けだ！」

メフィスト「怒られるから！それ以上言つとあそこの魔王から砲撃飛んでくるから！」

隴識「それにしても今回の話も同情するぜ。お前はどこいつても人

間に嫌われるな」

メフィスト「ん…まあしょうがないんじゃないかね？正義を名乗っている組織だし吸血鬼なんてどの世界も人類の敵なんだからさ」

隴識「そして今流行りのアンチ管理局とつながる訳か」

メフィスト「対人、対軍、対国などと闘った俺だが対星は初めてだ。しかも空飛ぶ戦艦がたくさん存在しているらしいじゃないか。こっちの世界も楽しめそうだ」

隴識「ま、ほどほどにな」

メフィスト「それは約束できないな。ジェイルの奴とも意気投合したし…はっちゃけまくるハズだ」

隴識「哀れな管理局局員に黙祷を捧げよう」

メフィスト「そんなことはどうでもいいぞ。この世界はどういう話にするんだ？」

隴識「そうだな…まず1期2期でフラグを建てまくろう！」

メフィスト「よし、殺す」

隴識「次に管理局から追われることになった後は次元世界を放浪。3期が始まるまでに打倒管理局の準備をする」

メフィスト「仮にフラグを建てたとして…なのは達にはどう説明するんだ？」

臃識「お前が誑かして寝返らせればいいんじゃない？」

メフィスト「誑かすとか…もはや主人公のセリフじゃねえよ…」

臃識「まあそんなこんなで最後はフェイトに後ろから刺されて、「え、えへへ…メフィストが悪いんだからね」とか言つてBAD E NDで決定だな」

メフィスト「ちょっと待てええええええええ！ フラグ建てたんじやねえの！？」

なのに俺刺されて死亡！？不死なのに！？」

臃識「そこはご都合主義でカバーだ。ハーレムなんて絶対誰かがそういう行動に出るって」

メフィスト「ぬおおおおおおおおお！ 本編の俺の身が心配になってきた！」

臃識「安心しろ。ヤンデレ属性持ちは今のところいないから」

メフィスト「絶対エヴァはヤンデレだって！刹那とかに優しくすると絶対零度の視線を送ってくるんだぞ！」

臃識「さて、次は没ネタだな」

メフィスト「おい！無視するんじゃない！」

臃識「元ネタとはある魔術と禁書目録。問答無用でメフィストを殺せる能力、吸血殺しを持つ姫神…ディーフブラッドなんとかを殺そうと学園都市に侵入。

不法侵入なので風紀委員に追われつつも姫神を発見し殺そうとするが主人公の上条当麻が妨害。さらに御坂美琴と白井黒子も参戦。さらにグループも参戦してきて……收拾がつかなくなったので没した」

メフィスト「あの作品は登場人物が多いからな。お前の文才じゃ全員を動かせなかったか」

臃識「一通さんとか喋り方からメンドくさいし…あれは止めておいて正解だろう」

メフィスト「ベクトル変換能力か。ゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇で倒すしかなさそうだ」

臃識「それか毒だな」

メフィスト「ふむ…少々汚い手だが仮にもあつち是最強の能力だからな。致し方あるまい」

臃識「あとは頑張つて木原神拳を習得だ」

メフィスト「完全に対一方通行専用武術だよな、あれ？覚える価値

値あるか？」

隴識「ネタ的な意味で。研究者が考え出して習得した武術だぞ。いろんな意味で凄いいじゃないか」

メフィスト「そんなの覚えるなら光の処刑を覚えたい。吸血鬼を上位に、人間を下位に、みたいなの？」

隴識「すげえチート状態になるなあおい……。でもソーロルムの術式の前では涙目だな」

メフィスト「なら魔法を上位に、魔術を下位にで打開可能。こう考えると天罰術式なんかよりこっちの方が俺には向いてそうだな」

隴識「仮に天罰術式が発動してもお前は人間には無関心だから問題なさそうだな」

メフィスト「とあるの世界も俺を止められる奴らは少なそうだな」

隴識「いや、魔術知識があり未元物質で不死殺しの物質を作られたらお前は死亡するかもしれん」
ダークマター

メフィスト「結局、不死殺しの能力だのみか。純粋な実力で俺を上回る奴らはいないのかね」

隴識「アルクエイド連れてくるぞ？」

メフィスト「あれは無理だ。俺がどれだけ頑張っても俺の1・5倍の出力を出せるからな。あれが本当のチートだ」

朧識「そう考えるとやはり型月世界が一番物騒だなあ」

メフィスト「ところで話は変わるがこのあとがき…めっちゃ長くな
ってないか？」

朧識「む？ホントだ。いかんいかん、本編に關係ない部分がこんな
に長くてはいかな。そろそろ終わらせよう」

メフィスト「では最後に一言。モニタの向こうの読者のみなさん。
いつもこの作品を見てくださりありがとうございます。非才な身で
すがこれからもこの朧識が頑張るので見捨てないであげてください」

朧識「いろんな意見を聞いてみたいので、どしどし感想を書いてく
れると嬉しいです。感想制限をなくしたのでユーザーでない方も遠
慮なく書いてもらえると嬉しいです。まあ強制って訳でもないので
気が向いたらってことでよろしく願います」

メフィスト「ネギアンチの同士たち！これから野菜坊主は肉体的
にも精神的にも苛めるので楽しみにしていてくれよ！」

朧識「では本編でお会いしましょうー！」

番外編 『嘘予告だよ！信じちゃダメだよ！』（後書き）

キヤス狐は正義！

Base。onは一片くたばればいいと思う。
そんなんだから炎上するんだよ。

第伍拾巻話 『1学期終了!』（前書き）

テスト終わったあああああああ
いろんな意味で終わったあああああ!

そんな訳で更新再開です!

そうそう、いつの間にかPVが400万、ユニークが40万アクセスを突破していたw

まさかここまで来るとは……正直予想してなかったっすw

いつもご愛読してくださる読者のみなさんに感謝!

第伍拾巻話 『1学期終了!』

学祭が終わり振り替え休日2日目。

その日はアルにお茶会に呼ばれていたんだが…またナギの事でグチグチ言われるのが目に見えていたのでボイコットした。

俺も休日が欲しい。

いかに吸血鬼の真祖と言えど少しぐらいはぐーたらしたいのだ。

え？ いつもしてる？

ナンノコトヤラー。

そうして休日をぐーたらして過ごし、学校が再開。

1学期終了もあと少しだ。

side out

【春日side】

どーも！春日美空です！

ハイテンションだねえと思った読者の諸君！

出番がやっと来たから私もついテンション上がっております！

ん？ 出番ってなんだ？

まあいいや！

何故かというところの私、春日美空はつい先日 of 学祭期間中に知って

しまったのですよ！

まずは窓辺の席に座っている龍宮さん。
シスターシャークティの話じゃ実は裏の世界じゃかなり名の知られた冷酷非情・正確無比の殺し屋さんだっつー噂らしーし。

さらに一番後ろの廊下側の席に座っている金髪ちびの女の子、エヴァちゃんの正体に至ってはなんと私でも知っている600万ドルの賞金首、「不死の魔法使い」「闇の福音」その人らしいじゃないですか！

今更だけどどんな環境で学生生活を送っていたんだよ、私！
魔法世界じゃ寝ない子に「闇の福音がさらにくるぞー」とか言っ
てナマハゲ扱いの伝説の有名極悪人が同級生！？
ありえねえっすよー！

エヴァちゃんだけでもヤバいつてのに、さらに危ないのがウチのク
ラスの副担任。

名前はメフィスト・マクダウエル。

下の名前が同じだからエヴァちゃんの親戚かなんかと思っていたら、
エヴァちゃんよりも遥かに有名な超極悪有名人の「幻獣使い」「災
厄の邪神」だっつー話じゃないですか！

現実逃避してーよ！

賞金が確か9000万ドル。

でも18年前ぐらいに魔法世界で捕まって処刑されたはずなのにな
んでこの学校にいるんすか！？

魔法世界じゃ名前を出すだけでその町が次の日には消し飛ばされる
とか言われて恐れられているメフィスト先生。

その畏怖されるレベルはエヴァちゃんとは比べ物にならないほど凶悪すぎて弱小者の私はもうまともに話せる気がしねえっすよ。

やべー。

調子こいて目エつけられたら私終了のお知らせ？みたいな。

それだけならまだ良い、いや、よくはないけど。

私のせいでメフィスト先生を怒らせて麻帆良学園崩壊！なんて展開になった暁には悪魔の引き金を引いた女として歴史に名を刻むことに……

なんせメフィスト先生の個人としての力だけで魔法世界の軍を圧倒できるとか言われているしね。

私が知っている話では昔国が何個か滅んだらしいし。

メフィスト先生を怒らせたとかって話で。

エヴァちゃんだけでも十分危ないのに、それプラス、メフィスト先生が敵に回ってしまったら麻帆良学園は絶対勝てないっすよ。

いくらジジイが関東最強だって話でもメフィスト先生には敵わないと私は思う。

なんか修学旅行の時に復活した伝説の大鬼神が手も足も出なかったらしいし。

やべーっすよ。

関わったら命がそれこそ1万個あっても足りないっすよ。

こりゃ卒業までは静かに……それこそ踏む価値もないような道端の雑草のように静かに、ひっそりと、息をひそめるように卒業を待つしか私に選択肢はないっすね。

あー、くわばらくわばら。

放課後。

いつものように教会の掃除をしていたら、アスナの惚気話やゆえ吉と本屋の三角関係などなど、たくさん面白話を聞くことが出来た！

「うひははは！ いやー、こりゃいいね！ オモシレー！」

「ミソラ……いつか天罰を喰らうと思う……」

「いいじゃんココネ」それにしても……いつも神父さんはこんな面白い話を聞いていたのか……。なんかズルいな！」

でもそろそろシスターシャークティがくるかもしれないし……今日はもうやめておくかな。

と思っただけでまた迷える子羊がやってきた！

誰かと思っただけで同じ魔法生徒の佐倉愛衣ちゃんだった。

「あ、あのー……ここって懺悔室であってますかー？」

「（バレないように声を変えつつ）ハイ、合っていますよ。あなたはどんな悩み事を？」

「そ、そのですね……まだ自分の気持ちを整理できていないんですけど……ある人の事が好きなのかもしれないんです」

愛衣ちゃんに好きな人ね。

ウチは女子高だし……高校の人かな？

「なるほどなるほど…ですがそれが何か問題でも？」

「ハイ…その人と私は年齢も住む世界も全然違って…はっきり言って釣り合いが取れないんです。ですのでこのままその人を好きになってもいいのかなって誰かと相談したくて」

年齢も住む世界も違うってことは…大学生とか？

なんか高音さんをお姉さまって呼んでるからそっち系かと思ってたけど、結構普通の女の子じゃん。

「年齢が離れているということはお相手は大学生の方ですか？」

「いえー、その…学校の先生です…」

な、なんですとおおおおおお！

さっきの三角関係もいいネタだったけどこっちもすごそうだ！

「そ、それはまた難儀な恋をされましたな」

「と言っても話をするまでは怖かったんですけどね…話してみると噂なんかと全然違う人柄でして」

にしても誰だ？

話す前は怖かった、知り合ったら好感が持てる人物…

魔法先生の人かな？

「もしよろしければどんな人柄が教えてもらえますか？」

「そうですね…噂では傍若無人でかなりの悪人という話でした。

その人と学祭の麻帆良武道会で闘うことになったんですが、すぐに負けちゃって場外に飛ばされてしまったんです。

場外が水で覆われていて…私は泳げないんです。それを見たその人が颯爽と助けてくれて…その…横顔がかっこよかったんです／＼／」

惚気かよ！

だけど愛衣ちゃんと闘った人物って……（考え中）……メフィスト先生か！

これはびっくり！

地雷原の中を走り回るぐらいの勇氣があるな、愛衣ちゃん……無謀とも言うが。

「今、あなたはその人の事を怖がったりしますか？」

「今は……あまり怖く話ありません。恐怖感よりもあの人の事を知りたいという気持ちが大きいと思います」

こりゃマジで惚れてそうだな。

どうすっかなー。

私にや関係ないしそれっぽい事を言っておくか。

「あなたがその人の事を本気で好きになるかは私にはわかりませんが自分の気持ちを強くするのも弱くするのもあなたの行動次第。まずは自分の気持ちの在り方を整理して、その上でその人と関わっていきなさい。

さすればおのずと道はあなたの前に現れてくるでしょう」

「あ……ありがとうございました！」

嬉しそうな表情をして懺悔室を後にする愛衣ちゃん。

テキトーに言っただけなんだけど、さっきの言葉でどうなるか。

楽しみでもあり、ばれた時が怖くもあるね。

「ミソラ……そろそろ掃除を再開する」

「シスターシャークティが来るかもしれないし今日はもうやめておくかね」

次の日、調子乗ってまたやったらシスターシャークティにお仕置きされました。

side out

【メフィストside】

1学期も残りわずか。

俺の持ち授業は学期末の評価を終えてあるので1回授業が余ってしまった。

なので最後の授業は校庭で好きな事をさせている。

「ふうむ、それにしても暇だな。学祭みたいなイベントがどこかで起きないものか」

「流石に毎日あの騒ぎはどうかと…」

「えー、楽しそうやか、せっちゃん」

「不満ならお前が何かしたらどうだ」

上から刹那・木乃香・エヴァである。

他のメンツと遊ぶより俺とだべっているのを選んだらしい。

「ん、結構人数があるし……野球をしよう!」

「突然だな。してその理由は?」

「なんとなく! チーム名は……リトル。スターズだ!」

「ダメだ」

「なぜ?」

「理由は言えないがダメだ」

突然思い付いたからぜひともやりたいんだが……
なぜかエヴァにダメだしされた。

「ならばバンドしようぜ、バンド!」

「その理由はなんですか?」

「終業式にライブしてじじいの長い話を消したい!」

「なるほど……確かにそれは魅力的ですね」

「バンド名は……放課後ティー。イム!」

「ダメです」

「なぜ?」

「偉い人に怒られるからです」

ちっ、これもダメか。

「だがこれだけ言わせてくれ」

「何ですか?」

「『NO, Thank You』オリコン2位おめでとう」

8

月6日! 澪! 俺はお前を応援しているぞ!」

「おい……メフィスト……」

ゾクッ!と悪寒が走る。

こ、この威圧感は一切……

「濡つてのはどのどいつだ？　またお前は新しい女を毒牙に掛けたのか？」

「ま、待ってくれエヴァ……自分で言っておいてなんだが…俺も正直わからない」

ブチイという音が聞こえた気がする。

というか気のせいだと思いたい……むしろ気のせいであってくれ！

「どうやらまだ懲りていないようだな。今日ここでその根性！矯正してくれる！」

「ま、待て！　話し合おうじゃないか！　俺は生憎と肉体言語を持ち合わせていなくてな。」

言葉とは人間が持てる最大のコミュニケーションツールだろ？

今まさに！ここで！有効活用するべき道具のはずだ！」

「問答無用！あっちへふらふら、こっちへふらふらしている貴様に持ち合わす言葉など無い！」

くっ、理不尽な理由でエヴァが戦闘態勢に入っている。
ならば俺は助けを！

「こ、木乃香！」

「なあせつちゃん。どのくらい強おなったらウチもあそこのお仕置きに参加できるんやろか？」

「では私の夕凧を使いますか？　多少は対魔の力を帯びているので有効打は入れられるかと」

……………あつれ〜？

温厚な木乃香が刹那の夕凧を右手に、左手に杖を持ってこっちへやつてくる。

「エヴァちゃん、ウチも参加してええか？」

「ふむ…なら修行の成果を師へ見せてやれ」

「了解や」

なるほど…ここが俺の人生の終点という訳か…

木乃香の魔法は最近じゃあめちやくちや強くなっているからな。

どれくらいと言うと、俺が障壁やら強化魔法を使わない状態で「白き雷」を喰らうと右手が吹っ飛ぶぐらいに。

「それじゃメフィスト、ちょっとあっちへ行こうか」

「ちよつとだけ痛いだけや。少ししたら感覚がなくなるかもしれへんけどなあ」

「ふ、不幸だ……………」

ここから先はR指定だ。

そんなこんなで時は過ぎ、今は夏休み。

俺はご機嫌斜めなエヴァを連れて学祭時、茶道部が使用していた日本庭園で散歩をしている。

「そんな訳で1学期終了だ！」

「どうしたメフィスト？ 女を食い過ぎて頭がおかしくなったか？」

「いや、ホント…機嫌直してくれよ」

「フン」

まったく、これも全ておかしな電波を受信したからだ。
大体誰だよ、濡って。

「よつと」

「あ、コラ！ 今度という今度はその手では効かないぞ！」

いつもはお姫様抱っこをすると機嫌を直してくれるんだが…今日は
そうもいかないらしい。

「安心しろつて。俺がエヴァを置いて他の女になびくと思うか？」

「そ、そりゃ信用はしているが…何から何まで納得できるものでもない」

「なら何をすれば機嫌を直してくれる？」

「む…なら今ここでキスをしろ」

「了解、お姫様」

20秒ほどキスを交わす俺達。

俺達以外に何人かこの場所にいるがそんなのどうでもいい。
どうせ明日には向こうもこっちも顔を忘れてる。

「フフ、これで機嫌を直してくれたか？」

「いや、まだだな。次はもっと濃厚に頼む／＼」

「是非にとも…と言いたいとこだが、知り合いがいる中である気
はないな」

「なに？」

俺は視線を向けると、そっちには気まずそうな表情をしているアス
ナ・早乙女・古菲・楓がいた。

「あ、あははは〜……こ、こんなところで会っなんて奇遇ね！」

「そうアルな！メフィストさんにエヴァちゃん！」

「ん〜…実に興味深かったでござる」

「私的にはもうちょっと続きを見てみたかったり…」

クラスメートを見たエヴァが少し赤くなりジタバタしだした。

「ちょ！ 降ろせ！／／／」

「いいじゃんか、今さらだろ」

「よくない！いくらなんでも恥ずかしいわ！／／／」

テレルエヴァも可愛いな〜。

今はデジカメを持っていないので俺の脳内フォルダに焼き付けておこう。

「よ、よし……それでバ神楽坂明日菜。何か用か？」

「む、いつになくエヴァちゃんの言葉に棘があるわね」

「そりゃ好きな人との逢瀬を邪魔されたら怒るんじゃない？」

「げ、やっぱりそういう展開？」

「このパル様はそれぐらいのラブ臭を嗅ぎ分けられるわよ」

「いいからさっさと用件を話さんか…」

どうやらアスナ達はエヴァに用があるらしい。

一体なにがあるやら。

「実はネギま部（仮）って名前の部活を作るに至って、メフィストさんに顧問、エヴァちゃんに名誉顧問になって欲しいの！」

「ん？ 俺が顧問？」

「ネギま部（仮）？ 何だ、その又けた名前は？」

「ネギのお父さんの大魔法使いナギさんを探すためのクラブよ！文

句ある!？」

「まずその名前をなんとかしろ」

「なるほど…それで予算もせしめてウェールズへ行こうという腹か」

ネギま部つてのは勘弁してほしい。

お前らなんかそのうちシヨツカーAとかになっちまうぞ。

「その名前を変えるならなつてやってもいいぞ。但し仕事を持ってきてもやらんが」

「それなら大丈夫! 基本的に私が引き受けるから!」

「なら構わん」

「「「「「やつたー!」「」「」」」」

「だが貴様ら、名誉顧問などと言うものに何の意味が…」

「う、うん…それでね、早速お願いがあるんだけど」

………

……

…

場所はかわり、我が家に到着。

「なるほど…俺達の別荘が御所望という訳か」

「アハハ! まあまあ!」

今ある別荘は俺とエヴァの別荘+砂漠・山岳地帯・雪山などを増設してある。

少年たちの修行場所と言う訳だ。

こうして今まで修行の面倒を見ていた少年・木乃香・刹那、少年に魔法を習っている宮崎・綾瀬、少年の修行相手である犬、今入ってきたアスナ・早乙女・楓・古菲と賑やかすぎるメンツが集まった。

なんでも学祭の休日振替日に行ったアルのお茶会で魔法世界に行くように誘導されたらしく、みな行く気満々である。

万が一死なれても困るのであっちに行っても大丈夫なぐらいに修行しておいてやろう。

第伍拾巻話 『1学期終了!』（後書き）

12日にテストが終わるとか言っておきながら遅れてすみません。
なにぶん遊んだり遊んだりバイトしたりとあまり時間が取れなくて

ハイ、いい訳タイム入りましたー。

でも実際溜まっているゲーム&アニメがたんまりと…
この夏休みで終わらせておかないともっと酷い事にw

バイトもあるのでこの夏休みの更新は不定期になってしまう可能性
大ですw

でもある程度優先して書くことにするので大目に見て下さいましw

ではでは

第伍拾貳話 『とある修業風景』

なんかアスナが修業に加わった。

「ちょ！ ど、どこなのよー！ ココはー！ ツー！」

さつきなんかやったらしい。

俺は修業場所を構築していたから何をやってたのか知らんけどな。そしたらなんかアスナが雪山に放り出されていた。そして少年と犬がコーチとして付き添っている。

「なあ、エヴァ。コーチがいても大丈夫なのか？」

「まあ仕方がないだろう。基礎が圧倒的に欠けている神楽坂明日菜だけを放り込んだだけでは何もできずに死んでしまうからな」

「いや、俺が言いたいのはそっちじゃなく……ほら、見る」
「ん？」

アスナが咸卦法の練習をしているとき、少年が雪よけの洞窟を作り、その中で火を起こしていた。

「いいのか、アレ？」

「……………ちよつといってくる」

少しすると洞窟の中から全裸のアスナが投げ飛ばされてきた。思わず見てしまったのがバレたのか…おそらくエヴァが投げたんだろつ、雪玉が顔面に飛んできた。

“OKだ。こつちもちょうど時間だしな”

「それじゃこれでしゅくりよ」

「お…終わ…った？」

「よ、よっしゃ…：やっと…地獄から…解放…されるで」

満身創痍な少年と犬を連れて刹那たちのところへ転移。

するとそこには刹那の他に木乃香・古菲・楓がいて、少年たちを見るなり心配そうな顔をしていた。

構ってあげたそうな顔をしていたので少年と犬をそれぞれ古菲と楓に投げつけておく。

「それじゃ刹那、修業を始めるか」

「えっと、ネギ先生たちはどうしてあんなにボロボロなんですか？」

「私も聞きたいアル！」

「拙者も聞きたいでござるな」

「メフィストはん、サンキューな。怪我は治してあげるえ」

木乃香はいい修業だと思い治癒魔法を掛け始める。

そういう意味じゃなかったんだが…まあ結果オーライってやつだな。

「アスナの修行に必要以上に干渉↓エヴァお怒り↓俺がお仕置き、OK？」

「あ、理解しました」

「…ちよつと心折れそうアル」

「ま、まあなんとかなるでござる…：たぶん」

そんな事よりも、古菲と楓はなんでここにいんだ？

「楓と古の二人もメフィストさんに修業をつけてほしいと」
「なるほど…：って心を読むなよ」

「口から出ていたアル」

「拙者たちも強くなりたいのでござるよ。修業をつけてはもらえないだろうか？」

「つつか俺、分類的に魔法使いなんだが。」

「気はジャックみたいに気合いで運用しているようなもんだしな。」

「ま、いつか。」

「なるようになれ、だ。」

「じゃあ俺の修業を受けるにあたって、この書類にサインの頼む」

「？ 何アルか？」

「簡単に言えば……仮に死んでもこちらは一切の責任を取りません、みたいな？」

「「絶対に署名しないアル（でござる）！」「」」

「ちっ」

「んだよー。」

「署名を貰っちゃえばそれこそなんでも出来たのに……
そうずっと死なない程度の修業しかできないな。」

「「これに署名すれば、臨死体験を経験し格段に強くなるという素敵な修業を受けれるぞ？」」

「「でも死ぬ可能性もあるでござるか？」」

「「リスクなしに力が手に入る訳ないだろうが、ボケ」」

「まったく、これだからゆとりは……」

「まあいい、それじゃ俺の別荘に行くぞ」

……
……
……

今度のフィールドは浜辺。

陸と海の比率が5：5である。

「刹那はいいとして、楓と古菲はどんな修業がいいかリクエストはあるか？」

「私は気の運用を教えてほしいアル」

「拙者はとくにないでござるよ」

それじゃあ楓は刹那と一緒にしてしまおう。

「私の呼び掛けに応えよ、海龍神召喚！ 来い！『リヴァイアサン』！」

リヴァイアサンを呼び出すと新参の二人は呆気にとられていた。確か修学旅行の時に見せなかったか？

「今度の相手はこちらですか、メフィストさん？」

「そうだ、名はリヴァイアサン。海の主だ」

「主、私の仕事はこの嬢ちゃんの相手でいいのだな？」

「そうだ、殺し以外は何をしてもいい」

固まったままの二人を見ると……まだ固まっていた。とりあえずデコピンしておく。

「いたかったアル」

「確か修学旅行で見たでござるな。あの時は遠目だったでござるが……まさかここまで大きいとは」

「楓は刹那と一緒にリヴァイアサンと戦闘な。殺しても還るだけだから遠慮せずやっていいぞ」

「私を殺すことが出来れば……の話だな」

「がぜんやる気がわいてきたでござる」

そついうなり楓は海へと走りだす。

刹那も背中から翼を取り出して楓の後を追っていった。

「それじゃ古菲はこつちで気の運用の修業だ」

「よろしく頼むアル！」

「確認するが気の使い方は理解していないであつてるよな？」

「そつアル」

ならばあの薬を……どこにしまったっけな……

「メフィスト先生……その、後ろの空間に手を突っ込んで何をしているアルか？」

「ん？ 探し物だ。お前は俺の従者じゃないから前に木乃香にやった方法は使えないからな」

確かこつちのほうに……お、あつたあつた。

「まずはこれを飲んでもらおう」

「えっと……その緑色の液体は何アルか？」

「これは俺が開発した薬でな、効果は体内にある魔力または気を感じ取ることができる薬だ」

「おお！ それは助かるネ！」

「ただし1割くらいの確率で体内の気が暴走し……肉体が破裂する

かもしれん」

「怖いアルよ！」

「さっき言っただろうが、リスクなしに力には手に入らないと。それにもし暴走してもいいように俺がこっちに付いたんだから安心して、飲め！」

「もがっ！」

古菲の顎を固定させて薬を強制的に流し込む。

最初は呑み込まなかった古菲だが、口と鼻を押さえて呼吸できない状態になると、渋々といった様子で飲み込んだ。

「ゲホッゲホッ、苦いアルよ」

「良薬口に苦しってやつだ」

「それとなんか頭がフラフラしてきたアル」

「次に目が覚めたら気を感じ取れるようになるはずだ」

「そうアルか……ちよっと、眠る…アル」

その場で倒れこむ古菲。

見たところ暴走の予兆も無いし大丈夫だろう。

すでに無意識で気を使っているメンツ筆頭だからな。

side out

【刹那side】

メフィストさんの配下である「幻獣」。

陰陽道でいうところの式神にあたる訳なんだが…正直に言って格が違い過ぎる。

西洋魔術の悪魔召喚すらも圧倒的に上回る力量を誇る幻獣は…少しでも気を抜けば確実に死ねる。

まったく…このような力、メフィストさんは一体どこで手に入れたんだか…

西洋魔術、陰陽道、しいては魔法世界でさえも確認されていない能力らしいが。

「刹那」

「どうした、楓？」

「奴が動いたでござる」

楓が言い放つと同時に何本も水柱が海面から高速で伸びてくる。

私は翼を駆使して避けるが、どうしても避けれない位置に伸びてきたので、無策で受け止めるのは怖いが夕風で斬り払う。

だがそれは間違いであった。

相手は水、故に斬れば問題なさそうだと思って斬った途端に水柱が砕けて水玉に代わり、その速度を維持したまま私の身体にぶつかった。

正直、散弾とはこういう物なんだと実感した瞬間である。

「楓！ これは受け止めずに避けるんだ！」

「そう言っても！ くっ、このままでは少々マズいぞござる！」

「ならば！ 神鳴流奥義！ 雷鳴剣ッ！」

雷鳴剣を海面に付き刺すが、あまり効果はないらしく私がいた場所に数本また水柱が走る。

「仕方が無い…できれば使いたくはなかったが四の五の言ってられ

ない。楓！」

「なにか策があるでござるか？」

「少しだけ囃を頼む」

「承知！」

返事をするなり楓は本体と同密度の影分身を4体作りだして海面を走りまわる。

私は水柱が届かない上空に上がってある術の準備を始める。

「術式『千の雷』承認、術式『索敵』『追尾』承認、合成」

呪符を数枚取り出し、それぞれを発動する。

これはメフィストさんの「千の雷」を陰陽術に構成し直して呪符を作成。

そしてそれを複製した呪符である。

媒体は紙なので複製が簡単だと思われるかもしれないが、複製するのに時間が掛かると発動までに若干のタイムラグが発生するため剣士である私はあまり使う機会が無いのだ。

さらに敵を索敵して照準をロックする「索敵」用呪符、敵を追尾する「追尾」用呪符なども作成済み。

これらを複製すればメフィストさんのような魔法を擬似的に再現することも可能になったのだ。

ただあくまで複製なので本物には及ばないが。

閑話休題。

「よし、準備完了だ！ 楓！」

「期待しているでござるよ！」

楓が海面から離れた瞬間に呪符を放つ。

今回発動させた「千の雷」は4枚。

その4本の雷が海中へと進み、リヴァイアサン殿に直撃した。

メフィストさんの修業のおかげで少しだけ「気配察知」を使えるようになったので、リヴァイアサン殿がどこらへんにいるか大雑把には解る。

故にさっきの術は効果があったらしく、リヴァイアサン殿に動きがあった。

どうやらこちらに高速に向かっているらしい。

「楓！ 少し離れるぞ！」

「承知！」

私たちが離れても進路は変わらずにそのまま海面へと向かってくる。だが次の瞬間、私達はあまりの展開に言葉を失った。

リヴァイアサン殿は海面に出ると同時に止まると思ったのだが、全長40mもある巨体がそのまま勢いが止まらずに宙へと舞い上がったのだ。

「改めてみると…でかいな」

「ハハハ、もうなにがなんだか…」

あまりの展開に私たちの思考は止まっていたのだ。

師の言葉である「思考を止めるな 動きを止めるな」という言葉を忘れて。

上空に飛んだりヴァイアサン殿が30mほどでその動きが止まり、

そのまま落ちてくる。
その時ようやく気付いた。
何が起こるのかと。

「こ、これはマズい！　だがもう時間的に逃げられんし…」
「ど、どうしたでござるか、刹那？」

「あの巨体があのまま海面にぶつかってみろ！　もの凄い津波が来るぞ！」

「ッ！　なるほど、それが狙いでござるか」

「仕方がない、この場で耐えるぞ！　神鳴流対魔戦術絶対防御！
四天結界独鈷鍊殻！！」

楓と私を覆うように防御術式を発動させて迫りくる衝撃に備える。
リヴァイアサン殿が海面にぶつかると同時に、高さ20mもある津波が発生した。
そしてちょうど私達がいる場所へと波が落ちてきた。

「ぐうつ！」

「刹那！　大丈夫でござるか！？」

「これだけならまだ……………なァッ！」

津波だけかと思っただ、耐えていると水圧が一段と増してきた。
私への負荷が尋常じゃなく跳ね上がり、防御術式が悲鳴を上げ始める。

すると呆気なく術が壊れて、楓共々海中へと引きずり込まれてしまった。

（ぐ…ここにいるのはマズすぎる。…………ぐあッ！）

急いで海中から出ようとするが、背中に衝撃が走りそのまま海上へ

と飛ばされる。

そのまま上空へ上がり体制を整えようとするが…そう簡単に逃がしてくるはずもなく、目の前に巨大な尾ヒレが迫っていた。とつさに気を体中に巡らせて衝撃に備えるが…耐え切れるはずもなく、海から離れ、浜辺へと叩きつけられる。

「これでトドメだ！『タイダルウェイブ』…！」

なにやら攻撃しようとする声が聞こえるが…もう…意識が…

side out

【メフィストside】

「そこまでだ、リヴァイアサン」

あつぶねー。

津波が来たかと思えば、今度は刹那と楓が仲良く飛んで来たぜ。さらにトドメと言わんばかりのリヴァイアサンの「タイダルウェイブ」がくる寸前だったし…ちょっとこいつらには早すぎたかね。

「…ああ、そういえば殺してはいけなかったな。雷を喰らったせいで頭に血が上っていたわ」

「なるほどね…とりあえずお疲れ、今日はもう還っていいぞ」

「うむ、楽しい一時であった」

さて、それじゃ帰るか。

古菲はまだ寝てるし、楓と刹那は仲良く伸びてるし。

楓と刹那は良い感じに怪我をしているな……こりや木乃香のいい修業になりそうだ。

第伍拾弐話 『とある修業風景』（後書き）

やっちまったい！

ネギま部の顧問ってネギやったわ！w

19巻を読みなおしていたらネギが顧問らしいw
素で忘れていたw

そんな訳で、

もうしわけないです~~~~~
.-

第伍拾参話 『欲望って際限がないよね?』

夏休み。

それは学生だけではなく、社会人にも適用される長期休暇だ。だが世の中にはその夏休みを利用できない仕事の人種がいる。

なるほど…確かに働くことは生きることと直結する。

だが俺はそれに異を唱えたい。

休暇とは休むために存在するのだと！

学生のいない学校になぜ教師が行かねばならないのだと！

故に俺はじじいの学園長室に来いという要請を無視する。

決して面倒な訳ではない。

決して面倒な訳なわけではないぞ！

重要なので2回言った↑これ重要

だが世の中には屈せざるを得ない脅しという物が存在するのだ。

じじいいわくタカミチを筆頭に魔法先生一同を全員、俺のところに向かわせて修業を受けるように言うかもしれない、とかぬかしおった。なんでも学祭時に超の攻撃を避けられなかったので鍛え直すという名目らしいが…確実に嫌がらせである。

もういい加減かったるくなったので麻帆良を爆破しようかなとか考えた俺は悪くないと思う。

だが今の時期に実行すると我が弟子兼従者のガキがうるさいのでガマンする。

とまあ長ったらしくなったが、結論は、俺はじじいの部屋へ転移したのだ。

王の財宝の剣を周囲に顕現させながらな。

「それでじい？　つまらない用件だったら貫くぞ？」

「フオ、よく来てくれたのお……じゃがお願いじゃから良い笑顔でその数多の剣をワシに向けるのは止めてもらえんかの？」

「黙れ、そして死ね」

「フオ！　今かすった！　ワシの後頭部の先端に剣がかすったぞい！」

なんと、あの付属品である長つたらしい後頭部に神経が走っているらしい。

これはもう人類の神秘、いや、神の所業だな。

「こ、今回来てもらったのは他でもない。アスナ君達が作ったクラブの事じゃ」

「ふむ…続ける」

「夏休みの間に魔法世界に行くことになったのじゃ。そこはまだよい、じゃが向こうで問題でも起きたら面倒なのでメフィスト君には護衛を頼みたいのじゃが？」

実はまだ行くか決めていないのである。

話を聞いたところではメガ口あたりをうるつくらしい。

だが油断は禁物。

あのガキは行く先々で面倒事に巻き込まれる星の下に生まれている気がする。

それこそ某少年誌に登場する、行く先々で殺人事件に巻き込まれる子供姿の死神のように。

絶対にリアルで友達になりたくない奴ナンバーワンである。

まあ野菜小僧も負けていないが。

おっと、話がそれたな。

そもそもナギとの約束である「一人前まで護る」という依頼。だれ視点で一人前になったかもうちょっと話しておくべきだったと後悔している。

一人で200年ものの龍種を倒すとか、一人でメガロの戦艦100潰すとか。

後悔先に立たずとはよくいったものだ。

だが、あつちで俺の知らない所で死なれても困るしな。なによりジャックとかじゃじゃ馬皇女とかまったく会ってないし……久しぶりにいじりにいくのもいいか。

それにより、6年前の悪魔襲撃を元老院のじじいどもに報復せんと。

「どうじゃ、メフィスト君？」

「てめえの頭が気に食わないので断る」

「な、なんじゃと!？」

だがいい加減俺に頼るのはやめてほしい。てかメンドい。

「自分から危険かもしれない場所に踏み込むんだったら、そこから先は自分で責任を負うものだ」

「じゃ、じゃがあの子たちはまだ子供——」

「子供だろうとなんだだろうと、そんな事は関係ない。いい加減その言い訳は聞き飽きた。」

まさかじじい、俺に護衛を任せるから安心とか思っているんじゃない

いだろうな？」

じじいの様子を見る限り、凶星のようだ。
けっ、この老害が。

「本来ならば長である貴様があのガキ共に、まだ早いなどと諭すべきだが…面倒事に巻き込まれるほうがあいつらにもいい経験になると思うぞ」

「ぬう…じゃ、じゃがな…」

「くどい！ そんなに心配なら魔法世界に行けるように手配などするな！」

それと俺は夏休みの間はちょっと故郷に戻っているので仕事は一切せん」

こう言うっておけば夏休みの間不在でも大丈夫だろう。

まだなにか言いたそうなじじいだったが、かまわずに別荘へ転移する。

これ以上盲碌じじいの戯言に構うほど俺は寛大でないんでな。

………

………

…

別荘に帰ったらアスナが修業を終えたらしい。

なんとか咸卦法を必要最低限の運用の仕方は学んだようだ。

あと帰ってきたらちようどアスナの修業終了パーティをやっていたのでご相伴にあずかった。

バーベキューである。

「旨そうだな、頂くぞ」

「あ、メフィストはん！ アスナの修業はどうなったん？」

「俺はそっちに関わってないからわからんが、たぶんそろそろ帰ってくるぞ」

そのまま雑談をしていたら、満身創痍であるもののアスナ達が帰ってきた。

しきりにこっちの顔をみて考え事をしていたようだが…もしかして記憶がもどっちゃった？

まあ別に戻っても大丈夫だろう、俺には関係ないことだし。

「五体満足ということはやり遂げたってことだな？」

「ああ。忌々しいがこのあと修業をつけてやることになった」

「とりあえずお疲れ。この肉でも食べな」

「うむ」

酒を取り出し、騒がしいガキどもを放っておいてエヴァと一緒に飲みだす。

やっぱり酒はいい。

つまらなかつたことを記憶から抹消してくれる。
主にじじいとかじじいとか。

「メフィストはーん！ 何か景気付けにカッコいい魔法みせてーな」
「ん？ カッコいい魔法ね……」

無茶ぶりにも程があるが…なにやら他のガキどもも期待するような目をこっちに向けてきた。

なぜにそんなに興味津津なの？

「まあいつか、『水精水瀑布』！ 『氷爆』！ 『冥府の石柱』！
『燃える天空』！」

まず「水精水瀑布」で空中に水を作りだす。
次に「氷爆」で凍らせて、「冥府の石柱」で粉々に砕く。
最後に「燃える天空」を連射してバラバラになった氷塊にぶつける
と、

「わー！　きれいや！」

「お見事です、メフィストさん」

高熱レーザーが氷塊に反射してピカピカ光るようになる。
お手頃な手品なので気軽にお試しあれってね。

その後はなんか少年の魔法で面白いことが出来るか？　とか、エヴァの魔法はどこまで伸びるか？　とかなかなかアホなことをやっていたが、それを酒の肴にして楽しんでいたぜ。

そんなときに、綾瀬と宮崎が俺に声を掛けてきた。

「あの、メフィスト先生……少し聞きたいことがありますです」

「ふうん……とりあえず言ってみ」

「勝手ながら私のアーティファクトであなたとエヴァンジェリンさんの事を調べさせてもらいましたです。どれほどの賞金首か、どんな人生を歩んできたか」

「ふむ、それで？」

「私が聞きたいのは、なぜ幾度も村や街を殲滅しているかです。あなたほどの力を持っているならば何も皆殺しにせずともよかったのでは？」

このガキは……

30年も生きていない癖に、生意気にも俺に意見しようってか。

「宮崎はどうなんだ？　やはりお前も人殺しはよくないと思うって口か？」

「え、えつとー…やっぱり人殺しはよくないと思いますー」

「ま、それについて言えることは一つだ。ガキども、好奇心は猫をも殺すという言葉をしっているか？」

「あぐっ！」

魔法の糸で生意気なガキを空中へと縛り上げる。

パリンと綾瀬の持っていたコップが落ちて、向こうで遊んでいたガキどもの注意を引くが、そんなことはどうでもよかった。

「他人を完全に理解し、あまつさえ自分の意見を押し付けようとは思わないことだ。

そもそも綾瀬エ、貴様は他人に意見できるほど偉いのか？　頭でっ

かちのクソガキ風情が」

「あぐっ！」

現実を知らんガキにどうこう言われて我慢できるほど俺は寛大ではない。

「そもそも勘違いしていないか？　俺は確かに貴様らの担任であるが、その前に悪い魔法使いだ。なのに貴様らは特に警戒せずに人の領域にズカズカと土足で入り込みやがって。

いい加減自覚しろ、貴様らは少しでもドジを踏めば簡単に死ぬ場所に足を踏み入れているということを」

スパッと糸が斬られる。

どうやら刹那が斬ったらしい。

少しだけ締め上げてしまったので二人ともせき込んでいた。

「メフィストさん、やりすぎです」

「平和ボケのアホガキには丁度いいだろうよ」

抗議の視線をいくつか感じるがどうでもいいや。

「そうそう、貴様らにも言うておく。世の中には人殺しは悪だのたまうバカがいるがあれは嘘だ。世の中には殺した方がいいクス野郎もいるってことを覚えておけ」

あー、胸糞わりいや。

部屋に戻って飲みなおそうと。
転移転移と。

「あつ！ ちょっと、メフィストさん！」

「やめておけ、刹那。私は特に気にしないがあいつは短気だからな。綾瀬夕映、メフィストの言う通り私達を理解しようと思わないことだ。私達と貴様らではもはや種族からして違うし、歩んできた世界も圧倒的に違う」

反論する気もない綾瀬に向かってエヴァは続ける。

「そもそもあいつが殺す相手は殺意を持って向かってきた敵のみだ。滅ぼした村や街も吸血鬼許すまじって思想の街ばかりだったしな」

言いたいことは言い終えたと言わんばかりにエヴァはメフィストの下へ向かう。

そしてその後ろを茶々丸が付き添っていった。

……
……
……

「まったく… たかがガキの戯言に何熱くなっているんだ？」
「… さあな、ちょっとじじいにもイラつく事を言われて今日は少し
気が立っているようだ」

さっきのは完璧に俺のミスだな。
ついカツとなつてやった、でも後悔はしていないってやつだ。

「メフィストさん、お食事のほうは大丈夫ですか？」
「ん… 少し小腹が減っているから酒のつまみを何か作ってくれる
と助かる」
「承知しました」

どうやら茶々丸が軽いものを作ってくれるようだ。
ホント気配りもしっかりしてて… 欲しいな。

「なあエヴァ〜」
「ダメだ」
「まだ何も言つてないぞ」
「そんなに物欲しそうな顔をすれば解るわ！」

ちっ、茶々丸のような完璧な従者を俺も欲しいな。
日常面での世話、戦闘時の補助… 完璧じゃないか。

「まあいい、あんまりガキ相手にマジになるなよ」

「わかつている、今日みたいなことは稀だ」

「ならばいいが…」

「今は忘れさせてくれ。エヴァも一緒にどうだ？」

「では頂こう」

茶々丸がもってきてくれたつまみを食べつつ、エヴァと酒を飲み続ける。

話の話題は転々と変わっていき、少年の今後——すなわち闇の魔法を習得させるか否か、という話になった。

「俺は反対だ。あの小僧の心にはおそらく復讐心が宿っている」

「ほう…坊やが復讐ね。6年前、坊やの村を襲った悪魔だな」

「ああ、口では立派な魔法使いになるなんて言っているが…石化した村人を直すために治癒魔法を学ぼうとしていないし……なによりウェールズ魔法学校では自力で悪魔を消滅させる高等呪文を覚えたようだからな」

何と言うか…力だけを貪欲に求め過ぎているように感じ取れる。あんな精神状態で闇の魔法を習得したら何が起きることやら。

「ふむ、坊やも中々やつかいなものを抱えているものだ。」

闇の魔法を習得させるかどうかは魔法世界から帰って来たら見極めるとするか」

「それがいいだろうな」

ホントに…面倒だぜ。

ナギのやるー、次に会ったら肉体言語で話し合おうじゃないか。

しばらく飲み続けると、真祖とはいえエヴァの肉体は10歳。瞬く間に顔が赤くなり目がとろんとなりだしてきた。

ふっふっふ…

待っていた、この時を待っていたぞ！

諸君らは覚えているだろうか？

麻帆良武道会のときに、「アスナが負けたらランドセルと麻帆良小学校の制服」をエヴァがすると。

まあ当然、素面の時に言いだしたんじゃ絶対に聞き届けてもらえないし、最近は修業で忙しくて機会がなかった。

だが！

幸いにも今日は修業を早めに切り上げており、時間はたっぷりある！

故に今が好機！

「エヴァ！ 実は頼みがあるんだが聞いてくれないか！」

「ん？ いいぞ」

うっし！ 第一関門突破だ！

「では、黙ってこの服に着替えてくれ」

「ん？ これは？」

「茶々丸、エヴァの着替えを頼む」

「承知しました」

エヴァを引き連れて部屋を出ていく茶々丸。きつと茶々丸なら…俺の想いが届くはず！

5分後。

「ちゃ、茶々丸！ や、やっぱり帰る！」

「いけません、マスター。ここまで来たのでしたらメフィストさんにお披露目しないと」

「こんな恰好であいつの前になんか出れない！」

つ、ついにこの瞬間がやってきた！

視力良し！ 夜間による視野補正良し！ 脳内の記憶フォルダ良し！ 可愛いしぐさ耐性良し！ 全行程オールグリーン！

「それでは入りますよ」

「あ、こ、コラ！」

顔を真っ赤にしながらも茶々丸に手を引かれて入ってきた小学生の服を着たエヴァ。

その破壊力と言ったら…これだけでご飯10杯は行ける！

それどころかこれがあれば魔法世界と戦争になっても5年は戦っていける！

いつものゴスロリ風味な服と違い、いかにも子供服！みたいな小学生の制服を着ているエヴァ。

サイズが微妙に——まあ俺のせいだが、計算である——合っていないらしく、スカートの裾を手で押さえながら顔を真っ赤にしてこつちを睨んでくるその顔といったらもう！

可愛い一言に尽きる！

世の中には特に感情が湧かなくても褒め称えるという習慣があるようだ、真に感動したとき、人間は――まあ俺は人間じゃないが、この際は置いておこう――頭の中が真っ白になり言葉が発せなくなるようだ。

これぞ萌え。

萌え文化とは恐ろしいものだ。

これ以上威力が上がってしまうのなら……それはもう殺人兵器の域に達するだろう。

なるほど……それこそが、萌え死ぬという奴なのか……

俺は今、人類の真理を発見した！

究極の殺し方とは萌え殺しにあると！

シスコン＆ロリコンは死ぬと思つた諸君！

それは間違いである！

シスコンこそがこの世の真理！

ロリコンこそが遺伝子レベルで刻まれている人類の宿命なのだ！

まあ長つたらしくなつたが、何を言いたいかと言つとだな。

「か」

「か？」

「可愛すぎるぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

もはやこの一言に限る。

世界が壊れても、俺は君だけがいればいい！みたいなレベルである。

「あ、ありがとう／＼……ってそうじゃない！ これは何だ！？」

「何って武道会で約束したじゃないか」

何をそんなに怒っている？

いやまあ…ぶっちゃけ怒るのは解ってたけどさ。

「約束？…約束…ああ、そういえばそんな賭けをあの変態ロ―ブとしていたな。」

フフ…フフフ…」

「気に入ってくれた？」

「ふ・ざ・け・る・なああああああああああああ！
！」

耳栓しといて正解だぜ。

「そんなに怒るなよ」

「これが怒らずにいられるか！？ 他の目がないからまだいい物の、こんな物を着る私の身にもなってみろ！」

「実に俺好みで可愛いぞ（キリッ）」

こういうときは直球で褒め殺すに限る。

すると真っ赤だったのが、次は茹でダコのようになってしまった。
効果抜群のようだ。

なんか俺って鬼畜だな。

可愛い格好がみれるから気にしないけど。

茶々丸の、ゴミを見るような視線も気にしないぜ！

「いいじゃないか、ここには俺しかいないんだし」

「む、だ、だがな…私にも羞恥心という物が…」

その恥ずかしがるしぐさが見たかったんだ！

ヤバい…俺の脳内にいる理性と欲望が戦争を始めた。
戦況は理性4：欲望6である。
すでに劣勢ぎみであった。

欲望へと天秤が傾いたことによって口が勝手に動く。
なにこれ怖いんですけど。

「エヴァ、次はこれを着てくれないか？」

「い、嫌だ！ もうこんな恥ずかしい格好は嫌だ！」

「それを承知で頼む。後生なんだ！（キリッ）」

欲望に能の制御を取られたせいで真面目な顔をしてお願いをする俺。
節操ねえな。

俺の欲望担当のやつ、いつぺん殺した方がよさそうだな。

ヤバい。

次、エヴァに着せる服を見たせいで理性組に反逆者が発生した。
なんと理性2：欲望8となってしまった。
もはや負け確定である。

「し、仕方が無いな／＼ 今日だけだぞ／＼」

エヴァも酔いが回って正常な判断が出来ていないようだ。
もはや欲望担当のやりたい放題である。

またもや5分後。

「き、着替えてきたぞ／＼…ど、どうだろうか、メフィスト？」

誰が予想できたであろうか。

いつもは強気なエヴァが今、こんな恰好をしていると。

否！ 断じて否！

これはもはや神の奇跡かなにかだ！

「猫ミミ＋スク水最高だあああああああああ！」

今度の格好は、猫ミミ＋スクール水着＋猫の尻尾という実に素晴らしい格好であった。

もちろん水着には真ん中に「えうゝあ」と入っている。

猫ミミは俺の特別製で時々、ピクピクと動く仕様だ。

はつきり言おう！

めちゃくちゃ可愛いと！

これのためなら俺は地球を滅ぼしてもいい！

いや、むしろ今からやってくる！

俺以外にこの国宝級、否、星宝級の宝を他の有象無象に見せないための粛清だ！

「エヴァ、語尾にちゃんと付けてくれないか？」

い、いかん…可愛さのあまり理性が残り0.5人となってしまった。俺自身、なにを言っているのかよくわからないけど…とりあえず0.5人ぐらいなんだ！

「え、えつと…に、似合っているかにゃん？／＼／」

「……ガフッ！」

や、ヤバイ……

何がヤバいつていまの攻撃力…いや萌力とでも言おうか。

ミミがピクピクつとしながら、顔を赤くしてこちらを上目づかいで見上げてくる動作が…はんぱなく可愛いのだ！

おかげで理性が全死。

それだけにとどまらず、心拍数が上昇、その速度が速過ぎて心臓が破裂し、血液が何故か口から出てきた。

「なるほど……これが萌え死に、というものと言う訳か…」

「メ、メフィスト！？ 一体どうしたと言うんだ！？」

「心配するな…これはすでに決まっている事、二次元戦士に宿命づけられている決定された結末なのだ」

「何を言っているのかさっぱりわからん」

「出来れば俺は死んだあと、俺の記憶を覗かないで焼却してくれ」

「それは何故だ？」

「決まっているだろう…エヴァのうれし恥ずかしの画像を死後の世界に持つていくからだ」

「永眠しろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！！」

「ぐお！」

エヴァの拳が俺の顔面にめり込み…そのまま地面に陥没した。

ここが俺の死に場所…という訳か。

最愛の妹に殺されるのも…ヤンデレに遭遇したみたいでテンションが上がるぜ。

だが、もう、眠いや。

おやすみ……………

FIN

第伍拾参話 『欲望って際限がないよね?』 (後書き)

なぜこうなった?

俺はアーニヤを出すまで行こうかなとか考えていたのに、なぜかこんな妄想話に…

ハッ! まさかスタンド攻撃!?

くっ、まさかThe Worldだとも言うのか!?

ヤベエ、テンションがおかしい。

第伍拾肆話 『妄想の代償』（前書き）

ちよつと今回はいつもの半分程度の文量となっております。

いい訳はあとがきにて。

第伍拾肆話 『妄想の代償』

【三人称 side】

ネギたちは修業の合間に2泊3日で海水浴へと行っていた。

刹那と木乃香はメフィストを誘おうとしたが、別荘のどこを探しても見つけることが出来ず、エヴァに聞いても知らないとししか教えてくれなかったので泣く泣く断念した。

海水浴から帰ってきたら、ネギの幼なじみがネギパーティーに参加していた。

アーニヤである。

帰ってきて休んだ後、エヴァの別荘へと集まり修業を開始した。

新参のアーニヤがそこで見たのは、それはもう驚きの連続であった。

ネギが刹那にフルボッコにされるところ、楓が古菲に吹っ飛ばされるところ、アスナがアホな顔して飛んでいるところなど…

「何でもみんなこんなにスゴイのよ!？」

「それは…皆、明確な目標を持ち、良き師の元で研鑽を積んでいるからではないかと」

私やのどか達は相手にされてませんが、と微笑を浮かべながら叫ぶアーニヤに対応する綾瀬。

「師って誰よ!？」

「この城の主…エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルと、メフィスト・マクダウェルです」

「……………え？　ごめん、もう一回お願い」

「この城の主…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと、メフィスト・マクダウエルです」

「そ、そそそ、それって…あの、『闇の福音』と『幻獣使い』の事？　いやいや…まさかね！ありえないわ！あははははははは！」

エヴァとメフィストの伝承を聞いているアーニヤはこんな場所で会うはずがないと笑うが、綾瀬はいたって真面目に答えた。

「そのお二人で合っています。エヴァンジェリンさんは、『人形使い』『悪しき音信』など、メフィストさんの方は、『災厄の邪神』『闇の僭帝』『人類共通の敵』などと呼ばれていますね。ご存知で？」

その言葉を聞いた途端、アーニヤから余裕が一切消えた。なにしろ伝説の大悪党の居城に居座っているのである。

真つ当な魔法使いとしての常識を持っている人ならば全員がそうなるだろう。

「御存知も何も！　子供でもその二人には絶対に関わるなと知っている伝説の中でも最上級の大悪党よ！　ありえない！」

何で私ってばこんなところにいるの！？　あんたたちってバカ！？

自殺願望者！？

もはやパニックッて言いたい放題である。

一刻も早く逃げようと綾瀬にもちかけるが、その時にはもうすでに後ろにエヴァがスタンバっていた。

「ようこそ、我が城へ。歓迎するぞ、アンナ・ココロウア」

「あとなんで俺は城の地下室に鎖で繋がれてるんだろう?」

ここは、俗に言う拷問室。

様々な鞭、何に使うかは口に出せない刃物、剣山のようにびっしりと針がたっている椅子、何を煮るのは口にだせない大きな釜、様々な拷問器具があるが極めつけは目の前にあるアイアンメイデンだ。

鉄の処女

別に今まで見た事もあるし、使ったこともある俺だが…今日は別だ。なぜかって? 目の前のアイアンメイデンの中が血塗れだったからだ。

起きてすぐこんな物が目の前にあれば誰でも気になるだろう。

しかも極めつけにおかしいのは、その血の匂いが俺の血と酷似、いや、まんま俺のであるところだ。

「はて? なぜ俺がアイアンメイデン鉄の処女なんかに入らないといけないんだ?」

というか意識が無い時に入れられたんだろうか?

実行犯は鬼畜だな。

流石は我が妹だ。

「いや待て、エヴァの犯行だと断定するのは早計じゃないか?」

もし外れていた場合、確実にエヴァが悲しむことになる。

俺のほうは特に問題ないし…スルーでいいか。

「ふん!」

力任せに鎖を壊す。
それじゃご飯を食べにいくとするか。。

………

……

…

ご飯を食べた後、テラスのほうでドンパチやっているようなのでそ
っちへ行くことにした。

歩きながら向かっていると、ちょうど曲がり角で何かとぶつかった。

「ご、ごめんなさい！ 初めまして、アーニヤです」

「アーニヤ？……ああ、少年の幼なじみか。俺はメフィスト・マク
ダウエルだ」

自己紹介をしてきたので俺も名乗る。
すると、目の前の少女は少し考えた後、

「いやあああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！」

絶叫しながら俺と反対方向へ走り去っていった。
実に失礼である。

拳句の果てに、行ったり来たりを繰り返した後、笑いながら気絶し
た。

「なんぞこれ？」

なんのイベントだ、これ？

ツッコミ待ちなんだろうが、俺の目の前でくたばっている少女は。

いや、これはあれか？

踏んでくれと言うフリか？

やっべ、どうしょ。

俺ってSじゃないからこういうプレイはちょっと遠慮してほしいんだよね。

「お前の何処がSじゃないと言っただ！？ 貴様は確実にドSだ！」

やめてよね、俺の印象が悪くなるじゃないか。

え？ もう遅いつて？

「とりあえず…心を読むなよ、エヴァ」

「見当違いな事を考えていたようなのでな。それとも違っっているのか？」

「では聞くが…俺のどこがSだと言っただ？」

「ハア…笑いながら敵をいたぶったり、根性最悪の奴相手に笑みを浮かべながらボコボコにするところだ」

そう聞くと俺ってかなりの性格破綻者に聞こえるな。

だが生きていく上で必要なことだったんだよ。

徹底的にぶちのめしたり、圧倒的に粉砕したりして歯向かう気力を無くさないといけなかったからな。

でも、楽しかったな…

「そう考えると俺ってドSでいいや〜」

「むしろお前が世の中の判断基準でSじゃなかったら天変地異が起

きるだろうよ」

「いやいや、いくらなんでもそこまではないだろ」

俺の性格ってサディスト一色って訳でもなくね？

あれ？ 向こうの方で刹那が「あれでご自分がドSだと自覚していなかったとは……」などとorzな姿勢でブツブツ言っていたり、少年が「自覚したってことは……これ以上に修業がキツくなるのでは……」と壁に向かってブツブツ言ったりして、犬も「これ以上鬼畜になったら……アカン、死ぬかも」などと言いながら笑みを浮かべていたり。

「あいつらはどうしたんだ？」

「（……気持ちいわからんでもないがな）修業で疲れているんだろうよ」

なるほど、精が出るね……流石、若いだけあるわ。
それじゃ俺もしごきに行くとしようか。

「つと、その前に……エヴァ、今日起きたら拷問室にいたんだが何か知らないか？」

「……いや、知らないな……アハハ。」

（言えるか！ 恥ずかしい格好をさせられた腹いせに拷問室に連れ込み、感情の赴くままに痛めつけたなんて！

鉄の処女

アイアンメイデンに突っ込んだところで我に帰り記憶操作をしたが……コイツ、その間一回も目を覚まさなかったな……こういう神経をしているんだ？）」

何やら冷や汗をかいて目をそらすエヴァ。

とても怪しいが……最愛の妹を疑うのは良くないな。

知らないと言っているからきつと知らないんだろう。

「まあいつか、それじゃ俺は修業を見に行ってくるぞ」

「ああ、私は少し休憩だ。あとは任せたぞ」

「御意」

まだ現実逃避をしているガキどもに近づいていく。

「いつまでもへこたれてないで立て、修業を始めるぞ」

「「「はいっ！」「」」

「おお、いつにも増して元気な返事だな。何かあったのか？」

「「「（あなたのせいです！）なんでもありません！」「」」

「良い返事だ。それじゃ修業開始といこうか」

第伍拾肆話 『妄想の代償』（後書き）

53話の妄想の反動＋次の展開が入りきらないと判断してここでやめております。

なんか話が進まないなあ…

そういう訳でそろそろ魔法世界に行こうか！

第伍拾伍話 『いざいかん！ 魔法世界へ！』

時は流れ、日付は8月11日。

今日は少年たちがウエールズへと向かう日だ。

向こうではジャックの奴が迎えにくるらしいが……あのめんどくさがり屋が素直に来ると思えない。

まあそうなったほうが面白そうではあるがな。

おっと、話が逸れた。

俺的にこれから魔法世界に行くのは別に反対じゃない。

あつちでトラブルに巻き込まれながら経験を積むほうが良いだろうよ。

だがそのトラブルを自力で打破できる力量がちゃんと備わっているか、それを見ない限りは安心できない。

向こうで俺は全面的に助ける気は皆無だからな。

「メフィストさん、^{アラアルバ}白き翼、全員揃いました」

来たか。

今俺がいる場所は俺の別荘。

フィールドは山岳地帯にしてある。

「それじゃ、殺し合いを始めるのでしょうか」

s i d e o u t

【三人称 side】

メフィストに召集を受けた白き翼アラアルバは、メフィストの別荘へと向かう。なんのために呼ばれたのか解らなかつたので何か餞別をくれるのかと、メフィストに師事していない面子はワクワクしながら別荘へと足を運ぶ。

だが刹那を筆頭に、ネギ、小太郎、アスナ、木乃香の5人は何をやらされるのかと戦慄しながら別荘へと向かっていった。

別荘につくと、転移先は山のとっぺんでそこにメフィストが背を向けて立っていた。

「メフィストさん、白き翼アラアルバ、全員揃いました」

ネギが声を掛けると、メフィストは振り向きこう言う。

「それじゃ、殺し合いを始めるのでしょうか」

あんまりにもサラっと言うので聞き間違いだと思う常識派（↑メフィストに修業をつけてもらっていない人）と、ああ…今日が命日か…と悟りを開く非常識派と反応が二分される。

「えっと…いきなりなんで殺し合いになるんですか？」

「まっ、簡単に言うとな。お前達が魔法世界でもちゃんとやっていけるかテストって訳だ」

テストと言われて一気に不安になる白き翼アラアルバの面々。

皆の気持ちを代弁してネギが何をするのかと問いかける。

「どういった形式でテストを行うのですか？」

「ふむ、その答えはいたってシンプル。俺がこれから出す敵を倒すことだ」

それなんて無理ゲー？

アラアルバ
ここに白き翼の気持ちは一つになる。

「まあ俺も鬼じゃない」

そう言つてメフィストは巻物を取り出して広げ出した。

「――起動、能力制限：気・魔力ともに本来の1%」

何かを咥くと同時にメフィストは指の先を噛み切つて巻物の真ん中を血の指でなぞる。

すると巻物が光り出し、メフィストと瓜二つの人物が出現。

魔法に関わつて幾分か立つが、巻物から人が出てくるなどというイベントを経験していない麻帆良学生達はあんぐりと口を開けて放心していた。

「む、久しぶりだな本体。俺を呼び出すということはどこかと戦争でもするのか？」

「我ながら物騒な思考をしているもんだ。だが残念、今日はこいつらの相手を頼む」

いまだに放心している子供たちの方を指さすメフィスト。

メフィスト（偽）は一瞥するだけで何もアクションをしなかった。

「ほら、ガキども。今日の相手はコイツだ」

「あの、メフィストさん？ あちらは誰なんですか？」

「あれは俺の劣化コピー…人造霊ってやつだ。見せるのは初めてか？」

全員頭を縦に振る。

「ふむ、あれは俺がとある理由で作った物だ。本来なら俺の半分程度の力を発揮するが今はその1%程度になっている」

「とある理由…ですか」

「ああ、そうだ。思ったことはないか、『自分がもう一人いれば』と」

まあどうでもいい話だなと話を打ち切るメフィスト。

「基本的に全員参加だが、戦闘要員じゃない奴は参加しなくてもいい。まあそこら辺はお前達で相談して決めろ」

「わかりました！」

返事をするなり、ネギたちはすぐに相談を開始した。

「まず、千雨さんと朝倉さんは外しますね」

「ま、当然だな」

「戦闘要員じゃないからね。まったく、メフィスト先生てば鬼だわ」

長谷川と朝倉は当然とばかりに戦力外を受け入れる。

「次は…のどかさ、夕映さん、ハルナさんですね」

「せ、せんせー…私のアーティファクトでメフィストせんせーの思考を追跡するのはどうでしょうかー？」

「おお！ それってすごく有利になるんじゃない！？」

早乙女が嬉しそうに賛成するが、刹那と木乃香が反論した。

「たぶんあまり意味がないでしょうね」

「せやな。メフィストはんの思考を呼んでも避けれる保障はないし、のどか達は危ないから離れていてなアカンえ」

「なんで意味無いって言いきれんの？」

アスナが質問する。

「その…以前、思考を読み取る魔導具を借りてメフィストさんと闘ったことがあるんですが…思考を読んでも避けられないような攻撃をしたり、逆に何も考えずに闘う事が出来る御方なんです」

「先のことが分かるから恐怖感もハンパないんよ。それでものどか達はやるん？」

「…け、見学していまーす……」

刹那と木乃香の言葉を聞いて戦線離脱を決意する宮崎・綾瀬。

だが、早乙女はメフィストのまともな闘いっぷりを見たことが無いため半信半疑だった。

「アハハハ！　どんな超人よ！」

私は参加するわよ。私の力がどこまで通用するのか試してみたいしね」

「……え、？」「……」

ネギ・アスナ・刹那・木乃香がそれぞれ説得しようとしたが、逆に意固地になり益々やる気になる早乙女。

ネギ以外は説得をあきらめて残りのメンバーへと視線を向けた。

「残りは…戦闘慣れしている面子ばかりだし大丈夫かな？」

「問題ないでしょう。あとは作戦を練るだけかと」

「そうね…まずはメフィストさんがどんな闘い方をするか整理しようか」

アスナの一言で各々考え始める。

ちなみにネギはまだ早乙女の説得中だ。

まずはアスナ。

「私ってばそんなにメフィストさんと修業はしてないからなんとも言えないけど…私が知っているのは魔法を、それはもうガンガン撃っているところかな」

次に刹那。

「メフィストさんは宝具と呼ばれる伝説上の刀剣を駆使して闘いますね。剣・槍・戟・弓など何を使っても達人以上の腕を持っています」

木乃香。

「メフィストはんの障壁はめっちゃ堅いんよ。酷い時は闇の吹雪を10回撃ちこんでも壊れない時があつてな…あれは心が折れそうやったえ」

小太郎。

「修学旅行の時に肉弾戦をしかけたんやけど…魔法使いのくせに勝てへんかった」

楓。

「打つ手が無いとはこのことでござるな。確かこういうのをオールマイティと言うんでござったな」

最後に古菲。

「私が言えることなんてもうないアルよ」

話せば話すほど、これなんて無理ゲー？という気持ちを共有する白^{アラバ}き翼。

だが絶望感が漂う中、刹那と木乃香の顔には諦めが無かった。

「いつものメフィストは手が相手やないし、半分の1%やから…本体の0.5%の出力や。これならいつもの修業と比べ物にならないほど簡単やで！」

「お嬢様の言う通りです。それに対魔用陰陽術も何個か用意があります。ですので皆さんには——（ゴニョゴニョ）——」

「ふむ…経験が無い以上、刹那の案に頼るしかないでござるな」

「決まりね！ それじゃあ刹那さん、頼むわよ！」

作戦は決まり、後は実行するのみ。

未だに説得をしようと頑張るネギをアスナが首根っこを掴んでメフィストの方へと歩き出した。

「用意は出来たか？」

「ばっちりよ！」

「大丈夫やえ」

「それじゃテストと行くぞ。仮に殺しても巻物に戻るだけだから遠慮なくやれ」

ここに世界最悪の魔王ことメフィスト・マクダウェル（偽）と白^{アラバ}き翼の闘いが開幕した。

参加者

ネギ・スプリングフィールド

犬上小太郎

神楽坂明日菜

桜咲刹那

近衛木乃香

古菲

長瀬楓

早乙女ハルナ（↑自殺願望者）

戦闘開始、1分後。

哀れな自殺願望者、早乙女ハルナは白目を剥いて失神していた。

開始早々、ネギの制止を無視して彼女のアーティファクト「落書帝国」を発動。

無駄に筋肉ムキムキの肌が赤褐色の男「インフェルノ・アニキ炎の魔人」を出現させて殴りかかった。

「若いな、そういう蛮勇は嫌いじゃないが…その選択は死に直結する」

メフィストは魔人を爪で頭から縦にして、そのまま早乙女に接近し、鳩尾に右ストレートが直撃した。

勝手に早乙女が先行して勝手にやられたので、ネギ以外の子供たち

はフォローを諦めて攻撃へと意識を向ける。

「ハルナさん！」

だが、自身のクラスメイトである早乙女を見捨てることが出来ないネギはいちもくさんに空を駆け出す。

アスナはハアとため息をつきながらも、ネギが動きやすくなるように古菲、楓と接近戦をメフィストに仕掛ける。

「てりゃあああああああああ！」

正面からアスナと古菲。

背後から3体に分身した楓。

極限まで出力を封じられているとはいえ、しっかりと気配を察知したメフィストは、まず正面から迫る大剣「ハマノツルギ」を左手で白羽取りし、古菲の突きを右手で掴みとる。そして掴んでいる物を後ろへと力任せに投げ飛ばした。

「きゃあああああああ！ 楓ちゃん避けてえええええええええ！」

「それが受け止めてくれアルよ！」

「なんと!？」

楓の分身たちは咄嗟の事で回避できず衝突、さらにそこへメフィストが無詠唱で「魔法の射手 連弾・闇の31矢」を撃ちこむ。

魔法が来ている事を見た楓と古菲は一瞬でアイコンタクトし意志疎通してアスナを盾にした。

「ちょっと、楓ちゃんに古菲！ 私を盾にしないでよっ！」

「どうせ効かないから問題ないアル」

「助かったでござるよ、アスナ殿」

「余裕そうだな、まだまだいくぞ」

上からは「冥府の石柱」が13本、下からは「こおる大地」が7個迫ってくる。

アスナはここは私がやるしかないと思い、「ハマノツルギ」を振りかぶる。

「行くわよ！ 無極而太極斬ッ！！」

魔法無効化を秘めた斬撃を迫りくる魔法全てに飛ばすアスナ。

自身が放った魔法を全て消されたメフィストは、面白い相手がきたもんだと内心笑っていた。

「魔法無効化とは面白い、年甲斐もなくはしゃぎなくなるってもんだ」

「余裕じゃない、メフィストさん！ 本体の0.5%の力しかないのにそんなに油断して大丈夫なの？」

「油断せずして何が最強種かつ！」

「激しく不安になるセリフね、それ！」

「これが強者の慢心という奴でござるか」

「でも攻撃が当たらないアルよ」

アスナとメフィストが漫才をしている時、背後の影から小太郎が現れ、上空からネギが魔法を放つ。

「狗音爆碎拳ッ！」

「雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！」

『雷の暴風』！！』

小太郎は、攻撃が当たるのを確認した後、ネギの魔法の巻き添えを

避けるためバックステップで回避。

「狗音爆碎拳」が当たり、体勢を崩したメフィストへ「雷の暴風」が直撃、辺りに土煙を舞い上げた。

「げほっ、げほっ。ひよっとして倒した？」

「直撃やからたぶん倒したで！」

「皆さんご無事で！」

アスナの方へネギと小太郎が駆け寄る。

そしてメフィストがいた方向へ全員構えるが……みなは忘れていた。
メフィスト
大魔王は常識では考えられないような動きをする。

「サタム・サタディア・サタナキア——」

どこからか魔法を詠唱する声が聞こえてきたのでアスナが「ハマノツルギ」を構える。

「——来れ 巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆 百重千重と重なりて——」

聞き覚えのある詠唱。

それは「千の雷」の詠唱だった。

来る！ と思った時、「千の雷」とは別の衝撃がアスナたちの周りを襲う。

「ちょ！ 何これ！？」

「『冥府の石柱』？ ってことは！」

「上や！」

一ヶ所に固まっていたせいで、ネギたちの周りを囲むように「冥府の石柱」が立ち並ぶ。

きれいに隙間を無くしていたので脱出は出来ない。

石柱を無効化しようとアスナは「ハマノツルギ」を振りかぶるが、それは間違いであった。

「走れよ稲妻！ 『千の雷』！！」

石柱が落ちると同時に魔法を放つメフィスト。

もしアスナが「冥府の石柱」へ「ハマノツルギ」で無効化攻撃をせず、上空のメフィストの魔法を無効化していれば問題なかった。

「千の雷」は攻撃範囲が広く、アスナだけに当たる訳ではなく、その場にいる全員同時に雷が降り注ぐことになる。

マジックキャンセル
よって完全魔法無効化能力を持っているアスナがいたとしても、アスナ以外の者に雷が降り注ぐ。

「あれ？ もしかして死んじゃった？」

「千の雷」の余波で、周りに立ち並ぶ「冥府の石柱」が粉々に崩れてそこらじゅうに降り注ぐ。

上空にいるメフィストに被害はないが、地上にいたらたまったものじゃなかっただろう。

「やべ、本体になんていい訳しようかな… ついつい殺っちまった」
でいっか」

「勝手に殺さないでください！」
「おっと」

下から「雷の暴風」が飛んでくる。

それを左へ避けると、そこには刹那のアーティファクト「シーク・シヒ首・十六串呂」が待ち受けており、それを叩き落とすと今度は小太郎の式

神が飛んできた。

「まさか全員五体満足だったとはな。アスナ以外は誰かしらくたばっているかと思ったが」

地上を見ると、アスナ、楓、古菲も五体満足だった。

「どうやってあの状況を切りぬけた？」

「石柱が降ってくると同時に私が道を作り中に侵入、その後アスナさんが無効化した隙間から全力で逃げました」

「ホンマ死ぬかと思ったで。刹那の姉ちゃんがこなかったらヤバかったわ」

今までどこかに隠れていた刹那を見落としていたメフィスト。

まったく詰めが甘いもんだと笑っていた。

「僕も少し聞きたいことがあるんですが、いいですか？」

「ん？ なんだ？」

「先程の、僕と小太郎君の攻撃をどうやって回避したんですか？」

「ああ、そんなことか。あれは俺の分身、たったそれだけの話だ」

「分身やって？ いつ入れ替わったんや？」

そんなには自分で考えろと一蹴し、無詠唱の「燃える天空」を連発する。

「さあ、仕切り直しといこうじゃないか」

……

…

木乃香は戦闘が始まっても参加せず気配遮断の呪符を背に付け、虎型の式神を呼び出して背に乗り山の中を駆けずり回っていた。

「今頃アスナたちは頑張っとるんやろな。ウチもしっかり自分の仕事をせな」

走りまわっている最中、ときおり降りては呪符を木に貼り付ける。その動作を繰り返し、あと少しで終わると思った時、大地を揺らすほどの衝撃と、大魔法特有の大きい音が聞こえた。

「メフィストはん（偽）も鬼やな。あんな大魔法をウチらに使って…大人げないんとちゃうん？」

文句を言いつつも仕事を続ける木乃香。そしてようやく終わったので刹那に念話を入れる。

“せつちゃん！ こっちは終わったえ！”

“承知しました。こちらの準備は万端、いつでも開始して大丈夫です、お嬢様”

“了解や、ほな行くで！”

二枚の呪符を取り出し、魔力を込めながら術を発動させる。

「『封魔結界』、『相生結界』発動や！」

……

…
…

「む？ これは一体？」

メフィストは空中で、3対1という闘いを強要されていたが、特に苦戦している様子はなかった。

だが、妙な魔力が辺り一帯に走ったかと思うと、突然ネギたちの動き、威力が強くなったように感じた。

「（どうということだ？ 奴らの動きがいきなり速く……それだけじやなく俺の身体が少し重いような……）なるほど、そういうことか」
「すぐ気付きましたか、流石ですね」

メフィストは爪、刹那は夕風で斬り合いながらも会話をする二人。

「俺の力を制限する結界を作ったんだろう？ おそらく姿を見せなかった木乃香だな」

「ついでに我らの力を上げる結界も一緒です、よ！」

「む、そろそろキツいな」

封魔結界は読んでそのまんま。

魔の属性を持つものの力を制限し、本来の0・75倍の出力しか出せなくなる結界。

次に相生結界。

陰陽師の基本である五行思想を利用して、人間のステータスを全体的に1・25倍する結界だ。

「だが一つ疑問が残る。お前やその犬は人ならざる血を引いているはずだ。なのにこの結界の影響がなく、さらには威力が倍増しているのはどういうことだ？」

「それはお嬢様の呪符のおかげです。この呪符は私や小太郎君を人間と勘違いする符でして…いわゆる裏技ですね」

「くくく…なるほど、裏技なら仕方がない」

ネギが撃った「白き雷」を障壁で受け止めるが、障壁にひびが入り始める。

（いかな…そろそろ限界のようだ）

「ネギ先生ッ！ 小太郎君！」

「ハイ！ ラス・テル マ・スキル マギステル！」

「決めるで！」

（しかもこちらの不利を見逃さないとは…本体も面倒な相手を寄こしたもんだ）

詠唱を始めるネギに攻撃をしようとするが、刹那と小太郎に阻まれて実行できずにいた。

こちらは威力だけでなく速さも制限され、向こうは逆に全てが増加しており思うように攻撃できずにいるメフィスト。

「ここ！ 神鳴流奥義ッ！ 雷鳴剣ッ！」

「くっ！」

「雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風！ 『雷の暴風』！！」

刹那の雷鳴剣を受け止めきれずに少しだけ体勢を崩すメフィスト。そこへネギが詠唱した「雷の暴風」が飛んでくる。

回避が間に合わないと判断し障壁で受け止めるが、背後から小太郎

が接近してきた。

「喰らえッ！ 我流犬上流、狼牙双掌打！」

「ぬっ、まだ終わらんよ！」

攻撃をよけきれずに吹っ飛ぶメフィスト。

だが、そのタイミングを刹那が逃すはずが無かった。

「『断魔縛鎖』発動！ 捕らえろ、天の鎖よッ！」

「なっ！ 障壁を抜けただとッ！？」

「断魔縛鎖」は、「斬魔剣 弐の太刀」の特性である「選んだもののみを斬る」を利用した鎖。

発動させると呪符が10mほどの鎖に代わり、使用者の望むものを拘束する。

メフィストの持つ「幻想成る魔法の紐」と「天の鎖」^{エルキドゥ}をベースに作っているので抜け出すのは困難である。

「ぐっ！ まさか天の鎖もどきが出るとは予想外だぞ」^{エルキドゥ}

「厳密には違いますが…あれをベースにしていますのでね」

空中で拘束されているメフィストへとドメを刺すため、刹那は気を電気に変えて夕風に纏わせる。

「神鳴流決戦奥義！」

ネギはさつき「雷の暴風」を撃つまえにもう一回詠唱、遅延させておいた「雷の暴風」を解放する。

「『^{千ミットム}解放』！」

結界を張り終えた木乃香は式神で空中を飛びながら「闇の吹雪」を詠唱しつつ刹那たちの元へ向かう。

「来れ氷霊 闇の精！ 闇を従え吹け 常夜の吹雪！」

「く、くくく……ここで俺を倒しても、第二、第三の俺が――」

ボケたメフィストにいついつこむ刹那。

コホンと咳払いし、最後の締めを決める。

「真・雷光剣ッ！」

「『雷の暴風』ッ！」

「『闇の吹雪』ッ！」

チユドオオオオオオオオオオオン！という音が聞こえそうな大爆発を引き起こした3人。

その様子を見て本物のメフィストは、

「きたねえ花火だぜ」

“おい！それが苦労した俺に言うセリフかッ！？”

「こつちに戻ってきたってことは……いっぺん死んだか」

“流石にあれは無理だ。あの鎖のせいで魔法が使えなかったからな”

巻物と喋るメフィスト。

実にシニールな絵である。

“まあいい、疲れたんで俺は寝るぞ”

「寝ろ寝ろ、次に呼び出すときは……それこそ戦争の時だろうからな」

巻物を王の財宝の中へと仕舞い込み、疲れて地面にへたり込んでいる刹那たちの元へと向かう。

「よくやったな、極限に制限されているとはいえよく俺の分身体を倒せたもんだ」

「ハア…ハア…」

「ここまで出来れば向こうでも十二分にやっていけるだろう。テストは合格だ」

「あ、ありがとうございます……」

「アカン…も、もう駄目や…」

メフィストの言葉を聞くと同時に倒れ伏すネギ・刹那・木乃香。

「アスナたちは早めに空を飛ぶ手段を習得しておけよ。超々高度からの絨毯爆撃のような魔法を使われたらひとたまりもないからな」

「うっ！ 今日で痛感したわ…」

「今日はよく眠って体力を回復させておけ。あとこいつらを運んでおけよ」

それじゃまた明日な、とメフィストはその場を後にした。

side out

【メフィストside】

別荘で一晩過ごした後、飛行機に乗るため少年率いる白き翼は成田アラアルバ航空へと向かって行った。

「メフィスト、ついて行かなくてよかったのか？」

「一緒には行かないが俺もあっちには行く。だがその前に用を済ませてからだ」

さつき書いておいた手紙を学園長室に転移つと。

「茶々丸、俺とエヴァと茶々丸の服を必要最低限でいいから用意してくれ」

「承知しました」

さて、あとは家に誰も入れないように結界を張れば…

「おい、メフィスト。私達の着替えなんか用意してどうするんだ？」

「ん？ ああ、それはだな——」

「メフィストさん、用意が完了しました」

流石は茶々丸。

さつき言ったのにもう準備が出来たとは。

「完璧だ、茶々丸」

「感謝の極み」

「おい、メフィスト！ もったいぶらないで教えろ！」

「おっと、ゴメンな。この夏は旅行に行くことにした」

「旅行だと？」

「行先は魔法世界。エヴァの呪いを解呪してな」

「なっ！？」

そろそろどこか外に連れ出してやらないと暇死にってしまうかもしれないからな。

それに15年も労働してやったんだからこれぐらいは許せよ、じじい。

まあ別に許さなくてもいいがな。

「か、解呪…だがいいのか？」

「元々、俺の思惑に利用させてもらったただだし、そろそろ休暇を取ってもいいだろうよ」

「私、マスターと外に出られてうれしいです」

「茶々丸……」

「ケケケ、俺も連レテ行ケヨ、御主人」

「チャチャゼロ……リストラされたんじゃないのか？」

「イクラナンデモ酷クナイカ？」

自分の従者に向かって酷い口を聞くね、エヴァ。

「無駄話はやめてさっさと解呪して旅行と行こうじゃないか」

「あ、ああ！」

今ここに、マクダウエル家御一行は長期休暇を利用して魔法世界へ旅行が決定した。

この行動が魔法世界にどのような影響を及ぼすのか…それは神のみぞ知ることだとか知らないだとか。

第伍拾伍話 『いざいかん！ 魔法世界へ！』（後書き）

ハハハハ！

闇の魔法の治療法とか、現実世界でエヴァにも何か仕事があるっぽいとか、もうどうでもいいや！

エヴァがいないこの小説なんて魅力がガタ落ちだからな！

え？ 茶々丸？

やだな、この私が野菜坊主なんか茶々丸の裸を見せる訳ないじゃないか！

あといい訳タイム。

刹那と木乃香の魔改造の結果が今回登場しましたね。

木乃香のほうは陰陽師の技としてありそうな気がしますけどねえ

刹那のは…つつこまないで…お願いですorz

メフィストのスパルタンな修業方法のおかげで刹那はチートになりかけですな。

魔法も撃てるし剣術できるし…

第伍拾陸話 『やりたい放題ですね by茶々丸』

「フハハハハハ！ 闇の福音の完全復活だ！」

我らマクダウエル家は今現在、メガロメセンブリアのゲートポートの上にいる。

解呪もスムーズに終わり、エヴァのテンションがめちゃくちゃ上がっているがな。

「上機嫌になって…ああもう、可愛いな」

「こんな上機嫌なマスターは修学旅行以来ですね」

「ケケケ、歳ヲ取リスギテボケタンジヤネエカ？」

「やかましい！ 魔力供給を切って廃棄物に変えてしまっぞ！」

「チョ！ 久シブリノ出番ナンダカラモウチョット喋ラセロヤ、御主人！」

ぎゃいのぎゃいのと騒ぐエヴァとチャチャゼロ。

遊んでいる間に俺はこれからどこへ行こうか考えておくか。

「あの、メフィストさん」

「ん？ どうした、茶々丸？」

いざ考えようとしたところへ茶々丸が声をかけてきた。

「ゲートポートは1週間に1回なんですよね？」

「そうらしいぞ」

「それならなぜ我々はこちらに来れたのでしょうか？ 次にゲートが動くのはネギ先生方が利用する日なのでは？」

ふむ、良識派である茶々丸は気になるようだ。
エヴァはなんとなくわかっていそうだし、チャチャゼロは興味なさ
そうだがな。

「茶々丸、その答えはいたって簡単。たったひとつのシンプルな答
えだ」

「はあ」

「それはな……気合いでなんとかなるんだ！」
「なるほど……気合い、ですか」

ジャックではないが、まあなんとかなるもんだ。
ついでにステルスも完璧。

誰ひとり俺達がここにいと認識出来ていないはずだ。

「ありがとうございます、メフィストさん。また一つ、私は賢くな
りました」

「うむ、これからも精進しろよ」

「コラ、そこお！ 私の従者になに変なこと吹き込んでいるッ！？」

変な事とは失礼な！

案外、どんなことも気合いで出来るもんなんだがな。
まったく、偉い人にはそれがわからんものだ。

「不法入国を気合いだけで出来るなんて世界でもお前だけだ！」

「ええっ!？」

「わざとらしく驚くんじゃない！」

さて、そろそろここから離れるか。

認識障害をしているとはいえ、物事はそう都合良く思い通りにいか
ないのはよくあることだからな。

「出る、ヴィマーナ」

「これからどこに行くんだ？」

「まだ未定だが…まずは適当に魔法世界の空を駆け巡るか」

とりあえず進路は東へ。

俺もこっちはあんまり詳しくないからな。

20年前に暴れたただだし。

数日後、メガロから東に向けて爆走中に大きい街をみつけたのでそこで買い物を楽しむ俺達。

チャチャゼロは刃物が欲しいとねだり、エヴァは可愛い服をガン見して、茶々丸は料理本などを熟読中だ。

そんな時、街に配置されている大型テレビ——こっちでは魔法で空中にディスプレイが浮かび上がりニュースが放送されるが、いちいち説明が面倒なのでテレビとしておく——にとってもなじみのある顔が出てきた。

「なあエヴァ、熱心に見ているところ悪いんだが……あれを見てくれないか？」

「べ、別に買ってほしくて見ていた訳じゃないからな！／／／着てみたいとか考えているんじゃないからな！／／／」

「わかったわかった。いいからあれを見てくれ」

さつきまでエヴァが見ていた服は…12万Dp（ドラクマ）か。
値段的にはまったく問題ないのであとでこっそり買っておくとしよう。

「ちよっ！ゲートポートの破壊！？　ぼーやの奴、賞金首になっているぞ！」

「しかも30万Dpだ。それに刹那たちも賞金首になっているし…
…くつくつく、おもしろくなってきたじゃないか」

休暇と旧友に会いに来たというのに…なかなかどうして、退屈しない旅行になりそうだ。

「まさか、アーウェルンクスか？」

「さてな…その場にいなかった俺達はなんとも言えない。断定するのは早計だな」

「確かにそうだが…」

まあ9割ぐらいの確率でやつらだろうけどな。

予想通り面倒事に巻き込まれた少年達。

さてさて、俺達はどうすっかな…

「まあ考えても仕方ないか」

「助けてやらんのか？　刹那と木乃香はお前のお気に入りだろ？」

「なに、縁があればどこかでばったり会っただろうよ」

「ほう…して本音は？」

「探し出すのがメンドい」

先に謝っておくぜ、刹那と木乃香。

頑張って自力で少年たちと合流するなり仲間を見つけたしたりしてくれや。

「フン、酷い主人がいたもんだ」

「人生とは苦労を重ねただけ中身が濃い物となる、というのが俺の自論でな。修業もつけてやったしちゃんと生き残れるはずだ」

でももし木乃香が死んだらゴメンよ、詠春。

刹那が必死になって搜索すると思うから安心しておけ。

「メフィストさん、買い物が終わったので次の店に行きましょう」

「次ハモットイヤツヲ置イテイルトコデ頼ムゼ」

「オーケー。だがここで少し買いたいものがあるからお前達は先に行つてくれ」

さて、エヴァが御執心だった品物を買つてと…

ここの観光が終わつたらじゃじゃ馬姫のそこ行つて、その後ジャックの家に行くか。

「さあやってきました、ヘラス帝国は帝都ヘラス！いつものとおり隠密性は完璧！

どんな達人でもたぶん気付けないというなんちゃって魔法です！」

「誰に向かつて言っているんだ？」

「なんとなくはしゃぎなくなったんだよ」

数日後、観光を終えた俺達は帝都ヘラスにある王宮の屋根の上に到

着。

そこから人が通れる穴を作って侵入、じゃじゃ馬姫の気配を探りながら王宮内を散策中だぜ。

「おてんば姫はどこにいるのやら…」

「ちよつと待て！　これからヘラスの姫に会うのか！？」

「そうだけど…何か問題あったか？」

「大いにあるわ！　忘れているのかもしれないが、私達は解消されているとはいえ賞金首だぞ！　通報されたらどうするんだ！？」

ちよつと焦りながら詰め寄ってくるエヴァ。

だがそんな心配はいらんぞ。

「大丈夫だつて、昔からの知り合いだからな」

「なん……だと！」

「あんまり大声を出すな、見つかってしまうだろ」

「うぐっ！……後でじっくり聞かせてもらってからな」

何故に？

ただ知り合いに会いに来て情報を貰おうと思っただけなんだが…
まあ嫉妬するエヴァも可愛いしこのままにしておくか♪

「お、ここだな。邪魔するぞ、じゃじゃ馬姫」

「いきなり入ってくるとは…一体どなた、ぶうつうつうつうつうつうつうつうつ！」

「汚いぞ、第三とはいえ皇女だろうが」

俺に背を向けていたテオドラがこっちを見たたん、飲みかけのお茶を吹きだしやがった。

さすがはおてんば姫って訳だ。

それにしても…20年前はガキだったのに、今ではいい具合に育ったもんだ。

「久しいな、テオドラ」

「な、なんで貴様がここにおる！ メフィスト！」

「（ムカツ）おい、メフィスト…お前を呼び捨てにするこの女は誰だ？ 一体どういう関係だ？」

「ちよつと聞きたいことがあつてな。それとエヴァ、こいつは大戦時に顔見知りになった程度だ、名をテオドラ…長つたらしいから後は忘れてしまった」

「テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ！」

「おお、それだそれ」

えつと、バシレイア・ヘらすでデストロイギガレイズと。

なんで皇族つてのはこう名前が長いのかね。

書類に名前を書くときにいちいちメンドそうだな。

「メフィスト、この嬢ちゃん是谁だ？」

「ハン、聞いて驚くなよ。我が名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。誇り高き悪の魔法使いだ」

「……………ウソじゃろ、闇の福音は麻帆良で軟禁されているはずじゃ」

「ああ、それならこつちに来る前に解呪してきた」

「…戦争でもする気か、お主は？」

「いいや、ただの観光だ」

なんだつてこつ物騒に物事を考えるんだろうか？

これだから人間は面倒だ。

「ハア、まあよい。それで？ お主たちは何しにここに来たのじゃ

？」

「私はこいつの付き添いだから知らん」

「ちよっとお前に聞きたいことがあってな、ゲートポート襲撃の件だ」

問いかけるとテオドラは周りを見回して誰もいないか確認している。俺も気配を探っておくか……………問題無し。

「周りには誰もいないぞ」

「お主がそう言うなら確実じゃな。さて、ゲートポートの件じゃが…稼働している11ヶ所全てのゲートが破損。生き残っているのは廃都オスティアにある休止したゲートのみじゃ」

実質帰れる手段は今現在ではオスティアのみ、という訳か。

それにこの短時間で全てのゲートを破壊ってことはやはりアーウェルンクスたちのようだな。

1ヶ所だけ見落としたというのもあり得なさそうな話だし…さて、どうしたもんかね。

「放送されたナギの息子のことなんじゃが、たぶん嘘じゃろう。確証はないが…」

「だろうな、あの生真面目小僧がホントに実行犯だったら俺はあいっつに対する評価を改めなくてはならん」

「して、メフィスト。お主は真犯人に心当たりはあるのか？」

「それぐらいは自分で考えろ、俺は解説キャラじゃないんでな」
「ケチじゃのお」

めぼしい情報は入ってこなかったし…あの日、少年たちと会う予定だったジャックに会いに行くか。

「そういえばナギと言えば…」

「ん？ ナギが帰って来たのか？」

「そうではないが…ジャックの家がある、グラニクスじゃったかな、そこでナギ・スプリングフィールドという名を語って拳闘士をやっている輩がおるらしいぞ」

グラニクス…どこだっけかな？

あとで茶々丸に調べておいてもらうか。

「へえ…それは面白そうな話だな。映像とかあるか？」

「妾もさつき人から聞いただけじゃから持っておらんのじゃ。気になるのなら見に行ってみてはどうじゃ？」

「まあ大して予定もないし…そうするか」

それじゃ今日はもう夜だし、寝るとしよう。

ここを出ようかと思った時、従者らしき人物がやってきたので予定を変更。

「皇女様、そろそろ——」

「3人分の客室を用意しろ」

「かしこまりました」

魔眼を発動させて暗示を掛ける。

魔力抵抗値が皆無に等しいらしく、すんなり従者は暗示に掛かり部屋を後にした。

「おい、メフィスト！ どういう事じゃ！」

「気が変わった、何日かこの宮殿に泊まらせてもらっぞ」

じゃあな、と言い残しエヴァと茶々丸をつれて部屋を後にする。

チャチャゼロはというと、人と通り過ぎるたびに殺してえ殺してえと呟くのでエヴァが魔力供給を切ってバッグの中に押し込んでいた。

「お部屋はこちらとなります。何かご用がございましたらなんなりとご申しつけくださいませ」

「御苦労」

何日か滞在するに当たって不審がられないように、この宮殿内に俺達をテオドラの客だと勘違いする結界を張っておくか。

「不審がられないように結界を張っておくからお前らも安心してこの宮殿を使っていーぞ。数日間だけだがな」

「勝手に使っていーいのでしょうか？」

「なあに、ちよつとだけ借りるだけだ。それに折角こっちにきたんだから茶々丸も城の生活を味わっておくのもいいと思うぞ」

「はあ……」

「諦めろ、茶々丸。どうせバレないんだから思おう存分満喫させてもらおうじゃないか」

「マスターがそう言われるのなら……」

「方針も決まったことだし俺は風呂に入ってくるぞ」

ヘラスの風呂の戦闘力はいかほどのものか、見極めさせてもらおう（キリッ）。

どこに向けてキメ顔を向けているんだ俺は？

P・S・ 風呂に入っている時、エヴァと茶々丸が入ってきたのは驚いた。

あれがここに滞在しているときに一番衝撃を受けたぜ。

茶々丸の肌が人工スキンとやらに変わって水浴びも出来るようになったから試しに風呂に入ろうと思ったらしい。

うれし恥ずかしいイベントは内緒だな。

第伍拾陸話 『やりたい放題ですね by茶々丸』（後書き）

茶々丸がない原作展開について。

刹那と木乃香が茶々丸の探査の代わりに式神を飛ばしまくって頑張りますw
たぶん原作通りに人数が揃うはずw

番外編 『真・伍拾陸話』

諸君 私はエヴァが好きだ

諸君 私はエヴァが好きだ

諸君 私はエヴァが大好きだ

エヴァの顔が好きだ

エヴァの声が好きだ

エヴァの髪が好きだ

エヴァの性格が好きだ

エヴァの体型が好きだ

エヴァの服装が好きだ

エヴァの毒舌が好きだ

エヴァの罵倒が好きだ

エヴァの笑顔が好きだ

教室で 廊下で

屋上で 街中で

自宅で 別荘で

海上で 水中で

空中で 戦場で

私の視界に入る、ありとあらゆるエヴァが大好きだ

戦列をならべたエヴァの人形が刃物を擦らせながら敵陣を吹き飛ばすのが好きだ

空中高く放り上げられた賞金稼ぎが刃物でばらばらになった時など心がおどる

エヴァの操る「おわるせかい」が敵を粉碎するのが好きだ
悲鳴を上げて凍りつく地面から逃げ出そうとする敵を
完膚なきまでに粉々にしたときなど胸がすくような気持ちだった

高笑いをしながら愉快そうに魔法を撃つエヴァが好きだ
恐慌に駆られ逃げ惑う身の程知らずの敵を徹底的にぶちのめす様な
ど感動すら覚える

愉悅に浸りながらお仕置きをする様ななどはもうたまらない
泣き叫ぶ弟子達の前で私が首を切るしぐさをすると共にばたと
薙ぎ倒されるのも最高だ

身体測定を終えたエヴァが毎年のことなのに
自分の胸に手をやりハアとため息をつく時など絶頂すら覚える

Sっ気全開で滅茶苦茶にお仕置きされるのが好きだ
絶対に内緒にするはずだった秘密がバレて

鞭やら何やらを持ち出して拷問室に連れ込まれる様はととても
悲しいものだ

諸君 私はデレを、蜂蜜の様に甘いエヴァのデレを望んでいる
諸君 私に読み従う読者諸君
君達は一体何を望んでいる？

更なる甘話を望むか？

情け容赦のない 蜜の様な甘話を望むか？

妄想の限りを尽くし あらん限りの欲望に身を任せて ガムシロッ
プの様な甘話を望むか？

「^{エヴァ}幼女！ ^{エヴァ}幼女！ ^{エヴァ}幼女！」

よろしい ならば妄想だ！

我々は満身の力をこめて今まさに振り下ろさんとする握り拳だ
だが理性の狭間で幾重にも揺れ続けた我々には、ただのデレではも
はや足りない！

圧倒的なデレを！！ 今までに見たことのないほど強大なデレを！！

我が煩惱はわずかに108

ただの人一人分の妄想力にすぎない

だが読者諸君は一騎当千の妄想者だと私は信仰している

ならば我らは読者諸君と私で総妄想力100万と108の煩惱となる

理性を忘却の彼方へと追いやり、眠りこけている欲望を叩き起こそう

健全な精神を引きずり降ろし、身を焦がすほどの欲望を解放させよう

甘々の味を思い出させてやる

我々の妄想の権化を思い出させてやる

理性と理性の狭間には、常識人の哲学では思いもよらない感情があることを思い出させてやる

一千人の妄想戦士の戦闘団で世界を萌やし尽くしてやる

「『闇の福音と幻獣使い』作者より全読者諸君へ」

第二次「エヴァだいすき信者増大」作戦 状況を開始せよ

征くぞ
諸君

非實在青少年規制法反対だ！

「ハッ！」

ゆ、夢か…

最初は俺の意識だったのに、いつのまにか神の意志ぢくしやが乗り移っていたようだ。

しかし何だったんだ、あれは？

最近の俺って情緒不安定なんかね？

「それと…なんか頭がクラクラするな」

そついやこつて露天風呂か。

どうやら結構な時間、意識を失っていたらしい。

そのせいで少しばかりのぼせているようだ。

「だがこんな立派な風呂を経験する機会はありませんし…少し冷たい水を浴びればいいか」

そんな訳で露天風呂から室内の風呂へと移動する。

人払いも完璧なのでこの広大な風呂を俺一人で占領だ。なんとも気分はいい。

征服者になったようだ。

「風呂一つに俺は何を上機嫌になっているんだ？」

だがそんな疑問も忘却の彼方へと追いやる。

この言葉では表せないほどの広さと高級感あふれるこの風呂を俺一人で使用していることに意義があるのだ！ たぶん。

「メフィ——の自——手さは時々——な」

「です——い思い——るか。このよう——城は初め——の
で」

「ん？」

何やら話し声が聞こえてくる。

それも毎日のように耳に入るあの可憐な声……いやいやまさかな。
そんなベタな展開を今更のようにやられても困るってもんだ。

待てよ？ むしろ今更このようなイベントが発生するはずもなし。

だからこれはテオドラの姑息な計略だ！

おのれ……どうせワクワクしながら待っていたら、

「引つ掛かったな、アホ真祖！」

とか言ってくるに違いない。

絶対そうだ、あのじゃじゃ馬姫が黙って俺の我儘を見逃すはずがない。
い。

その手には乗らんぞ！

逆にこっちから出向いて水をぶっかけてやる！

ふはははははははははははははははは！

待っているよ、三十路熟女め！

「ふっふっふ、冷水を頭からぶっかけてやるぜ」

やっていることが小学生のような気がしてならないが、

気のせいだ！気のせいだと思いたい！気のせいであってくれ…

「だがそれを気にしないのがメフィスト・クオリティだ！」

左手に冷水を、右手にお湯を。

さらには腰にタオルを装備すれば完璧。

これが入ってきたテオドラにお湯をぶっつけた後、冷水をお見舞いしてやんよ。

「ん？ 誰かいるのか？」

「そりゃ！」

空中に飛び上がりお湯↓冷水の順番で侵入者に攻撃。

ざまあみるテオドラ……と思ったら、アレ？

「なんでメフィストがここにいるんだ！／＼ ってあぶな！」

「ほ、本物だとおおおおおおおおおお！」

自分の動きを止めようとするがもう遅い。

発射台はもう狙いを定めて得物^{みず}を投擲していた。

エヴァは動揺して動くよりも、手に持っていたタオルを俺に裸体を見られまいと身体の前に持つてくることを優先。

その結果、水が直撃することになる……と思いきや、茶々丸が盾になった。

「お怪我はありませんか、マスター？」

「どつちにしろ水だから問題ない。でもタオルが水浸しだ」

口ボなのに茶々丸は濡れても大丈夫なのか？とか、

エヴァに水をかけるような真似をしてすまなかったとか、

言わなきゃいけないこともあったが、今の俺の眼に映る聖域、否、
アヴァロン
全て遠き理想郷から入ってくる視覚情報に心を奪われていた。

「メ、メフィスト／＼　まず聞きたいのは、何でお前がここに
いるのか？ということなんだが…／＼」

さつき俺が愚かにも水かけをしたせいで、エヴァの持っているタ
オルが濡れている。

まあそこはさつき言ったな。

だが重要なのはここからなのだよ、ワトソン君。

濡れたせいでタオルがエヴァの身体へと張り付き、その魅力的な体
のラインを強調しているのだ！

しかもだ、ちょうど良い位置に張り付いたらしく、タオルの隙間か
らはみ出る太ももの絶対領域といったら………あば
ばばばばばばばばばば。

チラリズム効果により更に萌力が上がったエヴァ。
その萌力といたたら…戦闘力に換算すること53万。
しかもあと2回変身を残している！　たぶん。

この場でエヴァにかける言葉。

それは言わずもがな、全人類（男）が言っであろ言葉。

それは短い単語なれど感情を込めれば下手な世辞なんか圧倒的に打
ち砕く言葉。

「ふっ、ふつくしい………」

本当は美しいと言おうと思ったが、あまりの可憐さに呂律が回らな
かった。

だがそれも仕方がないことだろう。

シスコンでありロリコンである同士諸君はこの気持ちをわかってくれるはずだ。

それほどまでにこの扇情的なエヴァの可愛さと言ったらもう！

しかも俺に見られているという状況下にいるため、頬を赤く染めながらもじもじしている。

な、なんという事だ……萌力が106万へと上がるだと！

真祖の姫君は化け物かッ！（可愛さ的な意味で

「な、なあメフィスト／＼／＼ そんなにジロジロ見られては……は、

恥ずかしい／＼／」

「がふっ！」

「吐血！？」

ま……まさか上目遣いまでくるとは。

お、俺の心の中にあるスカウターでも……もはや計りしれない萌力だ。あまりの威力にスカウターが暴走してしまう。

も、もしやここが……かの桃源郷だとも言つのか？

「ちよっ！ 大丈夫か！？」

「エ……エヴァ……一つ頼みがあるんだが……」

「ま、まあ内容次第では聞いてやらん事もないが」

ならば……桃源郷へと行くため……俺は自滅を覚悟で挑むことにしよう！
たとえこの身が朽ち果てても……
更なる萌えを見るために！ 星の屑成就のために！
アヴァロン

「ひ、膝枕を……してくれないか？」

これぞ男の、そして漢のロマン！
だが哀しいかな。

ロマンとは叶わないから皆が挑むものなり。

俺の言葉を聞くなり0・001秒後にエヴァは行動を開始していた。

「この状態でできるかあああああああああああああああああ
ああああああああ！！」

「あべしっ！」

背後に「トトトトトトトトトトトトツ!」と擬音がでてきそうな気迫で俺の全身に拳のラッシュを繰り返すエヴァ。

その速度はこの俺の眼でさえも見切ることができないほどの速度であつた。

だがその行動のおかげでタオルが…あの見えそうで見えなかった絶対領域が！

「わ、わが生涯に……一片の悔いなし！」

そこで俺の意識は真つ暗な闇へと落ちていった。

続く.....ことはな
いよ。

「おい茶々丸、何をしている？」

「いえ、マスターがして差し上げないようですので私がメフィストさんに膝枕をしようかと」

「ぬ…確かにさっきは衝動的にああ言ってしまったが…やはりここは私がするのが自然だよな。よし茶々丸、私と代われ！」

「お断りします」

「なっ！？ マスターである私に逆らうのか！？」

「マスターの嫌だという意見を尊重しての行動です。決して羨ましいとか妬ましいとか、そういった感情はありません」

「嫉妬以外の何物でもないわ！ このポケロボめ、巻いてやる！巻いてやる！」

「あ、ああ！ いけません、マスター！ そ、そんなに巻いては…
…！」

番外編 『真・伍拾陸話』（後書き）

誰もが一度はやろうと思ったはず！

少佐の演説はいい…妄想の応用がきくからな。

実はこっちが本当の伍拾陸話だったりする可能性がなきにもあらず。

第伍拾漆話 『ジャック!あとは任せた!』 (前書き)

サクサク進もう!

メフィストが壊れた
なんでだ?

第伍拾漆話 『ジャック！あとは任せた！』

『まき絵さん、ゆうなさん！ 見てますかー！？ 僕です、ナギです！』

テレビを見ていると不快な気分になる電波を浴びた。

なんだ、これは？

まさか帝国の最新兵器か？

特定の人物に向けて攻撃する電波攻撃…そう考えればこの不愉快な顔も理由が付くってもんだ。

あつ、隣にいたエヴァがお茶を吹いた。

「ぼ、ぼーやのやつ何をしているんだ！？」

「ネギ先生…ですよ？ これって」

「マジで少年が剣闘士なんてやっているとはな…しかもナギの名を語って」

なにこれ、超ウケるんですけど。

「面白そうだし見に行かないか？」

「ふむ…まあいいだろう。どうせ然したる用事もなし、ちょうどいい暇つぶしになりそうだ」

「私は問題ありません、マスターとメフィストさんについていくのみです」

「よし、ならば善は急げだ」

テオドラには世話になったと手紙を置いておけばいいかな。それじゃさっさとヴィマーナを出して見に行くとうかが。

…
…
…

『瞬・殺！ ナギ・コジローチーム、驚異の14連勝！』

闘技場についたとき、もう試合は終わっていた。
どうやら少年たちが実況通り瞬殺したようだ。

「この感じ…どうやら本物だな、あつちは犬ところだろう」
「やはりか、それでメフィスト？ ぼーや達と会うのか？」
「いや、会わないが」

俺達休暇中だよ？

先生はおるか師匠も休業中だよ？

どこの世界に休みを返上して働くアホがいるんだよ。
俺は絶対にイヤだね。

「む？ この気配…おいおい、何の因果だこれは？」

なんであいつがここにいるんだよ。

10年前から引き籠もりやってるらしいじゃないか。
まったく、羨ましい。

「何かあつたのか？」

「かの英雄、ジャック・ラカンがこの闘技場にいる」

「なあ！？」

「この後会いに行こうと考えていたが…手間が省ける」

左方向に50mほど行ったところにジャックの気配を感じる。
とりあえず酒場に拉致しておくか。

「よお、ジャック！ 久しぶりだな！」

「うお！ この俺様に気付かれないとは……って誰かと思ったたらメフ
イストじゃねえか！ ハハハ！ 久しぶりだな！」

「とりあえず酒場に行こうぜ」

「もう影に吞まれているじゃねえか、俺に決定権はないだろうが」
「分かっているじゃないか」

それじゃ人気のない酒場に移動つと。

郊外に位置するここはまったく言っていないほど客足がない。

こんなんでよく経営が続くものだ。

「まさかエヴァもこっちに来ているとはなあ……呪いはどうしたんだ
？」

「メフィストが解呪したぞ、筋肉ダルマ」

「相変わらずだな、メフィストは！ いいのか？ どうせ麻帆良の
偉い人に許可を取ってないんだろ？」

「俺が他人の顔を気にすると思っているのか？」

「ガハハハハ！ 微塵も思っていないぜ！」

もつと酒持ってこーい！と店主に叫ぶジャック。
相変わらずの態度なので昔に戻った気分になる。
あゝ、また紅き翼とケンカしてえな。

「それでよ、メフィスト。ちょっとくら手伝ってほしいことがあるん
だが」

「珍しいことがあるもんだ。まあいい、言ってみろ」

「ああ、実はな―――をして欲しいんだ」

「ほう…なかなか面白そうな提案じゃないか、乗ってやろう」

「そりゃ助かるぜ！ 他の奴に手配するのが省けた！」

「ただしちゃんと面倒見るよ」

「任せておけ」

くつくつくと俺とジャックが笑い合う。

そこへ蚊帳の外になっていたエヴァが何の話だと聞いてきた。

「なあに、ちよつとしたイタズラだ」

「ただの面白いたくらみだぜ」

「フン、つまらん…茶々丸、もっと酒を持ってこい！」

「かしこまりました」

「おい、エヴァ、幼女のくせにそんなに酒を飲んだらぶっ倒れるぞ」

「誰が幼女だ！ いいだろう、この筋肉ダルマア！ 表に出ろ！」

ジャックとエヴァがじゃれ合いを始めるようだ。

大戦の英雄の気やら真祖の魔力やら飛び交っているのに…この店主は眉ひとつ動かしてねえ。

あの表情は…数々の修羅場をくぐっていないと出せない余裕の表情だ。

まさかこんな辺境でこんな大物と出会うとはな。

「店主、止めなくていいのかい？」

「バカ言わないでください、お客さんよ。私程度の者が止められるとでも？」

「その割には表情が余裕そうだったんでな」

「めっそもない…真祖相手では縊り殺されるのが目に見えていますのでね」

しかもこいつ…俺達が真祖だと気付いてやがる。
魔力を察知できないようにしているってのに。
マジで何者だよ、こいつ。

「やはり只者ではないな…まあいい、この店で一番上等な酒をくれ」
「こちらになります」

さて、夕方になるまでここで飲み明かすでしょう。

side out

【ネギside】

必殺技……やっぱり僕に足りないのって必殺技なのかな。

「必殺技がなんだって？」

「うひいっ！」

こ、声に出ていたのかな？

恥ずかしい！

「くくく、恥ずかしがるこたねえよ。当たれば必ず殺す技だろ？
男なら必殺技の一つや二つ、持っているのが当然だ」

まああいつは百個ぐらいありそうだなと笑うフードを被った男。
あれ？ この人……どこかで見たような……

「俺が教えてやらんこともないが…そうだな。

必殺技一つにつき授業料50万Dρ、考案料20万Dρ、版権料10%頂こう」

「な……」

これっていわゆる悪徳商法！？

「いきなり何なんですか、あなたは！？」

「今は俺より自分の頭上を心配しな、有名人」

頭上？ ハッ！

何かが飛んでくる気配がして咄嗟に左に身体を動かす。

だが完璧に避けられずに右頬が少しだけ切れてしまった。

「命拾いしたな、忠告料は千Dρだ」

謎の男の悪徳商法に文句を言ってあげたいが、先に攻撃してきたほう先だ。

「誰だ！？」

振り向くと、そこには真っ黒な服、真っ黒のマントをした人が…

そこまではいい、魔法世界に似そな服装だ。

だが、問題はその顔だ。

12歳ぐらいの年齢、^{マスター}師匠のような金髪に、顔立ちは…忘れもしない、一番おつかない師匠であるメフィストさんにとてもよく似た顔をしていた。

「ついてこい、スプリングフィールド。ここはいささか狭すぎる」

「待つ！　く！」

待てと言おうとしたが、影の槍が飛んできて急いで避ける。
メフィストさん似の人は近くの建物の上へと飛び上がっていったのでそれを追う。

「我が名はオリアス・マクダウエル。我が父君と母君の無念を晴らすため参上した次第」

「マクダウエル！？　メフィストさんの親戚何かですか？」

「父君の名を口にするなア！」

「くっ！」

メフィストさんの名を出したとたんに槍が数十本飛んできてくる。

障壁貫通力を付与されており、いとも簡単に障壁を抜かれて脇腹を槍が掠る。

「おっと、ついキレてしまった…まあいいか、それじゃア！　殺し合おうぜ！　スプリングフィールドオツ！」

無表情だったオリアスさんの顔に突如、満面の笑みが浮かびこちらに飛んできてくる。

しかも笑いながらだから……めっちゃくちゃ怖い！

「はああああああああ！」

魔力を解放し身体強化を施して迎え撃つ。
事情を聞くとか、説得とかは後回しだ。

s i d e o u t

最高にハイ！ってやつだアアアアハハハハハハハハハハハハ！

「いくぜエツ！ 『闇の吹雪』！」

「なっ！」

いきなり「闇の吹雪」を使う俺に驚く少年。

「固定概念だな、スプリングフィールド！」

影の魔法だけを使うと思ったら大間違いだ、ゼエ！」

正面からは「闇の吹雪」、左右、背後からは影の槍。

さあて、どうやってこれを防ぐ？

そのまま見ていると、避けられなかったのか直撃した。

「あん？ なんだ、これで終わり…後ろかア！」

後ろに槍を飛ばすと、そこにいたのは少年の精霊^{デコイ}だった。

まさか、さっきの精霊^{デコイ}だったことか？

だとすると…

「上か！」

上を見ると、もうすぐそこまで迫ってきている少年がいた。

「『百の影槍』！」

「ッ！ 解放！ 『断罪の剣・未完成』！」

槍を百本作りだして突き出すが、「断罪の剣」で粉碎される。

そしてそのままもう一回解放をして「桜華崩拳」を帯びた右手で俺の顔面に拳を突き出した。

「ぐっ！ なめるなアッ！」

左の爪でやつ右手を下から切断、右手で奴の腹を狙って突き出すが、やや下に軌道をそらされる。
だが奴の左腹をえぐった。

「ハッハア！ 俺の勝ちだ！」

「ぐっ！……解放！」

またもや解放して「桜華崩拳」をしてくる少年。
対する俺は爪で迎え撃つが、

「くつく、なかなかイイ見世物だったが…この勝負、俺に預かせるや」

ジャックが出しゃばってきて止められた。

そっぴやあいつが出てきたら大層驚けっっていたな。

「なっ！？ 貴様は紅き翼^{アラルブラ}の、千の刃のラカンか！？」

「アラるぶら？ 何だそりゃ、知らねえな。俺がそのアラ何とかの面子ならどうだっただ？」

「ならばこんなザコに構っていないで、貴様を殺す！」

槍をジャックの顔面に向けて飛ばすが、簡単に受け止められる。
ま、そりゃそうだ。

じゃあ次は本数を30本ぐらいにするか。

「くたばれ！」

「へっ、アデアット」

今度は「千の顔を持つ英雄」を使ってきたぜ。
困った困った。

さて、適当に驚いておけばいいか。

「ぐ、理不尽な！　それが如何なる武具にも変幻自在・む…なんとかの宝具と名高き…」

「おうよ、今日は見料特別サービス。これが…アーティファクト」
千の顔を持つ英雄』だ！」

その後、ジャックの剣が何個か飛んできて床に縫い付けられてしまった。

そしたあいつは飛びあがって……おいおい、斬艦剣を出そうとしてないか？

「必殺！　斬艦剣！」

ジャックじゃないが気合い防御！
それじゃそろそろ引き際だな。

「これでは分が悪いので引かせてもらう。だが英雄よ、貴様の命は必ず貰い受ける」

「そんなに俺と闘いたいなら、まずは俺の弟子のこいつに勝つてもらおうか」

なるほど、そういうことか！
計ったな、ジャック！

面倒事を引きつけてくれてありがとよ！

「場所は闘技場、正式な拳闘試合でな」

「よかるう……その首洗って待っている」

それじゃ転移転移っと。

少年にまだ何かジャックが言っているようだが…放っておくか。

「おい、メフィスト！　どういうことだ!？」

合流地点に戻ると、待ち受けていたのは烈火のごとく怒っていたエヴァだった。

「どうって…なにが？」

「私達の子供だとかなんとか大ホラ吹いたことだ！」

「いやあ……酒の勢いって怖いねえ」

なんか色々と口走ってたなあ、俺。

今度追及されたらどうしようか。

いつそのこと暴露しちまってもいいかね。

「お・ま・え・ってやつはあああああああ！」

「俺との子供は嫌か、エヴァ？」

「なっ!／／／　べ、別に嫌な訳じゃない……／／／　どちらかと

言つと嬉しいが…それでもいきなりというのはどうかと私は…／／

／　だ、だがクラスメイトの奴らの耳に入ったらなんと言われるか

……」

赤くなったり青くなったり忙しい奴だな。

でも…俺も反省しよう。

もうちょっとで殺つてしまつところだった。

いかにいかに、つい殺戮衝動に駆られるとは…反省していつペン逝くか。

「茶々丸、エヴァの面倒を頼む。まだこの状態が続くと思うからな」

「かしこまりました、メフィストさんはどちらへ？」

「なあに、今の俺はちよつと血の気が多いからな。少し頭を冷やしてくる」

人気がない場所に行き、剣を心臓に突き刺す。

大量に抜けていく血と共に昂ぶっていた殺戮衝動も抜け落ちていくようだった。

「戻ったぜゝって、何してんだオメエ？」

「ちよつとな、簡単に言えば血を抜いている」

ここらへんで止めて再生をするか。

「よし、これで元通りつと」

「便利だねえ、流石は真祖。坊主の方は無事のようだ」

「そうか、少しやりすぎてしまった感があるが…」

「ちよん切れた腕も治癒術士がきちんとくつつけるから問題ないだろ」

そついう問題ではないんだがな。

いきおいに身を任せるのには気をつけねば。

「まあいい、あいつを育てるのか？」

「ああ、ナギの息子だし興味がわいたんでな。少しの間だけだが…不味かったか？」

「いいや、何も問題ない」

これで心おきなく師をやめられるぜ。

向こうに戻ったらまだ何か言いそうだが、こっちにいる間はジャックに丸投げしよう。

「そっぴや拳闘がどうか言っていたが、どうするんだ？」

「オスティア終戦記念祭で拳闘大会の全国決勝が開催されるんでな。舞台も丁度いいし俺のつてでお前を潜り込ませておくぜ」

「おいおい、この俺に顔を魔法世界に晒せって言うのか？」

「こうして目の前に立つても時折お前がメフィストと解らなくなる認識阻害を使っておいてよく言うぜ」

確かに超高レベルのを使つてはいるがな。

拳闘か…俺が少年&犬と闘う？

「まず話にならんだろ」

「俺が修業をつけるんだからまだまだ伸びるぜ」

「ふむ…そこまで言うなら乗ろう。どうせ暇だからな」

オスティア終戦記念祭か。

とりあえずオスティアに行ったら全域に認識阻害の結界を張っておくしよう。

そうすれば誰も俺が賞金首であったメフィスト・マクダウェルだと気付けない。

「開催日は？」

「約1ヶ月後だ」

「了解した。開催する頃にはオスティアに入ることでしょう」

1ヶ月…。

その間に用事をすませられればいいのだがな。

「ん？ どうか行くのか？」

「ああ、ちよつとメガロの元老院に用があつてな」

それと調査もな。

あそこつて無駄にセキュリティ高いから面倒なんだが。

まあいい、精々防壁の中で肥え太りながら待っているよ…盲碌ジジイ共。

第伍拾漆話 『ジャック！あとは任せた！』（後書き）

これで晴れてメフィストは脱師匠となりましたとさ。
あとは筋肉ダルマがやってくれるぜい！

カゲタロウ？ 誰それ、おいしいの？

第伍拾捌話 『オスティア終戦記念祭、開幕』（前書き）

PV500万、ユニーク50万、総合評価7000突破……！？！？

ま、まさかここまで来れるとは思わなんだ……

夢落ちとかやめてくれよw

第伍拾捌話 『オスティア終戦記念祭、開幕』

久しぶりに諜報活動をした。

相手はメガロメセンブリア元老院。

なんて言ったかな…確か髪型がキモいリッカーって奴と、ヤクルトだったか？

20年前に知り合ったあいつらが元老院議員をやっているようだったが会う気はないので接触はしなかった。

それにしても…さすがは魔法世界の半分以上を支配するメガロの最深部。

この俺が侵入にてこずる程の防壁をいくつも発見したもんだ。

純粋な防壁から対魔族の防壁などなど。

3日ほど掛かったがとりあえず侵入は成功した。

猶予は約1ヶ月。

オスティア祭までに6年前の少年の村襲撃のときの黒幕、または関係者を洗い出すのが今回の目的だ。

俺に齒向かうことがどういう事か、屑どもの脳髓に刻み込んでやらんとな。

エヴァには悪いがこの1ヶ月は一人で行動させてもらうことにした。これはただの私怨、それにバレて面倒なことになってもいいようにな。

面倒だった、ああ非常に面倒だった。

人数がいすぎて無関係の奴もいるようだから、簡単に皆殺しにするわけにもいかなかったし…。

黒いやつの絞り込みが思ったよりも難航し10名程度に絞り込んだと思ったら、もうそろそろオステイア祭が始まる頃になっていた。

無視してもよかったがジャックと約束したからな。

それに少年たちの出来をみたいし。

“エヴァ、聞こえるか？”

“メフィストか、用事はもういいのか？”

“本当はよくないが先約があるからな。これからオステイアに行くぞ”

“了解だ、今からそっちに転移するが大丈夫か？”

“大丈夫だ”

少しすると俺の影からエヴァと茶々丸が出てきた。

「それじゃオステイアに飛ぶぞ」

「ここから飛べるのか？」

「ジャックの影に飛べば大丈夫だろう」

転移転移つと。

.....

…
…

転移すると、そこにはジャック・少年・ロリ長谷川がいた。

「よお、ジャック。約束通り来たぜ」

「誰ですッ!？」

「坊主、今はこっちに構っている暇はないんじゃないか？ それとこいつは敵じゃない」

ずぶずぶと音が出そうな雰囲気を出して出てきた俺達をみて驚くが、どうやらまた面倒事に巻き込まれているようだった。

そのまま見ていると、紅き翼アラブルが使っていた飛行船が飛んできてゴキヘッドが出てきて、下等動物が少年の杖を投げてよこし、少年と飛行船は飛んでいった。

「それでおっさん？ この人たちは誰だ？」

「それじゃちよつとだけ認識障害を切るか」

「なっ!？ なんてあんたたちがここにいるんだよ!？」

認識障害を切ると長谷川が驚いて声を荒げる。

「休暇だ」

「いつまでもあんな監獄に縛られる私ではないんでな」

「こいつとは昔からの友でな。安心していいぜ」

「それよりジャック、どういう状況か教えてくれ」

今一つ解らなかったさっきのことこそそうだが…なにやら闇の魔法特有の魔力を少年から感じ取った。

エヴァも気になっているらしく、ジャックに聞いたそうにしている。

「あのあと修業をつけてやって闇の魔法を習得、さっきのは坊主の仲間が危なくなっただけらしいぜ」

闇の魔法を習得……だと！？

ちっ、失態だ。

まさかこいつにあれを習得できる環境を用意できるとは。

「お、おいメフィスト？ 俺の気のせいかな……なにやら殺気が膨れ上がっている気がするんだが……」

「フッ、ジャック…… やつちまったものは仕方がない、だからこれからすることはただの腹いせだ」

「な、なんか右手が光っているんだが？ え、そんなにまずかったか？」

「よくも面倒事起こしてくれたな、ゴラァ！」

大きく右手を引き、擦じるようにして殴り付ける。

するとジャックは空の星になるため上空へと飛んでいった。

「えっと、メフィスト先生……なんですよ？」

「そうだぞ、長谷川」

「つつこみたいことがたくさんあるが、今は一つだけ……おっさんはどこに飛んでいった？」

「今頃ヘラス領の上空を超えるはずだ」

あと5秒以内にここに帰ってくるぜ。

魔法世界を一周してな。

するとさっきまでジャックがいた場所にドゴォン！と音を響かせて後方からジャックが飛んできた。

「いつて、俺様じゃなかったら死んでいたな」

「フン、むしろそれくらいで止めてやった俺に感謝しろ」

「おい、筋肉ダルマ。本当に坊やに闇の魔法を教えたのか？」

「ああ、教えたぜ」

さつき見たところ、まだ吞まれてはいないが…使い続けるうちに遅からず浸蝕されていくだろう。

「エヴァ、完全に吞まれたらどうなる？」

「人間が使ったことは一度もないから何とも言えないな。どういふふうになるか見た後じゃないと判断できん」

「ちっ、あのガキには闇が巢食っているから必ず吞まれるぞ」

「どうにかするとしてもこっちでは本格的な処置は無理だ。あれ関連の書物は別荘に保管しているからな」

「なんか雲行きが怪しくなってきたが…まずかったか？」

アホジャックが首をかしげながら聞いてくる。

ヤバいと思ったなら教えんなよ。

「まだどうなるかわからんが…人間が耐えられるものではないと言っておこう」

「やっぱりか…まあなんとかなるんじゃない？」

ああ、もう！この阿呆がッ！

面倒事ばかり起こしやがって！

だがまあ、どうせいつか教えることになっていたし…予定が早まったと頭では理解しておこう。

納得はしていないがな。

「さつき一目見たところでは大丈夫そうだし…ひとまずは様子見だ」
「んじゃあそのことは任せるぜ」
「一片死んどけ、筋肉ダルマ」

………

………

…

しばらくすると少年と愉快な仲間達が帰ってきた。
還ってくるなりアスナがアホみたいな癪癪を起こし、それを長谷川が宥める。

その光景をジャックと一緒に隅で見ていると刹那と木乃香がこつちへやってきた。

「あゝ！ メフィストはんとエヴァちゃんや！」

「まさかこちらで会えるとは思いませんでした、メフィストさん。
エヴァンジェリンさんも」

「ほお、我等の認識障害を破るか。流石はメフィストの弟子だ」

「何！？ メフィスト、お前こんな可愛い嬢ちゃんを囲っていたのか！？」

「人聞きの悪いこと言うんじゃないぞ！」

「ぶげっ！」

ぬああああああああああああああ………とドツプ
ラー効果を出しながら島の外へ落下していくジャック。

「ちょ！ ラカンはん！？」

「ひ、人殺し！？ た、助けなくては！」

「なぐんてな」

刹那が翼を出して助けに行こうとする前に虚空瞬動で戻ってくるジャック。

からかう為だけにこんなことするとは…相変わらずいい性格してるぜ。

「と、とりあえずメフィストさんにはアラアルバ白き翼の残りのメンバーの捜索に協力していただきたいのですが…」

「ちよつとだけ助けてくれへん？」

アホジャックを放っておいて俺に頼みごとをしてくる刹那と木乃香。だが残念だったな、師匠の役職は休業なのだよ。

「断る、俺達はこっちには休暇で来ているからな。働く気はない！」

「やっぱりか……どうせやってくれるとは思ってへんかったわ」

「ダメ元で言ってみましたがやはり駄目でしたね、お嬢様」

「だがよくこれだけ集まったもんだ」

称賛を贈るつもりだったが、俺の言葉を聞くと刹那と木乃香の顔に影が出来る。

しかも重苦しい空気を両肩に背負って地面に何か書いていた。

「せやな…よく頑張れたよ、ウチら…」

「そうですね、お嬢様……フフ、フフフフ」

「なんか空気が重いぞ」

助けてエヴァ、と視線を送るが無視された。ジャックは……助けを求めたら負けだな。

「あゝ…なんでそんな重苦しい空気を見に纏ってんだ？」

「フツ…隠さなくても結構です。これも修業なんでしょう？　だから茶々丸さんをこちらにつけなかったのでしょうか？」

「は？　茶々丸？」

「なんで茶々丸が出てくるんだ？」

「せやせや…おかげで大変だったんやで？　せつちゃんと同流してからめっちゃ頑張ったんや。ウチらに何かご褒美があってもええぐらいになあ」

「だから何の話だ？」

「何って…^{アラアルバ}白き翼メンバーの搜索ですよ。茶々丸さんがいればバツチをリーダーで搜索してすぐに見つけられたのに…おかげで私たちが式神を飛ばして探し出したんです」

「おお！　そういやそんな機能があったことをすっかり忘れていたわ！　てことは…この広大な魔法世界全土に式神を飛ばしたってことか？　我が弟子ながら頑張るな。」

「まさかそんなアナログ的な方法で搜索するとは…デジタルよりアナログのほうが優れていると証明したいのか？」

「だがな、今のご時世は無理だろう。」

「オール電化に、アナログ放送よりデジタル放送、人間をリストラして機械に任せたりなど…」

「ストップです、メフィストさん。その話題は色々危険です」

「何故だ？」

「何故でもだ。それ以上言うと偉い人を敵に回すことになる」

「ぬう…」

「触らぬ神にたたりなしやな」

さらっと怖い事をいう木乃香。

マジかよ…さっきの話のどこにたたられる要素があるってんだ？

「つと話が逸れたな。とりあえず、よくやったな二人とも」

「「あつ…」」

ご褒美が欲しいとか言ってたけど、今は用意できないので二人の頭を撫でてあげる。

すると嬉しそうに笑ってくれた。

俺が言うのもどうかと思うが…中学生って欲なさすぎねえか？
まあいいや、満足してくれるならな。

「むう~~~~~……………」

訂正、こっちに嫉妬し始めた嬢ちゃんを発見。

なんだってこう…頭撫でただけなのに嫉妬するかね。

まあそのしぐさも可愛いんだが。

俺は二人から手を話してエヴァの方に近寄る。

「何をそんなに不機嫌になっているんだ？ ん？」

「べ、別に不機嫌になんかなってらん！ ただちよつとだけムカついただけだ…」

エヴァよ、それが世間一般で言う嫉妬なんだが…。

この嫉妬癖は昔からかわらん…何があってもエヴァが1番だといつも言っているのに。

まったく、しょうがないやつだ。

「あんまり嫉妬するな、俺の気持ちは昔も、今も、未来も変わらない」
「ぬ…理解しているが気に入らんこともある」

同じように頭を撫でてあげる。

まだ何か不満そうだが、一応は機嫌を直してくれたようだ。
まったく、とてもじゃないが600歳に見えん。

そついや明日からオスティア終戦記念祭らしい。

拳闘大会のために認識阻害の結界をこのオスティア全域に張って
おかないとな。

それと少年が「オリアス」について聞いてきた。

だがそんな簡単にネタバレはしない、なぜならつまらないから！
ジャックにも聞いていたが、やはりあいつもはぐらかしていた。

人間をからかうって、楽しいな

翌日、オスティア終戦記念祭が開催した。

拳闘大会のほうはジャックの権限を使って入り込んだ。

いちいち地方で権利を取ってくるのはめんどくさいからな。

エントリーは俺一人。

そんな俺を舐め切ってつつかかってきた敵は一撃で沈んでもらった

……地面の下にな。

やはり弱っちい奴らばかりだ。

どいつもこいつも歯応えがなさそうで飽きそう。

「おいジャック、つまらなかったからテコ入れしろ」

「ハハハハ！ お前を満足させるなんて紅き翼アラルブラでも無理だろうが！」

ガハハハと笑うジャック。

ちなみに俺は、いくら認識障害が効いているとはいえ人間がこつた返している街に行きたくないので町はずれでジャックと、なぜかいる木乃香と話している。

エヴァと茶々丸は祭りを見たいらしいので別行動だ。

「？ メフィストはん、拳闘大会に出てるん？」

「しまった…まあ木乃香ならいつか。そうだ、ジャックの頼みで拳闘大会に出ている」

「誰もかなう訳あらへんやないか」

「なんだ、解っているじゃねえかお嬢ちゃん。いくら全国規模の試合とはいえこいつに勝てる奴がほいほい出てくる訳ねえぜ」

実につまらん。

こんなことならこいつもエントリーさせておくんだった。

そうすりゃ多少は楽しめるんだが…まあifな話を言っても詮無きことか。

そんな無駄話をしていると、少年のペットである淫獣がやってきた。なんでもアーウェルンクスが出てきたらしい。

「ええっ！？ ネギ君たちの所に悪の首領が！？ 大変や――」

「なるほど、アーウェルンクスか…」

「おうよ！ そういう訳だからよ、おっさんに真祖の旦那も出来た

「手を貸して——」

「やだね。言っただろ、俺は俺のためにしか闘わねえ」
「断る。興味ない」

俺とジャックは即座に断る。

あいつは面倒だからで、俺は興味ないから。

だがそんな態度が宜しくないようだった、木乃香の怒りゲージが溜まっていく。

「ラカンはんはメフィストはん！」

「ん？ どうした？」

「おう？ お嬢ちゃん？」

むくれた顔をする木乃香。

「二人のアホ——ッ！ いけずうっ！ 友達の子供が危険なんよ！
なんで素直に助けにいけへんのぉ！？ めっちゃ強いくせに——っ
！」

どうも助けにいかない俺達に怒っているようだが…猫ミミをつけているせいでどうも緊張感が湧いてこない。

むしろ真面目に聞こうとすると、木乃香の猫ミミ姿が様になっていて…素直になろう、可愛いんだ。

そんな俺の心情を知らずに木乃香は話を続けた。

「それにあのフェイトゆう子がラカンはん達の敵の生き残りなら、このおシリはあんたらのおシリやんかー！ 自分のおシリをネギ君に拭かせてカッコつけても全ッ然カッコよくあらへんえ！ 自分のおシリは自分で拭かなアカン——っ！」

「ワハハハハ！ おじさんはカッコ悪くてもいいよーん！」

尻拭いのことか？

どうやらジャックは色々と喋らずに少年に押し付けたようだ。

「わかったよ、ちょっとただだぞお嬢ちゃん」

「あつ……！」

「請求書はお父様に送つところ。500万……と」

「ええ——ッ！」

ッ！ それを見逃す俺ではない！

「おいジャック！」

「メフィストはん……メフィストはんから何か——」

「俺の分も書いておけ！」

「わかったぜ！」

「……………アカン、ウチじゃこの二人を止められへん」

「同情するぜ、このか姉さん」

タダ働きはご免だからな。

向こうに帰ったら請求しよう。

ジャックが行く気になったので淫獣が案内をしようとする。

だが行く先にネコミミとデカツノの二人組の女の子が待っていた。

「コ……暦です」

「環……」

「ラカン殿とお見受けします。実は折り入ってお話があつて伺つたのですが——」

「いえ……」

「キャアア!？」

ジャックに話があるらしい猫三娘だが、アホジャックがスカート捲りをして話の腰をへし折りやがった。
教育によくないので木乃香の眼をとっさに塞いだがな。

ちなみにパンツも脱がせたらしい。

頼むから俺の近くでやらないでくれないか？

エヴァがどんな勘違いをするかわかったもんじゃないぞ。

「おおお、穩便に交渉とお金でコトを済まそうと思ってたのにババ、バカにして！」

ほほ、ほえッラかせてやりますよっ！」

え？ 俺無関係なのに巻き込まれてる？

「「アデアット！」」

「足止めか、フフ…いいぜ、どうせやるならカワイ子ちゃんは大歓迎だぜ！」

「頼むからよそでやってくれよ、俺は休暇中なんだぜ」

「メフィストはん、やる気ないん？」

「あいつらジャックに用があるんだろ？ 俺関係ないじゃん」

まあ認識障害をしているから「メフィスト・マクダウェル」だと認識できていないからなんだろうが。

俺がこっちにいるとあいつらが気付いたら…この程度の足止めにはならないだろうな。

『アーティファクト、無限抱擁』

木乃香と喋っていたら、なにやら変な空間に閉じ込められた。

終わりが見えないし、白い長方形の塊がそこらじゅうに浮いてるし…帰っていいかな？

「まんまとひつかかったようですね、ラカン殿。足止めの任務は完了、我々の勝ちです。」

フフ…今頃あのサウザンドマスターの息子はもう…」

「ぬん…ぬんぬんぬんぬん！」

数m先の塊の上にさっきの二人組が現れてしゃべりだす。

だがその二人目掛けてジャックが「千の顔を持つ英雄」の刀剣を投げまくった。

「えげつないな」

「こんな感じな事をいつもメフィストはんはやっている気が…」

「むしろ真祖の旦那のほうが恐ろしいと思うぜ」

脇で見学していたら、背後に誰かが来たことを察知して木乃香が魔法で迎撃する。

だが、それは幻像だった。

「いかな最強無敵の剣士といえども実体がなければ闘いようがないでしょう？」

あなた達がここから出ることはできません。せつかくですからこのまま一生ここに閉じ込めておくのもいいですが…」

どうやら勝利宣言をしに来たらしい。

この程度で、もう勝利を気取るとは…質が落ちたな、アーウェルンクス。

「ふ…やるじゃねえか、お嬢ちゃん達。ただのガキかと思ったら…」

見直したぜ。だてにパンツはいてない訳じゃねーな！」

「あなたが脱がしたんですう——ッ！」

漫才をしてるジャックを放っておいて俺は脱出の準備をするか。
ゲート・オブ・パレロン エア
王の財宝から乖離剣を出してっと。

「それじゃジャック、ちゃんと自力で脱出してみろよ」

「やっぱりこの程度なら簡単か？」

「当然」

「は？ そういえばさつきから一緒にいましたが…あなたは誰です？」

いまさらながらに俺に質問する猫ミミ娘。

「どうやらこの空間は無限に広がるようだな」

「え？ ええ、そうですよ。対人、対魔獣、対軍、対艦、対要塞とあらゆる戦闘において無敵を誇る貴方にもこれにはお手上げでしょう。いかがです、ラカン殿？」

「確かに。幻像相手じゃせっかくのクワイ子ちゃんの——」

「なら今からそれを破ろう」

「……へ？」

魔力を装填、狙いは適当に。

「木乃香、危ないから離れてろ」

「了解や」

「破る？ この無限抱擁をですか！？」

「当然、この剣に切れぬ物などなし。」

いざ仰げ……天地乖離^{エクス・エリシユ}す開闢の星を——！

スガガガガガツと見えざる境界にぶつかる魔力。
だが、アーティファクト程度でこの剣を止められる道理なし。
結果、この空間と元の空間に隙間が出現した。

「それじゃ俺は帰るから、あとは好きにどんぱちしてくれ」

「おかしいでしょう！？　なんで！？　なんなんですか、あなたは！？」

「我が名はメフィスト・マクダウエル。最凶の真祖の吸血鬼にして幻獣使い、故に我の歩みを止められる者はこの世に存在せず」

「メフィスト・マクダウエル……アツ！　な、なぜ魔法世界に！？」

「なぜってそりゃあ……休暇だよ、アーウェルンクスによろしく言うておけ」

それじゃエヴァと祭りを楽しみに行くか。

ここにいたほうが厄介事に巻き込まれそうだしな。

第伍拾捌話 『オスティア終戦記念祭、開幕』 (後書き)

拳闘大会のw k t kが止まらないぜ！

第伍拾玖話 『ネタバレ大会』

夜、オステイア付近に浮いている岩に避難した。

「これから始まるは、世にも恐ろしき禁断の実話談。それは…ある人には嫌悪され、またある人には避けられ…あるときには争いの種になったという」

「要するにネタバレ大会だ」

「ちよつ！ もうちよつとしゃべらせろ、筋肉ダルマ！」

昼間、俺達以外もアーウェルンクス一味と色々あったらしい。

そんでもって宮崎のアーティファクトで奴らの目的を知った白き翼。アラアルバここまで来てしまった以上は多少教えておこうとジャックは考えたらしい。

自作映画を持参してきた。

しかたなくというか…見せる気満々じゃないか。

「20年前、お前が何をしていたか…それを知るいい機会だな」

俺の隣にいるエヴァは心なしか楽しみにしているようだ。

「そんな面白いもんでもないぞ。所詮、戦争の話だ」

「なあに…人間どもの下らない争いを見るのもまた一興」

「おっ、始まるみたいだぞ」

空中に映し出されるスクリーン。

そこには…「ラカンフィルム」と…やっぱり見せる気まんまんだな。

……

……

…

——「第拾壹話」を思い出してね——

……

……

…

「と、ナギと一緒にボコボコにされた俺はあいつらと一緒に行動して、いつかはメフィストを倒そうと思ってつけまわしたんだが——何か知らんが俺も奴らの仲間になってた。

で、まあその後も何やかやすんげー色々あつて戦争も終わり今に至る……と。

ん——……おしまい！」

「ええ——っ！？」

「終わりかよっ！？」

「端折りすぎだ、おっさん！」

「出会い部分だけじゃん！」

めんどくさくなつたらしい。

ホントに出会い部分しか明かさず映画は終了した。

それより問題は…

「おいジャック！ 俺の出番がお前よりも少ないってどういことだ！？」

「そこ突っ込むの！？」

「だってよ——……これって俺が主役だし」

「くっそ——っ！ なんか負けた気がしてムカツク！」

こんなことなら俺も映画作ればよかった！

ちくしょう！ なんかジャックに負けた気がする！

「それにしても……なんでメフィストはんが出てくるん？」

「ネギ先生の御父君とラカン殿相手に息も切らさないなんて……」

「まあ俺にも目的があつたんだ……が、今は俺の話よりも紅き翼アラルブラのほうに集中しておけ」

俺の目的はナギと姫さんにしか話してないから……たぶんこの映画にはないと思うが……

そこいらはジャックが空気を読んでカットしていると信じよう。なんだかんだでやる時はやるからな。

「そいじゃ続きを見せるぞー」

メセンブリーナ連合とヘラス帝国の全面戦争。

どっちにもいろんな思惑があつたらしいが詳しい事は省く。語っても面白くないし、俺自身、興味がないからな。

泥沼戦争の状態から一転、一時ヘラスに押されるも紅き翼アラルブラが押し返し均衡状態に戻す。

一騎当千のこいつらは実にバランスブレイカーだと思うね。

え？ 俺が言うな？

『まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているようだ。ですか？』

『ある意味そのとおりかも知れないぞ』

『ガトウ…』

『俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ。やはり奴らは帝国・連合双方の中枢にまで入り込んでいる。秘密結社「コスモエンテレケイア完全なる世界」だ』

ついに辿り着いた真の敵——コスモエンテレケイア完全なる世界。

黒幕を倒すため、ウエスペルティア王国の王女——アリカ・アナルキア・エンテオフシア王女が登場しナギがフラグ建築を始める。

それにしても、テオのときも思ったが皇族ってなっげえ名前だよな。ミドルネームまで書くならエヴァも長いけど…名刺とかちゃんとフルネームいれるのか？

つてこっちに名刺はなかったな。

おっと話が逸れた。

コスモエンテレケイア完全なる世界の調査のため、一時戦争から外れた紅き翼。アラルフラ

その間、思いつきり調査に向かないナギとラカンは一トト状態…いや、ナギは姫さんとデートだな。

リア充核爆発しろ。

停戦のためヘラス第三皇女と交渉に赴く姫さん。

メガロ内でも停戦の動きを見せようと元老院に接触する紅き翼。アラルフラ

だがどちらも完全なる世界に嵌められて両国から追われる状態になる。

ナギたちは嵌められて幽閉された姫さんを助け出すため、メガロメセンブリアからはるばる「夜の迷宮」まで向かって行った。

「うい——す、じゃトイレ休憩」

先が気になるガキどもは騒ぎですが、まったく気にしないジャック。そのうちワイワイしながらも言われたとおりにトイレに向かって行くのを確認し、俺は少し聞きたいことがあったのでジャックに近寄った。

「なあジャック…ちゃんと俺の出番を入れてあるよな？」

「ここまで全然ないのは別行動だからだろうが。心配しなくともちやんと入れてある」

「ならばよし」

「でも見せらんないようなシーンはカットしてるぜ。お嬢ちゃんたちに血塗れ死体とかはショックが大きすぎるからな」

「どうせいつかは見ることになるから見せてもいいと思うがな…まあ今回はお前が用意したものだし文句は言わんよ」

………

………

…

映画が再開した。

——第拾弐話&第拾参話を思い出してね——

………

…
…

俺の必殺技「龍神烈火」を見てあんぐりと口を開ける観客たち。

あと少年がめっちゃ眼を見開いて俺とスクリーンを交互に見ていた。やっべ、そっいうや6年前、あいつの前であの姿みせちまったな…そりゃバレるわ。

俺の出番はそこで終わり、俺の開けた穴から「墓守り人の宮殿」に入っていくナギたち。

そこには何とか四天王とか言いそうな、いかにもなおっさんたちが待ち構えていた。

一人ずつ分散してフルボッコにすればいいのに、あいつらは一対一で闘っていた。

さすがは英雄だ。

俺なんかとは正反対の生き物だな。

なんだかんだで全員をボコボコにするナギたち。

そろそろ終わりかと思ったら真の黒幕、「造物主」が登場し蹂躪、形勢は逆転し今度はナギたちが瀕死状態になった。

ぬおおお……

俺もあの時一緒に行つてればあいつと闘えたのか…
激しく後悔……orz

その後ナギがどうやら主人公補正で「造物主」を倒したようだ。それから先は俺も知っている光景——姫子ちゃんごと発動した「世界の始まりと終わりの魔法」を北・南が協力して封印。

いつみてもこの光景はいいものだな。

「こうしてナギは魔法世界に知らぬ者なき英雄となり、世界は平和になった。」

メデタシ、メデタシ……………って訳だ」

「すげえっ！」

「マジ英雄じゃん、おっさん達！ 世界救ってるし！」

映画が終わり、すげえすげえと騒ぎ始めるガキども。

そんな中、考え事をしているのは…………少年・長谷川・刹那の3人か。

「ふん…こんなきれいごとしか映していない映画に興味はないな」

「まあそついうなよ、エヴァ。もっと内容を濃くすると血を見るかな」

「なるほど…」

いつから聞き耳を立てていたのか解らんが…長谷川がこつちにやってきた。

「メフィストさん…あんたは世界を守るために闘う、そんな性格じゃないのは私でも解ることだ。あんたは何の目的である戦争に参加したんだ？」

「ふっ、中学生にはまだ早いぜ」

「もしかしてだが…賞金を消すため、とか？」

へえ…………なんでまたそんなことが解るのかな？

「その根拠は？」

「こつちに来て色々聞いたり見たりしたからな。嫌でもいろんな話が耳に入ってくる。」

例えば、メフィストさんが20年前、戦争を起こした黒幕だとか…
18年前しょく——」
「それ以上は言うな」

無駄な事を知りすぎている長谷川の口を塞ぐ。

「口は災いの元…意味はわかるな？」

コクコクと首を縦に振る長谷川。
理解が速くて助かる。

もし元老院の奴らの耳に入ったら…面倒なことにしかならんからな。

「その話は他言無用だ。もしその他大勢がいる時に口にしたら…命の保証はせん」

「わ、わかりました…」

そそくさと船内に入っていく長谷川。
ちよつと脅し過ぎたかな？
まあいいや。

「あの、メフィストさん…」
「今度は少年と刹那か」

さてさて、十中八九さっきのアレだろう。

「さっき刹那さんと話したんですが…6年前、あの雪の日に龍の外殻をした人は…メフィストさんなんですか？」

率直に聞くね。

さて、どう答えたものか…いっそのこと素直に言うか。

「その通りだ。あの時、俺はあの村にいた」

「ど、どうしてですか！？ なぜメフィストさんは僕の村にいたんですか！？」

はて？　なんでこんなに声を荒げているんだこいつは？

「落ち着けよ、少年」

「僕は落ち着いてます！　ですので理由を教えてください！」

「まったく、ガキか…そういうガキだったな。少年…俺がなぜ、あの時にあの場所にいたか…そんなに気になるのか？」

眼を少しだけ細めて聞く。

「き、気になります！」

そんな俺に気押されずに毅然な態度で答える少年。

だがなあ…バラすにしても、「ナギとの約束で影から見守っていた」ってか？

おお…思わず鳥肌が立った。

俺が少年の立場だったら遠慮するね、何が悲しくて生まれてからずっと男に監視されなきゃいかんのだ？

まあずっとつきつきりで見っていた訳じゃないが。

とりあえずこの場は適当にごまかしておこう。

「今はまだ時期じゃない。相応しい時が来た時、俺から話そうじゃないか」

「メフィストさん！　はぐらかさないでください！」

少年の闇の魔法が稼働し始める。

てかなんでこんな敵意を向けられてんだ？

ひょっとしてあれか？ 俺が黒幕だとも思ってたのか？

「少年、一つ言えることはな…あれは俺のせいじゃない、犯人は別にいる」

「ッ！？ メ、メフィストさんは一体どこまで知って——」

「『眠りの霧』」

「あつ……」

とりあえず眠らせておこう。

船内に転移つと、ベッドに送れば問題なしだな。

「いいのですか？ ネギ先生に真実を語らなくても……」

「べらべらと喋る趣味はないんでな。刹那も俺のあの姿が気になっているのか？」

「やはり…ネギ先生の記憶にいた御仁とメフィストさんは…同一人物なのですね」

「そうだとさっきも言ったが？」

「あなたは…何が目的なのですか？」

目的か…その質問はなんとも難しいものだな。

俺が生きる理由は…単純明快、生きたいから。

くだらない賞金程度で死ぬ気は全くないし、死のうとも思わない。

だがそういうことでは無いんだろうな。

今刹那の頭の中にある疑問全てを俺は理解してないし、理解する気もない。

故に、さっきと同じことを言おう。

「今はまだ時期じゃない。その答えを知りたいなら待て、おのずと

時がやってくる」

「フウ……わかりました、今はまだその時じゃない、と？」

「理解が速くて助かるよ」

それじゃ俺もそろそろ寝るか。

このままだとネタバレの空気に吞まれて俺もすっかり喋りそうだからな。

拳闘大会の予選も勝ち抜かなきゃいかんし。

負ける気は一切ないが、寝坊で遅刻とかやりそうで怖いわ。

第伍拾玖話 『ネタバレ大会』（後書き）

そついやちよつと補足を。

原作ではアスナと入れ替わった栞（だっけか？）について、外見・性格だけでなく気配までアスナと同じになっています。

たぶんアーウェルンクスが頑張ったから出来た。

第陸拾話 『生きる伝説参戦』

時は進み、拳闘大会予選も残り一試合になった。

今俺はジャックと一緒にVIP専用部屋にいる。

ここなら他人の眼を心配せずゆっくりいられるからな。

今は少年と犬が決勝進出を賭けて最後の試合をしているところだ。

まあ結果はわかりきったことだな。

闇の魔法を使っているこいつに勝てるやつなどそうそういないってことだ。

「フン…勝ったんだったら笑顔のひとつも見せろや」

「これはこれは…拳闘大会、影の出資者が顔を見せるとは珍しい」

「ん？ おお、久しぶりだな！ じゃじゃ馬第三皇女かねーか、おい！」

やべっ、テオの喋り方が面白すぎて笑いが抑え切れねえ。

ククク…お、落ち着け俺、ククク。

ジャックの態度に怒る従者AとB。

だがさっさとテオが下がらせる。

すると態度が一転、ただのガキになった。

「ジャックウ……アハハハ！ 久しぶりじゃな、この筋肉ダルマ！」

笑いながらジャックの肩へ飛び乗るじゃじゃ馬姫。

「よお、伝説の英雄にお転婆姫」

さらに変な髪したおっさんに、いい歳したばあさんも入ってきた。
なにこのアウェイな空間？

「おおお？　なんだなんだてめえら、揃い踏みだな！
でもてめえら3人がこうして裏で仲良くしてるのバレルとマズイン
じゃねえの？」

「つれないこと言うなよ、ラカン。俺たちや戦友だろ？　せつかく
の再会に難しいコトはなしだぜ」

「バレないように防護対策は万全よ」

なにやらしがらみがありまくる人間らしい。

メガロのお偉いさんか？

やべ、俺ここにいるとマズいんじゃない？

「おい、ジャック。この変髪のおっさんといい歳したおばさんは誰
だ？」

「変髪っ！？」

「おばっ！？」

あっ、しまった。

言葉を考えなかったな。

「こっちのおっさんはメガロの元老院議員のリカード、こっちはア
リアドネーの総長セラスだ」

「そういうお前は誰じゃ？　ここにいるということはジャックの知
り合いのようじゃが…」

そっぴゃ認識阻害をオスティア全域に張ったんだっただな。
それじゃ少しだけ解除っど…

「あー！ おま！ ええ！？」

「これはこれは…またとんでもない大物が出てきたわね」

そついやこいつらとは大戦時に知り合ったような気がする。
対して接点がなかったから記憶からこぼれ落ちてたけど。

「久しいな、えーっと…リッカーにセラス」

「リカードだ！ いい加減人の名前ぐらい覚えろ」

「久しぶりね、『幻獣使い』」

「それにしても…両方老けたな」

「うぐっ！」

「ハハハ！ 不老不死のお前には関係ない話だな！」

「そういうジャックもテオと同じで長命だからあんま老けているように見えんな」

純粹な人間の一番の敵は老いだな。

昔はあんなに若々しかったセラスが…不憫だ。

「ま、まあ年齢の話はそれぐらいにして…久しぶりに再会したんだし、飲もうぜ！」

「そうじゃ！ 飲め飲め！」

「ハイハイ、じゃ十代のお子様はジュースな」

「何するのじゃ筋肉ダルマ！」

「羨ましいわ、幻獣使い…」

一人だけ空気を読まずにこつちをガン見するセラス。
いや、俺見ても若返るとかないからな。

そんなこんなで酒盛りを始めた偉い人&英雄&最凶の賞金首（元）。
こんないろんな意味でVIPな奴らの集まりは他じゃ見られんだろう。

「そついやさつきまで試合してたあいつなんだが…」

「ああ、ナギの下手なモノマネとかで話題の色物拳闘士じゃな？
妾も注目しているぞ。」

「それでも拳闘には詳しいからな、こやつは色物ながら実力は確かじや」

「あー、そいつな……ナギの実の息子だぜ」

「「何イツ!？」」

「え？ お前ら知らなかったの？」

あの程度の変装術すら見破れんとは…

やつぱこいつらザコだな。

「なんだよ、知らなかったか？ 意外だな」

「いや、だってナギの息子はまだ10歳ぐらいだって……あつ、変装か」

「俺の妹、直伝の変装術だから簡単には見破れないとは思ってたが…
お前らまで気付かないとは…弛んでる証拠だな」

「なんじゃつまらん、それなら優勝はあいつで決まりではないか。
ナギの息子なら強くて当たり前じゃ」

テオが興味を無くしたように言うが…そう簡単に優勝はさせねえよ。

「それはどうかな？ クククッ」

「メフィストも参戦してるし…それに、なんつーか…俺もちよつと
本気でアイツに興味が出てきてな。さつきこの大会にエントリーし
てきたとこだ」

「「「はあっ!？」」」

大層驚く3人。

もうちょい静かにしないと誰かにバレるぞ。

side out

【三人称side】

ネギと小太郎は決勝へのキップを手に入れた後、因縁の相手、オリアスの試合が始まるので観客席へと向かう。

闘技場では、一回戦から一人で難なく勝ち上がってきたオリアスが佇んでいる。

（未だに誤解は解かれていませんが…オリアスさん、貴方との戦いのおかげでラカンさんの下で修業して強くなれた。感謝すべきなのかもしれません）

観客席で盛大な勘違いをするネギ。

だがこの後、あのととき戦いを仕掛けられた時よりも強大な驚きがネギと小太郎を襲う。

『さあ！　ここまでタッグ戦を一人で勝ち進み、話題を作ってきたオリアス選手！

予選決勝において遂に新たにパートナーをエントリー！　そのパートナーは……』

少し区切る司会。

『驚くなかれ！　公式の場に姿を現すのは十年ぶりとなります！

彼こそは伝説の傭兵剣士！ 自由を掴んだ最強の奴隷拳闘士！ 大

戦期平和の立役者……

アラルブラ
紅き翼！ 千の刃の！ ジャック・ラカ——ン——！！」

伝説の英雄の登場とともに大歓声がわきあがる。
だがネギと小太郎の心境は穏やかではなかった。

「ここはお前に見せ場を譲ってやるよ」

「そんじゃてきとーにぶちかますか！」

いい歳したおっさんがポーズを取り空中に飛び上がる。

そこから繰り出される攻撃は、最強と呼ばれるべきレベルに達した者しか耐えられない拳。

「羅漢適当に右パンチ——！」

相手は地面にめり込み、そこには巨大な拳の形をしたクレーターが出来上がる。

その出鱈目具合を見たナギたちは本物だと確信し、事情を聞くため控室へと急いで向かった。

……

……

……

ネギは小太郎とロリ長谷川を引き連れて、ジャックの部屋へと入りこむ。

「どういうことですか、ラカンさん！」
「ん？ 何の話だ？」

テーブルにダン！と音を立てて抗議するネギ。
だがその程度の事で気押される人物はこの部屋にいなかった。

「な、なんでオリアスさんが…」

「あー！オリアスなあ！ その事なんだが…」

「こういうことだ、少年」

「「メ！ メメメ、メフィストさん！」」

変装を解いたオリアス、改めメフィスト。

その事実には驚く3人だが、その事実がどういうことか理解した時、
一気に顔を青くする。

「そ、そんな…ラカンさんだけでも無理なのにメフィストさんまで…
珍事すぎます！ウルトライレギュラーです！ いや、ウルトラなんかで表せられないほどの珍事ですよ！
絶対勝てる訳がないですッ！」

へたれたことをいうネギ。

そんな様子を予想していたジャックとメフィストはため息をつく。

「オイオイ…諦め早いな、やる前からよお。失望するぜえ、我が弟子よ」

「そ、そうかアレやな！ 師匠から弟子への最終試験とかそーゆー…」

「そ、そうか！ いわゆる免許皆伝試験的な…」

ネ、ネギ先生の成長を確かめる為に参戦したんだな？ で、おっさんが優勝しても賞金をくれるという…」

さらにへたれた意見をいう小太郎と長谷川。

「んなコトするわきゃねえだろ！ 俺が勝つたら当然、賞金は俺のモンだ！」

「やるわけねえだろうが！ 賞金は全て俺のもんだ！」

「「ええ——っ！」「」」

メフィストとジャックがほぼ同時に反論する。

その傍若無人っぷりにさらにへたれそうになるネギだが…

「喜べ少年、君の願いはようやく叶う」

メフィストの意味深な言葉に耳を傾ける。

「明確な悪がいなければ、君の望みは叶わない。

たとえそれが君にとって容認しえぬものであっても、^{マギステル、}立派な魔法使いには対立すべき悪——倒すべき敵が必要だ」

「い、いたい…なんの…」

「この試合で俺を倒すことができれば……一気にナギに近づくことができるぞ。それはこの俺が保障しよう」

ナギに近付ける。

その誘惑を断ち切れるほど、ネギはまだ成長していない。

「ぼーず、てめえ…『本物の強さ』が欲しかったんだろ？

フェイト、エヴァ、ナギ、メフィスト…俺が、その舞台への扉だ」

「で、ですがラカンさんたちは…」

「御宅はいらねえ、戦ろうぜ、ネギ」

今、この瞬間。
ジャック・ラカンがネギ・スプリングフィールドを認めた瞬間だった。

場所は変わって作戦会議をするネギ達。

「ムリだああああああああああああああああああ
あああああああ！」「」

長谷川とカモミールが一緒に絶叫した。

「勝てる訳ねえだろうが！ あんな人間兵器2体になんてよおっ！」
「ああもう！ ただでさえフェイトだ悪の組織だなんだで大変だっ
つーのに！ 問題増やしやがって——ッ！」

参謀担当であるカモミールと長谷川は揃って無理だ無理だと連呼する。

だが今回は相手が悪い。

生きるバグキャラに人型兵器が敵となるのであれば…常人ならこぞ
つて逃げ出す相手である。

「や、やつぱり優勝賞金はムリですかね…」

「当り前だろツ！ 先生だってこっちに来る前はメフィストさんのチートっぷりをその目で見てるんだし！ あのおっさんの常識外れ

の強さは見てるだろ！

あんな化け物どもに勝つのはどう考えても無理だ！」

もはや空気は敗戦が確定した軍のような空気。

どんよりとしたはまだ拭えない。

なぜならカモミールが追撃をかけるからだ。

「実はあのあとラカンと真祖の旦那の事を調べてきた。何か弱点がないかってな」

「おお！ それで！？」

「いや、あんましイイ話じゃねえ、心して聞けよ。

こつちの世界の戦闘では魔法使いの方が剣士なんかより戦火が大きいのが普通なんだが…

あのおっさんにはそういう常識は当てはまらねえ…いいか？」

そこから聞かされるは、ジャック・ラカンのチートっぷり。

大小合わせて137隻もの戦艦を落としたと聞かされて驚くネギたち。

さらに鬼神兵に素手で戦うとかなど…

「次は真祖の旦那だが……こつちはラカンなんかと比べ物にならねえぐらいヤベエ。

それでも聞くか？」

「う、うん…」

「こ、ここまできたら聞くしかないで…」

カモミールの暗にここでやめとけてメッセージを無視して先を促す二人。

「なら話そう。まず賞金首になったのは約600年前、たぶん真祖

になったところだろうな。

そのころから賞金稼ぎがその首を取ろうと闘いを挑むが、悉く返り討ち。

それどころかその賞金首の住んでいた村や街すらも焼き払ったそう
だ」

「なっ！」

「待った、兄貴。だがそういった村は往々にして魔女狩りを率先して
いたらしい。だから消されたようだな。だけどそう簡単に諦めら
れない賞金なせいか、旦那の首を狙う奴らはあとを絶たなかったら
しい」

「で、でも…」

何か言いたげなネギのフォローは諦め、カモミールは続きを話す。

「そしてラカンの映画にあったように20年前の^{アラルフラ}大戦に紅き翼の一
員として参戦。なにが目的なのかは知らないが、^{コスモエンテレケイア}完全なる世界に乗
っ取られた小さな国を何個か滅ぼしたらしい」

「く、国を！？」

「そらまた…対戦相手がおかしいか？」

「文字通り一対国をやったらしい、今はもう名前すら残ってないだ
とか…」

あとお前ら、帝都守護獣、古龍・龍樹は見たか？」

話が変わったが、とりあえず質問に答えるネギと小太郎。

「ああ、見た見た式典で」

「なんか物凄く強いらしいよね、あの怪獣」

「それも当然、古龍は吸血鬼の真祖なんかと共に最強種と謳われる
存在なんだが…」

なんか大戦時に倒して、今では会うと一方的にひれ伏すらしい」

「『ええ——ッ！』」

ありえない！と思いつつも、メフィストさんならあり得るかとも思
い始めるネギと小太郎。

「は、はは……メフィストさんってホントは魔法世界全土と戦争し
ても勝てるんとちゃうんか？」

「あ、あり得そうで怖いこと言わないでよ、小太郎君……」

「そ、そっぴや私も一つあるんだが……」

この空気ですべていいのかと長谷川は少しだけ考えるが、言わない
のもあれだと思い正直に話した。

「おっさんの強さ表のことなんだが……実はおっさん自身の強さを興
味本位で聞いてみたんだ」

「えっ……」

「いくつだと思う？」

「い、いくつですか？……」

「1万2千だそうだ」

「いっ！ いちまんにせん——ッ！？」

この時のネギ↓2200

あまりの戦力差に絶望感が漂うネギたち。

「ラカンさんが1万2千なら……メフィストさんはどうなんやろ？」

「え、えっと……」

「10万？」

「も、もっといくんじゃないでしょうか……」

そんな時、ポトリとネギたちのところに手紙が落ちる。

「53万？　嘘に決まってるだろ。あれはそう言わなきゃいけない
って台本にあったからであって…
え？　本当はどれくらい？　そうだな…100万ぐらいいくん
じゃね？」

第陸拾話 『生きる伝説参戦』（後書き）

明日、または明後日に拳闘大会をUPします。

ただいま頑張つて書いているところですので楽しみにしてください
さいw

そろそろ最後のシメに差し掛かるところですので今日中に書けるか
な？

書きあげ次第投稿しますね。

第陸拾巻話 『英雄と英雄の子挑むは真正の魔王也』（前書き）

さて、ついに始まりますよ、拳闘大会！

読者のみなさんは少なからず思っているはず！

「ラカンいらなくね？」とね！

でもその疑問も10秒程度で吹き飛ぶので安心あれ！

そうそう、地の文を三人称で書いているので、状況描写がかなり増えていきます。

ですので…頑張って読んで下さい！

第陸拾巻話 『英雄と英雄の子挑むは真正の魔王也』

初めは諦めモードだったが、メガロ元老院議員リカード、ヘラス帝国第三皇女テオドラ、アリアドネー総長セラス、偽物エヴァの指導の元、打倒ラカン＆メフィストを目指して修業を続けるネギと小太郎。

メフィストとジャックは簡単に決勝進出し、ネギたちも何事も問題なく駒を進める。

そして今日、ついに頂上決戦の幕が上がった。

闘技場の中心では4人が対峙していた。

試合開始までにネギは自分の決意をメフィストへと語りだす。

「メフィストさん…もしこの試合で僕が勝てたら、聞きたいことに答えてくれますか？」

「ふん…ひよっ子が大口を叩くじゃないか。まあ勝てたら…な」

「では！全力全開！どんな手を使っても勝たせてもらいます！

アデアット！」

（アーティファクトだと？）

「行くよ、小太郎君！」

「おうよ！」

メフィストはネギのアーティファクトを訝しむが、やることはかわらん、と思い直す。

『それでは決勝戦……開始！！』

「おらあっ！」

「くたばれ！」

「へっ？」

開始の合図と共にネギは呪文を詠唱しようとした……が、目の前で起こった出来事に頭の整理が付かなかった。

いきなりメフィストとジャックが殴り合いを始めたのである、それもあり本気で。

メフィストはその場にとどまったが、ジャックは耐え切れずに吹っ飛び、ネギのそばまで転がってきた。

「あ、あの……」

「おお、ぼーず！ なぁに、俺とメフィスト相手じゃどう天地が引っくり返っても勝てないからな。俺はこっちにつくことにしたぜ！」

「やはりそうくると思ったよ、ジャック。そうこなくてはな……実に楽しみになつてきたぞ！」

「いくぜえ！ 最凶！」

「来い！ 英雄！」

嬉しそうな顔をしながら殴り合いを始めるメフィストとジャック。その気迫に圧倒されかけるも、ネギは当初の計画通りに詠唱を始める。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！ 契約に従い我に従え 高

殿の王！——」

ネギは「千の雷」の詠唱を開始する。

メフィストはこの短期間で完成させた事を感じするが、今は死合いの時。

故に詠唱完了まで待つてやる義理はなかった。

ジャックとの殴り合いをしつつもネギの方に攻撃を開始する。

ゲート・オブ・バビロン

「王の財宝、射出（まずはこれだ。どう捌く？坊やたち……）」

「へっ、させへんわ！」

「俺を無視するんじゃ、ねえ！」

「なら一人で俺を止めてみせろ！」

数多の宝具が降り注ぐのを小太郎が作り出した影の壁で防ぐ。

中にはその防御壁を貫いていく宝具もあったがその速度が減少したらしく、小太郎は刃物の腹を叩いて宝具を地面に落としていく。

「ちっ、よく分析してやがる……」

「そりゃあっ！」

「ぐっ！」

少しだけネギに意識が向けられた事をジャックは見逃さずに右手でメフィストの顎を上方方向に打ち抜く。

だが相手は歴戦の猛者、それも人間程度の寿命では到底届かないほどの時間を戦い続けた最凶。

故にダメージは皆無であった。

「おいメフィスト、障壁はどうした？」

「はっ！ 使っちゃうとテメェらは絶対に勝てねえぞ」

「そうかいっ！」

この試合でメフィストは魔法障壁を使用していない。
なぜならメフィストが全力で張ると誰もそれを破れないからだ。
それをジャックも承知の上で全力を出す。
そうしなければ逆にこちらがやられるからだ。

「躊躇ないじゃないか」

「当然！　じゃなかったら簡単にやられるからな！」

「だがまだまだ甘いッ！」

「ぐふっ！」

ジャックを地面へと蹴り飛ばし、そこへ宝具を一斉照射。
だが今度も小太郎の影に阻まれて致命傷を与えられなかった。

「くはははははは！　いいぞオ！　いい感じに均衡しているじゃないか！」

「助かったぜ、コジロー」

「おっさん、ホンマに俺らに味方すんのか？」

「おうよ！　久しぶりにメフィストとガチバトルしたかったからな
！」

ジャックがメフィストと敵対する理由はこれである。

ネギの成長のためとかは忘却の彼方にやり、メフィストを倒すこと
だけを考えるジャック。

その様子を悟った小太郎は信用することにした。

だが敵は待ってくれない。

メフィストは既に次の攻撃行動を取っていた。

「私の呼び掛けに応えよ、炎霊・氷霊・雷霊召喚！　来い！『イフ

リート』『シヴァ』『イクシオン』!」

少し攻撃の手を緩めたせいで幻獣の召喚を許してしまったことに舌打ちするジャック。

形勢が不利になったことを悟り、アーティファクト「千の顔を持つ英雄」を取り出して構える。

「御命令を、マスター」

「これはまた…大層な場所に読んでくれましたね、ご主人様」

「ようはアレを倒せばよからう?」

「あそこの犬と筋肉ダルマと遊んでやれ。俺は…こっちの相手をするからな」

「御意」

幻獣たちは命令を遂行するべくジャックと小太郎の元へと走っていく。

小太郎と対峙するのはイフリート、ジャックと対峙するのはシヴァとイクシオン。

「俺の相手はあんたか、メフィストさんの幻獣とやり合うのは初めてやからな…初めから全力でいくで!」

「マスターの命令は絶対なので…遊んでもらいますよ、子犬さん」

「フン、俺の相手はてめえらか」

「20年ぶりですね、ジャック・ラカン」

「相手が誰であれ、打ち滅ぼすのみ」

小太郎とジャックが幻獣と対峙するのを見届けてメフィストはネギのほうへと振り向く。

「さて、舞台は整った。一對一といこうじゃないか」
「ではいきますよ、メフィストさん」

そついうなりネギは遅延魔法を解放、ストックしていた「千の雷」を闇の魔法で取り込む。

「へえ……こつちも完成させていたのか」

「はい。術式兵装、『雷天大壮』です」

「いいぜ、それじゃ始めるかア！」

いきなり無詠唱で「闇の吹雪」を撃ちこむメフィスト。

だがネギの「雷天大壮」の前では、それは避けるのはいとも簡単。結果、簡単に接近されネギはメフィストの顔面へと拳を放つ。

だがメフィストも簡単にはやられない。

気配察知で攻撃を受ける直前でそれに気付いて回避し、カウンターをお見舞いしようとネギの鳩尾目掛けて蹴りを放つ。

だがネギは、それを知っていると云わんばかりに余裕で避けて殴り返した。

（なっ！？　どういうことだ……）

「まだです！」

「ぐっ！」

接近されて殴られまくるメフィスト。

何度もその攻撃を察知してカウンターを決めようとするが、その悉くを避けられて逆に攻撃を決められてしまうのであった。

ネギはこのまま押し切ろうと思いつつも、この試合ギリギリまで修行をしたあとのことを思い出していた。

修行の場、巻物・ダイオラマ魔法球からそれぞれ出てきたネギと小太郎は、互いに決勝への意気込みを高め合う。そこへ闇の魔法の指導をしていた偽エヴァが声を掛けた。

「ぼーや。何やら秘策でもあるようだが実際はどうなの？
少しでも勝機はあるのか？」

「まあ見てください、マスター。いかに化け物の中の化け物であるメフィストさん相手でもそう簡単には負けませんよ」
「ハッ、大口叩くじゃないか。どんな事をするのか楽しみにさせてもらうぞ」

今の自分ではメフィストには遠く及ばない。
だが、強者すぎるが故にメフィストは格下である自分と小太郎を甘く見るはず。
ネギはその状態のときに一気に勝負を決めようと考えていた。

反撃のチャンスを与えないために次々と拳を振るうネギ。

攻撃を当てようとしても、行動が先読み、または「雷天大壮」の付与能力である雷速瞬動で避けられて次々と攻撃を喰らうメフィスト。メフィストは自分の動きが先読みされすぎていることに疑問を抱き始めた。

（まさか…やつの従者である宮崎のアーティファクトを使っている？）

（ッ！　そろそろ感付かれるか…）

ネギはこの大会期間中だけだが、自分のアーティファクトをゲットした。

それは自身の従者のアーティファクトを使えるという能力である。それを使って宮崎のどかのアーティファクト「いどのえにつき」を起動。

さらに宮崎が所持している、文字を読み上げる魔導具「読み上げ耳」を貸してもらって常時メフィストの思考を読心していたのだった。

それを知らないメフィストは読心しているかも知れないとしか考えが追いつかなかった。

だが、その程度で倒せる人物ならメフィスト・マクダウエルという賞金首はとうの昔に打ち倒されている。

（？　急に思考がなくなっただけ…？）

「いどのえにつき」からの情報が一切入ってこなくなったことを訝しむネギ。

見るとメフィストは眼を瞑りピクリとも動かなくなっていた。

不審に思いつつも攻撃を仕掛けるネギ。

だが、メフィストの反撃は始まっていたのだった。

（バ、バカな！？ 眼を瞑っているのに避けられるなんて！？）

メフィストは眼を瞑つてもネギの攻撃を避け続けていたのだ。正確には少しだけネギの拳が身体に掠ると高速で避ける。それをメフィストは繰り返していたのだ。

その動作を何十回も繰り返した後、不意に「いどのえにつき」から読心の文字が耳に入る。

だがそれはネギを驚愕の渦に叩き落とすのに十分な結果であった。

（もう、慣れた…）

慣れた、確かにそうネギは聞いた。

だがそのことを聞いた時にはもう攻撃をしかけていたのでメフィストの傍から離脱することは不可能。

そして次の瞬間、さらなる驚愕がネギを襲う。

ネギの拳を避けたと思ったら、メフィストの拳がネギの顔のすぐそばを通り抜けたのだった。

（バカな！？ 思考せずに攻撃をするなんて！？）

だがこれでメフィストの反撃は止まらない。

さきほどの反撃はまぐれだと思い直し、再度近づくとネギ。

だがそれはあまりにも愚かな一手となる。

先程の反撃でどの位置、どのタイミングで攻撃すればいいか身体で理解したメフィストは、再度顔を狙ってきたネギの拳を避けて、

逆に殴り飛ばす。

メフィストの拳はネギの腹に決まり、ネギは闘技場を覆う障壁まで吹っ飛んでいき、障壁を破りぬけた。

「ガ、ハッ！」

その威力に耐え切れず吐血するネギ。

障壁の上からでも内臓器官を痛めるには十分すぎる一撃だった。

しかも壁に勢いよくぶつかったせいで「読み上げ耳」が壊れてしまう。

ネギの秒速150kmもの速度を誇る攻撃を避けた技法とは…「聴勁」と呼ばれるものである。

「聴勁」とは、功夫の達人の域に達すると視覚で敵を捉えることなく、腕と腕とが触れあった刹那に相手の次の動作を読み取ることが可能となる。

これをメフィストは無意識化で使い、秒速150kmの拳を避け、それどころか反撃に転じたのだ。

（ありえない…。秒速150kmの拳を避けるのも、さらに一切考えずに反撃するのも！）

常識を逸脱しすぎているメフィストの恐ろしさを改めて実感するネギ。

いとも簡単に切り札を破られたネギは戦意喪失しかけるも、奮起して再度攻撃を仕掛けた。

だが結果は火を見るより明らかである。

魔導具が壊れたせいでさっきよりかは慎重に攻撃するも、一撃も有

効だが入らない。

無心になり攻撃をよけ、たまに反撃するメフィスト。

雷の如く、メフィストの周りを飛びまわりながらヒットアンドアウェイを繰り返すネギ。

だが、その「メフィストが無心」状態になっている隙を見逃す英雄はいなかった。

「ラカン、インパクトオ！」

「ちっ、あいつら…やられちまったか」

突如、上空からメフィスト目掛けてジャックの気の光弾が襲う。ジャックは何とかシヴァとイクシオンを倒し、小太郎の援護をしてイフリートを倒して、ネギに加勢しようと駆けつけたのである。メフィストは無心状態から戻り左手で受け止めるもそれは罠。

「狗音爆碎拳！」

「ぐっ！」

左から獣化した小太郎が、右手に気を集中させて攻撃する「狗音爆碎拳」が直撃。

わずかに体勢を崩すもジャックの気を受け止めることを放棄せずにいるメフィスト。

だが、そのわずかに体勢を崩したせいでネギの致命的な攻撃を許してしまった。

「ここッ！ 必殺！『千磐破雷』！！」

雷化しての体当たり。

単純なれど常人には耐えきれないほどの雷撃を喰らうメフィスト。

しかもネギの攻撃を受けたせいでジャックの気の光弾も直撃することになる。

ズガアアアアアアン！という擬音とズドオオオオオン！という擬音が混ざり合いメフィストがいた場所を中心に土煙を巻き上げる。

だがこれでネギたちの攻撃は終わらない。

「ぼーず！ ダメ押しでもう一回だ！」

「ハイ！ ラカンさん！ 解放！ 『雷の暴風』 ツー！」

「もういっちょ！ ラカン、インパクトオッ！ & 斬艦剣ッ！」

確実にオーバーキルと取られてもいいような攻撃をするネギとジャック。

だがジャックの顔は、勝ったといえるような余裕の表情にはとてもじゃないが見えない。

小太郎とジャックはネギが立っている場所へと集まり相談を始める。

「勝ったと思うか？」

「まだわからない…メフィストさんと本気の勝負をしたのはこれが初めてだからね。ラカンさんはどう思います？」

「はつきり言おう、この程度で倒せるような相手じゃねえ。ホントならもつと追撃をかけたいとこだが…不用意に近づくのは危険だ」

土煙が晴れてくると、仰向けに倒れているメフィストを発見する3人。

司会もそのことを確認しカウントに入るが…ジャックは嫌な予感がしてならなかった。

「ヤ、ヤバいで、ネギ……」

「そ、そうだね…でも逃げる訳にはいかない」

メフィストのテンションが上がるにつれて恐怖感が比例して大きくなるのを肌で感じるネギと小太郎。

ジャックは、ようやく本気になるのかと楽しみにする半面、その一挙一動を見逃すまいと集中していた。

「いいねエ、その力！その気迫！ナギがいなくなつて歯応えのない生活ばかり続いたが、ようやく面白くなつてきたつてもんだ！今の俺の気分は！最っ高にハイつてやつだぜ！

くはははははははははははははははははははははははは………
覇アアッ！」

笑い声が終わつたかと思うと、メフィストの殺気と魔力が何倍にも膨れ上がる。

それは闘技場の地面を震わせ、大気は殺気で凍るように感じ、メフィストから尋常じゃないほどの威圧感を感じ取る。

そして何よりも恐怖を感じるのは…メフィストの目が紅く光っていることだった。

その眼光は不吉極まりなく…さながら蛇に睨まれた蛙のような気分だとネギと小太郎はほぼ同時に同じことを考えた。

「氣い張れよ、ぼーずたち……どうやらメフィストの奴、本気モードだぜ」

メフィストの殺気に吞まれまいとネギたちに檄を飛ばすジャック。その言葉によって我に返り、いつでも戦えるように構えた。

「今から始まるのは…魔王の猛攻だ。人間の意地つてやつをみせて

やろーじゃねえか」

「ハイ！」

「おうよ！」

魔王の蹂躪がいかにも恐ろしいかを知らないネギと小太郎だが、それでもジャックは鼓舞するように声を掛ける。

これから始まるは、大魔王による一方的な蹂躪攻撃。
天は轟き、地は唸る。
そんな激しい闘いが今まさに始まろうとしていた。

第陸拾巻話 『英雄と英雄の子挑むは真正の魔王也』 (後書き)

さて、この続きですが！

本日の１６時と２０時に連続で投稿となります！

ドンドン、パフパフー！

必死にない頭を使って書きあげました！
満足していただけたら幸いです！

第陸拾弐話 『大魔王降臨』（前書き）

なんだかテンションがめっさ高い臆識っす！
でもしょうがない！

ついにここまで来たんだから！

そんな訳で拳闘大会・中編となりまっす！

第陸拾貳話 『大魔王降臨』

ネギと小太郎、ジャックの3人は殺気を辺りにばらまくメフィストに対して、いつでも攻撃できるように構えをとる。

メフィストとの距離は30m以上もあるのに闇の魔法を使う分には大丈夫だろうと思い、ストックしてある「千の雷」を解放した。

だが、その隙は…メフィストにとっては十分すぎる時間であった。さらに不幸なのは、ネギが「千の雷」を取り込む時と、小太郎・ジャックが一瞬だけ瞬きをしたタイミングが見事に一致してしまったのである。

まさに刹那の時、だがメフィストにとっては悠久に等しい時間であった。

「雷天大壮」を発動することは出来たものの一瞬で近寄られ、ジャックを上空へと殴り飛ばし、小太郎には「雷の暴風」を、ネギには「闇の吹雪」をお見舞いする。

障壁があるネギでもその威力を受け止めきれずに吹き飛び、障壁すらもない小太郎はきりもみ状態で飛んでいき壁に激突、そのまま壁にめり込み意識を失った。

おもいつきり殴り飛ばされて頭が少しくらつとしているジャックだが、かろうじてネギと小太郎の危機を察知する。

しかもメフィストが高速でこちらに飛んできていることにも気付いてとっさに避けた。

「そう簡単には殺らせてくれないか」

「ちっ…やっぱり致命傷じゃあなかったか…流石だぜ、最強種の最強種」

（これが…父さんがいた世界…）

それは例えるなら…まさに天災。

メフィストの圧倒的な暴力は理不尽なまでの災害である。

故にネギは、今自分は災害と相まみえていると勘違いを起こす。

人間は天災に勝てない——それは何百年も前から確定している決定事項だ。

だがここでネギは諦めない。

奴隷となったクラスメートを救うため、自分の母親の話を聞くために。

なるほど、その想いは本物だろう。

人間は想いの強さが自身の強さと直結するなどという話はよくある。

だが、その話が通用するのは物語の中だけだ。

真の魔王相手にそのような夢物語は通用しない。

「術式兵装…『雷天大壮』！」

再び「雷天大壮」を発動させるネギ。

そしてそのまま自分に背を向けているメフィスト目掛けて特攻を仕掛けるも、あっけなく避けられてしまう。

「来たな、少年…早くなんとかしないとジャックがくたばっちゃうぜ」

「くっ！」

さっきまで使っていた裏技はもう使えないので自分の技能を頼りに殴りかかる。

「くくくっ、さっきまでの読心は出来なくなっただか！？ キレが落ちてるぞ！」

「まだまだあつ！」

ジャックと派手に殴り合いをしつつもネギの攻撃を避けるメフィスト。

その常識外れぶりに戦慄するもなお攻撃の手を緩めないネギ。

「攻略されたと言うのに同じ手を使うとは… 戦場じゃ死に直結する判断だぞ！」

「……え？ あぐっ！」

「ぼーず！」

「余所見とは余裕だな、ジャックウツ！」

まずメフィストは、ネギの「雷天大壮」を完膚なきまでに攻略した。移動先を決定したところにでる先行放電^{ストリーマー}に干渉し、強制的に行先を変更したのである。

メフィストの背後に着くはずだったネギは行先を変更されたことに気付かずに少しだけ茫然としてしまう。

そこへ、無慈悲なメフィストの蹴りが直撃し上空へと打ち上げられてしまった。

手痛い一撃を喰らったネギに意識を向けてしまったジャックにも痛烈な一撃が襲う。

少しだけ手数が弛んだところに懐に入られて、ネギと同じ方向へ殴

り飛ばされた。

「出る、エクスカリバー」

そこへ追撃をかけるメフィスト。

その手には黄金に煌めく一振りの剣。

その剣の威力を知る僅かの者は顔を青くする。

これからネギたちに降り掛かる絶対的な威力に対して。

「^{エクス}約束された——」

剣に光が集う。

その黄金の輝きは見る者全てが魅了されるほどの光。

極限まで魔力を注ぎ込んだ黄金の剣を、その名を高らかに宣言しつつ腕を振り下ろす。

「^{カリバー}勝利の剣——ツ——！」

剣から放たれる光はネギとジャックを襲う。

黄金の光は射線上にいた二人をいとも簡単に覆い隠し、その光は止まらずに闘技場の障壁に当たり粉碎した。

迫りくる光を見たネギは、咄嗟に自分のアーティファクトで「ハマノツルギ」を呼び出して防ぐ。

それにジャックもただ攻撃を喰らうだけではない。

身体強化を最大出力にして防ぎきる算段であった。

しかし、いかに魔法無効化能力を付与している「ハマノツルギ」であつても、いかに英雄が誇る絶対防御でも。

^{エクスカリバー}約束された勝利の剣の威力を全て打ち消すことが出来なかった。

結果、致命傷とはならずとも身体の所々が焼け焦げてしまう。

「そつ……お前らならアレを防ぎきると思ったよ」

上空から声が聞こえたのですぐ上を向くと、そこには両手に「断罪の剣」を構え、今にも斬りかかりうとするメフィストがいた。

ナインライプス
「射殺す百頭ッ！！」

「気合い防御ッ！」

ネギの「雷速瞬動」での回避は間に合わず、ジャックは気を集中させて耐えようと頑張るが…。

メフィストは両手に構えた「断罪の剣」で、ラカンにすら知覚できないほどの速度で9連撃の斬撃を放つ。

ナインライプス
射殺す百頭とは、ギリシャの英雄ヘラクレスが9つの首を持つ怪物ヒュドラを殺した時に使った弓を元に、彼の持つ武技を流派の域にまで昇華させたもの。

その斬撃はほとんど目視できないほどのスピードで9連撃を繰り返す斬撃である。

これを使い、メフィストはネギとジャックに到底防ぐことのできない斬撃を放つ。

だが一つだけ注意したことがある。

それは四肢のいずれも切らないように、ということだ。

（簡単に切断して戦意喪失されてもつまらん…俺はまだまだ満ち足りていないッ！）

しかし、攻撃を受けたネギとジャックは生きた心地がなかった。

一度に9回も切られればそうだろう。

しかもまだ攻撃は終わらない。

斬られたせいで体勢を崩してしまい、そこへメフィストが魔力で強化した拳が直撃する。

ネギとジャックは避けられずに地面に激突、地中に腰までめり込んだ。

だが、その程度で済んだのはジャックとネギの防御性を褒めるべきだろう。

しかし、まだメフィストのターンは終わっていない。

「サタム・サタディア・サタナキア！

契約に従い我に従え 氷の女王！ 来れ とこしえのやみ えいえんのひょうが！

全ての命ある者に等しき死を 其は安らき也！ 『おわるせかい』
！！」

「ぐう… あれはヤバイ！ 逃げるぞ、ぼーず！」

150フィート四方を凍らせる「おわるせかい」が二人を襲う。氷漬けにされそうになるが、まずジャックが地面を砕いて脱出する。そして迫りくる氷を「ハマノツルギ」で無効化し地面から飛びあがった。

だが二人は気付いていない…魔王からは決して逃げられない事を。

「これでっ！ 終わりだッ！ 石破ッ！ 天驚けえええええええええええええええんッ！」

「しまっ！ ぐあああああああああああああ！」

「くっ！ 『風障壁』ッ！」

「ネギ——ッ！しつかり——ッ！」

エヴァは予想通りの展開で不機嫌に、木乃香と刹那は改めて主であり師でもあるメフィストの強さを再認識、他の白き翼メンバアラアルバーはネギ声援を送る。

だが強烈な一撃を受けたネギは立ち上がることはおろか、意識が消えていた。

「やっぱりネギ君はメフィストはんに勝てへんのかなあ……」
「それは……」

無理だろうと刹那は頭では考えるが口にしない。
なぜならまだネギの勝ちを信じて応援している人がいるからだ。
だがメフィストの強さを知っている刹那は、とてもじゃないがネギの勝利を確信できない。

「真祖の姉御：今の真祖の旦那は本気なのか？」

「人間の身体を保った状態ならほぼ本気に近い。貴様らもラカンの映画を見ただろう？」

あいつの本気は身体が人間からかけ離れるからな」

「あれは強烈やったな」

「あれをやられるのでしたら……この闘技場が壊れるのでは？」

「……確実に壊れるな」

メフィストの強力すぎる力を知るエヴァは、その力が解放された時のことを想像し……顔を青くする。

そんなエヴァの様子を見た子供達は、ああ……やっぱりメフィストさんに勝つのは無理かも……などと考え始めた。

「ま、まあメフィストのやつもそこまで大人げないやつじゃない……」

はずだ」

「とつても不安になる解答ありがとや、エヴァちゃん……」

「ネギ先生……五体満足でこの試合を終わらせることができればよいのですが……」

「不吉なこと言わないでよ、刹那さん！」

「ハッ！ も、申し訳ありません！」

つい口にしてしまった刹那はアスナに怒られて萎縮する。

「でもヤバいのはわかりねえ……なんせ切り札である読心も封じられたようだし、あの威力・アニキの雷化に攻撃を当てる技量。ぶっちゃけありえねえよ」

「600年修業すればメフィストはんみたいになれるん、せつちゃん？」

「人間には無理でしょうね。なんせ寿命がありますから……」

「でも私のアーティファクト使っているのに、それを超えてダメージ与えるのっておかしくない？」

「何もおかしい事はない、神楽坂明日菜」

アスナのもつともな質問にエヴァは口を開く。

「いかに魔法無効化といえど、その無効化するキャパシティを超えた魔力で攻撃すれば攻撃は通る。無効化などというものの全てに共通する攻略法だ」

「で、でも私のアーティファクトってかなり打ち消せるわよ？」

「そこはメフィストがありえないチートだから、だとしか言えんよ」

「そ、そっか……」

実際にメフィストがやった「ハマノツルギ」の無効化できる上限を上回る形で破る魔法使いなど……世界広しといえどメフィストぐらい

だろう。

アスナの記憶にはないが、大戦時は戦艦の精霊砲を一斉にいくつも浴びても無効化していたのである。

「まあぼーやはよくやったよ。メフィスト相手によくここまで持ったと言っべきだろうな」

「まだネギは負けた訳じゃないわッ！」

エヴァの、もうこれで終わりだ、という意味合いを持つ発言に食ってかかるアスナ。

「だが立ち上がってどうする？ それともはつきり言わないと理解できませんか？」

“絶対にメフィストに勝てる奴など存在せん”と

「そ、それは……で、でも！ ネギならやってくれるわよッ！」

「感情論、いや、夢想論だな。気持ちなんかで勝てるほど甘い相手ではない」

アスナのささやかな反論もバツサリ切り捨てるエヴァ。

アスナ自身も理解しているのだ。

ほぼ本気となっているメフィスト相手では、いかにネギが頑張ろうとも太刀打ちできないと。

ただし納得はしていないが。

「せっちゃんのアスナがネギ君に味方したらもうちょいマシになる？」

「お嬢様、お忘れですか？こちらに来る前の試験のことを…本体の0・5%の力であるメフィストさんの分身ですら我等は苦労したのです。私達があそこに行っても…そうですね、10秒保てばいいほうでしょう」

「ま、それが妥当だろうな」

どうあがいても無理だという結論に達しかけた時、司会の放送が入る。

それは、アスナたちが待ち望んでいた言葉。

『ああ——ッ！ ナギ選手立ちッ……』

「がはっ！ げほっげほっ……」

立ち上がったと言おうとしたが、盛大に吐血してまだ膝をついたままだったので言い淀む司会。

血反吐を吐きながらも立ち上がろうとするネギの姿を見て、アスナは心底心配しているのであった。

………

………

…

立ち上がってくれることを期待する半面、ジャック以外はもう無理だろうと冷静な判断をするメフィスト。

しかし予想はいい意味で裏切られることになった。

だがまだネギは立ち上がれてはいない。

「ここまでやってまだ意識があることには驚きだ。中々どうして…
頑張るじゃないか」

軽口を叩きながら、ネギが立ち上がれるかどうか見極めようとするメフィスト。

だがネギは、立ち上がることはおろか、ろくにしゃべれない状態にあった。

「だがダメージのほうは深刻だろう？ お前が何を聞きたいのかは知らん。

これ以上やるなら…マジで死ぬぜ」

「メフィストの言う通りだ、ばーず」

むくりと、ジャックが起き上がる。

その身体はいたるところに傷があり、そこから出血しているが…まだ眼は死んでいない。

「吐血したってことは内臓にダメージがいつている証拠だ。早いとこリタイアして治療しねえと手遅れになるぜ。何、お前はよくやった。ここいらで止めても誰も責めねえよ」

ジャックの言葉は傷ついたネギの耳には心地よく、思わず言う通りにしようかと考えるネギ。

だが次の言葉で踏み止まる。

「所詮、それが今の貴様の限界だ。10歳の子供にはまだ早い舞台だつてことだ。

もはや興味もわかん…疾く失せろ」

（まだ全力を出していないのに…このままおめおめと帰る訳にはいかないッ！）

気合いを振り絞り、立ち上がろうと頑張るネギ。

必死に魔力を練り上げて傷の進行を止め、手足に力を込めて立ち上がる。

「ま……だ……おわり……ません！　ぐうううううあ……お、おお、
おおあああああ！」

『ああ——ッ！　立った！立ちました！　今度こそ本当に立った！
——ッ！』

傷口がいくつか開いて出血するも、まだ戦意を失わないネギをメフ
イストは認める。

その気迫を、その根性を。

（だが、気持ちが強い程度でこの俺は倒せん）

立ち上がったネギに寄り添うように意識を取り戻した小太郎とジャ
ックが駆け寄る。

「へっ、よく立ち上がったな、ぼーず」

「さっきまで落ちてたからな……名誉挽回と行くで」

満身創痍ながらも自分を奮起させて、再度メフィストに挑もうと意
気込むネギ達。

その様子を見て、メフィストのテンションは再度上昇する。

「そうだ、それでいい！　それでこそ俺の敵！　俺が打ち倒すべき
敵だッ！

このような心躍る日を俺は………待っていたッ！」

魔王と英雄の息子は再度ぶつかり合う。

自分の力の全てを使い魔王に挑む英雄の息子は、はたして勝てるか
否か。

全ては作者^{かみ}のみぞ知ること也。

第陸拾參話 『不敗故に君臨するは幻獣使い』（前書き）

魔王！魔王！

いや、秒速150kmの拳をよけるとか、もうね！

ぶっちゃけありえねえw

でもそんなご都合主義は投稿当初から続いているんで気にしない！

「我流犬上流獣化奥義、『狗音影装』！」
「なるほど、ぼーやのアーティファクトを借りたか…」

小太郎の姿が全長2mほどの狗へと変貌した。
メフィストの魔法は「ハマノツルギ」で無効化されて小太郎に届かない。

だが、それを確認する時にはもうジャックが「千の顔を持つ英雄」を呼び出して攻撃を開始していた。

「フンフンフンフンフンフンフンッ！」

「舐めるなッ！ その程度で……うお！」

ジャックの投げる刀剣を払い落そうとした時、メフィストの首に小太郎の長い尻尾が巻き付く。

さらに勢いよく投げ飛ばされ、そこにジャックが投げた剣がメフィストの両手両足を貫いて行動を制限。

そこへ小太郎は口から気弾を4発撃ち込む。

ジャックも追加攻撃のため、剣を大量に投げ込む。

「舐めるなと言っている！ この程度では俺は死なんッ！」

強引に手足を縫い付けられた剣から抜く。

そのせいで大量に出血するも、メフィストは再生を使っていなかったことにする。

さらに迫りくる気弾を殴り飛ばして相殺、小太郎の尻尾を掴んで引き寄せた。

「ぬおっ！」

「行くぜ、犬ッコロ！」

音速に達しそうな速度で小太郎を振り回すメフィスト。

その動作でジャックが投げた剣を全て叩き落とし、逆に小太郎をジャック目掛けて投げ飛ばした。

「ちいつ！ コジロー、無事か！？」

「だ、大丈夫や…」

「助け合いとはいいい話だ…この場所でやらなかったらなァ！」

「ぐふっ！」

「がっ！…」

ジャックと小次郎がもたついている間にメフィストは接近し殴り飛ばす。

小太郎はメフィストが本気になった時に気絶していたため、ただのパンチでも致命傷に繋がる威力だと理解していなかった。

「さて、前衛が消えちまったぞオ！？ くくくっ、詠唱中のぼーず！ 覚悟は出来たかアツ！ おっと…」

小太郎の気弾が飛んでくる。

メフィストは空中に飛び上がることでそれを回避した、と思いきや爆発の範囲が大きすぎて巻き込まれる。

小太郎はまだ意識を失わない、失う訳にはいかなかった。

ネギに言われた「43秒」の間、なんとしてもメフィストの足止めをしなくてはいけないからだ。

それはジャックも同じ。

故に、限界ギリギリでも自分を奮起させて魔王の前に立つ。

「まだまだッ！ 終わらねえゼッ！ メフィストオオオオオオオオオオオオオオッ！」

「くひひひひやひやひやひやひやひや！ 来いよオツ！英雄ッ！」

「俺もッ！ まだやでッ！」

獣化により出力が上がった小太郎とジャックの猛攻を捌ききるメフイスト。

それどころか逆に強烈な一撃をカウンターで決める辺り、まさに死角なしと言っべきだろう。

さらに始末が悪いのは、拳をヒットさせた時に無詠唱の魔法を行使する所だ。

結果、小太郎とジャックはシャレにならないくらいの手痛い一撃を貰うことになる。

「ぐう……こりや、ちと…マズいか？」

「どうしたどうしたア！？ ここでギブアップかアッ！？」

「がふっ！ あと、10秒……なんとしても耐える！ あとはどうなってもええ！」

度重なるダメージによってついに片膝をつくジャック。

その致命的なまでの隙を見逃さず、メフイストは確実に意識を狩る突きを放つ。

だがそれを小太郎が庇い、強烈な一撃を受ける。

そのあり得ないダメージによって意識を失いかけるも、最後の抵抗として両手でメフイストの腕を掴み、さらに噛み付いて、そこから気弾を10発撃ち込んだ。

まじかで爆発したせいで盛大に吹き飛ぶ小太郎とジャック。

ジャックはダウンし、小太郎はネギの近くに転がっていき、奇しくもネギが頼んだ足止めの時間ぴったしに重なった。

「時間ピッタリやな…あとは…任せたで…」
「ありがとう、コジロー君、ラカンさん」

小太郎の攻撃のせいで舞い上がった土煙も晴れてくる。

そこには……右腕が千切れて出血が止まらなくも、笑みを絶やさな
い魔王が佇んでいた。
メフィスト

「見事な一撃だったぜ、犬っころオ！ まさか俺の片腕を吹っ飛ばすとはなアッ！
くくくつ、これだから人生は止められん……で？ ぼーやの準備は出来たのか？」

喋りながら右腕を再生していくメフィストの前へと歩み寄るネギ。不敵な笑みを浮かべるメフィストへの恐怖感拭えていないネギだが、勝つために歩み寄る。

「くくくつ、負けを覚悟した顔じゃない、か……それが最後の切り札か？」

「さあ、どうでしょう？ 『雷天大壮2』とでも呼んでください」

両者、闘技場中央で睨みあう。

観客は息を吞んで見守り、静寂な空気が闘技場全体を覆う。

ネギとメフィスト、互いに考えるは眼の前の敵を打ち倒すことのみ。睨みあいの時間は数秒の間だけだった。

メフィストが突きを放つ。

それは当たれば人体といえど風穴があくほどの速度。

だがネギはそれを避けて懐に入り込み、逆にひじ打ちをお見舞いして吹き飛ばす。

（なるほどな…流石は2と銘打つだけのことはある）

「雷天大壮2」の付与効果は常時雷化。

さらに思考加速・身体機動加速の恩恵もついてメフィストを翻弄するネギ。

だがメフィストもタダでやられる気は毛頭ない。

気配察知、雷への干渉などを駆使してネギへ攻撃をよけて反撃を仕掛ける。

しかし常時雷化により、メフィストの攻撃がスローモーションで見えて、思考加速により後出しでも攻撃を避けられるのでネギは致命傷を喰らわなかった。

「ちいつ！ やつてくれる！」

「まだ、です！ 破アツ！」

さらにネギは先行放電への干渉を出来るだけさせないため近接戦闘を挑む。

幾十幾百の雷撃を浴びせてメフィストの行動を制限するとともに、自分の被弾も防いでいた。

だが…それでもなお最凶は倒れない。

それどころかネギの方が息が上がり始める。

「確かにその常時雷化は脅威…だがそれが切り札なら火力不足だ！俺を倒したいならその百倍は持つてこいッ！」

いかに身体能力を上げたといえど、たかが10歳の若造の拳は600年生きた化け物には届かない。

確かにその拳は直撃しているし、メフィストにもダメージはある。

だがその程度のダメージでは致命的とは言えなかった。
しかし、そのことはネギも承知の上。

「あれ？メフィストさん…僕、これが最後の切り札って言いましたっけ？」

「何？ぬ、これは！？」

何時の間に意識を取り戻したのか…

小太郎が起き上がり、メフィストの足場を影で固定する。

メフィストが動けなくなつたのを確認したネギは傍を離れて距離を取って遅延させてた魔法を解放した。

「双腕解放！ 右腕固定『千の雷』、左腕固定『雷の投擲』！
術式統合！ 雷神槍、『巨神ころし』ッ！」

「千の雷」と「雷の投擲」を合成させて、全長15mほどある巨大な槍を生成するネギ。

「これから繰り出すのは今の僕に出せる最強の技です。行きますよ、メフィストさん」

「いいぜ、真っ向勝負って訳か！ ハッハアッ！燃える展開じゃねえか、オイ！

我的呼び掛けに応えよ、幻獣神召喚！ 来い！『バハムート』！
固定、掌握！ 術式兵装、『龍神烈火』ッ！」

メフィストの身体が漆黒の外殻に覆われる。

さらには巨大な翼が生えてきて、そのさまはもはや人間と呼べる格好とかけ離れてしまう。

メフィストはこんなことをせずとも足場を崩して脱出して反撃にで

ることは出来た。

だが、自分と真っ向勝負をしよう、などという闘いを一対一でしかけられたのはかなり久しぶりなのである。

だからか…いつもなら何かあると思い直すところなのに真っ向勝負に乗ってしまい、秘中の技を解放してしまった。

（悪いが…この状態になるともう手加減ができない…死んでも怨むなよ）

翼を大きく広げ大気中の魔力をかき集める。

それどこではない、この闘技場に集まっている観客全てから少しずつ…本人でも気付かないような微量の魔力をかき集める。

だがそれだけでは済まなかった。

闘技場どこるかオスティア全域まで収拾範囲を広げ魔力量を拡大する。

そのかき集めた魔力を使い口の前に半径5mほどの光弾を生成。

その密度は、魔力を少しでも感じ取れる人間なら卒倒するほどの密度だった。

「ギガ——」

だがこの技はこれでは終わらない。

この星からも生命力を吸い上げ魔力に変換、さらに光弾が大きくなる。

色は紅、しかも鮮やかな色ではなく黒く濁った色。

それは…もはや人の身では耐えることも、ましてや受け止めることなど不可能。

「――フレアッ！」

赤黒い光弾が奔る、無謀な人間目掛けて。

だが、それを待っていたと言わんばかりにジャックは眼を覚ます。

「今だ！ 受け取れ、ばーず！ ラカンッ、インパクトオッ！」

ジャックは今の自分が出せる最大の気を総動員させて必殺の技を放つ。

ただしネギに向けて。

双方に攻撃されたネギはというと……してやったりと笑みを浮かべた。

「術式解凍！ 『敵陣吸収陣』ッ！」

ネギの足下には巨大な魔法陣が展開。

そしてメフィストの「ギガフレア」とジャックの「ラカンインパクト」を受け止める。

それを見届けたジャックは今度こそ意識を失った。

これぞネギが用意できた最後の切り札。

敵の力を我が物にして自分の力を強化する秘儀。

（ちっ、そっいやそんな骨董品があつたな……俺自身は敵の力で強化する必要がないから忘れていたぜ……）

ネギは見事掌握し、メフィストとジャック、両方の力を我が物にする。

今のネギの出力は一時的とはいえメフィストのスペックをジャック分上回った。

その力を利用しネギは最後の攻撃を開始する。

だがそんなことはメフィストとネギは気にする気も、時間もない。

「せい、やあつ！」

「まだだ！ まだ負ける訳にはいかない！ 俺は！ 負けないッ！」

徐々に押されることを誰よりも実感するのはメフィスト。

いかにバハムートの外殻をしようとして、ネギの力はメフィスト自身の力がそのまま付与されている。

確かに何割かは直撃しても衝撃を和らげているが…それも限界に近い。

その衝撃は内臓に到達し、器官を痛め続けている。

治癒魔法と壊れた部分は再生を駆使してしのぐも…もはや限界であった。

「右腕解放、魔法の射手・雷の千一矢！&ラカンパワー羅漢力&メフィストパワー魔王力！ 雷華崩拳ッ！」

「ぐはアッ！ ギ、ギガ——フレアッ！」

腕をクロスして防ごうとしても、その腕を砕かれて腹に直撃する。朦朧とした意識の中で、メフィストは抵抗を諦めず、再度「ギガフレア」を至近距離で撃つ。

だがネギはそれを今度こそ真正面から破る。

「右腕解放！ 『巨神ころし』ッ！」

巨大な雷槍で光弾を正面から真つ二つにするネギ。

直撃は避けたものの至近距離で爆発し、黒コゲになった部分が増えたが…「巨神ころし」はメフィストの胴体を貫通する。

「おおっ！ 解放、雷神槍！ 千雷招来ッ！！！」

その状態でネギは槍に宿っている「千の雷」を解放する。
雷はメフィストの内部を隅から隅まで焼ききる。
だがまだネギの攻撃は終わらなかった。

「解放！『雷の暴風』ッ！」

ゼロ距離からの「雷の暴風」。

それはダメージを負い、防御の壁が破れかけていたメフィストにとって有効な攻撃となる。

直撃を喰らったメフィストは「巨神ころし」が刺さったままきりもみ状態で飛んでいき、闘技場中央部分に突き刺さった。

「ハアッ…ハッ…ハッ…」

魔力が枯渇するかもと思えるほど魔力を使ったネギ。

もはや何も呪文を唱えることが出来ないほど魔力を使ったので、これで勝てなかったら詰む。

だが、立ち上がる様子が見えない。

その事に安堵して張りつめていた気を抜こうとした時、それは起こる。

急に闘技場全体が暗くなる。

慌てて上空を見ると、そこには分厚い真っ黒な雲が闘技場から見える空を覆っていた。

（なんだこれは！？ オスティアは雲の上に浮かぶ島…雲が出るなんてありえない！）

だがあり得ない事態は連鎖して起こる。

雲が光ったかと思うと、雷がメフィストへと降り注いだ。

その雷は、まるで心臓マッサージを施すように定期的に降り注ぐ。

事実、メフィストは先程の攻撃で心臓が止まっていた。

自分の力を利用され、内臓部分を焼き切る「千の雷」、さらにゼロ距離で「雷の暴風」を喰らったから当然の帰結だ。

だが、メフィストもある保険を残していた。

それは自分の心臓が止まった時、雷で心臓マッサージを施すと。

どういう理論でそれを実行したかはこの際置いておく。

重要なのは、魔王^{メフィスト}が再度復活したということだ。

「かふっ！ ペっ、ちい…口ん中が血の味しかしねえ…」

「あ、ああ……」

その劇的な復活は、さすがのネギも恐怖しか感じない。

自分の持てる力を超えた力で何とか倒したと思いきや…見事に目の前で復活したのである。

「まさか保険まで使われるとは思わなかった…誇っていいぜ、ネギ。お前は確かに俺に届いた。だが届いたただけだ、超えてはいない」

しゃべりながらもメフィストは身体の傷を再生していく。

さらに背後の空間から一つの巻物を取り出す。

「しかし…正直なところここまでやるとは思わなかった。そんなお前に敬意を表し…俺の秘中の中の秘って奴を披露してやる。喜べ、これを見る人間はお前が初めてだ」

さらにメフィストはこの試合で一切使わなかった自分のアーティファクト「永界の指環」を呼び出して結界を張る。その名を「位相結界」。

それは闘技場からメフィストとネギだけを元いた場所から異なる位相に移動させる結界。

その光景は、もといった場所の闘技場と同じだったが…違うのは観客がいないこと。

この場所なら見せてもいい、とメフィストはネギを連れてきたのである。

「『終焉の書』——起動」

巻物を広げつつ、巻物の中心を血のついた指でなぞっていく。

すると巻物は光り出し、そこからメフィストと瓜二つの人物が4人も出てきた。

状況についていけずにいるネギにメフィストが死刑宣告に等しい説明をする。

「これは俺の人造霊。お前も魔法世界に来る前や闇の魔法習得時に

見たことあるだろう？」

「た、確かに見たことはありますが…」

ネギは理解できなかった。

これから何が起るのかを。

なぜ、このタイミングでこれらを呼び出したのかを。

「さらに…俺は2回変身ができると教えたな？ 1回は今しているこの姿だが…実はもう一段上がある」

「そ……そんな……」

絶望、挫折、屈服、嫉妬……。

ありとあらゆる負の感情が心中で渦巻いているネギをしり目に、メフィストは最後の奥義を披露する。

「超魔…融合ッ！」

それはメフィストが持つ幻獣全てを闇の魔法で取り込んだ姿。

「イフリート」、「カーバンクル」、「オーデイン」、「イクシオン」、「シヴァ」、「リヴァイアサン」。

その姿形は、異形だとしか言い表せない。

ネギは眼の前に存在する恐怖の象徴に対して、ただただ震えるしか手段がない。

だが、悪夢はまだ覚めない。

メフィストの背後から4個の宝具が現れる。

その名を、乖離剣^{エア}、約束された勝利の剣^{エクスカリバー}、害なす獄炎の剣^{レーヴァテイン}、雷霆穿^{ヴァ}つ金剛の槌^{アジュラ}。

それをメフィストの分身がそれぞれ手に取る。

この時ネギは理解する。
人造霊なんてものをどうして作ったのかを。

「さて、お前は確かに強くなった。もう師は必要ないくらいにな。
故に、これは俺がお前にしてやれる最後の授業だ」

魔力と殺気が膨れ上がる。

それを目の前で見るネギは、すでに色々とあきらめ始めていた。
だがメフィストの言葉を聞き逃すまいとしっかり聞き耳を立てる。

「ジャックやナギ、エヴァ、そして俺。最強なんて呼ばれているレ
ベルの人種は総じてどこか慢心している。だが、それは自分の中で
『究極の一』が確立しているからだ。

お前もそのレベルに達しようとしている。だからお前もこれで満足
せず何にも負けない『究極の一』を見つける」

「ハ、ハイ！」

ネギの返事を受けてメフィストは魔力を高めていく。
言いたい事は言った、あとは実践するのみ。

「あとは、そうだな…俺の力なんか借りず、自力で俺を殺せるよう
な男になれば完璧だな」

「うっ！　　しよ、精進します…」

メフィストとネギが話す最中に分身体達が宝具の真名解放の準備が
整った。

人造霊といえど、本体と同じ魂を使っているので宝具の真名解放は
可能。

これに気付いたメフィストが最終奥義としてこの方法を考え出した
のは、当然の結果と言えるだろう。

「約束された――」
エクス

「いざ仰げ――」

「炎熱招来――」

「轟け、剛雷――」

「ではその目に焼き付けろ。その身体で感じる。最強の中の最凶の一撃を！」

宝具が轟く。

今か今かと得物を前に舌なめずりをするように震える。

そして、時は来た！

「――勝利の剣ッ！」
カリバー
エヌマ・エリシュ

「――天地乖離す開闢の星をッ！」
レーヴァテイン

「――害なす獄炎の剣ッ！」
ヴァジュラ

「――雷霆穿つ金剛の槌ッ！」

「これぞ我が究極の一！ 幻皇冥殺波ッ！」

様々な攻撃が混じり合い、まさに混沌と言える一撃。

ネギは薄れゆく意識の中で、とてもじゃないが言葉に表せない一撃を確かに受けて気を失った。

この後、元いた世界に戻ったメフィストとネギ。

この世界から離れていたのは一瞬だったためそんなに不審に思われず、最終的にメフィストのみが立っている状態だったためメフィストの優勝が確定した。

ネギ・小太郎・ジャックの3人は試合終了後、大急ぎで医務室にかつぎ込まれる。

メフィストは優勝賞金を貰うなり、報道に駆けつけた全ての人間の前から姿を消した。

ただし賞金をネギの枕元において。

試合終了後、メフィストを知る者は彼を捜し出そうと躍起になるが、誰も見つけることが出来なかった。

この物語はここで一旦終わる。

但し、終わりとは始まりを産み出す要因でもある。

故に、これから先の物語の可能性は無限に存在するのだ。

第陸拾参話 『不敗故に君臨するは幻獣使い』（後書き）

文字数キモいんですけど？

拳闘大会の文字数が2万つて、なんぞこれ？

どんだけ物語を助長させれば気が済むんだ、俺は？

さてさて、オーバーキルどころの話じゃない攻撃を喰らったネギ坊主。

みんなはこう思っているかな？

「なんで野菜坊主、生きてんの？」

さすがネギ嫌いのみなさんだぜw

でも殺しちゃうのはマズいからねw

あと復活しない魔王なんて魔王じゃない！

一度倒されても劇的に復活するのはお約束だぜえ！

さて、最後は真面目にめるか。

これでこの作品「闇の福音と幻獣使い〜二人の吸血鬼〜」は一旦終了となります。

これ以上は原作の進展状況的に言って無理です。

…ただでさえ迷走してるのに、こんな作者にオリ路線でやらせたら…
…収拾付かねえよw

そんな訳で終了です！

もうちょっと言い方を変えるなら、「第一部完！」って感じです。

原作がもう少し進み、この小説と致命的な矛盾点が存在しないときに続編を出す予定です。

今まで、ご愛読！ありがとうございました！

あとがき

ま…真っ白に…も、燃え尽き…た、ぜ…

ゴ、ゴール……………ばたり…

臆識は返事をしない。
ただの屍のようだ。

完

さて、ようやく終わりを迎えることができた「闇の福音と幻獣使い
〜2人の吸血鬼〜」ですが…思えば長かった…。

2月の後半あたりから執筆を開始してみて、3月13日に投稿開始。
最初は批判などビクビクしながら投稿していたのが懐かしいです。

そんな臆識ですが、この小説を書くと思った動機があります。
それはこのサイトを知った時、面白くて先が気になるのにいくつも

更新を止めている作品を見た時です。

こう思っただんですよ、「こんな素人でも完結できるんだから、素晴らしい作品を書いている作者様も頑張って更新してほしい！」と。

まあ若気の至りですね。

実際難しい物です、小説の執筆というものは。

やってみてとても実感しました。

ですが、こうして何とか完結まで持つてこれました！

これを見ている更新を止めている作者様！ 頑張って投稿した小説を再開してください！

つと若造がしゃしゃりました、申し訳ないです。

このへんで言いたかったことは終了にして…

自分の作品の感想などに帰りますかな。

まず、オリジナル宝具がとても苦勞しました。

ネットサーフィンで神話の勉強、そこから能力を考えたりなど…

Fateで名前だけですが「ブリューナク」と「グングニル」が出ていたのを指摘された時はしまったと思いましたね。

あとは…日常がとても難しい。

バトルとかどうせ「メフィストが勝つ」という結果があるので妄想しやすかったんですが…どうも日常を書こうと思つと手が動かなくて。

作者の人生経験が薄い証拠ですね。

体？

どんな身体をしているかというところ…そうだな、かなりキモくなる感マックスですねw

表現できそうにないので作中では誤魔化してしまいましたw

そういや最後にPV550万、ユニーク60万、総合評価7200
と言う数字を叩き出すことが出来ました。

投稿当初は「総合評価2000とかいけば御の字w」という目標だったのですが…なんぞこれ？

こんなど素人の作品で総合評価7000越え！？

ホント、読者様には頭が上がらないです。

いつもいつも、読んで下さりありがとうございます。

そついや嘘予告でやった、別世界冒険譚ですが…

圧倒的に「Fate」の世界が良い！という意見だったので、次の作品は「Fate」の世界に飛びます！

未だに妄想の域を出ませんが、まずは第四次に介入、そこで聖杯の正体を知るも大災害発生、第五次で聖杯を破壊する！

みたいな感じになるかと思っています。

あれ？ 士郎の役割消えね？
気にしたら負けです。
現実とは不条理なのです。

け、決して、セイバーとか凜とか桜とかイリヤとかライダーとかと
フラグ建てたいからじゃないからね！
か、勘違いしないでよねっ！

でもやるからにはハーレム生成！
それが臆識クオリティ！

いかん、こんなことをしては読者様から愛想を尽かされてしまうの
では？
でもこのほとばしるパッションの嵐は止まらない
イイイイイイイイイ

でも真面目な話、かなり先になると思います。
小説書くのに、ゲームやらアニメやらを犠牲にして書いていたもの
で…

ぶっちゃけ休みたいです！
楽しみにされてる読者様には申し訳ありませんが…休ませて下さい！
アニメ見させてください！ ゲームさせてください！

投稿した暁にはこの小説で公表するので。

さて、そろそろお別れと行きましょうか。
言いたいことは全部言えた、ハズ！

みなさんの力添えがなくては、途中で心が折れていたかもしれない。
ん。

みなさんの感想は、「いいぞ、もっとやれーw」や「これはない」
など様々な意見がありました。が、全て臆識の糧となりました。

感想が来るなり一喜一憂してどんな意見が来るかワクワクしました。

最後に、「この作品はどうだったか？」

これだけでいいので感想を貰えると嬉しいです。
欲を言えばもう少し詳しい感想が欲しいですが…強制するもんでもないですね。

ですが「ここはこうしたほうがいい」などといった意見などをもらえるならうれしいです。

これから新作を書くにあたって注意出来ますのでね。

今までこの作品を読んで下さりありがとうございます！

全ての読者様に無上の感謝を！

では！ 新作で会いましょう！

【2011年4月9日追加】

新作ムリポ。

Fate世界は複雑怪奇で手に負えんかった！。

そんな訳でFate物新作はおじゃんになったでござる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3009k/>

闇の福音と幻獣使い～2人の吸血鬼～

2011年4月10日11時30分発行